

転生先はリリカル！？ オリ主はロリコンなの

三河葵

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

20歳より不慮の事故で死亡した自称紳士のロリコンこと八高輪は、リリカルなのはの世界へと転生する。今日も彼は、少女たちの平和と笑顔の為に戦うという、そんなお話。     タイトルが全てです、はい。

## 目次

Q, 過去の自分が見て恥ずかしくない大人の象とは? A, 自信を 持って生きていることだと思う(時と場合による)	1
無印編	
嫌な予感というのは比較的起こりやすいので、まず考えない方が 最善	14
名前を呼ばれたら返事するだけじゃなく、リアクションまでしない と相手は気付いてくれない場合もある	21
幽霊の存在を信じるなら、サンタの存在も信じよう	29
初めが肝心、過程は重要、だから終わりも大事	36
Interlude 異邦者の名は運命	44
怪しいものを見つけたら、とにかく人に知らせるように	46
大事なものは、前に進む意志	55
好きなもので自分を語るべし。ただし適量の愛で。	66
体で名を表そう	76
First Impact	82
揃いし仮面たちの願う先は、徒花か成就か	92
大体の真面目な人が口にする「きりの良いところ」は、イコール満 足するところまでという意味だから、見てる誰かが歯止めにならない と終わらない件	101
異性の友達を連れてきた時の「なになに彼女?」とか「やだ彼氏か しら?」は最早お約束	112
会話と雑談は割と別物だと思うんですよ。中身のある方が会話で、 とっ散らかってるのが雑談かと。	122

日本国内で限定すれば、同じ顔の人間と会う確率は約6%なんだけ。

好きなことで将来を選ぶか、得意なことで将来を選ぶかで自分の事情も違ってくるものなの

ゲームはゆとりある心で楽しんでなんぼ。

わたしのおかあさん

始まりの予感

形なんて関係無い。やはり愛は盲目なんですよ

?? 「最早愛を超え、憎しみも超越し、宿命となったッ！」

殴りあつて深まるのは、基本的に友情か溝

僕らは心から亡くさせない為に、記し憶えていなくちゃいけない

My wish My love

pretittle of A'ttract story

A's編

筋トレマニアからしたら、筋トレはもうトレーニングという認識が薄くなつて、皿洗いのような習慣の一部として染まっている

303

ノックや玄関を開け方で我が子の友達の印象が左右される

同性でもセクハラは成立するぞ！ 気を付けろお！

狂気の攻撃

無事なら遊び通してないで連絡もしておくれ

物は言いようというけど、聞き手にも求められる部分はあったりするものなの

君の為に歌いたい

381

366

353

343

332

322

284

272

259

245

229

215

200

179

165

150

136

寝不足の時は元気有り余ってもまず寝てくださいお願いします

390

そりゃあガチな面倒事に友達を巻き込みたくないでしょうよ

404

男のロマンは剣と魔法とドラゴンとロボット

417

Sky Dancing

429

元気すぎるアイツがクラスにいないと空気が落ち着くけど、それはそれで物足りないなと思う自分がいたりする

449

星の飾りが揺れる夜空の下、冴えない王子とお姫様は踊るのです

464

クリスマス・イヴ

480

こんなに哀しいのは、本当に幸せだったから

498

BELIEVE IN NEXUS

516

鳥籠—in this cage

542

INNOCENCE

559

Sacred Force

581

世界のほんの片隅から

603

微笑みのプルマージュ

623

自由にして良いって言われたからって、なにやっても許されると思

うことなかれ

638

Q、過去の自分が見て恥ずかしくない大人の象とは？

A、自信を持って生きていることだと思う（時と場合による）

「おにいちゃん、おはよー」

ああ、心がびよんぴよんするんじゃないやあ、……危ない危ない。一度冷静になろう。

今日も今日でいつもの日課を絶賛満喫中。見よこの無垢な笑顔を。これを見るだけで大変平和に過ごせそうだ。元気な少女からこうして挨拶をされるといのは誰にとっても気分が良いものだろう？

うんうん、やはり小さい子には笑顔が一番似合う。一番の化粧は笑顔、これに尽きる。

「いやあ、いつもごめんね。まだ学生さんだっていうのに」

「いえいえいいですって。好きでやっていることなので」

なにをしているのかと言うと、まあアレだ。小学生の集団登校を見守るボランティアみたいなものだ。学生といっても、俺は既に20歳<sup>い</sup>を迎えた大学生なんだけどね。ま、日によっては中学のにも顔を出しているけど。なに、大した問題じゃない。

一応言わせてもらうと、大学に通ってからの一つの決め事として、毎日一時限目の講義は入れていない。なぜなら、俺の習慣を妨げられなくなかったからだ。

先のやり取りで言ったことだけど、このボランティアを俺は好きでやらせてもらっている。理由は単純———<sup>い</sup>幼女と少女が好きだからさ！ それを踏まえた上で敢えて言おう、俺は断じて変態じゃない！

「若いのに出来てるのねえ。ええつとお名前は……」

「八高輪<sup>やたかりん</sup>って名前よね？ うん、本当良く出来た子よねえ」

「まったく、息子にも見習わせたいもんだぜ」

「おじさん。それ前にも聞きましたって」

大学に通ってほぼ二年間顔を出していただけあっても、小学生の

子たちどころか保護者の人たちとも仲良くなるという事態になるが、まあ別に悪いことでも無いので結構楽しんでる。これがきつかけで、井戸端会議なるものに参加するようになったけど、これがまた楽しかったり為になる話があったり。仲良く接してくれるのは嬉しいんだけど、俺世間で言うところのロリコンだからなあ……もう一度言う、俺は変態じゃない。八高輪が男の名前でなんで悪いんだ！俺は男だよ！

さて、ここで強く言わせてもらいたい。ロリコンと聞いて碌な印象を持たない諸君、それは偏見……でもないが、あれはいわゆる一部の悪い人たちだ。マナーのなっていない大馬鹿だ。俺はあの程度の連中と一緒にしないでほしい。

俺は純粋な紳士だ。YESロリータNOタッチを掲げる純粹種のもりだ。幼女の泣き顔や困った顔なんて死ぬほど嫌いだし、三度の飯とロリをこよなく愛している。本物の紳士は気安く舐めない。一途に愛でるものだ。まあ、普通に接するという意味での触れ合いくらいはするけどもさ。それでも限度は弁えている。

「輪くんの笑顔って、ほんと優しいよね」

「なんだか慈悲深いよね」

「まるで親みたいね」

……あの、そのニュアンスは絶対違うと思うんですが……いや、好印象だからいいのかな？ まあともあれ、世間にとつての俺は、子どもが大好きな好青年として見られているようだ。まあみんながみんな、一様に笑顔を見せているから、それでいいやと納得している。だって笑顔見てるのって楽しいし。

「りんおにいちゃん、おはよー」

「おう、おはよ——つとストップ。青信号が光ってたら、止まらないとだぞ？」

「ええーでもー」

「いいかい？ 青信号が点滅している時は、『今渡っている人は急いで下さい』って意味だからね。マナーは大事。オッケー？」

「はあーい」

「じゃあたしが一番！」

「あ、ズルい！」

少し不満そうに頬を膨らませる三年生程の女生徒を引き止めている傍で、横から別の女生徒二人が走り抜ける。っておい、もうとつくに赤信号だぞ！

その女子二人と知り合いだったらしく、女生徒は「ちよ、ちよっと危ないよ」と二人に駆け出す。女生徒としては、二人を止めに行つたつもりだろうけど、それは逆効果だ。

当然、女生徒がスピードに乗った相手に追い付けるはずも無い。

——普通はそうなるはずだった。

「あっ——」

先を駆けていた一人が、つまずいた。歩行者信号が赤を示して約二秒ほど。つまずいた女生徒は膝を擦り剥かせたことで眼を滲ませ、立ち上がる動きすら鈍さを見せている。辺りを見渡すことなく、友人を助けにと一心に小さな歩幅で駆け寄る女生徒。車が来なければ俺もと左右に首を振るが、その右側から、蛇行気味に不安定に揺れるダンプカーが速度を緩める気配を見せず直進している。

——やばい。そう思ったと同時に、俺は動いていた。

「!? 八高さん！」

「坊主、危ねえぞ!!」

どうなるかを予想出来た瞬間、俺は駆けていた。危ないだって？

向こうにいる幼女二人の方がよっぽど危ないっつーの。しかし、こうも自然に身体が動くとは、俺ってやれば出来る人間だったみたいだな。自分を褒めてやりたいよ。

「りんおにいちゃん！」

「二人とも、危ないっ！」

そんなの、二人の顔見れば分かるだろ……冴えない俺。やっぱり褒めるのは無しだ。二人してダンプを見たまま足を竦ませている中、俺はロリ二人を突き飛ばす。ロリを突き飛ばす……うわっ、文字にしても言葉にしても行動にして響きが酷い。俺の紳士道はまだまだだ



な。

不覚にも、そこから先はちよつとした感動を覚えた。命の危険に晒された瞬間に動きがスローになるというアレを体感している。こうなつて初めて気付いたけど、よく考えれば普通のことだよな。聞こえる音まで反響したように、ゆっくりまどろんでいる。まあ走馬灯は見れなかつたけど。

その長い一瞬の中、俺は運転手の顔を見た。ハンドルを握つたその主が、微妙に寝ぼけ眼をしていたから、どうやら居眠り運転が原因のようだ。

——そして衝突。一瞬だけ、身体がバラバラになつたような痛みを感じながら、俺の身体は、まさに吹き飛んでいく。空を飛んでいるみたいだ、なんて呑気を考える余裕もなく、ただ流れるように視界が流れて行つた。

……音は無い。光も薄い。朝だったはずなのに、深夜の路地裏みたいな薄暗さが眼の前を覆っていた。全身が痛いのか痛くないのかさえ分からない。ただ一つ、眠い。

……！

……！

なにかが反響して聞こえる。多分人の声っぽいけど、よく聞き取れない。

けど、映つたものに対して、俺は酷い後悔を覚えた。

薄暗い視界の中、少女は俺を見ながら泣いていた。そう、俺が泣かせた。姿はぼぼ見えないけど、音はおぼろげに聞こえる。これは泣いている声だ。

よく見ると、さつき助けた女子生徒だけじゃない。周りに人が集まっている。影のような輪郭程度にしか見えないから、誰が誰かはまったく知らないけど、体格的にきつと

保護者の人かもしれない。視界が変に振れているから、多分誰かに揺すられているのかも。……いかん、感覚も遠くなってきた。

…ああ、抱きつかれた。本来なら喜ぶべき瞬間かもしれないが、なんの感覚も無いし、俺自身喜んでいいのか嘆いていいのかよく分かっていない。

ロリの命は守られた。それは凄く嬉しい。が、その結果俺は悲しませている。どう反応すればいいのか分からない。紳士としてはどう受け取るのが正解だったんだろうか……？

——なんでうちの息子は、こんな変態に……——

どうしたことか、この場にはいないはずの人間の声がはつきり聞こえた。最後に聞いた言葉がこれってなんだよ……まるで今の俺が間違ってるみたいと言わないでくれよ……俺だって、あの時より良くなるうってと頑張ってる……！

………いいやもう。とりあえず、寝よう——

「——ん」

い、いつでええ……長らく眠っていたみたいに、背中が痛い。一体どれくらい寝て——

違う。疑問はそこじゃない。嫌にはつきり意識が冴えているせいで、異常な違和感の正体にすぐ気が付いた。

「……………なんだ、ここは………なんで俺生きてるんだ……？」

記憶が確かなら俺は、ロリを庇ってダンプに撥ねられたはず……認めたくないが、あの流れだと普通俺は死んでいるはずだよな？

そもそも、身体が妙な感じだった。ただ一面は塗りつぶされたような——いや、これから色を付けるような真っ白な空間。自分が地面に立っているのか天井に立っているのかもよく分からないような、変な浮遊感に苛まれている。とりあえず散策しようかと考えたもの、歩くのか宇宙船の移動のような浮遊による移動なのかさえ、よく分からない。これは夢か……？

「八高輪。年齢は20。基本的に社交的で人当たりも良いが、

ロリータコンプレックス  
少女愛好家と性癖に少々難あり、じやな」

なにも無いと思われた空間から、何処か幼さが残るしやがれた女声が響く。

なぜかは知らない。けど、その落ち着いた語調と語尾に言葉に出来ない昂揚感を覚えた。まさか……………まさか……………!

「眼が覚めたようじやな」

「のじゃろりきたこれええええええええええくあwせdrftgyふじこ」

「落ち着け八高輪」

ひと目で、尋常でないロリだと見抜いたよ。

まず見たままを話そう。なにもない真っ白な空間の中、その少女は体格不相応な巨大なデスクにかけ、山積みされたよく分からない書類の山に囲まれながら俺を見ていた。妙な存在感しているなあ…………

推定するに、年齢は10歳前後。体格に合った着物を羽織り、黒髪ロング、くりつとした栗色の瞳が俺を捉えている。加えて、どこか浮世離れた口調の少女、もといのじゃろり。普通に生きなくてもものじゃろりなんていう存在は眼にすることは極めて困難だが、まさか実在するとは……………なんという僥倖ッ！ 生き恥を晒した甲斐があつたというものだ……………!

「ああ、生きてて良かった……………」

「いや、貴台は死んでおるぞ」

「ゑ!?!」

「だから、死んでいるのじや。もしや記憶は戻っておらんか?」

「ふうむ」っと腕を組んで唸り声を上げている。かわいい……………このまま君だけを奪い去りたry落ち着くんだ俺! いろんな人間の夢の結晶が眼の前にいるが、ここで煩惱に身を委ねれば俺は紳士失格だぞ!

と、一通り脳内で律した後で、少女の言葉を改めて呑みこんでみる。

「……………あの、もしかしてだけど、俺は本当に死んでるの? ダンプに撥ねられたのって、実は夢じゃなくて」

「紛れも無しに現実じやな」

「夢だけど——夢じゃなかった！」

「意味が分からんのじゃが」

「ごめん。内心パニックって……」

え、じゃあなに？　ここはなに？　俺は誰？　……聞きたいことは色々あるかもしれないが、個人的に最初に聞いておきたいことがある。「ちよつと待って。今更かもだけど君はなんだい？　かなり風変わりな恰好をしているけど」

「ああこれは失念した。小生は世俗で呼ばれるところの——神と呼ばれる存在じゃ」

「………神？」

まあね、言いたことは分かるよ。確かに、ロリにしてもこれだけ要素が詰め込まれば、我らの同士からもそう呼ばれるだろうて。のじゃロリだぜのじゃロリ。しかも幼い和服美人。……言っちゃまづいかもしれんが、どこか不遜な地獄少女と言えば伝わるかも。まあ、恨みを晴らさせるようなことはさせないだろうな。俺死んでるほいし。生きてるけど。……つまりどういうことだ？

なんにしてもだ。神様を名乗るのは普通の状況じゃないかもしれない。俺の理解出来ないものを信じているか、はたまた厨二病か。ま、可愛いから気にならないけど。どうする？　試しに撫で撫でする？

「……なにか勘違いしているようじゃが、世俗一般に呼ばれる意味での神じゃぞ？」

「……ええつと、それって、アレ……？　ざっくり言えば、世界を創造したあの？」

「概ねそうじゃな。とはいえ、立ち会う人間次第じゃと、映る姿や声はおろか、性格まるで違うのじゃがな。人の数だけ神がいると解釈して貰いたいものじゃ」

「な、なるほど……」

……いかん。なんか流れで納得しそうになったが、肝心の証拠が無い。神と崇めたくなるほどのロリ具合だが、本物の神となるとまた話は違ってくる。

「つと待った待った。いきなり神って言われても、なんの証拠も無いんだけど……」

「また難儀なことを言い出すものじゃな。神の仕事は見ることじゃ。手品も奇術も奇跡も使えるのじゃが、面倒じゃから断る」

「どこぞの漫画家みたいなこと言わんでくれよお！ 流石に鵜呑みにしなしてやるのは辛いつて！」

「ふうむ、仕方ない。小生が神という証拠は見せられぬが、貴台が死んだ証拠を見せよう」

「…………マジか」

神と名乗る少女は、自分の頭上を指さす。

なにもない空間から、ぶうんと立体的に映されたモニター映像には驚いたが、俺が驚いたのはその映像の中身だ。そこにはあらゆる方向に身体を歪ませた俺の姿がいた。本当に一瞬だけ、マネキンで遊んでいたのかと思ってしまったほど、向こうの俺の身体は嫌にリアルな折れ方ねじをしていた。そして、その周囲を囲んだ風景は間違いない、俺の見慣れたあの小学校の通学路だ

周囲には人が集まり、ちやうど今救急車も到着している。映像の中ではやばい方角を向いていた自分の右肘を見てみるが、なにもない。傷も痛みも、なにもない。想像した以上に自分の姿が酷いことになっていて、直視していたらマジで吐きかね無かったから、出来るだけ自分以外のものを見るようにモニター映像を眺めた。

「なにを暗い顔をしておる？ 貴台が救った少女は二人とも無傷じゃろう？」

「確かにそうだけどさ……でも、俺が死んだことで結局二人は泣いてるだろ？ いや、二人だけじゃない。その周りの人だって何人か泣いている。最悪だよ、俺……」

「生真面目なのじゃな」

「紳士だからな。しかし、どうやら俺は本当に死んでいて、君も神様らしい」

「信じてくれてなによりじゃ。さて、心気の湿る話は仕舞おう。話の本題なのじゃが——貴台は、自分の正しさを証明しようと思わぬか

？」

「はい？」

「いや、問い方がずれたようじゃ。転生をする気はあるか？」

「ごめん、意味分らない。人が結構落ち込んでる時に、なにを言  
い出すのかねえこの小さい神様は。」

「貴台が自身を未熟と呼ぶなら、その機会を与えるつもりじゃが、どう  
じゃ？」

「転生って……そこは成仏とかじゃないの？」

「神は気紛れなのじゃ。それに——貴台のような奇異な人間が生き  
る様をもう暫し見たいのでな」

「これはクーデレか!? いや、のじゃデレだ!! なんだって構うもの  
か! なんにしても、現実と言われるとたまらん一言に変わらんから  
な!

「し、仕方ないなあ。そこまで言うなら、転生しちやおつかなく？」

「……そこはかたなく癪な言い回しじゃが、是とするなら転生をしよ  
う。それなら、ちょうど良い」

「なにか思い出したように、神様——もとい、のじゃロリ様はデス  
クの戸を引いて、乱雑に探っている。それを三度程続けているが、一  
体なにを探しているんだ。」

「しばらくすると、うむつと自慢げに唸ってから、蒼い指輪を取り出  
す。」

「それは？」

「小生からの餞別じゃ。仕事の片手間で作って幾百年は経つが、ま  
だ機能するはずじゃ」

「なんか無視しづらい単語がいくつか聞こえたけど……機能って？」

「これからの転生先で必要なものじゃ。とはいえ、貴台の知る世界と  
は違うやもしれぬがの。なに、時が来ればそれが導くじゃろう」

「なんか怖いんだけど……普通の世界だよね？」

「そうさのう。じゃが一つ言えるなら」

「のじゃロリ様は、まるで小突くように俺の額に人差し指をぐつと押  
し付ける。や、やだかわいい……ずつとこうされていたい。」

と、俺が自覚出来るレベルで頬を緩ませていると——神様は、ひどく悪戯な笑みを向けた。あまり言いたくないんだが、

「——貴台向きの世界じゃと思うぞ？」

かなり、怖かった。

ぴかっと、一瞬だけ眼の前が爆発したみたいに閃光したと思ったら、俺の視界はまったくの無になった。

転生先は、海鳴市うみなりしという場所。海も近くて都会的なすんごい良い街。うん、俺の知らない世界だったよ。地理に詳しい訳じゃないが、少なくとも生前とはまったく違う場所で俺は産声を上げた。それは別にいいや。大した問題じゃない。知らないってだけで、生前の世界とほとんど変わってないし。

で、転生して12年。最近、私立聖祥大附属中学校に入学したばかりだ。生前から通算して32年という年月が経っちゃった訳だが、そんな時間を重ねてある境地に辿り着いた。下らないだつて？ 言わせねえよ！ その境地とは——守備範囲が広がったことだ。

生前の俺は、10歳から14歳の間がどストライクだったのだが、改めて世の中を渡っていると、考えるが違ってくるというかね。今では、9歳から10代までの年齢をアリだと思えるようになった。19歳まではギリセーフ。それはロリコンじゃないって？ 言わせねえよ！ ロリコンの定義なんてのは人それぞれなんだ。600歳だろうと、顔がロリければロリなんだ。つまり俺は、顔でも判断するし、年齢でも判断する類の境地にいる。なんと言われようと、これが今の俺の紳士道ロリなんだ。

いやあでもさ、真面目な話、ちよつと聞いてほしい。なんだかさ、年齢が10代という言葉になにか得体の知れない背徳感があると思う

んDA！ 最低に身も蓋も無い言い方をすると、10代ってエロいよね、と言う話。この変態野郎だつて？ 言わせ……うん、そうだよな。でもですよお巡りさん、俺は健全な紳士ですよ？

「にしても、やっぱり俺の顔だな」

今では慣れたけど、洗面所の鏡に映っている俺の顔は、どう見ても生前の俺の当時と同じ顔をしている。俺を知る人が見たらホラー極まりないんだが。一時期は顔を洗う度にビクツとしたりなぜか振り返ってしまったたりする等、理解が追いつかない期間もあったが、今はなんとも思わなくなっていた。それこそ、転生前と同じように過ごせている。その慣れた感覚で見えるようになって気付いたことだが、客観的に見ると俺意外といい顔してね？ 言われてみればそうだが、転生前と後の友達からも「お前は黙ってさえいればなあ…」なんてことを言われたことあるが……いやまさかな。きつと行動が残念だったんだろう。自意識過剰過ぎわろすwww 実際格好良いか言われたこと……あれ、あつたっけ？ この話は止めよう。

ふと、右手の薬指に嵌る蒼い指輪を眺める。……これ結局なに？ 親から聞くに、生まれた時から着けていたものらしい(怖えよ)。どうしたことか俺もそれを手放そうとしないと言われたけど、結局今でもこれの正体は分かっていない。のじゃろり様の言葉を信じるなら、まだ時は来ていないからと受け取れるがどうやら……なにかしら意味がありそうだから、基本肌身離さず身に付けている。

「……12歳から自立って、どういうことだよ。俺は武家かっての」  
とんでもないことにうちの親、俺をそのまま家から外に住まわせようと言うのだ。しっかりしすぎているからという理由らしいが、理由雑すぎやしないか？ 中学にあがったばかりの12歳だぞ？ 年齢が低いほど世間での制約が多いのでもあるんだぞ。その時の親とのやり取りがこうだ。

「そうだ輪。お前、来週から自立な」

「は!?! 急になに言ってるの!?!」

「いやー輪ってさ、変なところでしっかりしてるから育て甲斐が無



くつてき。まあアレだ、いっちょ世間に揉まれて来い」

「年端のいかない中学生に言う言葉じゃないってそれ！」

「大丈夫大丈夫、桃子さんもそんな無茶言う人じゃないから」

「既に母さんが無茶言ってるからね!? 流石に放任すぎやしないかい!?!」

「あん、なんか言ったか？」

「男の一生は死ぬまで戦いだ」

「よく言った我が息子よ。よしよし」

という元不良の母さんからの酷い脅迫暖かな推薦により、知り合いの家への泊り込みが決定された。詳しいことを言えば、学生時代に世話になったという知り合いの人が喫茶店をしているということ、向こうでの世話になりながらお仕事をしろ、という内容らしい。向こうも了解済みとのこと。喜んでいいのか嘆いていいのか……俺普通に中学生したかったのに。幸い、学費は払っておくと知っているけど。なんかんだ言つて子ども扱いされてる俺涙目。いや、そういうところが親か、と納得も出来るな。正直突然のことで不満はあったけど、今では社会勉強の一環として受け入れている節が大きいから、楽しみの方が強かったりする。

「よし、準備もオツケー。今日の放課後からだな」

学校終わってからの現地直行。地図でも場所を確認している。中学から喫茶店とも世話になる家とも近い。これは有り難い。

……ふと、先に向こうに運んだという荷物を思い出して、寂しくなった。勉強道具を除けば、着替えと携帯ゲーム機（好きなソフトを三本）だけ。ほ、ほら、本当は漫画とか持っていきたかったけど、向こうに住む以上迷惑に……もう鞆に入らないから諦めたんだよ、ちつくしよう……ていうか、さつきから鏡の前で独り言なんだが……痛いなおい。

まあいいさ。あれこれ考えても仕方ない。これから向こうのお世話になるんだから、こつちのアホなことに付き合わせるのもおかしい。なるだけ普通でいよつと。

「——喫茶店、翠屋みどりやだったな」

行き先の名前を確認がてらに口に出してから、重い鞆を二つ抱える。ラビットハウスじゃないのが残念でならない。まあ冗談を置いて、なんか名前は聞いたことあるんだよな。学校で聞いた話だと、ケーキの美味しい喫茶店とは聞いているが、俺行ったこと無いんだよなあ。強いて言うなら店の看板は見た覚えがあるか無いかの程度くらいだ。ひよつとしたら無い気がするが。

ちなみに、世話になる家の名前は高町家たかまちだとか。家どころか喫茶店にすら行ったことないから、なんの面識も無いんだけど……母さんから聞いた話だと可愛い娘さんがいるとか。幼女だしたら俺大丈夫かな？ 紳士と言えどあくまで一つ屋根の下になつてしまおうし……大丈夫だ、自分を信じる。俺はそんな低俗な奴じゃない。歯車には歯車の意地がある。

さて、のじやロリ様は俺向きな世界だと言っていたが、一体なにがあるんだか。あの表情は確実になにかあるように思えるんだが……

いや、無暗にロリを疑うのは良くない。根拠無く疑うのは紳士のすることじゃない。危ない危ない、道を踏み外すところだった。セフセフ。いやでもマジで根拠無いのは不安なんだが……いやしかし考えようによつてはマシな世界かもしれない。大袈裟に言えば、喰種グールに出くわすような事件も起こっていないし、昭和58年の辺鄙な村でもないから、ここは比較的平和な世界と考えて間違いないはず。

よし、心の準備も程よく出来たし学校に行きますかね。今日で最後の、我が家からの通学だ。いつもと違う気持ちで、玄関の外へと行く。

## 無印編

嫌な予感はこの比較的起こりやすいので、まず考えない方が最善

突然だが一つあるあるな話をしたい。例えばだが、20歳で死んで転生したとして一度勉強した内容がうる覚えになっているんだ。国語や英語とかは一度要領を思い出せば誤魔化しは利かせることは出来る。が、基本的に公式が命綱になる理数系がグダグダだった。なんて話は無いだろうか？ 英語の文法とかはともかく、化学式と三角形の面積の求め方とか、今でもうる覚えだし……でも他の分野では同級生と比較して随分出来ていると言われたけど、シヨックの方が大きすぎて、正直それどころじゃない。

授業自体はアレだったけど、一つだけ、なんだかんだで楽しいのは「八高くん、頭いいんだね」

「今度教えてくれる？」

フイーヒヒヒヒヒ！ ロリに囲まれてらあ！ 過ちにを気に病まず、次の糧にした特権がこれとは、俺も本当に運が良い！ なんだかんだ理数系に眼を瞑れば、俺は学年内でトップだからな。……いつかボロ出さないか心配だけど。

なにかともてはやされているが、一つ落ち着いてほしい。確かに俺の見てくれば12歳の中学生だ。だがしかし、その実態は通算した年齢が32歳のおっさん大人だ。無暗矢鱈むやみやたらに手を出すなんて紳士のするこじやない。ちやほやされて頬が緩むのは仕方ないけどさ。

だがこれだけは言わせてほしい。

「我が世の春が来たああああああああああああああああああああああああ!!」

俺は今、とつても幸せだよ。どれくらいかと言われると、もう例え

るのも難しいが、強いて言うなら、行列の出来る店の一番前を並べたような幸福感だ。スガスガしい気分だッ！ 歌でもひとつ歌いたいたいようなイイ気分だ！ しかし申し訳無いが、俺は一人のロリに縛られたくないんだ。この世全てのロリを愛でるゆえなんだ。許してくれ。俺はみんなの紳士でありたいんだ。

で、今放課後。入学祝いに勝って貰った自転車で高町家へ向かう。最初はバス代を浮かせるためにと自転車に乗っていたけど、今ではめっちゃ楽しい。若いつて疲れるけど楽しいな！ 陸上部なのに走るへ自転車というのはいかなものだろうか。

一応転生前は車を運転していたけど、違った楽しみがあるなあ。バイクは怖くて乗ってないけど、直接を風を横切っていくのは気持ちがいいな。これで空でも飛んだら楽しいかもしれない。ドラゴンボールはよ。

本当は両耳にイヤホンを詰めて音楽プレイヤーを再生させたかったけど、車の音を感知出来ないのは危ない。没頭したかったけど、片方だけの開放で我慢して疾走を続ける。曲に合わせて軽く歌を口ずさむが、不思議とそんなに恥ずかしくは無かった。どうせ誰も見ていないし。ぶっちゃけ、そんなテンションの日は誰にでもあると信じた

——助けて——

「……………っ!?!」

思わず、自転車を止めてしまった。

いやいや待て。どこから聞こえた？ 全然分からないんだが。感覚としては耳じゃなくて頭に入って来た感じなんだが……それとも、この曲にはそういう幽霊の声が入っていたとか……？ 冗談止してくれよ。はつきり聞こえ過ぎて心霊現象ですら無いとも思えるが、とりあえず少し巻き戻して——

——助けて——

みる必要は無かった。その声の正体は、やっぱり曲じゃなかった。巻き戻している最中にその声が聞こえたんだ。疑う余地が消された。もう一つ怖ろしいことに、頭に入ったはずのその声は、耳に滑り込ん

だように、方向まで不思議と分かってしまった。

なんだなんだなんだ?!? 俺なにに助けを求められてるんだ?!? 訳が分からんぞ?!? ひよつとして俺、なにかの力に目覚めたのか?!? 実は俺ニュータイプだったとかそんなオチ?!? 戦いとは無縁なこの世界で新人類が生まれても行き場に困るんだけどそれは……

なんにしてもこのシヨタボイス。女性で非ずとも、助けを求められる以上人としては無視など出来ないな。もう一度両足をペダルに乗せて、さつきよりもずっと回転を速める。

「ああつつかれた……多分この辺りのはずだが……」

途中から無我夢中で漕いでいたけど、こんな広い公園の中にいるのか? 半信半疑なんだが……ていうか、学校の帰り道からの距離を考えると、余裕で有り得ないぞ。耳じゃなくて頭に入ってくる声とい、絶対普通の状況じゃない。GN粒子を撒いた誰かがいるのか?

自転車を漕ぎながら公園内を駆けるが、辿り着くとそこは、どうやらあぜ道のような。くそう、これ以上は自転車が入れない。体操着も無いし、予備の服が無いんじや制服のまま行くか。どうせ替えは高町家に送っているし、この制服はクリーニングに出すことにしよう。くしゃつとして洗ってアイロンをかけるくらいなら、お店でクリーニング一回で済ます方がこっちの手間も省ける。手間よりお金(自腹)がかかることに眼を瞑れば中々……俺も家事を覚えよう……

「……いやいやいや。まさかあれは違うって……」

ええつと、あれはなんて生き物だっけ? そうだ、イタチだ。こう、細長い胴をした茶色い生き物が傷だらけで横たわっている。で、例えばペットのする首輪のように丸く赤い宝石を首から下げている。いやいや、流石に無いって。イタチに『人の言葉』なんてありませんよ……ファンタジーやメルヘンじゃあないんですから。うん、無い無い。俺はきつと、今日から他所の家で過ごすことが決まったから、緊張で変な声が聞こえたんだ。うん、恐らくきつとそうに違いな

ず。

と納得しようとしたもの——なぜかは分からない。分からないけど、右手薬指に嵌る蒼い指輪が熱を持った気がした。不意に眼を向けると、

『魔カ反応を感知し反応した』  
Sense a magical power reaction』  
「な、なななんだ!?!」

キイイイエエアアアアシャベツタアアアアアアアアアアアア！ 指輪が、喋った！ 待て、普通にびっくりするだろ!?! 他にどうリアクション取れって言うんだよ!?!

……ちよつと待て。今この指輪、魔力って言ったよな……一体どういうことだ？

『システムの起動を確認  
Confirm the start of the system  
・始めに、マスター登録のために  
First, please register  
名前と声を登録して  
the name and voice to the master  
物凄く妙な気分だ。完全な英語だからなにを言っているのか分からない。と思いきや、なぜかその意味が伝わっている。名前と声の登録……？ 一体どうしたいんだ……？ さっきの魔力の意味するところすら分からないが、とりあえず従っておこう。』

「——八高、輪。」

『認証しました、このよ、  
All right, from this, ,  
デバイス内の構成を  
you can attempt of the system  
の再構成を  
a reconfguration of the system  
行  
in  
t  
「おいおいおいおい！ なんだこれ!?! どうすんだこれ!?!」  
『——デバイスの再構成終了。小生が名は、アヴァロン・ブルー』  
「その声と口調は——のじやロリ様か!?!」  
『なんじやその呼称は？ 小生は貴台の知る神とは違うぞ?』  
「嘘だッ!!!」

なにをどう聞いてものじやロリ様の声と語調だろ！ 思わず昭和58年式のツツコミしちやっただじえねえか。違いは精々機械音で声

が籠ってる程度で、それ以外はそのまま。嘘を言うならもう少し上手く――

ガサツ――よく分からない事態が重なった影響で頭が回らない中、茂みが一度揺れる。完全に不意打ちだったせいで、肩を震わせながら音の方向に即座を振り返ると、

「――え？」

お互い、呆然と視線をぶつけていた。彼女にどんな意図があるかは分からないけど、俺としては、場に似つかわしくない少女がそこにいたのだから、思わず言葉を失くしていた。

相手は小さな女の子。つまり幼女だ。こんな人のいない場所であつたことも驚きだが、それ以上に眼を見張つたのは、その外見の全でだった。みよんと両側にまとめた栗色の髪、背にした学生鞆、低身長（今の俺もそうただけどきあ…）、聖祥大附属小学の制服。待て待て、その姿はどう見ても

「な、のは……？？」

「――え？」

「あ、いやなんでもない！ とりあえず、動物病院に連れて行きたいんだが……このイタチが気になるなら、一緒に来る？」

「は、はい」

純粹な意味で危なかった。こうして動く姿を見るのは初めて見るが、彼女は紛れもなく本物の【なのは】だった。

ということはだぞ。まさかここは、あの魔法少女リリカルなのはの世界であり、俺はその世界に転生してしまったということか……？

いやいやそんな馬鹿な…

…ファンタジーやメルヘンじゃあ、ってこのネタさつきやったな。しかし、そんなまさかと否定しようと考えを巡らせるが、これまでこの世界を見てきた限り、俺の知る世界でないことは薄々感じていた。でもそれほど突飛な世界でも無かったから、どこか異世界への転生だろうと安心して考えていたけど、まさか二次元の世界とは……流石は神様、なんでもありすぎだろ。

「ところでさ、この辺りに動物病院ってある？」

「う、うーん……」

「なのはー、急に走ってどうし——」

「……動物？　もしかして、怪我をしているの？」

「うん。アリサちゃん、すずかちゃん、この近くに動物病院ってある？」

「確かあったような……すずかは分かる？」

「うーん……とりあえず、家に電話してみる」

二人の友達はなのはを探していたのか、大きく身体で呼吸を整えている。息切れで紅潮したロリ二人……なんということでしょう。正に匠の成せる技です(意味不明)。やばいだろこの世界、どう考えても俺を殺しに来てやがる……！

思い返すと、のじやロリ様も「俺向きの世界」と言っていたからな。そういう意味でなら目論見通りだぞ。ここでもならいつでも死ぬる——いや待て馬鹿言うんじゃない。俺が死んだら、誰がロリを守るんだ？

「？　おにいさんは？」

——おにいさん、だと……？

はああうううう、かああいいいいいよおお！　すずかちゃんって呼ばれた子お持ちかえryモウヤメルンダ！　某サイヤ人の王子が王子であることを誇りにするように、俺だって紳士なんだ。破壊力が高いが、耐えなければいけない。なぜなら、俺が紳士だからだ。お持ち帰りしようなら、俺がお巡りさんにお持ち帰りされるわ。なんなら自信を持って言えるぞ。お巡りさん、俺は変態じゃありません。紳士です、と

って、そんなことを考えている暇じゃないな。受けた質問にはしっかり答えんとな。

「……見ての通り、太陽の神の信徒だよ」

「は、はあ……」

「ごめん嘘。俺も通りがかったただけの中学生だよ」

最初のはネタ選びが悪かったようだ。全然伝わってない上に、控え目に見ても不審者を見る眼を向けられたから、無難なものに切り替え



た。ダクソってマイナーらしいし…

そうそう、どうもここが普通の世界と違うと思ったのは、文化とかは構造は変わらないけど、俺が知ってるアニメとかゲームとか映画とかの知識が違う。ていうか放送されているものが微妙に名前が違っていたりとしていた。基本的に平和な世界だったから気にしなくなっただけど、そう言えばそういう謎ルールがあったな。だから、タイミング間違えばこうなるんだよな。気が抜けていたから注意しないとだな。

しかし、ここであれこれと逡巡させてる場合じゃないはずだ。「まあそれより」と話も戻す。

「とりあえず、病院探してみようぜ」

ここだと満足に手当も出来やしない。三人の反応を見るに、イタチを治療しに来た訳も無さそうだし、まずは通りに出て病院を探そう。

——ロリたちと動物病院に向かう道中、両手に花な状態であることに、なんだか浮かれなかった。その原因は、このイタチにある。

これは紳士としての直感だが——このイタチ、なにかあると見た。なにせ、なのはが脈絡も無くここに来ていたんだ。助けを求めたこのイタチの声を辿った、と考えればなにかしら意味があるかもしれない。

そう思うと、この先なにかあるのか不安に思えてしまっている自分がいる。なるだけ穩便に行くといいなあと、橙のかかった空を見ながら溜め息を吐いた。

名前を呼ばれたら返事するだけじゃなく、リアクションまでしないと相手は気付いてくれない場合もある

俺が「魔法少女リリカルなのは」という作品について知っている情報というのは少ない。どうしてって、ロリアニメということは聞いていたから、物事の終了の境目に自分への褒美の為にと敢えて見ることは無かった。楽しみのみあまり、延期に延期を重ねて、最終的には大学を卒業したら見るという口実を守れない内に死んだ。

ていうかだぞ。なんのヒントもなくリリカルなのはに転生って……誰が予想出来るかっての！ 嬉しいけどもさあ！

……話を戻そう。俺の知っている情報というのは概ね四つに分かれるが、箇条書きにするとこんな感じだ。

①バトルものの魔法少女、らしい

②主人公は小学生の女の子。タイトルで分かる通り、名前はなのは(DVDのジャケット見た時の昂揚感と言ったら……)

③フェイト・テスタロッサが出てくる。好奇心に負けてうっかり画像検索までしたせいで、顔も覚えちゃったよ。結論、俺の妹か嫁にしたい。

で、最後。これが一番解せない

「——だからねおとーさん。うちでフェレット預かってもいい？」

「しばらく預かるくらいでも良いんです。俺たち、ちゃんと世話をするので」

でだ。俺が一番動揺しているのは、住むことになった家の末っ子なのはだということだ。まさか『高町家』と『なのは』が繋がってるなんてそれこそ想像も出来なかったよ。もう、なんだ……世の中不思議なことばかりだ。マジで世にも奇妙な物語。

そうそう、今はフェレットを動物病院に連れて行ってからの自宅。いや、自宅は違うな。居候先の高町家にいるわけなんだが、夕方助け

たフェレット（イタチじゃないのか…）についての話をするなのは。家に向かう途中、二人で話し合つての結論なのである程度の口裏もばつちりだ。ちなみに、「飼う」じゃなくて「預かる」という嫌らしい単語で攻めるのを思いついたのは俺。

——そうだ言い忘れるところだった。俺が知っているリリカルなのは最後の情報。よく分からないが、なのは近い将来悪魔とか冥王と呼ばれる存在になる、らしい。ネタなのかマジなのか知らないが、そうなるらしい。

だが見てほしい。こんな天使ロリがなにをどうしたら悪魔になるんだ……？ ネタにしても悪質過ぎる。最初に言ったやつ絶対許さん。月が変わつてお仕置きだ！ 男が言うにはこのネタ痛いな。金輪際言わんどこ。

「うーん……恭也と美由希はどう？」

なのはお母さんをしている桃子さんは、なのはの兄である恭也きょうやさんと姉の美由希みゆきさんに促す。子ども三人生んでおいてただけ綺麗なんだよ。とはいえ、少なからずこの天使を生んだのがこの女神ならなるほどと納得も出来る。なんか不思議だけど、桃子さんの面影一番残つてるのってなのはなんだよな。ていうか上二人が似て無さすぎ。

「……異論は無いよ」

「わたしも」

「だそうだよ」

「良かったわね、なのは」

「……うん！」

邪な感情が湧き始めた俺の隣で、天使は歓喜を示すように柔和に綻んでいる。いやあ、癒されるなあ……やっぱり、ロリは最高だぜ！

新しい洋服買ってやろうかここにやろうめ！ 破産する覚悟ならある！

「やったなのは。ほれ」

俺が悪知恵を貸したのも事実だが、イタ——フェレットを預かると言い出したのはなのはだから、互いに上手くいった喜びをハイタッチで分けたかったが、なんかおずおずと反応されてしまった。なにして

も可愛いぞう……

完全に無意識で行った行動だったから理解が遅れたが、9歳の女の子が今日会ったばかりの居候といきなりハイタッチなんてそこそこハードル高いって。これは俺が馴れ馴れしかったな。反省。

なのは知る由は無いけど、通算年齢の話なら恭也さんより俺の方が上だし。けどなんだろう、美由希さんはともかく、恭也さんがなんか怖いんだが……眼も鋭いし。なんかの達人と言われても違和感無いぞ。

やば、話がずれてしまった。とにかく、俺が手の平をひよいと向けてから約十秒後、

「……はー！」

ぱちつと、軽くて可愛らしい音を鳴らす。ああ、守り抜きたい、この笑顔……

高町家の夕飯は、それはそれは美味しいものだった。俺もすっかり料理覚えようかな。一応喫茶店で働いていくし、なにかしら力仕事だけつてのもねえ。幸いでもないけど、なんとなく程度にしか料理出来るし時間あれば煮詰めてみるか。

「……………」

もっと荷物持って来れば良かった。案内された部屋は想像したより広く、その気になれば二人部屋に出来かねない構造をしていた。迷惑を考えすぎて荷物少なくて俺え……ま、まあいいや！俺には帰る家があるってことで！その気になれば、この携帯ゲームもあるしな！現代文明において、時間潰す手段つてのはありふれてるのさ！

流石俺、余裕の態度だ！年期が違いますよ！

でだ。することも無いので、掌の中で世界を変える作業を行っている。液晶の中繰り広げられているのは、異なる世界の人間同士が手を取り、巨悪と戦うロボットシミュレーションゲームだ。格好良く言ったがただのスパロボだ。転生して一人っ子として育った影響でRP

Gゲームとかこの手のゲームが大好きすぎる。生前は格ゲームとかが好きだったんだがこれはこれで……だが、少し落ち着かない。

「な、なあなのは」

「なんですか？」

「やってみるか？」

「はい！」

隣で黙って見られるとすっげえ落ち着かないんだが……本とか読んだりしている時に後ろから見られると落ち着かんדר？ アレと全く一緒。セーブはしているし、ゲームオーバーになっても問題ないや。ていうか意外だ。女の子なのにゲーム好き……

「あ、そのままやってみて良いですか？」

「え、続けるの？ まあ良いよ。でもストーリーも後半だから敵も強いぞ？」

「こっち側も強いみたいですから、多分大丈夫かと……」

お、言うねえ。セーブしてタイトル画面に戻ろうとしたが、セーブだけで事は足りたらしい。控え目だけど楽しみに頬を揺るませるなのは、携帯ゲーム機を手渡す。見せて貰おうか、高町家の末っ子の性能とやらを！

「え、あ、うそ、マジか……」

う、上手い……しかも俺より効率良いぞ!! 一体どういうことだ!! まるで意味が分からんぞ!! おおなるほど、ここでその精神コマンドを……ほほう……え、そこで待機? いいんかそれで? ……あ、そういうことか。 ……やばい。間違いない、俺より上手だ。相手が男だったら「きさまこのゲームをやり込んでいるなッ!」と聞いただけだしてるところだが、なのは手つきは本当にたどたどしい。時々「えっと、こうだったかな…」と溢したりしている。柔道の達人が相手の柔道着の着方を見ただけで実力を見わけるように手応えで感じてわかった……なのははスパロボに関してはマジにド素人だ! こうなると間違いない。

「……なのははつてもしかして、ゲーム得意とか？」

「得意というより、好きでしている、てくらいですね。すずかちゃんと

もしていますから」

俺は好きだけど人種という自覚はあったが、まさか9歳の少女に及ばないとは……流石は聖祥大附属小学生、半端ねえ……俺と違って真面目っぽいから、良い成績で卒業出来そうだな。俺なんて、知識が大学生レベルなのに物言わせてるだけだし。そろそろヤバイ部分が出てきてるのが厄介だな。そろそろ勉強せねば……

やだやだ、いまはそんなことを考えるのは止そう。とにかく俺は、他人と競う為にゲームしてるんじゃないし。あくまでゲームなんだから、楽しむためにするのが一番だ。これはゲームであって遊びじゃない？ ゲームは遊べてなんぼでしょうよ。

「どうする？ そのゲーム持っていくか？」

「え、いいんですか？」

「ああ。なんなら、なのはなのは別のデータ作って、最初からやってみてもいいぞ？ 俺にはまだまだ娯楽があるから気にしなくていいぞ」

「わあ！ ありがとう、八高さん！」

「遅くまでしない方がいいぞ」

「分かっていますよ。それじゃあまた明日」

見ろこの笑顔！ これでもまだ悪魔や冥王と呼ぶか!? どの角度から見てもブロリーやゼオライマーと同列に並べられるのがおかしいほどの天使っぷりを発揮しているのはちゃんマジ天使。ペロペロ——は自重するぞ！ 心の中で精一杯頭を撫で練り回すので我慢しよう。ゲームを通して少し打ち解けられたこともあって、ちよつと名残惜しいではあるが、笑顔で崩れたなのはに軽く手を振りながら見送る。

——助けて——

はずだった。聞き覚えのある声が、頭に入り込む。記憶が正しければ、この声は夕方に聞いたあのシヨタボイスの主だ。となると、あのフレレットか。なんにしても、二人しかいない部屋で存在しない声が

脳内に響く。

——僕の声が聞こえるあなた……力を貸して下さい——  
表情を見るに、なのはも聞こえているようだ。少しの動揺を見せた後に、聞き入るように傾聴を示していた。まさかあのフェレットが本当になのはと関わりがあるとは……

——お願い、僕のところへ……！——  
そこで、声は途切れた。心なしか、その間流れていた異様な空気は、それをきっかけに消えた気がする。

「あの……八高さん……もしかして今の聞こえました？」

「……ぼつちり。ということとは、なのはも夕方の声が……？」

「はい」

俺だけじゃなくなの……？ これは偶然か？ いや、この世界の成り立ちを考えれば、なのはだけじゃなくて俺も聞こえたと考える方がしつくる来るな。しかし、なんで俺もなんだ？ ……一つ可能性を考えたが、流石に違うよな。うん、そんな訳ない。俺もなのは同様の魔法使いなんて無い無い。

……俺が悩ましく考えていたからか、なのはは困ったように俺を見ている。

「……あの、どうします？」

「助け求められたら、することは一つだろ？」

求められた助けを無視するほど、俺は不出来じゃないんでね。そんなこと説明するだけ野暮ってもんだ。

なのはの不安を拭き取るように、俺は、にかつと笑って意思を返した。

こつそりなのはと家を出て、向かった先は榎原動物病院。

既に射光も射さない夜の時間とあってか、通りに人の気配はほとんど無い。夏だっというのに嫌に肌寒くも感じる。うわ、点滅する街灯の下を通り抜ける時に感じたのは、きつと寂びた夜道を歩く不安から

だと言いつい聞かせながら、駆ける。

「——っ!?!」

「なんだ!?!」

到着したと同時に、動物病院が爆発する。いや、炸裂した、の方が近いかもしれない。病院を破壊したのは爆弾の類ではなく、そこから乱暴に生まれ出たような、黒い巨躯の塊なのだから。

黒い塊は———どうやら生物らしい。空腹の猛獣みたいに声を唸らせながら、全身と呼んで良いかも怪しい球体状の身体をゆらめかせる。瞬間、さつと動いたなにかにめがけて突撃までしている。一体なにを襲っているんだ……?」

「あれは……!」

「あの時のフェレットか」

黒い生物の一撃を交わしていたフェレットは、身動けの出来ない自由落下の中を、咄嗟に広げたなのはの手の中に着地する。どうやら傷は無いらしい。

「ナイスキャッチ。つか、なんだよこの状況は……」

「……来てくれたの?」

「きゃっ、喋った!?!」

「イッエッエッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ!!!?」

マジで喋ったあああああああアツツ!!! 脳内じゃなくて実際に喋られると本気でビククリするんだが! おかげで奇妙極まりない汚い悲鳴が出たじゃねーか! とと、とりあえず落ち着くんた八高輪……KOOOLになれ。ラマーズ法で呼吸を……妊婦さんだこれ!

こうなりや無理矢理だ。大袈裟に一息吸いこんで、努めて冷静になるのはに促す。

「ふうー………なのは、フェレット。ひとまずこの場を離れるぞ!」

「は、はい!」

おいおい、一分以内で密度の濃い疑問が溜まったぞ。だけど、それをここでする訳にはいかない。幸いにも化け物は、突撃した樹の下敷きになって身動きを奪われている。映画で見たことあるような場面を実際に眼にするとと思わなかったな。



なのはそのままフェレットを抱えながら、俺の後に続く。いや、駄目だ。これは良くない。

走ろうとしたところで気付いた。見たところまだ今のなのは一般人の**はず**。その**なの**はが、陸上部の俺と同じように逃げられる訳ないだろうって。万一にこのまま後ろから襲われたらどうするんだ。かといって、その小さな手を引つ張って無理に走らせるのも、ねえ？手を傷めたらどうするの。ていうか俺が恥ずかしくて死ぬる。

………仕方ない。お互い生き残る為にこうするしかない！

「……ええつと、本当ごめんな、なのは」

「え——にやつ！」

「悪気は無いんだ！ だから警察には知らせないでくれええつ！」

次第に余裕が拭われていく頭で閃いた案が——お姫様抱っこ。幼女が近いよおおお！ うほおおおおおとおおおおお、シャンプーの良いまで匂いするよおおおとおおおおおほんと悪気無いんですごめんなさあああああああああ！

なんか入り乱れた感情の中、俺はそれでも一心に意識していることがある——むっちゃなのはから眼を逸らしています。なのはがどんな顔しているかなんて超見たくねえ！ 今日会った人間にお姫様抱っこされてるんだぞ!? 誰でも良い気はしないだろ!?

あそつか。よく考えたらここ、リリカルなのはの世界なんだよな……多分だけど、これからはこれが日常になるのかもしれない。よく分からん化け物に襲われて、なんとかする話。そうか、これがリリカルなのはの**あ**らすじと**言**ったところか。

紳士道に反した自己嫌悪とかお巡りさんに対する恐怖心とかが混ざって、もう気が気じゃなかった。とにかく俺は、夜道を一心不乱に走った。

幽霊の存在を信じるなら、サンタの存在も信じよう

「……つぶはあ、ひとまずここまで来れば、だな……」

なのはと互いに肩を上下させながら、呼吸を整える。呼吸荒げる幼女……イエスだね！ ……いかんいかん、冷静になろう。この状況でふざけてられんがな。

そうだよ。よくよく思い返したら、あれは普通じゃない。余裕で化け物って言われる類のやつだ。あんな塊状の化け物に襲われたことを想像して、ゾツとした。

大袈裟に深く呼吸をしてからの直後、フェレットも落ち着いたように口を開いた。

「君たちには資質があるみたいだ」

「脂質と言ったか!? おのれええええええええええッ!!」

「ま、待って下さい！ なにか誤解していませんか!？」

「あぁごめん、ちよつとふざけただけ。で、俺たちの資質って？」  
とりあえずは逃げ切ったことだし、休憩がてら人のいない通りで腰を落とす。

どこから狙われてもおかしくないかもしれない。俺となのはは背中合わせにし、備え半分に座る。残念ながら俺も男なので、小さな背中に触れるとドキドキせざるを得ないり——更に本音を言えば、あのお姫様抱っこの影響で顔を合わせ辛い。決して俺がヘタレだからじゃない。紳士ゆえの反応なのは、言うまでもないはず。

で、なんだろうな。なんか立て続けに変な事が起こったせいとか、フェレットが喋っていることにもう驚かなくなっていた。人って凄いな。

「僕は、ある探し物の為にここではない世界から来ました」

「ここじゃない、世界…?」

「なんかえらいファンタジー染みて来たな…」

「だけど、僕一人じゃ思いは遂げられないかもしれない。迷惑かもしれませんが、資質を持った人に協力してほしいのです」

「うむなるほど。大体分かった。で、さっきから言っている資質って、なんの資質だ？」

「——魔法の力です」

「ま、魔法？」

なのはが困惑するのも無理はない。フェレットを助けに行つたと思つたら、変な化け物に襲われて魔法少女になることを勧められたんだからな。ちよつとだけ知識のある俺でも、あんぐりするしかなかった。ていうかちよい待ち、薄々思つてたんだが、やっぱ俺も魔法使いなんかい！ びつくりするほどユートピア！

「でも、僕の力は一人にしか——」

『ああ、その力は少女に渡すと宜いぞ。小生らに気を向ける必要は無い』

「うお、忘れてた！」

「それはもしかして……デバイス？ あなたも魔導師だったんですか？」

「え!? あ、いや、そんなはずは……」

お、俺が魔導師!? 魔法使いつて言わないんだ。格好いいなあ……いや待て、そういう問題じゃないぞこれ！ 普通に考えなくても俺の人生の中でそんなフラグがあつた覚えは無いぞ!? ただ指輪が喋つただけだし、俺自体は一般家庭で育つただだの一般人のはずだぞ!? 一体どうすれば良いのだ!?

……よく考えたらこれ、神がつくつたやつなんだよな。なら、会話の機能くらい付いてそうだが……理由がよく分からん。なにが重要で言語機能なんて付けてるんだ？ 駄目だ、疑問が多すぎてどうすればいいか分からん。

「——なのは！」

考えるのは後だ。あの化け物がこつちに来やがった！

一瞬だけ隕石かなにかと見間違えたけど、どつちにしても危ないことに変わりはない。気付くのが早かったおかげでなのはとフェレットを庇いながら、化け物の猪突を簡単に回避出来た。

激突した際に舞い上がった砂煙に紛れて、俺は電柱の裏になのはと

フェレットを隠す。ちょうど化け物の死角になっているところだから、バレちゃいない。

「なのは、俺が化け物を引きつける。その間にフェレットを連れて家に逃げる」

「でも、八高さんが」

「逃げ回れば死にはしないって名言があるからな。俺は絶対帰ってくるぞ」

俺はなるだけ自然に笑って見せる——本音は、マジ怖い。正直ちびりたい。

根拠は全く無いが、なんとかやれる気がする。強いて理由を言うなら、この蒼い指輪に可能性を感じただけ。指輪が喋ったと同時に、フェレットが俺を魔導師と呼んだんだ。それだけの力があると信じて良いはずだ。多分。

土煙が晴れる中、化け物が激突した拍子に散った、コンクリートの欠片を拾い上げてから、俺は結構な力で化け物の頭部に投げる。生物感極まりない、ぼむつとした鈍い音が少し聞こえた。うわ、罪悪感覚えるなこの音は。

「こっちだぜ塊魂め！　そうら、手の鳴る方へってな！」

ひっ、眼が合った……！　滅茶苦茶怖いんですけどやばいんですけど！　アレ完全に草食獣を見付けたライオンの眼だよね？　金魚を見付けた虎の眼だよね？

「……………」

「グルルルル——……」

「て、テメエなんか怖くねえ！　野郎ぶっ走ってやらああああああああああああああ！」

説明するまでも無いと思うが、敢えて言おう。化け物がこっちに挙動を向けた瞬間、全力で走った。全力で走って逃げた。情けないなんと言うなよ。こんな化け物とほぼ丸腰で向かい合って、戦おうって覚悟決める方が無茶なんだったって！　くそう、こんなことなら自転車で来るんだったよ！

だが、囿役としては上々の成果だ。血眼(残念ながら比喻じゃない)

になった化け物は俺を目掛けている。この状況になって確定したのは一つ。

——足を止めたら死ぬ。物騒な考え方だが、幸いここは街中だ。わんさかと転がっている電柱やらを遮蔽物として上手く使わないと、こつちが死んじまうわ。考えながら逃げないとだな。

静寂。得体の知れない怪物を引きつけたことで、なのはとその胴長の生き物は事なきを得ていた。けど、なのははその場から足を動かさうとしなかった。足を震わせてはいるが、怪物に対する恐怖以外の感情によって鈍くさせられていた。

「ね、ねえフェレットさん。どうしたらわたし、魔法を使えるようになるの?」

「魔法を……? でも、あの人は逃げてって」

「ううん。わたし、八高さんを助けたいの」

なのはが八高と顔を合わせてそう時間も経っていないが、彼女は彼を信頼していた。変わってはいるけど、人当たりが良くとても優しく、不思議と馴染み易い性格をしていた。なのはにとっては、恭也とは違ったタイプでの、もう一人の兄として認識されていた。

けど、その義理の兄が今、命の危機に晒されている。お互いになんの状況も知らないのに、自分に逃げろと促した。あの人は、本当に善い人だ。その人がいなくなるという不安が、なのはの足を振らせる。

「でも、震えていますよ」

「確かに怖いけど……ここでもしなかったら、本当に後悔してしまふと思うの。だから、お願い……!」

感情を覆う恐怖心は、今にもなのはを塗り潰さんとばかりの重々しい鉛として、内心に押し掛かっている。

けど、それ以上になのはは覚悟していた。不思議と、あの怪物を倒す為ではなく、あの人を守る為に、魔法を受け入れようとする。

なのはの瞳に宿った光。フェレットは、その煌めきに言い様の無い

希望を感じた。無理な薦めを良しとしていなかった為に却下しようとするが、その光に推されたことで首肯する。

「……分かりました。これを手にして。眼を閉じて、心を澄ませて」

「この石、暖かい……」

「僕の言う通りに繰り返し……」

なのはは、その石の放つ輝きと温度に驚きを隠せなかったが、言われた通り、眼を閉じて集中するなりその波立った心は澄む。

そこには、怪物に対する敵意や邪気は無かった。単衣ひとえに、優しいあの人を助けたい。その想いだけがなのはをクリアにさせる。

「の、のじゃロリ様あ！ 聞こえているなら返事してくれ！」

『聞こえておるぞ。貴台の言いたいことは分かっている。あれをなんとかしたいんじゃない？』

「その言い方だと出来るって信じて良いんだな？」

『無論じゃ』

「そりゃいい！ 急いでくれな！ 脚がコサックしそうだ！」

今ので冗談言う余裕が無くなったんだけどお！ これまでいくつの電柱を犠牲にしたと思ってるんだ！ バレたら警察もんだぞ！

「犯人は猛獣みたいな化け物なんです！」 って言って誰が信じるかって！ かといって、化け物の勢いは止まらんしマジで数秒後を考えるのが怖すぎる……足の挙動が鈍くなりそうだ、考えるのは止めよう。

『了承した。小生の言葉に続けるのじゃ』

「おう！」

「此こが名は、命題を果たせし者」

——我、使命を受けたもうものなり——

「為れば結ぼう。その印を。その力を」

——契約のもと、その力を解き放ち給え——

「空の様に自由に、海の様幅広く……凧ちかとした心で謳おう」

——風は空に、星は天に……そして、不屈の魂<sup>こころ</sup>は、この胸に——

「この手に魔法を……」

——この手に魔法を……——

「開け、アヴァロン・ブルー——」

——レイジングハート、力を……！——

——周囲一帯が閃光する。

ごく一瞬かもしれないし、十秒ほど経ったのかもしれない。なんにしても、知らない人から見ればテロかなにかと思うんだろうな……ある意味、テロ行為に加担しているのが俺なんだけどねえ……

と、ここで大きな失敗をしてしまった。うっかり、足を止めてしまったのだ。

で、後ろからは迫りくる怪物。う、うおおおおおやべええええええええ！ 完全に氣い抜けたあああああああ！

『利き手と逆の手を翳すのじゃー！』

どうしてと聞き返す時間すら惜しい！ のじゃろり様の言う通り、俺は咄嗟に左手を化け物に翳す。

——するとどうだ。目の前には、なにか術式のようなものが展開したように、バリアが敷かれる。バリア自体に厚みというものをあまり感じないもの、化け物の巨軀による体当たりを物としてもしていない。しかし、その衝撃そのものは手の平に伝わるから、気を抜く訳にはいかない。

「……っの、野郎——」

ボールを投げ返すように、手の平に激突した巨軀を押し返す。ああ、化け物の身体を引き摺った拍子に、足元のコンクリートの舗装が削れていくよ。

「おお、こりやすげえ……」

——なんだ、この服は？ 押し出した時に見えた袖の長い服に違和感を覚えた。明らかに見たことの無い服の袖で首を傾げる。

そのカーブミラーで自分の姿を確認すると、自分の来ている衣服が凄いことになっていた。近しい印象で言うなら、教会の神父さんが

羽織るような感じの仰々しい蒼い服。かといって、いかにも魔法使いの着そうなコートの様にも映る。やだ、恰好良い……

で、思わず二度見したものが、右手の中の武器。銃剣というか、たまにゲームとかで見た覚えがある。中々に近代的なハンドガンのデザイン。と思いきやその銃身の下部に取り付けられた剣部分。確認した限り、剣の部分含めて80センチ程か。リリカルなのはこの世界でこの武装なんだが、これってどうなの？ おかしくないか？

でもまいっか。そういう疑問の解決は後にでも回そう。まずは目の前のトラブルをどうにかしよう。T o L O V E なら大歓迎したいんだけどね。でもラッキースケベって都市伝説だし。……もういいや、この件については考えるのは止そう。俺には無縁だし。

「よくもまあ、散々追い回してくれたな、おい」

『全く、肝を冷やす男じゃ』

「それについては悪かったよ。まあとりあえずは」

なんであれ、手元にはそれなりに武器がある。それなら、することは一つじゃない？

「——ちよつと倒してもいい？ 答えは訊かないけど！」

右手の中の銃剣。これが俺の武器だ。それであの化け物を倒しに行く。

俺は、足場のやや欠けた舗装の道を蹴り、化け物との距離を潰す。



初めが肝心、過程は重要、だから終わりも大事

化け物は、触手による一振りを振るう。ひゅんと耳に入った音は、木製バットを素振りしたような重い音を響かせる。だが、見えているよ。苦も無く躲しながら更に距離を縮める。

『ほう、宜い動きじゃ。なにか習いでもあるか?』

『いいや全然。生前も今も陸上部所属さ』

『なるほど。見たところ随分余裕もあるようじゃから、これから貴台の持つ魔法やデバイスの特性を教授させよう』

『えっ、俺説明されながら戦うの!? 無理くね!?』

『なに、そう難しいことじゃあない。飽くまで基本的な箇所だけじゃ』  
『そ、そうか。それなら手柔らかに頼む』

『了承した。小生、アヴァロン・ブルーは見ての通り、ガンブレイドのアームドデバイスじゃが、この剣の部分は着脱が可能じゃ』

『お、おう』

既になに言っているかよく分からん。余裕ぶっているだけでこう言われるとはね。嬉しいやら泣いていいやら……

本当だ、フックみたなもので固定されている。早速フックを取り外し、ブレイド部分を銃身から引き抜くようにスライドさせると、左手の中には剣が宿る。なるほど、こうして両手持ちで動けるってことか。持ち手までしっかりあるから、やや短い近接武器としては申し分ない。ただ、従来の剣や刀のように鍔が無いのがちよつと怖いが……  
迫りくる触手をブレイドで迎え撃つ。果物でも斬るように刃を滑らせながら、右手に握られた銃の照準を合わせる。

——流れで引いてしまったが、撃ち出されてから化け物に着弾してしばらくの時間、我が眼を疑いつぱなしだった。銃口から火花を散らし放たれたのは、蒼い色に発光した光の弾だった。これはもう、ビームと言いつ換えられるレベルだった。直撃した化け物は闇を走る一筋を回避出来ず、軽い爆発を起こした。

「……きよ、強力だな」

『当然じゃ。魔法じゃからの』

「一通り分かってきたからそろそろツッコむが——これの何処が魔法のステッキで、このビームのなにが魔法なんだ!？」

『知らぬか？ それが魔法じゃよ。プログラム方式じゃがの。方式発動に必需とするのが持ち主の精神力ということじゃが。よもや知らぬか?』

「まるで全然さっぱり分からんがな！ そもそも、なのは世界の知識はそんなに知らないんだよ！ バトル系魔法少女といっても、こんなガチとは思わんだろ！」

『成程そうか。では今に順応せよ』

「出資者は無理難題を仰るうおあぶねっ！」

更に増やした触手が振るわれるが、眼の端で捉えていたおかげで身体を伏せて避ける。さっきのバリアも使えるが、怖いからなるだけ当たりたくない。あ、誰かの家の壁が……

いやね、順応しろって簡単に言ってるけど、今戦闘中だからね？ 多少の余裕はあっても、結局命のやり取りしてるからね？ 初戦闘で割り切れるほど俺は人間出来てないって。

でもまあ、一つ分かった。魔法の仕組みはほとんど分かってないが、さっきのバリアや撃ち出した魔力の弾丸のような攻撃も、俺のイメージとかそんなものが具現化したんだろうということだ。

「…で、アレは普通に戦えば倒せる相手なのか？」

『倒す』というのは語弊があるのう。正確には、アレは「封印」するのじゃ』

「封印?」

『そうじゃ。今は細かな説明は省くが、貴台が化け物と呼ぶあの存在は思念体じゃ。元に戻すには、まず思念体を撃破する必要がある』

「そんな時はどんな魔法を使えばいいんだ?」

『要領は先にした通りじゃ。攻撃や防御のような簡易的な魔法は念じることでも可能じゃが、強力な魔法には呪文が必要になる』

「じゅ、呪文……? 魔法名を呼べってか?」

『なんじゃ、理解が速いのう』

「なんじやああそりやああああ!? そんな恥ずかしいこ——おごぼあああ!!」

完全に俺の落ち度だった。呪文というワードに気を取られたせいで足を止め、迫る触手によって顔を殴られた。

民家に激突することは無かったにしても、コンクリート塀に背中を打ち付けるのは変身しても痛い。おまけに頭まで打ってしまう始末だ。これで気絶していない自分を褒めてやりたかったが、視界がグラグラしてる……!

「くっそ……完全に油断したぜ………げ」

なんか手の中が軽いと思ったら、ガンブレイドを落としている。更に言えば、化け物の近く。……待てよ、あれが無いと俺魔法使えなくね…? で、あの化け物は鼻息を鳴らして俺を睨んでいる。そうすると、ねえ? なにするかなんて嫌でも読めるよねえ? ヒントは赤い布を眼前にした猛牛。

「リリカル……マジカル……」

「封印すべきは、忌まわしき器——ジュエルシード!」

「ジュエルシード、封印!」

が、予想とは違うことが起きた。

誰かに唱えられた呪文によって、怪物の攻撃は阻まれたのだ。

ひらりと伸びるさくら色のリボンのような線が、化け物を雁字搦がんじがらめに捕える。一体誰がこんな芸当を……? 魔法が伸びてきた先を眼で追うと、

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル21——封印!」

『Sealing』

その光景に、心を奪われてしまった。他意は無い。

聖祥附属大小学の制服とよく似た服を纏い、そのいかにもステッキを手に収めるたのはの姿はDVDのジャケットで見る以上に、魔法少女だった。本当に魔法少女だった。

なによりもその眼。覚悟しているからか、少しの曇りも無い。純粹

な単衣の意志が宿っている。ロリは偉大だ。純真ゆえの強さで、なのは化け物を圧倒していた。

やがてさくら色によって縛られた化け物は光に包まれ、やがて雲散した。

……途端に訪れた無音。日常に帰って来たんだなって実感がすぐに湧いて……いや、まだ一つ残っているな。

「さっき元に戻すって言うていたけど、あれが本当の姿なのか？」

「そうじゃ。ジュエルシードと呼ばれるものじゃ」

アヴァロン・ブルーを拾い上げながら、その眼の前できらきらと存在を示すように光る石が落ちている。なのはは杖を伸ばして、その先端に石を触れさせる。おお、杖の中心部と思しき部分に石が吸い込まれる。やっぱ魔法のステツキだな。

「大丈夫ですか八高さ——頭から血が……！」

「ああ大丈夫大丈夫。ちよっと切っただけ。すぐ止まるから心配しなくていいよ」

「そ、そうですか……？」

「そ。信じて良いぞ」

お互い変身を解いてから、やり取りをする。実際頭の傷は本当に浅いが、実は打ち付けた背中の方がじんじんして痛いとか、まだ焦点が定まってないことは黙っておこう。頭を拭ってから大袈裟に笑って見せる。ロリを泣かせるとか御法度だぞ？ 士道不覚悟なんだぞ？

紳士を名乗るなら当然です、プロですから。……あ、でも自分の生前を考えたら士道に背いたから死んだようなものだからな……暗い気分になつてきた、別のこと考えよう。まずは……

「なのは、俺の心配は嬉しいんだけどさ。とりあえず逃げようか」

「……………そ、そうですね」

辺りの民家の荒れ方が異常すぎる。重ねて、近づいて来るパトカーのサイレンの音。で、現場にいる俺たち。……後は分かるな？

「と、とりあえず」

「逃げるんだよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！」

俺となのはとフェレットは、とにかく逃げた。

帰路にて、フェレットことユーノ・スクライアと少しだけ打ち解けた気がした。ジュエルシードという存在に関わらせたことに自責しているが、俺もなのも不思議とそう気にはしていなかった。むしろ、折角だからと家に連れてくることになった。俺も反対する理由が無いから首肯する。というより大歓迎だ。こんな可愛いフェレットが我が家に住むんだぞ!? 楽しすぎて気が狂いそうだ!

「おかえり。こんな時間まで、どこに出かけていた?」

「アイエエエツ!? キョウヤサン!? キョウヤサンナンデ!」

「お、おにーちゃん……」

で、こっそり家に入ろうとした横から、恭也さんが低い声で問いかける。そうだよねー、小学生の妹を連れて夜遅くに出歩くんなんて歡心しないからな。それが自分の妹と今日から居候する人間なら尚更だ。すいません、睨まないで下さい。恭也さんの視線は、なんだが刀を向けられてるみたいで落ち着かない。俺は妹さんになにも卑やましいことはして——る。お姫様抱っこをがつつりと。バレたら宇宙葬されそう。この大罪は墓まで懷に忍ばせておこう。

隣で「え、えつとね…」と濁しながら、なのはも俺を見てくる。一応見つかった時の策は考えていたから、それをいざ実行——

「ああー可愛い。もしかして、この子が話に出てたフェレット?」

「おねーちゃん」

「アイエエエツ!? ミュキサン!? ミュキサンナンデ!」

「つてあれ、なんか元気無いね。もしかしてなのはたちは、この子が心配で様子見に行っていたの?」

渾身の策があああああ! 俺の策そのものがああああああ!

……ま、まあいいかな。思わぬ助け舟が来たというところで。作戦丸被りなのを気にしてはいけない。そのまま美由希さんに乗っかることにしよう。

「すいません。無理言っただけのはまで連れ出してしまっただけ」

「八高さん…?」

果たして通じるかは分からないけど、片目の瞬きで「合わせて」とサインを送る。どうやら通じたようで、なのは小さく「うん」と溢す。いやあ、ほんと善え子やでえ……思わず関西弁になるほどや。

「気持ちは分かるが、内緒にするのはいただけないな」

「まあいいじゃない。無事に戻ってきたんだから。ね? けど二人とも、もうこんなことしないでって約束してよ?」

「はい。心配かけてごめんなさい」

「あと、内緒で出かけてごめんなさい」

「ということ、この話はこれでお終いね」

ふつと、美由希さんは俺たちに柔和に微笑む。おお、そなたこそ、紛れも無い天使…! この世界には天使しかいないのか!? いや、恭也さんという般若がいるのが……多分善い人だろうと思うけどさあ、なんか怖いんだよね。

さて、なんか流れが良くなってきたから、ここで畳みかけてみるか。

「あの、話変わるんですけど、見ての通りこのフェレット、悶絶するほど可愛いじゃないですか」

「母さんが見たらそうなりそうね」

「よければなんですけど、そのまま家で預かれませんか?」

その夜、とつても賑やかだった。

「わああ、かわいい! 本当かわいいわねえ!」

「おかーさん程々にね…」

「あの、そんなに揺すったらゲロ吐いちゃいますよ?」

「なにか芸とか出来るのかな…:ほら、お手」

ユーノの登場は、高町家に癒しと笑顔を与えた。おお、フェレットがお手をした! その光景だけでも見つけものだ。桃子さんと土郎さんが唸るのも仕方ない。しかし、ユーノが快く受け入れられて心安だ。

……ああ、俺もユーノをすりすりしたいなあ……いやしかし、シヨタボイスな上に、僕つ子。一応オスなんじゃという疑惑があるが、なのはの部屋で飼うという運びになったから、メスということでも俺も納得する。めっちゃやりすりすりしたいんだが、どうにも人語を解するだけに、躊躇ってしまいうな……少なくとも、オスにしてもメスにしても、気軽に頬ずりはいしづらいな……メスっぽいけど。でも普通になでたいな。フェレットだぞフェレット。動物つてのは基本撫でてしまうのが人のサガつてもんだらう？

……なんか熱くなっちゃったな。とまあ話をちよつと戻そう。食事についてやこれからについてのあれこれ話を話し込んでいたから、ユーノとは碌に話せることは無かった。魔法について詳しく聞こうと思っただけど、今日は無理そうだな。

「やったな、なのは」

「……はいっ！」

今度のハイタッチには、空白の時間はそんなに無かった。距離が縮まったのが実感して、俺もかなり嬉しくなる。

改めて——ここは魔法少女リリカルなのはの世界。

魔法、ジュエルシード、フェイト・テスタロッサ。知らないことはまだ山積みだ。つまり、メタな発言をするなら、物語はここからということになる。

幸運と取るか不運と取るか、俺は物語の展開というのをまるで知らない。だが、この世界で生きてみてよく分かった。それは、それはなのはだつて一緒だ。当たり前つちや当たり前だが、フィクションの世界の人間だろうと、ちゃんと生きているんだ。それを実感出来たのは大きかった。まあ、仰々しい話になったけど掻い摘めば、なんにでも命は宿っているんだなつていう話。

けど、二次元の世界に転生したにしても、俺のすることはそう変わらん。ロリを守るのが俺の役割だ。かといって、紳士としてまだ未熟だ。困難は、同じ魔法使いであるのはと超えることにしよう。

ああ、今日は色々あったからもう疲れた。なのはも部屋に行つてい

るから、俺も寝よう。これ以上は頭が痛くなりそうだ。また明日あれこれ聞くことにしよう——



Interlude 異邦者の名は運命

街の住人が賑やかを表す中、空の月は金と白を混ぜたような満月が浮かんでいる。喧騒と静寂の中を背景として煌めく淡く注がれる月の光。或いは、髪を靡かせるほど揺らぐ少しの強さを纏った風の存在を、人は気付いていないのかもしれない。

その下。並ぶ無機な高層群の一つに佇む少女は、眼下に広がる景色をぼんやり眺めていた。双眸に込めた少女の意思は、見せまいとするように毅然とし、凜然とも冷然ともとれる薄い表情を保っていた。

——それは、この宵闇に溶けたような黒衣を纏った少女。普通と呼べないのは、その出で立ちと絹のように整った金髪、斧と紛うような形状をした杖を手にしているからに他ならなかった。吹いた風が靡かせるマントは、少女を異邦からの旅人と映し出す色合いを一層に強める。

「——第97管理外世界。現地名称、地球。かあさんの探し物はここにある」

まるで、鈴の音であり、流れる水のように静かな口調だった。落ちて着きながらも、彼女にはある決意があるから、どこか重みすらも孕んでいた。

傍らには形容しがたい赤い獣。獣は語るに至らず、ただ静かに佇んでいる。狐と獅子を混ぜたようなその外観と口元から覗かせる牙は、生半可な人間が怯んで逃げるだろう。だが、獣に更なる異彩を放てさせるのは、額にある宝石と思しきものの存在かもしれない。どちらにしても、街中で見るにはその獣の存在感は強いものだった。

その印象と異なり、獣はなにをするでもなく、むしろ付き添うように黒衣の少女に眼を向けていた。労わるようなあお藍い瞳を、優しく。

「——ロストロギア。形態は宝石。一般呼称は——ジュエルシード」

少女は忘れるなど自分に良い聞かせるように、一つ一つを丁寧に口にする。

ルビーを思わせる少女の双眸は、まだ灯りの散る街並みから歪みない球を画く月へと移す。

——無感情に映るその表情。けど、その瞳には一念の強い意志が宿っていた。炎のよう、と呼ぶよりその力強さは差し詰め、奔る稲妻の様に煌めきを映していた。

「そうだね……すぐに手に入れるよ。——確かに彼を信じていいか分からないけど、目的は同じだから」

少女は、まるで誰かを宥めるように一人、そう溢す。少女にとっても不安はあるが、それ以上に大事なことがある以上、彼女は揺らぐ訳にはいかなかった。

彼女を動かすのは、痛ましいとさえ思えるほどの、無垢な一念なのだから。その声色が映すように、どこか儂い表情を一度も変えることは無かった。

「バルディッシュ、アルフ」

『Yes sir, Master』

それでも少女は、手を引くような優しい声音で促す。手の中の斧が言葉を返し、獣は狼煙をあげる。自分たちへの宣誓と、自分たち以外への布告を含ませながら、獣は吠える。

月はただ、映し出す。人の形を。

空はただ、見ている。人の世を。

でも人は、知らない。その姿を。

「——行こう」

人知れず黒衣の少女の決意は、夜風の流れていく。街の誰にも聞かれることもないまま、颯々と舞い上がり、消えていった——

怪しいものを見つけたら、とにかく人に知らせるように

「美由希、ネクタイ曲がってる」

「あ、本当だ。ありがとうね、恭ちゃん」

「流石桃子だ。今日の朝食も、とびきり美味しいなあ」

「もうあなただったら」

「……………」

甘つつつつつつつつつつつたる！ なんだこの空間は!? 酸素がイチゴシヨート味に感じるぞ!? トニオさんのイタリアンはよ！

……と、慣れない空気に取り乱してしまったが、なんだかんだで高町家での朝食の光景は、実に団欒だった。テーブルに座って互いが会話をしながら、陽気に食事を楽しんでいる。——とまあここまでなら非常に楽しい風景なのだが、どうにも胸にもやが溜まっていくのはその光景だった。

え、ええつとだな……まず、桃子さんと土郎さんが、イチヤついてる。家族の眼の前でだぞ？ 敢えてもう一度言うが、三人の子を産んでいる親が、まるで新婚のような笑顔を向けあっている。ていうか状況知らない人が見れば、普通に新婚夫婦そのものだ。

更に隣では、恭也さんがなに食わぬ顔で美由希さんの制服のネクタイを結び直している。当の美由希さん自身、抵抗云々の話じやなく「ありがとうね」と笑顔で返している。一歩間違ったら、恋人同士のやり取りにしか映らない。これなんてギャルゲー？ まあ年齢的な話をすれば、恭也さんはその主人公だと言われても納得は出来るが……なんにしても、俺からしたらこの空間は、ホットドリンク所持で火山地帯のモンスターを狩りに行っているような、アウェー感すら超越した亜空間だった。ただし、狩場と呼ぶにはあまりに緩いけど。

「にやはは。おとーさんとおかーさん、大体こうだから」  
「さ、さいですか……」

おい、笑顔が微妙に引き攣ってるぞなのは。普通にしてる俺らの方が浮いているってどういうことだよ。この流れでなのはといちやつこうものなら、余裕の鉄拳制裁だろ。もしくは、通報しましたという魔法の一言。世の中ってよく出来ておる。

「にや、八高さん、頭撫でてます!」

「ぬおおおおごめん!」

「二人とも、すつかり仲良くなつたのね」

それもありますけど桃子さん、今の場合は場の雰囲気当てられたからです。い、いやあ、空気って怖いね。

しかし、魔法——か。この流れでそう連想するのはおかしいが、今俺たちって魔法使いなんだよな……そんなまさかと笑い飛ばしたいけど、嘘じゃないからなあ……イチゴ空間の中、なんとなしに息を吐いてしまう。

【話の前に確認じゃが、昨晚小生が話した留意点を覚えてるな?】

【あれか。戦闘時には、ブレイド部分はなるだけ分離させない方が良  
いっていう】

【そうじゃ。なんじゃ、船を漕いでいた割にしつかり聞いておるの】

【だから大丈夫だってなんども言ったろ】

【……貴台じゃからのう】

【みんな俺を否定するのか……】

昨晚はアヴァロン・ブルーに関するあれこれをかなり説明された。たつた今知つたが、それほど信用もされてなかつたと来てる。俺持ち主のはずだよな? ……いや、それについては考えるのは止そう。

なんでも、アヴァロン・ブルーのはのじゃロリ様の人格を移植されたデバイスというだけで、のじゃロリ様が持つような力や能力というもののはまるで無いという。ただ昨日見せたような魔法や、この世界に関

する知識を粗方持っているだけ、だとか。本人の要望もあって、畏まるのを止めて気安く会話するようにしている。

ちよつとずれたから話を戻そう。アヴァロン・ブルーはブレイドと銃を切り離して使えるが、それだとブレイドの攻撃力というのは落ちるらしい。細かい説明は省く（訂正、やっぱりそんなに覚えてない）が、銃部分がアヴァロン・ブルーの本体になっているから、銃に込められた魔力がブレイドにも循環することで、本来の攻撃力を発揮するという。物凄く簡単に噛み砕くなら、ノートパソコンとPCアダプタのような関係みたいなものだと思えば正解らしい。まあ、あくまで『ガンブレイド』だからな。仕方ない。

「ま、まあいいや。で、話してくれるんだよな？　俺たちが戦ったもの（ものがたり）のことを」

「勿論じゃ。断っておくが、小生はこの世界の末を知らぬぞ。予備知識程度しか知らぬ。それで構わんか？」

「大体俺と一緒に。まあいいさ。情報は多いに越したことは無い」

ちなみに、ここは中学校の教室ど真ん中。しかも授業中。しかし、会話というのは成り立っている。アヴァロン・ブルーとは、いわゆる念話での会話が行われている。まるで夢に見ていたことが実現してわくわくが全然収まらない。テレパシーとかロマンだろ？　ロマンティックが止まらない。自分が変な顔してないか心配だが……自慢じゃないが、授業の内容があんまり頭に入って来ないぞ。

「了承した。——まずジュエルシードというのは、古代遺産の類じゃ」

「古代遺産？　この世界のオーパーツみたいなものか？」

「正確にはユーノ・スクライアがいた世界の、じゃな。ジュエルシードは本来願いを叶える石じゃが、不安定なものである。昨晚のようなことは勿論、偶然見つけた生類が使用し、使用者を取り込む場合もあるそうじゃ。ちなみに、昨晚のものは石が単体で暴走したもののようじゃ」

「聞けば聞くほどおっかないな。なんだって異世界の産物がこの世界にあるんだ？」

「……僕は故郷では、遺跡発掘の仕事をしていたんだ。ある日、古い遺跡の中でジュエルシードを発見して、調査団に保管を依頼したんだけど、運んでいた時空艦船に事故が遭ってしまつて……」

「そうだったんだ……それで、この世界に散らばつた、てこと？」

「はい……この世界に散らばつたジュエルシードの数は21個……」

「まだこれからなんだね」

ユーノ君の声はとても小さく、本当に自分が悪いことをしたような寂びたトーンで説明している。

ジュエルシードが怖いものというのはよく分かった。けど、それはまた別の考えが頭をよぎる。わたしにとつてはそつちも気になることだから、思い切つて言ってみる。

「でも、ジュエルシードが散らばつたのはユーノ君のせいじゃないよね？」

「あれを見付けたのは僕だから。見つけた僕が全部集めて、在るべき場所に戻さないよ」

「……ユーノ君、一人で悩まないでよ。わたしは学校と塾の時間は難しいけど、それ意外なら手伝えるから。きつと、八高さんも同じだよ」  
「なんだか、わたしみたいだなんて思った。真面目で、心がちよつと押し込んでいる部分。もう知らない仲でも無いのに、なにもしないなんて悪いことをしたくない。」

正直、まだそれほど会話をした訳じゃないけど、きつと八高さんも協力してくれると思う。ジュエルシードがどんなに怖いものか、あの人もよく知っていると思うし……ううん、あの人は優しいから、きつと助けてくれると思う。だって、昨夜わたしと同じようにユーノ君の声を聞いて、悩むことなく助けに行つたから。

「でも昨日みたいなことがまた……」

「ううんいいよ。昨夜みたいなことが、わたしたち以外の誰かに起こると大変だからね」

見た限りだけど、ユーノ君は今まで一人ぼつちでジュエルシードを

探してきている。それに、ここは見知った世界でも無いという。当然、不安の方が大きいに決まっているよ。そんな中で、わたしと八高さんは数少ない力になれる人。ここで言わないと後悔しちゃうから、自分に言い聞かせるように続ける。

【だから、わたしにもお手伝いさせて】

帰ったら八高さんにも相談しなくちゃ。手伝ってくれるかなと不安になったのも一瞬だけ。なぜだか、すんなり領きそうな姿がすぐに思い浮かんで、それがちよつと可笑しく笑ってしまった。

「ああ、俺は別に良いぞ」

なのはから「放課後に駅の近くの喫茶店の近くに来てほしい」と呼び出しされた時は、なにかしら不満やら文句を言われるのではとハラハラしたが、実際面を合わせるとそんなに大した話じゃなかった。なんでもジュエルシード探しを俺も手伝ってほしいということだが……聞かれて0.4秒ほどの速度でそう返事した。

「しかし水臭いぞなのは。まさかとは思うが、最悪一人でする気だったのか？」

「危ないことだから、八高さんが領いてくれないかもって……」

「あれ放置する方がよっぽど危ないって。変に遠慮しないで、俺にも頑張らせてくれよ？」 同じ魔法使いだし」

「……やっぱり、八高さんは優しいですね」

「いや、優しいもなにも普通だろ？」

例えばだぞ。出来るだけの力を持っておいてなにもしないってのは酷い話だと思う。それはズルいし、極論すれば「悪」と定義付けてもいいレベルだと思う。幸い魔法使いは二人もいるし、しかも知ったる仲だ。なのにだ、なのはは俺に気を使った。巻き込みたくない気持ちには分かるが、俺は全然構わんからな。幼女のお願いとあればなんでも。

……微妙に気になることだが、なのはが含みのある笑みを浮かべて

いるのに、若干の疑問があるのだが。俺変な事言っていないよな？ いや、顔になにか付いてるのか？ ……うん、なにも付いてないな。まあその笑顔が可愛いからキーキでも奢ろう。いや待て。いざという時の為に迂闊に財布を軽くしない方が良い。くっ、俺は一体どうすれば……

「……………」

「？ どうした、なのは」

視線が向けられるが、よく見ると俺じゃない。俺の後ろの方だった。その視線を追ってみると、影は四つあった。

まず二つは、なにか部活か試合の後なのかジャージ姿の男子とその隣に並ぶ女子。どう見ても小学生くらいの男女だが、あの朗らかな表情を見るに、明らかにあの二人は付き合っているようだ。あの年でリア充だと？ あの男をデュエルで拘束せよ！

……いや、相手の女子の方が笑っている。幸せそうな彼女に免じて見逃すことにしよう。グッドラックだ、少年よ。

で、もう二つの人影だが、

「なのはちゃんと……あ、この前のおにいさんですか？」

この子は確か……………ああ、ええつと……………やばい、名前を忘れてしまった。でも顔はしっかり覚えているんだ。ユーノを動物病院に連れて行った時に一緒にいた、なのはの友達だ。……………いや待てよ。そもそも自己紹介すらしてないし、そんな仲でもないから知る訳無いんだが。しかし、なのはも度々友達の名前を口にして以上、なんとなくは覚えているからな。こういうのはちゃんと覚えておかないなあ……………あ、思い出した！ 確かこんな感じの名前だ！

「君は確かなのはの友達の——クララちゃんとアリスちゃん、だったかな？」

「あ、いえ、すぐかです」

「ちよつと！ アタシの名前はアリスよ！」

「サーセンしましたああああ!!」

クララとアリスってなんだよ！ 全然違うじゃねえか！ アニソングデュエット歌手かよ！ ていうかアリスって子が全然容赦無いん



だけど……俺一応年上で中学生なのに……そうだよ、誰だって名前間違えられたそりや気分悪いからね。うん、これは仕方無し。

「なによ、年上なのにみっともない」

「アリサちゃん。言い過ぎだよ」

「いや、いいんだすずか。大体本当のことだから」

「大体でも無いじゃないの。ていうか、ほとんど初めて会話したのに、さらっと呼び捨てしてるし」

「まあまあ。でも、なのはちゃんから聞いた通りだね。優しくてふわつとしてて、恭也さんとは違ったおにいさんみたい」

「ちよ、ちよつとすずかちゃん！」

「でもちよつと頼りなさそうよ」

「そんなこと無いよ！」

なんだろう、すつごい照れる。なのはから見た俺はそう見られているようだ。当の俺の中身がちよつとおかしくて申し訳無くなるんだけどね……ああ、すずかは善い子だなあ。アリサも少しくらい見習ってくれると助かるんだけど……可愛いんだけど軽くビビってる辺り、俺はアリサに対して、虎の子どもみたいな印象を覚えてしまったのかもしれない。

それにしても、なんとなく気になるな。なのはとすずかが仲良くなるのは分かるけど、このちよつと刺々しいアリサとどうやって仲良くなったんだろう……？ いや、考え方がちよつと違うな。アリサはなにがきっかけで二人と知り合ったんだ？ 物怖じせずにはつきり言う性格つてのは、古今東西好かれにくいからな。それが小学生なら尚更だろうよ。

ま、この場で考えても仕方ないか。それを口に出して、このやんわりした空気を変えることも無い。

「三人は仲が良いいんだな」

代わりにこう言うことにした。うむ、元気なのは良いことだ。賑やかさ、胸に染み入る、ロリの？<sup>こえ</sup>。芭蕉先生ごめんなさい、俺を裁いて下さい。

話題が俺だからか、あたふたと手を振るなのは、ふふつと柔らかく

笑うすずか、そうねと腕を組むアリサ。ああもうなに!? ここはなんだ!? 俺の楽園か!? そうなのか!? 誰かそうだと行ってくれ!!

「そうだ。折角喫茶店も近くだし、なんか食べてく?」

「なに、ナンパ?」

「ただの親睦会ノリだったんだけど!」

「アリサちゃん、話は最後まで聞かないとだよ」

「でも八高さん、お金は」

「心配ご無用。俺が全員分出そう——食べ物と飲み物、一人それぞれ一品ずつに限るけどね」

「それだとおにいさんに迷惑では……」

「俺はそう思っていないぞ。むしろ、なのは友達っていうなら、少しは付き合があつた方が良くかなと思つてさ」

俺つて損をするしなとかじゃなくて、実はバカの類なのではお疑つてしまう。ああ、また財布が軽くなっていく……だが真面目な話、万が一にジュエルシード関連の事件で二人が巻き込まれた時に、なのは親友くらいは守つてやらんとな。じゃないとなのはに合わせる顔が無い。

「——確かにそうですね。それではお言葉に甘えます」

「す、すずか!? そんな簡単に信用したら」

「大丈夫だよアリサちゃん。この人全然悪いようには見えないからおにいさんは本当に優しいんですね」

「そそ、そうかなあ? んまばばばばば!」

「……変な笑い方してないで、早く行くわよ。人が増えて来てるわよ?」

「あっはい」

アリサさん、そこもう少しやんわり言おうよ。どう聞いても照れから生まれた作り笑いでしょうが……すずかが直球過ぎて逆に捕球が難しいもんだから、うっかり照れてしまったジャマイカ。てか自然に話に入って来たけど、一応は来る気満々じゃないですか。とはいえ、二人が乗り気だから渋々と言った感じだけど。俺どんだけ怪しまれてるんだ。それともアレか、名前を間違えたことがよっほど気に入ら

なかつたのか。もしそうなら、これからで挽回するしかないな。

……しかし、なんか気になるな。時々だが、なのはの顔に落ち着きが無い。友達もいるんだから、もつとはしやいでもいいだろうに。魔法少女関連を重く受け止めてるとかか？ それなら俺もやるって言ってるのに。あまり考えすぎるのも良くないからなあ。

よし、そうだな。これを機会にリフレッシュとするか。妙なことに突然巻き込まれたのはお互い様だ。見知った顔と茶会でもして気を落ち着けることにしよう。

## 大事なものは、前に進む意志

「さあ、好きな注文してくれ」

「じゃあ、この900円のパフェで」

「い……良いぞ」

「ちよ、八高さん!? 財布は大丈夫なんですか!?!」

「大丈夫だぞ」

「ちよ、ちよっと! 冗談よ! 真に受けないでよ!?!」

「こういう高いのは滅多に食べないもんだろ? 気にしない気にしない」

と言いつつ、自分の分の食べるものは安めのものにしようと思案している俺がいる。しかし良かった。これでアリサが本気で言っていたら流石にちよっと考えていた……かどうか分からんが、今以上に動揺していたと思う。しかし、この店の内装良いな。翠屋もこんな風にしてみたい……いや、親しみやすさがウリのようだし、変にお洒落することは無いかな。

引っ込みがつかないせいかな、アリサは訂正をすることなくパフェに決定。すずかは俺とアリサを交互に見ながら、安めのティーセットを選択してから、なのはも同じものを選んだ。やだ、この子天使すぎる………店員がメニューを聞いて離れてから、再びみんなと視線を合わせる。

「なのはちゃんから聞いていますけど、おにいさんって聖祥大附属中学の人なんですね」

「まあね」

「じゃあ頭良いのね」

「……それがもう四苦八苦でさ」

「いくらなんでも早くない!?!」

「なんていうか、力技が通らなくなってきたというか、ボロが出始めたというか……」

「「？」」」

「あ、いや、こつちの話」

いかん、三人が頭上にクエスチョンマークを浮かせている。いくらなんでも「実は俺転生者なんでーす☆ チョリース☆」なんて言ったら病院送りだぞ。医者どころか神父も黙って首を横に振るぞ。俺が言われたらまず関わりたく無い。

「なのはの友達」という間で会話しているからか、それとも向こうの社交性の高さからか、意外と早くに打ち解けていた。どうにもアリサとはグレーゾーンだが、一方的に毛嫌いされてない分、マシなのかもしれない。お、ここのコーヒー上手いな。翠屋のコーヒーのようなケーキと合わせて飲む味とは違う、どの食べ物と合うような絶妙な苦みだ。

「アタシたちとそんなに年が変わらないのに、コーヒーを飲むの？」  
「気が向いた時くらいかな。といっても、たまにしか飲まんけど。これ中々いけるぞ。アリサも飲んでみ——」

そこで止めた。あつぶな、このままいったら間接キスを促していたぞ。この手の自爆はシャレにならないからな。見ろ、寸止めたのにアリサのこの呆然としたこの表情。言い切っていたら、マジで睨みつけていたのかもしれない。なのでちよつと言いつつ直す。

「……今度飲んでみるといいよ。ちよつと苦く感じると思うけど」  
「いいわよ別に」

「こうして見ると八高さんって、大人の人みたいだね」

俺が飲む手前で助かった。コーヒーを飲んでいたら確実に吹いていた一言だったぞ……！ なのはにその気は無いのかもしれないが、右ストレートが入ったような衝撃を受けた。

「……なのはよ、中学生でも飲む人は飲むもんだぞ。たまに高校生みたいな背丈した小学生がいるって聞くだろう？ それと似たようなもんだ」

「当たってるような、微妙な違うような……」

「でもおにいさんって、ちよつと子どもっぽいところあるよね？」  
「すずか、それは落ち着きが無いって言うのよ」

「俺一応12歳なんだがそれは……」

なるだけ避けてきたことだが、享年20歳の人間が12歳を自称するのって滅茶苦茶痛いな……血を吐きそうになるほどのダメージを負った気分だ。でも仕方ないだろう？ 20歳で死んだにしても、今の俺は中学生を満喫している。そんな状況をヒヤッハーしない方が難しいと思う。

あれ、そう考えると俺、あんまり成長してなくね？ 20歳で死んで今12の年月が流れて32歳だが、なんだかんだで学生生活を楽しんでいるから、結局精神年齢の話をするると20歳以上と言いくらいよな………おいややこしいぞ！ 俺一体何歳いくつつて言えばいいんだ!?

「あ、悩んだ」

「頭抱えて悩んでますね」

「にやはは……」

………よし、こうしよう。年は重ねているが、相応の経験をしていないということ、20歳ハタチの12歳ということにしよう。少年の心を持った大人、もうそれでいいんじゃないやね？ うわっ名乗ると虚しいな！ これは酷い………が、現実と向き合うしかない………それで割り切ることにしよう。

「———だいじょうぶだ……おれは しょうきに もどった！」

「だ、大丈夫八高さん!」

「うむ、良い突込みだぞ、なの——」

ぱりっ。空気が変わった。なにか張り付いたというか、覆われたというような、気色の悪い感覚。これはひよつとしたら、

「どうしたのなの？」

「急に難しい顔してるけど……」

「しまった、ごめん。ちよつと翠屋での用事を思い出してき。俺となのはもう行くよ。財布置いておくから、てきとうに出しといてくれ」

「ご、ごめんねアリスちゃん、すずかちゃん」

「あ、うん……」

なのはの代わりに、咄嗟に出た嘘を早口で捲し立てながら、店を後にする。まさかこのタイムリングでジュエルシードの反応が出るとか……もうちょい空気読んでくれよ。怒るぞこの野郎。おかげですぐかに微妙な顔させたじゃないか。

にしても、なんの合図も無いのに、なのはが機転を利かせて本当に助かった。後でよしよししよう。そうしよう。いや待て、紳士は気軽にタッチしないとあれほど……

「おいおいおい……なんじゃこりや」

「八高さん、どうし……これは……」

いつからここはテイルズの世界になったんだ？ あれは世界樹とかそんな設定のアレかと思ったぜ。なんて思ってしまったら、景と出くわした。店を出て街の奥に眼をやると、巨大な大樹が広がってるんだぞ……？ まるで根付くように、その蔦の先は街に徐々に広がっていく。パニック映画真っ青の光景で余裕の衝撃だったの。

「まさかとは思うが、これって……」

『ジュエルシードによる思念体じゃな』

「やっぱりか。まさか生き物って樹も該当するとはな……ちよつと甘く見てたな」

「ううん、多分違う……」

「なのは……？」

「なにか知っているのか」と尋ねようとしたが、それより早くなのははその樹へ駆けて行った。反応を見るに、なにか知っているな。

「なに、どうしたの？」

「一体なにが……樹?! なんですかあれ!?!」

喫茶店から遅れて出てきたアリサとすずかは、根の広がる大樹に眼を見張らせる。そりやそうだ、魔法を使える俺だって呆然としていたくらいだ。普通ならもつと狼狽して良いだろうに。だが、今は逃げ隠れしている。そうしないと危険な状況だ。

「二人は店の中で隠れてくれ! 俺はなのはを探してくる!」

「なのはを!?! なのははどうしたんですか!?!」

「……ちよつとはぐれた」

「はぐれたって……」

「しばらくは店から絶対出るな！ いいな?」

「え、ええ」

「は、はい」

「……急に大声出して悪かった。でも心配はしなくていい。俺が必ず迎えに行く」

「でもあの樹は」

「それもきつと大丈夫だ」

「え、どうし——」

「じゃあ行って来る。しばらく隠れてなよ!」

これ以上は時間を取れなかったことと、ボロが出そうな気配を誤魔化したくて無理に会話を切った。こんな異常な事態だ。二人は領いながら、出て来た喫茶店にまた戻って行った。まず一つは良し。後はなのはのところに行くだけだが……

「なにがなにやらだな……」

【八高さん】

【おおユーノか。助かった。今ちようど、ジュエルシードで出来たよ  
うな樹の近くになのはが向かった。俺も今から向かうから、なのはの  
サポートしてもらって良いか?】

【分かりました。僕も今向かっていますので。無理はしないで下さ  
い】

【オーケー、了解した】

タイミング良く、ユーノも念話で出て来てくれた。こっちは武器と  
言っても差し支えないし、相棒もいる。ユーノはなのはに付けるのが  
得策だろう。

それにしても、ちよつと予想していたものと違うなあ。まさか、こ  
んな規模のが出て来るとは思ってたぞ。精々、以前に封印した  
あの化け物くらい（あれも充分デカイが）かと思っていたのに、あれ  
の比じゃない規模のが今正に広がっている。放置したら冗談抜き海  
鳴市が呑みこまれるんじゃないかと思えてならない。

……街のパニツクも凄くなってきたな。俺も向かわないとだな。



それまで無理するなよ、なのは――

わたしは、とんでもない間違いをしてしまった……

さつき喫茶店ですずかちゃんたちとすれ違ったあの人――男の子が手にしていたのは、やっぱりジュエルシードだった。

「これは恐らく、人間が発動させたものかもしれない。強い願いを発動させれば、その分ジュエルシードも強い力を発揮するんだ」

悪い予感に当たった。気付いていたのに、遠目で見えたわたしは「気のせいかな」なんて軽い気持ちで見落としてしまった。もつとちやんと気を付けていたら、こんなことにならなかったのに……

街に現れた大きな樹は、まるで飲み込むように少しずつ根を広げている。これ以上のなにが起こるのかは分からないけど、良くないことが起こることだけは自信を持って言える。

――街を巻き込んだのは、わたしのせい……いざ変身したものの、悪感からレイジングハートが重たく感じる……これは、わたしが引き起こしたもの……

「なのは、ユーノ、無事か？」

八高さんも既に変身していて、わたしの隣に並ぶ。本気で心配するように、顔を覗きこんでくる。なのはは悪いことをしたのに……今は八高さんの優しさを受け止めることが、辛かった。

「……なにか理由があるみたいだが、それは後で聞くよ。アヴァロン・ブルー、俺はどうすれば良い？」

『そうじゃのう。あの樹は人の願いによる影響じゃ。ジュエルシードの持ち主がこの中の何処かにいるはずじゃ』

「人の願いでああなるのかよ。……ちよつと待て。この中、だと？」

「この樹のどこかに取り込まれてるってことか？」

『そう言ったじゃろう』

「厄介すぎだろそれ。だとしたら、探すのに手間取るぞ」

「そうになると、時間をかけたら危ないってことですか？」

「そうなるな。しかも石の封印には近くにいかないと難しいらしいな。…考えるのは後だ。持ち主を捜しながら、被害が広まらない様伐採でもするか。アヴァロン・ブルー、手伝ってくれるか？」

『無論、了承した』

「待つて八高さん！」

散歩ほど助走を付けてから、八高さんは樹の中心へと飛行しようとするが、つい止めてしまった。迷って動けない心が、ぐわんぐわんと頭を揺らしている。だけど、蛇口の壊れた水道みたいに、ただ言葉だけが出てくる。

「……わたし、どうした方が……良いんですか？」

聞いている場合じゃないのに、わたしはそう聞いていた。本当に、自分がどうすれば良いかも分からない。なのはが引き起こしたことだから、なのはがどうかしなれないといけないうの分かっている。けど、どうすれば良いのかが分からない……

八高さんは律儀に足を止めて「うーむ」と悩まし気に少し唸ってから、苦い顔で答える。

「……すまん。正直ありふれたことしか言えない。とにかく急いで、ジュエルシードを回収しよう。そんな程度だ」

「……そう、ですよね」

「どうしても魔法の関わる話は、レイジングハートとかユーノに聞くのが良いと思うぞ。でもな、最後にお前を導くのは、お前の中の勇気の心だぞ」

「勇気の、心……」

「そ。自分は出来るって信じてみなよ。俺にしか出来ないことがあるかもしれないが、なのはだから出来ることだってあるかもしれないぞ？」

まあ、お互い新米魔法使いだからよく知らんけどさ」

「わたしだから、出来る……」

「ユーノ、なのはを頼むな。落ち着いたら来てくれ。俺は足止めしながら探してみる」

自分を信じる……なのはだから出来ること……？

少し考えいている間に、八高さんは飛び去って行った。その軌跡を

眼で追うと、街に広まる根を、あの剣で切って回っている。

八高さんは、自分の出来ることをすぐに行動出来ている。それほど年は変わらないはずなのに、なんだか遠くに感じてしまう。羨ましい気持ちと、寂しい気持ちが混ざって、なんだか変な気分だった。迷うことはあっても、どうしても最後は割り切って動けるんだろう。素直に凄いと思う。

——迷いや不安を払う為に、首を左右に振る。あまり時間をかける訳にはいかない。わたしは、自分の魔法や、レイジングハートを、ユーノ君の言葉も、きっかけを与えた八高さんも——自分だって、信じる！

「……元を探してみる」

「え？」

『Area Search』

「リリカルマジカル……探して！」

自分を中心に、身を翻しながらレイジングハートで円を描く。——その中から画かれた魔法陣から、たくさんのさくら色の光を放つ。これは倒す為でも、そもそも攻撃するためでも無い——

それぞれに降り注ぐ光たちを意識を巡らせる。——違う。

ううん、ここでもない。ここも違う。もっとよく探さないと………！

集中………

「——見つけた！」

「本当？」

「すぐ封印してみる！」

「この距離じゃ無理だよ！」

「出来るよ、きつと大丈夫……！」

自分を信じなきやだよね、八高さん。お願いレイジングハート、力を貸して……

『Sealing mode, Set up』わたしに応えるように、レイジングハートの形が変わる。その先端が音楽室で見る音叉のような形に、がちりと組み替えられていく。

レイジングハートの先を大きな樹に向ける。その先には、あの二人

がいる。待つてね、今助けるから……！」

「お願い、レイジングハート！」

放たれたのは、さくら色の奔流。まるで悪意を洗い落とすように、光は二人を覆っていく。

「なるほど。ジュエルシードを持っていたことに気付いた、と」

「はい……」

夕陽のさす帰り道。街のコンクリート舗装された道路の節々がひび割れている。これはニユースは確定だな。

なのはは自分のした失敗を包み隠さず俺に言うなり、くりつとした眼を伏せた。まあ結果的に人への被害も無かったようで事なきを得た訳だが、今回のジュエルシード騒動の発端は、なのはの見落としからだという。基本嘘を言わないのはが言ってきたんだ、疑う理由が無い。おまけに肩に乗るユーノがなにも言っていない以上、真実味も増すつてもんだ。

ちなみにだが、アリサとすずかには先に帰ってもらっている。折角の時間なのに台無しになってしまったから、またの機会にと流れてしまったのが残念だ。すずかも残念そうにくれたのが個人的に嬉しかったな。アリサが取っ付きにくいのが難点だが、それはこれからの課題だな。

……さて、ここからが鬼門だな。ちよつと上ずりそうな声をどうか抑えながら、言ってみる。

「………なのは、俺は今からちよつと言うぞ」

うわつ、ロリを叱責っておま……いや、紳士としてはロリには綺麗のまままでいてほしい。特になのはは、天使的な性格もしている。だからそのままの君でいてほしいと思ったり。不純なのか正当なのかよく分からん理由だが、概ね間違っていないはずだ。でも慣れてないんだよな、人を叱るとかって……

「今回はなんとか上手くいったから良かったけど、間違えてたらアリ

サヤすずかだつて巻き込んでいたんだぞ？」

「……っ！」

「ああーえつとだな……俺が言いたいことというのはだな、その……うっかりで誰が拾ってもおかしくないものだから、俺たちがしっかりしてないこととつてこととだな……」

はい、予想通りグダグダになりました。でも言いたいことは伝わってるよね？。なのは頭良いし。うおあ、もう考えるのも面倒くせええー！。こんな辛気臭い雰囲気嫌いなんだよ俺はよおおおお！。カビを食べたような喉越しを吐き出すように、一度強く咳を払う。

「……説教終わり。まとめると、次から気を付けようってことで」

「でも八高さん、なのはは」

「なにがいけなかったのかは、なのはが一番分かってると思うからなにも言わない。けどこれだけは言えるぞ」

「……なんですか？」

「なのは自分には出来ると思って、あの距離から封印したんだろう？。あれはなのはが強く願ったから出来たことだ。なのはだから出来たことだ。なのはには出来る力がある、それは誇って良いことだ」

こっちはガンブレイドだからね。精々中距離が限界だ。あの距離で封印できるなんて思ってもみなかったが、不思議と「なのはだから」と考えたら変に納得してしまっていた。主人公だしね、仕方ないね。

——前の方には、ジュエルシードに取り込まれかけた二人の姿が歩いていた。よろよろとした男子を支える女子。普通逆じゃねーのと思っただけど、こういうのは姿勢が大事。リア充爆発しろという邪念も沸いてくることも無く、むしろ胸がすつとする光景だった。うん、いいじゃないの。こういうのも結構好きだな。

「……なのはは確かに良くないことをしたが、あの光景を守ったのもなのはだからな。そもそも、なんの気付くことすら出来なかった俺にも落ち度はあるんだ。だからお互い猛省。はい、この話はこれでお終いな」

なにもなのはだけの責任じゃない。念話で尋ねるといふ選択肢もあつたのに、そうしなかった俺にも非はあるからな。もう少し気を配

れるようにしないとな……

途中、不意になのはが足を止めた。え、あれ、俺なんか変なこと言っ  
たっけ。多分言ってないよな……？　ちよつと言葉を待ってみよう。  
「……八高さん、ユーノ君。わたし、魔法少女を続けたい。家族や友  
達、いろんな人を守る為に、ジュエルシード集めをするね。もう、こ  
んなことが起こらないように……」

まだ引き摺っているからか声は震えているが、俺と肩に乗るユーノ  
を見る瞳には陰りは無く、決意が固まったように光を放つ。若干涙目  
なのが実に可愛い。

……なんだかなあ。特別、なのはの落ち込む顔見ると、こつちも  
落ち込むなあ。やっぱさ、ロリに限らず、女性は笑顔が一番だろ？

「それは大事な気持ちだ。絶対忘れるなよ？」

「——はい！」

「いやあ、なのはは可愛いなあ。あっはっはっはっは」

「にやっ！　や、八高さん！」

ファツ!?　し、しまった！　つい撫でてしまった！　だってハムス  
ターみたいにぼほおんって笑うからつい……俺の感覚だけど、なの  
はって小動物みたいな可愛さあるよね？　え、小さいからだって？  
それも込みでだって。いやそれより、このままでは警察呼ばれる！

「け、警察署まで競争だ！　さあ後に続きたまえ！」

「ちよ、ちよつと八高さん!?　家に行きましょう！」

いてもたってもいられず、その場から逃げ出した。ヘタレだから  
じやあない、紳士の態度に背いたからこそその行いだということは付け  
加えさせて貰う。ベベベ、別に動揺した訳じゃないんだからね！（ツ  
ンデレ並感）

お姫様抱っこの次は頭ナデナデとは——まるでリア充じゃない  
か！　ロリの笑顔一つでぶれる俺の紳士道は、極みにはまだほど遠い  
など再認識した。

ああ、今日の夕陽は一際綺麗だな。この当たり前の光景に涙を飲み  
ながら、帰り道を逃走する。

好きなもので自分を語るべし。ただし適量の愛で。

今日は週末。学校も休みだし、課題の数も少ないから、こうして翠屋の手伝いをしている。数日は事件も無く平和に過ごせたこともあって、前よりも更に高町家に馴染めている気がする。気持ち分の違いだけど、俺への当たり方も柔らかくなったり、力みが無かったりと、落ち着いた会話も増えてるのが実感できている。変な話、最近は学校の友達よりなのはとすずかたちとよく会話してるような。このまま俺が犯罪に走らなければいいけどな……走る訳が無いにしろ、紳士として未熟な俺だ。用心するに越したことはない。しかし、一つ困難を言えばアリサとの距離がいまいち測りかねている。別に仲が悪い訳じゃないと思うが、なにか苦手にされているような節を感じる。なのはやまずかと話す時と違って若干の棘が口調から気取れる。うん、俺にはよく分からん。

でだが、桃子さんいわく、「よく見ると顔がいいからウェイターお願いね」と任されたけど、覚悟していたにせよこれがまた結構キツイ。店を運用する側に対して申し訳無いが、客が多くなって助かった。ていうかよく見ると良い顔って、褒められてるのか褒められてないのかピンと来ないんですけど。でもまあ、仕事着が格好良いし、一応の信頼はされているようだから胸を張って良いかもしれない。正直そう思わんとやってられん。俺はジョセフ・ジョースター程自分をハンサムとなれる自信は無いんだ。

それはいいや。で、今はちようど落ち着いている時間帯。多分この手の仕事をしていなかったら見られなかったであろう光景が広がっていた。

テーブルに並んだフルーツとアイスのデザートを、いろんな角度から眺めるのは。その横には、三脚のセットされたデジカメラや照明器具とかがスタンバイされている。なんでも、新商品のメニュー写真の

撮影をしているとか。

「ええっと、八高さん。照明……この辺りから」

「おう」

「もうちよつと右……ちよつと微妙に上……ちよつとだけ右に」

「ぬ……どうだ？」

「ん、大丈夫！」

撮影担当のなのはの指示通り、俺は手にした照明用の反射板を調整しながら、光を当てる。

足早にデジカメの位置に戻り、少しカメラをいじった後に何枚か撮影する。……不満とは少し違った感じに首を傾けてから、なのははもう何枚か撮る。挙動が自然過ぎて、完全にカメラマンと呼んでも差し支え無いのだが。

さてこのカメラマン……いや、幼女だからカメラレディ？さんは、一度熱中するとのめり込むタイプだな。店に出すものとして完璧に仕上げるというのものもあるかもしれないが、どこか楽しんでいるようにも見える。あら可愛い。君を被写体にゲフンゲフンナンデモアリアセン。

「はい、おっけーです！ ありがとう、八高さん！」

「どういたしまして。なあ、なのはってカメラの撮影とかが好きなのか？」

「うーん、ビデオとかカメラの撮影も好きですけど、機器の取り扱いが好きですね」

「へえー。つまり機械いじりが趣味なのか。その一環でゲームが好きと」

「はい」

アクティブな性格してる割に意外とインドアな趣味してるのな。それでも、せつせと次のセットメニューまで撮影の準備にまでかかっている。桃子さんいわく「プロの写真家も唸る腕前」らしい。うん、素人の俺が見ても手際良いのは分かっていたが、まさかそこまでとは。この域にまで来ると、最早オタクな印象なんて無いがな。

「そうだ、このデザートとかがってどうするんだ？」



「溶けちゃうから、責任を持ってなのはが頂きます」

「待たれよ。お客さん第一号として俺が頂きたいのだが」

「駄目ですよ。八高さん、まだ片付けがあるじゃないですか」

「ぐぬぬ……分かった。でもちよつと食べたいから、半分ほど置いていていい?」

「はい。それじゃあ。冷蔵庫に冷やしますね」

「ありがとうございます」

「……………」

「桃子さん? どうしました?」

ええーつと、なんだろ。俺となのはの会話の中でなにか不穏当なものがあったのだろうか……? なんか眼つきが怖いんだけど……

「……八高くん。いま君の着ているシャツ、見ていい?」

「……あのすいません。ちよつと言われている意味が」

「いいから」

一体なにをする気なんだ……? さっぱり意図が分からないが、取りあえず言う通りに、仕事着を脱いでから下に着ている服を見せてみる。

「……八高くん。お金を渡すから、なのはと印刷屋に行くついでに洋服を買いなさい。ていうか、なのはに買って貰いなさい」

「はい!」

「この際はつきり言うわ——八高くんの私服は、絶望的にダサイ!!」  
「はいいいいいいいいいい!!」

え、なに!? 俺の服がダサイ!? んな馬鹿な! 全て嘘です!

確か今日着ている服は、なんかサングラスをかけたファンキーな豚が「I am Biggest」とサムズアップした奴だったな。それもスパークしたような派手な黄色。ランクの話をするれば、確かに手持ちの服の中では力の抜けたものだが……ダサイ? そこはちよつと理解出来ませんねえ。なにも言われたことも無いし、問題は無いと思うんだが。

「い、いやいやなに言ってるんですか……確かにこれは、力抜いた服ではあるんですけど……」

「あなたの服の大半がそのレベルなのよ！ 全体的にセンスが致命傷なのよ！」

「ごもぼはああああっ?!」

「や、八高さんの顔が枯れた植物みたいにつ！」

「な、なのは……俺の服は……だ、ダサくなんて、無いよな……？」

センスは、普通、だよな……？」

「そ、それは……」

「なのは。嘘は本人の為にも良くないことよ」

退路を断つように、桃子さんが非情な一言をなのはに投げる。その言い回しずるいですって……俺と桃子さんを交互に配っていた視線は、ルーレット回転のストップボタンを押されたように、俺に止まる。

……なのはは、申し訳無さそうに上目で俺を見ながら、

「………磨けば光るものがあると思います」

と言った。どうとでも取れる意味なもんなので、取りあえず俺は泣くことにした。

「八高さん、機嫌直して下さいよ」

「いや、泣いてないよ。ほんとだぞ?」

「そこまで言っていないですよ!」

一端家に帰ってから写真を補正し終えてから、俺となのはは印刷店に向かう。写真のデータが入ったCD-Rをおじさんに手渡して、無事ミツション終了。——と言いたるところだが、まだ一つ残っている。俺の服を買うという、公開処刑染みたミツションだ。思わず目尻を拭ってしまったが、本当に、なんとも無いから……

でだ。なのはと街を歩く以上あんまり迷惑をかけるのもなあということで、こんな休日なのに、俺は制服を着て外出をしている。良い天気ダナー。こんなに視界が滲む青空を見たのは久しいかもナー……ぐすん。

それに加えて、ちよつとへこむ話もあるんだよな。あの時以来、

ジュエルシードに関する騒動も無かったから、なのはと魔法に関する訓練を行ったんだが、俺の持つ魔法となのは魔法の威力というか効力と言うか。その差が結構歴然としている。

少し説明的な流れになってしまいが、アヴァロン（名前が長いから略称を付けてみた）の魔法というのは、所持者である俺の精神状態に左右され、俺の発する言葉によって効力をフルに発揮するという。いわゆる、言霊ことだまみたいなものらしい。つまり、俺の魔法は技名を叫ぶことで効果を発揮し、テンション次第で効力を増すという話だ。なんだよその恥ずかしい設定は……Gジェネで言う「フィン・ファンネル！」みたいだ。

……のはずだが、普段のテンションで俺の魔法となのは魔法をぶつけてみたら、結構呆気なく俺の魔法は潰されてしまった。ユーノも苦々しく言っていたが、いわゆる魔導師の才能においては俺よりなのはの方が遥かに上だって……アヴァロンどころか、レイジングハートにもやんわり言われたから確定事項だ。思い出しただけでブルーになっちまうよ。八つ当たりがてらに、そこで行列をなしている蟻さんを食べ進撃ごっこしてやろうかちくしょう……

「ほら八高さん。いつまでもそんな顔しないで、お店に行きましょう」「逃げないから離してくれ……」

事情や間柄を知らない人間が見れば、妹に引つ張られて歩かされる情けない兄の図にしか映らないだろう……大体合ってるけどもさ。実際口にした通り、逃げるほどの元気なんて無いから、制服の裾を掴んで引つ張る必要なんて無いんだよなあ。でも捕まえてないと倒れそう……

でもさあ、絵面があまりにも酷すぎない……？ 中学生の男が小学生に引つ張られてるんだよ？ ロリに手を引かれてると表現したら中々にハッピーと思えるが、今ブルーベリーな俺の心は、いまいち舞い上がれなかった。絵としても結構アレだし。

「い、癒しが欲しい……」

「癒し、ですか？」

「服は大人しく買われるから……こう、例えばだけど、近くで動物と触

れ合えるような、秘密の場所とかつてある?」

「うーん……あるにはありますけど…猫は大丈夫ですか?」

「——ねこ、ですと? 猫って、あのにゃんこのこと、だよな?」

「どの猫かは知らないですけど、とにかく猫です。すずかちゃんの家なんですけど……猫、好きなんですか?」

「うん、大好きSA! ——とまあ軽く言ったが、本気で言わせて貰うなら、心から愛していると書いても良い。今すぐ抱きしめたいくらい、愛している」

「……………っ!」

なんとという僥倖ツ……! まさか知った仲の家に猫がいるとは……! 今日が良いことがあるかもしれないなあ……多分だが、なのはからの補足が無いところを見ると、逃げないタイプの猫を見た。ふ、ふふふふ、これは楽しみだ……! モフるぜえ、俺を見たものは——  
—みんなモフっちゃうぞお! (死神並感)

「いよおおし! 癒しの巣窟があれば行かない手は無い! 早速桃子さんに連絡す……どうしたなの?」

「う、ううん! なんでもないですよ!」

「ぞ、そうか」

どうやらなのはも猫好きと見た。見ろこの顔、テンション高くなってるの我慢して顔赤いし。あまり突っ込んでも宜しくなさそうだから、すずかの家まで楽しみとしよう。みなぎってきたぞおおお! うえっへっへっへっへっへ、思わずニヤニヤが止まらない。これからか楽しみだぜい。

「いらっしやい、なのはちゃん、おにいさん」

「こんにちはすずかちゃん」

「ど、どど、どうもすずかさん……」

「おにいさん、そんなに畏まらないでいいですよ。……あの、どうして制服なんですか?」

「話すと長いから、よければ気にしない方向で……」

「ああもう、年長者がなに挙動不審しているのよ」

「だってこういう家って聞いてないし……」

なんてことだ……完全に想定外だった。すずかの家ってこんな豪邸だったのか!? 一言も聞いてないぞ!? ていうかアリサよ、免疫無い俺からしたら、年長も糞も無い次元の空間に入り込んだ訳なんだが。普通に金持ちの知り合いとかいないし。

余談、でもないが一つ。ここに来る前はテンション上がり過ぎて気が回らなかつたけど、道中のなのはがやけに大人しかつたんだが、その理由を聞いてみると、俺の猫愛を語ったあの一言が自分<sup>なのは</sup>に向けられたと思つて内心でドキドキしていたらしい。ほんとすんません。完全に暴走してました。一応理解しているつもりだったにしても、刺激のある一言ということで、気が気じゃなかつたとか。完全に俺が悪いのでもうなにも言わない。

そもそもだ。ガチで屋敷規模の巨大な家に来てしまつて、緊張しない一般人がいるかつて。庭だつてその気になればサッカーが出来る広さだぞ。俺はなのはやアリサと違ってブルジョワを体験するのは初めてなんだよ。……しかし紅茶良いな。風が語りかけます……うまい、うますぎる……!」

「その前に、まずは謝らせてくれ。猫と遊びたいって理由で、急に押しかけてごめん」

「いいんですよ。今日はアリサちゃんと遊ぶ予定でしたので。でもなのはちゃんは、お店の仕事いいの?」

「うん。一段落したからなんとか。一応おかしさんにも、息抜きしてくるって連絡してるから」

「……こういう兄がいると、大変そうね」

「やめてアリサ……自分でも分かつてるから俺を貶めないでやって……」

「にやははは……」

で、ここは応接室なのか私室なのか。なんにしても、一つのテーブルを四つの椅子で囲うような形で茶会をしている。こんな優雅な空

間内に、既に五匹ほどの猫が確認されている。カップの中の紅茶を飲み干してから、足元で寝転がるココアみたいな色した猫が転がっている。寝転がったと思ったら、俺の足首に頬擦りまでしてくる。

——そんな健気なことをされちゃ、抱き上げるしかないじゃないか！

「UREYYYYY！ そんなねむつちまいそうな可愛い動きでの八高が倒せるかアーーーーー!?!」

「ちよつと、抱き抱えなさいよ！」

「安心したまえ！ 俺は猫とよう…女性には毛布を包むように優しいからな！」

あ、危ねえ……テンション上がりすぎてアウト発言しかけたが、なんとなく気付かれなかつたぜ。勢い良く動いたが、我ながら「フワサ」という擬音が合うほどの柔らかなタッチで抱き上げる。……待て。フワサってどう発音するんだ？ まあいいや、とにかく柔らかいのが伝われば良いし。しかし、この手触りは……！

「ふ、ふおおおおおお……！ なんてこつた、フワサフワだあああ……もしかして手入れを？」

「はい」

「やべえよやべえよ……綿飴みたいに柔らかい……たまらん！ もう離さんぞおおおお！」

「にやあ」

「ねえなのは。この人って、こんな性格だった？」

「八高さん、大の猫好きみたいだから」

「自慢じゃないが、大柄なデブ猫の鳴き声が得意なんだな、俺」

「本当に自慢じゃないわね……」

「聞くか？」

「嫌よ」

「なんつてこつた……それにしても、すずかの家って猫天国だなああああ！ ずつとここに住んでいたいなあああ！」

「本当、おにいさんは賑やかで面白いですね」

「うん」

……なのはずがくすつと笑ってる傍で、明らかに良くないものを見るようなアリサの視線が痛い。普段の俺なら軽くへこんでいるところだが、今の俺は一味違う。猫を味方に付けた俺に、心の油断などない！ 隙が無いとは断言出来ないけど。

なんか楽しくなってきたので、普段出来ないことをしよう。俺は、人形遊びをするようにココア（今勝手に名前を付けた猫）の両の前足二つを握って、軽く振りながら下手な腹話術を披露する要領で、くいくいつと躍らせる。

「アリササン。吾輩ニ鰹節ヲ献上スルニヤ」

「今鰹節持ってないから」

「それじゃそのケーキ頂きまー——」

「アンタに言っていないわよ！」

「あ、あんまりだ！ 俺とココア、どっちが大事なんだ!?!」

「猫が大事に決まっ……え、ココア!? もしかして、その猫のこと!?!」  
「当然だろ。ココアみたいな色してるからココア。どうだ、可愛いだろ?」

「ぶふっ!! か、可愛いってアンタ……」

なんか本気で笑われたんだが……猫可愛いだろう！ いい加減にしろ！ 俺は間違ったことは言っていないはずだ！

「ぷっ、あはははははははは！ 可愛いって、なんだかアンタに似合わない!?!」

「主人ヲ笑ウ少女ニハ天罰ニヤ」

「しゅ、主人ってなに、ってちよ、ちよつと！ なにするのよ!?!」

「猫パンチニヤ。ニヤン、ツー」

席としてはアリサと向かい合った形なのがちょうどいい。抱えた猫の前足で、たしたしとアリサの頬に猫パンチする。パンチと言ってはいるが、左と右を優しく頬に埋めるように交互させているだけだから、痛い訳が無い。

……猫のせいで今気付いたんだが、俺なに食わぬ顔でロリと遊んでいるんだよな……なにこれ、すっげえリア充感はない。一生分の運使ってないか心配になってくるんだが……その内逮捕されないよな

？

「ああもう、鬱陶しい！」

「怖いニヤ。アリササンガ怒ツタニヤ——おう怖かったなあ、よしよし。アリサは怒らなければ可愛いのかなあ」

「だ、誰が……！」

「アリサちゃん楽しそう」

「ど、どこがよー！」

……次からは発言に気を付けよう。アリサはからかうのが面白いことに気付いたけど、隣に座るなのはの機嫌を微妙に損ねた気がしたからこれくらいにしておこう。まあ、自分の友達が知り合いの先輩やら兄貴やらと遊ばれるのは、複雑な心境らしい。経験無いからよく分からんけど。うーん、テンション上がり過ぎると視野が劇的に狭くなるのは相変わらずだなネツクだな。よし、今日は遊び倒さずに、日光浴するテンションで猫と戯れよう。心の広いなのと言ってても、自分の親友と遊ばれると疎外感も感じるようだし。

「うえーい、ココアをもつともつと褒めるがよいぞ！褒めて伸びるタイプにゃしい、いひひっ！」

「……………」

「……………」

「……………」

……言ったそばから暴走したせいで、三人の眼が引いて（アリサに至ってはドン引きして）るぜ。れれれ冷静になれ俺。俺は高町家にいるわけではない。これは仮面ライ○ーデイケイドとかいう奴が見せている仮想現実だ。幻だ！おのれデイケイドゆるさん。

と、一通り酷い八つ当たりも済んだところで、気持ちを落ち着かせる。ゆとりも生まれてきたし、なにげにまだ一口も含んでいなかったケーキを食べることにした。



## 体で名を表そう

「はふう……」

温泉とかでさ、頭にタオルを乗つけるだろ？ あの要領で頭にココアを乗つけている。ついでに白い猫と神々しいペルシャ猫（それぞれにミルクとボスという名前を進呈）を両肩に乗せてマイナスイオンを絶賛体感中。さすがが手入れしているというし、問題ないだろう。

場所も変わって広い中庭でのティータイム。午後なのどかな空気に相まって、気付いたら俺は緊張感も無くなって、最早だらけの領域に入っていた。申し訳ないと感じつつも猫のオーラによって緩和されていく。どうぶつのちからってすげー！

「おにいさん、お風呂に入ってるみたい」

「どっちかというと、両肩の猫がマッサージ機みたい……」

「猫風呂かあ……一度やってみたいなあ」

「そんなに好きなら飼えばいいじゃない」

「ご尤もな質問だ。アリサは直球で核心を突いてくる。俺だって飼えるものならとつくに飼っているし、下手したら親に黙って飼うだろう。だが、出来ないんだ。」

「いやあ、そうしたいのは山々だけどさ、猫は飼わないようにしてるんだ」

「八高さん、猫好きなの？」

「好きが高じ過ぎて、なんにも身が入らなくなったことがあってさ。」

三日三晩飲まず食わずで猫飼育したんだよね」

「バカじゃないのアンタ!？」

「だからこうして自重してるんだって」

おかげで病院騒動になるほどだったけど、点滴で済んだのは幸運かもしれない。やっぱ人間、火傷をしないとその痛みは分からないからな。良い思い出という経験ということ。ま、生前での経験だけど

ね。親が犬好きで良かったよ。飼ってないけども。

「にしても、ここは良いなあ。すずかの家は猫天国だなあ。時々来ても?」

「いいですよ。でも、用事とかでない時がありますので、一度連絡してくださいね?」

「すずか、猫との遊び場にされてるわよ」

「まあまあ。おにいさんも悪い人じゃないから、気にしないよ?」

「おおありがとう! 良かったなココア、ミルク、ボス!」

「…………名前での猫か分かるって不思議ね」

「にやははは…………」

言いながらも、アリスも悪い気がしてないらしく、軽く朗らかに笑う。すずかも賛成なようで、柔和な表情を向けている。今の俺が中学生とはいえ、なにこの幸せ空間。一応同意の上だから警察さんの世話にはならないはず…………あれ、なんか言い訳染みてるぞ。ある程度は自重だ自重。

しかしだが、ああ、頭と両肩の重みがかなり幸せええ。しかも匂いもいいから、たまらない…………腕に触れられるだけの範囲で、この三匹をわしゃわしゃと撫で練り回す。やわらかあい。この温度は俺のものだ。俺だけのものなんだ…………!

「…………」

「…………つ!」

瞬間、和やかな空気が張りついた。糸の張ったような、言葉にしづらい感覚が身体を通り抜ける。これは——ジュエルシードだ。つておい、この近くでか? 冗談きついつて…………

「ど、どうしたのおにいさん? 怖い顔して」

「なのはもなに変な顔してるのよ」

「あ、ああいやなんでも。猫に肩マッサージしてもらおう妄想してた」  
「なんでそれで真顔になるのよ」

「猫の大きさを考えていたんだが、やっぱり肩に乗ってもらおうくらいがベストだなんて、今結論が出ただけさ。人くらいだと肉球はともかく、爪が痛そうだし」

「多分大丈夫とは思いますがけど…トラみたいなものと思えば」

「トラくらいだと、むしろ背中揉んでほしいと思ってる」

「あ、確かに」

「さすが。変な話題に乗らない」

怪訝にしていたはずかとアリサだが、割と本気で頭の隅で考えていた話題によって、注意を逸らせる。アリサ、今のって言うほど変な話題じゃないと思うぞ。

隣で、なにか思い立ったようになのはの近くにはいたユーノがさつとテーブルから飛び降りて木々の並ぶ空間へ駆けて行く。…なるほど、そういうことね。

「八高さん。行きましよう」

「だな。俺が話つくるから、てきとうに合わせてくれ」

【分かりました】

「? どうしたのおにいさん?」

「ユーノがどっか行ったから、ちよつと探してくる。なのはも手伝ってくれるか?」

「は、はい」

「アタシたちも手伝う?」

「大丈夫大丈夫。ペット探しにあまり人手はいらんだろ。それに、ユーノ見つけるのにちよつとしたコツがあるから」

「コツ?」

「じゃ、じゃあ行って来るね!」

危ねっ、変なこと口走りかけたわ。なのはのフォローでどうかはなったぞ。内心緊張しながらも、癖程度に考えているのだろう、二人はそんなに疑問にすることもなく呆然と俺たちを見送った。ああそうだ、木々に入る前に一応言っておこう。

「そうですか」

「なんですか?」

「面白いもの見せるから、アリサと一緒に猫を家に入れて待っていてくれ!」

「なに見せる気?」

「内緒だ！ いいから待っててくれ！」

なにがあるか分からんからな。念の為に避難させておこう。一応の納得はしてくれたらしく、二人はせつせと猫と一緒に屋敷に戻っていく。抱えると思っていたからちよつと予想外だったから、家で待つという言葉を加えて良かったぜ……

——よし、大丈夫そうだな。見送ってから、俺はなのはの背中が微かに見えた木々の奥に振り返る。

「……………ええつと、ユーノ君…これは？」

よく聞いてくれたなのは。俺も気になっていたところだ。可愛いと言えば可愛い、これはちよつと純粋に可愛いというより、なんと、どうか、言葉が出て来なかった。一つのモンスター映画を見てるような気分になって、正直軽く怖い。

ちなみにだが、今俺たちがいる一帯と、すずかたちの家との時間進行をずらす魔法の結界をユーノが敷いているから、封印も気にせず行える。流石魔法、なんでもありだな。

「……恐らく、あの猫の「大きくなりたいたい」という願いが、正しく叶えられたんだと思う」

「見た感じ害は無さそうなのがまた……」

見たまま以上を語れないが、なんか巨大な黒猫がそこにいた。

(猫だけ)本人からは敵意や害意のようなものはなく、むしろ散歩でもするような気軽さで、どしんどしんと歩を進めている。挨拶がてらにこつちを見て鳴くが、ちよつとした地鳴りのように低く唸りを上げていて。こんな猫じゃないわ、大きくなった哺乳類よ！ だったら愛でればいいだろ！ と自己完結したところで、

「背中に乗ってみたいが、放置するのもアレだからちやちよつと封印するか」

「ですね。レイジングハ——」

彼女がその名前を呼んだと同時に、俺たちの後方から飛来した——閃光の光弾。その矛先は、巨大化したチーノ(今名付けた)へと着弾する。痛みに呻くように、チーノはみやあと声を響かせる。まさかと

は思うがあの光……

『新たな魔導師じゃな』

「やっぱり魔法の光か……」

『恐らくじやが、貴台もよく知る者の魔法じゃ』

「俺の知っている魔導師なんかいるかよ……今はそんなことより」

疑問は止まないが、今解決するべきはそこじゃないな。

今のがなんの魔法かは知らないが、雷撃とも思える光弾は明確にチーノを攻撃した。なんの真似かは知らないが、動物を労われない人間がいるとは……酷い真似しやがる。そんな奴は猫に蹴られてしまえ。

「——レイジングハート、お願い！」

「——開け、アヴァロン・ブルー！」

恐らくだが、あの一撃で終わると思えない。また来るはずだ。一撃で倒れないなら、数を重ねるか、強い一撃を放つ——俺ならそうする。

予感に駆られて、俺となのは同時にバリアジャケットに身を包む。横眼の端で、流星群のように雷光の矢が幾数に放たれている。即座に地を蹴り、チーノの大きな背に乗りながら襲い来る光弾に手を翳す。

『Wide area, Protection』

「シリウス！」

広域に広がったなのはの防御魔法で防ぎながら、俺は降り注ぐ光弾をガンブレイドの銃口から射ち出た蒼い光とぶつけさせ相殺させる。参ったな、いくつか相殺出来たが、数個は俺の魔法をそのまま突き破りやがった……どうやら相手は俺より格上だな。うわ、泣きてえ……なに？ 魔導師ってのは男の適正能力が低いか？

「うおおー！」

「きやあつー！」

なんて馬鹿を考えている傍で、俺の撃ち漏らした光が、チーノの足首で爆ぜる。軸を攻撃されたんだ。当然、その巨体のバランスは重々しく崩れる。

予測の範囲内ということもあって、倒れた巨体に巻き込まれること

も無く、俺となのははどうかに着地する。 ……無抵抗の猫を攻撃するとか。えげつないことしやがる。

「……なつてないな。ロリに限らず、動物にすら優しく出来ない奴は感心しないな」

「あの、八高さん…？」

「あ、いやなんでもない！ 前半のは聞き流して！ ……とにかくだ。本気で殴ってやるから出てこい」

今の俺は、割と不機嫌だぞ。ロリが愛や好きで語れない立ち位置に  
いるだけであつて、俺は猫を愛している。発情期にうるさくなるとこ  
ろだつて我慢出来る。そんな猫を攻撃した。男なら八つ裂き、女性な  
らビンタ、ロリなら叱責だ。一応言うが、これでも譲歩した方だぞ。  
男相手ならこの八高輪、容赦せん！

と、息巻いていたのも数秒の間だけだつた。目の前に降り立った、  
漆黒のマントを覆った金髪の少女が俺たちを見ている。——反応  
を見る限り、なのは知らないだろうけど、少なくとも俺は向かい合っ  
たその顔を知っている。

「魔導師が二人…：ロストロギアの探索者か…：」

なのはとは違つた、両側を結んだ伸びた金色の髪。なのはとは異  
なつた、黒い杖状のデバイス。その表情は、以前画像検索で見たこと  
のある印象と少し違うが、間違えるはずがない。

「…：そうだつたな。もう一人いたな」

アヴァロンの言うことはあながち間違いでもない。確かに、俺の知  
る魔導師だつた。もつと言え、魔法少女だ。この世界に馴染み過ぎ  
て完全に失念していた。

その瞳や表情こそ憂いや鬩りに満ちているが、彼女は紛れもなく—  
——フェイト・テスタロッサだつた。

## First Impact

「なに——フェイト！ フェイトじゃないか！ この眼で見られるとは、俺はなんと果報な紳士か！ サンキュージーザス！」

——と素直に踊り狂えれば良かったが、どうにもそうならなかった。感動しているのも事実だが、フェイトの鬨りのある顔が嫌に脳裏に張り付いてしまう。見た感じ、なのはと同じくらいの少女が、どんな人生送ったらそんな顔するんだよ……痛々しくて見てられん。

そもそもだ。ネットの画像で見た限りだが、彼女は控えめな笑顔を浮かべていた、ちようどずずか寄りの性格をした娘だと思っていたから、闇を抱えているような子だなんてまるで想像もしていなかった。ついでに言うともう一つ分かったことがある。現状の彼女は、俺たちの味方では無いらしい。ユーノが警戒しているところを見ると、知らない魔導師という関係のようだ。対峙したことで、チーノに関する怒りは無くなっていった。

「口振り聞くと、そっちもジュエルシード集めてるらしいな。目的はなんだ？」

「……………言う必要は無い。言っても意味が無い」

「——マジか」

高速移動したフェイトは、杖状のデバイスをがこんと稼働させ、先端部から歪に揺れる刃が形を成した。あれはどう見ても、大鎌だ。構えこそ小さいが、間違いなくその気の体勢だった。

たん、と蹴られた地面から一瞬にして、俺の目の前に姿勢を低くして鎌を振りかぶっている。狙いは、足か！ 拳動が手慣れ過ぎている、明らかに俺たちと戦闘での場数が違う！

「八高さん！」

「じよいやあああああつ！」

大袈裟に後ろに飛び跳ねて、全力で回避する。まさか躊躇無く足狙って来るとか……

「アルフ！」

「任された!」

「なに!? 狼だ——ごはあ!」

どこから現れたのか、灼熱を思わせる色調を帯びた狼(なのか狐なのか分からない動物)が、その巨体を奔る弾丸のように俺に激突する。受けたことは無いが、アメフト選手のタックル以上はあるんじゃないかと思う。

「八高さん!」

「余所見をする余裕があるの?」

「くっ……!」

狼によつて身体を連れて行かれる中、レイジングハートで大鎌の一振りを防いだなのはが視界から遠ざかっていく。魔力量なら俺より上なのはだが、やはり訓練と戦闘で得られる経験の差はまるで違う。半歩間違えば、俺たちの命は無いと思つて良いかもしれない。

「ユーノ、なのはを頼む!」

「分かりました!」

それだけを伝えてから、俺は狼と一戦を交えるだろう、木々の奥へと分断されてる。こつちをどうにかして、早くなのはたちのところに戻らないと……!」

「厄介なデバイス持つてるから警戒していたけど、大した腕じゃないね」

こ、この狼め……言つてくれるな。でも確かに、俺はなのはやフェイトと比較すれば劣るだろうけどよ。

分断されたこともそうだが、個人的にはそれ以上の厄介が起きていた。声を聞くにこの狼、それなりの年齢だろう女性らしい。俺が女性相手にガンブレイドを振れると思うなよ。まず撃てる気もしない。なのはとの訓練の時に撃つたけど、アレはちよつと俺の方がもたない。大袈裟に言えば気が狂いそうになる。

「……変な奴だね。そのデバイスを向けようとすらしらない。あんた何者だい?」

「何者だいと聞かれたら、答えてあげるが世の情け! 幼女のハイ



エースを防ぐ為、ロリの未来を守る為、愛と真実の紳士を貫く、ラブリーチャーミーな中学生！ 八高、輪！ 銀河を駆けたい俺——」

「ええい、ごちやごちやと！」

「うおっ！」

狼は再び弾丸となつて、鈍色を見せた牙をもつて襲い来る。訓練してて良かった。見慣れたなのはデイバインシューター程の速度で疾駆する狼の恐ろしさと言つたら……不意打ちじゃなければ、こうして回避も出来るさ。

しかし、避けていなかったことを考えてぞつとした。狼が放つた牙が、俺がいた辺りの樹の肌を軽く抉っている。俺が思つてるよりも遠慮なく来たもんだな……折角人が覚えた長台詞を……！ 覚えるの苦労したんだぞ？！

「人が名乗り口上してる途中で攻撃するとか危ないじゃねえか！

とりあえず待つのが原則だろう！？」

「なんの原則よ!? ふざけてからに！」

「……参つたな。俺は戦う気なんて更々無いんだが」

「余裕だね。それじゃあ、こつちも本気でやってやろうじやないの！」

それは誤解だ。出来るだけ冷静でいたいから、余裕ぶつっているだけだ。生前からそうだったけど、案外これって効果的なんだよな。例えば、感情を表にしやすい人間とか気の短い人間には、少なからず癪に障る態度なんだよなこれ。少なくとも、余裕を見せているからな。琴線に触れた狼も、激情家の類のようだ。俺もロリに手出された現場を見たらそうなるだろうけど。

——が、呆気なく俺の頭の中を真っ白にされた。そこにいるはずの狼は手足を伸ばし、その体毛と同じ髪をし、人間の姿そのままに変化した。年齢で言えばフェイトより年上、下手したら生前の俺くらいじゃないか？ なんにしても、どうしても印象に入ってしまうのが「おっばい！ おっばいじゃないか！」という下品極まりない一言。くそつ、男ゆえの本能がたわわな双丘に視線を追わせてしまう……それと重なって、肌を出した印象の衣服のせいで、眼のやり場に困る。

個人的にだけど、戦闘するしない以前の問題を突きつけられてしまっていた。

今気付いたんだが、なんかこの人、頭の上に獣耳が付いている。つくりものかと考えていたら、ぴこつと一度、自然に揺れる。あれ本物なのか!? 凄く触<sup>モウ</sup>りたいんだが、人の姿してるから事案<sup>セクハラ</sup>発生にならないかな……? なるだろうなあ……俺の姿が幼いから問題無いだろとかそういうことじゃなくて、これは意識の問題だ。オーケー?

「——ああもう。そんな姿されたら、余計攻撃出来んだろう」

「へえ。あんた、フェミニストなんだね」

「紳士だからな。もう一回断るが、俺の方は戦う気は無いぞ。ただジュエルシードを集めているだけだ」

「集めてどうするのさ」

「あんな危ないもんを回収する。それだけさ。——で、そつちもジュエルシード集めらしいが、俺たちとは違う、強い理由があるらしいな」

「……意外に勘の鋭い。本当に中学生のお子様?」

「まあな。更に勘で言わせてもらおうと、集める理由は大事な人の為とか、無くしたなにかの為、と予想しているが」

「……………」

願いが叶う石なんだ。俺たちも大概真面目だが、向こうは既に眉間の皺が寄るほどの表情をしている。動機の強さで言えば、向こうのが明確で強いのかも知れない。

「アレク」

「アタシはアルフよ! 真顔で間違えなくてくれる!」

「す、すまん間違えた。だが、意味も無く悪人じゃない奴と戦う気にもなれなくてな。ていうか女性とは戦わん。話次第じゃ、俺たちも協力するぞ」

本心から言った言葉だ。健気にもというか、フェイトとアルフからはどうにも悪党らしさが無い。ただなんと言えればいいか、必死だなどという切迫感を感じる。例えば、アルフが本当に悪党なら、今以上に手段を選ばずに俺を倒そうとするはずだ。本気で戦うと言って人の姿

に変身（或いは元に戻ったか）して相手になろうとしているんだ。フェイトにしてもそうだったが、チーノにした攻撃は酷く加減されている。

結論。二人の考え方を概ね読むならこうだろう。二人の目的もジュエルシード。けど、被害を広げる気は無いし、必要以上に事を荒げたくない。要は俺たちと一緒に。中身が違うだけ。……きっと相容れられない覚悟で、手を差し伸べる。

「……うるさい！ あんたも、あいつと同じ口車をするか！」

「あいつ？」

「フェイトは気付いてないかもしれないし、その馬鹿親はきっと気付いている。きっと気付いている上で、口車に乗せられている……！」

「ちよつと待て。話が見えないぞ。一体どういうことだ？」

「人の善いフリを——するなあああああ！」

輪たちと変わって、なのはとフェイトはは上空にて交差していた。ユーノ自身は封印となのはの支援に選択を悩ませたが、最終的に後者を選択した。ユーノは万一に備えて、視界内になのはを収めるように巨躯の猫の背に乗っていた。

仮に、自分がジュエルシードを封印したとて、戦闘向きじゃない自分が手にすれば、彼女は即座に自分に標的を映すだろう。そうなれば、なのはは自分とジュエルシードを守るという負担を負って戦うことになる。核心だけを言えば、ジュエルシードを守る確率の高い方を選んだだけのことである。尤も、どう選択しても、相手が実力者に対して、万全でないユーノと魔導師としてまだ未熟なのはだからこそのもだった。

世辞にも拮抗と呼べる状態ですらない状態。むしろ、フェイトはなのは一人だけを相手にしている。はずなのに、ユーノの拘束魔法を回避し、なのはを圧倒していた。フェイトは明らかに自分のデバイスを

よく会釈し、自分の魔法を理解し、自分の能力を把握している。「魔導師との戦闘」を想定していなかったのはにとっては、ダメージを受けないように後手に回ることでも精一杯だった。

「……っ！ あの光、まさか……！」

「仲間の方を警戒していたけど、大したこと無かったみたいだね」

森の一辺で、魔力による爆発が見えた。その中に、なのはが見慣れた彼が放つ蒼い光が少しも見えなかった。つまり、向こうで戦闘が起きている。そして、フェイトの口振りからするにもう……

なのはにとってはどうしても、一つ心配してしまう部分が残っていた。輪はなのはとの訓練の際にも「女性どころか少女を攻撃するとか有り得ない」と口酸っぱく言っていたから、アルフに攻撃をしていないだろうという懸念があった。一声しか聞こえなかったけど、明らかに女声を発していたから、それが一際に不安を煽ってしまう。

「あとは、あなただけ」

「……っ！」

雲も少ない空の中、静かに息を吸った黒いあの子は、周囲にばちつと弾ける雷光をいくつも待機させている。少しだけ戦って気付いた。訓練の時に明らかに加減していた輪とは違う。彼女は本気で来ている。

「フォトンランサー、連撃」

『Photon lancer, Full outfire』

「っ！ デイバインシューター！」

『Devine shooter』

「ユーノ君！ 守って！」

「分かってる！」

そして、躊躇無く停滞させていた金色の閃光を撃ち放つ。

——瞬間、気が付いた。ううん、ひよつとしたら、彼女と向かい合った時から勘付いていたのかもしれない。なのはは、勝てないって。あの程度訓練して来たから、理由というのものはつきりと挙げられる。

第一に、再三に挙げられている実践経験の差。ジュエルシードの封印はしているもの、魔導師同士での戦闘というものは、輪の遠慮した

訓練以外ではまったくの初めてだった。対して、フェイトは輪と違って遠慮もしていないし、動きがまったくの別者。

そして、今似た系統の魔法を撃ち出したけど、その数からも明確になっている。フェイトは十近く、なのはは五個が精々だった。

「君には悪いけど——」

ユーノの意識が、なのはに向けられた瞬間だった。完全に油断した瞬間を、狙われてしまっていた。

紫に象られた鎖が、ユーノの肢体に巻き付かれる。嚴重に巻かれているせいで、ユーノが暴れたところで緩みもしない。口元も縛られたユーノは、なのはにすべきが魔法を封じられてしまっていた。

「…ジュエルシードは、僕たちが貰っていく」

「ユーノ君！」

ユーノの隣に降り立った黒衣の少年は、物憂げにそう説いた。

そして、ユーノを魔法を封じられたことで動揺したなのはは、周囲に展開していた魔法を放たせることなく、フェイトが撃ち出した雷光を直撃させてしまう。

「きゃあああああ！」

心配事していたことも重なって、動揺が決定打となって防御魔法を敷くことが出来なかった。そのままなのはは、撃ち落とされた鳥同然に落下していく。

なのはは戦闘に集中出来なかった要因は、輪やユーノに対しての動揺も大きかったが、特に気にかかっていたものが、眼の前の彼女の存在だった。状況が状況だから笑わないのは仕方ないとしても、とつても寂しそうなその顔は、脳裏に残ってしまう。

——落下していく中、なのはは偶然捉えていた。自分を攻撃したあの子の口元が動いていたような……陰っている表情のせいで、謝っているようにしか映らなかった。

そうして、迷子の顔をしたあの子の姿を最後に、なのはの意識は切り離された。

「案外どうってこと無かったね。フェイトの方は？」

「こつちも問題無かったよ」

結果は滞りなかったフェイトとアルフは、内心で安堵もしていた。話に聞いていた通り、自分たち以外にも魔導師が存在していたから用心していたけど、用心どころか予想していた範囲内で事が運べたことが、なによりの成果だった。とはいえ、聞いていた話と違うのは、もう一人少年がいるということだけだったが、なんら問題は無かった。尤も、アルフからすれば明らかに手加減された上での勝利である以上、ストレスも殊更に溜まっているが。

「おお、ジュエルシードも手に入ったことだし、アタシたちも行くとするかね」

「そうだね……」

「にしても、意外だね。まさかあんたから顔見せるなんてさ」

アルフはおろか、フェイトが驚きに顔をしかめるのも無理は無かった。フェイト自身にしても、彼とはここで逢ったことは一度しかないのだから。自分たちが集まるあの場所でしか顔を見せない間柄。そう割り切っていたからこそ、その姿を見せても半信半疑だった。

「こつちの回収が済んだからね。それに魔導師がいるようだから、手を貸そうとも思っていたけど、杞憂だったらしい」

「杞憂どころか肩透かしだね。紳士気取って戦おうともしないしさ。もしかして、フェイトのところも？」

「……うん」

「……二人に一応確認するけど、その子をどうするつもりだい？」

見た目の話をすれば、少年はなのはやフェイトと同じくらいの年をしている。にも関わらず、フェイトと似た眼をし、雰囲気も近い黒衣を纏い、年齢不相応な郷愁さすら感じさせている。少年は、ユーノを拘束していた鎖の魔法を解き、視線をなほに移す。

「私たちの目的は、ジュエルシードの探索と収集。魔導師を殺せなんて、かあさんから言われてない」

「ということだから、アタシもその気は無し。あのガキンチョもね。なに、この子が気になる？」

「……分らない。けど、この女の子を知っている気がする」

「もしかして、記憶に関すること？」

「……もしかしたら、この子は僕の手がかりかもしれない」

少年にとつて、なのははどう映ったのだろうか。少年は、若干腫れ物に触れるような遠慮した表情を浮かべている。しかし、どこか寂しそうにも見える。

「……いや、止めておこう。彼女とはどんな関係かも思い出せないんだ。仲の良い友達だったか、或いは険悪な敵対関係だったのかもわからない」

「そう……」

「そういうことだ。僕たちの目的は済んだから、警戒しなくていい……」

言われたところで、ユーノは三人への警戒を解こうとはしなかった。ユーノからすれば、突然襲い掛かった挙句に、ジュエルシードを奪われた——いわば、敵対すべき対象なのだ。

「君たちは、なんの目的でジュエルシードを集めているんだ？」

「さつきも言ったよ。言っても意味が無い。なんにも変わらない……」

「行こうフェイト。こいつらと話はしない方がいい。で、あんたはどうするんだい、記憶無し」

「先に行つてほしい。すぐに追い付くから」

「はいはい分かったよ。それじゃあね」

それだけを言い残して、二つの影はさっと上空に飛び立ち、吸い込まれるように青い空へと溶けて行った。

異空間のような空気はまだ残っていた。黒衣の少年は、視線をなのはからユーノへと移す。

ユーノにとつては僅かながら、好転しだした事態だった。少なからず、自分たちを襲っていた魔導士たちが二人も退いたことが大きかったが、それでも油断を緩めなかった。眼の前にはまだ一人、黒衣の少年がいるからだった。口惜しいことに、彼はなのはや輪ほどの戦闘力を有していない。フェイトとは違った、底知れぬものを感じる。ユーノは半ば睨みつけるように、少年を見据える。

「なにかをする気は無いよ。ただ、その女の子に伝えてほしいだけだ」

「伝える?」

「僕の名前に——クロノ・ハーヴェイという名前に、心当たりは無いかなということ——」



揃いし仮面たちの願う先は、徒花か成就か――

俺が倒れている間に起こったあらましは、ユーノから聞いた。なんでも、突然現れたもう一人の魔導士によつて、ジユエルシードを奪われたという。で、なのははフェイトの攻撃魔法によつて倒れ、それも自分の落ち度だと謝っていた。すずかやアリサの反応を見るに、巨大なチーノを見たような感想も無いし、当人もそこでくつろいで寝ているから、まあ解決はしていると言ったところか。

「だ、大丈夫ですかおにいさん？」

「…俺は平気だよ。こつちはいいから、なのはを頼むよ」

「でも……」

「すずか、平気って言ってるんだから、なのはの様子見に行きましよう。……しばらく離れるけど、なにかあったらすぐ呼んでよね」

「おう。やっぱアリサは優しいな」

「ば、バカ言っていないで早く休みなさいよバカ！」

なんでも、俺となのははすずかたちに介抱されたらしい。なにが起こったのか分からない二人からしたら、「狼に襲われたの？」としか尋ねることが出来なかった。俺への質問なら大体合っているけど、言っても信じてくれないから言っただけじゃない。でもこんな時に「よく覚えていない。なにかに襲われたのは覚えている」という単語は便利だ。

……特にすずかは素直だから、嘔吐くの気が引けたけど。

さて、三秒以内に二回バカと言ったアリサと、その様子を苦笑を浮かべて見ているすずかは、なのはの寝ている別の寝室へ行く。……よし、もう喋つても大丈夫だろう。テーブル上にいるユーノ（一瞬猫と見間違えたぞ）に声を掛けようとしたが、先に口を開かれてしまう。

「すみません……僕のサポートが至らなかつたばかりに……」

「なに言ってる。ユーノに落ち度は無いさ。単純に向こうのが上だつただけさ」

……俺全然戦ってないんだけどね。戦った時の話は置いて、女

性に刃向けると正気の沙汰じゃないからな。訓練の時にも、なのはに攻撃魔法撃った時とかの罪悪感がマツハだからな？ 敢えてもう一度言うが、大袈裟に言えば気が狂いそうになるほどだ。

「……それで、なのはの怪我は？」

「レイジングハートが自動で防御魔法を敷いていたから、大事には至っていないですよ」

「そうか……」

「どちらかと言うと、八高さんの方が怪我は酷いですよ」

「あ、やっぱりか……いっっちちち……」

すずかたちの手前では見栄張っていたが、殴られたアバラが痛すぎる。これ折れてないか心配なんだが……骨折とかしたことないから、とにかく痛いということしか分からん。

「ああそうだユーノ、前から思ってたんだが、一遍に言っていたのか？」

「なんですか？」

「敬語は止してくれ。他人行儀は止めてくれ。せめて、俺となのはみたいな軽い距離感で喋らんか？」

「でも」

「俺たちもう他人じゃないだろ？ 居候してる俺が家族扱いされてるんだ。お前も家族みたいなもんだろ」

なのはに限らず、高町家は俺をなんだか我が子扱いしている。遠慮もなく色々言ってくれるのは感心があるからなんだよな。よく聞くだろ、好きの反対は嫌いじゃなくて無関心だって。その通りだと思う。要は、意識を向けられるか向けられないかの差だ。この差は大きいなんてもんじゃない。

「………八高さん？」

「ん、いやなんでもない。そうだ、もう一つはつきりさせたいんだが」

おっといけない、嫌なことを思い出しちゃった。家族扱いされる、ね……俺にとっても凄い嬉しいんだぞ。隠しているとはいえ、ロリコンを普通扱いされるって有り難い。みんな、高町家は良い所だぞ

おお！ 早く戻って来おおい！

……今はそんな月の住人みたいな感想を言っている場合じゃない。前からユーノには聞きたいことがあったんだよな。ちようどいい機会だ。ここではつきりさせておこう。事案発生しかねない一言だが、白黒は付けておきたい。

「例えばだが、ユーノもアルフみたいに——いや言われてもよく分からんか。とにかく、そのフェレットの姿から人になれたりするか？」

「はい。出来ますけど、それが？」

「その時の姿ってどうなってる？ 少年？ 少女？」

返答次第じゃ、仕置きも視野に入れよう。自分でも気味が悪くなるような優しい笑みを、現状性別不明のフェレットに向ける。

……そこは、虚数と次元の狭間で漂う、一つの世界の中。世界と呼ぶにはあまりに小さく、か細いもの。——敢えて呼ぶなら、庭園と呼ぶべきか。

漂う世界の外には、稲光が一度落ちる。斑がかった配色を流れる庭園は、行く先も無く流れているよう。——凶らずか否か、住まう主の心象を映しているように、庭園は黒く寂びた空気に溢れている。

「……そう、確かに受け取ったわ」

庭園の主たるプレシア・テストロッサは、娘のフェイトからの報告を聞きながら、クロノの持つジュエルシードを六つ受け取る。敵の魔導師がいるにしても上々の成果だろう。……しかし、プレシアからは嬉々とした発言も笑顔も生まれなかった。その青い宝石を受け取る前と同じ——もう少し遡るなら、見慣れた険しい表情を崩さない切迫した顔を保っている。尤も、娘に手をあげない分には成果として受け取っていた。

「けどまだ足りないわ。ジュエルシードは21で全てよ。これだけ

じやあ、まだ足りない。フエイト、アルフ、クロノ。すぐに行きなさい」

「そ、そんな……！ こっちは碌に休んでもいないのに、またすぐに回収なんて。少しくらい」

「少しくらいなに？ その少しの間に、向こうの魔導師見習いがいくつ集められると思う？ いい？ 私には時間が無いの。今すぐ準備なさい！」

「……………ッ！」

「いいよアルフ。私は大丈夫だから」

「でも……………」

「……………僕から一つ、提言させて下さい」

今まで口を閉ざしていたクロノ・ハーヴェイは、小さく手が挙がる。控えめな態度とは異なり、彼はほとんど物怖じもしていない語調で説く。

「相手は今動けない状態です。一日ほどは動けないと思います。だから、こちらでもその間に休息が必要ですよ」

「貴方の意見は聞いていないわ。私が言っているのは、一刻でも早く、誰からの遅れも取られずに回収しなさいと言っているのよ」

「しかし……………」

「はあーい、ストップ」

一触即発となりかけた空気の中、場に合わない間延びした声が滑つて入り込む。

その男は、運動を控えている感じのやや痩身ながら中背の整った体格をしているが、容姿の点ではひどく中性的であり、聞いて辛うじて男と分かる色気を孕んだ声をしている。年齢で判断するなら、恐らくアルフと並べられるだろう整ったもの。

男はプレシアとクロノたちの間に入り、大袈裟に二方向に手の平を向ける。

「まあまあプレシアさん。ここはクロノの言う通りにしましょう」

「……………貴方まで世迷言を言う気？」

「大丈夫。派手な次元震も起きていないから、管理局に気付かれは

しないですって。それに、与えるのはたったの一日。素養があつても、向こうは普通の人間。塾や友達との時間に追われながら、魔法の訓練やジュエルシード探しをするのは困難なもんですよ？ 痛手を負ったなら尚更。まだ焦るほどじゃありません」

「……………」

「それに、駒を上手く扱うなら動かさないことも重要ですからね」

「……………好きにきなさい。フェイト同様、貴方も感に障る人間ね」

「やれやれ、怖い人だ。でも心外ですね。まるでオレという存在がそんなに信用出来ないって聞こえるけど？」

「アルハザードから来た魔導師——言われてすぐ鵜呑みに出来ると？」

「ですよ。おまけに、当のオレ自身にも然とした記憶は無し。だけど、オレを解してアルハザードの知識を得る為に、ジュエルシード集める。なんともまあ健気なことで。プレシアさん、あなたはそうまでして——」

「…………その軽い口を今すぐに閉じなさい。セイジ・フォレスト。貴方は生かされていることを自覚なさい」

「おお怖い怖い。それでは良い暇いとまを、プレシア・テストアロッサ」

言葉と裏腹に、プレシアの怒りすら楽しんでるように男はひらりと手を振る。歯をぎりりと擦らせてから、一室の奥へと姿を消す。

……………まるで、鉛を着せられたような緊張感が無くなる。男の出現が起因か、プレシアが場から離れたのが原因か、どちらにしても残った人間は、その空気の変化に一つ息を溢した。

「いやあ、気の立った淑女を嗜める難しさと来たら。まあそういう訳なので、みなさんも休める時に休めないと身が保ちませんよ？」

「…………ありがとうございます」

「いえいえ。さつきは駒と口にして申し訳ない。ああでも言わないと、あなたの母親は聞き入れてくれないでしょうからねえ」

「…………ほら行くよフェイト。アタシはこれ以上こいつと話したくない」

「参ったねえ。母親は良いとしても、使い魔にまで嫌われてるのは

少し心苦しいですね」

「人を逆撫でするようなその話し方が気に入らないんだ。胡散臭いんだよ、あんたは」

「やれやれ……」

「おー、おかえりー！ フェイト、アルフ、クロノ、どうだったすかー？」

奥からそそっかしく走ってきたのは、白いレースのカチューシャで髪を留めているのが印象的な少女だった。上品に着飾られた人形のような衣服と、宝石のような翠の瞳が殊更に彼女の気品を飾っていたもの、極めて市井な口調と手を振って出迎える挙動が、少し変わった親近感を沸かせた。年齢の上ではフェイトよりやや上だが、挙動の幼さからかフェイト自身も自然対等に話せている。

フェイトに限らずアルフも気を許している彼女。その決定的な要因は、その底抜けの明るさと、それに比例して心情が表に出やすい性格をしているからだろう。そんな彼女に対して、フェイトたちも表情を綻ばせる。

「ジュエルシードが六つ。私たちが三つで、クロノも三つ」

「確か全部で21個だから……三分の一程は集まったんすよね？」

「そうだね……少し予定とは違ったけど、順調だよ」

「おー、それは良いっすねえ。でも、フェイトとクロノはもう少し笑うべきっすよ。嬉しい時や楽しい時に笑わないで、いつ笑うんすか？」

「それはそうだけど……かあさんが笑っていないから」

「……僕はまだ、目的を達していないから」

「あーもう違うっすよお！ 二人はアルフやあんちゃんを見習うべきっすよー！」

「うんうん。その胡散臭い兄と違って、ナツミは善い子だねえ」

「ちよ、ちよっと止めるっす！ ジブンを子ども扱いしないでほしいっすー！」

妹を愛でるように、アルフはナツミと呼ばれた少女の頭を撫でる。言い切ると、先ほどの険悪な空気こそが茶飯事な空間だからこそ、

この手の空気が流れることが、フェイトやアルフにとっての一つの安らぎになる。それはクロノにも当て嵌まり、無自覚ながらもふっと頬を緩めている。

「いつになったら、S2Uを返してくれるんですか？」

「今はまだ、とだけ。機能停止している以上メンテナンスが必要ですよ」

「メンテナンスくらいなら僕が…」

「それが無理なんですよ。どうやらこのS2U、フェイトの持つデバイスとは違った構造になっているんですよ。従来のものとは仕組みが違います」

「な、なんだって？」

「それじゃあ、どうやって機能を…？」

「だからオレが直しているんですよ。アルハザードにいた記憶が残っているんでしょう、現状は滞りなく進めているのでご心配なく」  
本来クロノ・ハーヴェイがもつべきステッキは、セイジが保管している。故に、今クロノが使っているデバイスのというのは、管理局員が使うような、量産されたタイプに手を加えたものとなっている。

——クロノ・ハーヴェイには、記憶が無い。残っているのは、自分の名前と魔導師であるという、微かな名残だけ。彼が眼を覚ました時には、既にこの男と行動を共にし、記憶を取り戻すための協力をしようともで言った。……クロノはこの時、彼がどこか苦々しい表情を見せていたことが印章に残っているが、その真相はまだ知らない。

基本的にセイジという男は不可解だった。剽軽ではあるが、基本的に紳士的で優しい人間である。にも関わらず、なにかが怪しい。プレシアと違って、誰にも暴力を振ろうともしないし、話の融通も利く。妹に甘いのは仕方ないにしても、記憶が無いことからクロノに対して妙に甘かった。

フェイトは薄らにしている程度だが、アルフとプレシアは然程彼を信用してはいなかった。セイジという男はストレートなナツミと違って、一定以上の自分を見せて来ない。だから胡散臭かった。クロノにとっても信用は足りない人物にしても、記憶の無い自分にとって

の手がかりの一つである以上、無関係を保つことは困難であった。プレシアも同様に、彼と無関係を保つことは出来ない。

しかし、ナツミはというとそうでもない。基本的に呑気な平和主義者の為に、喧嘩や暗いことも嫌いで、ほぼ日常的に娘に鞭を振るうプレシアが苦手にしても「その内フェイトたちの努力を分かってくれるはず」と希望的観測を抱いている。基本的に空気が読めない、という点がプラスにもマイナスにも働くことがあるにせよ、彼女の素直な人格と言うのは重宝されている。

「それじゃあ、また明日にしましょうか? sweet  
dreams。」

——これが、テストロツサ一味とフォレスト兄妹の歪な関係である。

「ねえあんちゃん」

「どうしたんですか?」

「あんちゃんのその口調、嫌いっす」

「はあ………で、どうした?」

ある一室。フォレスト兄妹は、それぞれに別のベッドで就寝していた。眠れないからか、意識のはつきりしているナツミの声はセイジにき

んと届く。

「いつまでもこんなこと続けるんすか?」

「さてな。でももうすぐだ。オレの予定では、もうしばらくしたらオレたちは幸せになれるんだ」

「そうなんすか?」

「ああ。オレにとってもお前にとって、幸せな世界だ。なにも不安になることは無い」

セイジは、さつきまでフェイトたちにしてきたものとはまるで違う語調と声調を、ナツミに向けていた。砕けていて、ひどく穏やかな色。絵本でも読み聞かせるような、落ち着いた声音が、室内をゆつたりと流れる。



「でも心配すね。フェイトの話だと、もう一人魔導師がいたみたいすからね」

「ああ、イレギュラーの件か」

そう。セイジの懸念はそこにあつた。自分の知らないことが起こっている。それは恐怖でもあつた。大きさに関わらず、イレギュラーというものが起こすものを阻止しなくてはいけない。路傍にあるものが小石だろうと、吐き捨てられたガムだろうと、踏めば歩行になんらかの障害が生まれる。

「……………いや、まさかな」

一つの可能性を頭に浮かべたが、セイジは頭を振って否定した。こんな偶然が二度も起こつてなるものか。同じ奇跡がそう簡単に繰り返されるものか。感じた悪寒を忘れる為に、セイジは被っていたシーツを被り直す。溢した小声は、妹に聞こえることは無かつた。

「オレのデバイスは戦闘向きじゃないんだが……………直接見てみるか」

「ん？ あんちゃん、なにか言った？」

「いや別に。それより今は早く寝ろ。早く寝ないと、お前の嫌いなピーマンの妖怪が夢に出るぞ」

「あんちゃんお休みっ！」

口にして約三秒後、すぴーと力の抜けた寝息が立つ。素直なその姿に和んでいるのは、なにもテストタロツサたちだけじゃない。

セイジは、くすつと自然に微笑みながら、夢の中へと静かに沈んでいく。一つの不安を忘れる為に、来たる未来を想像しながら意識を潜ませる――

大体の真面目な人が口にする「きりの良いところ」は、イコール満足するところまでという意味だから、見る誰かが歯止めにならないと終わらない件

「た、ただいまー……」

特に合図もしていないのに、俺となのは声を合わせながら家の玄関を潜る。なのはの怪我が軽いから良いけど、俺の方がそれなりだからな。帰路の途中、店のガラスに映った自分の姿はまるで、公園でチャンバラてきたガキンチョみたいだった。ダメージ量で言えば、俺のHPは黄色に表示されているレベルでやばいけど。

「あら、遅かったわね——って、どうしたのその怪我!？」

「ああこれですか。ちょっと樹に登った拍子に落ちちゃって……」

……うーん、帰りながら思いついた口実にしても、嘘を言うのはやっぱり気分が良くないな。でもまあ、狼に襲われたと言っても信じてくれそうにないし、心配はかけたくないからなあ……魔法の世界にこれ以上関わらせると、なんか碌なこと起こらなさそうだし。幸いというか、俺となのはに遭ったことについては連絡はしていないらしい。内緒にしてもらったすずかとアリサには感謝しないとだな。

「本当に? どこも痛くない?」

「ほ、本当ですよ。今はピンピンしてますって」

「ふうん、八高くんって意外とそういう無茶するんだ。またどうして?」

「そこに猫がいたので」

「どこのアルピニストのよ。無理しないでよ。なのはが好きだからって、恰好は付けないでよね」

「まさかそんなことしない……え、今なんて言いました?」

「だから、好きな女の子前だからって、樹に登って恰好付けたんでしょ?」

「なに言ってるんすか!? そんな訳ないでしょう!」

マジで耳を疑ったぞ!? 確かになのは幼女可愛いけど、そういう対象じゃないぞ! 警察のお世話になるぞ! どんな超解釈したら、木登りがイコールアピールになるんだ!? ……ああいやでも、普通の男子に出来ないこととして俺凄いでアピールするのはある話だが、俺そういう時期とうに超えたしなあ。仮に今の俺がするとしたら、木登りは絶対しないな。 ……でも他に思い付かないな、どうしたものか。なのはも俺と同様に実際の現場に立ち会ったせいだろう、「にやは」と苦笑うだけだった。

「そう否定されると、それはそれで嫌ね。八高くん、うちの娘は可愛いくない?」

なにその質問。どう答えても俺が火だるまになるズルい質問なんですけど。はぐらかそうとしても、割とはつきり答えられる聞き方してるのが厄介だ。踏めば地雷、避ければ銃弾、これはそういう悪い質問です。みんなもこの手の質問して相手を困らせるなよ。

かといって、可愛くない訳がないという事実。煩惱のままを語るなら、一緒のお風呂に入りたいし、背中を流されたい。しかし、だがかしだ。俺は紳士を貫かねばならん。本能で動くだけなら野獣と一緒にだ。そこに理性と知性があるからこそ、俺たちは人間を名乗れるのだ。あれ、俺今良いこと言ったよな? でもなのはに背中を流されたいでもあるし…くっ、人類の夢はこんなにも遠いか…!

「…八高さん、顔がにやけてますけど」

「はッ!」

「もしかして、なのはでいやらしいこと考えた?」

「めめ、滅相もございません! なのはは可愛いですけど、そんなおいそれと手を出しちゃうまずいですって!」

駄目だ、この手の質問され慣れてないせいで、誤爆したことに気付いたのは言い終えた直後だった。なのはの返事も無いから、きつと俺と同じように視線を泳がせているのかもしれない。なんか気まずいから、猫のことを考えよう。 ……いかん、これも今は止めよう。今頬を緩ませたら、なに勘違いされるか分かったもんじゃやない。

「……………いい、妹が出来たみたいで、可愛いと思います」

「……………確かにね。八高くん、一人っ子だもんねえ」

あの、今の間はなんですか？ 心臓に悪いから止めて欲しいんですけど。

いかにも意味深な視線を向けられる。うぐつ、やはりこれ絶対はぐらかせないな。諦めよう。桃子さん、怒ってないかそうでないかよく分からない表情を浮かべないで下さい。あと恭也さん、こっち睨まないで下さい。真剣向けられたみたいで怖すぎます。

「ああもう、俺の話はいいですから！ とにかく、これからは無茶はしません本当ごめんなさいでした！」

「そうそう、それでいいの。でも本当意外ね。猫でそんな無茶しちゃうの？」

「八高さん、本当に猫好きだから。ビックリしたよ」

「へえ。それはちよつと見てみたいわね。ところで八高くんとなのはに聞きたいんだけどね」

———なんだか、一気に空気が変わった気がする。気のせいじゃない。その証拠に、少しだけ桃子さんの眼が細くなっているからな。なのはも気取ったのだろう、足を少し退かせる音が聞こえた。

「頼んでいた洋服の買い物は？」

さて、色々あつての翌日。世間一般においても連休が訪れたこの時期。高町家ではちよつとした家族旅行をしている。翠屋は営業中だが、店員たちに任せている。旅行と仰々しく言っただけど、細かく言えば日帰りの弾丸旅行だ。

メンバーをざっくり言えば、高町家となのはの友達、で月村家の関係者。その中で俺が混ざっていいのかが疑問になるが、桃子さんの厚意もあるので素直に甘えることにしよう。

さて、その旅行の中身というのが———温泉。ああそうさ、俺だつ

て男だ。ちよつとくらい変なこと考えても仕方ないと思うんだ。八高輪が男の名前でなんで悪いんだ、俺は男だよ！

「……………八高さん？」

「あ、ごめん、ちよつと怪我したところが痛んで」

完全な言い逃れですんません。だよ、温泉とは言っていたけど、露天風呂とは言っていないんだよなあ……………覗く気はさらさら無かったにせよ、激しく落胆したのも事実だ。なんにせよ、なのはが気にかけてくるほど俺は微妙な顔をしていたようだ。一応言うけど、一日も経っているから感覚としてちよつと残っているが、ほとんど痛みは無い。骨折じゃないようだなによりだ。

余談だけど、昨日の内に俺の私服はなのはに買ってもらって解決している。確かに最初はムーンウォークしながらトリプルアクセルするほど浮かれていたが、実際服を選んで買われると、段々恥ずかしくなってきたんだよ……………実際のなのはのチョイスは、俺に合わせたような感じで似合っている。鏡で自分を見た時の衝撃と言ったら。

「おにいさん、大丈夫なんですか？」

「ほとんど痛みも無いし、大丈夫だよ」

「アンタから頑丈さを取ったら、なにが残るっていうのよ？」

「不屈の精神」

「こういう台詞をこんな状況で言われると、ちよつと痛いわね」

桃子さんの言う通りですねはい。こういうやり取りはもつとこう、戦闘とかで盛り上がっている場面で言うものだろうに。休日の和やかな空気の中で言うと言ってしまうな。改めるまでも無いが、TP Oって大事だよ。

マンガとかで見かける温泉のシーンで「かぽーん」という音を見かけるけど、あれ考えた人は偉大だと思う。ししおどしの音や桶が鳴らされた音を一度に表現されている。環境によってはあの音は出せるらしいが、温泉初心者の俺には鳴らし方が分からない。下手に桶とか落としてもうるさいだけだし、雰囲気を楽しむことにしよう。でもあれだよ、このロマンを度数で測るなら、ウイナーソーセージをCM

で聞くような「かりっ」という音を鳴らして食べるような、そんな口マンに匹敵するんだ、かぽーんには。……俺は一体なにを語っているんだ。

白昼だというのに、浴場には俺とフェレット——ユーノだけ。ペットの入浴が難しいので、ユーノには桶に溜めた温泉に浸かることで我慢してもらっている。

「助かりました。ありがとうございます」

「だからそれは良いって。ていうか、敬語はどうか出来なそう？」

「八高さん、僕より年上だから出来ないですよ」

「うーん、まあ仕方ない…のか？ まいっか」

なにを感謝したのかと言うと、女湯に引つ張りだこされていたユーノを、無理言つてこつちに連れて来ただけの話だ。とは言つても、救出半分、嫉妬半分だけどね。そんな姿してるから興味を惹かれるんだって。

……なんかちよつと腹が立ってきたな。いたいけな少女たちを惑わすフェレットの姿をした男の子。

——待てよ、よくよく思い返せば、

「……なあユーノ。今までなのは部屋で過ごしていたんだよね？」

「……は、はい」

「念の為、念の為に聞こう。うっかりでもなのは着替えを覗いたことは？」

「ええッ!? いや、いや、ええつと……!」

「ユーノ！ 貴様見ているなッ！」

明らかに動揺してやがる！ 間違いない、見たなこいつ！

「今から修正してやる。洗髪はすませたか？ 神様にお祈りは？」

浴場のスミでガタガタ震えて命ごいをする心の準備はOK？」

「ちよ、ちよつと待って下さい！」

「ユーノ・スクライアを事案発生帮助対象と断定し、武力介入を行う。八高輪、行きまーす！ 開け、アヴァロン・ブルー！」

『じゃが断る』

「ダニイ!? お前どっちの味方だ!」

『道の外れかけた者の味方じゃないつもりじゃ』

「ぐ、ぐぬぬ……」

「お、人がいないとやっぱり広いなあ」

「お、う!」

急にスライドされた扉から現れたのは、土郎さんだった。ユーノに襲いかかろうとした矢先に予想外のハプニングによって身体が硬直してしまふ。

「お、なんだユーノも一緒か。人がいないからはしゃぐのも分かるが、マナーは守らないとだぞ? 程々にな」

「あ、はい」

至極真つ当な注意を受けてから、土郎さんは俺の隣で浸かる。おいおい、内の父親よりがっしりしてるぞ。まあ喫茶店内でも力仕事関係もしているから、その関係か? にしては出来上がりすぎたって。普段鍛えてるのか?

「どうだい? 家には慣れて来た?」

「あ、はい。お陰様でなんとか」

「それは良かった。なのはたちとも仲良くなれてるみたいで、安心してるよ」

「恭也さんと美由希さんの仲が微妙そうですね」

「まさか。二人は君を良く思っているよ。剽軽な割に周りが見えてるって褒めていたよ。確かに、恭也は少し苦そうな顔してたけどね」

「は、ははは……」

俺には怖ろしく映ったんだが……剣道三倍段の理論を抜きにしても、恭也さんの視線だけで殺される自身がある。視線で人を殺すって、ある意味で魔法の域だよ……

「……でもなんというか、不思議ですね。翠屋の頭数要員のつもりで来たのに、なんか普通に溶け込んで。まるで親戚みたいな感じですね」

「また微妙な距離だね。家族と一員とは言わないのかい?」

「……まだそこまでの感覚は湧いてないですかね。ちゃんとした実家もありますし」

「はは、それももうそうか」

「……すいません、半分嘔吐しました。両手の中にすくった湯水で一度顔を洗い流す。」

でもさ、ロリコンという要素は一般的には悪く捉えられるだろ？

残念ながらいくら紳士を名乗ろうとも、下手したら犯罪予備軍扱いされることだってある。だからなんというかな、あんまり親しくなつて、いざ自分という人間が晒された時にガツカリされたくないんだよな。特になのはかなりの年齢の女の子が、それなり程度に信賴している人間がロリコンだと知れば、絶対距離取られるのはすぐ想像出来る。

「でもまあ、今はうちを頼りなさい。今君は高町家に住んでいるんだ」

「……いいんですか？　そういうこと言われると、遠慮しなくなりますよ？」

「望むところさ」

「それじゃあ先に上がりますね」

「つてえええ!？」

「もうのぼせそうだったので……ユーノもどうだ？」

こくりと頷いてから、ユーノは俺の後ろから浴場を出ていく。……参ったな、士郎さんに泣かされそうになったよ。こんな紳士さんに手を差し伸べるなんて……

変な解釈だけど、なのはの周りつてなんでこう善い人ばっかなんだろな。高町家の人間（恭也さんとは分かり合う必要はあるが）は勿論、アリスやすずかも人間が出来ている。人間、どんな裏があるかは知らないが幼女を疑うのは良くない。彼女たちは純粹だ。いや、俺も純粹だと思うぞ。方向が違うだけの話なんだって。



「ほふう、今日は楽しかったなあ」

「そうですね」

「……さて、ちゃちゃつと買い物すませて帰ろうぜ」

「はい」

日帰りの旅行が終わった後、俺となのはは再び外出している。とはいつても大した用事でもなく、ただ単になのはの買い物に付き合っているだけなだけどね。学習ノートの新しいものを仕入れたいとか。翠屋の手伝いをしようと残ろうとしたが、「こっちは良いから、なのはと一緒に帰ってきて」と強引に送り出されてしまった。完全になにか含みのある笑顔だったが、敢えて乗ることにした。断りにくい空気だったし。だからって、中学の制服着せる辺り、まだ評価はされてないを見た。

ちよつと心許なく感じたのは、ユーノがすずかやアリサの良いオモチャ——もとい、遊び相手なっているからかもしれない。流石に腹が立って無理矢理引っぺがそうとしたが、アリサの反感を買ってしまったので、ひとまずは待機。あいつめ、実はフェレット姿を楽しんでいるだろ？ なんにしても、ユーノはなのはになにかを言おうとしていたが、それすら封じられた訳だから、こうして俺となのはと二人で買い物なんだけどね。最近の俺って風向きが良いな。何年分の運を使ってるのかが気になるな。

余談だが、一つ自慢をさせてほしい。俺に自前の自転車があるんだが、俺の後ろではなのはが乗っている。振り落とされないように腰に手を回しているが、はつきり言ってこんな経験初めてだから、ひよつとしたらなのはより俺の方が心臓が運動しているかもしれない。これで俺の念願の一つが達成された。思い残すことは……まだあるけどな。

——なんてアホなことを考えている時だった。割と近くで車のブレーキの音が耳に刺さる。気のせいだと思いたいが、なにかがぶつかったような音まで聞こえた気がする……

「行ってみましよう……！」

「ああ」

運が良いというか、場所は走ってすぐその方だ。

十秒とかからずしてその現場だろう人だかりにへと潜っていく。人だかりとなるほどの群れが固まる前に居合わせたことで、ぶつかった主がすぐに眼に入った。

「犬か……」

「酷い……」

横たわっているのは、白い中型の犬。人と同じように、切れ切れに息をしながら、その身体からは赤い血がじわっと広がっている。痛い訴えるように、犬は少しだけ足を動かしている。動きが鈍すぎる、ひよつとして折れてるのか？

……既に、後方には車が走り去っている。あいつめ、絶対に許さんぞ……いや、あんなのに構うくらいなら、犬を助ける方がよっぽど意味がある。けど、俺もなのはにはどうすることも出来ないし。手持ちがなにもないとかそういうことじゃない。助ける術が無い。しかし、通行人の誰もが見ているだけでなにもしようとしな。ちっ、野次馬つてのはどうしてこう……！ キレても仕方ない。

「まだ大丈夫……息もあるし、致命傷というほどの傷じゃない」

すつと隣に座って犬に近づいて来たのは、黒髪の少年だった。ただの印象だが、なのはと同じくらいのその少年は、なにか年齢不相応な物静かな空気を纏いながら、冷静な瞳を犬に向けている。……なんとなくだが、なんか寂しそうにも見えてしまう。まるでフェイトを見ているような気分だった。

さて、どうするか……この大きさの犬だ。一応運んでいくことも出来なくないが、下手な場所に触れて怪我が悪化したら元も子も無い。安全に手早く動物病院に連れて行くなら……

「なのは、俺はタクシー拾って来る！ 少年と犬を見ててくれ！ なにかあつたら電話するんだぞ！」

なに、ほとんど夜とはいえタクシーなんてゴロゴロしているさ。軽く探せば見つかるさ。出来上がっている人だかりを縫うように走りながら、俺はこの場を後にする。

「この子、大丈夫かな？」

「大丈夫だよ、足を骨折させているだけだから」

男の子は、ぽつりと溢す。「大丈夫だよ」と犬の頭を撫でながら諭す姿は、なんとなくおにーちゃんみたいだった。

きつと、それがきつかけだったのかもしれない。怒ったように唸り、犬は男の子の腕に噛み付いた。

「……………」

「あー！」

「怪我をして気が立っているんだ。大丈夫、僕はなにもしない……」  
犬の牙は深く腕に食い込んでいる。白く伸びた袖のシャツに滲むほど、血も出ている。にも関わらず、男の子は子守唄を聞かせるような静かな声調で「大丈夫」と言い聞かせながら、頭を撫でている。

「う、腕が……」

「平気だから……」

どうしてだろう……この男の子、あの黒い魔導師の子と眼が似ている。ううん、佇まいもなんとなくそれらしい気がする……

腕の手当をするようなものもなく、なにをすることも出来ずに、男の子を眺めていると後ろの方で車がゆっくりと止まる音がした。

「なのは、少年！ 足は持ってきたから、その犬乗せてくれ！」

「え、犬!?! うちそういうのはちよつと……」

八高さんとっても必死そうな顔で犬を見ていたことに対して、運転手さんは腫れ物を見るような顔で犬に眼を向けている。運転手さんの態度に舌を打ちながら、八高さんは、着ていた聖祥大中学の制服を、わたしに投げ渡す。

「それで犬を包んでくれ！ おっちゃん、シート汚したらクリーニング代も出す！ それでいいか!?!」

「しかしだね……」

「積原動物病院！ 言うほど遠くないでしょう!?! お願いしますつて!」

「……他当たってくれるかい？ 急ぎの人がいるって聞いて来たのに、動物じゃあね……」

「なっ……!」

それだけを言つて、運転手は遠い視線を前に戻してから、後部座席のドアを閉めようとする。

「ちよつと待った。人なら良いんですね?」

「…それが?」

「そのこの男の子と女の子を病院まで送つてくれ。その少年が野良犬に腕を噛まれているみたいだ」

「……………」タクシーの運転手としては、とても真つ当な言い分されたことから、閉じかけられた後部のドアを開ける。運転手さんは、渋々と言つた表情だつたけど、今は乗せてくれることに感謝しなくちゃ。

「ほらなのは。犬は俺が送つて行くから、お前は少年に付き添つてくれ」

「で、でも僕は…」

「感染症になつてからじゃ手遅れだぞ、まずは診て貰えつて。なのは、タクシー代と治療費を渡して置くぞ」

「でもこのお金、八高さんの洋服代…………」

「大丈夫だ、問題ない。それじゃ俺は動物病院行つて来る! なにかあつたら電話な!」

八高さんは、犬を囲うスペースも無いまま自転車にまたがる。出来るだけ丁寧に犬を背負う形を取るように前にかがみながら、左肩に乗せる。念の為に、落ちない様に左手を身体に回して支えている。一応保温の意図もあつてか、制服を覆わせたまま自転車を漕いで行く。

「じゃあ、わたしたちも…………」

「…うん」

男の子とタクシーに乗りながら、わたしは総合病院をいき先に運転手さんに頼んでみる。どことなく気まずそうに頭を掻きながらも、運転手さんは「あいよ」と溢しながらアクセルを踏んで発車を促させた。

異性の友達を連れてきた時の「なになに彼女？」とか  
「やだ彼氏かしら？」は最早お約束

「ふう。これで良しと」

榎原動物病院で診てもらった犬は、大事には至っていなかった。入院にはなったけど、肋骨と足を折ったという怪我で済んだのは不幸中の幸いだろう。犬の治療費は大丈夫かって？ ユーノの時に経験しているが、この病院は野良の動物の治療は無料だ。野良に費用が払うのが勿体無いからと言って、放置されるのが嫌だからという。ほんと、世の中捨てたもんじゃないな。改めて海鳴市って良い場所だなあつて感慨にふける。

さて、なのはへの連絡も済んだし、家に戻るか。向こうの治療はこれかららしいから、結果は戻ってからかな。自転車に乗り込み、行きよりも軽い身体を風と一体にさせる。

「——アヴァロン、正直に答えてくれ。仮の話だが、俺とフェイトってどっちが強い？」

『フェイト・テスタロッサじゃな』

「え、即答?」

『戦闘経験、魔力量、覚悟。どれをとっても、劣っておるぞ。その上貴台は少女相手故に加減までしている。どこに勝算がある?』

「仰る通りで……」

『もう一つ言わせて貰うと、貴台の魔力量や資質は高町なのはにも劣っておるぞ』

「なんととおおおお!!?」

『あの二人が特別規格外というだけの話であつて、貴台もそれなりじゃぞ?』

「返ってへこむフォローだな……」

やはりというか、女性の方が魔法の適正があると見た。こんなもの

て無いよ！ この世界はどうやら、男に不遇というか辛辣に出来ているようだ。俺とユーノの今後が心配になってきたぞ……

『じゃが貴台は違うじやろう？ 経験則に従つての生存を優先させた戦略型。それが八高輪の戦術のはずじゃ』

「…仰る通りで」

『なればこそ、貴台の生存の率を増させる魔法を託そう』

なんだ、まだ隠し玉があったのか？ そういうのはもっと早く言おうぜ。

……どうでもいいけど、傍から見れば今の俺、ひとりごとを言っているように見えないよな？ 自転車乗ってはいるけど、イヤホンもプレイヤーも無いから、歌を口ずさんでいるようには見えづらいだろうな。なにせ、指輪に話しかけているだからな。

『じゃが、あまり薦めは出来ぬな。踏み外せば、貴台の生存も危うくなる』

「……つまり、使い方次第ってことか？」

『そういうことじゃ。……これからする話は、至極真剣じゃ。そのまま聞くのじゃ』

お前の説明で真面目じゃない話を探す方が難しいよ。大概が身になる話だから、聞き逃す訳にはいかん。

なるだけじっくり聞きたいから、自転車のペースを落とす。気持ち分話に集中出来るように、指輪の填まった手元を耳に近づける。

『端的な説明じゃが、貴台の魔力量は勿論、能力の全てが上限解放される魔法じゃ。その名は——リンカー・イグナイト』

「ただいまー」

「あ、八高さん、おかえりなさいー」

程よく鼻を掠めたのは、夕食の匂いだった。ダイニングの音がまだまばらなところを聞くと、多分ごはんが出来上がってそんなに時間は経ってないのかもしれない。今日のメニューは分からないが、なにか

肉の匂いがする。牛丼とか肉じゃがの辺りと見た。

「…………アヴァロンの話に集中していたから完全に忘れていた。桃子さんから受け取った洋服代のことなんて言おう…………これで買い物ボーイコットしたの二度目だぞ。今度はチョップじゃすまん…………」

「ん、少年じゃんか。怪我は大丈夫だったのか？」

「…………はい、なんとか」

「でもどうして家に？ あ、いや、悪い意味じゃなくてだな」

「クロノ君、ちよつと家が難しい事情みたいで…………」

「黒野？ 外国人っぽいと思っただけど、日本人なんだ」

「あ、ううん、違うんです。クロノ・ハーヴェイって名前なんです。記憶が無いって言っていたから、お家に連れて来たんです」

「ああなるほど」

…………まさか記憶喪失の少年だったのか。これはひよつとしたら、居候コースかもな。俺以外が平然としているということは、既に一家には連絡済みか。ハブられたみたいで、俺ちよつと悲しいぞ。

いや、良く見たらちよつと違うな。恭也さんもなんか穏やかじゃない顔しているし、ユーノもなんか警戒している。…………なるほど、なのはが男友達を連れて来たって考えると微妙な気分だからな。それを言われると、俺も歓迎されないポジションのはずだが…………帰り道に考えていた男の不遇説は彼にも当て嵌まったと見た。せめて俺も、桃子さんや士郎さん、美由希さんのように笑顔で迎え入れないとだな。

「まあゆっくりしていつてくれ。ご飯は今からか？」

「はい」

「そんなに遠慮しないでいいからさ。お、今日肉じゃががなんですね」  
「ええ。ああそうそう八高君。買い物のお話があるんだけど」

「…………すみません桃子さん。後で全部言いますから、今は団欒させて下さい」

「…………今ので大体伝わったわ。そうね、今はみんなで団欒としましょう」

え、笑顔が怖い…………俺明日の朝陽拝めるかな…………？ 口には出さな

いが、なのは先生に叱られている友達を見るような視線を俺に向けている。　ありがとう、この中で心配してくれてるのはなのはだけだよ……ユーノはフェレット姿のまま眉間に皺寄せてるし、美由希さんは茶飯事だと言うように笑ってるし。一応俺、実家ではそれなりに真面目な人間で通ってたからね？　言いたくないが、俺の品行方正がおかしくなったのはジュエルシード集めを始めてからだからね？　そこだけでも覚えていてほしい。

「い、いただきます……」

食事のマナーとして合わせたはずの手が、今後の自分への祈りに思えてしまう。大丈夫だ、俺はきつと死なない。自信を持つんだ。

改めてだけど、ジュエルシード集めを優先させていたら他に気が回しにくくなるな。辛うじて翠屋の手伝いは出来ているが、友達関係が危なくなってきたな。「最近付き合い悪いな」と面と向かって言われるほどだぞ。この年頃の人にはちよつと死活問題なので、大事にしたところだ。

友達関係ね……なのは大丈夫だろうか？　少なくとも、ジュエルシード集めを始めてから、自分の時間というのも減ったのは事実だ。塾や友達、翠屋に学校。はつきり言って俺より忙しいに決まってるかな。それに思春期とか反抗期を超えた俺と違って、なのはは本物の9歳だ。変にヒビが入らなければいいんだが……

「ここは賑やかだね、なのは」

「にやははは……」

それに最近色々入り組み始めてるからなあ。こういう時間くらいのもんびりしたいもんだ。その内にでもアリサやすずかとも拗らせないか心配ではあるが……ん、待て、もう呼び捨て!?　今日初対面のはずだよな!?　こいつめやりおる！　もう一つ驚くことに、それに対するなのはの反応の薄さ。互いに了承済みか!?　最近の子は進んでると薄々思っていたが、ここまでとは……!　でもなのはの友達が増えることは良いことだし、面識はほとんどが無いがクロノが善い奴なのは分かってる。これは悩み所だな……

「……なんでしようね、やっぱ複雑ですね」



「そう？ 知り合って間も無いにしても、なのはが同じくらいの年の男の子を連れてくるのって初めてだから嬉しいわね。にしても、そういうこと言えるなんて、すっかりなのはのお兄ちゃんね」

「そりゃまあ……ほとんど妹のようなものですし」

「それ数時間前にも聞いたわよ？」

「ぬぐっ……」

なのはは可愛いですから、と言う言葉を飲み込んで、無理矢理に誤魔化した。どんな風にいじられるか分かったもんじゃやない。けど、言わんとしていることはバレているんだろう、桃子さんはふふつと笑って返した。

「んー、なんか機嫌悪いな」

夜も遅いし、クロノも行く宛てが無いということでも少し無理を言つて家に泊めることになった。本人は畏まっていたが、他に宛ても無いようだし、こつちで寝泊まりさせることになった。ろくに準備も出来ていないから、俺に部屋ということになってるけど。

そうそう、ユーノもなのはの部屋から俺の部屋に移してある。いや、ユーノがやましいことをする奴じゃないと信頼しているが、その、なあ？ なのはは知らないが、ユーノは男だ。男と女が同じ部屋にいたら、その内にもおかしい間違いが起こるかもしれない。うっかり着替えを覗いてしまったという自供は聞いているから、これ以上があるかもしれない。悪気が無いから言及はしなかったけど。っーか、人の姿になれるなら早くそれに戻ってくれよ。俺も未だにフェレット姿すら知らないから、男という確信はまだ無いんだって。

……まあ、そんなことは良いや。気になっていたんだが、ユーノはどうにもクロノに良い顔してない。なになに、なのはを巡つての正妻戦争か？ こういうのわりと好きだが、俺のいないところではほしいぞ。でも表情を見た限り、クロノが劣勢ではあるけど。今日逢ったばかりだから正妻もなにも無いなそりゃ。でも、ユーノが一方的に敵視するのも珍しいな。

「——八高さん。彼を信用しないでください」

「ちよ、ユーノ！ 人前で喋ったら……！」

「……安心して下さい。僕は危害を加える気はありません」

「そりゃあ当たり前——ちよっと待った」

なんだ？ フェレットが喋ったというのに、スルーしたぞ。普通の人がこの事態に立ち会って、真顔を保ってられるはずが無い。しかもすんなり返事までするとか。

「……あまり聞きたくないんだが、クロノ。お前なものだ？」

「恐らくフェイトたちのことは知っていますよね。僕は、彼女の側につく魔導師です」

「な——」

「さつきも言ったように、僕は誰も危害を加えるつもりはありません。彼女たちについてるのも、便宜上のもです。僕は僕の目的でジュエルシードを集めているだけです」

商店街で逢った印象そのまま、クロノは物憂げな顔を崩さずに淡々と口にする。フェイト側の魔導師だと……いや待て。俺はそれで敵と断定したくない。なるだけ冷静に俺も返す。

「目的……一応聞くんが、記憶が無いことは嘘か？」

「それは本当です。自分の名前と、自分が魔導師であることと——高町なのはという女の子を知っている以外、なにも知らないんです……」

「なのはを知っている？ でも、なのはは知らないみたいだったけど？」

「……そうみたいだね」

そこでクロノは、寂しそうに顔を伏せる。記憶喪失の話が嘘じゃないとすると、ジュエルシードを集める目的は、

「記憶を取り戻すために、ジュエルシード集めをしているというところか」

「ええそうです。僕も回収に必死だったんですけど、……不思議ですよ。なのはの姿を見た瞬間に、その気が無くなったんですよ。むしろ、どこか懐かしさを感じたくらいで……」

「……………」

「今ではフェイトたちに比べると、それほど固執はしていません。でも、僕の記憶の手がかりが彼女なのは間違いないんです」

「でも、人違いという訳じゃないのかい？」

「確信は無い。けど、そんなはずはない……………」

「もう止せてユーノ。俺たちを襲う気が無いなら、敵じゃないさ」  
「しかし……………」

「悪い奴なら、なのはが連れて来ないさ。だから信用する。でも一つ約束だぞクロノ。なのははお前を善い奴だと信じてるからな、なのはを裏切るなり泣かせるなりしたら、俺は許さんからな」

「……………はい、分かりました」

「なんだ、話せば分かる子か。やはり、一概に敵というものでも無いようだ。」

「良かった。あなたが優しい人で……………」

「正直言うと、俺だってちよつとは不安だが、なのはが信じたんなら俺も信じるさ。なのはって人を見る眼はあると思ってるからさ」

「格好つけて言うなら、俺はクロノを信じるなのはを信じる、と言ったところか。フェイトといいアルフといい、拳句にはクロノか。どいつもこいつも悪党の才能無い顔してからに。しかし分からねえ。クロノが別目的で記憶を戻す為にジュエルシードを集めているが、フェイトたちはどうなんだ？」

「聞いてもいいか？ お前の目的でジュエルシードを集めているんだよな。なら、フェイトたちの目的はなんだ？」

「……………それ自体に大きな意味はありませんが、彼女は自分の母親の為に、ジュエルシードを集めているんです」

「母親の為に……………母親は死んでいる、ということか？」

「いいえ、そういうことじゃないんです。もう少し言えば、母親の目的の為に動いている。それだけのことです」

「母親の目的？」

「あの人の……………プレシア・テストアロッサの願いは、虚しいだけなんです」

「? それってどういう  
ずぐん。」

不意に、左胸を握られたような圧迫感を覚える。反射的に感じた悪寒めいた気配が、身体を突き抜けた。

「この反応は……!」

【八高さん、ジュエルシールドが……!】

「やっぱりそうか……:先に行ってくれユーノ。俺は準備してから行く」

「分かりました」

【なのは、俺は準備してから向かう。先にユーノと向かってくれ。多分フェイト……:あの黒い魔導師たちも来るはずだ。無理はするなよ】

【……はい】

なのはなりに迷いや考えが巡ったのだろう、僅かな空白の後に返した。まあな、まず喧嘩が嫌いななのはからしたら、年齢や性別に関係なく戦うというのは気分の悪くなる話にしかない。……どんな顔で部屋から抜け出たのか考えるだけで、こっちまで落ち込むよ。……部屋の窓から、ユーノは小さな身体を出て行かせる。こういう時便利だな。

さて、今部屋には俺とクロノだけ。準備も確かにするが、それよりも確認したいことがあった。

「……聞きたいことがもう一つあったんだが、仮に俺とフェイトたちと出くわしたとしよう。お前はどっち側に付くんだ?」

「……さつきも言ったことですが、目的が違うだけで僕はあちら側です。離れられない理由もありますので」

「ということは、お前自身は戦闘の意思は無いんだな?」

「はい」

「そうか……:じゃ先に行ってくれ」

「え?」

「言ったら、俺は準備があるって。それに、ここでお前と戦う理由がやっぱり無いし、俺も戦いたくない。早くその窓から行ってくれ」

あれがあるだけで、戦闘としての最低限の体が取れるからな。それでも幼女や女性に手を出すとマジ腐れ外道なんだけど。淑女の脚をウインウインした究極生命体くらい性根が悪いと思われるのだけはお免だ。でも、これが無いとなのはこの訓練もままならないんだよな。しかし当人曰く「見るこっちの方が微妙に気持ちに……」だが、こっちとしては良い特訓になるんだよな。お、あつたあつた。

「……………バンダナと、耳栓？ それをどうするつもりですか？」

「もしも戦うことになったら、付けるってだけのことさ。ちなみに、このバンダナを目隠しにする」

く、クロノがなんか呆れてるぞ……まあ、傍から見ればただの縛りプレイになるからな。事実だけを言うなら、目隠しと耳栓をして相手が女性という認識を誤魔化しながら凌ぐという寸法だ。実際なのはとの訓練の時にも辛うじて成果の上がっている方法として活用している。活用したくないけどな。ということもあって、俺としては（女性限定だが）こっちの方が戦えたりする。

自信無くなりそうだからその眼は止めて。当たってはいるがクロノよ、その前提は違う。

「……でも、俺は戦うつもりで付けんど。これは自衛の緊急時にだ」

「……………少なくとも、自らそれを着けて戦闘をしよう人は、見たことないです」

「分かってる……分かってるって……」

「すいません、僕はもう行きます」俺をこれ以上変な人扱いしないでくれと言おうとしたが、それを遮りながら、クロノは窓から出ていく。言い逃げするとは感心しないなあ……いや、俺たちにとっても急ぎの用事だから仕方ない。

さて、俺も行きますかね。どんな目的にしても、ジュエルシールドが危ないものには変わりない。そこは譲る訳にはいかん。相手がロリだろうとやっぱロリだろうとそれでもロリだろうと、そこでシヨタが混ざろうと俺は自分を曲げたくない。

「アイ・ハブ・コントロール。八高輪、目標の回収に向かう」

『戯言は宜いから速く行くのじや』

「ざれぐ……!? ……分かったよ、すぐ行く」

人の決め台詞を戯言扱いとは……製作者に怒られるぞ。俺に向けた発言にしても、元ネタを貶めるのは聞き捨てならないな。俺のことは嫌いになっても、パロの元ネタを嫌いにならないでくれよ。

「——開け、アヴァロン・ブルー！」

さて、よく分からん勧告をしたところで、俺は窓から身を投げる。人の願いや思いが渦巻き、その中心で佇むあの石のある場所へと目掛けて、星の海の広がる宵ソラの下を滑空する。

会話と雑談は割と別物だと思っんですよ。中身のあ  
る方が会話で、とっ散らかってるのが雑談かと。

星空は満天。空は海の底に散らばった宝石のように広がり、そこに  
佇む様は、例えば部屋の中に宇宙を閉じ込めた、小さくて広いプラネ  
タリウムにも感じた。それに合わせて、街の光も蛍の群れのように  
点々と光っている。空の色はとつくに真っ暗だけど、淀んだ雲は一つ  
も見当たらない。明日はきつと晴れるかもしれない。

——— だけど、その満天以上にわたしの眼を捕えて離さないのは、  
寂しい瞳を浮かべた、わたしと同じくらい黒衣の子だった。放って置  
くと危うくて、今にも風に吹き消されそうなほど淡い存在感だった。  
——— どうしてか分からないけど、この子はクロノ君とも似ている。

ユーノ君が敷いた結界でひとまずは安心だと思っけど、こんな街中  
でジュエルシードを強制発動させているという。本当ならすぐいで  
もジュエルシードを封印したいところだけど、わたしは彼女も無視し  
たくない。だから、八高さんから聞いていたその名前を呼んだ。

「……フェイトちゃん、でいいんだよね？」

「……どうして私の名前を？」

「あの人が、八高輪さんが教えてくれたの」

「八高……あの銃剣のデバイスの彼？」

「うん」

「なのは、変身を！」

「ユーノ君、もう少しだけ待って。お願い……」

……渋々ながらも、ユーノ君はなにも言わずに了承してくれた。

フェイトちゃんたちは既にその気だけど、わたしはまだレイジング  
ハートを手の中に納めていない。まだ赤い宝石のまま首から下げて  
いる。

戦って、ぶつかって分かり合う。それも選択の一つかもしれない。

けど、しつかり向き合って、話をして互いを分かり合うことも大事だと思う。出来ることなら、お互いに本音で向き合いたい。

「…自己紹介をさせてほしいの。わたし、高町なのは。聖祥大付属小学校の三年生。——フェイトちゃんの友達になりたいの」

「——っ」

「フェイトを惑わすな!」

「させない!」

確か赤い狼さんの名前は……そう、アルフさんだ。アルフさんにとつてなにか気に入らなかったのか、口元から覗かせる銀の並びを光らせながらその巨体を飛び掛らせる。

変身が間に合わず、どうにも出来ないと思っていたところでユーノ君が間に入り込む。アルフさんの猛進を塞いだ防御魔法から、ばちばちと稲妻が走り、

「なのは、あの子を!」

「やらせないよ!」

「やらさるきゃ!」

まるで光が爆発したように、辺りに溢れかえる。

——そして、光が消えた直後、そこから二人の姿がいなくなっていた。眺め回して見ても見当たらない。今なにが起きたの……?」

「……強制転移魔法。良い使い魔だね」

「……違う。ユーノ君は、わたしの友達だよ」

「そう……で、どうするの? 今私たちはこうして向かい合っている。目的の違う同士が対峙すればどうなるか……分かっているはず」

「——分からないよ」

言いたいことは分かる。だけど、それだけが答えじゃないはず。向こうにだってジュエルシードを集める理由がある。でも、なにも言うおとしないし、教える気も無い。なにも知らないで、ただ相容れないからという理由だけで戦うなんて、そんなの嫌……!」

「分からないなら教える。私たちは敵同士、戦うしかないの」

「そんなの違う! ……それがフェイトちゃんの言う答えなら、どうしてそんな悲しい顔をしているの?」



「……………っ！」

「教えてフェイトちゃん！ フェイトちゃんの抱えているものを知りたいの……！ 目的は違うけど、伝えてくれたら、きつとなにか——」  
「なにも、変わらない……変えられないの……つた教えたところで、なんの意味も無い」

「口にしない思いが、伝わる訳が無い。伝えない思いに、意味なんて有る訳も無いよ。フェイトちゃんが口にしたくないなら」

私は、そこでやつと念じる——レイジングハート、力を。魔法少女としての、白い衣服に身を包む。

握り慣れているはずのレイジングハートが、重く感じる。だけど、私は手放さないように、必要以上に強く握りしめる。

戦うためじゃない。倒す為じゃない。なのはは、

「——わたしの想い、全部伝えるから！」

「ふぎけるんじゃないよ。なんだって俺がシリアスにならなきゃいけないんだよ……」

街並みを飛空しながら、一言ぼやく。いやさ、俺は基本的に明るいとか楽しいのが好きだからさ。そういうアホな性格が災いしているらしく、真面目な空気になると、人と状況次第では壊したくなるんだよな。真面目に構えていると肩凝るし。とはいっても、空気読むときは読むけどもね。

……よし、テンション変える為に大袈裟に口にしておこう。

「俺がμ，sだ！」

『気でも触れたか？』

「ナニソレ、イミワカンナイ」

『……なにかイラつくのう。なにかの真似事か？』

「すみません、調子の手つてました」

あ、やばい。マジでキレそうな声だ。これくらいにしておこう。

「うおっ！」

程よく肩の力が抜けたタイミングで、上空から濃い緑の柱が落下する。よく確認しなくても分かる。魔導師による砲撃だ。

残念なことに、それを相殺させるほどの魔法なんて防<sup>プロテクション</sup>御ぐらいしか思い当たらず、左手を翳す。まるで重力を受け止めたように、砲撃の衝撃によつてぐぐぐとコンクリートに圧される。や、やばい……かなりの威力だぞ……！

「ぐおおらあああしやあああああああ！」

不意打ちを辛うじて、上空に弾き飛ばす。受け止める訳にもいかず、かといつてそこから中建物だから弾くのが出来るかは不安だったけど、やれば出来るもんだな。しかし、なんでこう俺は武装が良い割に魔法があれなんだろう……？ グレて全身を特殊偏光ガラスに改造してもらおうかな。……いや、コラ画像のネタにされそうだから却下しよう。

「今度の魔導師は………男か」

砲撃の降ってきた空から一人、とんと魔導師が着地する。

一瞬見間違えそうになったが、どうやら年が恭也さんくらいの男だ。ガチな中性美形なもんだから、言い淀んだが、顔付きというか身体付きが女性らしくない。……変な意味はそんなに無いぞ。

……敢えて不謹慎を口にしよう。男なら遠慮も容赦もいらんな。いや、でも人を斬るとか冗談じゃない。派手な攻撃をしてきたにしても、人殺しはご免だ。デバイスの非殺傷設定を最大まで上げておこう。なに、木刀で殴るようなもんだ。大したことは……あるな、うん！ しかしハツタリは大事。アヴァロンの切っ先を向ける。

「二つ忠告しておく。死ぬほど痛いぞ」

「……オレも一つ聞いていいですか？」

「え、無視ですか!？」

「君はなにものかな?」

……え、ええーつと、どう答えるの? 見た感じでお互いが魔導師ということとは分かっているはず。つーか、こいつの話し方なんかキショイ。芝居がかつてるっていうか、わざとその話し方してるっていうか……違和感アリアリで胡散臭い。こんな胡散臭い相手には、こう

だ。

「いつもニコニコ、幼女の笑顔に這い寄る紳士、八高輪DEATH！」

「ああ、ニヤ○子さんか」

「それツツコミとして辛辣なんですけど!?!」

——ちよつと待て。なんでこいつ、元ネタを口に出来たんだ？ 少なくとも、ニヤ○子さんはこの世界のレンタルショップに並んでなかったぞ。あのビッグタイトルがだぞ？ 三軒も回ったんだ、恐らく間違いない存在しない作品タイトルと踏んで良い。

無性に気味が悪く感じる。少し警戒しながら、アヴァロンを握る力を強める。

「……あんだ、一体なんだ?」

「ジョセフ。ジョセフ・ジョースター。ジョジョって呼んでくれ」

「バレバレな嘘吐くんじゃねえよこのマヌケェ！ 女装してテキーラ抱えて出直して来いよ!」

「……なるほど、リアクションを見るに、この世界の人間じゃないみたいですね」

「……………?」

こいつ、今なんて言った？ この世界の人間じゃない? それってなんだ、俺がユーノと同じところの出身と思われているのか? 今のやり取りの中でどう判断したらそうなるのかはまるで分からんが、相手はなんか納得しているようだ。

「最後に一つだけ——もしかして君は、転生者ですか?」

「——つ」

ちよつと待て。なんでこの世界で、俺とアヴァロン以外のやつから、その単語が出てきた？ 普通有り得ないはずだぞ……

いかん。こんなこと言われて動揺しない訳がない。見透かしたように、あいつの頬肉が吊り上がる。

「……やはりか。しかも、なのは側に付いてると来たか」

「……………もう一度聞く。なんだあんたは?」

「そうだったね、自己紹介がまだだったね。でもその前に、ちよつと

「仕事——」

「いいから話進めろよ！」

この人面倒臭っ！先輩魔法少女みたいな自己紹介するなよ、普段ぼっちみたいに思っちゃまうだろう！

「やれやれ仕方のない人だ。——でも、その前に聞かせて下さい。君は、このリリカルなのはの世界感……いや、設定についてどう思います?。」

「……………」  
「は?。」

や、やべえ、なに聞かれてるか分かんねえ……けど、なんとなくだが予感がした。まさかとは思うがこいつ……いや、その確率は限りなく低いはずだ。流石にそんなはずは……だが、この言い回しはかなり引つかかる。

「……まさかとは思うが、あんたもか?。」

「先に聞いたのはオレですよ? 答えて下さい」

「元を正せば俺だろうが! ああもう、本当に話進まない! 分かったよ答えるよ! 不満なんてないよみんな可愛いよこの野郎!」

「——ちっ、にわかか」

一瞬だが、ひやつとした。舌を打った瞬間の男の表情が優男特有の温和な表情から、憎々しい顔に変わっている。自分とそりの合わない人間と会話でもするような、そんな距離感を示していた。おまけに語調まで変わってマジで別人かと思っただが、話しぶり自体は恐らくこつちが素なんだろう、気持ち悪さがほとんど無かった。

「……俺は答えたぞ。で、しつこいようだが聞かせろ。あんたも転生者か?。」

「ああそうだ」

「その口調の方がしっくり来るな。で、なんだってそんな着飾ってるんだ?。」

「話す必要は無い……不満が無いと言っていたが、フェイト・テスト・ロッサのこともそうなのか?。」

「そりやそうだろ。愚問だな」

「……………さて、聞きたいことは聞いたからもう用は無い。ナツミ」  
「えらほらさっさー!」

謎の掛け声と共に俺の前に降り立ったのは、ロリータファッションに身を包んだ——幼女だど!? しかし、優雅な恰好してる割になんか元気いっぱいな子って印象が……

「そいつの足止めを頼む。オレはジュエルシードの回収に向かう」  
「分かったつすあんちゃん!」

「あ、あんちゃん、だと……手強い!」

なんか予想した以上に庶民派なだけど! たい焼き買ってあげたいんだけど! 子守唄を聞かせてあげたいんだけど! やだもう可愛いいいいい! ……危ない危ない、煩惱が爆発四散するところだった。寸でのところで、紳士として踏み止まる<sup>もりなっみ</sup>ことが出来たぞ。

「あ、いけない。自己紹介からつすね。ジブン、森菜<sup>もりなっみ</sup>摘つす」

「お、俺は八高輪（養子にしよ）」

「……………ナツミ」

「あ、間違えたつす。ジブンはナツミ・フォレストつす。さっきのはその……………そう、偽名つすよ、偽名! ふはははは、引つかかったすね!」

良くも悪くも素直すぎい! アホだけどこの子絶対性格良いぞ。努力して眼を合わそうとしない辺り、間違いなく嘘だ。つーかフォレストって……………なにがどういう流れになってそんな名前が付いたんだ?  
?

「ナツミ、そいつと会話するな。そいつ絶対ピーマン好きだぞ」

「そんなんすか!」

「いや、俺ピーマン苦手なんだが……」

「違うじゃないすか! 実はこの人仲間とかじゃないすか!」

「違うからな! ああくそう! とにかくだ、そいつはオレたちの味方じゃない。殺さなくていい、その場にいさせるだけでいい! じゃオレは行くぞ!」

「させるか!」

「させないっすよ！」

振り返って疾走する優男を追うにも、ナツミと呼ばれた少女は通せんぼを示すように、右手に握られた傘を水平に構える。容姿に似合ったその黒いコウモリ傘は、この天気や空元では異様なものだが、手にした少女の姿によって不思議と絵になる光景だった。

「マトリヨシカ、あのデバイスは？」

『構造解析しておるが、普通のデバイスとは構造がまるで違う。恐らく妾わらわと同系よのう』

「そっか、あっちも神様のつくったデバイスなんすね」

あっちも……やっぱり向こうも転生者か。デバイスの言語が違うのはそういうことか。向こうのデバイスは、まるで花魁のような語り口を見せている。どうにも神のつくるデバイスというのは、古人の口調が多いらしい。趣味なのか？

「……うっかりだったんすけど、正直ちよつとすつきりしてるんすよ。久しぶりに自分の名を口に出来たこと」

「……あの変な名前はなんだ。なにが目的なんだ？」

なんだっけ……そうそう、ナツミ・フォレストだっけ。で本名が森菜摘だったな。意外とシンプルな偽名だな。考えた奴中々良い発想だな。

「ジブンにも分からないすよ。ただ、あんちゃんが言ったんすよ。オレとお前にとつての幸せな世界をつくるって」

「……言っておくぞ。それを言う奴の大半は碌なこと考えてないぞ」

「………確かに、最近のあんちゃんはなにを考えているのかよく分からないっす。けど、あんちゃんは優しいんすよ！ きつと悪いことなんて……！」

「おいおい、マジか……」

菜摘の周囲を中心から、なにか冷えた気配を感じる。

そこには確かになにも無かった。ぱきぱきと響く鋭い音と同時に、一帯から八つの突起物が生まれる。氷柱つららだ。なんの魔法かは知らないが、この少女、氷の魔導師か。

「大丈夫つすよ。足止めが目的すから、殺しはしないつすよ」

「待てい！ 逆に物騒な聞こえ方するんだけど!？」

「足に傷を負えばそれでいいんすよ！ いけ、アイスエッジ!」

「進撃せよ」と命じるように、コウモリ傘の先を差し向ける。その挙動を合図に、氷結された突起はミサイルのように放たれる。目標、俺。つてちよつと待て、足に当てる気無いだろ!？ 結構遠慮なく撃つて来てるぞ!？ このまま避けるだけしか出来んぞ。対応策を増やしたいということも含めて、躲しながら耳に栓をし、バンドナで眼を完全に覆う。

「……あの、なにしてんすか?」

「いきなりのことだが説明させてくれ。俺はフェミニストだから、こうしないと女性全般と渡り合えないんだ。耳栓もしているから、言いたいことあれば念話で頼む」

…言った直後に思ったが、普通に考えたら敵からそう言われて素直に応じる訳が

【了解つす】

あつたよ！ やだこの子素直可愛いよ。誘拐犯に掴まらないか心配になってくるけど、絶対善い子だぞ。流石幼女！ 多分俺にできないことを平然とやってのけるツ！ そこにシビれる！ あこがれるウー！

【輪には善い人みたいすから、ジブンの魔法を言っておくつすね】

【気前良すぎい!】

【あんちゃん言うに、分かったところでどうしようもないらしいつすので】

【自信がおありで。じゃ聞こうかな?】

【マトリヨシカ、後は任せたつす】

どうしてこう、この兄妹はちよいちよい話の腰を折りたがるんだろうか……向こうは明らかにわざとだが、こっちは天然という……可愛いから良いけどね!

【やれやれ、相手に手の内を晒すとは。妾が主は人の善い】

【俺に合わせて念話してくる辺り、そっちも大概なだけ】

【礼には礼で応えるが妾の流儀よ】

【格好良いな】

【さて、妾の能力じゃが——端だけを言うなら、能力は物質や物体の構造解析・改竄よのう】

おーい、急に意味が分からんぞー。大雑把にしか伝わんないって。もうちよつと簡単に言っておくれ。

【簡単な例えよ。空気中の構成物質を解析し、指定した空間を温度変化という改竄を行うことで、凍結させることも出来る、というものさね】

【ありがとうつすマトリヨシカ】

【……今全部理解したぞ。温度変化なんて手の内どころか、ただの一角だろ】

【ほう、頭は回るようじゃのう】

【物質と物体のって言ったんだ。眼に見えるもの全部をどうとでも出来るって思えば、そら怖ろしいもんさ】

【とはいっても、構造の知らないものを変えるのは出来ないんすけどね】

【それは弱点に入らんぞ】

【そうとも呼べるのう。この能力を少し応用するなら】

自分の周囲に感じる、魔力の反応。どこか熱っぽさが纏うような妙な暖かきがある。——これは、やばい……！

【空気中の酸素の可燃性を改竄させて、爆発させることも容易になるさね】

【エリアエクスプロード！】

予感は的中。げつ、と溢したと同時に、俺を中心とした箇所が爆発する。

声色を聞いた限りだが、彼女はさぞ無邪気に言い放つたのだろう。が、結構凶悪なことしてるからね？ 殺さないと言ったからには抑えているだろうにしても、任意で空間指定しての爆発魔法とかえげつないぞ。

けど生憎、こつちには切り札があるんでね。けど、戦う気は無いぞ。



「……なんすか、あの光は……？」

『蒼い、光だと……』

「俺は逃げさせてもらうぜ！ 幼女と戦闘とかまじ在り得んし！」

もう一度解説。今俺が発動しているリンカー・イグナイトは——  
まあザツクリ言えば、ただのブーストで、パワーアップだ。

魔導師には特有の魔力を精製するもの——リンカーコアなるものがあるという。その内で蓄積された魔力を解放することで、魔法の能力や身体能力とかの、自分の持つ能力が三倍近く向上する。どうだ、口にすれば簡単だろう？

けど、あまり長くは使いたくないんだよな。裏返せば、これは『ドーピング』なんだ。能力の限界以上を引き出せるが、はつきり言ってその無理に付いて行けるような訓練をしちゃいない。つまり、今のパンピーな俺が使って成果は出せても、その後で身体が悲鳴を上げる。茶道部がマラソンするようなもんだと思えばいい。

「は、速い……！」

当然、追い付ける訳が無い！ 今の俺はワイバーンより、ずっとはやい!! 良い対応だ、プレジデント！

……あれ、俺目隠しする必要無かったな。でも、目隠しや耳栓での戦闘するのは実は良いからな。この妙な特訓方法のおかげで、魔力の探知に関しては結構自信がついてきたからな。その気になれば、見えなくても魔力を辿って攻撃を躲せるし、気配で普通に戦うことも出来る。……俺も成長したなあ。

しかしあの優男め、なに企んでいるんだ……あいつを無視する訳にはいかんし、嫌な予感がする。あれはやっぱ碌なこと考えてないぞ……

「な……」

誰の仕業か知らないけど、あれをしたやつは相当のバカだ。こんな街中で、しかもところかまわずと言わんばかりに、緑色の閃光が一隅でちかっと点滅した。光に遅れて爆発音まで聞こえる。どう考えても遠慮なく魔法を使っている。

「まさか……あいつの仕業か！」

消去法で考えた結果だが、あんなバカをやらかしたのは恐らくあの優男だ。これは益々急がないと……！

「一体、ジュエルシードのことをどれほど知っているんだ!? 異世界を渡って来てまで、集める目的はなんだ!?!」

「話す義理があるかい!」

人の眼で見れば、奇天烈な光景かもしれない。街の空いた車道を一匹の緋色の狼とフェレットによる鬼ごっこが行われている。本来なら行く末は杞憂するまでも無いが、互いに人間程の知能を持っている。その攻防は最早や駆け引きは、獣の粋を超えていた。

攻防と表現したもの、その実はユーノの防戦一方が現実だった。単純に、アルフに比べてユーノの攻撃力というものは低く、愚直に対峙したところで勝算は極めて難しかった。

ならばとユーノは逡巡した。回避に専念し、捉えるくらいなら不可能じゃないと。言わずもがなフェレットの体躯とは小さい。その小振りによって狼の一撃は命中することもなく、向こうでは通れないところをその身体が難なく通過出来ている。アルフの目的ユーノの撃退という一念であり、然程形振りを構わずにフェレットに爪や牙を振るうアルフに対し、ユーノはただ回避する。余計な迎撃はしない。猛追を示すアルフに対してのユーノの目的は、

「くっ、ちょこまかと……!」

「今だ!」

「な、しまっ……!」

狼がその爪の一振りを躲され、憎々しく眼光を向けていた直後、その瞳は見開かれた。狼の周囲からちよつとした緑の光が発せられたと思えば、一瞬で象られた輪によって狼は捕えられた。

——猛追を示すアルフに対してのユーノの目的は、アルフの捕縛だった。及ばぬ、知恵で補う。ユーノはある種、八高輪と似通った戦法を取っていた。しかし、ユーノは確証は無かったもの上手いくと

いう要因は見つけていた。

それは体格の差。フェレットの小柄に比べて、狼の体軀は大柄。それだけでも、同じ距離を疾駆するだけでも疲れ方は違う。加えて、向こうは攻撃までしてくるから、疲労の増え方がかさむのは眼に見えてくる。敢えて補足するならば、アルフ自身が相手が力で押すタイプじゃないと早計したことだった。大した魔力が無いと低く見たことで、攻撃が大振りになったことも起因となっていた。

ユーノはアルフの傍まで寄る。アルフを捕えたバインドは四肢と身体を中心の五つ。そう易々と解けはしないと安堵してから、ユーノはもう一度疑問を口にする。

「……ようやく捕えられた。もう一度聞くよ。あんな危険ものを、一体どうするつもり？」

「……………」

「話したくならそれでもいい。けど、あれが、ロストログアが危険なものだということは知っているはず……」

「……………もう一度返すよ。話す義理は無い」

「この分からず屋……………」

図らずして、二人は悪寒を覚えた。振り返るまでもない。これには、魔力が込められている。

その夜を飲み込まんとするばかりに、濁りの無い緑の柱が二人に走る。果たして奔流の矛先がどちらに向けられているのかは定かではないが、二人は互いに、自分が狙われていると直感した。

ユーノは自分だけ避けようと思えば回避は可能だった。が、ユーノはアルフにかけたバインドを解いてから避けるもの、間に合うことは無かった。

……………瞬きは消え、また海鳴市内は宵闇に閉じ込められる。砲撃魔法の影響によって車道は抉れ、余波によって並ぶ建造物もがらつと破碎されている。

「おい、あんたー」

辛うじてバリアで直撃だけを防いだアルフは、困惑を半分を抱えながらもユーノに歩み寄る。砲撃を直撃したユーノは既に、息も絶え絶

えで気を失っている。

アルフは頭を悩ませた。理解は出来たもの、事態に呂律が追いつかない。要因は二つ。敵同士なのに自分を助けたこのフェレットと——自分たちに向けただろう砲撃の主が眼の前に来たことだった。

靴音が眼の前で止まったことをきっかけに、ようやくアルフは理解と脳内の逡巡が噛み合う。

「……セイジ、一体なんのつもりだい？」

「いや失礼、オレもうっかりしましてね。久々に魔法攻撃を行ったせいで、非殺傷設定に切り替えて無かったですね。いやあ怖い怖い」

あははと軽く笑うもの、セイジの行為は紛れもなく故意だった。

アルフが睨みを向けるのも無理が無かった。互いが衝突している合間に、明らかに封印を旨としていない魔法を自分たちに向けたのだ。況してや、彼の言葉通りを受け取るなら、その閃光を放たせたのは明確な殺意。

「しかし気に入らないですね。よりもよって、そっちが無事というのが不愉快極まりない」

「不愉快、だって……？ どうして？」

「どうして？ いやいや、別段大した理由じゃないですよ」

セイジは非常に温和な語調を向けながら——ぎりつと歯を擦らせる。

なのはとまるで違った、傘の持ち手に似た純粹な意味でのステッキ状のデバイスをアルフに向ける。アルフの後方にはユーノがいる。義理堅い彼女が、助けられたことからユーノを置いて逃げようと言う考えが浮かぶことは無かった。

その内心にも気付いたのだろう、柔和を保っていたセイジの表情から張っていた力が抜け、険しく歪む。その憎悪で吊り上った表情を初めて見たアルフにとっては、凍り付くものだった。

「——お前らが死ぬほど嫌いなんだよ」

デバイスにチャージしていた魔力を、ごうっともう一度放つ。

日本国内で限定すれば、同じ顔の人間と会う確率は約6%なんだって。

瞬く星の下で、閃光が舞い散る。

一つは金色、一つはさくら色の魔力。魔力で象られた魔力の光同士がぶつかりあう。

時折、空を泳ぐように画かれる二つの軌道は、時に互いが水平に滑り合い、時に重なり、交差する。視認すれば、軌道の正体は黒衣をはためかせる少女と白衣を纏った少女だった。尤も、飛ぶ鳥よりも速く、光の照らさない空間で縦横無尽に舞う姿を二人を捕えることは至難を極めた。

『Divine shooter』

『Thunder smasher』

ばちつと照射された金色の閃光と、ゆらりと飛空するさくら色の光弾が行き交う。相殺狙いで放ったもの、なのはの魔法は悉く潰される。咄嗟に右手を翳して、プロテクションを展開して防御する。

……内心、フェイトは不可解だと困惑していた。今向かい合っている高町なのはと名乗ったこの少女は、これまでの攻撃魔法の全てを一度も自分に向けていない。熟達者たるフェイトでなくとも、一度刃を振るうだけで確信していた。この少女は、まるで戦う気が無い。

——彼女の名前は、高町なのは。五人の家族と生活を共にし、今ではユーノというさっきのフェレットの魔導師と八高輪というあの男を家に招いて過ごしていること。利き腕は左。得意な勉強の科目は理系全般で、体育が苦手。趣味はテレビゲームにビデオやカメラと言った機器を取り扱うこと。実はどこでも寝れるという特技を持っていること。一人でいるのは寂しいから苦手なこと。喧嘩が嫌いなこと。ジュエルシードを回収する目的は、この街に住む人や自分の友達に危害に遭わせない為であること。自分と戦いたくないこと。

——それが、フェイト・テスタロッサが現状把握している、高町なのはの全てだった。とはいえ、彼女から一方的に語っているだけの状態でしかない。

それらに対して、フェイトが溢した自身の身の上や些末なことは、まだなにも話していない。知る必要は無いと考えていても、無意識に攻撃の手が緩んでいたのも事実だった。

「……分からない。そんなに戦いたくないの？」

「……フェイトちゃんは、伝えてもなにも変わらないって言ったけど、やっぱり、言葉にしないと伝わらないことはあると思うの。喧嘩したりするのは仕方ないかもしれないけど、なにも知らないで、ただ「敵だから」って理由で戦いたくないの」

「戦うことに理由を付ける必要は無い。私たちが目的が違っていて、立場も違う。相容れない同士は敵という関係でしかない」

「……だとしても、なのはは嫌なの！」

ひよつとしたら、あと一押しすれば泣き出すんじゃないかというよくな、弱々しい剣幕でなのはは否定する。さつきからジュエルシードのもとへ向かおうにも、フェイトが阻んでくるからではなく、どうしても自分の思いが一方的にしか伝えきれないことに、悔しさや悲しさが込み上げていた。

ぐつと、レイジングハートを手の平が痛くなるほど握りしめたと同時だった。街の一隅、ジュエルシードの反応がする場所でちかりと緑の光が瞬いた。

「……なに？」

「今の光は……セイジ……！」

僅かの時間、フェイトはなのはと光の先を交互に見て、自分に眼を向ける少女に背を向けた。「フェイトちゃん！」と呼んだ声に、フェイトは理由も分からずに心を軋ませながら、飛空する。

この瞬間だけ、なのははジュエルシードの回収という目的が脳裏から流れて行った。それ以上に意識にある想いは——他意の無い、純粹な衝動だった。

——わたしは、寂しい眼をしたあの子の友達させえになりたい——

「あ、あんた……」

「もう来たのか……」

「俺が来るのがちよつと速すぎたかい？ 自慢じゃあないが、俺は100メートルを12秒フラットで走れるんだ」

「普通に早いね！」

「だろうな、特にPRはしてないからな」

確かにそうだがアルフよ、それは現実的な話であって、普通にお前と駆けっこしたら間違いなく勝てないのは分かっているよな？ あと、これは半分は冗談だからな。走って来てないぞ。

外した耳栓は片方だけ。まだ装備しているのは目隠し用のバンダナと左耳の栓。アルフからしたら、意外なんだろうな。以前呆気なくぶっ飛ばした相手に、庇われてるからな。

二人の正面に立って、優男の放った照射をほぼ至近距離で防いだものの、余波や衝撃を完全とまでいかなかったから、バリアを構えた左手が軽く火傷したようにただれ、身体もそこに傷を負っている。ま、後ろの二人に比べたらまだ軽傷だけだな。こっちはまだ片足立ちのやじろべえ（……伝わるよな？）も出来るぞ。

「……なんだその恰好は？ 新手のプレイか？」

「うっさいわボケ！ 俺だっけしてたくて目隠しと耳栓してねーよ！」

「ま、まあお前がそこまで言うならそうことにするが……」

「するんじゃあない！」

「……そんなことより、ナツミが逃がすとはな。アイツめ、ヘマをしたか」

「なに言ってるんだ。俺が一方的に逃げただけだよ。……本当ならお前のことは殴らないつもりだったが」

右手の中のアヴァロンの切っ先を、すつと静かに向ける。ああすまん。実はちよつとだけムカついている。

非殺傷設定にしているから、斬るほどのダメージなんて与えられない。だが、鉄パイプだろうと木刀だろうと、殴られれば痛いだろう？ 幸いというか、相手は男だ。仕置きの一つでもしないと気がすまん。目隠しも耳栓も必要ない、ポケットにそつと戻す。

それに、もう一つ杞憂もある。すぐそこにジュエルシードがあるが、優男は然程興味を示す様子を見せない。これは紳士の勘だが、俺が取りに行けば後ろの二人が危ない。この状況を見るこの二人を襲ったのは間違いなくこいつだ。大怪我も負って動けない二人を放置するとか、余裕で人間じゃない。だから、こいつは俺がどうにかするしかない。

あとこの場にいないのは、俺を追っているだろうナツミと、対峙しているだろうなのはとフェイト、クロノくらいだ。ジュエルシードに關してはなのはに任せるしかない。

さて、もう一度俺は、リンカーコア内の魔力を解放させる。解放された魔力は、身体から溢れて、蒼い色の粒子となって形を変える。

「——女性に手を上げたのも大罪だが、人の友達を傷つけたんだ。覚悟はいいか？ 俺は出来ている」

「……なんだ、その姿は？」

「ただの界王拳さ！」

「それは赤いだろうが！ いい加減にしろ！」

「ならトランザムだ！」

「それも赤いだろう——」

わりつ、最後まで聞きたかったが、そういうテンションじゃない。なにせ放出する魔力量を初め、俺自身の能力も三倍増しなんだ。一秒未満で距離を潰して、顔に一発お見舞いするくらい余裕なんだ。

ドーピングした状態に加えて、勢いの付いた一発だ。中々吹っ飛ばす。すげえ、人って殴られてあんな飛ぶのかよ……俺殴った本人だが、信じられねえもの見ちまったぞ……

「ぐっ……随分躊躇いなく殴ったな……！」

「まあな。だがまだやってやるぞ。お前がッ、泣くまで、殴るのをやめないッ！」



「ちつ、面倒なのに絡まれたもんだ……」

「お前が言うか!？」

「オレが泣くまで、と言ったな? なら泣かせてみる」

「強気だな。このクライマックスな俺を止められると?」

「いや、出来るとは思っていない。オレの、いや、このパラレルハーツの能力は偏っているからな。はつきり言って、威力の強弱に関係なく砲撃しか出来ない」

「またピーキーなこと……」

「さてと……そつちこそ泣いて喜べよ? この時期でこいつ戦えるのは本来有り得んからな!」

あまり引つ張らんでくれよ。こっちはダラダラしているだけで、解除後が怖いんだから……

例えばだが、なにかを呼び出すように、優男は自分のステツキの先を少し先の地面を指し示す。

「検索座標、NMV2-12。停留時間は五分。対象名：シグナム!」

ごうつと、篝火のように炎が広がったと同時に、まるで大がかりな手品か映画の映像技術のように、光の粒によって女性の輪郭が生まれしていく。

女性の第一印象は、まるで女騎士だった。その印象に違わぬ、凛々しい表情と鎧のようなバリアジャケットが眼に入る。手の中に納まる剣が画になりすぎている。言っているのか、その印象と若干異なり、女性的な桃色の馬の尾は背中まで流れ、アルフとは違った乳房に眼が行くのも、また男としての本能でね……はつきり言おう。なんかエロい。ていうかこう、こいつも画像検索で見たことあるような……うん、思い出せん。だがエロい。

眠りから覚めたように、その女騎士は眼を開かせる。眼から放たれる光は鋭く、並大抵の男どころか、魔導師相手でも勝てないのは明白だった。

「……………はっ? お前はなにものだ?」

状況は分からないが、ここにいてこと自体に疑問があるようだ。

となると、言葉一つで簡単に味方にもつけられるはず。

「いい、いいか。よく聞いてくれ。俺は敵じゃない。あんたの後ろの人間の方がやばいぞ」

「いやいや、まさかそんな。あの男は、君の主に刃を向ける者ですよ。あの手の中のものを見れば分かるでしょう?」

「おまつ、なに言ってるんだ!」

「——なるほど。状況は知らないが、主に仇なす魔導師と聞かれれば、無視も出来ないな」

引き抜いた剣先が俺に向けられる。凜然に整った表情は、文字通り俺を眼の仇にと認識し、劍幕を張る。つーかちよい待ち。主ってなんだよ。召喚したのお前だろうが。考えるとややこしいがこういうことか。こいつは別で誰かに仕えている。

……ああくそう、折角この優男を存分に殴れると思っていたのこれかよ! 紳士である俺が幼女に手を上げないのは当然として、女性に暴力とかマジで有り得ん。急いで目隠しと耳栓をする。

「ユ一ノ、まだ生きてるか?」

「え、ええなんとか……」

「今すぐにアルフを連れて、転移魔法で逃げろ」

「でも八高さんが……!」

「怪我人が恰好付けるなつての。心配するな、こつちには考えがあるんでね」

「……分かりました」

なにか痛々しく呟いたあと、俺の後方は淡く光ったのかもしれない。魔力の気配が爆発し、気配は消えた。よし、二人は行ったか……さて、こつちからが鬼門だな。こつちの考えなんだが——ある訳ないだろ。理由は分からんが、女騎士は俺を狙うし、おつかない気配まで向けられる。感じる敵意は二つ。その二つを凌げつて? 優男一人ならどうにかなったが、この女騎士は恐らく無理だ。はっきり言う——俺は負ける。下手したら、ここで死ぬ。

「仲間を逃がしたのか。だが、一人で凌げると?」

「無理。時間稼ぎが精々だな。ていうか、俺に合わせて喋っていい

のか?」

【耳に蓋をしてよく言う。どうにもお前からは邪気が無いからな。だが、主に刃を向ける以上容赦はしない——だがそれとは別で、お前のそのデバイスと剣戟を見<sup>ま</sup>えたいのも本音だ】

【二対一でその台詞はいかんぞ】

【礼を失するのは騎士の恥だ。あの男と少し話をする、待っていてくれ】

おお、なんと優しい……! あれか、これがその筋で言うところの「おっぱいのついたイケメン」か。うむ、紳士道と騎士道か……意外と仲良くなれるかもしれないな。こんな状況じゃなければ、俺たち結構話通じるんじゃないか?」

【………待たせたな。随分苦い顔を向けられたが、了解は得たぞ】

【そうかい。気遣い痛み入るよ】

【…不思議な男だな。敵である私にすら礼を払うか】

【礼には礼を。騎士に限らず普通のことだろ?】

逃げようにも逃げられない空気っぽい。正直、俺としてはジュエルシードを回収しに行きたいんだが、なんか果し合いみたいな空気になった以上、ここで逃げたら俺の株だだ下がりは免れない。かなり悩んだ挙句に、俺は女騎士との果し合いを選んだ。

【……名乗りが遅れたな。私はヴォルケンリッターが将、シグナムだ】

【シグナル?】

【シグナムだ!】

【す、すまん! そんなマジでキレイなでくれって!】

【全く調子の狂う……】

【俺は八高輪。ご覧の通り、少年だ。——さて、時間も無いからさっさと始めようか】

ただの勘だけど、決闘を望んだシグナムだ。こうして好意的に果たし状を受け取られる姿をどう想像しても——ふっと、冷静に笑う姿が容易に浮かんだ。戦闘狂とは違う、さながら冒険を眼の前にした探究者のような、純粋な笑み。かといって、驕りは恐らくない。将と名

乗ったが、彼女自身は一介の剣士として戦うのだろう。

戦闘がスポーツとまるで違うのは分かっているつもりだ。が、なんだろうな。確実に負けは決まっているのに、わくわくしている。俺実はサイヤ人だったのか？ それなら言い直そう、オラわくわくすつぞ！

——おっと、是非とも勘違いしないしてほしいことがある。イグナイトしても勝てる気はしないが、俺は負ける前提で闘う気はないぞ。胸を貸すと言うか腕を試すつもりで挑むつもりだ。……ちよつと忘れるところだったが、シグナムは女性だ。

【——参るー！】

魔力を纏っているだろう剣が、地を蹴った。高速で近づく剣の一振り、銃部分から引き抜いたブレイド部分で受け止める。予想通りとどうか、シグナムは不満げな色を滲ませて溢す。

【それはなんの真似だ？】

【俺が受けたのは果し合いだ。殺し合いじゃない】

【…なるほど、それがお前の騎士道か】

【惜しい。紳士道だ】

シグナムがそう溢すのも無理はないかもしれない。真っ向からの剣の勝負と言っているのに、シグナムの剣はブレイドの峰部分と打ち合ったのだから。

凄いな妙な感覚だった。こんな状況だっていうのに、女子剣道部の主将との腕試しをするような昂揚感があった。敢えて経験の無い剣道で例えたけど、こつちの近しい感覚で言えば、陸上部の女子の先輩と勝負しているような感覚。全く悪く言うつもりは無いが、どうにもシグナムとは異性という関係より、子弟とかライバルとかの方がしっくりくる。そういうえば、生前の小学生の頃は女子と傘でのチャンバラとかしたことあったな。かなり場違いだが、なんかそれを思い出してなんか楽しく思ってしまう。

耳に微かに入った、鉄同士の衝突音。ドーピング中の俺がどこまで通用するか試させてくれな。

「セイジさん、ジュエルシードの回収しました」

「ほう、それは重畳。ではクロノ、それを」

「……僕は、どうすることが正しいのでしょうか？」

クロノは、手の中のジュエルシードを見つめながら弱々しくぼす。見慣れたものと違う様子に怪訝にしながら、宝石を受け取ろうと伸ばした手を下ろす。

「……と、言いますと？」

「フェイトたちの為、僕自身の為、彼女の為……僕は、自分の目的も、生きている理由もよく分からなくなってきたんです」

「彼女……高町なのはと逢ったのですか？」

「……！ なのはを知っているのですか!？」

「ええ。……これは善い兆候だな」

セイジは内心で、醜く頬肉を歪ませる。不確定要素が現れたことに苛立ちがあつたもの、この思わぬ朗報によつてくくくつと笑う。なのはを知っているのか……それは、セイジの台詞でもあつた。ごく小さな声で漏らしたセイジの独白を、クロノが聞き取れることは無かつた。

「……正直に答えて下さい。クロノはどちらにいて、記憶の手がかかりとなりそうですか？」

「……ひよつとしたら、彼女——いえ、なのはだと思えます」

「ほう、それはそれは……」

——セイジが悩ましげに手で覆った内側の口角は、醜く、歪んで吊り上つていた。都合は益々に、自分の方へ好ましいように転がっていくことに、喜びを隠しきれなかった。だが、セイジは決して口角以外の表情に出さないよう努めた。

「なるほど。つまり、近道は向こうかもしれないと言いたいのですね？」

「……はい」

「それなら仕方ありませんね。好きにどうぞ」

「——え？」クロノにとつては、あまりに予想外の一言だった。或いは、事態の変わり様によつては戦闘も覚悟していたほどだったから、文字通りの肩透かしを受けていた。今まで自分に付いていたはずの男は、味方から外れることをあつさり認めただのだ。さらには、

「それじゃあそのジュエルシードは、クロノに譲りましょう。余所の魔導師に、特にプレシアに気取られる前に早々に持ち去つて下さい。……そうそう、丁度良い。S2Uを返しますね。機能は戻りましたので」

と、目的の回収物まで譲渡してくる。そこで初めてクロノは、セイジ・フォレストという人間に薄気味の悪さを覚えた。彼の目的や考えがまるで見えてこない。彼自身になんの得があつて自分を離すのか。クロノはまるで理解出来なかった。

前からそうだった。アルフやフェイトに対しても紳士的な態度はあつたもの、どこか人を寄せ付けないというか、どこか違和感を隔てて言葉を交わしていた。そんな彼が壁を張らないのが妹のナツミとクロノだった。クロノ自身には当然、なぜ自分の扱いが甘いのかは分かつていない。

なんにしても、自分に対して悪意は向けられない。クロノは、セイジが手にしていた名刺サイズのカードを受け取る。ようやく戻つてきたもう一つの手がかりに、クロノはふうつと安堵の息を溢す。

「あんちゃん！」

「ああナツミ。こつちの首尾も上々ですよ」

「おお、それは良いっすね！ …あれ、輪にいは？」

「アレなら足止めさせてますよ。まあそんなことより——」

「させないっ！」

突如として一声と共に、三人の頭上より黒い影が降り立つ。伸びた手の先は、クロノの手にしたジュエルシード。

その声の主の介入は、クロノの動きを鈍らせるには十分な効果があつた。第三者の横合いが来るとしても、なのはか八高輪。そう踏んでいたからこそ、彼は彼の容姿に対して、疑問が湧き出た。

その実、声の主も一瞬だけ向かい合つたクロノに対して、張り巡ら

せていた思考が止まった。

それでも、辛うじて黒衣の少年はクロノの手の中のジュエルシードを奪取した。

「誰すか!？」

「あの姿、まさか……しかし、来るのが早すぎる」

セイジがぎりつと歯を擦らせたと同時に、更に場に降り立つ二つの影。片や白の衣を纏い、片や黒の服を纏った魔法少女。その二人——特に、なのはにとつてその光景は文字通りに、眼の疑うものだった。

「クロノ君が……二人……?」

雰囲気としてはやや成長しているもの、顔や姿はまるでクロノ・ハーヴェイに他ならなかった。

しかし、対峙したこの瞬間で、なのは二人は違う人間だと認識させられた。二人は似たように困惑した表情を浮かべるもの、見慣れていない方のクロノが感情を表にしていた。

「セイジ、これはどういうこと? なにが起きているの?」

「……時空管理局の魔導師ですよ。厄介ですね、一度撤退です!」

「くっ……待て!」

即座に放ったクロノのバインドはフェイトとクロノに発動されるが、さつと躲したフェイトに対して、困惑で足を奪われたクロノは呆気無く拘束された。

「あんちゃん! クロノが!」

「今は逃げるのが先決です! フェイト!」

「まだアルフが!」

「二度も言わせないで下さい! 速く!」

猛追する黒衣の少年に、セイジは緑の巨大な柱を撃ち放つ。非殺傷設定を機能させていないデバイスの一撃を、クロノはシールド魔法で防護する。三人がどこかへ飛び去ろうとしたところを追ったことで、街を背にする形となったことから回避という選択肢は除外されるほかなく、クロノは一心に受け止める。

その強力な砲撃魔法を受け止めている間、フェイトは揃った三人を連れて転移魔法で姿を消した。

……そして、砲撃を撃った本人が消えたことで、魔法の一撃もしゅつと消えた。クロノは「くつ」と深くを漏らすが、幸いジユエルシードを回収出来た。それで良しとするように、静かに街に降りた。

「さて、君たちに聞きたいことが色々あるんだが……」

「あのすいません」

いざ正面切って話してみると、このクロノはやはり自分の知る、クロノ・ハーヴェイとは違う。意を決して、なのは尋ねる。

「あなたは、クロノ君と関係のある人、ですよね？」

「それはぼくが聞きたいよ」

「え？ どういうことですか？」

「ぼくはクロノ・ハラオウン。時空管理局の執務官だ。 ……聞くのを憚れるが、君の名前は？」

「……僕は、クロノ・ハーヴェイ」

「……クロノ・ハーヴェイ？ やはり聞かない名前だ」

やはりなにも分からない。クロノ・ハラオウンは、腕を組みながら、悩ましげに低く唸る。だが、一人で考えても無理があると判断し、ハラオウンは「まあいい」と溢す。

「どの道、君たちのことは詳しく聴取するつもりだ。ひよつとしたら、ぼくらが追っている異常事態と関わっている可能性がある以上、連行させてもらう」

「……………」

「その白い君もだ。同行を願う。 ……話を聞くだけだ、悪いようにはしない」

「その、クロノ君はどうするの？」

「ぼく……いや、彼のことか。正直どうとも言えない。彼は相手側に付いていた魔導師だから、元凶だとしたら話も違ってくる ……そういう意味でなら、君もそうなる」

なのはは、不安を拭えないまま二人のクロノを交互に見る。なのはの不安を見て取れたクロノ・ハーヴェイは、静かに問う。

「異常事態、というの？」

【それらを含めて、全てお話するわ】



「艦長」

突如として、液晶モニターのような小さな画面が、空間から現れた。艦長と呼ばれた画面の女性は、ミントのように澄んだ髪色を靡かせ、ひどく温和な表情を浮かべている。艦長と呼ばれるだけあり、身に纏った青を基調とした制服も自然に覆い、その背後にはどこか広い一室のよう。

「それに執務官同様、わたしも聞きたいことがありますので。よろしいですか？」

女性の声音は、決して高圧的なものではない。だけど、どこか晴れやかとも言いきくい表情に変わる。余程の事態に関わっているのかもしれない。

「僕は構いません。だけど、なのはを巻き込むのは……」

「わたしも行きます。クロノ君が悪いことなんてそんな……」

「疑うようなことをしてごめんなさいね。でも、わたしたちとしても無視できない問題なので。クロノ執務官、二人をアースラへ案内してあげて」

「……はい」

そこで、宙に浮いたモニター画面は消えた。クロノは振り返り、二人を静かに見る。

既に戦闘は終わり、空気も穏やかになっている。少しばかり街の被害が出ていることに心を痛めるのは、冷静になってあることに気付いた。ひよつとしたら、ここに来るだろうと思っていた人物が一向に来ない。

……フェイトと対峙していたことで向かえなかったけど、確か八高は誰かと戦っていた。それに、ユーノの姿も無い。不安になって、なのは駆け出そうと振り返った瞬間、

「おお、無事だったか」

「や、八高さん……」

なにがあったのか分からない。ただ、八高輪はこの場において一番の重傷を負っているのは明らかだった。

明らかに切り傷にまみれた全身、ガンブレイドを杖代わりにひよこ

ひよこと身体を擦らせながら、なのはと向きあう。足の震え方が斬られた以外のものの影響か、不自然な揺れ方を刻んでいる。それでも、彼はなのはを心配させまいと笑う。

「大丈夫ですか!? その傷、どうしたんですか?」

「ん、ああ、ちよつと熟達者相手に手合せしたが……見ての通り完敗だ」

「その……脚も、斬られたんですか?」

「いや、これは多分筋を痛めまくった」

「そ、そんな……! 八高さん、陸上部があるんじゃない?」

「ほとんど不慮の事故みたいなものだ。そんなに気にするなって。だがこれだと、翠屋で働きにくくなる……ちよい待ち。これどういう状況だ? なんでクロノが二人も……?」

さしもの年齢を重ねた転生者であろうと、その光景には驚かされる。彼の視界に入るのはなのはと、バインドで捉えられたクロノと、雰囲気の違うもう一人クロノだった。

「ええつと……多分だが、クロノ・ハーヴェイはあの捕まってる方、なんだよな? どうなってるんだ?」

「君も魔導師か……情報は多いに越したことは無い。君も来てもらいたい」

「……どっか?」

八高輪にとつては至極まっとうな質問にも関わらず、クロノ・ハラオウンは嘆息を吐く。怒りを覚えるより、「なして!」と心でツツコミが先行した八高は、この揃った状況で理解した。経緯は分からないが、自分のいない間に説明は大方の説明は済んだらしいと。

その意図を表情だけで汲んだクロノ・ハラオウンは、ふうつと小さく息を吐く。

「……こちらでも話がしたいところだ。案内するから、付いて来てほしい」

好きなことで将来を選ぶか、得意なことで将来を選ぶかで自分の事情も違ってくるものなの

「行けよ、アストラル!」

シリウスとは違う、誘導性の高い魔力弾を撃つ。単純な速度でならシリウスに劣るが、その威力と操作性が高い。そういう魔法だが、俺としては陽動として使うのが主にしている。つまり、相手を動かす為の放っているだけ。シグナムほどの達人になれば当然、速度の劣った攻撃を魔法を避けるなんて容易い。況してや、時々切り裂いているし。眼隠しても分かるんだよな。アストラルがおかしい消され方されてるから、多分斬られている。

だが、あくまで陽動だ。当たれば儲けもの。そう割り切れば問題無い。なんにしても、誘導弾を相手にしてくれれば俺には都合が良い。俺はこうして、蝶のように揺れる蒼い球を囿にして、こっちが本命とすればいい。

だが、やっぱり届かない。魔力球の全ては斬られ、逆刃に構えられたガンブレイドの一振りすらも弾かれる。それどころか、近づいたところを斬られる始末だ。意外と容赦なく切り込んでくるぞ!? 下手したら、イグナイトで強化してなかったら腕の一本は飛んでたんじゃないか!?

【未熟な腕で私と互角か……その速度や魔力、どうやら魔力解放による能力上昇か】

【慧眼すぎてなけるぜ……】

なんでそんなすぐバレルんだよ……いや、それほど分かり易いか。どっちにしても、シグナムの実戦経験から来た部分が大きいだろうな。付け入る隙も無いし、突き崩せる気がしない。とにかく、純粹に強い。

しかしまあ、こっちは能力上昇なんて裏技までして闘っている

(こつちがそれなりに本気じゃないにしても)のにだ、なんで互角で済んでいるだよ。経験値とか場数の差っていうのははつきり分かるけど、少しも押せる気配が無いのは流石というか……うん、とにかくへこむ。

【だが、私を相手に手を抜いて勝てると思われているのは心外だな】

【それこそ心外だな。俺は意地張った上で勝ちたいんだよ】

【……面白い男だな。だが、なぜ主を狙う?】

そうそう、一番の疑問がそれ。主ってなんなんだよ。こいつ従者なのか? こいつより強い主人とか想像したくないんだが。RPGでいうあれか。ラスボスの他に裏ボスがいるっていうやつか。冗談じゃないっての。

【正直狙う理由が無いんだが、なにか悪どいことをしているのか?】

【逆だ。この行いは、我らの独断だ】

【独断だと? なんの為に?】

【——主の為だ】

結局、シグナムの言葉の意図は分からない。決着と言うには実に呆気なく、シグナムはそれだけを口にしてから、姿を消していた。ふつと魔力の反応が消えたことが気になって眼隠しを外したら、綺麗さっぱりにいない。なにがどうなったのかは分からない。ただ分かっているのは、シグナムという剣士は一途だということと、純粋な手練れということだけ。普通にやっていたら絶対勝てなかったっての。つーか今でもほとんど負けているようなもんだし。

……ふと思っただが、俺の戦績って今、2戦0勝2敗だよな?

アルフとシグナムに負けている……いや俺は負けていない。俺が負ける時は、矜持をかなぐり捨てた時だ。同じ負けにしても完全敗北は……シグナムでしている。普通に戦ってこのザマっておま……くそっ、やられたっ!

「うおお、広い……」

よし、気分を変える為に辺りを見渡そう。この空間は、歩いている

だけでなんかわくわくする。

なんか俺さ、転生してから広々とした場所によく行ってる気がする。すずかの屋敷にしても驚愕を覚えたが、それとは別ベクトルでこっちの衝撃もでかい。すずかの屋敷に行ったときは、職員室に呼ばれたような、どこか（勝手に）威圧的なものを感じていたけど、こっちはそうでもない。むしろ、かなり感動している。

なって名前だっけ——そうだ、次元巡航船・アースラだ。中の設備というのは、いかにもなデカイ船の中で、ちよつと物騒な発想だが俺戦艦とか乗るのつて初めてなんだよなあ。こういうさ、巨大な乗り物とかロボットに乗るつて男のロマンだろ？ ましてや航行艦、ときめかないなんて嘘だ。ロボットや邪気眼に心を躍らせない男なんて、全て嘘です！

案内されながら、簡易的に俺たちの素性を明かされる運びになった。なんか悪い言い方になったが、「どこの世界の魔導師なんだ？」という問いに対して、「いや、俺たちそもそも魔導師じゃないんだけど」という返しからの流れで生まれた会話ではあるが。どうにもクロノの見解としては、現地の魔導師として認識されているのがちよつと違和感あるけど……元は一般人だからね。ちよつと魔法が使えるだけの普通の人だからね？ ……普通の人ってなんだっけ。

「そうだなのは。ユーノとアルフは見たか？」

「ううん。見ていないです」

「一体どこまで逃げたんだか……」

「どうしてユーノ君とアルフさんを？」

「ちよつと込み入った事情だが、なんか内輪揉めっぽいこととしてたから、二人して転移魔法で逃げたんだよ」

「ああそうだ。いつまでもその恰好じや窮屈だろう。バリアジャケツトを解除してもらって構わない」

「俺はこのままにさせてくれ……」

変身解いたら杖代わりするものがなくなるんだ、勘弁してほしい……一応なのは隣で変身を解いているけど、俺はスルーしてほしい。

今でこそ普通の空気だが、少し前、時間にして二分ほど前にはとクロノの間で微妙な空気が流れていた。クロノは自ら、自分はフェイト側に付いていた魔導師だと自白したが、その気まずさも長くは流れなかった。それだけを言ってから「今はもう、集めることに固執していない」と、俺に言ったことと同じことをなのはに伝えたことで、わかまりもあっさり解消された。一時はどうなるかと思ったが、一安心だ。ビバ友愛。

さて、聞こうか聞かないか迷ったったものの、やっぱり興味があるものは仕方ない。タイミングもちょうど良いし、一度唾を飲んでから執務官を自称したクロノに尋ねる。

「ええつとだクロノ……ハラオオン？」

「ぼくはクロノ・ハラオウンだつ！」

「くつ、言いにくい名前だな……クロノ……ハラ、オ、ウン！」

「わざとらしく呼ばないでくれるか!？」

いや、むしろそんな風に滑らかに言える語感してないぞ。自分のファミリィネームだから気にしてないだろうけど、ちよつと練習の必要な呼び方だぞ。一言一言、意識して言わないと難しいんだぞ。

「まあそれは良いとして……」

「良くない！」

「さて話を戻すがクロノ……執務官。俺はまだ聞いていないんだが、クロノとはどんな関係なんだ？」

「……それは僕も知りたい」

「それはお前が記憶が無いからだろ」

「嘘みたいな話ですが、僕の持つデバイスともまったく同じなんです。一体どういう関係なんですか？」

「……ぼくだって知りたいよ。同じ顔をした別人どころか、名前だって同じだ。おまけに、所持しているデバイスまで同じらしい。興味が無いなんて言ったら嘘になる」

さっぱりだと言わんばかりに、クロノ執務官は両手を広げる。

なるほど、こうして見比べるとまるで別人だな。クロノは、どこか儚げでか細い。少年と呼ぶには不相応な佇まいと瞳の揺らぎを見せ

ている。

一方でクロノ・ハラオウン（失礼、噛みました）は、クロノより三つほど年齢を進ませたような外見をし、至ってクールな態度を取っている。が時折見せる少年らしい不敵な表情が垣間見える。クールという印象が伝わりにくいかもしれないが、その気は無かったが俺が振り回しているからな。軽く肩で息をしているのがその証拠だ。

「で、もう一つ質問なんだが……追っている重要事件というのに、俺たちがどう関与しているっていうんだ？」

「それを今から聴取する」

もう一つ追記。クロノ……執務官は割とお堅い。……ん？ クロノ執務管は割とお堅い……ラノベのタイトルみたいだな。しかし売れにくそうだなあ。なんか話が動かしづらそう。主人公よりその周りが色々解決しそう……俺の印象なんだけど。

なんてどうでもいいことを考えながら、スライドされた扉の向こうをくぐって、びびった。

「……………え」

すつごい変な声が出た。なんだここ、どこぞの京都の風景を切り取ったような場所は……

広がった室内は、実に風情に溢れている。なぜか設置された桜の木、和を醸す置き傘、かこんと鳴るししおどし。瞳を閉じて静かに正座する女性は、固い制服を身に纏っていることも相まってか、なんとも奇妙な印象だった。ちよつと着飾った言葉を並べたが、かなり雑に言い切ってしまうえば、かなりシユールな光景だった。和風っぽいではあるが、なにかがずれてる様な……微妙に絵になるから口にはしないけど。

こちらに気付いた女性は、ひどく温和な、それこそ母性的な笑みを向ける。年齢としては桃子さんくらいか？ なんにしても、笑顔の優しい人だ。保母さんと言われても信用出来るぞ。でも事務的に制服を着ていて、この特別としか言いようの無い一室にいるんだ。なんか普通の役職じゃないだろうなあ。

「こんにちは御三方。わたしはリンディ・ハラオウン。この艦の艦

長を勤めています」

「……………」

温かな笑みを向けられている中、クロノはまるで幽霊でも見たように眼を見開かせている。それはそうだ、自分と同じ顔をした人間と同じ苗字をした女性がいるんだからな。複雑だがつまり、この女性はクロノ執務官の母親なんだよな。

「…………艦長、どうしてここに呼んだのですか？」

「顔を見ていれば分かるわ。彼らは首謀者じゃない」

「…………首謀者？」

…………今更で驚くタイミングを失ったが、この人艦長なの!? どういうことだよ。リリカルの世界の婦人というのは、特殊ななにかを持っているのか!? 桃子さんが腕のあるパティシエだったのは聞いたことあるけど、妙齢と呼ぶにも早いだろうこの人が艦長っておま…………

「その前に一つ確認するけど、ジュエルシード…いえ、ロストログアについてどの程度知っているの？」

「僕はそれほど…………願いが叶う石という程度です」

「俺は概ねですけど、異世界のオーパーツという風には伺っています」

「わたしもです…………」

「オーパーツ…………成程。厳密に言えば、進化し過ぎた文明や技術において取り残された危険な遺産…………となるけど、その認識も正解ね」  
「ぼくたち時空管理局や保護組織が、正しく管理しなければいけないものだ」

「つまり、ジュエルシードもそのロストログアの一つ、ということですか？」

「そうよ」

なるほどね。それなら願いが叶う石という途方も無い力の出処も理解出来る。しかしまあ、なんでそんなものつくろうと思っただんかねえ。やっぱあれか。願いが叶うって言うんだ。つくったやつもなにかしら願いがあっただらうな。悪巧みじゃなければいいけど。

「あれは次元干渉型のエネルギー結晶体だ。流し込まれた魔力を媒



体にし、次元震を引き起こす危険物とされている」

「次元震？」

「書いて字の如く、この次元空間における地震、と思っていいわ。それが大きいほどそちらの世界にも影響は出るの」

「……次元つて規模ということは、下手したら俺たちの世界が無くなることも」

「充分に有り得る話だ。幸い、大きな地震を察知する前にジュエルシードの場所も特定出来た」

「それも、今回は特別幸運なことなの。本来わたしたちは、別の目的でこの世界に訪れたの」

ここまででも重要な話だと言うのに、クロノ執務官はふうつと重い荷物でも降ろすような溜め息を吐く。対して艦長は静かにお茶を飲むが、それ俺の数え間違いじゃなかったら、ブロック型の砂糖を6個入れたやつだよな？ 両隣で座るクロノとなのはまで、眼をぱちくりとさせているぞ。

「この映像を見て欲しいの。これがなにか、分かる？」

艦長は途端に、神妙な声色で問う。どうやら問題のある画像と見た。

宙に映し出されたモニター映像に俺たちは眼を疑った。文字通りに空間に亀裂が入っているのだ。映像は、船の外をおどろおどろと流れる次元の一部が、今にも割れそうなコップのようにヒビが入っているものだった。……考えすぎだなと思ったが、なのはとクロノも悪い予感を覚えたのか、表情が曇っている。いや違う、答えは分かっているが言いたくない、という色合いだ。ひよつとしなくても、俺たちの答えは一致していると豪語出来る。誰も言わなくて罅が開かない状況に陥りそうになったから、代わりに俺が答える。

「……ひよつとしなくてもこれって、空間にヒビが入っている映像、ですよ？」

「……そうです」

「……どこで撮られた映像ですか？」

「……恐らく君の想像している通り、君たちの世界の近くだ」

マジか……言われてもまだ信じられないぞ。しかし、これで一つ確信した。空間に入ったヒビ、ということは割れる。そうになると……ねえ。なんつーか、そんな瀬戸際な状況の中でいたことに気付かなかったんだが……でも一つ分かって来た。

「……つまり、亀裂の存在を感じしてこの世界に来たら、ロストログアに行き当たった、ということですか？」

「その通りだ」

なのはと俺の意見はまったく同じだったようだ。おずおずと口にしたなのには対して、クロノは腕を組みながら首肯する。

「我々はこの事象を仮に、次元亀裂と呼称しています。今でこそ小さな亀裂ですが、程度以上の時間も経過しているので、断裂する危険性があります」

「本格的に断裂すれば、真っ先に君たちの世界が呑みこまれるかもしれない。いや、それを皮切りに他の世界も巻き込むかもしれない」

「亀裂の入った次元空間の修復。それが、我々がこの世界に訪れた本来の目的です」

「そんな……！ その亀裂はなにが原因で……！」

「それが一番分らないところなの。気付いたら存在していたとして言えないわ。管理局でもまだ把握しきれていない部分が多くありますので。ただ、大よそ半年前とは推定されているのは確かです」

「半年前……」

クロノは隣で意味深に復唱する。伏せた眼が関連性を語っているが、その微かな空気の変化に気付かず、クロノ執務官は話を続ける。

「話をまとめよう。ぼくたちは本来、亀裂発生の調査と修復作業が目的でここに訪れた。けど、この世界にロストログアを発見した。偶然ではあったが、僕はこれを幸運と取っている」

「あ、ちよつと待てよ。今思ったんだが、空間にヒビが入ったのつて、ジュエルシードが原因じゃないのか？」

「わたしたちもそう思っていたのですが、そうと断定するにはあまり腑に落ちない点があるのも事実なのです」

「腑に落ちない？」

「これほどの事態だというのに、次元への干渉が少ない。ロストロギアが引き起こしたものにしては、次元への干渉が比例していないのです」

ああなるほど。次元空間が裂けたという事態の割に、それに対する変化が少なかった、という訳か。確かに俺たちも気付かなかったからな。あんなのがあれば、なにかしら影響があるはずだよな、普通は。となると……

「……魔導師が引き起こしたもの、と?」

「その可能性が高い」

「ちよつと待ったクロノ執務官。そんな真似が出来る魔導師がいるのかよ!？」

「それ一つだと断定は出来ない。けど、腕のある魔導師がジュエルシードを併用して引き起こしたというなら、話も違ってくる」

「なるほどね……とこでだが」

艦長に合わせて俺たちは正座して話をしているんだが、足が痺れて来た……下手に動いたら変な声が出そうだ……

「結局、俺たちはなんの為にここに?」

「それは……」

「現状の説明と、退任です」

「退任?」

「さっきも言ったように、わたしたちはロストロギアの保護の役割があります。この件の一切を忘れて、元の世界に——」

「俺は嫌です」

「八高さん……?」

え、俺意外なこと言ったっけ? なのはに眼を丸くされたんだが。よく見ると、クロノ執務官と艦長までびっくりしているし。でも、俺には俺の意見があるから、言えるうちに言っておこう。なに、今の俺の見かけは子どもだ。多少なり甘い判定で聞いてくれるだろう。

「俺たちのいる世界が危ないというのに、忘れろというのは無理な話ですね。それに、俺やなのはにだって回収する理由があります」

「君は……!」

「それならわたしたち、協力します！ 集めたジュエルシードは、そちらにお渡しするといふものでどうですか？」

「僕も……協力します」

お、意外な形でなのはが乗ったぞ。巻き込んでごめんなさいと眼で訴えられたが、俺は全然オーケー。ていうか、クロノもこっちに入るのか。悪巧みしている顔でもないし、敵にはならないようで安心安心。

「馬鹿な！ 民間人の介入出来るレベルじゃないんだ！ 自分から危険に飛び込むつもりか!？」

「僕たちよりずっと危険な人がいるから、退きたくない……」

クロノ……お前無茶苦茶格好良いぜ……まさに俺の言いたかった一言だ。なのはだつて思っていたことだろう。

魔導師絡みの事情に足突つ込んで俺たちなら、対処法も練れるし、実践も出来るだろう。だが、なんの関係もない——例えば、アリサやすずかたち、翠屋の人たちや高町家が巻き込まれてみる。死んでも死にきれんぞ俺は。

「……まあ、俺たちは世界を守るなんて大層なことは言えないが、守りたい友達や場所があるんでね。それじゃ駄目か?」

「………良いでしょう」

「母さ——艦長!」

「目的は同じですから、悪い話でも無いでしょう。それに、切り札は温存したいもの。ね、クロノ執務官?」

「………はい」

渋々と首肯するクロノ執務官。執務官が切り札……? 機動戦士シリーズでも超若手のエースパイロットがいるというのはよくある話だが、これは若すぎないか……? いや、ツツコんだら負けか……? 良し、気にしたら負け。そういうことにしよう。

「その代わり条件があります。三人の身柄は一時期にこの時空管理局での預かりとすること。そして指示を絶対守ること。良くって?」

「あの、出来れば基本は翠屋で……」

「良くって?」

「……………すみません、はつきり言います。そちらの指示に従う約束はします。ですが、俺たちは誓って悪事は働く気は無いですし、ジュエルシードも全てそちらに渡します。俺たちには俺たちの日常というのがありますので。有り難い話ですが、丁重にお断りします」

「八高き」

【いいから任せてくれ】

転生前ではよくゲームの貸し借りでの交渉事はよくやっていたが、こんな本格的なことは初めてだ。はつきりとした違いは、こっちの人生もかかってきているという点だ。互いの事情の大きさがゲームソフトの比じゃないから、我がままを通しきるのはあまり気分の良い話じゃない。が、魔導師としてガチガチに生きる気は無いんだ。あくまでこの力は人を守るためであって、魔導師として人を守る気はそんなに無いからな。拳銃みたいものと俺は解釈している。

「俺たちは民間人です。結論だけを言えば、俺たちのしていることは見つけた不発弾を交番に届けているだけのことです」

「なにを言うと思えば……………それは君たちが魔導師だから——」

「それは二の次だ。あの場所での俺たちは民間人だ。ただ学校に通って、友達と遊んで、家族と笑っているのが日課の、ただの一般人だ。ジュエルシード回収に専念させたくて身を預かりたい気持ちも分かるが、俺たちには俺たちの事情もあるんだ。……………まあなんだ、俺が言いたいのはどちらも拗らせたくないってだけの話だ」

「……………つまり、自分たちの日常を維持しつつ、協力すると?」

「そうです。それに、理屈で言えば現地で協力者を待機させておけば、即座に動かしやすい。違いますか?」

「矛盾していますね。それこそ、それぞれが学校で動けない状態だったら?」

「なに、異常事態が起こって即対応しないほど、学校や世間も馬鹿じゃないですよ」

「……………」

お、良い流れだな。かつてないほど頭を回転させた甲斐があるつてもんだ。

死んでも言えない本音だが、この手の組織で働くという感覚が個人的にあまり好きじゃない。なんか、こういうのがつつり関わりと将来が確定しそうなので、今は保留したい。将来どうしたいかと聞かれるとまだ無いけど、流石に時空警察紛いなのはちよつと戸惑いしかない。あくまで今は、選択肢の一つにしておきたい。それに俺、組織のルールとか守るの苦手だぞ。とういことで、関係者というよりは、本当にただのお手伝いとかボランティアとして通りたい。

ぶつちやけど、個人的にはなのはとかクロノとかにそういう堅苦しい世界に入り込ませたくないんだよな。俺としてはなのはにはまだ「将来の夢はお嫁さん」的なことを言ってほしいんだ。つまり、普通の可愛い幼女として過ごしてほしいだけの話。お仕事に励む幼女という響きも悪く無いが、それはそれ。そんな年で非常勤扱いの職員とかちよつと重いつて。友達と遊ぶのが普通の年齢の幼女に背負わせんで下さい。小さい女の子はキャツキャウフフしてるのが一番なの。オーライ？

「……強かですね。お名前は？」

「え、俺？ 八高輪です」

「根負けですね。そうまで言われてしまうと、こちらも頷かざるを得ませんね」

わりと本気で頭を抱えながら、リンデイ艦長は溜め息を吐く。確実に失望された感は否めないが、意見は通せたようだ。こっちの評価はガタ落ちだが、勝利は勝利だ。喜ぶべきなんだ……喜ぶ、べき……ぐすん。

実はもう少しあれこれと考えていたけど、そうならなくて良かったと思ってる。これ以上屁理屈をほぎけば険悪になっただろうし……恐らくだが、リンデイ艦長も同じ考えに至ったから話を切ったのかもしれない。

「そうだ。ええつと……リンデイさんに確認しておきたいんですが、魔導師の詳細記録みたいなので、ここで調べるこつて出来るんですか？」

「出来なくもないですが、なにか気になるこつても？」

「フエイト・テスタロッサという人物について調べて欲しいんです。彼女は俺たちと違う目的でジュエルシードを集めている節があるから気になって」

「それは有益な情報ですね。分かりました、調べてみます」

「お願いします」

なんか随分すんなり会話出来たな。

……ふと思った解決策だが、これは危険すぎるな。毒で毒を制するやり方だが、あの亀裂をジュエルシードで願って修復するとか。けど、これまでのジュエルシード絡みの事件は大抵妙なことになるからな。下手に暴走でもしたら被害がデカくなるばかりだ。可能性としては完全に運任せだから、かなり頼りづらいな。

「それともう一つ探して欲しいんですけど、海鳴市内で魔導師の探索をしてもらっていいですか?」

「魔導師? 特徴は?」

「……………フエレットと、なんかオレンジの狼みたいな獣」「?」

これ以上を詳しく説明するのって難しいんだぞ! 本気で首を傾げる気持ちは分かるけども!!

「とにかく、動物の姿に擬態した魔導師が二人いるので、そっちを早急に」

「まったく人使いの荒い……」

「でも、他に仲間がいるようなら手間を向けてもいいかもしれないわね。幸い、魔法の発達していない世界だから、そう時間はかからないでしょう」

「重ね重ねありがとうございます」

「……少し驚きましたね。最近の子って、中々主張が強いんですね」「と、とと当然ですよ! 俺子どもですから!」

いきなりそういう発言しないでくれよお! 心臓に悪いじゃあないですか!

言葉の意味は意味が分からんが、バレちゃまずいだろ! どこぞの名探偵バーローも嘲笑するレベルの誤魔化して笑いすら浮かべんわ

!

「あの……それで、聴取と言ってたのは、なんですか？」

「ああそれですか。まったく、クロノ執務官は尋ね方が固いですね。話を聞きたいと素直に言っていいいんですよ？」

「……やはり、クロノ執務官は割とお堅い。変に不器用って点は、クロノと一緒にだな。」

「さて、長々とごめんなさいね。そちらの時間も遅いようだから、現地まで送っていくわ。けど、これだけは覚えていてほしいの」

「……なんですか？」

「わたしたちが指示をするのは、効率を踏まえた上での、互いの安全の為よ」

「分かってますよそれくらい。俺が無理を言っただけの話ですから」

「それなら良いわ。それじゃあ送りはエイミィに任せるわ。愛想のある娘に送って貰う方が、気も軽いでしょう？」

「そうっすね！ あはははは……はは……はは……はは……はは……はは……はは……」

しまった、煩惱が炸裂してしまった！ 全員がすごい眼でこっちを見ている！ 明言されてないもの、一番のとぼっちりがクロノ執務官というね……暗に愛想が良くないと言われれば、そりゃ気分もよくないわな。本人も分かっているようで、一際に睨んでくる。

「それじゃあね。事態が起こればその都度連絡をするわ」

「すみません。ではまた——あ」

「どうしたんですか？」

「もしかして傷が……！」

「それもあるが、あ、足が痺れて……なのは、クロノ、肩借りていい？」

「……………」

「ぼくは嫌いなタイプですね」

クロノ執務官は心から言っている。鉛でも積まれたような頭を抱えながら、溜め息を吐く。



確かに彼は、クロノ執務官はあまり好きじゃない部分の性格を持っていた。八高輪は日常を過ごしながら安寧を守りつつ、ジュールシード集めも行おうという。愚直に綺麗事を貫こうとする姿勢が障り、年齢4の少年の考え方とは反りが合えなかった。

一方でリンディ・ハラオウンは、顎に指を乗せながら考える。彼女にとって八高輪は、年相応の少年に見えなかった。クロノもそれなりに場数を踏んでいるにしても、それとまた違ったものを感じた。

「クロノ執務官、彼のこと調べてくれますか？」

「彼……ああ、もう一人のぼくですか。なんでも、記憶を失くしている……」

「その子も気になるけど、あの子……八高輪という子を調べてくれる？」

「……母さん？」

「どうにも、彼は引つ掛かりますね……」

大人びた子ども、という類はよく見かけるもの、リンディ・ハラオウンは彼に対して妙な印象を抱いていた。遠慮はしているもの、物怖じをしない姿に首を傾げている。彼を率直に評するなら、まるで子どもびた大人だった。時折見る、中身の幼い大人に近い印象を覚えた。ただの大人びた少年と印象づけるのも違う。

もしかしてと考える。彼もまた、なにか経験し、見て来たものがあるように感じる。……はつきり言ってしまうえば、単純な精神年齢の話をするれば、クロノより上かもしれない。クロノはまだ、時折背伸びして大人びている節があるが、彼が自分に向けていた物腰はひどく自然だった。そこに首を傾げざるを得ない。

ふむと一度唸ってから、彼のいた場所に眼を向ける。彼は魔導師や普通の少年以前に、なにかが違う。リンディ・ハラオウンの直感に纏わられた影のように離れなかった。

ゲームはゆとりある心で楽しんでなんぼ。

——同時刻、時空庭園にて——

「あんちゃん、大丈夫すか?」

「ええ、こっちはなんとか」

「アルフ……無事かな」

「オレが見た限り、重傷でしたからね。大事無ければいいのですが……」

さて、行かないとだな。予定が狂いだして来ている。まだ大がかりな次元震は起こしてないのに、どうして時空管理局が……? 原因が分からないが、あの転生者の男が間違いないと関与している。厄介だ。早く始末にかからなくては。

「少しプレシアのところへ行つてきます。二人はしばらく休んでいてください」

「……分かった」

「あんちゃんも休んだ方が良さすよ」

「事が済んだ後で休みますよ。余計なことは考えずに、早く休みなさい」

言いながらオレは、手の中のデバイス、パラレルハーツをぐつと握る。あれに見られるのは別に構わないが、計画が狂うのは困るし——  
——なにより、菜摘に見られて悲しい顔を見るのだけは嫌だ。

菜摘と俺が幸せで、楽しく、明るく過ごせる世界をつくるために、オレは喜んで嫌われ者にもなってやろう。嫌いな世界を変えるためにオレはここまでやってきたんだ。今更引き返す気も無い。

——ぎいっと、重く閉じた扉を開く。まるで、あのクソババアの心じゃないか。最後に信頼出来るのは己の心と糸よりもか細い下らない光。アルハザード? そんなお伽噺を信じる年でも無いだろうに……年増が無茶しやがってよ。

次第に距離が近づいて来て、小さく聞こえた。咳込み音に混じった、液体の落下音。なるほど、時間はそうないらしい。けど、それは

こつちだつて同じだ。見てるだけで目障りになるような仰々しい黒衣が、振り返る。

「……戻っていたのね。ジュエルシードは？」

「それが、時空管理局に先を越されましたね」

「だからなに？ 連中を始末してでも、回収なさい」

「やれやれ手厳しい。下手に捕えられたら、洗い浚い話していただくと言ふのに……」

「そうなれば貴方たちの落ち度よ。……で、クロノ・ハーヴェイはどうしたの？」

「管理局員に捕縛されました」

「……セイジ・フォレスト。貴方が戻ってヘラヘラと私に聞かせたのは、なんの成果も無い下らない報告？」

「そうなりますね。なので、一つお詫びをと。ねえ、アリシア？」

「——え？」

良い反応だ。そうでなくちゃ、こつちも無駄な魔力を消費して用意した甲斐があつたもんだ。

オレの背中から、ひよこつと姿を現したのは……オレ以上に見慣れているだろう、おずおずとした金髪の少女が姿を現した。

「おかあさん、どうしたの？ そんなつかれた顔をして」

「ま、まさかそんな……アリシアが……どうしてここに？」

「そんなに信じられないですか？ ほら、もっと近づいていいんですよ？」

「おかあさん、大丈夫？」

彼女は心から心配なのだろう、プレシアの頭をよしよしと右手で頭を撫でる。

まずい——バレル！ 懐に忍ばせたナイフを即座に抜く。

「流石親子、慧眼ですね。ええその通り。これはフェイトですよ」

刃は、クソババアの腹部に奥深く突き刺さる。警戒心を緩ませて、大魔導師と言えど近接には弱い。相手がフェイトとかの近接特化な魔導師でも無い限り、まだ相場だな。魔導師つてのは基本近くで闘うように出来てないからな。

そして、オレが呼び出したフェイトはしゅつと姿を消した。一分でも呼ぶのは魔力を使うからな。

——オレのパラレルハーツは、砲撃以外にも特殊な能力がある。言ってしまうえば、平行世界の人間を呼び出すという規格外の能力だ。管理局がやるような、異世界の人物を呼ぶということじゃない。言葉通りの「平行世界」で、ここにいる大半の人間を呼び出せる。しかし呼び出せる人物は「魔法少女リリカルなのは」の世界に限られ、六カ月内での人物と限定されている。だからこそ、六カ月未来のシグナムを呼び出すことも出来たし、半年前のフェイトを呼び出すくらい訳もない——

だが、俺は大嫌いだ。テストロツサたちが、リリカルなのはの物語が大嫌いだ。呼び出すくらいなら、自分で戦闘をした方が遥かにマシだ。自分のゲロを飲んだような嫌悪感が湧いてくる。

「……そう心配するな。お前が造った木偶人形はたっぷり可愛がってやる。オレ、包容力つてのはあるつもりだからさ」

「セイジ・フォレスト……!」

「だからさつきと死ぬよ、クソババアああああ!」

どんとふらついた身体を足蹴にしながら、デバイスに溜めていた魔力を巨大な砲撃として放つ。床一面を破碎させ、穴の空いた向こうには暗い色彩の流れる虚数空間が広がっている。

……ババアの姿は無い。どうやら虚数空間に落ちて行ったようだな。……消えた。プレシアの気配も無い。く、くくく、やばい、頬が緩んできた。一番の障害が無くなったのが嬉しい。残りはフェイトとアルフだが、アルフはいつでも殺せる。フェイトはこれから問題にならなくなる。

そろそろ来る頃だろう。仕方ないが、工作には必要なことだ。手にしたナイフで腕を切ってから、斑に揺れる空間に投げ捨てる。

「あんちゃん、一体なにが……あれ、プレシアは?」

「かあさんは?!」

やっぱり。こうなることを見越していたからこそ、わざと砲撃を放ったんだからな。

「彼女は錯乱していましたよ。おかげでほら、腕まで斬られましたよ」

「あんちゃん、大丈夫なんすか!？」

「こっちは大丈夫なんですけど……咄嗟に迎撃してしまったのは落ち度ですね」

「よくも……よくもかあさんを……!」

「待つてくさいフェイトさん。彼女の錯乱にはあなたが関与しているんですよ」

「私が……どうして?」

「彼女は言っていたんですよ。どうしようもない不出来な人形のせいで、人生が狂った、とね」

「にん……ぎよう……?」

ここで話しても良いだろう。早まっていようと、予定通りには違いない。なら、強行させてもらおう。なに、オレは今から事実を言うだけ。なにも悪いことは……いや、悪いことは今からする。

「おや、もしかして知らないんですか? 自分の出生を、自分がどんな目的で生かされているのかを」

「な、なにを言っているのセイジ……」

「知らないなら全部教えますよ。フェイト・テスタロッサ。——  
あなたはただの、アリシア・テスタロッサの代わりだったんですよ」

今日は週末、つまり学校も休みの日だ。機嫌が良いとも違うが、一安心している。

リンディ艦長からの連絡で、魔力反応のあるフェレットと狼を発見したというが、その場所は同じということで行って見たら……アリサの家だったよ。それが普通の家だったら良かったが、すずかに負けず劣らずの屋敷で涙を禁じ得ない。今更気付いたんだが、俺凄いと友達になつてね? なのはが平然としているのは、友達として来慣れているからだろな。俺とクロノはちよつと居心地悪そう

に辺りばかりを見渡して誤魔化してる。

「ありがとうアリサちゃん」

「この狐を保護しようとしたら、ユーノも一緒だったから二匹とも  
看ているの」

「しかしこの家に近くにいたとはな……」

「運が良かったね」

妙なところに転移したもんだな。確かに戦っていた場所からは距離もあるけど、偶然って凄いな。運が良かった、クロノのこの一言に  
尽きる。

さて、アルフは一応話せるほどの体調かな。無理なすぐに切り上げ  
るとしよう。

【586920時間37分ぶりだな、アルフ……】

【冗談言えるほどの体調かい、あんた】

【無いことはないぞ。で、怪我は大丈夫か?】

【アタシは大丈夫だが、フェレットの、ユーノの方が傷は大きいよ】  
【らしいな。早い内に言うが、俺となのはとクロノは、時空管理局つ  
ていうのと結託することになった】

【時空管理局と……待って、なんでクロノ・ハーヴェイが】

【集める理由が無くなったとよ。……落ち着けて、傷が開くぞ】  
ちよつと唸り始めた頃で、やんわりと諭す。まあ、俺たちとも違う  
理由でジュエルシードを集めているからな。しかし、こうも敵意剥き  
だしとなると、尚更管理局とは相容れない理由なのかもな。

俺を見て唸っているからか、アリサとすずかとなのはの視線は、ど  
こか訝しく揺れる。俺嫌われてるって思ってるだろうな。うん、大体  
正解だ。

【ひよつとしたらだが、そっちの足が着くのも時間の問題かもしれ  
んぞ】

【………ということは、ここまでのことも、やつらに見られてるでしょ  
うね】

【かもな。さて、ここまで言っただけ、協力してほしい】

【なにをだい】

「嘘みたいに聞こえるかもしれないが、俺は出来る限り、全部を丸く収めたいんだ。ジユエルシードも集めて危険を減らしたいし、お前やフェイトの力にもなりたいんだ。それに、あの優男を一発殴りたいし」

「……………」

「あ…」

「傷が痛んだのかしら」

「また元気な時にでも来るか。すまん、ユーノまで預かってくれて」

「いいわよ別に」

こういうところでアリサは義理堅いというか根は優しいからな。やっぱり、幼女は最高だぜ！ これでもう少し俺への当たり方が優しくかったらなあ……先輩扱いしろと強要はしないが、もうちよつとこう……ねえ？

それはまた追々考えよう。今はもう昼だし、これからどうするか……といっても、俺はこれから野暮用が入っているから遊べないけど。そろそろ待ち合わせの時間だし、ちよつと急がないと。

「なのはとクロノはもう少し遊んでいきなよ。ユーノももうしばらくそつちで頼む」

「え、でも僕は翠屋で」

「クロノ、お前はもう少し楽しむことを覚えるべきだって、桃子さんも言っていたろ？ まずは気軽に、なのはの友達と遊んで交友でも深めなよ」

なのはもクロノも、年相応に遊ぶことも大事なんだぞ。特にクロノは、なのはが記憶に関わっているっていうなら尚更だろう。

っていうのは完璧な建て前。実はクロノとなのははって、一緒の時つてすげえ良い空気なんだよな。例えばだが、なのはが俺という時ともちよつと違う色の、安心した表情しているんだよな。力抜いてるとも違うというか、完全に素。クロノもクロノで、なのはという時の方が

表情が柔らかい。俺が気付いてないとしても思ったか？ 甘い、甘すぎるぜ。伊達にあの世は見てねーぜ！ と言う訳で、スピードワゴリ八高輪は、クールに去るぜ。

……なのは、そんな眼で見ないで。緊張するのは分かるが、男一人の中で放り出されたクロノの方が緊張しているんだぞ。……本来なら、ハーレムに囲まれている男に対しては殺意しか湧かないが、クロノはまあセーフにしよう。やましいことを考えるどころで無いだろうし。

「さて、お暇いとましますかねっと」

アルフもあの調子だし、もう少し落ち着いてから話すことにしよう。

さて、俺は俺で行くところがあるから行こう。恭也さんの見立てによると、俺はは今左足の筋がやばい状態と言われているらしい。通りで痛みが引かない訳だよ。と言う訳で恭也さんの薦めもあって、海鳴大学病院に行くことになった。

……なんか信頼出来る医者には連絡したと言っているけど、注射が来ないと良いなあ。湿布とかで済むようなことになればいいけど……でも望みが薄いだろうな。ああ注射とかマジ嫌だなあ……今の内から覚悟決めておこう。重い足を引き摺らせながら、地図を片手に大学病院を目指す。

八高さんに気を使われたアリサちゃんたちとテレビゲームをしている。なのはのリクエストに則って、二人対戦型の飛行機戦闘ゲームをで楽しんでいる。ちよつとしたトーナメント形式ということで、現在決勝戦、わたしとクロノ君の一騎打ち。ユーノ君はいまお休み中。それにしても、八高さんが気を回すということは、気付かれているのかな？ ちよつとクロノ君のことが気になってることを。時々変わっているけど、的を射たことも言うし、人を見るのも出来るから、ひよつとしたら気付かされてるのかもしれない。うう、恥ずかしい……得意なゲームなのに、意識すると手元が覚束ない……



「なのはちゃんの男友達って初めて見たよね」

「そもそも初めて聞いたわよ。どこで知り合ったの？」

「え、ええつとね……」

「商店街の方で犬が車に轢かれた現場で、僕となのはと八高さんが立ち会ったんだ」

「へえ、そうだったの」

「それにしても、どうしてなのはちゃんはそんな落ち着きが無いの？」

「ど、どうしてかなあ……？ にやはは……それにしてもクロノ君、ゲーム上手だね」

「確かに。もしかして、このゲーム得意だったの？」

「この家に来てから、二人にはクロノ君のことを話している。魔導師であることは当然言えないにしても、記憶を持っていないことは既に了解している。」

話を逸らすための言葉ではあったけど、実際クロノ君のゲーム操作はとても上手だった。もしかしたら、本調子のわたしより上手なのかもしれない。時々、なのはにも出来ない難度の操作方法で機体を操っている。

「……分からない。けど、このゲームを知っている」

「身体が覚えている言うのって、本当なんだね」

「確かこうで……ひねりこみ……!」

「え、うそ、にゃー!」

それからはあつという間。少しなりと互角だったはずなのに、わたしの操作していた戦闘機は簡単に撃墜されてしまった。

「すごい、今の動き始めて見た……」

「な、なに今の動き……なのはは出来る？」

「ううん……クロノ君、どうやったの？」

「とある撃墜王の必殺技なんだって……あれ、おかしいな」

「どうしたの？」

「……なのはじゃないけど、なんだか、誰かとかいうやりとりをした覚えがある……」

「わたしじゃない人？」

なんだか不思議。わたし以外とゲームしたことあるんだ。ということは、わたし以外の誰かとも関わっているんだ。なんだか嬉しい反面、ちよつと嫉妬したり……

でも、身近にゲームが得意な人で言えば忍さんだけど……どうだろう？ どうにも面識がある印象じゃないからなんとも言えない。

「それにしても……クロノくん、だったよね？　なのはちゃんの家に住むことになったんだよね？」

「うん」

「大変じゃない？　あの騒がしい先輩も居候してるっていうのに」

「騒がしい先輩？　……もしかして、八高さんのこと？」

「ええ」

「あの人は……うん、そうだね。賑やかではあるね。でもあの人はそれだけじゃなくて、人のことをちゃんと見ている。善い人だよ」

「そうだよアリサちゃん、おにいさんを悪く言うのは良くないよ」

「確かにそうかもしれないけど……なんていうか、普段のあの姿しか見てないから、いまいち頼りないって感じなの……！」

なんだ、アリサちゃんにも伝わっているんだ。なんでそんなに否定しているのか分からないけど……

でも言われてみると、魔法の絡んでいない、特にこんな風に遊ぶ時の八高さんって、一際楽しそうにしている。本人も言っていたけど、「俺基本的に楽しいのが好きだし」と言うくらいだから、魔法における戦闘も素であって、普段の本当にリラックスしたり遊んだりしている時が本当の八高さんかもしれない。……ちよつと理屈に考えてしまったけど、八高さんて裏表が無い、ということ表現出来る人だ。うん、やっぱり善い人に違いは無い。

そんな慌てた様子のアリサちゃんを横目に、クロノ君は思い出したように笑う。

「確かに。普段のあの人は、なんだか頼りないね……でも、不思議と信じられるんだ」

「……ふうん」

アリサちゃんは、含みを吐くように息を溢す。顔を見るに、まあ分  
からなくも無いと言いたげみたい。なんでこう、アリサちゃんって素  
直に言えないんだろう？ そういう態度取られるから、八高さんが  
「俺はきつとアリサに良く思われてないと思うの」って愚痴を言われ  
るんだよ？

「さて、今はバニングスさんや月村さんと遊んでいるんだ。他にな  
にかする？」

「そうねえ……そうだ、最近進めてないRPGがあるんだけど、良い  
？」

「へえ、面白そうだね」

「でもアリサちゃん、それ一人用でしょ？」

「僕は良いよ。みんなが楽しめれば、それで」

クロノ君の言葉に嘘はなく、ただ柔らかく笑う。この空間にいるこ  
とに、抵抗は少なくなってきたようにみたくて良かった。

「そうだ、なのはちゃんとクロノ君は今日はどれくらい遊べる？」

「ええつと……三時までなら。今日は翠屋にも行くから」

「僕もそれくらい」

「じゃ、眼いっぱい遊ぶわよ」

二人はクロノ君を快く迎え入れたようで、それぞれにふふつと笑顔  
を向ける。そうだね、今くらいはみんな楽しんでまないだね。嫌なこ  
とも悪いことも忘れて、楽しむことにしよう。

「脚の方は……まあ、大事無いですね。手術の必要が無いのは幸い  
ですね」

「本当ですか!? それなら……」

「でも無理は厳禁です。重度の肉離れで済んだから良かったのです  
が、神経が断裂して歩けなくなるところだったんですよ？」

「そ、そんなギリギリだったんですか……わたし、気になります！」

「それはもう……これからは定期的に通院して下さいね。医者の方

事というのは、手遅れが多いんですから……」

「……分かりました。そんな真面目な顔しないで下さいよ。ズルいじゃないですか」

「ずるいつてなんですか……本当にもう……恭也くんと言い、あの家の人はどうしてこう、無茶をする男の人が多いんでしょうか……とにかく、日常的な動作には問題はありませんが、走るなどの負荷を与える運動は控えるように。良いですね？」

……というのが、俺と脚を見てくれた看護師のやり取りだった。しばらくの通院治療とマツサージ、テーピング等を余儀なく宣告されました。こんな大怪我したの初めてだから、俺も本気でビックリしてゐるんだって。さつき親に電話した時には、流石に叱られたけど。……一応言っておくけど、部活の自主トレで無茶しすぎた、という口実なのは念押しさせて。

恭也さんに紹介された医者、フィリス・矢沢さんという人は、もう一言で言うとかかなり可愛い人だった。医者をしているからそれなりの年齢だろうに、異様な童顔と背中まで覆った銀髪が眼を引く、愛嬌溢れる女性だった。実は通販紛いで送られた、謎のバトルに参加されるアンティークドールですと言われても信じられないと思う。なんの戦闘もなく、ひたすらドールとのイチヤイチャしかないローゼンメイオン、アリだと思うの！

「むふふふ、フィリス先生、か……」

危ない危ない、煩惱が理性を凌駕するところだった。自重自重。でもあの可愛さは反則だぞ？ 判定としては童顔が過ぎて、軽くロリに認定している。改めてはつきり言おう、俺は顔でも判定するぞ。シグナムはきりつとした中性イケメンな顔だから、純粋に綺麗な美形としてカウント。

しかしまあ、当たり前なんだけど医者としての腕も良いな。痛みも半減しているし。行ったことと言えば、激痛しか無かった脚のマツサージに注射による痛み止め（15分も嫌がったがなにか？）に、テーピング。装具も着けてはと促されたが、なんか歩くのに邪魔だったし、あくまで補強として装具だったので遠慮することに。

走ったり急なスキップするようなことで脚を痛めつけなければ良いというから、翠屋で働く分には全然大丈夫らしい。……問題は、魔法での戦闘かあ。うわ、確実に避けられない感があつて既にテンションが青山ブルーマウンテンだよ。いや、青山さんをデイスってる訳じゃないからね？ ひたすらテンションが低いって言いたいだけだからね？

「むふふふ、フィリス先生、か……………」

『なぜ二度言う？』

「大事なことだからな。仕方ない」

『貴台は幼女愛好家では無いのか？』

「確かにそうだが。だがアヴァロン、まだ甘いな。あの顔はまるで色も知らぬ少女よ。つまり、まだロリだ」

『なで脚だけを見て貰ったのじゃ？ 頭も見て貰えばすつきりしたというのに』

「もう、アヴァロンたら古いんだあ」

いくらなんでも辛辣すぎね？ 涙眼で冗談を返したのは初めてだよ……アヴァロンが知らずしてコマンドーな疑問を投げなかつたら、普通に「やかましいわ！」と言つていたところだぞ……危ね、思わずスキップするところだった。妙に高いテンションで怖いね。

【八高輪、聞こえているか？】

【その声、クロノ執務官か。どうした？】

【調べていた件について纏まったから、その連絡だ】

……なんか良い話に思えないんだが。クロノ執務官は、疲労とは違う重たげな溜め息を吐く。

【全く……君たちが艦内にいれば、こんな手間もかからないというのに……】

【言いたいことは分かるけど、今は抑えてくれ。で、なにが分かったんだ？】

【フェイト・テスタロッサについての情報についてはどうにも掴めないが、それに関連してある疑惑が出て来ている】

【疑惑…………？】

【同じテスタロッサ性の魔導師……プレシア・テスタロッサが、このロストロギア回収に関与している可能性が高い。年齢差を考えれば、恐らく親子と見るのが妥当だろう】

親子ねえ……ということは、母親<sup>プレシア</sup>の為にジュエルシードを集めているということか。お、そう考えたらしつくり来るかも。仮にそうだとして、プレシアはなんの為にジュエルシードを？

【この世界での彼女は、行方不明の大魔導師だ。人相データを送る。見かけ次第連絡をしてほしい。こちらも、彼女がいるだろうポイントを捜索する。また追って連絡する】

【分かった。じゃあな】

会話が終わると同時に、画像データが送られたのか眼の前の宙から液晶じみた画面が現れる。

宙に浮いた液晶に映ったのは、なんとも艶やかな色気を放つ淑女。気品のある落ち着いた笑みがグツドだ。妙齢にしてもこれは中々。これは若い頃さぞ綺麗だろうな。って、そういや行方不明って言うっていたから、多少なり古い写真かもしれない。顔変えていたらどうするんだよ。

「……………」

……え、ちよつと待つて。ええつと、タイムタイム、タイムアツプだ。降参だよ降参。やばい……頭が混乱してる。一度深呼吸しよう。シュコーシュコー……どこの暗黒卿だよ、俺はまだダークサイドに落ちてないし落ちる予定も無いよ。

でだが……あ……ありのまま、今起こっていることを話すぜ！「俺は画像の女性見ていたと思つたら、いつのまにかその女性がそこに倒れていたんだ」。な、なにを言っているのか分からねーと思うが、俺もなにが起きたのか分からなかった……魔法とかスタンド攻撃だとか、そんなもんじゃあ断じてねえ。もつと偶発的なものの片鱗を味わったぜ……

よし、落ち着いたところではつきり言おう。そこで、仰々しい恰好をしたプレシア・テスタロッサが、路地裏で血を流して倒れている。どんな状況でそうなったのかはさっぱり分からんが、なんか凄いやば

いのはよく分かる。

「と、とりあえず…」

病院行く金も無いし、手元にはなにも無いし、治す手段が無い。ちようど家も近いし近いし連れて行こう。別に、手当てして話聞く程度なら俺も出来るだろうし。大魔導師って言っていたけど、頭も回るならある程度異世界での常識も汲んで無茶もしないだろう。……しかしまあ、黒い仰々としたローブや衣服は、完全に悪役とも取れる印象なのがなあ。大魔導師と言われてるだけあって、貫録も凄いし。

……行方不明者にしてもフェイトを介してジュエルシード集めをしているんだ。ひよつとしたらたが、さつき俺に話した情報は一部だけで調べ事態はとつくに済んでいるかもしれない。更に言えば、この様子を見られている。

「……保護するか」

なに、高町家には聞き上手が多いし、相手も良識のある大人なんだ。問題はそう無いだろう。

## わたしのおかあさん

鼻腔を漂ったのは、無邪気とも言えるような涼やかなにおいの風。それはまるで、全身を羽根が包むような静かで穏やかな風の中。恐らくまだ身も小さいだろう鳥の声うたも聞こえ、草花のせせらぎも耳に心地良い。こんな安寧はどれくらいぶりかしら……

「プレシア、起きて下さい」

そして、心から驚いたことも随分久しい。本来聞けるはずの無い声が耳に入れば、恐らく誰だつてそうなるに決まっている。

……私の意識はまだ覚醒しきれていない。夢半ばながらも気怠い身体を起こしながら、その身を覆っていたシーツの軽い重さに疑問を覚えながら、海の中を覗いているようなぼやけた視界の中で、懐かしい顔と面を向い合せる。

「リニス、なの？」

「またおかしなことを聞きますね。……凄い顔ですよ、なにか悪い夢でも見たのですか？」

「夢……」

そこで気づいてしまった。そう、優しい夢はここ。嫌いな現実は向こう。だからここにリニスがいる。

視界はそこで晴れてくる。眼前には澄んだ水面と見紛うほどの綺麗な麗すぎる青空。そして、柔和に笑うあの子の教育係。なるほど、こんな肩の力さえ入れる気にもならない世界だから、小鳥の飛ぶ姿が映えるのも疑問に思わない。

そして私の想像した以上に広がる自然。木々と緑が一体となったような平地が広がり、いらぬものが唾棄されきった世界が、まるで私の望んだ理想郷として佇んでいる。

……そう、私の望んだ理想郷。この世界が私の夢や理想を映したものだとしたら……

「あ、ママが起きた」



あくまでただの願望だったはずなのに、実際に形にされると声も出なくなる。半身を起していた背中から、聞き慣れたはずなのに懐かしさが込み上げる声音が届く。ほとんど反射的に振り返って、やはりという確信と、信じられないと疑う気持ちが同時に溢れざるを得なかった。

「——アリシア」

「おはようママ。たくさん眠れた？」

「でもこんなところで眠っていると、風邪をひきますよ？」

「大丈夫だよ、ママにシーツかけてたから」

「アリシア、外で昼寝するにはちよつと足りないですよ？」

「……………」

「ママ？」

「どうしたんですか？」

私はこんなにも——こんななんでもない風景に憧れている。そう、私が望んでいるのは誰もが当たり前になっているような、当たり前前の世界。だけど、私はかつて亡くしてしまった。

……そうよ、当たり前前のことを願ってなにかいけないの？ 誰もが感じる幸せを求めて、なにかいけないの？ 私はアリシアを取り戻して、残りの時間をアリシアの為に使いたい。そんな母親としての願いが間違いであるはずがない。

「……………いいえ。やっぱりママは少し疲れていたみたい……………」

「大丈夫？ 目が痛いなの？」

「平気よ……………」

「でもプレシア、折角の休日なんですから」

「分かっているわ」

「ここは夢。私の求める理想の果て。」

こうしてなんの違和感もなく、リニスとアリシアが言葉を交わしている時点でこの世界は歪んでいる。だけど、こんなにも平和であることに、安心を覚えてしまう。

「そうそう、アリシアと話をしていたんですよ」

「話？」

「ちよ、ちよつとりニス！ あれは内緒って……」

「良いじゃないですか。我がままは子どもの特権ですから」

「でも、ママ困らないかな……」

「うーん、私が言うのと怒るかもしれないですけど、アリシアなら大丈夫ですよ」

一体なんの話……？ 私に言いにくいこと……？ 家のなにかを壊したとか……？ 言ってしまうえば、今更そんな程度でアリシアを怒ろうという気は無かった。

「……話してみなさいアリシア、まずは聞かせて」

「うん。えつと、リニスとね、ママの誕生日プレゼントの話をしていたの」

「私の、誕生日プレゼント……？」

「気が早いですよね」

「でね、なにが欲しいのって聞かれて……」

——思い出した。場面や細かい会話のやりとりは違うもの、私は確かに誕生日プレゼントの話を聞いたことがある。とはいえ、プレゼント自体は色々と強請られたけど、一つ叶えていないものがある。もし記憶通りの答えだとしたらアリシアの答えは……

「……もしかして、妹が欲しいの？」

「え、どうして分かったの!？」

「……そんな顔をしていたわよ」

自慢の謎かけが解かれたように、アリシアは頬を膨らませる。

そう、アリシアは妹を欲しがっていた。その理由も明快。私がいな  
い時の留守中に寂しくなりたくないことと、人が増えることで私への負担を軽くしたい、そんな分かりやすい理由だった。

「……だってね、留守番の時に一人になるのが寂しいし……それに、もう一人家族がいたら、ママのお手伝いも出来ると思うの」

「……でも、リニスもいるでしょう？」

「そういうことじゃないんですよ。要するに、アリシアはお姉ちゃんになりたいんですよ？」

「も、もうリニスってば！」

「……………」

なにをどう伝えれば良いのだろうか……貴方に似た人形は造ったのに、彼女はアリシアとは違う。不出来で役立たず、期待にすら応えることも出来ない。仮にアレをアリシアの妹を認識するにしても、あまりに難しい。あの子は……フェイトはあまりにも違う。

「……ねえアリシア。もしもの話よ。貴方に妹が出来たとして、その妹は貴方と違って私の話も聞いてくれない、期待も応えてくれない。そんな娘だったら、どうする?」

「プレシア……? それはどういう——」

「真剣に答えてほしいの」

少なくとも、私はフェイトを娘とは認められない。アレは私にとつての負の象徴であり、その名の示す通り運命に嘲フェイトられているようにさえ感じてしまう。誇張抜きで視界に入るだけで虫唾が走る。

「んー」と間延びした唸りが数秒。まだ幼いアリシアには少し難しい質問だったかもしれない。それならそれで——

「……ママは、わたしのこと、好きじゃないの?」

「そんなこと無いわ。どうしてそんな悲しい聞くの?」

「だってわたし、勉強も苦手だし、ママを困らせることもあるから……そういう子嫌いなのかなって……」

「そんなことを言わないで。私はアリシアのことが、大好きよ」

「ほんと?」

「本当よ」

「それなら、もしも妹が出来るとしたらでいいの。もう一つ約束して」

「なに?」

アリシアは、小さく左手の小指をちよんと突き出して、指切りの仕草を求める。少しだけ曇った笑顔を向けられ、罪悪感を覚えてしまう……

しかし、それと数秒だけ。またその太陽のような柔らかな笑みを浮かべながら、アリシアは「きつとママなら出来ることだよ」と口を開

く。

「どんな子に育っても、わたしと同じように優しくしてほしいな。だってわたしの妹で、ママの娘なんだもん」

「お、大丈夫で……つて、まだ休んで下さいよ」

びっくりした。ちよつと様子を見に来たら起きてるし。刺された人間が三時間足らず（あくまで俺が見つけたからの時間であって、実際はもつと経っているはず）で動けるようになるものなのか？ その辺りは流石大魔導師、と納得していいのだろうか？

一応空いた部屋を使わせてもらい、フィリスの先生にも連絡して手当てはしてもらっているもの、傷自体は塞がってないはずだ。無理は禁物。

「……ここは？」

「どう言ったものか……そうですね、ジュエルシールドが落ちてる世界、で通じますかね？」

「っ！ どうしてその言葉を!?!」

「フェイトが一緒だったら、なにか聞いてませんか？ 妙な武器を持った男の魔導師がいるとか、そんな話」

「……セイジ・フォレストが言っていたわね。銃剣のデバイスを持ったイレギュラーの男がいるって。そう、貴方のなのね」

セイジ・フォレスト……疑問に思ったが、断片的な情報を繋いで理解出来た。ナツミがあんちゃんと呼んだあの男、あの優男のことか。セイジ、ね。覚えたぞ。今度会ったら殴ってやる。右ストレートでぶっ飛ばす、真っ直ぐ行ってぶっ飛ばす。

「はつきり言います。俺は時空管理局と面識を持っています。まあ、家の人間には内緒しているんですけどね」

「管理局と……私を連行するつもり？」

「そんな物騒な……単純に、なんでジュエルシードを集めるのかを聞きたいだけですよ。こつちも既に大目玉食らって睨まれているので」

勝手に自宅で保護していることで、既にリンデイさんとクロノ執務官から文句を言われている。ちなみに言うと、事情聴取したいから連れて来てくれとも言われているが、ちよつとそう簡単に切り上げられない理由が重なっているから勘弁してほしい。なのはー、クロノー、ユーノー、遊ぶのもいいが早く帰って来てくれー！ 針のむしろで辛いとおお！

「そんなことを聞きたい為に、私を助けたの？」

「そりゃ、フェイトが死にも狂いで集めてるものですから。きつと、あなたの為じゃないですか？」

「……だとしたら、やはり期待外れね」

途端に、憎々しさを滲ませながら、プレシアは歯をぎりつと擦らせる。

正直ゾクツとした。その冷たい反応は、娘に対する反応とは程遠いものだった。むしろだ、その剥き出しにされた感情は、冗談抜きで親の仇を見る眼であるべきはずなのに、プレシアの怨嗟の矛先はフェイトに向けられていた。

「やはり、フェイトは使えないわね」

「……使えない？」

「私にはもう時間が残っていないのに、時間ばかりかけて碌な成果も挙げることも出来ない。私のご機嫌取りにもなれはしない、出来そこない」

自嘲するようなトーンで並べられる、不出来を呪う言葉。冷たいなんてものじゃない。まるで飽きたように感情が乗っていない。

……聞きようによつては、疲れたとも感じるがそう差は無い。どちらにしても、フェイトへの関心がほとんど無いのは明白だった。

「……………一度だけ聞き逃します。今の言葉、訂正してくれますか？」

「訂正？ 冗談言わないで！ アレに注ぐ愛なんて有りはしないわ

！」

「——なんだと？」

なにが嫌って、プレシアの今の言葉は本気で言っているのがはっきり分かる。プレシアは間違いなく、フェイトを嫌っている。どんな事情があるか知らないが、あの孝行娘を嫌うのはよっぽどかもしれない。余所の連れ子とかそんな複雑な事情かもしれないし。なんにしても、俺の眼の前で幼女否定は死んでも聞き逃す訳にはいかない。そんな紳士論を持って、娘の全否定は最低に気分が悪い。

「あんたの娘だろうが！　なんでそんなこと言えるんだよ！」

「私の娘じゃないからよ！」

「あんたもフェイトもテストタロツサだろうが！　言い訳するな！」

「あんなの娘じゃない！　期待に応えられない娘なんて、私にはいらない！」

「フェイトはあんたを母親だと言っているぞ！」

「なんの騒ぎなの！」

かなり険悪になり始めた一室に、桃子さんが扉を開けて割り込む。……助かった。あと三秒ほど遅かったら、胸倉を掴んでいたのかもしれないほど、俺は冷静じゃなかった。

「これは一体どうなってるの？」

「見ての通り、眼が覚めたんですよ」

「それで、どうして八高君が怒っているの？」

「自分の娘を全否定する言葉を聞かれたら、怒りもしますよ」

「事実を言っただまですよ！　なにがいけないの!？」

「眼の前の現実も見えない人が……！」

「はいはい、ストップ！　八高君、落ち着きなさい！」

「だけど……！」

「夕ご飯出来たから、先に下に行きなさい」

……他に言いたいことはあるだろうに、桃子さんはそれ以上を言わなかった。睨み付けるでもなく、ただ「ちよつと代わって」と目配せをしてくる。

確かに、これ以上俺がここにいっても仕方ない。どうしたところで、

俺とプレシアの水掛け論にしかならないかもしれない。ここは大人しく退がろう。この場は本当の意味での大人同士で話をするしかない。

けどそれで釈然としたくない。もう一言くらい言いたい。扉が出る前に、憎らしく映る大魔導師を眼を合わせる。

「……あんたがどう言おうと、フェイトはあんたを慕っている。無碍にしないでやってくれ」

それだけを言ってから、八高くんは部屋を出て行った。

正直言うと、少しびびりしている。八高くんってあんな顔するんだ。普段が普段だから、余計にギャップが凄い。でも分かる。彼は不当なことで怒ることは決してしない。だとしたら、プレシアさんが彼の琴線に触れたと考えるのが妥当かもしれない。

しかし、実の娘の否定ね……これはわたしとしても、聞き逃したくない。同じ母親として、対等に話をしたい。

「さて、少しお話をしましょうか」

「……話すことは無いわ」

「わたしにはあるです。どうして、自分の娘がそんなに疎ましいんですか？」

「貴方には関係の無いことよ」

「同じ母親です。それではいけませんか？」

ああなるほど。これは紳士を自称する八高くんは特に苦手そう。こうも頭ごなしから否定的に話されると、気も悪くするわね。おまけに、その否定には迷いが無い。ひよとしたら、娘への否定の真情は長らく蓄積されていたものかもしれない。だとしたら、説得するのも一苦労ね。

「言いたくないならそれで構いません。でも、娘さん……フェイトちゃん、ですか。なにがいけないんですか？」

「……フェイトは、まるでアリシアとは違う」

「アリシア？」

「そうよ。確かにアリシアは人並みに我が侂も言ったし、困らせられることもあった。それでも、私の言うことは些細なことでも聞いてくれた。家の戸締り、勉強、寝る時間。私が言えば大抵のことは納得して聞いてくれた。だけどフェイトは違う。フェイトは、私は言うことをこなすことも出来ないどころか、少しの期待にしか応えられない……あんなのが娘だななんて……耐えられない」

「……アリシアちゃんのこと、大事にしているんですね」

「だけど、今のアリシアは動くことも話すことも、笑うことだつて出来ない」

「……………」

プレシアさんは、わたしが思っているよりも重い事情を背負っている。それをたつた今理解出来た。

その口振りから察するに、アリシアちゃんは死んでいて、その妹のフェイトちゃんを世話している。だけど、まるで育て方が違うことで悩んでいる。端的に考えてしまえば、そうとしか考えられない。

「つまりプレシアさんは、フェイトちゃんがアリシアちゃんの代わりになれないから嫌い？」

「ええそうよ。あんなのに愛情を注ぐなんて、出来る筈がない……！」

「……プレシアさん。その考え方は間違っていますよ」

「なんですって？」

「生まれてくる子どもが、みんな同じ訳がありませんよ」

……とは言っても、入り組んだ事情を話をすれば、恭也も美由紀もわたしが生んだ訳じゃない。わたしが生んだ子どもは、なのはただ。だけど、三人とも違ったように育っている。少し変な言い方だけど、それぞれが違って育つのは見ていく様子というのは、それはそれで楽しいものだと思っている。最近だと、なのはの周囲が変わってきているから、それが楽しく思える。その変化の大元が八高くんなんだけど、自覚が無いのよね彼。

「そちらにも事情があると思いますけど、それだとアリシアちゃん



がお姉ちゃんを名乗れませんよ?」

「……………」  
「子どもが最後に継るのが親なのは分かっているでしょう? そこ  
でプレシアさんがフェイトちゃんを見放せば、本当に取り返しが付か  
なくなりますよ?」

そこで初めて、プレシアさんの顔が曇り始めた。ひよつとしたら、  
自分が眼を逸らして部分を見てしまったか、大事なものを思い出した  
ような……こころなしか、傷が開いたような表情を浮かべていた。

「お互い初対面で面識ありませんけど、家族がバラバラになるの  
を見過ごしたくありません。この状態が続いたら、確実に一人になり  
ますよ? そうなれば、誰があなたを悲しむんですか?」

「……………」  
「わたしからお願いです。まずは一度で良いんです、子どもと向き  
合ってください。アリシアちゃんとフェイトちゃんがそれぞれ違う  
のと同じように、娘たちにとってもお母さんは一人だけなんですよ  
?」

「母親は……一人だけ……」

「優しい娘さんみたいですからね。今ならまだやり直せます」

「……………」

「そういう訳ですから、少し準備しますね」

「準備?」

「娘さんへのおみやげですよ。美味しいケーキをプレゼントして、  
少しでも仲を修復しないと」

「そんなもので喜べるものなの?」

「プレゼントというのは、第一に気持ちですよ。そうしてくれるっ  
ていうだけで、喜ばれるものなんですよ?」

余程邪険にしてきたせいかな、プレシアさんはどうにも娘に対する接  
し方が覚束ない。

なるほど、今理解出来た。プレシアさんの性格は、仕事を優先させ  
過ぎている節があるらしい。例えるまでも無く、仕事においては相当  
以上の能力を持っているかもしれないけど、比例して家庭を顧みてい

ない、仕事に生きているタイプの女性かもしれない。折角母親として生きているのに、損な生き方をしている。それじゃプレシアさんもフェイトちゃんもアリシアちゃんも幸せになれない。

「それじゃ、もう少し休んでくださいね」

桃子、と呼ばれたその女性はひどく温和に笑いながら、部屋を後にした。さっきの男といい、見ず知らずを相手にどうしてそう優しく出来るものなのか……

娘にとって、母親は一人……フェイトは、アリシアの妹……

さつき見ていたおぼろげな夢の内容を思い出した。そう、夢の中でもアリシアと約束をした。自分の妹であり私の娘である子どもに優しくしてほしいと。

生まれる子どもは、違うから楽しい……そんな当たり前なことすら忘れてしまっていたなんて……だけど、それを認めてしまえばアリシアの蘇生は夢物語だと否定されそうで、死んでも出来なかった。

利き手も性格も、魔力資質も違う。それならやはり認めざるを得ない——彼女は、フェイト・テストロツサ。そう、私と同じテストロツサ性。アリシアの妹であり、私の娘。

認めはする。だけど、私はこれからフェイトをアリシアと同じように愛することが出来ると……？ 不安なんてもものじゃない。私は一瞬ともフェイトを優しくした覚えが無い。それどころか、疎ましいとさえ思っていた。そんな人間が今更母親を努めろ……？ 望んだ理想を捨てろ……？ 簡単に言えば、アリシアを諦めてフェイトと生きることを選択されようとしている。

「現実と生きるか、理想に生きるか、ね……」

私の今まで一体、なんだったの……!? 長い年月をかけた答えが「現実を受け止める」だなんて……こんなものって……!

「っ、ごほっ！ ……私はただ、こんなはずじゃなかった世界をやり直したかっただけなのに……」

……手の平を覆う、赤い温度。そこで気付かされた。私のこれまではやはり、徒労だったのだと。手元にジュエルシードも無い。それで

も、アルハザードに縋るしかないのに、セイジ・フォレストは裏切った。やはりどこかで思っていた通り、あの男はアルハザードに関係の無い男だった。

それなら、私はなにを縋ればいい？ 結局全て無意味だったの？

「プレシアさん、大丈夫ですか？」

「貴方……八高輪」

頭を巡らせていたせいで、彼の侵入に気付かなかった。既に冷静になっっている彼は声を荒げることも無く、その風貌に似合わないハンカチを手渡す。まさか、病気のことを知っている……？ 拒否を示そうにも、こみ上げて来る感覚を抑えきれず、ハンカチで口元を抑える。ごほつと鈍い咳をしてから、白いハンカチは赤く染まっている。

「さつきはすいません。頭冷やして来ました。一応眠っている間に少し吐血していたので用意していたんですけ、ハンカチですいません」

「礼は言わないわよ……ぐっ、ごほつ！」

「……なにか病気でも？」

「貴方に関係な——……うっ、ごほつ！」

「……言いたくないなら、別に良いです。それと、言いにくいんですけど、あなたの事情は管理局から聞いています。……その、娘さんを亡くしているんですね」

「……ッ！」

「で、クローンに記憶を転写させたのがフェイト、なんですね。多分ですけど、あなたがジュエルシードを集めるのは娘の蘇生、ですか？」

「だからなに？」

「もう一度お願いしたいんです。桃子さんからフェイトを嫌うのは、生んだフェイトがアリシアと違うからだと聞いています。だから、これからはフェイトをアリシアの代わりじゃなく、フェイト・テスタロッサという一人の人間として見てほしいんです！」

傍から見れば、命乞いのような勢いで八高輪は頭を下げる。どうしてあんな人形に、そこまで関心が持てるのか……

「確かに悲しいことなんですけど、俺たちはこうして生きてるじゃ

ないですか。あなたがそうまでするということは、時間を戻す魔法も人を蘇らせる魔法も無い、ということですよ。過去の為に生きるよりも、今日明日の為に生きる方が、フェイトやアリシアも喜びますよ」

「過去に縋って生きることが悪いというの？ 未来の為に生きることが正しいと？ それが絶対と誰が決めたの!? 貴方たちの尺度で決めないで!」

どうしてこの男はこう……平然と触れて欲しくない言い方をするのか……セイジ・フォレストとは違うタイプの不快な人間だった。

「俺はそんな難しい話をしたいんじゃないんです。俺はただ、フェイトやアルフたちにも笑って欲しいだけです。その為に、最初にあなただけが笑ってくれないと意味が無いんですよ」

「……………」

「お願いします。フェイトと向き合ってください! フェイトとこれから生きて下さい!」

「……………私は」

「八高輪さん、聞こえますか?」

「うお、びつくりしたああっ!」

くっそ真面目な話の最中で、急に念話をしないで下さいよ館長!

まったく不意打ちで爆竹鳴らされたような唐突さですからね!? 心臓に悪いですからね!」

「どうしたんですかりンディさん」

「至急プレシア・テスタロツサを連れて、アースラまで来て下さい」

「えっと、お叱りでしょうか?」

「そうしたいのは山々ですが、相手魔導師から貴方の名前が出ています」

「え、誰ですか?」

「名乗ることは無かったわ。ですが、彼は男手、同族といえれば分かる、と。既になのはさんたちも到着しています」

「……………あの優男か。分かりました、すぐ行きます」

通信、終わり。ああほんとびっくりした。

「ああ、管理局からです。行方不明扱いされてるので、身柄は管理局で保護しますね」

「……分かったわ。でも少し待ってくれる？」

「忘れ物ですか？」

「ええ。節介な人間から、荷物を受け取らなければいけないの」

「来たようですね。ご同行感謝します、プレシア・テストアロッサ」  
「管理局から少し話は聞いていたけど、一体なにがあってあの世界にいたのさ？」

「セイジ・フォレストに謀られたわ」

「あの……その袋はなんですか？」

「クロノ・ハーヴェイ……本当に管理局についていたのね。まあいいわ……節介な人間から渡されたものよ」

「中にはキーキが入ってるんだぜ？」

「ま、まさかプレシアがフェイトに差し入れ……？　これは夢じゃないよね？」

「勘違いしないでアルフ。フェイトに渡しなさいとしつこく言われただけよ」

アルフ、この人そういう性格っぽいからつつかないでくれよ？　下手に囃し立てたらキーキ捨てかねないから。目で訴えみると、まさかの通じ合うという。意外と仲良くなれてきたかもしれない。

「アルフまで来てるのか。怪我は良いのか？」

「言ったじゃないか。あんたよりは怪我は軽いつて」

「八高さん」

「脚は大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ、問題ない」

なのはやクロノがいるのは分かっていたが、まさかアルフまでとは。それにしても、プレシアがキーキを持っていくとは思わなかった

なあ。これは希望が見えてきたか？

……でだが、早速一つ疑問。なんかもう一人、やや薄い茶色の短い髪をしたシヨタがいる。薄い緑を基調としている衣服が、魔導師であることを示しているようだが。なんか知り合いに逢ったような眼差しを送られるが、マジで初対面なんだが……ええつと、誰かヒント頼む。

「……………あの、誰？ いや待て、当ててみよう。 ……さてはお前、俺の知り合いだな!？」

「そうですよ!？」

「…………その声、まさかユーノか？」

「あ、やっぱりこの姿は誰も見ていなかったんですね」

なん…………だと…………？ この美少年なシヨタが、ユーノだと…………？ その顔でなのはの部屋で過ごし、あれやこれやも見てしまったと…………？ そして、アリサやすずかに弄ばれていた、だと…………？

ユーノよ、お前とは友達だと思っている。だが、超えちゃいけない一線つてのはあるじゃあないか。ユーノはそれを超えた。俺は紳士として、お前を殴る。てめーは俺を怒らせた。

「裁くのは、俺のデバイスだあああああ!」

「は、八高さん落ち着いて下さい…………!」

「ユーノ君が驚いていますよ!」

「離してくれクロノ、なのはあ! 理不尽に怒るのが人間だ! 人は神じゃない! これは俺の戦争なんだ!」

【おい】

「スクラップの時間だぜえええええクツソ野郎があああああああ!」

ああ! · i h b f 殺 w q

「クロノ執務官、彼を抑えて」

「まったく…………」

「なに、バインドだ!? なにをする執務官! 俺はまだ悪いことしてないぞ!」

「ぼくらの眼の前で犯行予告までしてなにを言うんだ、君は…………」

【おいつつってんだろ!】

ん、なんだ？ 誰かいたのか？

と思つたら、空間モニターに映されたのは、なんともまあ気分が悪くなる優男の顔だった。ていうかそこどこだ？ 明らかに艦の外に見えるあの空間が、あの映像の背景にも見えるが。

【やつとここち見たか。ちつ、プレシアまで生きているとは……つくづく不愉快だな】

「それがあんたの本性かい、セイジ……」

【そう邪険にしないでほしいなあアルフ】

「おい優男……いや、セイジ。お前の後ろにいる局員はどう説明するんだ？」

【ああこれ？ 人の家に押し入ったんだぞ？ しかる対応をしただけさ。ただし、やったのオレじゃない】

「おい、まさかナツミ・フェレストに？」

【それも違うぞクロノ】

【私だよ、アルフ】

聞きなれた済んだ声。しかし、涼やかで落ち着いた声調がまるで死に、抑揚もほとんど無い。

画面の外からふらつと危ない足取りで現れたのは——フェイトだった。だが、様子がおかしいのは誰が見ても分かるのかもしれない。声調もそうだが、眼の光まで消えている。おまえけに、いつ倒れてもおかしくないほどに、身体をふらつかせている。

【私が、やったの】

「フェイト……？」

「フェイト、どうしてこんなことを……！」

【セイジから聞いたの……私は、アリスアの代わりなんだって。だけど、アリスアの代わりにすらなれない私は、役立たず以下だって。必要とされていない私なんて……アルフにだって迷惑をかけてばかりだから、私なんて誰から見てもいらぬ人間だったんだ……】

それを表現するなら、フェイトの今の状態は文字通りに「足場が無い」とか「支えが無い」という状態だった。しかし、こうも自虐的だったか……？ まさかあいつ、フェイトの出生を話したのか？ しかもい

らぬ脚色まで加えられている見た。

「フェイト、アタシはそんなこと思ったことなんて……！」

「アルフは優しいね。でも、もういいんだよ。でももう、私の使い魔なんて、辞めていいからね……？」

「フェイト……」

「かあさん、私が役立たずな人形で——フェイトとして生まれてごめんなさい……私、少し用事があるから行くね」

「待ちなさいフェイト、まだ話は……」

「おやおやプレシア、今になって人形が恋しくなったと？　こんな？　出来ない木偶に？　まあそうだよなあ！　使えないにしても、自分の代わりに動ける人間を手放したのは、お前にとっても痛いらしいなあ！」

「……黙りなさい、セイジ・フォレスト」

「お、なんだ、その袋？　もしかして、土産か？　もしかしてフェイトに？　ぷつ、あははははは！　柄じゃないなあ！　まるで普通の母親じゃあないか！　馬鹿馬鹿し——」

「喋るなクズがああああッ！」

その一言をきっかけに、アースラ内が静まり返った気がした。

剣幕に驚いたのそうだけど、驚きより怖いと感じたのは、八高さんの表情だった。きっと誰もが、その表情に眼を見開かせている。

いつもあっけらかんで朗らかな表情が一切無くなり、眼の前に立っていたら殴りに行っていたのかもしれない表情で、モニターを睨んでいた。

「……そこで待ってろ。お前だけ半殺しにしてから、管理局に突き出してやる」

【おお、それは怖い。暴漢が相手なら、警備は強めないのだ】

芝居がかったように、セイジさんは指をぱちんと鳴らした瞬間だった。

なにか以上を察したのか、艦内に警告音が響き渡る。他のモニターも、嫌な予感が示すように赤く点滅してる。



「これは……!」

「庭園内に、魔力反応多数!」

「魔力反応は60……いや、80!? まだ増えます!!」

「いずれもAクラスです!」

「……なにを始める気だ?」

【そうそう、まだ言っていなかったな。オレがお前たちを呼んだのは簡単な理由さ。オレは不安要素を消したい、お前はフェイトを助きたい。その為の用意さ】

聞いていて分かったのは、この誘いが罠であるということ。あの人は明らかに八高さんを狙っている。

【しかし分かんねえ。まさか全員助ける気らしい。そんなにアニメのリリカルなのはの世界が好きなのか?】

「………え?」

リリカル、なの、は? なにそれ? よく分からないけど、わたしの名前が呼ばれたと思う。でも、なにを言われたのかが、少しも理解出来ない。意味を知りたくて誰彼にと眼を配るけど、逆にみんながなのはに首を傾げる。

わたしの困惑を横に、一層に八高さんは形相を険しくさせる。

「…関係の無い話題振って、周りを困らせないでほしいんだが?」

【初めて逢った時から引つ掛かっていたんだが、お前もしかして、アニメ版すら知らないのか? 本当に同じ転せ】

蒼い光弾が走り、セイジさんを映していたモニターを直撃する。窓ガラスが割れたような音を響かせながら、あの人との会話は、強制的に閉じられた。

モニター割ったのは、変身した八高さんのガンブレイドによる一発だった。気が立っているせいか、銃声も普段より低く聞こえている。足早に転送装置に向かいながら、背を向けたままアルフに尋ねる。

「………アルフ、アイツと一緒にいたなら、場所は分かるか?」

「時空庭園だね」

「よし。あの優男の顔を月面みたいにしてくる。ちよつと無茶するから、付いてくるなよ」

「ちよつと待った。アタシもフェイトを取り返しに行くよ。怪我人のあんた一人に格好付けさせたくないからね」

「なのもいきます……！　まだフェイトちゃんと、ちゃんと話をしていないから……！」

「力になれるか分かりませんが、僕も協力させて下さい！」

「……僕も一緒に行かせてください」

「待て待て、俺がムカついてやることなのに、お前らまで来る必要は」

「アタシもあの男が嫌いだったんでね」

「放っておくと八高さんが無理するだろうと思うので、サポートしますよ」

「わたしもです」

「僕は違いますけど、セイジと話したことがありますので」

よっぽど頭に血が上っていたのか、八高さんはふうつと息を吐く。幾分は落ち着いているけど、まだ表情には険しさが残っていた。あの人の言葉は気に障ったみたい。でも、言葉の調子や話を落ち着いて聞いてくれる分に落ち着いているのは、わたしたちとしても助かっている。

危機的な状況なはずなのに、わたしたちは五人一緒に転送装置に入る。狭いせいか、人の多いバスの中を思わせるように、八高さんは腕を全力で組んで少しでもスペースを狭めている。なんとも締まらない光景で、少しだけ笑ってしまったのは内緒。

「待ちなさい八高輪！」

「また君は勝手なことを……！」

「すまん執務官！　これより不肖八高輪、以下四人を連れて勝手な行動します！　お叱りは俺だけよろしく！　頼むユーノ！」

「時空庭園内に、転送！」

狭い装置内が光に包まれている。一瞬の輝きまたたによって、わたしたちの視界は見慣れ始めた艦内から映り代わる。

それに、わたしが来た理由はもう一つある。さっきのフェイトちゃんは以前に逢った時よりも危うい印象だった。まるで引つ張れ過ぎ

た一本のピアノ線。切れたらどうなるか……考えたくない。

フェイトちゃん、わたしたちはまだ、なにも知り合えていないんだよ？ こんなことで他人になりたくない。わたしたちはきつと、これからのはずなんだから。

待っていて、今助けに行くから――

「……彼が局員じゃなくて良かったですね、艦長」

「でも惜しまれもするわね。彼は意図せずとも、人を集める。立派な才能よ」

「単に危なっかしいからですよ」

「違い無いですね。なんにしても、勝手な判断が多いのも考え物ですが……でも、クロノも内心では少しばかり、彼の行いを容認しているわけではありませんか？ だから、力づくはしなかった。違えますか？」

「……どうしてそう思うのですか？」

「彼は局員じゃないことを割り切って、善しとしていることを行っている。それも無理の無い範囲で。彼が従っているのは我々や組織のルールではなく、己の信念そのものです」

「組織についても、信念は貫けますよ」

「そうですね。でも、ああも素直にされるとわたしも羨ましくありますね」

クロノ執務官自身、その節はあった。

八高輪のやり方は滅茶苦茶だった。一応に組織の為に動くもの、その指示はわりとあっさり破られている。しかしその理由のほとんどが、誰かの為なのだ。

プレシアの保護にしても勝手が過ぎたもの、傷の手当も早く行われていたことで難を逃れたし、彼が怒りを表したのも、フェイト・テストタロツサやプレシア・テストタロツサを嘲笑されたことがきっかけだった。その性格を鑑みれば、彼が管理局につかず日常を過ごしたいと言ったのは、高町なのはたちの為なのかもしれない。

クロノ執務官とて自覚している。極論だが、自分が動けないタイミングの案件に、彼は飛び込むことが出来る。理由は簡単、局員じゃないから。偶々関わってしまったから、その事件で誰かが悲しむから。それが疎ましくもあるし、少しばかり羨ましい。

ただ、一感情で組織を危険を巻き込むのは気に入らない。けど、それとは別に彼には確固たる信念がある。その点はクロノ執務官は評価してた。ただ、口にするのが悔しいから言わないだけ。

「……大人しいんですね、プレシア・テストロッサ」

「逃げて欲しかったの？」

「いいえ。……構わなくて良いのですか？あなたの娘でしょうに」

「……私にどうしてほしいの？ それよりこれ、なんとか出来ないかしら？ そろそろ腕が痛いわ」

「…それは失礼。クロノ執務官、このケーキを冷やしてくれますか？」

「はい」

「では、こちらへ」

少しだけ、リンデイは寂しい表情を浮かべるが、スイッチを切り替えるように、振り返ると同時に凜然とした表情へと張り替える。

表情にこそ出さなかったけど、リンデイは内心でふつと笑っていた。プレシアの握り拳の理由を考えると、同じ母親として嬉しく思えた。

しかし、口には出さなかった。組織を束ねる一人として、公私を混同させる訳にはいかない。あちらのことは独断で動いた民間協力者に任せて、こちらはこちらでの出来ることをしよう。そう割り切ってリンデイは艦長としての責務を果たす為に、クロノ執務官とプレシアを連れて歩く。

## 始まりの予感

「うお、危ねっ!」

「気をつけなよ、そこは虚数空間になっっているんだ」

「nのフィールド?」

「いえ、虚数空間です。端的に言えば、魔法が干渉されない空間です。落ちてしまえば、飛行魔法も転移魔法も使えず、重力に引かれるように次元の間を漂うことになります」

「そ、そりやひでえ……」

ツツコミがないのは寂しいねえ……ボケが殺されるって辛いのですぞ?」

だがアルフとユーノの説明で理解出来た。マープリングがかかった見た目がなんか嫌だなと感じていたけど、マジでろくな空間じゃなかったようだ。ドラ○もん風で言うなら、タイムマシンに御乗車の際はしっかりとシートベルトの着用をお願いします。落ちれば冗談じゃ済みません、ということらしい。

「不安な顔するなっつてなのは。これは勝てる戦いだ」

「そ、そうなんですか……?」

「よく作品で見るじゃないか。暗躍して最後に戦闘に出て来るボスキャラってのは、大体負ける法則なんだ」

「例えそうだとしても、その前に100近くの敵を倒さないと……」

「むしろ山場はこっちだと思えばいい」

RPGでもたまにあるだろ? ラスボスよりもその手前のボスが強かったりする話。あいつは自ら動くタイプでもないから、恐らく正念場はこの多勢相手かもしれない。だがちようどいい。こっちも試したいことが色々あったんでね。

「なあアヴァロン。お前の使う魔法というのは、俺がつくるということも出来るんだな?」

『そうじゃな』

「例えば、その気になれば砲撃魔法というのも出来るんだな？」

『貴台が望めばじゃがな』

「出来るんかい！ ガンブレイドだからてつきり出来ないと思ったぞ！」

『偏見じゃな。貴台が強く信じなければ、出来る魔法も出来ぬぞ。自分は出来ると思ってみよという言葉、貴台は自分に向けられぬか？』

——それは、いつかなのはに向けた言葉。

あれは少なくとも、リリカルなのは世界の主人公に向けた言葉でもあったから、それを後押しする意味での言葉に過ぎなかった。あまり言いたくないけど、ぽつと出の俺には出来ない、そう考えていた節があつたのも否めない。

いかんね、うん、これはいかん。自分で思っていたよりも遠慮していたのかもしれない。

「……ありがとうなアヴァロン。ちよつと吹っ切れた」

『小生は只の追い風。足を踏み出すのは己の意思じゃ。己を信じた貴台を誉れとするべきじゃ』

「それでもだ……うし、大群が相手ならちよつと試してみるか……」  
一応頭の中では考えていた魔法があつたからな。それがまさか本当に使えるとなると、単純に嬉しくなるもんだ。相手はただの機械だ。そんなの相手ならなんの遠慮もいらんよな。

……考えたら俺、本気で魔法での戦闘するの初めてだな。どうなるんだろ？ 初めて変身した時は無我夢中だったし、アルフの時は無論のこと、シグナムに関しては勝つ気より腕試ししたいという修行僧の感覚だったし。ただでさえ男には肩身の狭い業界だし、試すにはまたとない機会かもしれない。全部試してみるか。

ひたすら走った先には、なんとも重々しい扉がたたずんでいる。恐らく、ここを開ければ即戦闘が始まる。

ちよつと休憩がてら、一度足を止める。元は俺の勝手に来たのに、結構付いて来ちゃったし……確認がてら、振り返って確認してみる。

「……ここを開けたら、敵陣ど真ん中だぞ？ 退いても俺はなにも

言うつもりは無い。本当に来るのか？」

「冗談。ここまで来て、臆病風に吹かれたのかい？」

「僕はどう言われても、みんなに協力しますよ」

「僕もです……それに、僕にも来た理由があります」

「わたしもです。フェイトちゃんを迎えに行かないと……！」

いやー、みんな格好良いなあ。まるで俺が一番ビビってるみたいじゃないか。ちよつとビビってるけど。俺を除いてアルフが一番ノリノリなのが気になる。そういやさつきセイジが嫌いで言っていたから、アルフなりに気に入らなかつたところがあつたのかもしれない。そう考えると、フェイト奪還は前提としてアルフも俺と同じようにストレス発散をかねて来ているようだ。うん、そういうノリ大好きだぞ。

さて、この五人中、前衛を努める魔導師という並びの中では俺が一番非力かもしれない。だから、後先はある程度考えてやりますかね。

「さて、開けるぞ」

全員が首肯。ぎいっと扉を開ける。ガンブレイドも接合したままで目隠し耳栓も無し。身体はアレだが気力は上々。喧嘩を売りに来た俺にウォーミングアップはいらないぜ？

で重い扉を開けた直後、俺は知った仲の友達の家に上がりこむノリで扉を破壊しながら、ガンブレイドを横一線に払う。

「いらつしやいませええー！」

「なるほど、アルハザードへの扉を開き、人の蘇生の秘術を知る……ということですか」

「そうよ」

「あなた程の魔導師が……民話伝承の話を真に受けるなんて……なんて愚かなことを……」

「アルハザードは今も存在するわ」

「仮にそうだとすると、あなたが望むような魔法が存在するとは思えません」

プレシアを聴取したリンディとクロノ執務官が覚えた感覚は、一遍の虚しさだった。

彼女は事故によって娘を亡くしている。彼女がジュエルシード集めに躍起になっていたのは、存在するかも曖昧な異世界を求め、失われた秘術を得る為だった。

次元の狭間に存在すると言われる忘却の都。彼女がそこで望むものは、失った時間を取り戻す術と、訪れを夢見た理想郷だった。

「知らないはずが無いだろう、どんな魔法を使っても、過去を取り戻すことなんか出来やしない」

「子どもがよく言う……以前あの子どもに聞きそびれままだから、貴方たちに聞くわ。過去の為に生きることとは間違いで、未来の為に生きることがどうして賛美されなくちゃいけないの？ 私は私のやり方で過去を清算しているのに、それを否定される謂れが、どこにあるというの？」

「それは……」

「誤魔化さないで下さい、プレシア・テストロッサ」

言い淀んだクロノ執務官の隣、リンディは僅かに皺を寄せた。クロノ執務官にとっても、普段温和な母親が怒りを示す現場に立ち会うことに緊張を覚えてしまう。

「あなたがしていることは、過去の清算なんて潔いことではありません。単なる現在と未来の否定です。失ったものが戻らないのは摂理なんです。誰にでも起こる、当たり前前の理不尽なんです」

「……………っ！」

「プレシア・テストロッサ。あなたの生き方に懸念を口にする人間は大勢いたでしょう？ どうしてその言葉に耳を傾けようとしないのでですか？ その中で、悪意であなたを惑わそうとした人間がいたのですか？ そんなはずは無いでしょう」

プレシアは怒りの言葉を飲み込んでしまった。

リンディの眼が、違う。凜然と構えた表情から知らない内に物憂げ



に滲ませていた。彼女もなにかを失っている。それを理解した瞬間、プレシアは自分でも驚くほど弱々しく返していた。

「……割り切れと言うの？ 運が無かった、なんて理由で諦めろと言うの？」

「……失った人間を蘇らせたい、その気持ちは痛いほど理解出来ません。でも、あなたはやり方が間違っていたのです。あなたは過去の為に生きると言いましたが、あなたは紛れもなく過去を生きているんです。あの事故から、あなたの時間は止まったまま。明日が来たことが無いという自覚があるのではありませんか？」

明日が来たことが無い——その一言は、プレシアのこれまでを現実に適した言葉かもしれない。身体に穴が開けられたような衝撃を覚えながら、彼女はこみ上げる吐き気に苛まれる。

プレシアは、自覚してしまった。なにもかもを切り捨て、娘との過去やり直し、現在を過ごし、未来を生きることだけに妄執し続けた。その結果が、無為な今。

「眼を覚まして下さいプレシア。あなたがすべきことは、生きていく人間と現在いまを生きることのはずです」

「……………」

プレシアが零したのは、疲れの全てを置いたような重い溜め息。視線はどこを見るでもなく、二人の局員にすら移すこともなく、虫も飛ばぬ虚空を見ていた。

……そんな沈黙が数分か、十数分か。頬を伝う汗の音が聞こえかねないほどの沈黙。その中、突如としてプレシアが立ち上がったことに、場の緊張が走った。

「……なにをするつもりですか？」

「……ええそうね。セイジ・フェレストの言う通りよ。今更になって、あの子を失うのが惜しくなっただけよ」

「それって……………」

「勘違いしないで。フェイトが使えないにしても、多大な時間と浪費を費やしているのは事実よ。誰と知らない余所者の手に渡るのが

癪なだけよ。それに……」

或いはプレシアの顔は、誰から見ても険しさを覚えていないように映るかもしれない。だけど、リンディは少しの変化に気付いていた。どう変化したのかは分からないけど、それが悪い変化には感じなかった。確信せずともそう言えることにも理由はあった。

「私たち家族の問題よ。他人が口を出さないで」

……少しだけ、眉間の皺に距離が出来たから。なんて言えるはずも無かった。

「——シュート！」

突撃槍や片手剣を携えた鎧人形の群れ。意思を持たぬ彼らにプログラミングされているのは一つ。なのはとクロノ以外の標的の殲滅だった。情けも容赦も躊躇いも後悔も抱くことなく、歩兵は動く魔導師たちへと鈍い巨躯を走らせる。

しかし、それらに怯むことなく、八高となのはたちは前進する。

なのはの周囲を停滞していた球体状のさくら色を、強固な鎧人形の戦列へと奔らせる。さながら小さな彗星のように、軌跡は歪のない軸線を描く。

一つ一つを取っても威力のある一撃は、鎧人形を破壊し動きを封じるには十分な効果を有している。しかし、それが切り札や奥の手と呼べるほどの魔法ではない。その一撃にも耐えうる頑強な機械もこの兵団には当然存在する。手にしたランスを構え、鎧人形はなのはへと向かう。

「……っ！」

「なのは！」

危険を察知したユーノが鎖により捕縛魔法で捕らえ、なのはの正面にたったクロノは眼前の敵にシュートバスターを放射する。クロノ

放射した魔法は、威力を収縮している分貫通力を上昇させ、並んだ三体をまとめて撃破させる。

「あ、ありがとう、クロノ君、ユーノ君」

「なのは、僕たちは一人じゃないんだ。無理をしないで…」

「…うん！」

「急いで！ こっちはそろそろ限界だ！」

「アタシに任せなさいな！」

ユーノが抑えていたのは、なのはを襲った一体だけでなく、それ以外の五体も同時に捕縛していた。それから意識を逸らさずになのはの支援を行えただけでも、彼の魔導師としての才は非凡であることを示していた。

ぎちぎちつと捕らえた鎖が軋みを響かせる中、疾駆するアルフは魔力の込めた拳を全力で叩き込む。展開された防御魔法すら破壊し機械で出来たその機関に拳を減り込ませてから、捕縛された残りにも同様に蹴りや拳を見舞いする。

「助かったよ…」

「こっちこそ助かったよ。やるじゃないの、ユーノ」

「いや、あの人に比べるとどうにもね……」

「ああ、あつちね……あつちは参考にもしない方が良いわね」

ユーノとアルフが眼の端でちらつと見たものは、ガンブレイド片手で猛攻を緩めない八高輪の姿だった。

実のところ、この多勢の戦闘において、一番の功労者は彼かもしれない。一人で前衛と陽動を行うという無理をしているにも関わらず、彼の被弾や受けた攻撃はほとんど無い。それなりにダメージを負っているもの、一人で多勢を相手していたことを考えると、八高は軽傷と呼べる範疇だった。加えて、鎧人形の撃破数も半分弱を彼一人が占めている。

その大きな要因は二つある、なのはとの訓練で図らずも身に付けた魔力の察知能力。目隠しも耳栓もしていないこの状態において、殊更にこの能力が活きている。この鎧人形相手の攻撃なら、前方と後方から同時に攻撃されても、彼は最善の方向へと回避する。

根本的に八高輪の戦闘能力や反応速度が上がっているが、彼はまだリンカー・イグナイトを使っていない。これもなのはとの訓練の影響もあるが、以前にシグナムと剣を交わしたことの影響によって、彼の眼からみた敵の攻撃や拳動は、あの将と比べればまるで遅く、隙も大きい。それが二つ目だった。

「優男よ、俺は帰って来たああああ！」

半分は鼓舞する為、もう半分は真面目になりすぎないように、自分を茶化す為に八高輪は叫んだ。

しかし、これまでの猛攻における疲労が、著しく身体を蝕んできていた。元より痛めている足のせいで踏ん張りが利きにくい状況と、さらに腕の力も入らなくなってきている。ガンブレイドを振り抜くことが難しく感じるほど、状態も悪化してきている。

だが、八高にとってはそれもある程度想定内だった。むしろ意外ともったなど関心したくらいである。鎧人形の数が減っているのか増えているのかよく分からない状況の中、八高は不逞に笑った。

「なのは、俺は陽動に回る。砲撃いけるか？」

「出来ますけど、それじゃ八高さんが……！」

「大丈夫だ、俺は不可能を可能にする男だからな。信用してくれ！」

「……はい！」

「ユーノ、アルフ！　この中で危なっかしい奴の動きを封じてくれ！」

「分かりました！」

「あいよ！」

「クロノ、俺はなのはの砲撃が当たり易いように、蹴散らしながら連中を固める。なのはは動けないから、サポートを頼む！」

「はい……！」

「仕掛けるぞアヴァロン……！　これが俺とお前の、本領発揮だ！」

——リンカー・イグナイト！——

それぞれに自然と指示を与えてから、八高はその身から蒼い粒子と散る魔力光を纏いながら、すれ違う鎧を切り払う。時に軽く斬りつけ、思うように誘導させている。なのはほどでないにしろ、彼とて戦

略シユミレーションゲームを好きでやっている人間だ。なのはの能力も分かっている彼にとつては、どう動けばいいのはある程度分かっている。

……かくいう八高も、最終的な動きは決めていた。なのはたちと合流してからの砲撃。砲撃による魔力を蓄積させる為に、アヴァロン・ブルーによる銃撃は一切せず近接攻撃のみを行っている。

彼を纏う蒼い光による軌道は、まるで一つの流れ星のように見えるのかもしれない。その様は外観に損なわず、鎧の一振りを四肢に触れさせることは無いどころか、その速度に追いつけてすらいなかった。

彼——八高輪の真正銘の全力は、なのはやフェイトにも遅れていない。

それどころか、その気になれば確実にアルフを倒せる腕まで有している。それでも彼が負けた理由は——言うまでも無いだろう。

「八高さん！」

「オーライ！」

程よく群れを集めたところで、八高は全速で前線から離脱する。

——八高がリンカー・イグナイトを使って派手に動き回ったことにも理由がある。なのはには一つ、切り札がある。域内に散った魔力を集束しての超砲撃魔法。リンカー・イグナイトの影響で絶えず粒子状に舞う魔力を、なのはに供給させつつ、鎧人形を撃破している。

クロノはなのはの援護に回っているもの、八高の陽動やアルフとユーノの捕縛によって、負担は軽減されている。それでも、事実一人でなのはを守り抜いたことは大きい。

飛行魔法でなのはたちの隣に戻る八高は、ガンブレイドの切っ先——否、銃口を戦列に向ける。威力や攻撃範囲を考えれば掃射も容易い。加えて、なのはも砲撃の体勢を取っている。

「行くぞ、アヴァロン・ブルー！」

「お願い、レイジングハート！」

『来い八高輪！』 『Stand by Ready』

「シュー……」

「スターライト……」

「ゲイザー……」

「ブレイカー……」

二つの巨大な放射の軌道が、鎧人形の列へと伸びる。さくら色と蒼い照射の光が、五十近くの群れをなぎ払っていく。

「せー………の!!」

二つの声を重ね、放たれた砲撃魔法を粘土でも捏ねたように混ぜ合わせる。もちろん、この合体魔法もこの決戦の直前に打ち合わせしたもので、実践では初めてのことだ。

基本的に近接戦闘以外が劣っている八高にとって、唯一なのは合わせられるのが、この超砲撃魔法だった。もともと、八高の放った超砲撃魔法のシューゲイザーは、リンカー・イグナイトを展開しなければ使用出来ないという限定的な状況に限られているが、だからこそこの威力を発揮している。それでも、周りへの余波や巻き込みを考えてフルパワーではないもの、鎧人形を破碎させるには充分以上だった。広範囲で奔るのは、薄み赤みを帯びた藍色の奔流……威力を抑えているとはいえ、合体魔法の影響によって庭園の四割ほどを損傷させている。もちろん、眼前に広がっていた群れもいなくなっている。

「……ふう、つつかれたああ……やば、足痛っ」

「だ、大丈夫ですか？」

「撃ったって程度だ、大丈夫……じゃないなこれ。ユーノ、肩借りて良い？」

「はい」

「それにしても、まさか全員倒せるとは思っていなかったですよ……」  
「そうか？ 俺は想像以上の成果でびっくりしてるぞ。勝算はあったさ」

「や、八高さん。わたしも肩を貸しますよ」

「い、いいよなのは。そこまでは大丈夫だ」

「そうだよ。みんなボロボロなんだから、なのはも無理はしない方

が良いよ」

ナイスだアルフ。勝つたとは言っても、一応疲れ溜まりまくってるからな。出来るだけ疲れは残さない方が良い。……というのもあるが、流石に幼女に肩を貸せば鼻息が荒くなるから、口惜しいけど我慢しとく。

なのはには必要以上に心配されたけど、そこは本当に大丈夫だ。一人で歩けなくてもないが、なんかふらついて歩きにくいから無理しないようにしよう。フィリス先生に逢いに行く為に怪我引つ張るのも大分気が引くしなあ……そうだ閃いた！ 家に帰ったらなのはに湿布を張って貰おう！ 幼女のあどけない小さな手が慣れない手つきで俺の患部をぺたぺた……見えたぞ！ 水の一滴っ！ これが明鏡止水の境地か……！ ああなのは、刻が見えるわ……

「モウヤメルンダー！」

「ちよ、なんであんた自分の眼突いてるのさ!？」

「ちよつと煩惱を退散させよう——おい、まだいたぞ」

「……本当だね」

ギヤグで眼を突いたのがいかなかったな。なんか強いがいるらしい。全員のリアクションがなんか出てこないところを見ると、ガチめのが出たと思っていいかも。

「……来ます！」

「なんかやばいなー！」

これは見なくても分かる。やばい一撃が放たれている。

なのはが広範囲でのプロテクションを張っているようだが、それでも防げるか不安がある。あと三人がそうしているようだから、俺もラウンドシールドを展開させる。

「……？」

おかしい。思っていたよりも攻撃による衝撃が少ない。大型トラックが来たと思ったのに、走ってきた子どもを抑えたような軽い反応。ラウンドシールドってこんなに効果強かったっけ？

なんだ、魔力反応がなにか違う。ええつとシールドが五つ、広範囲プロテクションが一つ、敵からの砲撃が一つ……待て、シールドが一

つ多い。しかも広範囲に広がっている。なにが起きているんだ？

「——それを仕立てたのは私よ」

聞き覚えのある声と同時に、なんかひどい魔力反応が敵のいた方向に落ちてくる。本気というよりは、容赦とかそういうのが無い雰囲気  
の攻撃魔法だった。

「強みと弱みを把握してないでも思われていたようね」

真つ暗闇にぼけていた視界が晴れていく。特に、アルフとクロノから声にならない声が聞こえる。声を聞いた限り、それなりの妙齢だらう女性の声だが……あなるほど。この人なら凄いな納得。

「プレシア……どうしてここに？」

「そこにいる娘に、引導を渡しに来たのよ。出てきなさい。そこにいるのは分かっているのよ」

「クロノ君、この人は……？」

「プレシア・テスタロッサさん……フェイトの母親だよ」

言われながらプレシアの視線を追うと、眼の光を失ったフェイトがふらつと崩れかけた柱から、姿を現した。

……見ていて痛々しい。まるで俺たちよりボロボロじゃねえか。冗談抜きで、糸で出足を動かされてるんじゃないかってくらいに身体が揺られすぎてる。普通に戦えば俺でも勝てるんじゃないかって錯覚してしまうが、相手は少なくともフェイト。といってもなあ……

「引導……なにをするつもりですか？」

「貴方が用があるのはセイジ・フォレストでしょう？ 私がフェイトの相手するわ」

「ちよつと物騒な発言聞こえたので、俺はそうさせたくないんですけど」

「なら言い方を変えるわ。私は決別しにきたのよ」

「フェイトとか？」

「過去とよ」

……よく見ると、少しばかり眉間の皺も緩んでいる。声の調子もそうだが、以前のように用心棒のように張っていた気も抜けている。

その言葉をどう受け取って良いのか分からないけど、聞いた限りの



プレシアの過去を鑑みれば、どうとでも聞けるのがな……清算させるつもりか、ご破算とするつもりか……

「……分かりました。アルフ、ここに残って欲しい」

「分かっているよ」

「わたしも残ります」

「なのは……」

「わたしまだ、フェイトちゃんと話せていないから……八高さん、我がままを言わせて下さい……」

「その程度、我がままの内に入らんよ。友達フエイトを連れて早く来なよ」

「…はい！」

「ユーノ、クロノ、行こう」

「でも八高さん、身体の方が……」

「この程度へのつつぱりはいらんですよ！ 行こうぜ！」

よし、痛みも引いてきたから、歩く程度のは大丈夫だ。残りはほとんど、ナツミとセイジだけのはずだ。先にセイジを見つけて顔を溶解人間（この映画知らない人絶対多いな）にしてやりたい。今の俺は男相手には本気モードだ。

……あ、どっちに行こう。真っ直ぐにいける道と、上に繋がる階段があるな……

「セイジは基本的に、通路の奥の部屋を拠点にいます」

「助かったよクロノ」

そういえばクロノはここに精通していたな。これなら道に迷うことも無いな。

不安が無いと言えば嘘になるけど、ここはなのはとアルフを信用するしかないな。俺たちは俺たちで向かうことにした。待ってる優男め。一応は切迫した事態だ、なるだけ急ごう。

「直接見てはつきりしたわ。本当に催眠魔法にかけられているようね」

「催眠魔法……？ フェイトほどの魔導師がどうして？」

「要領を得れば催眠は簡単よ。心を砕くなり、空洞をつくってしまえば誰だっただかるのよ。フェイトがアリシアのことを知っていた以上、セイジ・フォレストが出生を話したことで隙間をつくったよね。様子を見るに、必要以上に小突いたようね。つくづく口の上手い男ね。その口車に乗せられるフェイトも愚か極まりないわ」

「仕方ないよ、私はアリシアと違って不出来だから……でもねかあさん、私は気付いたただけだよ……自分が望まれて生まれてきた存在じゃないんだってことを、教えてもらっただけだから……」

或いは、今にも息絶えそうな無表情でフェイトは淡々と語る。事実、フェイトはセイジの催眠魔法の状況下にある。が、強く感情が刷り込まれているだけであって、今口に出したことは紛れも無くフェイトの本音だった。

その意味を真に理解しているプレシアだからこそ、僅か、誰にも気付かれないくらいに眉を微動させる。その感情の正体は自分でもはつきりしている。だからこそ、自身に対して怒りも沸き、情けなさも覚えた。

「とんだ体たらくね。アルフと同じ世界を見て、同じものを聞いているはずなのに、そんなことが言えるのね。年の近いこんな子にまで迷惑をかけて……なにも思わないの？」

「良いんだ……彼女はただの同情で、私と仲良くなるかと近づいているだけだから……」

「フェイト……なのはにそんなつもりは……！」

「二つ聞くわフェイト。どうしてここに来たの？」

「別に変な話じゃないよ」

フェイトはいやに作られた笑顔を浮かべながら、答える。

手にしたバルディッシュをサイズフォームに切り替え、雷光に光る刃をプレシアたちに向ける。

「私ね、小さな願いがあったんだ。私とアルフとかあさんで、仲良く、笑って過ごしたい。でも、そんな些細な願いは叶わないんだって気付いたから……違う方法でみんなと一緒になる方法を考えたの。」

だから、かあさんとアルフは先にいってほしいの。私も必ず、後から来るから……」

「止めてよフェイト！ そんなの間違ってるっ！ 死んだって誰も喜びはしない！」

「こんなことしなくても、フェイトちゃんと一緒になれるよ！ みんなフェイトちゃんのことを心配しているんだよ!？」

「……君は優しいんだね。でも、みんながみんな君やアルフのように優しくはない。私は、一番愛されたかった人から、愛されることは無いんだ。私はただ、かあさんの娘として、かあさんの為に頑張ってきただけなのに……うん、もいい。全部終わりたいんだ。こんなはずじゃなかった世界で生きていても、辛いだけだから……」

「フェイト……！ そんな悲しいことを……!？」

「もう良いわフェイト。貴方はやはりアリシアとは違う。その顔と声でこれ以上くだらないことを言うのなら」

プレシアは、細身の研ぎ澄まされた刃のように細めた眼光を、我が娘に送る。

「——私が貴方を否定してあげる」

形なんて関係無い。やはり愛は盲目なんですよ

「その手を離しなさい、プレシア女史！」

プレシアはクロノ執務官を羽交い絞めにしながら、転送装置へと近づいていく。

局員魔導師に囲まれながらも、彼女は不逞な笑みを浮かべる。その気になればプレシアはこの数を突破出来る魔力を保持しているもの、肝心の体力が追い付いていなかった。それはリンデイにも理解出来ていた。

彼女が着実に目的を果たす最善の方法として、クロノ執務官を連れながら、多勢の局員のデバイスを向けられている。

「なにが目的ですか？」

「30分……いいえ、10分でもいいわ。私を時空庭園まで見逃しなさい！」

「母さん、そんな話に耳を貸しちや……！」

「黙りなさい……！」

「……つぐ」

「クロノ！」

クロノ執務官に回した首を一層に締め上げる。我が子が人質に取られたばかりか、間違えば命の危機に晒されている。艦長という役職を務めるリンデイにしても、人の親に変わりない。

「私を撃ちたければそう命令するといいわ。私と同じように堕ちたければね」

「………っ！」

「どうする？ 貴方は我が子に銃を向けられるような、薄情な母親なの？」

「母さん………！ 僕に構わずプレシアを………！」

「………各員、武装を解除」

「母さん！」

「賢明ね。……リンディ・ハラオウン、貴方は立派な母親よ」

言いながらプレシアは、クロノ執務官を手放しながら転送装置に入る。

……一つだけ、リンディは彼女から確認を得たかった。剥き出しになった母親としての情から、一つだけ疑問を口にした。

「プレシア女史。今のあなたにとって、フェイト・テスタロッサはどう映っているのですか？」

「……………答える必要は無いわ」

……口元を一度抑え、強く咳を吐き出す。手元に残った赤い命の欠片を見つめる。この度に、プレシアは自身の時間が削られていることを明確に認識してしまう。

……果たして、自分があとどれだけ眠れば、眼の覚めない日が来るのか。次の夏かもしれないし、半年後かもしれないし、来月かもしれないし、来週かもしれないし、明日かもしれない。だが、長くないことははっきりしている。

一言だけ、誰にも聞かれることの無い独白を置いて、プレシアは転送の光に包まれていった。

「——ただ、清算させる必要があるのは確かね」

「愚かな娘ね。互いに死ぬことで一緒になる？ 死ねば言葉を交わすことも笑い合うことも出来ない。それこそ、永遠に一緒にいられないの。だから私は…………」

「アリシアを蘇らせようとした。娘じゃない私なんてどうでもいい。ジュエルシードを集めるのも、アルハザードに行く方法を知るために」

「そんな理由で集めていたなんて……………なんで話してくれなかったのさ!?!」

「言えば協力してくれたの？」

「それは……」

「手は絶対に出さないで。これは私とフェイトの問題よ」

バインドでなのはとアルフの動きを封じてから、プレシアは無機な表情を浮かべるフェイトに向き直る。

当のフェイトは、その表情を幾度と見ていることから特別反応は無かった。けど、いつもと少しだけ、様子が違うことが気がかりだった。

……フェイトは、その直感を無視し、睨みつけるプレシアを虚無に見つめ返すだけだった。

「来なさいフェイト。貴方を教育し直して上げる」

「行くよ、かあさん……最初で最後の親子喧嘩をしよう」

「……少し眼を離しただけで大口を言うようになったのね、フェイト。なら一つ教えてあげる」

フェイトとは違う、禍々しい極彩の雷光が黒いマントの少女を穿つ。

バリアジャケット越しでも通る雷光のダメージは、プレシアの無遠慮と比例して濃く現れ、甲高い悲鳴となつて響き渡る。

「喧嘩は低いレベル同士のやり取りを言うのよ。その程度の腕で私と並んだつもり？」

「もういいよプレシアっ！」

「止めてくださいプレシアさん！ こんなことしなくても、フェイトちゃんと」

「部外者は黙っていなさい。これは私とフェイトの——」

「まだだよ」

雷光の一撃を受けてなお、フェイトは高速でプレシアの側面に回る。

プレシアは、その動き自体には反応出来ていた。眼で捉え、どの魔法で迎撃するかも逡巡から導き出していた。……しかし、身体の方が動けなかった。フェイトと違って前線での経験が圧倒的に不足していたこともあるが、気道に込み上げて病によって、自身の動きが封じられていた。

こと戦闘においては、一瞬の隙というのは命を落とすには充分以上の時間。フェイトやプレシアのような熟達者同士なら殊更に、躊躇いや判断ミスは許されない。プレシアが与えてしまったのは、一瞬より遙かに長い二秒間。込み上げる吐血感を抑えることに意識を強く向けたことで、シールドの展開を余儀なくされた。

「親子喧嘩……親子らしいね。でも私は、これ以上の我がままはいらない。だから最後まで、良いよね？ 自分の言いたいことを言うて」

「奇遇ねフェイト。私もね、貴方に言いたいことがあるのよ——今まで貴方のことが、大嫌いだったのよ！」

「——っ！」

プレシアが珍しく語尾を強めたのは、フェイトへの嫌悪感からではない。元々戦闘魔導師でないプレシアは、シールドごとフェイトを押し退けただけのことだった。

……現状不安定なフェイトにとっては、この一言は追い討ちだった。親から愛されていないことは理解していたにしても、こうして口に出されるとやはり辛くて、痛いのが事実だった。

「……ねえかあさん。私は母さんのこと大好きなんだ。大好きって思うことって、間違いなの？」

「……いいえ、間違いじゃないわ。むしろ正しい感情よ」

「それじゃあどうして愛してくれないの!? 私はかあさんが大好きなのになー！ なんてなの!?!」

「………何度も言わせないで。貴方が嫌いだったからよ」

……普段のフェイトなら、これほど感情的にはならなかったのかもしれない。奥の歯をぐっと噛みながら、プレシアを睨み付けている。鎌状に形を成すバルディッシュを壊しかねないほどに、過度に握りこむ。少なくともなのはとアルフには、その手から血が零れたと錯覚したほど、力が籠っていた。

——向かい合う両者が異様な剣幕で睨み合っていることを抜きにしても、なのはは嫌な予感を覚えてた。兎角なのはは、この手の嫌な予感というものがよく当たりやすいことを自覚していることから、寒





「淑女たちの声に呼ばれて俺、参上！」

誰も呼んでないだろうから、自分で言っておく。

どうにもプレシアの言葉が引つ掛かっていたせいで戻ってきた訳だが、大正解だったな。よくよく考えたら、プレシアが手出しはさせないだろうとなにかしらをすると思っただが、アルフとなのはがバインドで動き封じられているし。まあ、バインドで止めていただけ有情つてことで。勢いでいらんこと叫んでしまったが、誰にも気付かれてないな。セフセフ。

「あぶねえあぶねえ、なんとか間に合ったな！」

「貴方は……！」

「八高さん……！」

「どうしてここに!？」

「聞いて驚くなよ、ただの山勘だ。まさかと思っていたが、本当に死ぬ気だったんですか!？」

で、俺がなにをしているかって？ 無防備なプレシアの前にたつてフェイトの攻撃から守っている。あのね、重ね重ね言うけど良いかい？ 幼女を守るのは当然の前提として、淑女や女性を守るのは紳士としては嗜みとか義務とかだからな。

「自分が死んで事を終わらせても意味が無いんですよ！ 残った人間がどんな気持ちになるか、分かって死のうとしてるんじゃないですか!？」

伊達に一回死んでないんでね。助ける為に死んだとしても、死ねば残った人間は悲しんでしまう。まして、この状況は親殺しなんて起こっちゃいけない状況だ。ましてやこんな幼女にそんな罪背負わせるとか冗談じゃない。そういう状況を放置とか見て見ぬ振りとかほんと勘弁してくれ。

この状態じゃ会話もままならん。申し訳無さいっばいで、押し込むようにフェイトを跳ね除ける。顔に傷を負った赤服のZ A F T兵くらい心で喰る。痛い、痛いいいッ……！

「フェイトにあんたと同じ気持ちにさせるつもりですか!? 死ぬ覚悟なんて持つくらいなら、生き抜いてくださいよ! 折角フェイトと向かい合っているのに、自分だけ逃げるつもりですか!?!」

「……………っ!」

「自分で言ったはずですよ。過去との清算、して下さいよ。今度は間違えないで」

「……………」

うわあ、フェイトのこの眼、見ていてきついなあ……一度しか面を向き合わせたことないけど、その時以上に空虚だ。いや、ちよつと違う。怒りの色まではつきりと滲ませている。一体なに言ったんだよこの人。

言ってしまったえば、フェイトが元に戻るとしたら、ここはプレシアやアルフが鍵になっているはず。けど、プレシア一人で説得させるとどんな煽りが来るやらで不安はある。アルフも加えたいが……

「……私はまだ、アリシアを諦め切れていないわ」

「うん、分かっている。かあさんの一番はアリシアだからね……」

「……だからねフェイト、貴方との時間を過ごしても、どうしてもアリシアに向いてしまうと思うの。そんな母親で、許してくれる?」

「今更だよ。いつもそうだ——」

「そうじゃないわ。……その、これからはフェイトとの時間をやり直したいの」

「——え?」

フェイトから、ドス黒さが薄まっていったのが感じた。プレシアさん、言葉の意味は全然理解出来るけど、言わんとしていることが微妙に遠回りしてるだけなんだって。もうちよいはつきり言わんと。

「私に、フェイトのママをさせてほしいの。きつと、フェイトは認めたくないと思うけど、それが言いたかったの」

「でも、かあさんにはアリシアが——」

「アリシアはね、誕生日プレゼントに自分の妹が欲しいと言っていたの。その約束まで破ったら、私は顔を合わせること出来ない」

「アリシアの妹——それって」

「結果論になったけど貴方のことよ」

「ああもう、まどろっこしい！」

黙って聞いておきたかったけど、なんか話が進んでいる感じがしない。この景気の悪い空気も嫌だし、大袈裟に声を張り上げて入り込む。あ、すいませんプレシアさん、水入らずさせたいのは山々ですけど状況が状況なので。親子の問題って言ったけど、俺たちにとつてはもう他人事とも言い捨てられないから、ちよつとくらいは言いたい。

「とにかくだ。少なくとも、今ここにいるみんなはお前のことをアリシアだとは思っていない。フェイト・テスタロッサっていう名前の、一人のよう…女の子だ」

「……………フェイト・テスタロッサ…私の、名前……………」

「そうだよフェイト！ あんたは誰も母親思いで、プレシアの為に頑張っているじゃないか！ それが報われないなんて嘘だよ！」

「でも、私は……………」

「フェイトちゃんは生きていますよ。ちゃんと、ここにいます」

「私は、ここに、いる……………かあさん。私は、ここにいていいの？ 生きていていいの？」

「……………ええ、生きていいわ。生きていいのよ。 ……ねえフェイト、今まで貴方にしたことが許されるとは思えない。都合の良い話なのは分かっているけど……………もう一度私のことを、かあさんと認めてくれる？」

プレシアの表情は、今にも泣き出しそうにも見えた。内に秘めているものを出さないよう表情を保っているが、それが返つてやせ我慢しているように強く映る。

——足取りが変わった。フェイトはふら付いてるもの、さつきとはまるで違った足取りでプレシアに歩を進める。敵意や殺気めいたものはもう感じない。

「変なかあさん……………私、かあさんのこと嫌いになったことなんて、ないよ？」

「フェイト……………」

ビューティフォー……………良い話だなあ……………フェイトはもたれるよう

な——いや甘えるようにプレシアに抱き付く。その眼には光が戻り、以前以上の穏やかな光が注がれている。数秒だけプレシアは反応に戸惑い……いや、こつち見ないで下さいよ。折角親子してるんですから、そこは考えないとですよ。

フェイトはすっかり立ち直っている。プレシアの方もフェイトに対して許容していることが、かなり嬉しい。やっぱり、家族つてのは仲良くないとな。

「でもやっぱり、私はアリシアは切り捨てられないわ」

「それはきつと、悪いことじゃないよかあさん。辛いことや悲しいを抱えて生きている人だっている」

「そうね。それが普通のこと。でも私はアリシアを蘇らせたい……そうすれば、貴方も寂しくしないでしよう?」

「私もアリシアと話をしてみたいけど……うん、いいの。私は寂しくないから。だってアルフもいるし、かあさんだっている。それに、ここには私たちを受け入れてくれるみんなもいる。かあさんは寂しい?」

「……寂しいわね。私のこれまではアリシアの為だったからね。それなら私は、これからなんの為に生きていけば……」

「死んだ人間が蘇らないのは至極当然のことなのです、プレシア女史」

余程気が抜けたのか、プレシアが二人に展開していたバインドが解けている。

それは俺にも言えたことだが、この実に眼福な光景に気を取られすぎて、後ろから現れたリンデイの言葉に誰もが反射的に振り返った。

「未来を生きることが願うなら、今を生きている人間と生きべきです」

「リンデイさん、どうしてここに?」

「手短に要件だけを言います。プレシア、あなたに協力を要請します」

「協力? 私が管理局になにを協力しろと?」

「その前に確認します。現在この次元空間内に亀裂があるのはご存

知ですか？」

「亀裂？ なんなのそれは？」

「知らないみたいですね。現在、その亀裂が大きくなったことで、異様な魔力噴出が観測されました」

「魔力の噴出……？ ……この薄ら寒さがそうなの？」

「はい」

なにか状況が悪くなってきたらしいが、俺には全然分からん。 ……あ、言われて見たら、なんか気持ち悪い風が肌に纏わりついてくる。これがそうなのか？ こんな微かな魔力を肌を感じるって、やっぱこの二人ぶっ飛んでるわ。

俺がこうだからなのはたちにも感付いているだろうと思っていたが、なのはを含めた三人がそれぞれに顔を見合わせている。首を傾げる仕草を見る限り、三人には感知出来ないようだ。あれ、そうすると俺もぶっ飛んできたのか？ 嬉しいような悲しいような…：なんかちよつと悲しいぞ。

「事情は分からないけど、次元震の可能性がある？」

「高い可能性で起こりうると予想されています。ままならない体力と見受けませんが、次元震の抑止協力を要請したいのです」

「……勝手に言う。そこまで分かっている協力を頼むなんてね。法に触れた人間に助けを求めるなんて、余程人手不足のようね」

「あなたに並ぶ魔導師の不足とは無理を言いますね。勿論、タダでは言いません。あなたの娘さんやそちらの使い魔の方も保護します」

……予想以上に切羽詰っているようだな。え、次元震の抑止って魔導師で出来るものなの？ 多分普通は出来ないもんだよな。一つ訂正出来る。俺はリンディさんやプレシアさんのようにぶっ飛んでないな。ああ良かった良かった。

「……条件を飲めば、協力してあげる」

「条件？」

「向こうの部屋に、アリシアとこれまでの資料があるの。それも全て回収しなさい」

「資料というのは、アルハザード関連についてのですか？」

「それもあるわ。だけど、蘇生法を科学的に論拠したものだってある。それらを使って、アリシアを蘇らせるのよ。この輪にアリシアを入れない訳にはいかないのよ」

「蘇生には反対します。が、プレシア・テスタロッサの研究資料というのは極めて興味深いですね。良いでしょう、その条件を飲みましよう」

奥の部屋……ということとは、セイジのいる場所の近くか。ならちようどいい。俺そこに用事あるから、あの馬鹿殴ってから俺が行くとするか。

「俺、セイジに用があるんで俺行きますよ」

「アタシもだよ。まだアイツの顔殴ってないんでね」

「フェイトとアルフは管理局に身柄を預けなさい。この最近無理をしているのは分かっているわよ」

「でも……!」

「大丈夫だよフェイトちゃん、アルフさん。わたしと八高さんで行くから」

となるとこうなるのか。

リンデイさんとプレシアはここに残って、恐らく来るだろう次元震を抑えることに集中。フェイトとアルフは一時撤退。クロノとユーノはセイジのところに向かっている。で、俺となのはが今から向かう、と。随分分散されてまうが、残りがセイジとナツミなのを考えれば、オーバーキルは良くないな。俺の本心を言うなら「ナツミは無傷で捕獲せよ! 尚、兄の方は殺しても構わない」といった野蛮な武装警察的発想だが、なのはたちに止められそうだから、口にはしないでおく。

なのはの一言によって、フェイトとアルフはやれやれと言わんばかりに笑う。アルフが振り返り際に、俺に拳を突き出す。

「いいかい。アタシの代わりに、あの優男の左頬にキツイのお見舞いしておくれ」

「左頬ね。オーケー、最初の一発で食らわしてくる」

「ルートは確保しています。御二方、先にアースラへ戻って下さい」

あいよと軽く手を振りながら、アルフとフェイトは俺たちが来た場所へと歩いていく。

別に右腕に幻想殺しが宿ってる訳じゃないけど、嫌いな人間を本気殴るくらい、俺にだって出来る。俺の右手が真つ赤に燃える！ 優男を殴れと轟き叫ぶ！ ステンバーイ、ステンバーイ……あ、これ必殺前に言えば良かったな。

「で、なのはは大丈夫なのか？」

「八高さんだって、ボロボロですよ？」

「俺は良いの、男なんだから」

「でもわたし、クロノ君を放っておけないんです……」

あ、これは聞かないパターンだな。クロノ君は罪作りな男だな。べ、別に羨ましいって訳じゃ……泣いてねーし！

確かに俺も心配だからな。クロノに対しては甘いのも気がかりだし、ユーノに対しては敵意剥き出しだし……これはクロノに対して違う感情を向けているとしか。

……一瞬だけ、身の凍る発想が浮かんだが、それはすぐに打ち消した。ホモのシヨタコンとか流石にないよな？ うわあ、だとしたらこれは驚愕ですねえ……たまげたなあ……

その考えは止めよう。とにかく、こうなるとなのはは中々領かないから、意見を尊重することにしよう。

「それなら仕方ないな。プレシアさん、資料というのはデータで纏めたものですか？」

「ええ。書類にも纏めているからすぐに分かるわ。アリシアはカプセルの中よ」

「カプセル、ですか。一人用なら運ぶことも厄介でしょう。局員を向かわせます。御二方は先に向かって下さい」

「了解です」

「はいー」

「見てくださいプレシア女史。あの姿こそ、未来を生きる人間の姿です」

「分かっているわ」

リンデイとプレシアが見送った二人の表情は、この戦場には似つかわしくない、なんとも晴れやかな笑顔だった。

少なくとも、リンデイは二人の行いに対して宜しく思わない節もある。けど、あの二人からは特に、未来を感じていた。アースラ内から様子見ていた限りでも、なのははフェイトたちを心配し、八高もプレシアを気遣っていた。

接する人間次第では、二人は節介な人間だと疎まれるのかもしれない。だけど、二人の節介が家族を救った。片や娘の存在を全面的に肯定し、片や家族を繋ぎ止めた。なのはと八高は、自身が思っているよりもずっと大きな事をしている。

「そんなにアリシア・テスタロッサを諦められませんか？」

「……貴方も人の親なら分かるでしょう？ 簡単に諦めきれると？」

「……………そうですね。でも、悲しいことも辛いことも、楽しいことも嬉しいことも、全て思い出なのです。辛い話かもしれないですが、今あなたが一層家族を大切にしたいと思っているのは、あの事故や今までの貴方が行いのおかげでもあるのですよ？ それを無かったことにする方が余程悲しいはず。あなたがそうでは、きつとアリシアちゃんも安心出来ませんよ？」

「……………」

「注げなかった分の愛情を、フェイトちゃんやアルフさんに注いであげて下さい。そうしてくれるだけで、みんな笑ってくれますよ。注がれている家族も、傍から見ている誰かも幸せになれる。それで良いじゃないですか」

「……………」

プレシアはなにも言わずに、顔を伏せる。

その長髪によって隠された横顔から、思索するものは伺えない。だけど、リンデイは母親として切に願っていた。時間は限られているに



しても、これからの彼女が穏やかに暮らせることを、強く静かに願う。  
「プレシア女史。あなたがアリシアちゃんを忘れなければ、彼女は  
ずっと生きていますよ。形として残ることも大事ですけど、想  
いを忘れればそれまでですよ？」

「……………本当、その通りね。そんな簡単ことも忘れていたなんてね。  
これじゃあ蘇ったところで、アリシアは悲しむでしょうね ……ねえ  
リンデイ。今管理局に連絡出来る？」

「出来ますが、なにか重要なことでも？」

「ええ」

——疲れは残っているもの、プレシアは微かながらも、穏やかに  
笑って言った。

内心でリンデイは驚いたもの、言わんとする言葉を知ったせい  
か、似たように笑い返していた。確かに、それは家族にとって大事な  
ことね、と理解し納得もした。

「フエイトとアルフに伝えてくれる？ 土産のケーキを食べても  
いいけど、私の分も取っておいて、て」

?? 「最早愛を超え、憎しみも超越し、宿命となったツ  
！」

「……………」

ここは静かだ。だが、なんて居心地の悪い静けさか……耳に針が通ったような異物感と鋭い痛感を覚えてしまう。

培養液の中に眠る意志の宿らない人形と、傍らで軽くぐずりを始めた菜摘だけが残っている。なぜだ、なにがどうしてこうなった……全てが狂ってきている。オレはただなにも起こらない、柔らかく居心地の良い世界をつくりたかっただけだったのに……なんで菜摘はそんな顔をしているんだ？

菜摘の能力を駆使すれば、戦闘に特化していないユーノを倒すことも、戦意のないクロノをバインドで捕縛することは簡単だ。この結果に大きく貢献したのが、プレシアのつくったあの鎧人形だ。少しは役に立ったな。

「すまんなナツミ。あとはオレがやる。退がれ」

「……………嫌っす」

「どいてくれ。ユーノは死ななくちやいけな。これは必要なことなんだ」

「嫌っす！ 死んでいい人間なんてどこにもいないっす！ 必要な死？ それがジブンにとつての幸せになるって言うんすか!？」

「……………そうだ。これが幸せに繋がるんだ」

「人を不幸にしてまでジブンは幸せになりたくないっす！ 最近のあんちゃん、なにを考えてるのか分からないっすよ！」

「……………セイジさん、僕は戦う気はありません。あなたと話がしたくてここまで来たんです」

「オレと話？」

通りで戦意が無いはずだ。しかし、クロノが今更オレとなんの話

したいんだ？ こつちとしてもクロノを痛めつけるような悪趣味は無い。それに今は目障りな連中もいない。ゆっくり聞くには充分な状況だ。

「…フエイトになにをしたのですか？」

「…なに、洗脳魔法をかけただけだ。家族ともども殺してから自害させるつもりだが……」

「……信じたくなかったけど、今の方が本来のセイジさんのようですね。一体どうしてこんなことを…」

「どうして？ これはお前となのはの為なんだ」

「僕となのはの為……？ 僕は元の世界でも充分幸せだった……呼ばれる必要なんて、無かったはずなのに……どうして……」

「そうでないとこの世界は……待てクロノ。今なんて言った？」  
記憶を無くしてるはずのクロノから、本来聞きえない言葉が聞こえた。

いや、それ以上にだ。オレは足場を踏み外したような衝撃を覚えた。記憶を取り戻したクロノの顔は、

「——どうして、僕を召んだのですか!？」

……その眼はひどく、憂いに満ちていた。

「——どうして、僕を招んだのですか!？」

今の声は……？ クロノ、か？ どういうことだ？ やり取りの意味がまるで分からんが、あのクロノが声を荒げるなんて珍しい。なにが起きているんだ？ ……考えても仕方ない。なのはは資料集めで別行動だから、もしもの時は俺一人でなんとするしかないな。

「僕にまた、彼女を悲しませるつもりなんですか!？」

「……クロノ?」

「…八高、さん」

「今のはどういう意味だ?」

「八高さん……僕、記憶が戻ったんです」

クロノ記憶が戻った……? それなら、なんで苦しい顔してるんだ

よ。そこは普通喜ぶべきじゃないのか…？

まるで口の中の泥でも吐き出すように、クロノは重々しく発する。寂し<sup>かな</sup>さだけを醸した表情を保ったまま、横目でセイジを見る。

「記憶が戻っ——うお!? フェイトの裸だとお!」

なんてことだ! カプセル状の培養液に漬かっているのは、生まれのままの姿をしているフェイトだった。いかんいかん、危ない危ない危ない……まじまじと見るなんてただの変態のすることだ。反射的に眼を瞑って回避した。だだ、大丈夫だよ、幸い見えてしまった分しか見てないからね? 大事なところは全然見えなかったからね? 本当だぞ? 本当だからな!? 一応煩惱に対策を立てるためにバナダナで瞼を覆う。

「なに言ってるんだ? これはフェイトじゃない、アリシアだ」

「あ、アリシア? 待て話が違うぞ。アリシアは事故で死んだって……」

「ええ死んでるっすよ。だからこそ、プレシアはこうして肉体を丁寧に保存しているんす」

「健気を通り越して、愚かだよなあ。死んだ人間が生き返ることを信じるなんてな。死んだ人間が生き返らないのは、子どもでも分かる理屈だつていうのに……」

……ひどいブーメラン発言が聞こえたが、突っ込まないようにしよう。俺だつて当て填まつてる訳だし。

しかしプレシアがそこまで徹底してたとは……生き返らせるというのは、いわば無から有を生むような途方も無い作業のようものを想像していたけど、魂を器に入れる系統の話か……それはそれで不可能とも言える話だが。

「ああつたく、聞きたいことは色々増えたが……クロノ、記憶が戻つたつて本当か?」

「はい」

「だったら、なんであんな悲しい顔してたんだよ?」

「……セイジのデバイスの能力を知っていますか?」

「確か砲撃しか撃てないって言っていたな」

「もう一つあるんです」

「もう一つ?」

「お前も見ただろう自称紳士。オレがシグナムを呼び出したのを」

「ああ、あれのことか。あれはなんなんだ?」

「平行するリリカルなのは世界のキャラを呼び出す、それがこの  
パラレルハーツの真価だ」

なにその弩級のチート。ボスキャラでも呼ばれてみる、俺絶対勝て  
んぞ。しかも俺、なのはに詳しくないから、どんな魔導師が来ようと  
も負ける自信あるぞ。シグナム以外にも、単純になのはやフェイトを  
基準にするなら、基本みんな強いんだもん。

よし、こういう時は、術者を叩くのが定石だな。砲撃特化と言えど、  
それ以外が無いって前に言っていたんだ。そこに付け入る。

「……ん、待て。俺はその辺り全然分からないんだが、クロノとあの  
執務官は同じ顔だろ? 平行世界だとしたら、基本同じやつが出てく  
るもんじゃないのか?」

「……今ので分かった。お前、やっぱり原作を知らないらしいな」

「原作?」

「ああ。たまにいるんだよな、魔法少女リリカルなのはという作品  
が、オリジナルアニメだと思ってるにわかだ」

え、違うのツ!? 原作とかあるの!? 媒体はなんだ!? ラノベか!?  
メガミマガジンか!? まさか電磁砲レベルガンよろしくなにかの派生作品  
とかか!?

「おまけに言うとお前アニメすら見てないだろ?」

「なん で バ レ た し」

「やはりかこのにわかめ! つーかなんで未見のまま転生してんだ  
よ、意味分かんねーよ!」

「うるさいうるさいうるさい! お前なんか炎髪灼眼の討ち手に斬  
られるバーカ! うんこ食べる!」

「小学生みたいな文句言いやがって……! カビたメロンパン食え  
ばいいのに……! ……でだ。そうなるよ、クロノ・ハーヴェイがな  
にものかは知らないんだな?」

「だからそう言ってるだろうが」

「二人がなんの話をしているかは分からないですけど……」

クロノを鎖していたバインドが解かれる。確かに戦闘する意志は無さそうだが、簡単に解いて良かったのか？　って、バインド自体がナツミがしたことのようなだから納得。

ちよい待ち。今までの会話を全部聞かれていたんだよな？　てことは、俺が転生した人間つてのがバレたのか!?　おいマズイぞ！　バレたらどうなるとかは知らないが、これって重要事項じゃないのか？　「僕は確かにクロノ・ハーヴェイであって——クロノ・ハラオウンなんです」

「……誰か解説してくれ。つまりどういうことなんだ」

「つまり、このクロノはアニメ準拠の平行した世界のクロノじゃない。原作ゲームに準じたクロノだということだ」

「……違いがよく分らん」

「要するに、平行世界の更に外の世界から呼び出したという訳だ」

「はあ!?　なんだそのデタラメは!?　ほとんど人間一人を作ったようなもんじゃねーか!」

「そうっす。そんな無茶をしたから、あんちゃんのデバイスも致命的な故障をしているんすよ。デバイスの人格データも破損し、砲撃しか撃てず、呼び出しに時間制限まで付いたんすよ」

ああ、ええつとだ。話を全力で噛み砕いて整理しよう。

セイジのデバイスは、平行世界のリリカルなのはキャラを呼び出すことが出来る。しかし、ここにいるクロノはアニメ版ではなく原作ゲームからのクロノと言った。

よし分かってきたぞ、つまりルールを越えての能力を使ったことで、あのデバイスは欠陥を抱えたということか。通りでピーキーな性能している訳だよ。だがまだ分からんことがある。

「なるほど、大体分かったぞ。だが、お前がそうした理由と目的が分からん。クロノを呼んだと思ったら次はフェイトたちを襲う？　なにが狙いだ?」

「そうっすよあんちゃん！　教えてほしいっす!」

「……オレは、憎かった」

「憎い？ このなのは世界がか!？」

「違う！ アニメ版のなのは世界がだ！」

生前のオレは、不登校だった。自分でも言うの気が引けるが、周りからよく「女みたいな顔」なんて言われるから、実際そうなのかもしれない。

でだ。そんな顔したやつが普通に喋ってみろ。わりとマジで引かれたもんだよ。「うわっ、オカマかよ」「なんだ男かあ…」どいつもこいつも勝手を言ってくれたもんだ。

中性的な顔が羨ましい……？ それが有り難くない人間だっているんだ。オレは、学校にいてもいじめられることが多かった。人と関わったところで、オレに訪れることに変化は無い。言われのない蔑みがあるだけ。

だから、オレは世間でいう引き籠もりになった。そんな世界の中、自分が自分でいられる唯一の場所が、ネットの中だった。かといって、SNSなんてしていなかった。他人との関わりが煩わしかったし、理由が無かった。フリーゲーム、ネット小説、ネット通販、アニメや映画の鑑賞——オレは孤独を満喫していた。ろくに足を動かしていないのに、その世界は自分の行きたいところに行ける。時間も場所も約束もいらぬ。気ままな旅が許されているのだ。だから、オレの現実というのは、パソコンの中が全てだった。

そんなオレを見限った家族の中、一人だけ心配し続けていたのが、四つ年下の妹、菜摘だった。菜摘はオレと違って学校でも人気もあるし、分け隔てもなく誰とでも話せる。だから、リビングから聞こえるちよつとした自慢話が少しだけ羨ましかった。生前からそうだったが、若干空気を読まないところがあつたが、それも相まつての明るい性格から一日一回、夕方七時に部屋をノックして声をかける作業をしてくる。内容は二つ、学校での出来事と一緒にご飯が食べたい、とい

うことだけ。……その言葉の全てを、オレは全て無視で返していた。そんな日常に、変化を与えたのがある作品だった。——リリカルおもちゃ箱。正確には、そのゲームが収録されているとらいあんどぐるハート3というゲームだけだ。

生前14歳だったオレからしたら、年齢制限の付いたゲームだったが、そこは親の名義を使って勝手に通販で仕入れた。ネットの情報をしている限りでも評判良かったし、なんだかアニメのリリカルなのはの元となった作品ということもあって興味があつた。親の名義で青年向けのゲームを買うのも抵抗が無くなつていた。荷物を受け取って部屋まで持つていくのは菜摘がしてしたことだったから、荷物の中身を知られることはまず無い。つと一つ言わせてもらおうと、オレが成人向けのゲームするのは小説を読むような感覚が先行しているのは言わせてほしい。

でだが……いわゆる原作版のリリカルなのは。プレイして——  
——オレは泣いていた。

話の内容というのを掻い摘めばなんてことはない、王道な魔法少女ものであり、有り触れた日常を背景にした群像劇であり、一人の女の子——高町なのはの恋のお話なのだ。テキストゲームのシナリオ量で言えば決して多くは無いけど、実際に話自体も面白かった。

けど、オレが一番引き込まれた部分は、この作品内の空気だった。なんとなく自分が感じたものだけど、その作品から感じた空気は「嫌なこともあるけど、それだけじゃない」という、優しい世界だった。人と人が繋がり、有り触れた日常をただ生きている。——オレにはそれが、眩しく映った。

たかがゲームだから、なんてことも忘れて、オレは生き方を学んだ気がした。世の中本当は捨てたものじゃないはずなんだ。そう信じた俺は、次第に部屋から出ることから繋がりを求め、ぎこちなくとも家族との団欒も増やし、次第に学校に行くようにもなった。オレにとって、あのゲームは自分を救ってくれた特別な作品となった。

そして、15の誕生日を迎える頃には、人並みに笑えるようになりそれなりに誰かとも話せるようになっていた。その間、個人的に決めて



いたことがある。次の誕生日——つまり、15歳になったらアニメ版のリリカルなのはを見ようと決めていた。敢えてネットでの前情報は避け、知識空っぽのまま、レンタルしたDVDを菜摘と一緒に見ることにした。まあ、中身は王道な魔法少女の話なんだ。11歳の菜摘でも充分に分かるだろう。基本こういった作品って、原作知らなくても大丈夫だから、菜摘にはアニメから入っても良いだろう。どうせ面白いだし。

アニメを見るまでは、オレは本気でそう思っていた。

「おおー！ おもしろーい！」  
「……………」

「いやあ、面白かったっすねえー。どうなるかと思ったんすけど、なのはとフェイトが友達になれて良かったっすねー！」

「あ、ああ…そうだな……」

「どうしたんすかあんちゃん？」

「ちよつと、言葉出てこなくてな……」

「あんちゃんは熱が籠るタイプなんすねー。でも、戦う魔法少女とというのは初めて見たっす」

無印編を一気に視聴した感想には、高ぶるような気持ちはほとんど沸いて来なかった。その動く画の世界のなのは……………オレの知らないリリカルなのはだった。これではまるで、機動戦士とかとなんら変わらない。原作で感じたあの空気が影が薄くなり、これじゃまるで、ただの少年漫画と大して変わらない。こんなのが、リリカルなのはである必要が無い。よく分からんビームが飛び交い、戦って分かり合う……………？ なんでこんな作品に成り下がってしまったんだ……………？

「そうだあんちゃん、確かにリリカルなのはって、シリーズがいっぱいあるんすよね？」

「確か二期か三期だったか、もういくつかあったな……………」

「今度は二期も見ようよ！ 面白いものは、見ないと損っすよ！」

「……………」

菜摘にとつては、こつちのリリカルなのは面白いと感じてしまつたらしい。確かに派手な見せ場もあるから見やすいと言えば見やすい。けど、オレには不満の方が多かった。原作にあった空気を、かなりおざなりにしている部分が目立ってオレは菜摘ほど好意的に見ることが出来なかった。オレにとつてこの作品に抱くものは、愛から憎しみに変わった。

そうしてオレは心の底から、この作品を失望した。

違う……これはリリカルなのはじゃない！ その名前を使つただけの、ただの二次創作だ！

菜摘は楽しみにしているけど、オレには二期を見ようという意欲が少しも湧かなかつた。こんな二次創作の作風を考えたら、その出来はたかが知れている。話の薄い二次創作なんて興味が無いし、つまらないに決まっている。

なんの因果か、絶望して一週間後にオレと菜摘は事故で死んだ。なのはの二期を見ることもなく、死んだ。

その瞬間のことは覚えていて。遊びに行つた遊園地のジェットコースターの脱線事故だ。転生の際に神から聞いたことだが、原因は車軸の折れていたことで脱線が起きたということだが、そのジェットコースターに乗つたオレと菜摘は、両親を置いて死んでしまった。

「貴台たち兄妹は、リリカルなのはが余程好きらしいの。その世界に生まれ変わらせてやろう」

「え、出来るんすか!?!」

「勿論じゃとも。小生は神様じゃからな。じゃが、誰にでもこうは言わんぞ。神様は気まぐれじゃ」

「わあーいやつたあー!」

「さて、選別代わりにもデバイスをやろう。森菜摘、貴台にはマトリヨシカじゃ。小生手製じゃから、特殊な能力が付いておる。説明を聞いても難しい能力じゃろうから、デバイスから聞くと宜いじゃろう」

「ありがとうっす!」

「さて……森正治、貴台にはパラレルハーツをやろう。こつちにも能力が付いておる」

「どんな能力だ？」

「至ってシンプルじゃ。平行世界の人物を呼び出す能力じゃ」

「平行世界……どつちのなのなの？」

「二つを知る貴台なら過ごせば分かる。じゃが、一つ節介を言わせてもらおう」

芝居がかったように、流れる黒い長髪をした、着物を纏う小さな神様はふっと笑う。その笑みからなんとなく、やれやれと言わんばかりの含みを覚えた。

「貴台はもう一度、学び直すべきじゃな」

結局言葉の意味は今でもよく分かっていない。けど、オレはこの世界を長く過ごして来て、その違いに気付いた。

アニメ版で存在した人間の顔の方が見かけられるようになった。決定打を出したのは翠屋だった。そこでオレは確信した。ここは、アニメに準拠した世界だ。

言わせてもらうなら、原作での扱いと比べてアニメでは良くなったキャラがいる。アニメなのはそこは評価したい。だけどそれだけだ。後は改悪の渡った腐った世界。

——— そうだ。ならば、オレが変えてやろう。この世界を、ただしいカタチ原作準拠に。

二つのなのはの大きな違いを挙げるなら、なのはの性格と、テストロツサ絡みだ。一つ目はなのはの環境次第でどうとでもなれる。それはアニメ序盤でも示される。つまり、フェイトだけに印象を付けさせた結果がアニメ版の惨状だ。なのはを少年漫画の主人公から、少女漫画のヒロインに代える必要がある。

その為には、彼女の意識を向ける相手が必須だ。それには他のポツと出の誰かじゃ気に入らない。ならば原作キャラを呼ばばいい。かといって、なのはと強い関係性を持つクロノがこれ以上無い適任だ。それなら、オレのデバイスを使えばいける。外に追いやられた人間を

呼び込み、正しい関係を築けばいい。

「菜摘、横文字の名前に憧れは？」

「横文字？」

「そうだ、カタカナというか、英語っぽい名前」

「おお、いいですねえ。一度やってみたかったんすよね」

「名前は考えている。俺たちの苗字は『森』だ。だから、フォレスト。

オレはセイジ・フォレストだ」

「ジブンは、ナツミ・フォレストすか……格好良いつす！」

「あくまで魔導師としての名前だからな。しばらくは本名は内緒。いいな？」

「うん、分かった！」

「さて、動けパラレルハーツ。検索座標、TH3。対象名はクロノ・ハラオウン！」

『止せ森正治！ それは対象された世界とは——』

「いいから黙って呼べ！ 検索座標、TH3！ 対象名：クロノ・ハラオウン！」

——挙げた大声に菜摘を傍で肩をびくつと震わせる。申し訳ないと思ったと同時に、手の中のステッキ状のデバイスが、悲鳴を上げるように電流が奔る。殴られたように手元が暴れるデバイスを両手で抑えこみながら、ステッキの先に現れ始めた輪郭を注視する。

それと同時に足元がぐらぐらと揺られる。巨大な地震によって身体が振るわれる。錯覚かと思ったが、尻餅をついた菜摘を見ると、地震は本当に起きていたようだった。それでもオレはその手を強く握った。

時間にしておよそ三秒ほど。爆発したような瞬きのあと、そこにはクロノ・ハーヴェイが横たわっていた。ああ、間違いない。このクロノは原作だ。その証拠にクセつ毛が無い。

「やったぞ、成功だ！」

「うう……」

「大丈夫すかクロノ!？」

幸い周囲の被害は無い。混乱の音が聞こえるが、それくらいのもの

で倒壊の類は無い。そこに安心しつつ、オレと菜摘はクロノに歩みよる。

「うっ、ここは……?」

「気付いたかクロノ」

「クロノ……僕の、名前……あれ、おかしい……」

「どうしたんすか?」

「す、すいません。自分の名前と少しの事情しか思い出せないんです……」

「まさか……」

「記憶、喪失……」

まさか、無理な呼び出しの影響か? だとしたら、なんで寄りによつて記憶喪失になったんだよ……! クロノを呼び出してデバイスが壊れるというならまだ納得も出来たのに、なんでこんな半端なことに……! よく見れば、手にS2Uが無い。噛み締めた奥歯が微かに肉を噛んだせいで、痛みを覚えてしまう。

だが、前向きに考えよう。こうしてクロノを呼び出せたんだ。デバイスを一つ犠牲して呼べたのなら安いものだ。

さて、問題の一つを解消した。後はテストロッサ関連だが、これに關しては方法は一つしかない。

殺す。だが、まともに戦ったところであのプレシアに勝てる気がしない。ましてや、純粋に作品のファンである菜摘に殺しをさせたくない。

だから、オレが全部やる。泥を被るのも、罪を負うのも、オレだけでいい。

菜摘が無事に暮らせるような、なにもない平穏な世界を作るには、原作の世界に合わせて世界を変えるしかない。だから、アニメ版の強い要因となっているテストロッサ一味に取り入るしかない。散々利用してから、消す。……いや待てよ。もう一人、なのはを魔法の世界に招いたオリジナルキャラがいたな。そう、ユーノ・スクライアだ。あいつも関わりのあることに違いは無い。あいつも殺すでしょう。

「……クロノ……君の記憶を探すを手伝いをしましょうか？」

「あんちゃん……？」

「失礼、自己紹介が遅れましたね。オレはセイジ・フォレスト。魔導師。こちらが妹のナツミです。ほらナツミ、挨拶は？」

「ど、どうもっす……」

「あなたたちは……？」

「いえ、しがない魔導師です。それより、これからあなたも向かいませんか？ 君の記憶を戻す手がかりを求めするには丁度良い場所があるんですよ。幸い、あなたの杖はこちらで預かっていますので。こちらの修復もしながら協力しましょう。悪い話ではないでしょう？」

オレは引き返したくない。オレを救ったあの空気をつくって、少し辛くても優しい世界をつくらなければいけない。理解されなくてもいい。ただ、あの優しい世界に戻す。その為なら、人でなしにでもなってる。そうすれば菜摘にも分かっている。

「あの、これからどこに行くんですか？」

「時空庭園にです。あそこはそれなりに環境も整ってますからね。腰を据えるには良い場所だと思いますよ？」

それが、16の年を迎える——そして、なのはがレイジングハートと出会う半年前のことだった。

「それが、クロノを呼んだ理由か……」

なるほど分かったぞ。政治の狙いは要するに、自分が愛して止まないリリカルなのはの世界をつくることを目的している、ということか。世界を完成させるために、原作に存在せずアニメ版でクロノの位置にいるフェイトとその周囲を消そうとした。

なんとなくの話しぶりにしか分からないけど、確かにここで起きているリリカルなのはと原作でのリリカルなのはは違うらしい。

「それじゃ、今僕が握っているS2Uは……」

「管理局員のものを奪って、見た目から能力まで、全て作り変えたんですよ。マトリヨシカ的能力を使って」

「……修理の為に預かっている、と言うのは嘘だったのさ」

「待て。マトリヨシカの構造解析の改竄つてのは、デバイスにも出来るのか?」

「知っていたのか自称紳士。ああ、デバイスの構造を書き換えることが出来るぞ。とはいっても、オレとナツミとお前のは特別性だから手を加えられないようだがな。手を加えて強化させないように、オレたちのデバイスにはプロテクトを張られているらしい」

「それじゃあ、どうやって催眠魔法を?」

「簡単だよクロノ。空いた容量の部分に加えたというだけの話さ。機能しないとはいえ、使っている部分を改竄出来ないのは痛手だが、仕方ない」

催眠魔法まで持っていたのかよ……だが、そんなに強力なものではないらしいな。使ってこないというのものもあるが、平行世界の更に外からクロノを呼んだんだ。デバイスへの付加も相当以上かもしれない。簡易的な精神操作程度だと思えば……いやでも、神がつくったもんだしなあ……やはり構造自体はまるで想像がつかん。

「マトリヨシカって言ったな。例えばだが、デバイスが出来るなら人間にも改竄つて出来るのか?」

『勿論さね。或いはホルモンバランスも調整して性別を逆転させることも可能よ』

「なんすか、輪にいは魔法少女になりたいんすか?」

「やだよ! 俺はみんなの紳士でいたいのに!」

「なに言ってるんだナツミ。男はみんな北斗神拳に憧れているんだぞ? 序盤のジヨジヨだつて大きな影響を受けているくらいだからな」

「なるほど。それじゃあ、筋肉モリモリ、マッチョマンの変態が輪にいの憧れの姿なんすね?」

「さつきから極端な意見ばつかな! 確かに格好良いけど、そのままの俺で頼む!」

ていうかそっちの妹もその手の知識あるんかい！ ジョジョはともかく、コマンドーっておまつ！ 半分はクソ兄貴の影響だろうな。ま、まあそれは良いだろう。そっちはそっちでかなりチート性能を持っているが、今はそれに感謝せざるを得ない。

「ああー、話を戻す。つまりだマトリヨシカ、身体の病気を治すことも出来るのか？ ——例えば、不治の病を治療する、とか」

「……あ」

『可能さね。とはいえ、構成要素が知らねば治療は出来ぬがな』

「充分だ！ 菜摘聞いてくれ！ お前ならプレシアの身体の異常が分かるだろ？ 病原菌の構成要素でも調べて、一つ一つ分解させればプレシアの病気も治せるんだよ！ 上手くいくか分からないけど、お前なら助けられる可能性があるんだ！」

病気つてのは必ずなにかしらの要因がある。不治の病だろうと、そのデータメなデバイスの性能ならなんとか出来るかもしれない。なに、デバイスの外見から性能までつくりかえたくらいだ。下手したら治せるはずだ。

「その発想は、無かったつす……」

「お前だつて争いごとは嫌いなんだろ!? その手で人を傷付けるよりは、人助けに貸してくれ」

「……ジブンは」

「ナツミ、ヤツとの戯言はやめろ！」

「赤くも無いのに彗星の真似事すんなや！ この自己中シスコン野朗めが！」

「なんでや！ あの人だつてマザコンのロリコンじゃねえかよ！ いい加減にしろ！」

「あんちゃん、ジブンこれ以上誰も傷付けたくないつす！ ジブンは、プレシアを助きたいんす！ だから……」

迷いに迷っているせいで、菜摘は交互に俺と正治を眼を配る。最後に菜摘はこっちに向いて足を交差させようとした瞬間だった。緑色のバインドが菜摘を捕らえる。こいつ、自分の妹にまで……！

「止めろナツミ。知ってるだろう？ プレシアは死ぬべくして死ぬ



人間なんだ。遅かれ早かれ、あいつは死ぬ」

「……そんなの違う！ あんちゃんだって世界を変えようとしたじゃないですか！ だったらジブンだってプレシアを救って、優しい世界にしてやるんす！」

「菜摘お前！」

「右から来るぞ！ 気を付けろお！」

……一瞬なんどと思ったが、理解した途端、正治には悪いことしたなあと思った。だって、来るのは俺から見て右だからな。正治から見て右を見た拍子に、俺は隙だらけの左頬に右拳を叩き込む。アルフ見てるかー、約束守ったぞお前ー！

「ぐっは……！ お前よくも汚い手を……！」

「ああすまんすまん、手は後で洗うから勘弁な」

「そういう意味じゃねえ！」

「……今のはゴングだ。嫌いなものでしか自分を語れないアンチ野郎に、俺が負けるかよ」

恐らく今年最高のドヤ顔をつくりながら、俺は人差し指を立てる。身体の状態はそれなりにボロボロ。疲れてる。だが、勝てる自信があるし、こいつに負ける理由も無い。なに、相手つまり声がデカイアンチだ。器の小さい奴に負けるほど、俺は落ちぶれてるつもりは無い。

「お前相手に一分もいらん。一発で充分だ。——さあ、お前の罪を数えろ」

時間もかけたくないからな、さっさと終わらせてやるぞ。

殴りあつて深まるのは、基本的に友情か溝

アヴァロン・ブルーの切っ先を正治に向ける。こいつはやりすぎた。色々と歪め過ぎた。俺は、あいつを絶対許さん。

「オーロラストライク。俺の持つ砲撃魔法だ。ま、シューゲイザーやなのはのスターライトブレイカーに比べたら、威力は低いけどな。そうだな、デイバインバスターくらいか」

「随分喋つたな。つまり、そんな下位互換な砲撃魔法で、オレを倒すつもりか?」

「分かつてるじゃねーか」

一つ嘘を吐いたが、細かいことを言えばデイバインバスターより劣るかもしれない。なにせ魔力量が違うんだ。だが、こいつ相手には充分だろうな。

「…なるほど分かつたぞ。もう一つ上の砲撃はあるが、撃てないようだな」

「アホか。お前相手には撃たないに決まつてるだろ? 撃つまでもない」

「イラツと来る軽口だな。馬鹿は死ななきや治らないのは、本当らしいな」

「一緒にするな。自分の妹やなのはの世界を出汁にして、自分の都合の良い様に勝手してるだけのお前が馬鹿って言える立場か?」

「お前………っ!」

「おうおう、怒つちやあ駄目だぜ? 血圧上がつちやうからよ。乳酸菌摂つてるう?」

「八高ああああああああ!」

「さんを付けろよデコ助野朗!」

ちなみにこのデコ助発言だが、あくまでアニメ版だけの台詞であつて、原作では違うからな? 知っていたらサーセン。ていうか今更だが、こいつなんかノリが良いんだよな。出会い方間違えなければ、それなりに仲良くなれたかもなのにな……

「爆せて死ねええええええええええええ!」

「頭冷やして寝てるポケナスがああ！——オーロラストライク！」

ほぼ同時に、二つの砲撃が放たれる。緑の柱と蒼の巨軸がごうつと地面を抉りながら、衝突する。

まるで相撲の押し合いのように、両の手の平にぐつと感じた重力によつて、踏ん張っていた身体が後ろに引き摺られる。ちつ、欠陥抱えちやいるが砲撃特化と割り切っただけある。威力がやはり強い。しかし大見得を切った手前だ。情けない姿を晒したくないね。

「貧弱、貧弱ウー！」

「ヌウウ……こいつ、なんと圧倒的な悪の大气よ！　すでに暴帝シスコになりつつある貫禄か！」

「お前ほんと殺すぞ?!」

……あの、否定しない辺りマジっぽい反応やめてくんない？　自覚無さそうなのが不安煽るんで、内心結構ビビってるんだけど。まあでも、自分を認めてくれたのが妹だけってなると、そうなりかねないかもだが……正直羨ましいぞ！

「……そんな軽口を叩いたところで、今のお前は満身相違、加えて疲労困憊が見え見えだ！　そんなお前になにが出来る、自称紳士!」

「お前程度には勝てるさー！」

「ほぞくなー！」

「ちいっ……！」

困ることに、正治の言っていることは正解だ。

こっちは疲れてるし、身体つーよりはイグナイトの影響で特に脚が痛い。踏ん張るのがきつくなつて来たぞ……ずっと、衝撃によつて脚が引き摺られてしまう。やばい、押され始めている。

だが生憎、俺は退く訳にはいかないんでね……俺が倒れたら、誰がフェイトやユーノを守るんだ？　こいつの都合で捻じ曲げようとしたのはやくロノを、誰が守るんだ？　そこは俺に決まってるだろ！　自ら膝を付けるなど、勝負を捨てた者のすることぞおー！

「お前だって、リリカルなのはという世界に愛があつただろうに！」

「だから元に戻すんだ！　捻じ曲げられる前の、正しい形に！」

「原作のゲームまでしてながら……お前はリリカルなのはからなにを学んだんだよ!」

「……………っ!」

衝突し合う砲撃同士、その中、かすかに正治の込めていた力が抜けたのが感じた。ここで蛇口を思い切り捻るように、魔力をぐんつと押し込む。

「否定し<sup>アベンチ</sup>かしないお前が、偉そうにするな!」

「喋るなあああああああああああああああ!!」

「突っ切るぞ、アヴァロン!」

『身体は保つな、八高輪?』

「保たせるさ! 行けよおおおおおおお!」

「な——おおあああああああああああつ!」

電車のように襲い来る緑の柱を、蒼い光が飲み込んでいく。心配するな、人殺しはしねえ。俺は分からず屋は倒す主義だ。

……1分は経っていない、よな? なんにしても砲撃魔法を直撃したんだ、死にはしないにしても結構深手には違いない。砲撃を受けたことで意識がほとんど途切れたせいか、展開していたバインドも解ける。

「なぜだ、なぜこんな……こんな、はずじやなかったのに……」

「セイジ……いえ、正治さん。僕は、あなたのやり方は間違っていると思います」

ボロボロになったバンダナで目隠しをしても仕方ない。もう外すでしょう。……アリシアの方を見なければいいんだ。眼を瞑るくらいの処置で充分だ。

その直前、視界にうつぶせに倒れた正治に起こそうと、クロノは手を差し伸べる。

その眼は、優しさと厳しさが同時に住んでいるもの、その語調からは少しも非難は無かった。むしろ、諭すような穏やかな静かなものだった。

「僕もそうです。世界はいつだって……こんなはずじやないことばかりです。いつだって、誰にだってそう……こんなはずじやな

い現実を受け入れられないのは分かります。……だけど、自分の悲しみに、誰かを巻き込んではいけないんですよ……」

「……クロノ」

「だけど正治さん。やはり僕は、この世界に必要無かったと思います」

「馬鹿を言うな！ お前がないとなのはは……！」

「確かに少しだけ、こっちなのはは僕の知るなとは違います。世界そのものも、僕の知るものとは随分違います。だけど、なにも変わっていません。この街ではいろんな人が暮らしていて、普通に生きている。なのはも、誰かの為に頑張ろうとする普通の女の子。違いはあっても、変わっていませんよ」

「……………」

一度、地面を殴る音が聞こえる。これは確実に正治だろうな。今までやってきたことを否定されりや、そりやイラつきもするわな。

「正治さん、管理局に行きましょう。正直に全て言ってくれれば、きつと悪いようにはしてくれないはずですよ」

「……………」

瞬間、足元がぐらつと振れる。比喻じゃない。マジで全身が波を打ち、バランスのとり辛い身体は情けなく倒れてしまった。この地響きはと揺れ方……まさか、あの亀裂が!?

「なにをした正治!？」

「オレはなにもしていない！ 今のはなんなんだ!？」

「あんちゃん、アレ!」

「な、なんだよ……あれは………」

「なのはさん、資料の回収ありがとうございます。なのはさんもアースラに——」

「すみません、わたし、もう一度戻ります」

「これ以上はあなたが行く必要はありません。至急アースラに」  
「まだクロノ君と八高さんたちがいます。さつきも凄い衝撃があったので心配で……お願いします！ 行かせて下さい！」

健気というよりは意固地に、なのははリンディに頭を下げる。なのは自身疲れているだろうに、その気を表に出すことなく真剣な眼差しを送る。

誰に似たのやら……リンディは内心で頭を抱えるもの、一方で微笑ましくも思えた。先によぎった考えと似てはいるもの、誰の影響なんだかどつい笑ってしまった。

「あの、リンディさん？ どうしたんですか？」

「あ、いいえなんでも。分かりました。ただし、セイジ・フォレスト並び、ナツミ・フォレスト両名の捕縛にも当たって下さい。宜しいですね？」

「……はい」

捕縛という硬い単語を聞いて表情を少し強張らせたが、一度頭を振ってからなのは首を上下させた。許しをもらったことに嬉々としたなのは、雨の中を走るような、少し覚束ない足取りで背を翻した。

「どうですかプレシア。ああいう子とフェイトさんが友達になるというのは」

「……好きにすればいいわ。友達くらい自分で選べばいい」

「ふふ、素直じゃないですね」

「……さつきの衝撃、どうやらセイジの砲撃魔法ね」

プレシアにしては明らかに下手な話題逸らした。プレシア自身、まだ親の役割というのを手探りで探しているから、よく分かっていることも含めての発言であった。が、返答自体は事実誤魔化しが多分に込められている。

意図に気付いたリンディは一瞬だけ、ふっと柔和に笑う。リンディの考えが分かっているにしても、意図と突いた上で笑っていることに気付いているプレシアは、否定することもなく、リンディを軽く睨む。掘り返しても仕方ないときりを付けて、リンディは無理に出された船に乗

ることに決めた。

「…知っているんですか？」

「二度受けたからね。けど、相手があの男だと、セイジ・フォレストの勝てる姿が想像出来ないわね」

「意外ですね。あなたにとつて、八高輪の評価は上々なんですね」

「まさか。むしろ逆。あれが死ぬ姿が想像出来ない、というだけよ」

「……………ああー、それは分かりますね」

リンデイも自然と想像出来た。八高輪という人間は、諦めとは縁を感じない人間だからか、いくら傷ついても立ち上がるかもしれない。色々愚痴を言いながらも、最後は引き受けてくれる、お人好しと言われる部類だ。率直に言えば、「頼りになる」とは別のところで八高輪には期待してしまう。不思議な少年だった。

現に今も、遠くで放たれた魔力反応が薄まっていく。恐らくけど、彼が上手くいったのかもしれない。不思議とリンデイはそう信じて止まなかった。

「……………来るわよリンデイ」

「分かっています！」

僅かにだが、二人は次元内での変化を肌で捉えた。周囲は急激に温度が落ちたような冷たさに覆われながら、二人は亀裂が破られる瞬間と対峙した。

——二人して、魔力量においては相当以上を誇るものがある。にも関わらず、襲い来たものに対して愕然としてしまった。

例えば、砲撃魔法を受けたような、突風とは比類にならない衝撃を、唐突にして全身に受けてしまう。二人の軽い身体が吹き飛ばされそうになるのを、辛うじて防げたことは偶然だった。押し寄せる重い突風は絶えず止むことなく、二人に覆う。それだけでなく、立つことすら許されないように、足場を支える平衡が小刻みに上下する。

「…、これは……………」

「どうやら想定以上のようね……………」

二人の魔導師を以ってしても、亀裂の裂けた次元を抑えることで精一杯だった。

……少しばかり揺れが落ち着いたもの、地鳴りは止まない。口惜しいことに、これが今の限界だった。

……庭園を囲う外壁が砕けていく。二人はその向こうに映ったものに、更に逡巡を奪われた。次元内に空いていた箇所が裂けきり、怪物の大口を連想させるように混沌が混ざり合った黒い空間が広がっていた。

「リンデイ、あれはなに？」

「先に話した、次元の亀裂が決壊したものですね」

「……まるでブラックホールね。管理局はあれをどうしようとしたの？」

「あわよくば次元の修復をと思ったのですが……完全に想定外ですね」

「それなら、あれの修復出来る可能性は？」

「……………」

答えなかった。被害規模も、決壊する時間も、全てが予測を上回っていた。最悪の結果としてこの次元が飲み込まれると説明したことがあったが、今が正にそうだった。この勢いだと、確実に次元全てが飲み込まれてしまう。

希望も可能性も見出せないまま、全てが最悪の方向に転がっている。奥歯を噛んだリンデイは、ただひたすら抑え込むことに専念せざるを得なかった。

【各員、聞こえますか？ リンデイ・ハラオウンです】

その声に、アースラ内の局員たちは動揺を憶えてしまう。艦に響き渡るリンデイの声から余裕が無いことがはつきり伝わってしまったからだった。

この付近は緊迫なんて軽い状況に置かれていなかった。最早袋小路とさえ言いかねないほど、事態は追い詰められている状況だった。

「艦長、無事ですか!？」



【現状、わたしとプレシアで抑えています。状況は最悪です。恐らくこの一帯は飲み込まれる恐れがあります。なので、わたしが事態を抑えている隙に総員撤退して下さい】

「な…………… そんなことしたら母さんが……！」

【命令です！ ただちに撤退を！】

【しかし艦長、一つ問題が生じて……！】

【問題？】

「亀裂が割れた際に、異様な魔力の噴出が確認されているのですが、それを浴びたことで、艦の80%が機能障害に……………！」

【なんですって……！】

艦内が慌しきで溢れていた要因が、正にそれだった。辛うじて操縦桿による操作は機能するもの、今のアースラの状態は、エンジンのかかからない車。ただ吸い寄せられるように流れながら、方向を変えることしか出来ない。機能回復に専念するにも、まるで実を結ぶ気配が無い。それが更に、艦内の焦りを一押しさせている。

その中、フェイトとアルフは捕縛されずにユーノやクロノたちと一緒にブリッジで待機されていたことで、その様子を直接感じている。庭園内に映っていたなのは、リンデイ、クロノたちの映像も音も拾えなくなり、心配は一層に押し込められた。

「かあさん！ かあさん大丈夫?！」

「……………っ！ か、はっ……………！」

「プレシアー！」

「……………リンデイの声が聞こえたでしょう？ 私に構わずに……………」

「嫌だよ！ 折角……………折角かあさんと分かり合えたのに……………こんなことって……！」

【フェイト、私を困らせないで……………】

「だったらそんなこと言うな！ フェイトはアンタの帰るのずっと待ってるんだ！ アンタが戻ってくるまで、ケーキは食べないからね！」

【……………好きにきなさい】

「エイミイ、なにか方法は無いのか!?!」

「焦らないでよクロノ……！ 今探してるから！」

ピアノの連弾より早く、エイミイの指先はパネルを叩く。辛うじて繋がる機能の全てを駆使しながら、今の状況に合わせた解決策を探るが……見当たらない。

根本的なことだが、リンデイは逃げろといったものの、その規模が既に想定の上回っているのは証明されている。感付いている人間は口にしこないが、とうに気付いている。逃げたところで、ただの延命に過ぎない。ただ生き延びる時間が延びただけで、どこに逃げても変わらない。結果だけを言えば、この次元の全てが、あの穴に吸い込まれてしまう。それでも手はあると奮起させても、事実を認めてしまった幾人のパネルを叩く指先の動きに、鈍さが生じてしまう。

だけど、エイミイもクロノも、ユーノもフエイトもアルフも、困惑こそするも諦めてはいなかった。手持ちの余っていたユーノたちも、空いたパネルモニターと向かい合う。

「必ず全員で、生きて帰るんです！」

時を同じくして、場所は海鳴市。事態の近くにある世界として、その影響を強く受けていた。

既に夜の22時以降。普段ならとうに眠っているアリサやすすかも、まだ覚醒していた。二時間前に桃子から来た電話によって、二人の不安も強くなっていた。

【もしもし、なのはと八高君って、そっちにいる？】

二人が受けた電話の内容はこうだった。まるで実に覚えもないし、まずこの地震の前からいないという。状況は分からないけど、ユーノを連れて散歩かもとは言っていたもの、ずっと姿無いいことで心配になったという。アリサとすすかは、もしかして二人は地震に関与しているんじゃない、なんて突飛な発想が浮かばないまま、二人は直前まで心当たりのある場所を探していた。が、見知った姿を見つけられることもなく、その途中で突然の地震と遭遇してしまった。年端のいかない

子どもでなくとも、夜道で地震と遭遇することは、恐怖に他ならないだろう。なるだけ周囲になにもないところに逃げてから、二人は足を休ませる。

「もう、一体あの二人はどこなのよ!? 電話も通じないなんて、なにしてるのよ!?!」

「心配だなあ……おにいさんが一緒だから無理はしないと思うけど」

「なに言ってるの。あのアホ先輩だから、しっかりさせないとでしよ!? 前にすすかの家に来た時にも、あの二人怪我のこと誤魔化してたじゃない!」

「そ、そうだけど……でも、あの二人ならその内に話すかも」

「あの二人、煙に巻いたら絶対許さないんだからね」

「ふふ、アリサちゃんは二人が心配なんだね」

「た、確かになのはのことも心配だけど……」

今更アリサの素直じゃない部分を知っているすすかは、それ以上言及することは無かった。なのはもとまっている時点で察せている。だからこそ、心配しているのもよく理解している。

しかし、すすかにとっても心配な出来事に変わりない。高町家にもいないし、当然翠屋にもいない。八高に限れば、実家にもいないという。こんな時にどこにいるものか、誰もが気にしてしまうところかもしれない。

「ああもう! とにかく、早く帰って来なさいよねえー!!」

ある程度揺れが納まってきたのは、リンデイさんとプレシア影響かもしれない。しかし、あんなものが数百メートル先にあるんだ。長くは持たないのかもしれない。

時間が無い以上、全員でどうにかするしかない。正治や菜摘に粗方説明はしている。正直、こいつが絡んでいると思っていたが、反応を見るに違うようだった。

「次元の亀裂だ?!? なんでそんなものが!?!」

「俺が知るか! とにかく、どうにかするぞ!」

「どうやってだ!?!」

「ああもううっさい! 今考えて——」

状況に相まって安定しない足場に少しイラつとし始めた時だった。アリシアを中で眠らせているカプセルの足元が——崩れたのだ。物言わぬアリシアが反応出来るはずもない。その近くにいたクロノも身体をよろめかせながら、空腹を訴える奈落へと落ちようとする。

「クロノ!」

「アリシア!」

カプセルには、裸のアリシアがいる。なんて煩惱があつたのも本当だが、それを妄想する余裕もなく、リンカー・イグナイトで加速し、カプセルに手を伸ばす。なんの打ち合わせもなく、正治と助ける人間を分けられたのは奇跡かもしれない。特に狙ってなかったから、一際ビツクリだ。

「ぐう、ぬぐぐぐぐぐ……!」

『止せ! これ以上無理をすれば、貴台の身体が——』

「たかがカプセル一つ、イグナイトで押し上げてやる!」

流石。アンチとはいえ、原作を愛している人間なだけある。正治は問題なくクロノを助けている。って、菜摘もそっち助けてたんかい! 気持ちちは分かるが、重いのはこっちだから、こっち助けてえ……!……!

辛うじてカプセルの取つてを握れているだけでも幸運だが、普通に重い。アヴァロンを使つて持ち上げようにも、まず傘のように物を持ち上げられるような構造をしていないし、今握っているだけの力でギリギリだった。支えるので限界で、持ち上げられないといった感じだ。

「(こゝ、これ以上はMRYYYYYイイイーツ!!」

全身が痛みで悲鳴を上げまくっている。いや、これ確実に断末魔だろ。折角格好付けたのに、あと数秒分しかもたな——

「クロノ君！ 八高さ………八高さんになにを!？」

「…待つつすなのは！ あんちゃんは助けただけっす!」

「助けた?」

「……すまんなのは、アリシアの入っていたカプセルが、次元に落ちていった」

「そ、そんな……」

「別にこいつの落ち度じゃない。そのカプセルを一人で持ち上げようとしたが、元から身体が限界だったんだ。大した瞬発力だよ、変態め」

「やかましいわシスコンめ。つーか、なんでお前が俺を助けるんだよ」

「オレだって胸糞だよ。菜摘が言わなければ、お前なんか放置安定していたところさ」

「やっぱリシスコンじゃないか」

「え、あんちゃん、シスコンだったんすか?」

「……自称紳士、お前後でジャンクな」

「そこで乳酸菌のツツコミ回収かよ!？」

バリアジャケツトも解かれ、聖祥大附属中学の制服を纏った八高は、正治の肩を借りながらよろよろと歩を辿っている。ついさっきまで敵対していた人間に肩を貸すことに不満のある八高は、むすつとしながら正治を睨むが、当の正治自身、嫌いなタイプの人間を助けたことに対して舌を打っている。ともあれ、助かったことになのはと菜摘はふうつと息を吐く。

八高の無事を安堵したのも束の間、なのはは開けた景色の向こうに広がる、黒い大口に眼を釘付けにされた。

「もしかして、次元の亀裂が……?」

「自称紳士から話は聞いている。だが、オレたちにはどうにも出来ん」

「そ、そうっすマトリョシカ! あの穴の構造を解析して塞いでし

まえば……」

『……残念だが、アレは解析出来ない』

「え、どうしてつすか!？」

『元々虚数空間自体が、入り乱れた構想だ。更に虚数空間を交えた構造のブラックホールになっておるから、解析のしようがない。解析の結果は、絶えず変化する構造物質よのう』

「そ、そんな……」

そもそもだが、大まかな戦闘の訓練しか積んでいない俺たちが、次元の異常を防ぐような魔法なんて出来る気がしない。強いて言うなら、素質があると言われたのはや補助が専門のユーノなら出来なくもないだろうが、あくまで鍛えればの話。今ここでどうすることも出来やしない。

え、てことはだぞ？ これって延命しているだけであって、事實はゲームオーバー直行ってか？ 折角転生したのにまた死ぬって冗談じゃねえ。考えろ、考えろ……

「………すみません、みんなは先に、艦に戻ってくれますか？」  
ごうつと台風のように風が吹き抜けていく中、一際静かな声はつきり響いた。

嫌に落ち着き払ったその声の主は、クロノだった。しかし、どう見ても名案が浮かんだ人間の顔をしていなかった。笑顔こそ浮かんでいるもの、別のなにかが浮かかないと言っている。気にならない訳がない。

「……クロノ君、なにか思いついたの？」

「……可能性は五分五分だけど、解決方法が一つ分かった。それでどうにかするから、なのは八高さんたちと一緒に」

「クロノ、なにをする気だ？」

「……参りましたね。言うまで動かないみたいです。分かりました、言います」

クロノとしては余程濁したい話題だったかもしれないが、こっちとしてははつきりさせたいことだった。

矛盾した感じ方だが、なぜなのか、その続きは聞きたくなかった。

なにか悪い予感しかしない。クロノの表情が、あまりにも刹那的に笑っているのが、返って恐ろしいときえ見えてしまうくらいだ。だけど、確認せざるを得なかった。——なのはにも思うところに当たってしまったのか、表情が強張っていく。

「僕が、あの穴に戻ります」

僕らは心から亡くさせない為に、記し憶えていかなくちやいけない

「な、なにを言っているんだクロノ……そんなことで解決するようには」

「それが、本当に出来る可能性があるんです」

不快ながらも、俺も正治と同じ意見だった。それでどうにか出来るような問題にはとても思えない。だが、クロノは多少なり根拠があるのか、すぐに否定する。

「あの穴……僕がこの世界に来る時に見た景色と同じだったんですよ」

「なん……だと……」

「見たものと同じ、だとしたらあの次元の裂け目は……」

「恐らく、僕が招ばれたに出来た亀裂だと思っています」

「じゃあ、あの穴はトンネルかも、ということか？」

「……あくまで、ひよつとしたらの話です。なにも無い可能性だってあります」

——これで全てはつきりした。正治が話していたクロノを召んだ時の地震、亀裂の出来た時期、パズルが嵌ったように辻褄がかみ合う。だからといって、クロノがあのかに戻ったら解決するのは別の話だ。

「それがどうして、クロノが戻ったら解決出来ると思うんだ？」

「……あの穴を歪みと表現するなら、アレは僕が来たことで生まれたものなんです。この現象も、僕が正しくいるべき世界はここじゃないという警告だと考えると、理に合うと思うんです」

「ということは、仮にオレたちの世界がこのまま飲まれたとしたら……」

「いいえ、それは止めた方がいいと思います」

「どうしてっすか？」



「……確立された世界同士が上手く混ざるとは考えにくいんです」  
「世界が混ざらない……ってことはアレか？ 下手したら、ぶつかってどっちかの世界が消えるってか？」

「……最悪の場合、どっちも消えてなくなるかもしれない……微妙に似通った世界なので、尚更に歪みが生じることも……ならば、歪みの根源だけがなくなれば、解決するかもしれないです……！」

「ちよつと待ってー！」

そうだった、クロノのことで話が分からない人間が一人いた。

なのはは理解出来ないと訴えるように、クロノに駆け寄る。この言いは好きじゃないが、メタ的な目線も出来る上にクロノの正体を誤解なく知っているのって、俺と正治と菜摘なんだよな。それをそっくりそのまま伝えても混乱を招くのは正治でも気付いている。

「クロノ君たちの言っていることが分からないよ?! 一体なにを言っているの!?!」

「……なのは」

「なのは、時間が無いから簡単にしか言えないが、クロノはこの次元の人間じゃないんだ」

「……それって、ユーノ君みたいに違う世界から来た人ってこと？」

「違う。いわゆる、平行世界の人間だ。本当ならどこの次元の存在にも存在しない人間なんだ」

……なのは自身、俺の言葉で理解出来ただろうに認めたくないという気持ちがあったからか尋ね返す。だが、核心だけを並べた正治の言葉に顔色が変わる。

気持ちは分かる。だが、正治の話を聞いているにしても、クロノ自身が少しも否定しようとしないうことで、事実として成り立っている。そのことに

「クロノ君。あの穴に入ったら、クロノ君はどうなるの？」

「……正直分からない。元の世界に戻れるかもしれないし、僕自身が消えてしまうかもしれないし……そもそも、この事態が納まるのかも怪しい。まるで想像も付かないよ」

「ダメ！ クロノ君、行っちゃやだ！」

「…それは、駄目。僕が一人でやらないと」

「…：なんだよ！　なんでそう、お前一人で抱えるんだよ!?　俺たちじゃ頼りないのかよ!?　俺たちもう他人じゃないだろう!?」

「そうだクロノ。よく考えろ。なのはを幸せに出来るのは、お前だけなんだ。幸せなのはといることで、お前だって幸せになる。そうだろう?」

「…正治さん、それは少しだけ違います。僕は笑っているなのは大好きです。だけど、なのはを笑わせられるのは僕でなくても出来ることです。僕でなくても、なのはの笑顔で幸せになる人がいる。だから、単純なことで僕やなのはの幸せを決め付けてほしくないんです。僕たちの幸せは、僕たちで決めさせてほしいんです」

「…：……っ!」

隣で正治は、憑き物の大部分が抜けたみたいで、眼を見開いた表情を浮かべていた。正治自身、忘れていた箇所をつつかれたのかもしれない。けど、それとは別で、俺はクロノのその言葉は好きじゃなかった。

「なあクロノ、気付いてるか?　なのはがお前に向けている顔付きって、アリサやすずかとは全然違うんだぞ?」

「や、八高さん…!」

「…単純に笑わせることが出来ても、笑顔で幸せになるとしてもまだ。俺とクロノが同じことをしても、なのはが向けるものは違うぞ。少なくとも、今のなのはにはお前が特別なんだよ!」

クロノは、少しは自分が特別なことを自覚してほしい。単純に、なのはが俺に笑うこととクロノに微笑むことで、意味が全然違ってくる。どんなに行き着いても、なのはから見た俺は恐らく「気のいいお兄さん」以上になれず、クロノなら「友達」以上だって充分ありえる。正治がややこしいことをしてくれたが、この二人の関係を要点だけ摘んで言えば、前世は恋人とかそういう位置だと飲み込むことで納得するからな。

「…：楽しかった。それほど長く過ごしてきた訳じゃないけど、欠片だけでも覚えてること、こんなに楽しくて、幸せな時間をまた過

ごせるなんて、思わなかった……」

……クロノの笑顔は、まるで逃げ水のように儚く揺らいだ。誰に向けた言葉かは口調ですぐに分かった。だけどクロノは、一人一人を馴染ませるように、ゆつくりと、瞳の中に閉じ込める。その映像を、記憶に刻んでいく。

菜摘、正治、俺、なのは——その順番に眼を移していく中、もう一度最後に、俺に眼を向ける。その直前に、クロノはふっと視線の主に笑顔を送った。……なんだよ、お前にとっても特別じゃないか。「ごめんなさい八高さん、最後に、なのはと話をさせて貰っていいですか?」

「……ああ。菜摘、シスコン、アースラに行くぞ」

「虚数空間に突き落としてやろうか?」

「あんちゃん! でもジブンたちも話を聞いていっても……」

「菜摘、この言葉を聞いたことはあるだろ? あとは若い二人に、つてな」

「……あなるほど。それなら仕方ないっすね」

さて、これが最後になるんだ。気の済むまで話をさせる方が良くかもしれない。なのはを大事にしているクロノだ、本当に危なくなったらなのはを無理にでも転移魔法で送ってくるかもしれない。

さて、途中でリンデイさんもいるはずだから、脱出経路を聞かないと……とその前に、一つ片付けておくか。

「で、アースラ戻ったところでオレは犯罪者だ……」

「ジブンも、戻りたくないっす……」

「……菜摘、この馬鹿をやらかした兄貴のこと、どう思ってる? まだ慕っているか? 幻滅してるか?」

「……あんちゃんは、やり方が間違っていただけで、悪くなんて、ないっす……」

「……菜摘」

「……はあ。こんな小さな妹にまだ慕われてるとか、マジ羨ましい。貴様は正真の変態だ! 真っ黒に感光しろ正治ッ!」

「なんだその超理論は?! あとその台詞は「戦闘の天才」だという事

を再び思い知らされるフラグだから止めとけ」

「お前は漢<sup>オトコ</sup>でも戦士でも無いから平気平気。ともあれ……仕方ない、妹に免じてお前らを助けてやる」

「……なに？」

「本当すか!？」

「勘違いするなつての。正治一人なら、喜んで牢屋にぶち込んでやりたいところだが、それじゃ菜摘が悲しむ。だから、お前の妹の為にどうかしてやるさ」

……気軽に言つてると思われるかもしれんが、俺はこれでも不満がでかい。マジで妹<sup>ロリ</sup>の存在が無かったら、無かった罪まで加えて罪状を過多させるつもりだったが、やはりどうしても、小さな女の子のしゅんとした顔に弱い。一応言うと、妹じゃなくて弟だとしても政治を助けることは無かったかもしれない。妹という存在に救われたな。

「だが正治、お前には先に一つ言っておく」

「なんだ？」

「後の状況次第じゃ俺、本気で殴るからな」

少し弱まっていた地響きが、少しずつ、本当に少しずつ強くなつてきている。吹き付ける心地の悪い風が肌に触れるたび、軽い病気になったような気だるさに苛まれてしまう。この最悪とも言える状況をよく持ちこたえているものだに関心するけど、それももう、長くは続かないかもしれない。

僕の伝えたいことだけをなのはに伝えて、僕は消えよう。口を開こうとしたと同時に、なのはが先に口を開いた。

「……わたしじゃ、ダメ？ 借り物の力だけど、わたしの魔法は強いって……」

「……僕は、強くないから悲しいのが苦手なんだ。人を悲しくさせるのも、この世界が無くなるのも、なのはを寂しくさせるのも……嫌なんだ」

「だったら、わたしも一緒に……!」

ああ、やっぱり彼女はなのはだ。紛れもない、僕の知っている高町なのはだ。少しだけ臆病に滲ませる瞳も、その奥に秘めている強い決意も、僕の知っているものと変わらない。

……だから、僕は首を横に振る。

「……ここでお別れ。これは、僕にしか出来ないことなんだ」

「そんな……」

「……なのは、一つお願いがあるんだ。僕を忘れたくない、と思っ  
ているなら、この杖を受け取ってくれるかい？」

…うん、やっぱりだ。今にも泣きじやくりそうな顔をしている。僕はまた、この別れをしようとしている。僕にとっては二度目の別れでも、彼女にとっては最初の——いや、最後の別れかもしれない。少し思い出してきた。僕は前の世界でも、元の世界に戻る前にこんな風なやり取りをしていたっけ。

「まあ、元は別のデバイスだったものらしいけどね。外見や性能はそのままだよ。本当に驚いたよ」

「S2……U……」

「SONG TO YOU。歌を君に、という意味なんだ。母さんが付けた名前だけど、この杖を、<sup>うた</sup>なのはに受け取ってほしいんだ」

「……うん」

「ありがとう。そのボタンで小さくなるから」

ぴっとボタンを押すと、ロッド状を象っていたS2Uは名刺のようなサイズに納まり、小さなカードになってなのは手の中に握られる。これでいい。このやり取りも二度目だからか、それほど緊張は無かったけど、

「じゃあ、そろそろ行くね」

「……うん！」

「君と逢えて……良かった……」

「……あ」

こうすると彼女は大声で泣く。それは覚えている。だけど、僕の本心である以上、どうしても口にしたかった。

前の時は、少し強くしたかもしれない。だから、今度は少し弱めに、

痛いと思わせないようになのはを抱き締める。

なのはのことを強いという人がいるかもしれない。けど、それは違う。きつと僕だが知っている。本当のなのは涙脆くて、情に厚くて、優しくて——笑顔が一番似合う、普通の女の子。

「どこにも、行っちゃいやだよ……！ 行っちゃ、嫌だああああ……！」

悲痛を表したようななのはの声を示すように、とめどなく涙が溢れてきた。顔を見なくても分かる。肩に触れている暖かい水滴が全てなんだから。耳元に響いた叫びは、むしろ僕の胸を痛めてしまう。

きつと逢える、なんて言葉は仕舞い込もう。なんの確証も無いのに、また戻ってこれるはずもないし、この状況でその言葉を言うのはあまりに無責任だ。これ以上なのはを悲しませる要因なんて、必要無い。

この温もりから離れたくない。僕だって同じだ。だけど、僕はもう行かなくちゃいけない。肩に顔を埋めているなのはを優しく引き離す。

「…約束、もう一ついいかな？」

「なに？」

「仮に僕が向こうに戻ったとして、僕が君のことで思い出せるのは、最後に見た顔だから……」

「う、っ、つく……」

「…悲しい顔より、笑顔でさよなら、ね？」

本当は、泣き止むまで傍にいたかったけど、そんな時間はもう無い。それに、長引かせすぎた。これ以上僕の都合で世界を消させる訳にはいかない。僕は米粒で伝うなのはの涙を指先で拭う。

「アースラに行つて、なのは。みんなが君を待っている」

「……うん。 ……わたし、クロノ君が好き……大好きだから！」

「……僕も……僕もだよ……！」

「………ばいばい、クロノ君」

「………さようなら、なのは」

きゅつと、なのははぎこちないながらも、僕の印象にある優しい笑

顔で手を振る。三度手を振ってから、その白い姿は翻り、奥へと姿を消した。

……ここに残ったのは僕だけ。なにも残っていない。距離も近いからか、庭園の外壁どころか天井や床までもが崩れてきている。けど、不思議と怖さは無かった。ただ、少しだけの悔いはあった。けど、これ以上はわがままになつてしまふから、我慢しよう。きつと、なのはや八高さんだつて、言いたいことはあるはずだから。

……いざつてなると、言いたいことつて出てこないものだなつて実感した。時間があるなら、もつと話をしていたかつた。なのはにはこれからも笑顔でいてほしい、なのはとずつと一緒にいたい、辛い思い出であつても無かつたことにしてほしくない。……突き詰めるとこれくらいしかないんだ。自分で驚いた。

それにしても、よくよく考えたら、僕は悪い人間だと思う。世界の違う別人にしても、同じ顔をした同じ名前の人に、僕は同じように告白し、同じように抱き締め、同じように自分のいた証明を残していく。でも僕は、どっちもなのはだと思つているし、どちらにしても笑つていてほしいという気持ちに、嘘は無い。都合の良い言い方をしてしまうと、結局僕は高町なのはという女の子が好きなんだ。

……それにしても、正治さんが言つていたことが引つ掛かる。よく分からないけど、僕となのはを引き合わせて女の子にするということと言つていたけど、少なくとも僕と話をした時から、なのはに対する印象は女の子そのままだった。これといつて正治さんが気にするほどのところなんて無かつたのに……

「……ははは、なんだ。女の子にしたのは僕じゃなくて、八高さんか……納得した」

よく考えれば難しいことじゃない。ようするに、なのはが甘えるべき相手が既にいたから、根がそう変わつていないように思えたんだ。ただそのベクトルが僕に移っただけ。きつと、年が近いからというのもあるかもしれない。八高さんには悪いことしたな。とはいえ、八高さん自身僕となのはをくつつようとした節があつたし、むしろ賛成しているようだったから、恐らく本人は自覚していないかもしれない。

正治さん、僕がいなくても世界は変わってしまいましたよ。大丈夫、八高さんなら、なのはを笑わせることも幸せにすることも出来る。あの人は信用して良い。ただ、無理をするから放っておけないかもしれないけど……

「——なのはたちのこれからが、明るい未来でありますように」  
最後までらい一つ、わがままを増やしても……良いよね……？　これが本当の、最後のわがまま………

黒くおぞましい、巨大な怪物が開いた胃の奥へと呑まれるように、庭園ごと入っていく——僕の意識は、そこで途切れて、消えた——

「止まった……」

それだけじゃない。アースラの艦内から見ると、あの亀裂の跡すらも消えてなくなっている。しばらく沈黙が流れるが、余震や余波も無い。なにも起こらない。

「次元震の反応、完全消失！　アースラ各部・機能も回復していきま  
す！」

「各機能、オールグリーンです！」

「原因は分かりませんが、亀裂は塞がりました！」

「やった！　助かったんだ！」

アースラ内はクラッカーが聞こえたど錯覚するほどの、歓声と喝采が上がる。局員同士が互いに手を叩きあい、或いはぐつとガツツポーズを取る人や、疲れによって椅子に背を預けきる人、反応はそれぞれだった。

庭園から戻ってきたのは、クロノを除いた全員だった。俺が特に気になっているのは、庭園から戻ってきたなのはの表情が、どこか無理しているように見えてならないところだった。はつきり言えば、無理して笑っている。それどころか、こうしてみんなと騒ぎを共にすることもなく、一人で局員用の部屋にいるのがもうね……



「なのは、あの穴が塞がったのはやっぱり……」

「……クロノ君のおかげで、わたしたち、助かったの」

「……そうか」

それ以上は言えなかった。そんなこと、確認するまでもなく分かりきっている。なのはがクロノの杖を持っているんだ。動かぬ証拠としてこれ以上のものは無い。

悲壮感しかない。事件も万事解決し、晴れてめでたしめでたし。

……なのに、この後味の悪さはあまりにも酷い。結果だけで言えば、無事正治の思惑通りなのはクロノのことを考える、一途な女の子になった。だが、クロノは消えてしまった。なのはの笑顔に少し翳りが混ざっている。違う、俺はなのはにそんな顔をしてほしくない。幼女の笑顔というのは、快晴の空に浮かぶ太陽と並ぶほどの眩しさじゃないといけないんだ。それなのに、なのはは折角可愛いのに曇ってしまっている。

「……なのは。これ汚いけど、使うか？」

「これは、八高さんの目隠し用のバンダナ？ どうして？」

「ああー、その、なんだ……ハンカチ代わりがこれしかないから、それで勘弁な。なのはは特に疲れただろうから、休んだ方がいい。ここに人寄せないようにしておくから」

「……………ありがとうございます」

「それじゃ。落ち着いた時にでも顔を出してくれな」

「……………」

……少しだけ、なのはの表情が強張った。そこに悪意めいたものは微塵も無い。声に出すと溢れ出してしまうからだろう、なのはは首を小さく上下させた。

分かっているつもりだ。なのはがいくら強い魔法少女と言っても、

「……………うああああああああああああああああん！」

中身は普通の、9歳の女の子だもん。声が少しくぐもっているのは、扉の厚さとバンダナで顔中を覆っているからかもしれない。ドア

越しても辛うじて聞こえる泣き声の大きさが、クロノの想いの丈を充分に表していた。今はなのはの気持ちを整理させることに一念させよう。俺たちがどうの言っても、納得も解決もしないだろう。まずはなのは自身で受け止めるしかない。

「ああ、八高さん。ここにいたんですか」

「ユーノ」

「なのはを見ましたか?」

「…なのははその部屋で休んでいるよ。疲れたって言ってたから、そっとしておこうぜ」

「そうなんですか」

「あそうだ。正治を見たか?」

「セイジ、ですか。いや、あの兄妹はこれから聴取を受けるみたいですよ」

「そうか……」

それはナイスタイミングだ。丁度良い、正治に用があつたところなんだ。ちよつと刑罰は軽くしてやったが、それとは全く別件での制裁を与えておきたい。脚が痛むが、そんなのは大したことじゃない。

「八高さん!」突然走り出したからか、ユーノは少し驚いた声を挙げる。これからというなら、場所は廊下かブリッジか……いた。これから移動を始める。

さて、色々と口八丁をしたにしても、正治の両手首には手錠が嵌められていた。少なからず、局員を襲ってデバイスを奪ったくらいだからな。そういう部分を突かれたら俺だってどうしようもない。

だが、やつを牢屋にぶち込む前に、俺個人としてやっておきたいことがある。

「おい正治」

「ん、なんだ——がつ!」

今度は、左頬を殴りつける。全身痛いせいでろくに力も入らない上に、利き腕じゃない腕で殴ったことなんて無いから、絶対痛くないと思う。だけど俺は、心底正治を殴りたかった。

なのはを悲しませたらクロノを許さない。そう約束したというの

に、当の本人がいらないんじゃない。だからせめて、その根源を生んだ人間をあえて保護者と呼ぶしたら、その元凶おやを責めるしかないじゃないか……

「輪にい！ なにを！」

「正治！ クロノがしたことにしても、結果的にお前がなのは泣かせたんだ！ お前が無理矢理世界を変えようとして……その結果がこれだ！」

「……………っ」

「ちよ、ちよつとアンタ、落ち着きなつて！」

「離してくれアルフ！ こいつだけは……こいつだけは！」

熱くなつて気付くのが遅れたけど、局員たちは不安げな視線を俺に向けている。フェイトに関して、プレシアの後ろに隠れるほど怯えている。……いかな。折角の祝いの席だつていうのに、水を刺してしまった。だけど、俺は正治にはこれだけは言いたい。

「……すまんアルフ。落ち着くから、離してくれ」

「……分かった」

「…正治、お前のしてきたことは妹に免じて片眼は瞑つてやる。だけど、それとは別で、お前はしたことは、勝手になのはとクロノを引き合わせて、クロノを引き離れたのとそう変わらない。お前とは話題も合つてそれなりに気も会うだろうが、俺はお前を許さない」

「……………気が合うな。オレもお前が嫌いなんだ、自称紳士」

「お前……………」

「だから、お前の提案した口車に乗るつもりは無い。オレは罪を甘んじて受けるさ。……オレだつて、こんなことになつてほしくなかつたんだ……本当に、どうしてこうなつたんだよ、畜生……………」

「あんちゃん……………」

「もう良いんだな？」

「……オレは良い。菜摘は？」

「……ジブンも大丈夫っす」

「では案内します。こちらへ」

無抵抗にリンディさんとクロノに連れられる二人は、言葉にしがた

い物悲しさを語っていた。特に正治の背中へ、口調こそ変わらないもの、俺を嫌いだと言った辺りから表情が寂しげだった。

……俺には正治の悲しみはそれほど分らない。ただ、なのはとクロノと一緒にあってほしかった、という部分だけを汲み取るならこの事態はあいつにとつても想定外だったんだ。そういう意味でなら、少しくらいは同情もしたくなる。だが菜摘の言うとおり、やり方が悪すぎたんだよ……自分の理想を強く押し付けようとした結果がこれだ。……だけどそれは、なんだかんだで正治が一番分かっているのかもしれない。

——こうして、ジュエルシードを巡った一連の事件は、終わりを告げた。深く関わった人の心の傷を明るみにさせないまま、その幕は下ろされる——

## My wish My love

事件から一週間後。それはもう、色々あったとも。アリサとすずかにこつてりしぼられたり、桃子さんと土郎さんにしぼられたり、この世界の親にしぼられたりと、散々だったよ。なのはとユーノを連れ回したという口実をつくったのは俺にしても、凄い剣幕だったよ。ちなみに、あまりに全身が痛いからフィリス先生に見てもらったところ、三週間の安静を言い渡されました。アリサとすずかの時もそうだったけど、心配をかけてすまないと思う一方で、単純に顔が可愛いから内心でにつこりしていたのも事実だったりする。

いや、俺の近況報告を聞いても楽しくないだろうからここまでしよう。最近は暗い話題が多かったから、めでたい話からあげることしよう。思い付きの順番なので悪しからず。

まずは、プレシアの不治の病が完治したことだ。まあいわずもがな、菜摘たつての希望による全面的な協力から、マトリヨシカ的能力をいかになく発揮されたことでの結果だ。今ではすっかり外を走り回るほど元気、とまではいかないけど、過ごしてからは緑に睡眠も取れていなかったこともあり、体力もそう無かったという。目元のクマが取れるには、もう少し時間がかかりそうだけど…

で菜摘と正治だが、互いが互いを庇いあう供述を繰り返すことで難航していたが、事情も知らずに菜摘を協力させていたという正治の一言によって事態は変わった。そこから互いの意見が食い違い、最終的に利用されていたという体に減刑が確定した菜摘と、未だにゴタゴタしている正治、という状態を現状を迎えている。未だに正治の方でもたっているのは気になるが、そこまでは気にしてられないし、俺の踏み込んで良いレベルを超えてるからやめて置く。なんにしても、菜摘やプレシアにも軽い余罪があったもの、眼に見えていた部分をあいっつが受けていることにはそう変わらない。あいっつはあいっつで、クロノのことで責任を感じていると考えると、なにかやるせなくなつて来るな……

……なんか暗くなってくるな。よし、話題を戻そう。またプレシアを中心にしたことだけど、先に言ったように、軽い罪を問われているため、現状は管理局の監視下によって生活している訳だが、それはテスタロッサ一家全員も関与している。この状態で家に帰すのも難しいということ、一家共々、しばらくアースラ内で保護を行うという。まあなんだ、固い言い方になったが、要はツンデレ発言だ。細かいことは言わなくても分かるだろう？ なにがビツクリって、根回ししたのがクロノ執務官なんだぜ？ 意外と熱い奴なのな。

で、個人的に一番のニュース。これが一番言いたくてうずうずしてたとも。

なんとだ。今日はフェイトがここに来るんだと。なのはが言っていたんだ、間違いない。おまけに、裁判にかけられるもの、まさかテスタロッサ一家全員や菜摘無罪にするどころか、正治の罪まで軽くされることまでほぼ確定されているという。どんな裏技を使ったんだよ。マジで本人に聞いたら、こう返されたよ。

「裏技もなにも、ぼくは外堀を埋めただけのことさ。ぼくだって、救えるものがあれば全部救いたいよ。ただ、君ほど向こう見ずじゃないだけの話さ」

……ちなみにだが、クロノ執務官って、あんな幼い見た目の割りに14という年齢と知ったのは、事件のから三日経ってからのことだった。あの見た目で今の俺より年上って、なにかが割に合わないと思う。

で、本局移動前に、こうしてなのはとフェイトが面会することになった。まあ、話をしたいというのはフェイトの強い希望かららしい。今更だけど、全ての要望を叶えている執務官って、実は凄い奴じゃ……まあ実は熱い奴だったと知っただけでも儲けものってことで。

海を一望出来る橋の上まで、俺となのはは走る。この辺りは風も気

持ち良いし、眺めも最高だから、のんびり話するには絶好のロケーションだ。基本安静を言われた俺は、杖（デバイスじゃない方の）を使用しながら、ひよこひよこ歩を早めている。ユーノはそのままフレットの形態のまま俺の肩に乗って移動中。っておいおい、負担軽くなるという理屈は分かるけど、いつまでその姿するんだよ。

見慣れた人影が4つ。フェイトとアルフとプレシアとクロノ執務官だった。いざ一家で勢揃いするとなんか緊張するゾ。

「フェイトちゃん！」

「あまり時間もかけられないからね。ぼくたちは向こうにいるよ。ほら、行こう」

「だな。じゃあなのは、ゆっくり話でも——」

「ま、待って！」

まさかフェイトに呼び止められるとは思わず、素でビックリしてしまった。でもどっちのことだ？俺と執務官は振り返って確認すると、視線はどうも俺に向けられていた。ええっと、正直こうなると思つてなかつたからどうしようか迷うんだが……

「……君に話があるなら、別に良いだろう。ぼくは向こうにいるよ」

……なんか世話を焼かせてしまったな。やれやれと肩を上げずらせてから、クロノ執務官は先に向こうに行ってしまった。

しかし、よくよく思い返すと俺、フェイト自身とは話すほどの面識は無いんだよな。強いて言うなら、一番話したのはアルフで、次がプレシアか……いや、待て。そもそもフェイトと会話したことあったっけ？……思い出した、顔は合わせたことあるが、会話は無いな。でも、なんでそんな間柄のフェイトが俺に……？

「あの……ありがとうございます！」

「え、なにが？」

「かあさんとアルフを……みんなを助けてくれて、ありがとうございますー！」

「あ、ああ、それね！ 気にしない気にしない！ んまばばばばばばば……！」

こう正面から感謝されると、気恥ずかしいんだよな……冗談であし

らいにくいし。ああ、フェイトの笑顔可愛いよおおおお！心が  
ぽかぽか暖まるよおおおお！ そうだ、フェイトの綺麗な髪を  
洗おう（提案） ここJAPANにおいて、腹を割って話すとか、裸の  
付き合いという言葉があるじゃないか。ここは一つ、歴史の先人に  
則って……………

「ふんすー！」

「や、八高さん！ なんで目潰しを!?!」

「…………フー、スツとしたぜ。俺はなのはやユーノに比べるとチと  
荒っぽい性格でな。 煩惱が噴出してトチ狂いそうになると、眼を突  
いて、頭を冷静にすることにしているのだ」

「言われてみたら、前にもやっていましたよね!? あと危ないから、  
もう止めて下さいよ!?!」

「な、なのはが言うならそうする…」

「全く、うるさいのに関わったものね…」

「うーん、ちよつと早まったかな…」

「俺のことは気にしなくていいから…………本題はなのはだろ?」

なんだこの言われようは…………まるで俺が変な人って言われてるみ  
たいじゃないか。俺は変なんじゃない、人とは違うオリジナルなだけ  
だ。みんなと違うただのオンリーワンなの。オーライ? みんな  
違つてみんな良いという精神でいかんと、身がもたんぞ? ……と開  
き直つてみたが、ロリコン紳士つてステータスとしてどうなんだ?  
感覚として溶け込んでいるからそこまで分かんが、自分が思う以上  
にアウトかもしれないよな?」

だが違うからな! 俺は、そんじゃそこらの下級戦士ロリコンとは違うから  
な! エリート紳士せんしであり、誇り高きサイヤ人の王子だからな!

…………いかん、熱が入つて途中から脱線しちまった。落ち着こう落ち着  
こう。

「えつと…………なのは、でいいかな?」

「うん」

「その、私…………なのはの友達になりたいの!」

ずつと伏し眼を保っていたフェイトが、ようやくにして瞳を上げ



た。でも、少しだけ事情が違うのか、控え目な表情は変わらない。

「その……ユーノからなのはが少し暗くなつた理由を聞いたの……  
なのはの大事な人が、消えたからって」

「——っ！」

果たしてその傷は、なのはにどれほど食い込んでいるものか……詩的な言い方をすれば、時間が傷を癒すなんて言葉も聞くが、綺麗な鉄を錆びさせるのも時間なんだぞ。あくまで極端な例だが、そういうことだろ？

俺だって、クロノがいなくなつたことでなのはがどれほど傷付いているのかは、正確には知らない。なのは自身話題に出そうともしないし、俺もなるだけ傷口を広げないよう避けていたことだったが、フェイトはあえてそこに踏み込んだ。

「私も、なのはがしてくれたいみたいに、なのはを助けたい！ なにを言われても手を差し伸べられるような、なにがあつても諦めないような、強い人になりたい！ なのはの辛いことを分け合える、友達になりたい！」

「フェイト、ちゃん……」

……うーん、なんか違う。表現が固いせいで友達という関係に聞こえづらい。見る、アルフが頭を抱えているぞ。あのなフェイトよ、友達というのはそういう重たい仲を指す意味じゃないんだぞ。なのはもなのはで指摘しない辺り、クロノ関連に限れば余裕のある話題じゃないようだ。

「フェイト、友達というのは、もっと気安くていいのよ」

正直かなり意外だった。まさかプレシアが割つてはいるとは思わなかった。俺とアルフをちらつと横目で見ながら、また静かに、フェイトとなのはに視線を配る。

「貴方は同情で彼女の友達になりたいの？ 違うでしょう。相手が困っているから手伝う、一緒に笑いたいから笑う。理屈で友達をつくればそれまでよ」

「かあさん……」

「驚いた……プレシアがそういうこと言うなんて……」

「子どものつくる友達なんてそれくらいで充分なのよ。使命感の義務なので仲良くなったところで、打算とそう変わらない。フェイト、自分の感情を理屈で語れるほど単純なものなの？」

「……………ううん」

「プレシアの説明はまどろっこしいっただらないよ。難しく考えなくていいの。要は、フェイトがなにを一番に伝えたいかって——いや待てよ。それなら最初は、お互いを名前で呼んでみるのは？ 友達同士でファミリーネームを呼び合うのも変だしね」

「それだ、冴えてるなアルフは」

「ふふん、伊達にフェイトの使い魔をしてないからね。今は母親のアドバンテージが薄いプレシアには、難しい問題だったかなあ？」

「……………憎たらしい使い魔ね」

おお、プレシアさんの返事がそんなに黒く聞こえないぞ。やつぱり、以前のプレシアと比べると随分温和になってるから、割と気軽に話しやすい。いやあ、妙齢にも関わらず母親一年生なプレシアさんの態度が初々しくて、見てて心が暖まるものつたらないね。…あ、すいません、睨まないで下さい。野生が薄まったにしても、やはり鷹のような眼力は健在です。

「といことで、ほれフェイト。もう一回」

「うん……………なのは、私と友達になって下さい！」

がっつと頭突きでもし兼ねない勢いで、フェイトが頭を下げる。いやあ、なにしても可愛いなあ。女の子同士に芽生える友情……………すごく……………（感動が）大きいです……………髪凄く柔らかそうだな。凄く撫でてみたい。半歩間違ったら告白になってる辺り、つくり慣れてないがバレバレ。ま、庭園育ちなのを考えると仕方無いではあるけど……………ということは、フェイトは常識に少し疎い無垢な箱入り娘……………閃いryいえなんでもないです通報しないでくださいお願いしますプリーズ。

……………さつきからいい空気すぎだろ。いやまあ、自分の様子がおかしくなるのも仕方無いだろ。今眼の前で起こっているのは、感動的なシーンなんだぞ。ハンカチを忍ばせているが、この場でちよつと泣きそうになっているのは俺だけらしい。下手したら、使うことになるか

もしれんが、俺も男だ、耐えて見せようぞ。

「…わたしも、フェイトちゃんと友達になりたい」

……凄く自然に名前を呼べてるし。もしかして、ずっと名前を呼びたかったのか？ まあ、なのはがあの状況のフェイトを放っておける性格じゃないからな。

しかしまあ、やつぱりこう来ないでせう？ 幼女たちによる相互理解というのは、見ている気分が良い。ましてや、元が敵対関係だったものが互いに分かり合うものは、一層に気持ちが良い。そういうもんじゃん？ 最後に愛と勇気が勝つストーリーってのは。ひしつと抱き合う姿は、甲子園を優勝を手にした野球部のようでもある。

……自分で言ってるんだけど、これ全然的確な表現じゃないと思う。なんでこんな体育会系に例えたんだろう。

……穏やかに一度、さらつとした潮風が吹く。今の季節は夏。一面に広がる青色が涼しさを彩る。明るい栗色と金の長髪を揺らしたのを合図に、二人の身体は離れる。

「そうだ、もうひとつ謝りたいことがあるの」

「謝りたいこと？」

「その……お互い事情を知らなかったのに、私一方的に攻撃しちゃって……」

「ああ、あの時のね。もう気にしてないから、平気。それに、その後にフェイトちゃん、謝っていたからもうこの話は終わり」

「え、気付いていたの？」

「やつぱり。あの時の口の形が「ごめんね」って言っていた気がしたから」

なにやら、出逢った辺りのことでフェイトは頭を下げているが、言われてみたら、その時の俺、アルフとしか関わってないから、よく分かんねえや。

ともあれ、フェイトにとつてのしこりは、本人の予想したよりあっさりと解消された。軽い会話の食い違いに気付いたみたいに、二人さ誰からとなく、声を上げて笑う。嗚呼、守りたい、この笑顔。

「…もう行くね。返事ありがとう」

「もういいのかい？」

「うん、いいの。やっぱり、ここみんなは優しいね…」

「輪、だっけね。アンタには改めて、お礼を言わせておくれ。本当に、ありがとう…」

「待てい。なんでそのタイミングで俺に振るんだよ。そこは同世代のお友達のなのは言うことだろう。それに、俺だけの力じゃない。な、ユーノ？」

「でも率先したのは八高さんだから…」

「お前ら謙遜しすぎい！」

「アンタが遠慮しすぎなのよ！」

俺は事実しか言った覚えはない。普通に考えなくても、昔からアルフはフェイトのことを考えていただろうし、プレシアを改心させたのは管理局（主にリンデイさんも）だし、乗り込んで操られたフェイトを助けに行ったのが俺たち、プレシアを助けたのは…あ、こっちで俺か。で、最後に笑顔のフェイトと友達になったのが、なのはだ。どうだ、これでも俺の功績だと言うか？

「フェイトちゃん、また逢えるよね？」

「うん、少しの間だけど、お別れ」

「…フェイトちゃんは、いなくならないよね？」

余程クロノがいなくなったことでトラウマになってるらしい。ここで初めて、なのはの笑顔が大分薄まった。…口にしたくないが、現状のなのはの素面は、こっちになる。なんだってこんな幼女が、影を背負わなくちゃいけないんだか…

だけど、フェイトはなのはとは逆に自然な笑みを返した。

「大丈夫だよ。ここにいるのも良いって言ってくれたの、なのはなんだよ？ だから私は、いなくならない。かあさんやアルフだって寂しくなると思うし」

「アタシは寂しいよ」

「…そうね。いなくなれると困るわね」

「プレシアさん、いい加減肩の力抜いてくださいよ」

「…今はいいわ。変に力を抜いたら、眠りそうなのよ」

「寝て良いんですよ!?!」

別に今そんな追い込まれた状況でもなんでもないでしょうに……それともなに、気を緩めるとドジが増えるとかか? ——アリだな。でもアルフも隣で溜め息吐いてるし……うん。アルフは苦労人になるな。合掌。

「フェイトちゃん、想い出に出来るものこんなものしか無いけど……」  
「……………じゃあ、私も」

最初はなのはから、そして意図を汲んだフェイトが髪を束ねるリボンをほどく。

うほおおおおおおおおおおおお! 髪をほどいたなのはマジ天使用いいいい! 一緒の墓に入りたいおおおおおお!! そしてフェイトの長髪クツソ綺麗だよおおおおお! 撫で撫でて週7日のトリートメントしたいおおおおお!

……ごほん、お見苦しいところを見せて申し訳ない。だがもう大丈夫だ。

なのはのピンクのリボンがフェイトの手に、フェイトの黒いリボンがなのはの手に渡される。友情の証を、互いに見合わせながら、ほどけないように結ぶ。

少しだけ、なのはの笑顔に明るみが戻った。そうそう、これよこれ。笑顔が一番なの。

「時間だ、もういいかい?」

「そうだね。かあさん、アルフは大丈夫?」

「アタシは別に、かな。みんなが元気してれば、それでいいや、つてね」

「俺もフェイトたちに対してそう思うよ」

「……八高輪、貴方にはやはり感謝しかないわね」

「ちよ、その話はもういいですって! それよりゆつくり休んでくださいー!」

「フェイトちゃん、またね……!」

「なのは、またね」

花の咲いたような笑顔を、なのはとフェイトは向け合う。ひらりと

手を振ってから、クロノが三人を先導し、転移魔法によってしゅんと姿を消した。

——すっげえ。あれだけ賑やかだったのに、途端に静かになった。向こう側の状況を考えなければ一つのパーティーが終わったみたい寂しさが流れるのがねえ……耳に心地よい波音も、なんだか物悲しい。

「……………いなくならない、よね？」

ぽつんと、一滴の水が落ちたみたい静かな声が入る。

聞かれてる言葉は、さつきフェイトに向けられたものと同じ意味のはずだが、なのはの声の振るわせ方や瞳の滲み方が、強まっている。

「八高さんも、ユーノ君も……………いなくならない、よね……………」

……………なんだか、なのはの足場だけが落ち着かないように見えてしまう。今にも尻餅をつきそうなほど、なにかが不安定だった。

……………やっぱり、なのはは不安なんだ。クロノがいなくなったんだ、なのはにとつての特別な存在がいなくなったことで、怖がっている。なら俺はどうするか？　って、悩むほどの問題でも無いだろう。頭をぽんぽんと撫でながら、はつきり答える。

「なに言ってたんだ。俺たちがいる場所なんて限られるだろ？　高町家、翠屋、すずかの家、アリサの家、アースラ。あ、でも俺を探すなら、俺の実家も含めないとだな」

「八高さん、真面目に——」

「俺は至って真面目だ。理由もなくなのはから離れるかっての。な、ユーノ？」

「そうだよ。僕たち、なのはの友達だからね」

「そういうこと——あ、そうだ。俺がいる場所は、なのはの隣、かな」

高町家に来てから、なんだかんだで一番関わっているのはなのはなんだ。その次にユーノとも関わっているけど、ひよっとしたらなのはに関して、感覚的には友達より顔を合わせている。そろそろ切っても切れない縁どころか、俺となのはで町を歩けば、兄妹と間違われるんじゃないか？　…これは言い過ぎだな。恭也さんや美由希さんに

殴られるがな。

「大丈夫かなのは？ 陽に当たりすぎたんじやないか？」

「え、あ、……そう、ですね……」

「あの、もしかして気付いてないんですか？」

「？ ばつちり気付いてるぞ？ 陽に当たりすぎたから顔が赤くなつて——」

あ、なるほど分かったぞ。なのはは、俺が言った言葉を違う方向で受け取ったな。うわっ、俺まで恥ずかしくなつて来たぞ……ああ熱い熱い。来ている学生服をぱたぱたと仰ぎながら、風を受け入れる。

……私服はその内買いに行こう。

「か、帰ろっか」

「で、ですね」

「いや待てよ、すずかの家に行こうぜ。みんなで猫に癒されに行こう」

「八高さん、もうそろそろ帰らないとおかーさんが……」

「もうそんな時間か。仕方無い。なのは、ユーノ」

さて、こつからは翠屋でせつせと働く時間だ。あくまで、軽い運動くらいなら大丈夫だから、リハビリがてらでウエイターをするくらいならセーフだとか。とはいえ無理が禁物なのは前提なので、極度に動いたり重いものを運んだりさせるのはご法度だと。そりやそうだわ。フィリス先生いわく、脚が重症気味の全身神経痛だという。「これで手足が動くことが奇跡です」とまで言わしめた怪我なので、紙一重な状態だけど。まあある程度時間も経っているので、少しの運動程度は認められたのが昨日の話だけど。

さて、しばらくはなにもしなくてちよつと暇だったけし、また翠屋でわいわい出来ると思うと楽しみだ。まあ、制限がかいだらうけど、あの空間好きだから、いるだけでもほっこりするんだよなあ。

「——帰ろっか」

「はこ」

「ですね」

ともあれ、一つの非日常が過ぎていった。そうしてまた俺たちは、大きな出来事を越えてから、小さな非日常を過ごしていくのだろう。なに、毎日は同じ一日の繰り返しじゃない。だから悲しいことも楽しいことも起こる。

だけどき、悲しいことは少ないに越したことは無いだろう？ 俺は幼女が笑った顔が大好きなんだ。ふくれっ面も可愛いし、驚かしたときの顔も大好きだ。だが、涙とか悲しい顔とかはとにかく嫌いだ。

小さな女の子ってのは、やっぱり快晴の青空の下を笑いながら、ステップを踏むような軽やかさで歩いてるのが一番なんだ。今のなのはみためにさ。そうは思わんか？



pretitle of Attract story

季節は既に11月の中頃。ちらりと降る雪が見え始める季節を迎えている。

今日は翠屋も落ち着いているから、アリサちゃんとすずかちゃんとして遊びに行っている。今日も相変わらず、すずかちゃんのお家でゲームをしている。

「最近のなのはちゃん、明るくなってきたよね」

「そうね。クロノがいなくなつてしばらくは暗かったけど……」

それは最近、八高さんにも言われた言葉だった。とはいっても、事情を全部知っている八高さんは遠回しに尋ねたけど、知らないとはいえ二人は直接聞いてきた。あまり気にしないようにはしていたにしても、一つの思い出として胸に秘めていたのも事実だったから、そう言われることが素直に嬉しかった。自分でももう少し引つ張るのになつて思っていたけど、みんなが気遣ってくれるおかげで立ち直れたと思っている。……まだ少し、痛みは残っているけど。

「そうかな……でも、別れ際にクロノ君から受け取ったものもあるから、そんなに寂しくない、かも」

そう、クロノ君から受け取ったS2Uの機能の一つで、オルゴールが内臓されていた。きつと、その曲がSONG TO YOUなのかもと想像もしてしまう。少し儂くも優しい曲を聴いては、寂しさを感じながらも暖かさも同時に覚えていた。最初は物悲しく聞こえたメロデイも、今ではそつと励まされているように聞こえるのは、わたしに少しだけ、成長したからかなと思つたりしている。……でも、わたし自身が乗り越えられたのも、やっぱり一番近くにいる八高さんのおかげかもしれない。どんな状況でも楽しい空気をつくってくれるあの人の存在は、とても大きい。

「でもつきつと、おにいさんのおかげもあるかもね」

「まあ、あのアホ先輩ならクラツカーの一つでもポケットに仕舞っていそうだしね」

「にやはは……」

ごめんなさい八高さん、その姿を用意に想像出来てしまいました……なんか楽しいことがあると、「おめでつとおおおおおう！」と言いながら、一日一回は鳴らしそう。その状況に出くわしたことはないけど……

「で、やっぱり話してくれないの？」

「……うん」

時々、アリサちゃんとすずかちゃんは尋ねる。けど、まだ答えられない。

どうしても管理局とか魔法の関係を優先させて、アリサちゃんたちと遊べない事情というもの出てきてしまう。その日というのは、確実に八高さんもないという偶然重なっていたことから、気になっていたという。

……これに関しては、八高さんと相談して決めている。

「ごめんねアリサちゃん。でも、解決したら、全部言うから」

「その言葉、嘘じゃないわよね？」

「うん。これは八高さんと話をして決めたことだから」

「そうなんだ……」

「すずかちゃんもごめんね」

「ううん。おにいさんと決めたことなら、嘘じゃないって分かったから」

これに関しては本当に、誤魔化しは無しで、全部伝えるつもり。「親友に隠し事をし続けることをしたくない」というわたしと八高さんの意見が一致したことから、この答えに至っている。

「そうそう、アホ先輩の身体はどうなの？」

「すずかちゃん、なんだかんだでおにいさんが心配なんだね」

「ち、違うわよ！ 前々から身体痛いなんなのって聞くから……」

！ でののは、どうなのよ？」

「最近は良くなつて来てるよ。八高さん、身体を動かしたいって退屈してるほどだったけど、今は翠屋で時々働くようになってるよ」

「……そう」

「ということは、おにいさんは今日翠屋？」

「ううん。今日は定期通院。身体に後遺症が残らないように、ケアをするんだって」

「大変ねえ」

俺は、怖い。情けないことに、俺は歯をかちかちと鳴らしながら、自分の身体を抱く。確かに今は11月、外は確かに着込むほどの気温だが、ここは温かい。だが、その瞬間に立ち会うことそのものが、俺に恐怖心を煽らせる。

ふぎけるな……ふぎけるな！　なんだって俺がこんな眼に会わなくちやいけないんだ!?　俺はいつまで、死神にほくそ笑まれくちやいけないんだ!?　自分の名が呼ばれることが、これほど恐ろしい瞬間だなんて……真っ白が広がる無機質な景色内を漂うアルコールの臭いが、一層に嫌悪感を逆立てられる。

俺には理解出来ない。人が入れ替わり立ち代わりとしていくが、焦燥に駆られまくった俺には、疑問しか浮かばない。まあ確かにだ。それぞれ事情があるにしてもだ、好き好んでいく人もいるということを考える、ここは魔の領域だ。

「……教えてくれアヴァロン、俺はあと何回、このぷよを連鎖させればいいんだ？」

『知らぬ』

小声でアヴァロンに尋ねるが、返事は軽く冷めている。至極どうでもいいと言いたげな、突き放したトーンだった。

だって、仕方無いだろ!?　身体の故障具合が恭也さんと近いせいで、ほとんど有無を言わせることなく、定期通院になったんだぞ!?

今はまだ湿布とか生活方法の改善アドバイスで済んでいるが、「状態

次第では痛み止めの注射も考慮します」という死刑宣告を受けたんだ。別に言うほど怖くなかった病院の待ち合いも、ぷよ〇よしないとやってられんくらいだ。なにが楽しくて注射なんか……！ あれクツソ怖いだろ！ く、くそう、恐怖のせいで手元が覚束ない……職員室に呼び出された悪い生徒のような心境のようなものなんだと理解してほしい。 ……あ、くそ、またミスったああああ！ 乙るうううううう！

「ぷ、ふふふ……」

「ん？」

なんか必死でぷよしていると、隣から笑われてしまった。笑い声が幼い、これは——幼女か！ と考えきる前に反射的に顔を向けると、小さく温和に笑うのは、短く整った自然な茶髪の子椅子の子だった。 ……うーむ、車椅子の子というだけで、ちよつと同情的な眼で見ってしまうな。なるだけナチュラルに声をかけてみよう。

「あ、すみません」

「ああいいのいいの。気にしてないから。ところで、なにが面白かったんだい？」

「い、言えませんが！ 失礼な話やから！」

か、かかか関西弁、だと……？ ムヒョツス最高だぜ。ところどころの言葉のニュアンスからも、独特の訛りが聞こえる。これは本物だな。それだけで機嫌がなんか良くなってくるってもんだ！ 気を悪くするどころか、今ならなに聞いても笑える自身があるぞ。

「大丈夫大丈夫、俺が怒ったら通報していいから」

「そこまではしませんよ!? ……じゃあ、言っても？」

「ばっちこい」

「緊張してる様子が面白いなあ、って」

「……そんな程度じゃ俺は怒らないからね？」

「でも、初対面の人に言われても、気は良くないでしょうし……」

「俺は平気……そうだ、タメ口調で話してくれる？」

「え、なんでです!？」

「関西弁をフルで堪能されたい」

相手が初対面ということもあって、若干緊張とか控え目な態度が見えてしまう。奥ゆかしいなあつと感動も出来るが、身近に関西弁の知り合いなんていないから、堪能したい。この気持ち分かるよね？

「ええつと、これでええんです？」

「うーん、もうちよつと碎けてほしい」

「……これでええの？」

「そうそれ！ グツジョブグツジョブ！ ……あ」

感動のあまり、携帯ゲーム機を操作していた手が完全に止まっていた。とつづくにコンティニュー画面が浮かび上がっている。うわあ、完全に忘れるくらいに感動するとは……いや、生関西弁だからね、仕方ないじゃないか。

見たところ、この少女の手には一冊の本があるだけ。それなりに時間を潰せるものがあるが、

「……やってみる？」

「ええつて。わたし、本もありますし…」

「読書も良いのも分かるが、たまに娯楽に触れるのも楽しいぞ？ どうだ？」

「……それじゃあ、お言葉に甘えて」

あまりこの手の遊びというものをしなさそうな印象もあったから、携帯ゲーム機を渡す。可愛い幼女とこうして話すだけで大分落ち着いてきたし、誤魔化し半分でのゲーム機が無くても、もう大丈夫そうだ。

「やりかたは分かる？」

「はい。お兄さんのを見ていたので」

「意外と見てたのな……まいつか。じゃ俺、その本読んでいい？」

「はい」

「あ、ごめん。俺相手には敬語はしなくていいからね？ ちなみに、理由はさつきと一緒に」

「……お兄さんつて、変わってるって言われへん？」

「……時々あるかな。なんでだろうねえ」

割と本気で返したのに、幼女はぷつと吹き出した。正直解せぬ。少

しなり理解は出来ているが、スルー出来る範囲だと思っただが。俺って笑われるほど変だったのか？

若干不満はあるもの、幼女の了解を得て本を借りる。お、やっぱり結構ガチめな文学だったか。恐ろしい娘っ！ たまにはライトノベル以外を読むのも良いな。

……ちらりと、眼の端で幼女を見る。よく見ると、車椅子は電動式のもので、手すりの右部分に小さな操作用のハンドルまで付いている。これ高いはずだよな？ どう見てもその足は、神経断裂寸前だった時の俺より重症かもしれない。……ひよつとしたら、歩けないかもしれない。

……ここにいるってことは、怪我の治療なりリハビリかもしれない。怪我でそうなつたらまだマシだとして、病気の影響とかだとしたらやだなあ……確実に俺より不幸を背負っているだろう幼女は、楽しみにゲームを操作している。当たり前だけど、さっきの俺より上手い。……脚に関しては極力話に触れないようにしよう。

「お兄さんって、海鳴の人？」

「…おう。しかも聞いて驚くなよ。お店で働いている」

「え、そうなん!？」

「といっても、親の伝手で住まわせてもらいながらなんだけどね」

「へえ……あ、もしかして、翠屋で働いてるん？」

「え、知ってるの!？」

「噂というか、聞いた話やと、その喫茶店で働いている男の子がいるって。なんや接客に定評のある、紳士的な人って話やけど……」

「わーお！ 超エキサイティン！ 噂話を俺のハートにシユウウウウウツ!!」

うおおお、すげえ嬉しいいいいよおおお！ 自分が関わっていることだが、自分のこと以上に翠屋を褒められたようですっごい嬉しい。

……おほん。不覚に大声をあげたせいで、受け付けの先生に睨まれる。すいません、完全に俺が悪かったです。現にこの子ビツクリしてたし。

……そうだ。疑問ついでにちよつと悪戯をしかけてみよう。

「……………待てよ。翠屋を知ってるってことは、もしかして、君も海鳴の人？」

「せやね」

「わーお！ 超エキサryんぐんぐん！ 大声失礼。それなら、時間がある時でいいから、一度来るといい。家主の娘も君くらいの年だから、友達になれるんじゃないか？」

「へえそうなん。楽しみやなあ」

「八高さーん」

「ふふ、俺とそう話してていいのか？」

「？ なんで？」

「手元が止まってるぞ？」

「あ……………！ も、もうお兄さん！」

「八高さーん」

「いやあごめんごめん。ちよつと悪戯したくて」

「お兄さんだつて、本読まなくてええの？」

「ヘアアツ!？」

「あはは、これで相子やな」

「ぐぬぬ……………」

「八高さん！」

「あ、ファイリス先生」

少し不機嫌なのか、ファイリス先生は頬を膨らませてこつちを見ている。……………普段笑顔のこの人がこの表情をしているということは、俺がなにかをしてしまったらしいが、俺まだなにもしてないよな？  
あ、この子ファイリス先生知ってるんだ。

「もう！ さつきから呼んでるのに、なにをしているんですか？  
談話も良いですけど、集中しすぎですよー！」

「す、すみません。つい弾んじやつて」

「先生すみません。わたしの方が楽しくて、つい」

「まあいいですけども……………はやてちゃんも楽しそうだったし、わたしも説教は好きじゃないので、これでおしまい。さて八高さん、こつ

ちに来てくださいいね」

「……………りよ、了解しました」

死刑宣告を受けた後、売られる子羊さながらに俺はフィリス先生の後を追う。ダレカタスケテエー！

病院の通院は嫌いじゃないにしても、車椅子の少女は、今日の通院を楽しかったと感想を抱いていた。今までと違った出来事に出会ったことで、新鮮味もあつたし、嫌なことも忘れられて楽しかった。脚のことは受け入れているにしても、あまりにも普通のやり取りを交し合ったことで、少しだけ、自分の状況を忘れていたのも事実だった。

「……………八高さん、か。善<sup>え</sup>え人やなあ…」

思い出して、彼女はぷつと笑う。変わった人には違くないけど、彼の人柄は間違いなく優しい類の人だった。彼との会話の中で、驚くほど「脚」という単語が出て来ることは無かった。彼としたことはなんてことのない、日常の話やら小話をしただけの、些細なやり取り。少し後になってから、彼が気を回していたことに気付いて、彼女は少し気を使ったなと思った反面、嬉しも込み上げていた。まるで、自分を普通の人と同じように接することに、彼の人間性が見えた気がした。

もう一つ、彼女は思い出して笑った。この後もなにか忙しい予定が入っていたのか、診察後にすぐさま帰ろうとしたけど、彼はうっかりで彼女の本を持ち、自分のゲームを渡したまま走っていたのだ。しっかりと知っているのに、どこか抜けている。どこか大人びているのに、なんだか無邪気な彼。そんな表情や言動の忙しい彼の一挙手一投足が、見えて新鮮だった。少し年上だけど、年の近い男の人と会話する機会が少なかつた彼女にとつては、自分の家族に無い個性と向き合つたというのは、貴重な機会だった。ちなみに、互いに貸したものは、別れ際に手の中に戻ってきている。

「翠屋の子がわたしくらいかあ。会つてみたいなあ」

「はやてちゃん、遅れてごめんさいね」



車椅子の少女——八神<sup>やがみ</sup>はやてを迎えに来た一人の女性は、少し申し訳無さそうに小さく頭を下げながら、フェイトとは違った色合いのやや短い金髪を揺らしながら、はやてに歩みよる。着込んだコートから、橙の染まる外の冷え具合が伺える。

「シヤマル」

「機嫌が良いですね。良い事があつたんですか？」

「そうやね。楽しい人と話をしたんよ」

「そうなんですか。男の子ですか？ 女の子ですか？」

「な、なにを聞くんやシヤマルは……！」

「……冗談で聞いたんですけど、ああそういうことなんです。それはめでたいですね、それじゃあ今日はわたしが赤飯でも」

「ああええんよ！ わたし今日機嫌がすこぶる良えから、わたしがすき焼きつくるね！」

シヤマルの料理の腕は知っている。なので、はやては出来るだけやんわり拒否しつつ、上手く回避する。

しかし、いつもより楽しかったことは変わらない。今日は一際、つくるご飯に気合が入れよう。シヤマル車椅子を押してもらいながら、はやては唇を嬉々に結ばせる。

「森正治……」

「その眼で見ないでくれ……もうオレは誰も殺そうという気はない」

確かにオレは世界を滅ぼしかけた。だが、オレだってそんなつもりなんて毛頭無かったし、むしろ逆のことを望んでいたくらいだ。

だが、オレ自身この状況には驚きを隠せない。本当ならオレは、次元世界への干渉と管理局員や民間人（あの自称紳士め……）への攻撃等の罪で、自分の年齢の半分を過ごす予定のはずだった。だが、オレもフェイト同様に半年で済んだ。理由は分からないが、一つ聞いた話だと——リンデイが絡んでいると聞いたことがある。

ブリッジに案内されたところで、どんな眼を向けられるかなんて知れている。見知った顔を捜すのも苦勞するだろうと踏んでいたが、

「あんちゃん！」

「菜摘…？ なぜここに？」

「ジブン、管理局の…：…なんすたつけクロノ？」

「囑託魔導師」

「そうそれ！ しよくたく魔導師！ つまりジブン、管理局に協力することにしたんす！」

「そうか…：…そう言えば菜摘は、管理局で働いてみたいって言っていたな。念願叶ってよかったじゃないか」

ぼんぽんと、菜摘の頭を撫でる。「リリカルなのは」に憧れている以上、ああなりたいの気持ちは分からなくもないが、オレとしてはまだ少しの抵抗はある。けど、別に嫌悪するほどのものは無くなった。イラつくことに、あの自称紳士のせいで、世界の見え方が少し変わったせいかもしれない。

少なくとも、今までのオレの感性は、あくまで二次元の世界に入り込んでいて、という感覚で過ごしてきたが、どうにもそれは間違った感覚のようだ。ここには普通に人がいて、普通に笑って、普通に過ごしているだけ。転生前とそう変わらないことに、今更に気付いていた。普通にエンジョイしているだろう自称紳士と、この世界に馴染んでいる菜摘を見ていたら、まるで馬鹿みたいだと考えてしまう。

「しかし、意外な姿がいるもんだな。不治の病が治ったと聞いたが、まさか管理局に協力までしているとはな」

「互いの利の為よ。 ……ええそうね、私から見てもまた貴方の姿が見れるとは思わなかったわ…：…森正治」

「許されるとは思わないさ」

「ああもう、プレシアもあんちゃんもストップ！ 折角顔を合わせたんですから、友好の印、握手っすよ！」

半ば強引に、プレシアと握手させられるが…：…菜摘のこの空気の読めなさは時々手痛い。友好の印を実行しながらも、互いの口角はピクリと動くこともなく、細い視線を向け合う。隣では「ほらスマイル」と

遠慮なく催促してくる。菜摘にはもつと社会勉強が必要のようだな。……いた。三秒ほどしてプレシアから視線を外し、ある人物を探すが、割とすぐに見つかった。プレシアの手から離れ、探してた人物の元に歩みよる。

「……リンデイ。あんたがオレの刑期に手を回したと聞いたが、本当なのか？」

中途半端に尋ねればはぐらかすこともしかねない。直接噂の真偽を尋ねる。

……どうやらこの質問は、少しまずい事情だったらしい。場の空気が変わった。局員の人間のほとんどが知らない話だったようだ。辛うじてクロノは知っていたのが幸いだが。

状況に諦めたのか、リンデイは重たげに溜め息を吐く。

「ええ、その通りです」

「物好きだな。オレにまで囑託を要請するつもりか？」

「それもあります、それ以上に、あなたたちに二つ尋ねたことがあります」

「そんなことの為にオレの罪状を誤魔化したのか？ 中々に腹の黒い……」

「詳しい話は執務室で聞きます。二人とも、こちらへ」

「まず一つ目ですが……あなたたち自身についてです」  
「オレたちについて？」

妙な状況だった。警護の一人も付けずに、リンデイは一人でオレと菜摘に尋ねる。しかし出てきてた言葉は、あまりにも不明瞭な疑問。余程他に聞かれたくないことを聞くのか？ 菜摘が首を傾げるが、続くリンデイの言葉によつて、オレは理解出来た。

「……八高輪を始め、あなたたち二人が所持するデバイスは、ミッドチルダの技術が使われていないのです。いえ、正確に言えば明らかにその技術を模倣して製造された、超技術が組み込まれているのです。そして、デバイスの言語までもまるで違う。そして、菜摘さんからもこのデバイス事態は生まれながらに持っていたという話も聞いてい

ます。あなたたちは一体、なにものなのですか？」

……本気で頭を抱えた。菜摘め、話しすぎだ。重要な事態に陥っていることに今気付いたのか、菜摘はあつと口の形を歪める。気付くの遅っ。

「……なあマトリヨシカ、例えばだが、オレたちの素性を話せばなにかこう、罰則とかなにかあるのか？」

【ある訳がなからう】

「……そうか。だが、話したところで絶対信じられないし、オレは話す気にはなれないんだがな」

「あんちゃん、信じる信じないはまず話してからじゃないとつすよ！」

「無理に決まっている。いくらなんでも脈絡も途方も無さ過ぎる」

「大丈夫つすよ。次元に亀裂が入ったり、不治の病が治ることだって起きたんすから、もうなにが起こっても多分大丈夫つすよ」

……確かに無茶苦茶が起きているからな。特に二つめ、不治の病を治すなんて規格外をされたら、大抵信じられそうな気がするな。なんだこの謎の説得力は。菜摘に押されて、オレは腹を括る。

「……分かった、言う。だがその前に二つ言わせてくれ。まず一つ。これからオレが言うことは全て事実だ。嘘は一つも言わない。まずそこを念頭に置いてほしい」

「分かりました」

「二つ、最低でもテストタロツサの家族には絶対言うな」

「え、どうしてつすか？」

「人間の蘇生を目指した人間が転生なんてワードを耳にすれば、アリスア関連で今度こそなににするか分かったもんじやないからな。余計な知恵を入れたくない」

「……ああなるほどつすね」

「待って。転生、と言いましたよね？ 今のはどういう——」

「オレと菜摘、そしてあの自称紳士は、一度死んだ人間だ」

「……………え？」

この世界のリンディ提督も、それなり以上の現場を見てきたし、事

件にも遭遇していただろう。だが、生まれ変わった人間なんて間違はなく出会ったこと無いはずだ。当然、眼を丸くするに決まっている。

「オレのコードネームは刹那・F・セイエイ。ソレスタルビーイングの、ガンダムマイスターだ」

「あんちゃん、ノリで話がずれてるつすよ」

「ああすまん。言ってみただけだ。今のはなんでもない。で、オレたちのデバイスは、転生の前に神様から受け取ったデバイスだ。神様お手製だから、性能がぶっ飛んでるって訳だったが、やっぱり内部構造もとんでもないらしい」

「……………」

「まあそうなるな。普通の反応だ。だが事実だ」

「もしかして、信じられてないっすかね?」

「普通の神経していれば無理だろ」

むしろ笑い飛ばされないだけマシだ。リンディは困惑に頭を抱えるが、これまでの状況を整理させるように低く唸る。

「……………にわかには信じがたい、と言いたいところですが、少しだけ納得もしています」

「……はあ?」

「或いは未来人とも想定していましたが、まさか転生した人間というのは視野に入っていませんでしたね……………」

「待て。なにを言っているんだ」

「いえ、どちらにしても、聞かなくてはいけませんね。これを」

テーブルに出されたのは、緑のランプのような形状をした、縮小されたパラレルハーツだった。さつきから話したいことがいまいち分からんが、受け取っていいのか?」

「そのデバイスの解析をしている際に、簡易的な【闇の書の意志】なるもののデータが入っていました。なにか知っていることがあれば、全て話して下さい」

「闇の書の意志……………? ああ、そういえば検索欄の中にいた名前だったな」

あの機能はかなり便利なんだよな。シリーズをそんなに知らなく

ても、デバイスが随時更新しているおかげで今日を基準に半年前と半年後の人物を呼び出せるのは強みなんだよな。でも、闇の書の意志というのは、確かシグナムと同じくらいの時期にいた名前だったな……ある意味では聞いている名前ではあるが、まったく知らない名前だ。

「生憎だが、そのデバイスに載っているデータというだけで、そのことはなにも知らない」

「そうですか……」

「そうだ、念のためオレからも一つ聞きたい。少し見てくれ」

パラレルハーツを展開し、検索欄を開く。その中に一つ「EX.」という未だに分からない項目を押して、ページを開く。

そのデータの中に映っているのは、二人の魔導師。その魔導師に関しては、検索人物とは扱いがまるで違う、細かなデータが記されている。どちらも囑託魔導師。どちらも9歳の少女。

——片や緑のツインテールをした少女。名前は高敷たかしきこのは。魔導師ランクはA-。レアスキル「魔力回復」を有し、魔力の回復速度は常軌を逸つしている。おまけに、魔法の使用中まで魔力を回復し、魔力回復は常時継続というチートっぷりだ。また「魔力の流れを読む」ことに長けており、一つの魔法に割く最適な魔力量を無意識下で判断できる為、全能力を機能させればなには並ぶ能力を有している。治癒魔法が得意ということもあり、「後方支援寄りの万能型魔導師」という。所持しているデバイスは、リーフオブワールドツリー。

——片やアイスブルーのボブの少女。名前はシルヴァ・アーデ。魔導師ランクはAA+。凍結の魔力変換資質を持ち、これを利用して傷口を凍結させる「治せない傷」を与える特殊な戦闘方法を持っている。その強大な魔力量で形成する氷の刃は強力な破壊力を持つ。それらに頼らずとも過去の実践訓練の豊富さから、戦闘においての立ち回りが頭の回転も特筆し、俊敏性においてはフェイトとほぼ同格とされているという。所持しているデバイスは、ラグナロク。

どちらも異様なことに、最初から登録されていたものだった。機能の大部分も破損し、日付更新しているにも関わらず、消えることなく常にデータ内に存在している。おまけに、破損前と後で影響を受けて

いない部分だ。停留時間も存在しない。つまり、一度呼べばずっとここに居座れる。あまりに不可思議な存在だった。

「どちらもそつちに関係のある人間みたいだが、知っているか？」

「いえ、聞かない名前ですね」

「でもあんちゃん、どうしてこの二人を呼ばなかったんすか？」

「……………高敷このは。どう聞いてもなのはと名前が似ているだろう？ あの当時の心境で言えば、呼べば確実に敵になると思ったからだよ」

「まあ、確かに管理局に付きそうではあるつすね…………」

「なら丁度良い。呼んでみるか？」

……………なんで驚かれているんだ？ 少なくとも、オレがもう管理局自体に疎む理由はない。まあ、局員やら大多数の人間には望まれていないだろうがな。

だが、オレはやり方を間違えてしまったんだ。一度なのはを泣かせてしまったって言うなら、オレはオレのやり方で償うんだ。良い機会だ。

「リンディ艦長、一つ頼んでも？」

「今からそつちの人員を増やします。だからオレも管理局員にしてほしい」

「あなたを、ですか？」

「敢えてもう一度言うが、オレは世界を滅ぼそうなんて気はさらさら無かった。ただ…………」

「良いです。言いたいことは分かっています。あなたはあなたで、償いをしたいのですね？」

「……………はい」

「あんちゃん…………」

「分かりました。手続きをします」

だが自称紳士だけは本気で嫌いだがな。あれとはかなり話したくない。

オレは、項目に書いてある座標をじっくり見ながら、詠唱する。

「その前に、眼に見える証拠を見せてからにしよう。検索座標、A―

LK。対象名：高敷このは及び、シルヴァ・アーデー！」

ごうつと、執務室内が今まで発光する。

呼び出しの回数自体そう多くないが、これまでと反応が違い過ぎる。純粋な召還のように、光が溢れだす。この二人はリリカルなのは人間じゃないのかと少し馬鹿を考えたが、現に二つの名がそこにあったし、オレだってなのはシリーズの全てを知っている訳じゃない。もしかしたら、派生作品かなにかの人物かもしれない。それ以上のことを、オレに推理しようがない。

その星の海から上がったように、二人の姿は光の粒に包まれながら現れる。

そして、眠りから覚めたように、このは、シルヴァの順番で眼を開ける。

「…あれ、どうしてアースラに……？ ……シルヴァちゃん？」

「……どうしてこのはがアースラに？ このはは家にいるはずじゃ

……」

これは行幸だ。よもや吾<sup>われ</sup>が、また地に脚を付けようになるとは……虚数空間の中を死すことも出来ず、思索を絶えていたが……時の運が吾に媚びたか。原因は知らぬが、次元が大きく揺れたことで、どこも知れぬ世界に不時着するとは。実に重畳だ。

しかし、今の吾には便宜上の肉体は無い。本体はあれど、その姿を映すほどの力はない。一時期で良い、吾の魔力を蓄積させるための器を探さねばならん。吾にふさわしい器は……

『……………』

この運命、吾のものだ。そこに横たわるのは、生命維持機能のカプセルのようだ。装置の大半が機能を失っているもの、予備の機能からか装置が働いていた形跡がある。しかし、その予備機能も失って随分経っている。中で物言わぬ姿の低い魔導師はやつれている。

だが、丁度良い。酷く衰弱しているが、まだ生命活動をしている。



肉体も若い。吾が器としては実にこの上ない。

【生きているな？ 生きているなら吾の声に答えよ。吾なら貴様の願いを叶えることが出来るぞ】

【……………っ、い】

【聞こえぬな】

【わた……………し、生きたい。い、ろんなひ、とと……………話、を、した……………い……………】

利は一致した。吾も蟲も、生存を旨としている。実にこの上無い。どれ、一押しとしよう。

【ならば吾と契約せよ。貴様の名前と血を取り込めば、その願いを叶えよう。貴様の名前は？】

【……………アリシア、テスタロッサ】

【重畳。血は……………準備の良い】

ひび割れていたカプセルのガラス片によって、蟲の頬肉が薄く切られている。一から爪先まで、用意の良い。神というものがいるとしたら、実に粹だと褒めてやろう。

少ない魔力を使い、吾は頬肉の血を拭うよう触れる。

——そして、夜闇の中を閃光する。これで契約完了だ。これでこの肉体は、吾のものだ。宿主自身が心身とも衰弱していたのだ、取り込みもそう難しくない。夜風を浴びるべき、閉じ込めたカプセルの内から、既に脆いガラスを叩き割る。

……………久方ぶりに得た肉体。衰弱していることもあってか、身体が上手く動かない。それに随分冷えている。これでは肉体が疲労してしまう。吾は、バリアジャケットを纏いこの風を凌ぐ。

「魔力資質の低い魔導師のようだが、贅沢は言うまい。仮宿として及第と飲み込むことにしよう」

……………しかし、この世界はなんだ？ 吾の知らない世界に違いないが、技術や文明が見知ったもの比類すれば、脆弱極まりない。よもや、魔法が普及していないのか？

まあ良い。なんにしても、吾の知るところでは無いし、興味も無い。魔法の発達していない世界、か。なるほど。破壊し尽くすにはここ

は面白いかもしれない。蟲共が為す術なく、阿鼻と叫喚に狂う様を見るのも、一興であろう。

「……さて、今暫しは魔力の供給に専念するでしょう。なに、祝宴の用意に手間と時間をかけるのも、主催者としての義務だからな」  
楽しみだ。久方ぶりの降りたつた世界だ。精々、吾を楽しませるがいい。

小生は、所謂神頼みというものが嫌いな性質じゃ。

真偽の一切も、結果の全ても、他力に委ねたような行為が、小生には疎ましかった。例えば放られた硬貨の表裏を行方を願うなら、まだ理解出来る範疇ではある。じゃが、神頼みというのは端だけ言っしまえば、自身を信じられない人間や、諦めた人間をさすものになってしまう。「神のみぞ知る」などという言葉があるが、あれこそ他力本願の最とも言えよう。悪意を持って言えば、悪しき結果と向き合う口実に、神を連れようとしているのじゃからな。傍迷惑な妄言じゃな。

じゃから小生は、諦めない人間というものをこよなく愛する。神を信仰する人間と同様に、その人間を愛している。人はただ荒れ狂う獣でも、弄ばれるだけの木偶でも無い。選択し、実行し、結果に笑い、結果に泣く生き物だ。

じゃからこそ、綺麗事と知りつつも実現させようと努力する八高輪は、特に見えていて痛快じゃ。不純であろうと、一念を貫けば純粹に違いない。時折様子を見てみるが、あの男ほど愚かで不純で、然れど愚直で純粹な人間も少し珍しい。まさか、敵まで救おうとするとは思わなんだ。プレシア・テスタロッサを家で介抱するところを思い出して、くくつと笑った。

「さて、ここからは小生にも知らぬ物語じゃぞ。貴台たちが紡ぎ、貴台たちで導くがいい」

元来存在しない魔導師どころか、存在してはいけないものまで現れたのだ。この先は小生にも想像出来ぬ。世界が滅ぼうが存続しよう

が、実のところ小生は然程どうでもいいとさえ思っている。

どうして？ 奇を聞くものじゃな。神が世界を導くのでは無い、人間が世界を彩るのじゃ。世界は常に予想も付かない、見えない力で動いているのだ。だから偶然も奇跡もある。完全な予定調和などありはしない。そうじゃろう？

「——第二幕じゃ。貴台たちの望む世界、小生に余さず見せてみよ」人の人生とは物語であり、一冊の本に他ならない。じゃからこそ、物語同士が引き合うのも、また一つの偶然に他ならない。ましてや、関連性の持たぬはずだった物語が引き合うというのは、最早奇跡の範疇と呼べるやもしれぬ。

その本来繋がらない物語が向かい合えばどうなるか——これは興味深い。

今宵も世界は、実に必然と偶然で回っておる。

## A's編

筋トレマニアからしたら、筋トレはもうトレーニングという認識が薄くなつてて、皿洗いのような習慣の一部として染まっている

「あ、訓練お疲れクロノ」

「エイミー」

「おつかしいなあ。八高君も結構腕を上げてきてるんだけどなあ」

「簡単に勝ちを譲る気は無いよ」

「流石師匠」

「うるさい」

アースラの食堂内にて、スポーツドリンクを受け取ったクロノ執務官は、くいつと一度口に運ぶ。特になにかを注文するでもなく、二人はテーブルに背を預けながら、ふうつと同時に息を吐く。幸いか、現状ここには人はいないから、静かな休息とするには十分な環境になっていた。

「……八高輪がアースラで特訓したいと言って、もう三ヶ月か。意外と続くものだな」

「そうだよな。最初はリハビリ半分だったけど、今じゃすっかり訓練になってるし」

「管理局職員にならないって言ってた割に、訓練には意欲的……本当に滅茶苦茶だよ、あの男は」

「でも「なのはちゃんたちの足手纏いになりたくない」という理由なんだよね？ 格好良いと思うなあ」

「推定Aランク魔導師がよく言うとは思うよ」

「え、八高君ってBランクじゃないの？」

「あくまで条件が揃った場合での推定ランク、だけどね。勿論、リンカー・イグナイト未使用の平常時の話だ」

クロノ執務官はスポーツドリノクを一度含んでから、あつさり口にする。更に言えば、これまでの八高輪のデータを見た限りでは、魔力量を計測された最大値がAA+とは断定されている。それも以前のものはと放った超砲撃魔法を撃った際のデータから割り出したものなのだから、瞬間的な魔力量で言えば最大値は間違いないとされている。Aランクと推定で割り出されたのも、近しい魔導師の魔力量との単純比較の為、参考するにも難しい話ではあるが。

最大値が断定されているにも関わらず、なぜ平常時が推定されないのか。エイミイは首を傾げた。

「条件って?」

「彼は戦闘時に心がけていることが多い。最善より最悪を免れる選択をする戦法、基本的に相手を揺さぶる。つまり、相手の能力を落とさせた上で勝とうとするスタイルだ。はつきり言つて、コンデイションよりテンションに能力を左右されるタイプだ。あれじゃムラが酷いっいたら無い」

「確かに、正治君との訓練の時は容赦ないもんね。……そっか、だから庭園での傀儡兵もたくさん破壊出来たんだ」

「そういうこと。あれだけ真剣になればという前提のAランクだからな。しかし、一概に彼がそう言えないのは、不安要素が多いのも事実だからね」

「……………ああ、それはちよつと分かるかも」

思い当たることは少なからずあるエイミイは、「ははは」と苦笑う。

これまでの八高の行動を軽く鑑みても、命令無視、独断先行、無許可の施設利用……は許容されているが、前者二つに関しては一番多い行動ある。とはいえ、無理をしているにも関わらず周辺被害が少なく、当人一人だけがボロボロというある種最善の結果を出していることが、更に頭を悩ませている部分でもある。

「あ、分かった。つまり、腕事態は確かなのに、マイナス部分で差し引かれていると?」

「そういうことだ。で、この魔導師ランクの件だが……」

「大丈夫、内緒しているよ。でも内緒してていいの？」

「言う意味が無いという艦長の指示だからね。あくまでAランク推定は、イグナイト未使用時での遠慮していない時のものだ。普段遠慮している相手に言ったところで、どうせやり口は変えないさ。……彼は確かになのはと比べて才能はそう無い。だが、将来性の話をすれば引けを取ることもないさ。だからこそ、天狗になって胡坐かかれてはぼくが困る」

「……そっかあ、今分かった。八高君ってクロノと境遇が近いんだよね。師匠は大変だね」

「冗談は止してくれ。ぼくはもつと、飲み込み良くて話も聞ける弟子を持ちたいよ。そうだな、フェイトの方が遥かにマシだ。彼はすぐに応用に走りたがる難がある」

「フェイトちゃんは飲み込み良すぎるからねえ。確かに教え甲斐はあると思うけど……弟子二人というのは大変だね、クロノは」

「……もう好きに呼んでくれ」

クロノ執務官自身、執務の合間を縫って二人の稽古を付けているため、この三ヶ月以降は特に疲労が見て取れる。時折模擬戦と称した訓練を、正治と菜摘で八高とフェイトに行わせていることが助け舟となっているおかげで、クロノの負担も過度に重くならず済んでいる。

彼自身はむしろ、自分との訓練よりも正治との訓練の方に注目していた。面白いことに、八高は正治相手だと馬鹿みたいに本気を出すおかげで、こうしてランクも随分明確になっている。とはいえ、先に指摘された通り、彼のテンションやコンディションで左右される部分も大きいから、一概に確定も出来ない。時折、あのデバイスを自分が所持していたらもっと上手く扱えていただろうと考えるが、そのうちに、彼の性格を考えるとあのデバイスで良かったかもしれないと結論が付いている。あの所持者に冷静沈着なデバイスという噛み合わせが大きいからだ、クロノ執務官は考える。

「そうだ。八高君は？」

「フェイトに差し入れをして帰るそうだ。店の手伝いだろう」

「へええ、元気だねえ」

「馬鹿だからだろう……しかし、一つ気になるな」

「なにが？」

「エイミィ、ぼくと八高輪の近接戦闘の訓練を見ていて、なにか気付いたかい？」

「うーん……ちよつと気になったことだけど、彼防御が上手いよね」

「そうだ。実際、攻撃の組み立ても上手くなっているが、防御の反応速度が最早反射だ」

直接戦闘に立ち会ったクロノ執務官だからこそ、あの反射速度に驚いていた。

なにせ、腕を振った時点で攻撃する方向が読まれていたのだ。近接戦闘での斬り合いという一点で戦えば、クロノ執務官も——いや、一撃離脱を主にするフェイトも、危ぶまれる反応速度だった。

………思えば、特訓を始めた時からそうだった。当初こそ読み違いのようなおかしなミスもあったが、最近はそれもあまり見かけなくなってきたことに、今更に首を傾げた。

「………一体、誰を想定している動きなんだか」

「おっすフェイト」

「あ、八高さん」

「そつちもお疲れ。 ……ん、それは？」

「差し入れ。シュークリームだがどうだ？」

「ありがとうございます」

「気前良いね輪は。じゃ、アタシもいただこうかな」

身体が鈍らないようにとフェイトとアルフは訓練していたというが、あれって鈍っていた内にカウントしていいのか？ ……うん、数えていいな。俺が見ている「勝てるかも」なんて思っている時点で多少は衰えているだろうし。

しかし、訓練後にこうして軽いデザートやらで小腹をしのご。

やってることはまるで学生の放課後らしくて、なんか楽しいな。艦内という特殊な状況を除けばの話だけど。流石桃子さんのシユークリームだ、フェイトの顔を綻ばせるどころか、アルフの獣耳もぴこぴこと揺れている。……すっつごい触りたい。

「あんたの訓練も見ていたけどさ、執務官相手に手加減してるでしよ？」

「ちよつと違う。色々試してた」

「馬鹿の発想だね」

「発明と言ってくれ」

「馬鹿の発明だね」

「違う、そうじゃない」

「そんなこと言わないよアルフ。でも、成果はあったって顔していませんね」

「あ、分かる？ いやー流石アルフのご主人様は理解があるなあ。ふあつふあつふあつふあー！」

「な、撫でられると恥ずかしい……です……」

……なんで俺ってこう、可愛いものには反射的に撫でてしまうんだ？ と思っただが、可愛いからか。それじゃ仕方無——くねえよゴrrrrルア！ もうちよい良い対応とかあるだろう!? シユークリームをあーんさせるとか……これもなんか違う！ やばい、アルフが睨みつけている！

「なあ輪……どっちの腕で殴られたいかい？」

「ひ…ひと思いに右で…やってくれえ……」

「オーケー分かったよ」

「くそう！ 承太郎より清々しい！」

「あ、アルフ！ 悪気は無いから殴らない！」

「で、でもね……ああもう分かった」

「た、助かった……ありがとうフェイト」

「簡単に殴れませんよ……だって、家族を繋いだ恩人ですから……」  
なんだこの可愛いハムスターは!? あ、フェイトか。なんだ良かった良かった。もうなにこれ!? 艦これ!? 違うねこれ！ 落ち着く





でもどうにも、なのはやフェイトたちとの接し方と、アタシやクロノたちとの接し方が微妙に違う気がするの、気のせい？」

「……一応気のせいじゃないぞ。俺、女性全般には紳士として向き合うつもりだから」

「分かりやすく言おうか？ あんたのフォルダは大きく分けて三つの応対があるんだ。男と女と小さい少女。違うかい？」

「……………」

「……まさか本当とはね。その年で恐れいったよ」

どこで気付いたんだ……？ それなりと誤魔化せたつもりだが……敢えて推理するなら、基本アルフはフェイトの傍にいる。別に俺がフェイトと話すのは前からのことでもあるから、些細な変化に気付いたとかか……？

真面目な線で推理しよう。かつてのフェイトの境遇を考えたら、味方はいかなかったからな。だからアルフは、フェイトを見る人間の気配や気配に鋭いのかもれない。

……なんにしても、俺の考えていることは想像だ。これ以上誤魔化したところで見苦しい。なるだけ震えそうな肩を抑えながら、返す。

「……それで、どうするんだ？」

「なにが？」

「俺は世間で言うところの、ろくでなしで犯罪予備軍に属するロリコンさ。フェイトを近寄せたくないなら、そうしたらいい……」

「り、輪……」

急に卑屈になったように見えてビックリするのも無理は無い。けど、俺は卑屈になったつもりは無い。一応言うと、客観的な意見を言っただけのことだ。ロリコンっていうのが世間でどう見られているのかは、既に経験済みだからな。

……だけだ。慣れ親しんだ知り合いがそうしていなくなる瞬間というのはやはり……気持ち悪い。自分に向けられる眼というのが怖くて、無機質な銀色を反射させる床ばかりを見ている。

「……………なにが、あったのさ？」

「ちよつとゴタゴタ、としか言えない。とにかく、アルフが今想像し

ているような人間が俺だ。 ……我がままをを聞けるなら、フェイトやなのは……いや、このことは誰にも言わないでくれ。ただ、誰にも俺を近付けさせないようにすれば、それでいいさ」

「……幻滅されたくないから？」

「……そりゃあな」

誰だつてそうだろう。嫌われたくない、当たり前の考えだ。言ってしまうと、なのはやフェイトのように、今は信頼しきっている幼女に嫌われるのは耐えられる気がしない。せめてさ、あいつらにとって俺は『八高さん』でいたいんだ。他に嫌われてもしんどいが、あの二人、いや、すずかやアリサ、高町家のみんなや俺を送り出した親にも顔を向けられなくなってしまう。

けど、この水際なら俺も耐えられる。とにかくあの男に関わるなど言われて、なのはとフェイトが遠ざかるのは、嫌われるよりも遥かにマシな流れだ。 ……うわっ、これは酷い我が俣だな。結局は俺となのはたちの関係自体は変わらない……

「なあ。輪はどうしてアタシたち……いや、フェイトを助けたんだい？」

「そりゃあ、俺は笑ってるフェイトが見たかったからだよ。誰が傷付いても、誰がいなくなっても、フェイトの顔は暗くなる。俺はそれが嫌だったただけだ」

「……そっか。なら、フェイトどころか、なのはを遠ざける理由は無いかな」

「………は？」

素で面白い声が出てしまった。ちよつと待て、話を砕き方を間違えてないよな？

「あんた自分で言ってるじゃないか。紳士だ、て。ただの下心でフェイトを本気で助けたり、なのはの為に本気で怒るなんて、ただの変態に出来ないよ」

「アルフ……」

「それに……まあ、下心が見える時もあるけど、ちゃんと律しているからね。あんたはあんたで頑張ってる。多分だけど、本当の紳士を目

指しているってことだろう?」

「ああ……」

「ならそれでいいじゃないか。あんたは発展途中の紳士。意識の高いロリコンだって名乗ればいいさ」

「んな堂々と名乗れるかつ!」

「それぞれ。輪、あんたはずっとそうしておくれな。そうして明るくて、飄軽と構えて、いつもみたいに軽い口で場を穏やかにしてくれれば。ロリコンって言っても、紳士なんだろう?」

「……………」

格好良いなあ……………あの時から俺は紳士として自分を磨いてきたけど……………これは一つの答えとして受け取って良いのか? やべ、泣きそうだと俺……………

「はぶえつくしつ!!」

「うわ、汚っ!」

「悪い悪い……………くそつ、なんだ今の勢いは。泣いてるって思われたら恥ずかしいじゃねえかよ……………ああもう、鼻水汚いなあ……………」

「…ハンカチはある?」

「紳士の必需品だから勿論」

アルフめ、分かってて聞いたな……………まあいいや、こうしてこれ以上言及しないのが、アルフの優しさだ。だが一つ勘違いしているようだが、今のくしゃみは完全に偶然だ。うわ、ベタベタする、きしよい。

「……………ありがとうな」

「ん、なにか言った?」

「いや別に。これからもよろしくな」

「分かってる。それにしても意外だね」

「? なにが?」

「話に聞いた限りだと、輪の家庭環境ってちよつと複雑そうに聞こえたけど……」

あ、しまった。確かに面倒なことにはなったけど、どれも転生前のことだ。今の人生とは関係無い。

でもそうか。よく考えたら、俺をロリコンと気付いたところで転生

者ということには気付かないよな。ロリコンから転生者に繋がるよな流れなんて普通思い浮かばないし。一応俺と菜摘とシスコンが転生者というのは特秘事項扱い(言っても信じてくれないという部分が大いだろうけど)だし、そこを話したら話したらでややこしくなるから止めておこう。

「ああ、それは……話すとき長いけど……解決はしている」

「え、そうなの?」

「かなり端的に言えば、割り切られた」

「……かなりぎつくりだね」

「こんな話聞いても面白くないだろうよ。こんなことより、例の平行世界のよう……二人はどんな?」

「うん、素性知ってからだとなに言おうとしたかは自然と分かったよ」

「今はそれは置いて! でだ、どんな感じ?」

「あ、ああ、あの二人ね……ってあれ、まだ会話してないの?」

「本当に挨拶だけ」

なんでそこでアルフがしどろもどろになるんだ? 俺変な質問してない、よな? ここに来て二週間だが、お互いに「ドーモ、はじめまして」的にニンジャめいたオジギをただけ。半分冗談めかしたけど、割とマジでそうしただけの間柄。だって俺の方に用事があったんだもん! 時間無かったんだよお! だからただの印象でしかないけど、このはは明るめなのは、シルヴァは少し翳ったフェイトっぽい、としか。ただの印象だからまた変わるだろうけど、とにかくこれだけは言える。二人とも可愛い。

「えつとさあ……二人はいないよね?」

「? ああ、いないな」

「ここだけの話、でもないけどさ……あの二人は……その……」

「ふたりは? ……プリキュア?」

「違うよっ! ていうかなにそれ!? ええつとだねえ……つまり」

歯切れ悪いな。そんなに言いづらいのか……? なら別に聞くことも……

「……………その、なに? ……百合ってやつらしい」  
「……………んえ?」

流石に予想していなかった答えに、これまた変わった声を溢して反応を返した。

世間はもうクリスマスの気配が見え始めた頃。12月を迎えたんだから当然と当然と言えよう。

……さて、こう言っているのか分からんが、今の俺はそこそ自由だ。身体のリハビリという名目で部活は一時離脱。なので、仮住まいしてる家の手伝いという大儀名分を口にして、翠屋の手伝いやら特訓やらに勤しみまくっている。ぶっちゃけ、学校関連の事項は放課後はサボりまくり☆ でも勉強はしている……つらい。

にしても、さっきのアルフとのやり取りのせいかなんとか身体が軽い。こんな気持ち初めて。もうなにも……止めよう。これ以上はフラグになりかねん。よく思い返したら、アルフとのやり取りそのものがフラグ臭するが、気にしないでおこう。あんまり引つ張っても精神衛生上宜しくない。今はそんなことより

「桃子さん、なのは……ごめん。俺は……行くよ」

そして、クリスマスツリーの最後の装飾を付ける。なんかクリスマスツリーに限らず、こういった作品作りの最後を飾るのが自分って、なんか感動しない? 1000ピースのパズルを作り終えたような感動が。1000ピースパズルしたことないけど。軽く眼を向けるが、店内もそれらしい装飾が施され、感慨もひとしおだ。

「お、おとお……ハロー、ゴージャス……」

「もう八高くん、感動しすぎだつて」

「いやあ、家で飾るツリーと店で飾るツリーを作るのって感覚違いますって。学校の掲示板で自分の絵張られたような感覚つすよ」

「いや、それは微妙に違うと思う」

なのはと桃子さんは買出しの為外出中。俺はこうして美由希さん

と店内装飾を楽しんでいる。といっても、飾りつけは俺だけがやっているけど。一応開店営業中だから、俺はカウンターの奥でこうしてツリー設置をし、美由希さんには店頭を見てもらっている。幸いというか、現状人がいない。ま、この時期だといろんなところに出かけたがる気持ちは分かるが、ここに来ないのはそれはそれで寂しかったり……

きりんきりん——涼しげなドアベルの音が響く。お客さんか。ツリーを作り終えた直後に来るとは、なんという幸先の良さか！ あたいたったら幸運だね！ ツリーを運ぶついでに挨拶でもしていくかね。

「いらっしやいませー」

「あ、どう……あつ、八高さん」

「お」

なんか意外な人物の姿が見えた。

それは以前に病院で顔を合わせたことのある、車椅子の少……幼女だった。ひとまずツリーを運ぶまで名前を思い出そうとするが、全然出て来ない。一応「や」の字が入っていたのは思い出せるが、一度しか聞いてない上にかなりうる覚えというヒントが極薄い状態。非常にデンジャー。……低い可能性として、車椅子に名札なり名前が書いてあるかを横目でこっそり探すが、当然ある訳なかった。あ、眼が合った。やだもう可愛い。なんかあのショートヘアーがツボなんですけど。頭撫で撫でしたいお。その後にはどれ、味も見ておこ——

—耐えろオラアアア!! 俺は紳士だろおお!?

……さて、いつまでも声をかけないのも紳士として失礼だな。ツリーを置いてから、一呼吸置いて、名前を呼んでみる。

「よ、よおあやね」

「わたしはやてやけど?」

「本当サーセンしたあああああ!」

……今まで自覚はしていなかったが、今気付いた。どうやら俺は、人の名前をすぐには覚えられないタチらしい。半年前にもアリサとすずかも間違えたくらいだし。でも、受けたメニューは憶えられるん

だけどなあ……タイミングが悪いだけと信じたいが……うん、そうに決まってる。

「ん？ この子八高くんの知り合い？」

「ええ、病院で知り合った子。まさか本当に来るとは思わなかったな」

「もう少し早く来たかったんやけど、今日が落ち着いていたから」  
「なるほど」

「随分仲が良いんだね。もしかして付き合いはそれなり？」

「いえ、一回逢ったきりです」

「……………」

感動しているとも取れるような、相当ビックリしているとも取れるような、美由希さんは口元を変な形に結ばせている。

……………冷静に考えたら、確かにおかしいかも。初対面でいきなり呼び捨てするようにしてたし。これで二度目の対面というのを思い出すと、確かに打ち解けているな。ま、ほとんどはやてのコミュ力あつてのものだけど。普通はこうはいかんって。

「にしても、前の時も気になったんだけど……………その、付き人つか、ヘルパーの人っていないのか？」

「ああ、さつきまでいたんやけど、食材の買い出しやて。……………も

う、シヤマルが変なこと言うから、緊張してきた……………」

「なんだ、緊張してたのか？」

「き、聞こえてたん!？」

「最後の方だけな。まあ今は幸い……………とも言いづらいが、客もいな  
いしゆっくりしていくといい。と、なにも出さない訳にはいかな」

「八高くん、一応ここ、喫茶店だからね？」

「分かっていますよ」

自分の財布を開けながら、レジに二百円を投入。釣り銭を手に入れ替えながら、はやてへと歩く。……………美由希さんも特に文句は無いらしく、ふっと笑って見ている。

「ドリンク一つ200円を注文、50円のお釣りですね。で、なに注文しましょうかね？ ちまみにウサギがいても非売品なのは仕様な」



「えつと……」

「気にしない気にしない、好きなのどうぞ」

「それじゃあ、オレンジで」

「かしこまり。ちよいとお待ちを」

で、約数十分後。まあ、前と同じただの雑談で過ごした訳なんだが、これがまたなかなか。……なんかお客さんも増えてきたから、雑談も出来なくなってきたが、まああくまでウェイターだから、仕事に実をいれねば。

「はやてちゃん、遅れてごめんなさいね」

と、ドアベルの音がまた増えた。と思ったら聞いた名前を呼ぶ声も一緒に入ったことに、ちよつと驚いた。

ぱつと見た印象、なんか冬の妖精かと言いたくなるような衣服を纏った、ややクリームよりの金髪の女性が店内に訪れた。表情といい、とつても穏やかな性格、という印象を強く受けた。

「いらつしやいませー」

「あら、もしかして貴方が八高君？」

「あ、はい」

「はやてちゃんから話は聞いています。私はシヤマルと言います」

「あ、八高輪つて言います」

ぺこつと軽く頭まで下げてくる。すつげえ礼儀正しいなこの人。そう言えばさつきははやてがちらつと言っていたな。

「……もしかして、はやてのお手伝いさんですか？」

「はい」

「ああ良かった。なんかずつと、はやて一人の姿しか見てなかったので心配だったんですけど……うん、大丈夫そうですね」

「ありがとうございますね。でも本当、はやてちゃんから聞いた通りですね。明るくて、話していて落ち着きますね。優しい人で良かったね、はやてちゃん」

「しや、シヤマル！ 今八高さん働いてるんやから！」

「あ、あははは、そだね……」

なんか変な緊張のせいで、かなり微妙な返事を返してしまった。  
もう少し突かれていたら受けた注文を忘れるところだったぞ！

直接攻撃は冗談であしらいにくいから苦手なんだぞ！ ましては相手はあらあらといいそうな大人の女性。俺絶対優位に立てないタイプだ。一度からかわれる材料与えたら、この人に勝てない自信あるぞ。

と思った矢先に、シャマルさんはふふつと笑っている。なんとなくすずかみみたいな印象だけど、こっちは穏やかな印象が強い。すずかは柔らかい印象。結論、どっちも良い。鈴の音を聞くか川のせせらぎを聞くかの違いみたいなものだ。比べるだけ愚考とういものよ。

「改めてありがとうございますね。はやてちゃんも行きましようか」

「せやね。八高さん、美由希さん、今日はありがとうございますう」「いやいや、いいってことよ」

「そうよ。こっちこそ、ありがとうございますね。今度機会があれば、なのはにも逢わせるてあげるからね」

「なのは？」

「前言ったこの店の主人の娘さんだよ。で、美由希さんの妹。今仕入れで出かけているからいないけど」

「ああ、そういうことなんですね。今度はその子も一緒に遊びましようかね、はやてちゃん」

「やね。それじゃあ、また」

はやては名残惜しそうに手を振りながら、シャマルさんに車椅子を押されていく。うむ、笑顔の幼女眼福眼福。注文したメニューを置いてから、俺も手を振り返す。

「ふふっ」

「？ どうしましたか？」

「ウェイターさんって、ああいう子が好みなんですか？」

「あっ..」

「まあ可愛い子だからね。でも、なのちゃんにも優しくしないでだよ。」

「ちよつとおおおおおおおおおおつっつ!!?」

意外ツ！ それは客の野次ツ！ おまけに、ここにいないのはにまで飛び火するという流れに謎の動揺を隠せない。なんなのだからこれは!?! 一体どうすればいいのだ!?! ていいうかなんで美由希さんがこつち睨んでるの!?!

……真面目な話になるけどさ、今のなのははそれなりに立ち直っているけど、クロノを振り切っているかと言われると、それも違う。まだなのはの中にクロノがいるんだ。仮の話だと前提として、俺が詰め寄って恋仲になる可能性があるとしても、俺はいまの状態でそうなるのは心からごめんだ。俺寝取りって死ぬほど嫌いだし。少なくとも、なのはと交際しろって言われたら、最低でも一年は待つぞ。こういうのは、なのはが解消してから。もう一度言うが、これは仮の話という前提な？

——そもそもだが、勘違いされる前に言おう。確かに俺はなのはが好きだ。だけど、あくまで大変可愛い幼女であり、妹のような大親友であり、幼子だが相棒とかそういう意味合いな。いわゆる『Like』な感情。これは誓って本当。でも一緒に風呂に入りたやかましいわああ！

「ただいまー」

「戻ったわよー」

「あ、噂をしたらだね」

「やめたげてよおー!」

「?」

「あ、ああ二人とも遅かったつすねえ！ とりあえず裏で休んでき  
て下さいよ！ さあ！ さあ！ さあ！ さあ！」

こつちがえらい恥ずかしくなってきたから、勢いゴリ押しさせてなのはと桃子さんの二人を厨房に押し込む。……参ったな、色恋の話で動揺っておまあ………生娘かよ俺は（男だけだ）。

さて、管理局のお手伝いも大事だが、俺にはこつちも大事だからな。今日も今日で、賑やかな一日を過ごそう。なに、日付が変わるのは四時間後だ。まだ時間はある。たっぷり楽しむかね。

町の賑やかさに包まれながら、はやては車椅子を押すシャマルと数十分の他愛の無いことを、ただ語った。やはりいつもと違った刺激を得たせいか、はやての表情が風船をねだる子どものように無邪気に揺れていた。シャマルにとってその笑顔は、家で見るとは少し意味合いが違ったものに映り、盛大な歓喜と、ひとつまみほどの嫉妬を感じながらも、柔和な笑顔で頷く。

はやての話で聞いた限りのシャマルが八高に抱いていた印象は——おどけていて表情も明るく、きつと気遣いの出来る人だろうとは予想していた。見ず知らずの人間と数分足らずで談笑するというのは本来難しいことなのに、彼はテレビゲームをきっかけに仲良くなれた。それだけで、人柄に関しては悪い印象は無かったけど、実際逢ってシャマルは確信した。なるほど、ちよつと年上だから、それなりに余裕があつたのだと。それを抜きにしても、一度しか逢っていない人間にはやてが心を許すのも珍しいと思つたけど、彼のような人間ならと、納得もしていた。

八高輪は、間違いなく優しい部類の人間だ。現に、シャマル本人に挨拶をしたあと、はやての心配をしていた。互いに気を使わずに会話もしていたから、彼がはやての良い男友達になればなあ、とシャマル少し乙女心を含ませながら考えた。

「あ、シグナム」

「主はやて。この場所まで来るのは珍しいですね」

ロングコートを羽織い、馬の尾を揺らした女性は——シグナムは、凜然とした表情を軽く崩した。言葉の通り、家からやや離れたこの場所をはやてが通ることは珍しかった。

「ほら、例の男の子に会いにですよね？」

「あ、当たってるけど違うよ！ シャマルは変な意味で言うー！」

「ですが、楽しかったように見えますね」

「それが紳士的な男の子なのよ。はやてちゃんよりちよつと年上だ

けど、気取った部分も無いから、話しやすいと思うよ」

「ほう、紳士的、ですか。それは興味深い。是非会ってみたいものですね」

「……内緒にすれば良かった」

「失礼を。……しかしシヤマル」

それとは別件を伝えるように、シグナムは軽く眼を細める。敵意めいたものではなく、あくまで友人に呆れながら諭すような、あくまでやや調子の外れた表情を向ける。

「……件の少年に興味を持つのは構わないが、この荷物を持ってくれないと困る」

「……ですね」

両手の買い物袋を携えたシグナムの手から、シヤマルは一つの袋を受け取る。気の合う友人通しのやり取りのような軽い会話。見慣れた光景にしても、こんな光景にクスツとしてしまう。

「確か喫茶店と伺っていますが、食事は？」

「ううん、ええんよ。予定通りつくらな、お腹を空かせたヴィータが拗ねるからね」

「……確かに」

「否定出来ませんね」

なによりも、家主の振る舞う食事を一番楽しみにし、一番楽しむのが彼女だ。少なくとも、この場の三人は駄々を捏ねる姿を容易に想像出来る。……最初にふつと笑ったのは、シグナムだった。彼女の變化に嬉しいと思う一方で、やはり主頭に上がらないのは自分も一緒かという再認によるものだが、その旨をシヤマルとはやてが知る由も無かった。

「帰りしようか」

「うん！」

「主、件の少年の話ですが」

「ああもう！ シグナムまでそう言うー！」

シグナムとシヤマルはそれぞれの空いた手で車椅子を押しながら、羞恥と微かな怒りに染まるはやての表情を楽しみながら、家路を直指

す。

「ザフィーラ、なにかおかしくないか？」

「……ああ」

人の気配の知れない建造物の頂上から、赤い衣服をまとった少女と、青く染まった狼が交し合う。

これまでも、彼女たちは相当量の修羅場をくぐってる。例えば程度相応の魔導師なら屠ることも出来るし、相応以上の異形が出ようと、自分たちの力を駆使すれば対処は出来る。傲慢でもなく、積み上げられた結果による実力という自負がそう思わせている。

だが、この最近のこの町はおかしい。二人に限らず、他の仲間も感じている。恐らく気のせいじゃない。

「……なにかがいるな」

異物の正体は分からない。しかし、戦場を歩き来してきた彼らの第六感が、察知していた。形容や比喻が難しい——敢えて例えるなら、首筋に百足が伝ったような嫌悪感やおぞましき。かといって、今にも爆発が起きそうな落ち着かない感覚まである。魔法という存在が乏しいはずの世界で、彼女たちは違和感に苛まれていた。

「ヴィータ。なにかは分からないが、急いだ方が良い」

「……分かってる。余計な横合いが入る前に、終わらせないとだな」

ちつと舌を打ってから、赤い少女と狼は場を後にする。

——12月。人々が奇跡と彩りに包まれる中、静かに、重く、事態は緩やかに崩れていこうとしていた。

ノックや玄関を開け方で我が子の友達の印象が左右される

ええっと、状況を確認してみよう。

私は、高敷このは。ちよつと運が良い9歳の魔法少女。で、私の永遠のファイアンセの名前は、シルヴァ・アーデちゃん。同じく9歳。ボブヘアが愛らしい、私の、最高の花嫁<sup>ファイアンセ</sup>。大事なことなので2回言つたけど、問題無いよね？ ちなみにシルヴァちゃんとの関係は恋人以上一心同体以下ですがなにか？ シルヴァちゃんとパイルダーオンしたい。今すぐしたい。シルヴァちゃんなう。

とまあ無理矢理に落ち着こうとしてみたけど、やはり慣れない部分があるのも事実だ。私もシルヴァちゃんも、それなりに場数は踏んでいると思っっているし、それなりに適応力もあると自負しているつもりでもある。

が、この状況はあまりに難しい。慣れたと言えば慣れたではあるけど、慣れていいのか首を傾げてしまう。私がこう悩んでいる傍で、シルヴァちゃんはまだ戸惑いは払えていない様子だった。ある意味で私より管理局に慣れているはずなのに、預けられた猫のように落ち着きがない。うん、可愛い。どうする？ とりあえず添い寝する？

—— 私たちがこの世界に呼び出されて二週間と少し、厳密には17日。どうやら話を聞いている限りだと、ここは私たちの知る世界とは少し違った平行世界<sup>パラレルワールド</sup>、らしい。平行世界に来てしまったというだけで事件なのに、加えてここは過去の世界。私たちの見知った人たちは、艦長を除いて誰もが幼さを見せている。いくらなんでも、平行世界で違う時間軸に飛ばされるなんて夢にも思わないような珍事に遭遇すれば、困惑するに決まってる。誰だってそーする、私もそーする。

で、どうしても未だに眼を疑ってしまうのが、この光景。

「フェイト、バルディッシュの調整結果だけ……そろそろ新しいデバイスに切り替えた方が良いわね」

「か、かあさん。でもバルディッシュは長く使っていたからそんなにすぐに……」

「……すっかり愛着が湧いているようね。良いわ、それなら好きにしないさい。厳しい言い方をしたけど、言うほど状態は悪くないしそれでも充分に使えるからね。ただし、機能に不具合があったらすぐ見せなさい。少なからず、貴方がジュエルシードを集めていた当時は微調整を怠っていたから、綻びがあっても不思議無いわ。いいわね？」

「……うん」

「二応、フェイトの為に新しいデバイスを用意しているわ。データを随時更新させるつもりだから、訓練後は毎回見せてもらえる？」

「っ、ありがとう、かあさん！　じゃ、今でも良い？」

「構わないわ」

死んだと聞かされていたはずの、フェイトさんのお母さんが、そこにいる。親子の会話を聞いているようには思えないけど、その人は間違いなくフェイトさんから母さんと呼ばれている。……なんでも、身体を蝕んでいた不治の病まで治っているとか。治らないから不治の病というのに、もうおかしい。ともあれ、すっかり技術者として生きてきているのは、管理局にとっては大きな収穫なのは間違いないと断言出来る。

しかし、フェイトさんが笑顔でいるのは純粹に嬉しい。それはシルヴァちゃんも思うところで、私たちは互いに笑う。笑いは見知ったものに似ているけど、翳りというよりは素直に落ち着いた感じの笑みなのが、このフェイトさんを表していた。幸せそうだなによりだ。本人により、現在は技術者として働いているとか。いやでも、この人凄い魔導師って聞くから、この人が味方に着くだけで安心感が凄いつたらない。余談だけど、一度薄く笑うプレシアさんを見たことがあるけど、どことなくフェイトさんによく似ている。こういう何気ない部分为重なると、やっぱり親子だなあって関心してしまう。

「貴方は確か……このはね。……ここでの暮らしはどう？」



不意に視線が合わさったことで声をかけられてしまった。うわっ、怖っ！ 一応普通に声をかけただけなのは分かるけど、リンデイさんとはまるで逆ベクトルでの落ち着きが、高圧的に感じた。

実際この世界で私の家はなぜか無いし……暮らして困っていたことも本当のことだったけど、まさかプレシアさんに心配されるとは。大袈裟にしても、殺されたくないから素直に答えよう。

「あ、はい。なんとか」

「そっちの……そう、シルヴァね。不慣れがあると思うけど、困ったらリンデイに声をかけなさい。力になってくれるわ」

「は、はい」

「ワールドドリーフとラグナロクも、そう構えることも無いわ。寛いでいきなさい」

『Thank You』  
ありがとうございます

『Sorry to trouble you』  
恐縮な言葉です

「ラグナロクは少し固いわね。もう少し気楽にしてもいいのよ？」

『I see』  
分かりました

「……二人は良い出会いをしたようね」

プレシアさんが指した二人が、単に私とシルヴァちゃんを表現したように聞こえた。というより、実際そういう意味だと感じた。視線を私たちだけじゃなく、手元のデバイスにも向けられていることが、「姉妹機のデバイスとしても」という意味合いが含まれている。

「良ければ二人に……いえなんでも無いわ。フェイトをよろしく」

それだけを口にしてから、プレシアさんはフェイトさんからバルデイツシュを受け取り、先に私たちを横切った。よく思い返したら、ごく自然にリンデイと呼び捨てていたけど、この人以外だったら絶対許されにくいと思う。艦長自身も、プレシアさんと呼ぶときのニュアンスが友達を呼ぶような、局員を呼ぶのとは違う声音でプレシアさんと呼んでいる。ある意味で、高いレベルで信頼しているのかもしれない。

……やっぱりね、話に聞いていたの人柄と違う状況を見てしまうと、実は夢じやなんだなって理解してしまう。頬を引つ張るまでも無い。ひよつとしたら、私より長くここにいるシルヴァちゃんの方が戸惑いは大きいだろう。実際プレシアさんと話してみた印象が、「不器用だけど気さくな母親」なのだから。といつても、一応娘に構ってあげたり、私たちの「デバイス」にも声をかけたりと、聞いてほどの棘を感じないからかなり改心しているのがよく分かる。……フェイトをよろしく、ねえ。煙に巻いたつもりだと思うけど、プレシアさんの言いたいことは分かっていますよー？

「ええつと、フェイト、さん……………」

「フェイトでいいよ。同じ年なのに遠慮しなくても」

ああ、シルヴァちゃんが戸惑うのも分かる。私の中でもやっぱりフェイトさんは、12歳の管理執務官。執務官を目指す9歳の囑託魔導師、それがこのフェイトさんだった。なにかしつくり来ない。なにが恐ろしいって、このフェイトさんはノンケという……友情に熱い性格と言えば確かにそれが正解だけど……正直まだイコールしきれていない。……これもう、ノットイコールにしても違和感無いかも。名残りを上げるなら、ユーノさんとクロノさんの関係が深くない代わりに、私とのことはなぜか、眼を合わせただけなのに「ごめん、なんだか胃痛が…」と言ってしまふ始末。私のことをどう思っているのかを問い詰めたけれど、こっちのユーノさんには関係ない案件のせいで言及がしづらい。

さて、眼の前では当のフェイトさんまであたふたとしている。コイバナに耐性の無い反応のように右往左往されてしまった。なんか新鮮な反応でちよつとムラつと……おつと、クールに行こう。素数を数えるんだ。

「それでも、フェイトさんでお願いします…」

「……………うん、まあ、君がそこまでいうならそれで……………うーん、フェイトさん、かあ……………」

「フェイト、ちよつと来てくれるっすか？」

「ああ、菜摘。うん、今行く」

同年代の子にさん付けは微妙な心境らしく、フェイトさんは悩ましげに頭を掻いているところを、違う魔導師の子の後をついていく。うん、あの子も知らない。やっぱり、ここは私の知っているようで、自身が随分違う。

ちなみにさつき時間軸と表現したことにも理由はあるし、根拠だつてある。私の知る過去と微妙に違う事件がいくつか起きているからだった。

一つは、さつき見たプレシアさんの生存。もう一つは、その娘のフェイトさんとなのはさんの馴れ初めが随分違う。掻い摘めば、こつちのなのはさんは好きな人を無くしたことで喪失感が苛まれたという。これまで自分に手を伸ばしたなのはさん対して、フェイトさんから友達に行つたという経緯らしい。つまり、こつちと逆。その人のことは教えてくれないけど、少なくとも男の人らしい。まあ、人の愛の形はそれぞれなので。

——それともう一つ。八高輪さんという人。少なくとも、元の世界では聞いたことのない名前だった。ここの管理局での話を聞いている限りで、確実に出てくる名前なんだけど、これが妙な話。説明の頭に「変わってるけど」という単語が付いて来るけど、ここでのムードメーカーであり、信頼されている立ち位置にいる人がいる。言葉をほとんど交わすことなく、お互いに「ドーモ、はじめまして」的にニンジヤめいたオジギをしただけ。その時の印象だけで言えば、ノリの良い先輩。シルヴァちゃんも同じ意見。時々だけど、一緒に来るなのはさんやフェイトさんと話したり、クロノさんやアルフさんに気さくに話しかける姿を見る限り、アースラ内では珍しいタイプの性格をしている。なんとなくだけど、リアクションも大きい上に、小さくても分かりやすいという面白設定。意外と悩み相談とか聞ける人かもしれない。

クロノさんとの訓練の映像で見てみたけど、実力次第は正直微妙……とも言えるけどひどく丁寧だった。一撃与えるのにいくつもの思惑を敷き、状況によって動き全てを陽動にしている。単純な魔力量なら劣っている部類なのに、戦いの組み立て方が面白い。映像を見た

限り、まだ本気じゃない。あくまで訓練や腕試しと割り切つての構え方で臨んでいるのもあるけど、怪我をしているのか挙動の節々がぎこちない。結論、底が見えそうで意外と深い。でも、誰を想定して戦っているんだろう？ 明らかにクロノさんで試しているというようない動きが多い。言っちゃまずいけど、明らかに差のある相手に試そうとするというのは、アホな発想とも言えるけど——ひよつとしたら、格上と対峙した前提だからかもしれない。ある意味度胸が良いというかなんというか……

「このは、やつぱりこの時間軸って……」

「間違いなく、闇の書事件が起こる時期だね。そう、事件はひぐらしのなく頃に……嫌な事件、だったね」

「あれ、ひぐらしって夏じゃないの？」

「まあそうなんだけど……ううん、こつちの話」

これはこれで少し厄介なことに。タイムパラドクス論を考えると、私たちが未来のことを教えて良いのだろうか？ これからのことを言ったとしたら、ひよつとするとこの場にはやてさんやヴォルケンたちに大きな影響が出てくるのかもしれない。そうなったら、この世界はどう変化していくのか……

と難しく考えて1秒ほど。既におかしいことは起きている。既に本来いない人間というのが数人いる。それどころか、死んでいるはずの人間が生きている。加えて言えば、向こうから見ればイレギュラーである私たちがここにいる。これだけでも、この世界での都合が随分変化している。大袈裟に言えば、既に未来は変わっている。材料は既に揃っている。多少なり口を挟んでもいいはず。なにが起こつても、私たちが未来を変えれば良い。

「さて、どうしようかな……」

とは言ったもの、いまいち具体的な現状が決まらず、私とシルヴァちゃんは、同時に悩ましく溜め息を吐いた。うん、今日も私とシルヴァちゃんは絶好調である！

「ふいー、疲れたあ〜…」

12月を迎えて二日目だが忙しいわ。やっぱこの時期ってのはどのお店ってのは忙しくなるものらしい。夏休みの辺りと言い、イベント時期はやっぱりこうなるんだな。となると、ゴールデンウィークやらの祝祭日全ては覚悟した方がいいな。……一年の締めの日だって言うのに今更な発言だな。じゃあ来年の抱負って。それもちよつと早いな。どうすんだよ、なんなんだこの色々手遅れに早まったものは。言つてて意味分かんねーよ。……今年の反省、これだ。

今日は特訓は無し。そんな毎日行くとクロノ執務官に迷惑だし、俺だってそんな無尽蔵じゃないし。疲れてる時だってあるの。ていうか今週はクロノ執務官に激務をさせたくないから、今週は休みにしよう。今週は自主トレしよ。なのはがしているような、スフィアで空き缶なりをリフティングさせるあれをしよう。あれ苦手なんだよなあ………どうにも俺、二つのこと同時に出来ないタチだし……スフィア操作したら近接が微妙だし。言っておくけど、これでも改善された方であつて、鍛える前はもつと酷かつたぞ。スフィア操作に集中して動くことすら怪しかったから、随分進歩したと思つている。……ここまで言つたけど、俺はもう寝る。今日はもう時間も遅いし。

「……………んん？」

なんだ、この気持ち悪い感覚は………結界、か？　しかし、誰が………？　これは俺の知らない魔力だ。ひよつとしたら、

【八高さん、魔力反応が近づいて……！】

【慌てるなのは、魔力反応は一つだ。二人で行こう】

【……はい！】

【万一にここで戦闘になったら厄介過ぎるから、場所を変えよう】

【分かりました】

人が寝るところだつてのに……だが高町家を戦場にしたいのかあんたたちは！　そんなことは断じてやらせはせん！　やらせはせんぞおおおお！

まあ、多少は大袈裟に言ったが、戦闘というのは最悪の場合だが、間

違えば敵かもしれない。一応構えていた方が良さそうだな。

電気の消えきった高いビルの屋上。着込んでいても風は冷たいが、吹く風が小さいせいのおかげでそんなに気になることは無い。もつとも、冷たい風よりも存在感のあるのがこつちに来る訳だけど。

「魔力反応が一つ……来るぞ、なのは！」

「はい！」

強い魔力反応……待ち構えていると、きらりと一度、赤い反射光が煌めいた。空を見ろ！ あれはなんだ!? 鳥だ！ 飛行機だ！ いや、あれはス……

「攻撃魔法!？」

スーパーマンじゃないだどツ!? 確かに赤いではあるが、隕石の飛礫のような火球が、直線に飛来する。方向から言つて、狙いはなのか……! あれはやばいな……!

『誘導弾じゃぞー!』

「俺が防ぐ！ なのは、背中を頼む！」

「はいっ！」

なのはを庇う形で前に立ち、プロテクションを展開する。

戦術的にだ、こうして片方に意識させて後ろやら上から来るなんてことも充分に起こりうるんだ。俺は前方に意識し、なのはには後ろや横からの不意打ちに備える。背を向けあう形にして備えながら、辺りに気を張る。しかしこの魔法、強い……! 踏ん張っていた足が、ずつと数センチ退けられてしまう。

……やはり後ろか……! しかし、思ったより早い!

「……っ」

使い手は相当器用というか、手馴れているなど感じた。なにせ、こうして誘導弾一つで俺を足止めさせながら、なのはにまで一撃を与えようとしている。なのはの展開したシールドが防いだ音がしたが、まるで電車同時が衝突したような重々しい音が響いた。

「ぎゃあー！」

「うおお!?」

その重々しい一撃を受けきれず、勢いに飛ばされたのはの身体と一緒に、俺も吹き飛ぶ。目の端で捉えたあれは………槌か？<sup>ハンマー</sup> パツとしか見えなかったから持ち主の姿が良く見えなかったが、ゴルフクラブのような形状のものに、吹き飛ばされた事実<sup>ハ</sup>に気付いて、ぞつとした。おいおい、あのデバイスどれだけの性能してたんだよ………それとも、持ち主がとんでもないのか………なんにしても、強いぞ！  
………ちよつと待て、よくよく考えたらこの相手、いきなり殴りかかってきたよなっ!? なんて野郎だ！

「開け、アヴァロン・ブルー！」

「レイジングハート、力を！」

ともあれ、ビルから落下しているこの状況は凄くまずい。即座に変身を完了させ、幸い人のいない車道へと着地する。危ない危ない………ふうつと安心したのも一瞬、また真上から魔力反応が豪速する。下手に町に被害出ても後が面倒だ。左手でシールドを展開させながら、

「ぬおおらっしやあああああああああああ！」

火球を空へ殴り飛ばす。意外と面白い発想だったから試してみたかったけど、ようやく出来たぜ。クロノ執務官が相手だと中々出来なかったから、達成感が半端無い。しかも大成功と来たもんだ。これは使えるな。しかしまあ、多用はしたくないなこれ………

「………拳痛っ」

「八高さん、大丈夫ですか？」

「まだ大丈夫だよ。さて、拳でガンダムファイトもとい、リリカルファイトを申し込んだ奴には遠慮なく——」

するつもりだった。いや、本当にそうするつもりだった。男だったらそうしていた。

だが、眼の前に降り立った二つの影に、思考が止められてしまった。  
「………しないといけないじゃないか」

一人は赤い幼女。ゴルフクラブ、いや、やっぱりハンマーを握った幼女、鋭い眼光をこっちに向けている。わあなんてことだ、さっきの火球が来た方向を考えると、放った主はこの幼女のようにだ。………うむ、睨み付ける幼女か………そういう趣味は無いが、これはこれで

……おおつと眼を覚まそうか。

だが、その後が割りと本気でビックリした。——馬の尾を揺らした女性の騎士が、なのはと俺を交互に眼を配っている。忘れるものかよ……俺はお前を想定して訓練してたからな、シグナム。

「……………いやいやいやでもさ……ここでそりや無いんじゃないか？」

……………この少女との関係は分からないが、隣に並び立つたきり、二人してこつちを見ている以上、恐らく味方同士だ。ということはあれか。あの少女はシグナムレベルということか。仲間がいたらヤだなあと思っていたけど、本当にいたよ。……これ勝てるか？ 戦闘に移る前に、急いで耳栓と目隠し用のバンダナを巻く。一応で準備してて良かったあ……

「シグナム、探しているのはあの白い方だぞ。あつちの男はどうする？」

「無論、斬り払うまでだ。——と言いたいが、あのデバイスの形状に興味がある。ヴィータ、あの男を相手にさせてほしい。一度斬り結んでみたい」

「あれはどう見ても剣士とも騎士とも言えなさそうだが……まあ、あたしは白いのを相手にしてくる」

【なのは、向こう二人はなにか言っているか？】

【剣士の人が八高さんのところに来て、赤い女の子がわたしに来るみたいです】

【丁度良い。願ってもない流れだ】

少女と戦ったら頭痛で吐きそうだからな。かといって、シグナム相手ならある程度は武器は触れる。まあ、木刀で殴るだけが戦い方じゃないし、相手を完膚無きにするだけが勝利じゃない。なに、女性相手ならではの戦い方ってのを見せてやるさ。ぼこぼこにする気は無い。あくまで身体的なところではな。まあ、鋼の精神力を持っているだろうシグナムをぎゃふんと言わせるのは無理難題だろうけど、まあなんとかしよう。

——さて、特訓の成果を見てくれよ、心の師匠よ。これでも、あんと張り合うために近接は鍛えていたんだからな。



同性でもセクハラは成立するぞ！ 気を付けろお！

——来た！

なにかが、地を爆ぜさせた。耳栓越しだろうと、遠くでコンクリートがごしやあつと炸裂する音が聞こえた。その音を合図に、シグナムが飛び込んでくる。眼隠ししているにも関わらず、俺はその挙動に反応出来た。

目隠しと耳栓をしての戦闘訓練を重ねていくうちに、ある変化が生まれた。最初は感覚的にしか分からなかった魔導師の魔力の反応を感じていたが、曖昧ながらも、見えるようになってきた。これも自分の感覚的なものだけだ。そうだな、分かりやすいイメージとしては、真っ暗な部屋で浮かぶ松明。それが人によって色や揺らぎ方が違う。なのはの場合はやや柔らかな印象を持った、やや楕円なさくら色の炎。クロノ執務官は、突起の目立つサボテン状な青い光。で、シグナムは——剣のように鋭い紫の光。蠟燭の火のような揺らぎではなく、銀の板が反射したような鋭い光。

……ちよつとおかしくなった。今更だけど俺って、割と決闘主義な人間なようだ。アホな話、一方的な展開より、拮抗した状態より、不利な展開に燃えるタチらしい。思い返してみると、確かに俺って逆境ほど楽しんでるのかも。

「……なにっ!？」

だがそれとは別で嬉しくなった。恐らく以前と同じような速度で接近し、同じように振るった剣を受け止めたことが、自分の成長を強く実感した。

「……避けようともせずに、受け止めた、だと……」

「なんだ、あの男は……ただの雑魚じゃない……」

「理由は分からんが、決闘の相手なら俺がしてやる。なのはに用があるってなら、まず用件を言ってくれ。お前が話を通さないほど無礼な人間とは思っていないぞ、シグナム」

「私の名前まで……なるほど。只者じゃないようだ」

相手がなにを言っているのか分からないけど、初撃を受け止められ

たことで、シグナムは一度後ろに飛び退く。これで満足な結果なんて思うつもりはない。9割ハツタリだからな？ シグナムとの決闘なら受けたいが、どうにも赤い幼女がなのは狙っている。決闘より幼女の身の安全。優先事項を間違えちゃいけない。

……瞬間、横の方では、なのはとさっきの赤い幼女が飛び立ったようだ。なんか遙か上の方で魔力が爆発した反応を感じた限り、既に向こうは戦っている。

「っ！… なのは……！」

【何処を見ている。お前の相手は私だ】

【なんのつもりだ!? お前がなにも話さずに剣を抜くかよ！ お前との決闘は後で受けてやる！】

【済まないとは思っている。だが、私たちの事情も違ってきている。時間を稼がせてもらうぞ】

シグナムはわずかに語気を強めてから、剣を横に振るう。

ぐっ、防いだはずなのに力押しだけ身体を退けられたっ…………！

やっぱ強い……！ 声調にこそ焦りはかすかにあるが、言うほど冷静さは欠いていない。どうやら、予定が早まった、という事態が当てはまっているのかもしれない。俺は向こうの事情を知らないから、それ以上の推測はしようがないけど。だが、先にシグナムが言っていた「俺と闘ってみたい」という武人氣質な部分で助けられている。やろうと思えば、俺相手なんかすぐ倒せるはずなのにな。

【……だが実のところ、私の剣を怯みもせずを受け止められるのは久しくてな。お前と剣戟を交わすことを楽しみにしている】

【なるほど、言いたいことは分かった。だが、今俺はそういう気分じゃない。なのはのところに行かせて——】

【ならば、私を倒してから行くがいい】

【………今気付いたんだが、俺に合わせて話してるのな】

【目隠しに耳を栓をさしているのな】

【気前良いね。そりや有りがたい。……と言いたい】

——リンカー・イグナイト。こっちは決闘に付き合えるような心境じゃないんでね。試す試さないは二の次三の次とさせてもらおう。

果たして、シグナムが俺の変化にどんな反応をしているのか。目隠し越しじゃまるで分からんが、今は軽くどうでもいい。……あんまり言いたくないけど、なのはの危険に足止めされている自分と、見事に足止めしようとするシグナムに憤りを覚えてしまう。

だが、なるだけ冷静になろう。この大事なところで熱くなれば、出来ることも出来なくなる。深く息を整える代わりに、無理矢理笑ってみせる。

「こっちは急いでいるんだ。通せないなら、押し通らせてもらおうぞ」勘違いされる前に一つ言っておこう。俺は今はシグナムと戦わないからな？ 予定を変更させてからのなのはの救助が最優先だから、上手く撒かせてもらう。あわよくば、ぎゃふんと言わせたいものだ。

一体全体どうなってるの!? どうしてわたしと八高さんが!?

初めて顔を合わせた女の子に狙われる理由が見当たらない。恨みを買った覚えも全然無いのになんで!? だめ、全然頭が回らない。

「っらあああああああ!」

むしろ女の子は、理由も告げることもなく、気合を発しながら魔力弾を放つ。

それは例えば、テニスのサーブのフォーム。大きく振りかぶった小さな槌で、ソフトボールほどの鋼球を打つ。弾かれた鋼球は炎を纏いながら、重々しくも弾かれた水滴のように降る。

ここまでされて、なにもしない訳にもいかない。だけど、殴られたからという理由で殴り返したくもない。わたしは、

「……シュートー!」

一つの魔力弾に魔力を集中させて、女の子が放った鋼球にぶつけるように飛ばす。よし、なんとか相殺しきれて

「……え?」

いた。一つの鋼球なら防げたけど、相殺から生まれた爆煙によって、五つの赤を画いた軌道の速度に、反応が遅れてしまった。

けど、その手の騙まし討ちは八高さんやクロノさんとの特訓で慣れている。けど、それらとの特訓で決定的に違うものがある。——この一撃には、容赦も加減も少しも無い。

恐ろしさで少し詰まったけど、なんとか動いた左手で五つの軌道を受け止める。一目見るとその鋼球は小さいけど、なにか重いものが詰まっているみたいに、腕が押されていく。

「ぶっ潰れる——」

声を方向に眼を向けて、眼を疑った。

さつきまでは女の子相応（そもそも槌は女の子が持ち歩くものじゃないにしても）の大きさの槌が、がしゅうつという重い駆動音まるで巨大なハンマーに変形していた。駆動の時に、そのハンマーから薬莖が弾かれるのが眼に映った。あれは一体……？ 考える余裕も無くなり、その瞳と合わせたわたしは思わず凍り付いてしまった。

瞳から感じ取れたのは、明確な敵意。深い色が見えたのは、この子がただの悪意で動いてないことも理解出来てしまったからだだった。怖いを感じたと同時に、わたしは、以前にフェイトちゃんに感じた悲しきや寂しさを、この子からも感じた。

「ギガント——シユラアアアアアク！」

絡まった状態の頭で、反射的にプロテクションを展開出来たのが、日頃の成果かもしれない。だけど、これまで感じたことの無い圧の一撃が、わたしを簡単に吹き飛ばす。

時間が時間だったおかげで……ということでもないけど、人のいないビルへとされるままに飛ばされる。ガラス窓を破り、デスクを数個雪崩れのように散らしながら、壁に激突する。ようやく飛ばされた身体が動きを止めるけど、身体中が痛い……！ バリアジャケットのおかげで軽減されているけど、やっぱり怖いという感情が大きいせいで、全身が必要以上に痛い……！

「……………あっちの状況が変わった……？ まさか、あれの魔力量が上がったのか？」

……………眼の前に降り立った赤い女の子は、ある方向に眼を向ける。眉をピクツと上げるけど、すぐさま向き直り、わたしに一步ずつ、

静かに靴音を近づかせてくる。

今気がついた。ここにはわたしとこの子以外、誰もいない。いるのが当たり前になっていて気付かなかったけど、ここには八高さんはいない。かといって、ユーノ君もいないし、フェイトちゃんも……

「……それでもシグナムが負けるとは思えないけど、念のため急ぐか。……お前に恨みは無いが、あたしたちを悪いと思うなら、それでいい」

少し要領を得ない言い方だけど、これで確信した。女の子は……：ううん、さつきの剣の女性の人も、きつとなにか事情があつてこんなことをしている。だけど、その事情のせいでわたしがどうなるかなんて……：死にたく、ない……：だけど、身体が痛みで軋んでいる。上手く動かない。

誰か助けて——八高さん、ユーノ君、フェイトちゃん——クロノ君……！

「なのはから離れろ」

その声の直前、飛び退いた赤い少女は、バインドを回避した。

隣の扉から現れたその姿に、場の状況に関わらずに泣きそうになつてしまった。

「……ク、ロノ……君？」

「当たっているけど違うな。無事か、なのは」

「……うん、うん……！」

確かに、そのぶつきらぼうな話し方と顔付きはクロノさんのものだった。だけど、不意な願いが一瞬だけ叶ったことが嬉しくなつて、思わず目尻から溢してしまった。

「……少し休んでおくといい」

「まさか管理局か……仲間がいたのか」

「まあね。だけど」

「残念！ 一人じゃないっすよ！」

「菜摘ちゃん!？」

「遅れてごめんね、なのは」

「フェイトちゃん！」

更に意外な姿が現れてくる。フェイトちゃんと、なのはちゃんまで……！ 特にこのはちゃんとはあまり面識無かったけど、来てくれるとは思わなかった。

「ほらほらなのは、泣き止むつすよ。折角みんなで来たんすから」

「……うん！」

「くっ、ぞろぞろと……面倒なことに」

「……君が誰かは知らないけど、一つ違うよ」

フェイトちゃんの握ったバルディツシユの先が、赤い女の子に向けられる。

静かな声調だから、少し気付かなかったけど、明らかに怒っていた。ぐつと、バルディツシユを握った手に、異様な力が込められていた。だけど、飛び出さないような冷静さを保っている。

「なのはは私の——私たちの友達だ」

「ちいつ、振り切れないっ……！」

「っ、疾い……！」

やっていることは至ってシンプル。俺とシグナムによる追いかっこ。単純な速度でなら俺の方が上のはずだが、シグナムの先読みによる剣での一撃やら連結した刃を蛇のように走らせたりと、上手く誘導されているせいではに辿り着けない。ていうかあの剣、連結というか蛇腹状になれるのかよ……！ 前の戦闘の時には出てこなかった仕掛けだから、完全に予想もしていなかった。おかげで身体の半分が消し炭……には断じてならんが、目隠しが破れてしまっている。これじゃもう意味がないから、耳栓もとつくに捨てている。

「ぎゃふん！」

とうとう銀色の蛇の横薙ぎを受け、車道へと撃墜される。駄目だ、経験の差が違い過ぎる。疑ってなかったが、やっぱり実践なれしすぎている……勝つ勝てない以前に、まず逃げられるかどうかすらも怪し

かった訳か……！　なんか今俺情けない声が出たが、気のせいだよな……？　そう思うことにしよう……

「……くっそ、やっぱり太刀打ちも出来んか」

「よく言う。逃げながら私の攻撃を避けるどころか、一瞬の間を見つければ詰め寄る気概。未熟な腕だが見所を感じるな」

「単なる性能底上げに頼っているだけなんだけどな」

「だが、戦闘の組み立てや防御、どれを見ても発想を感じる。それは紛れも無く、お前の地力だ」

「……そう言えば名乗っていなかったな。俺は八高輪だ」

もうここまで来ると清々しいわ。実力差のある相手だろうと正当な評価をしてくるとは……騎士道ばねえ。ここまで来ると敵ながら本当イケメンだ。礼を失しまくっていたことを思い出して、自己紹介をする。俺だって紳士だからな。

「むっ、失念していたな。ならば私も改めよう。私は烈火の将・シグナムだ。八高、お前の騎士道、見事なものだ。だが、本意でない構えで私に挑むのは、少し迂闊だな」

「……言ってる」

「シグナム、そろそろ頃合いだ。ヴィータのところへ」

「ザフィーラか。分かっている。機会があればまた手合わせしよう、八高」

結構的を射た勧告だ。本当に鋭い。実際俺も勝つ気力はそんなに無かった。一発与え隙に離脱する、という前提で動いていたからな。そりやそうだ。言ってしまうえば、俺はシグナムと戦ってなかったようなもんだ。　：あ、イグナイト切れた。最低でも10パーセントはあっただろう勝算は、一気に急降下。地底へ真っ逆様だ。

その上でもう一人追加。なんか筋骨隆々な男。青を基調とし、外見からみても寡黙な印象を受ける。名前は……ザビーネ、だっけ？

考え事してたからちゃんと聞けなかった。だがこれだけは言える。神は言っている、ここで死ぬ定めだと……唯一の幸運がシグナムが離れたことだけど、結局相手が残っているからプライマイゼロ。

「……案ずるな、命を取る気は無い。殺生は主の望むところじゃな

い」

「主……ね」

言われてみたら、以前にシグナムと戦った時にもその単語が出てきたな。なにかは分からないが、主の為に戦う。

「まるで分からんな。主は人殺しは望まないが、人を襲うようなことを指示するような人間なのか？ シグナムと言いザビーネと言い、仕える主人を間違えていないか？ ひよつとしてお前ら、コスモバビロニアの復活でも企んでるのか？」

「言っている意味は分からんがそれは違う……この行いは、我らの独断だ」

「独断、だと……？」

「それとだが、俺の名前はザファイーラだ」

「あ、すんません」

「つしやらああああああ！」

独断ということは、勝手をしているのか……？ なんの意味があつて……？

間違いを指摘されたのち、掛け声が一閃のように響き、その声の主が振るった拳が防御した男ごと吹き飛ばす。なんだろう、タイミングのせいでこつちが悪いように見えるんだが……しかし、意外な人物の介入があつたことに驚きを隠せなかった。

「また無理してないだろうね？」

「アルフか!？」

「すいません八高さん。遅くなりました」

「ユーノもか!」

「なんでオレが自称紳士の助けなんか……」

「げえっ、関羽」

「おい待て！　なんでよりによってそのネタで返すんだよ！　ふざけんな！　関羽に失礼だろうが!」

「ツツコミ長いんだよお前は！　お前はいらんから、菜摘はどこ？」

「クロノたちと行動している。あわよくばなのはの救助に当たっているはずだ。……お前、妹に手出したらほんと殺すからな？」



「別にそこまでの発言してなくね!」

なに深読みしてんだこいつ!? だが、これだけ人がいることにかなしの安心感がある。悲しいけど戦いはやっぱり数だよ兄貴! これだけいれば、形勢も――

ぞくつ。

……………なんだ、今の気持ち悪さは。頬を舐められたような、肌の心地悪さがヤバイ。不意打ちすぎて吐きそうになった。多分だけど、天災を察知した動物と違ってこんな心境なのかって思ってしまったくらい、とにかく気持ち悪い。他人の嘔吐物を飲み込んだ嫌悪感が酷い。

俺以外にも感じ取れたらしく、全員が同じ方向を見ている。だが、俺と同様の顔をしているのは、奇しくもザフィーラだけだった。ユーノとシスコンも反応しているが、悪意の底を覗け切れていないようだ。

……待て。ザフィーラも? この男にとっても想定外のことが起こったということか? この気配の主がイレギュラーということか? それなら……

「……アヴァロン、今の感じたか?」

『魔導師の反応にしては異彩が過ぎる……そも人間かも怪しい』

「俺の気のせいじゃないなら、あの方角って……」

『いや、間違いなく高町なのはのいる場所じゃ』

「くそっ! みんな、あの気配のところに行くぞ! ザフィーラ、あんたも来てくれ!」

「正気か自称紳士!? こいつは敵だぞ!」

「向こうにも人はいますから、きつと大丈夫ですよ!」

「そういうことじゃないんだ! とにかく、ザフィーラも手伝えるか! お前にとっても不測の事態が起きているはずだ。ここは互いの利の為の休戦だ。それでどうだ!」

恐らくだが、ザフィーラにとっても気配の正体は第三者のものと感じ

知しているはずだ。でなければあんな顔はしない。……俺の発言に軽く眉を上げるが、

「……心得た。だが、あくまで一時だ。そこにヴィータもいるからな」

「ヴィータ？ ……さっきの赤いよう……女の子か？」

「ああ」

「なるほど、仲間を迎えにか。いいさそれで。じゃあ行こう」

「分かった」

思わぬタイミングで敵対していた陣営の相手と心を通わせられた。が、そうしないといかん気がする。自分が魔力察知に長けていて良かった。目隠し耳栓による特訓って案外活きるもんだな。

「……一時の休戦ならば、協定と捉えるのが理だろう。反故にするのは我が主義じゃない」

「へえ、あんたも姿を変えたのか」

「乗っていくと良い。氣勢は認めるが、その身体では満足に動けない」

「すまん。少し預けるぞ」

「お前の交渉能力には驚かされるよ」

「お前じゃなくて妹の方に褒められたかったよ」

「妹に近寄るなよ変態野郎め！ 絶対だよ！」

「この俺が変態……？ 違う、俺は紳士だあ………」

「そんなの知るか」

「はいはい、訳の分からんやり取りはそれくらいにして、ちやちやつと行くよ。ユーノはアタシに捕まりな！」

「はい！」

それぞれが変身しながら、フェレット姿のユーノは、四足のアルフに捕まりながらなのはたちのいる場所に向かう。狼に跨ったのは初めてだけど、結構乗り心地は……意外に良かった。ほとんど滑空するように足を運ばせていることで、総会な絶叫マシンに乗っているような感覚だった。

なんか嫌な感じがする。間に合ってくれよ……！

「そうか、最近感じていたこの気配……お前か」

この場にいる誰もが、彼女に対して同じ疑問を持っていた。厳密に言えば、赤い少女——ヴィータ以外の人間にとっては見慣れた顔であるが、そのヴィータにとっても、眼を疑う光景だった。

たった今現れた邪魔者の一人と同じ顔——そして、それ以外が見れば、フェイトと同じ顔をした誰かが、その顔に似つかわしくない不逞な笑みを浮かべながら、一人一人の目を覗き込みむ。だけど、彼女とフェイトでは大きな違いが三つある。一つは、乱雑に切られて短く整った金髪。一つは、フェイトとは違ってどこか防壁のような厚みを感じる凶々しいバリアジャケット。一つは、

「お前、だど？ 蟲風情が吾と並んだつもりか？ 気安いぞ」

その容姿と噛み合わない、中性的な男の声。まるで憑依されたように、彼女はその男声で仰々しい物言いを返した。その声音は物言いと同様に視線の高い様相を見せているもの、一方で無機な色までも含んでいた。

一番動揺を見せたのは、予想の必要も無くフェイトだった。魔力の反応こそ違えど、その眼の色は紛れも無くアリシアのものと同じであったことに、戦慄した。眼を合わせたフェイトは、どちらから言えば得体の知らない恐怖によって、肩を震わせてしまう。

「ほう、この仮宿と同じ顔とは奇縁を覚えるな。まさか、知らぬ他人とは言うまい？」

「……どうして、アリシアが？」

「仮宿もそう名乗っていたがなるほど、やはり姉妹の類か。しかし、この出来ない仮宿と違って興味深い魔力資質だ。本来なら器とする許しを与えるところだが———その白い貴様」

アリシアが眼を向けた先は、傷だらけのなのはだった。狙いを定めて銃口のように中指で指し示し、にやりと口の端を歪めた。

「吾の器となることを許そう。さあ、交配としよう」

## 狂気の攻撃

なのはは、一瞬言われている意味が理解出来ず、思考を停止させていた。いや、この場の誰もが理解は出来ていたはずだった。しかし、脳内の速度が未だに理解に到達出来ていなかった。

が、最初に動いたのはヴィータだった。幼子の姿をしていても、知識のほどは長けていることが一種の不運として機能してしまっていた。

「こ、交配って……馬鹿かお前は!」

「……気に入らないな貴様。先より吾相手に口が過ぎるぞ」

「クロノ先輩、こうはいつてなんだったすかね? 聞いたことはあるんですけど……」

「ぼ、ぼくに聞くな!」

「……言いたいことがよく分からないけど、なのはの身体を乗っ取るってこと?」

「稚拙だな。吾は、新たな肉体を求めているだけだ。だがこの粗末な器では吾は活かすことは出来ぬ。だから仮宿なのだ。だがその白い貴様、貴様の資質なら吾が存分に扱えよう」

フェイトの租借により、アリスアの事情が少し見えてきた。どうあれ、彼はなのはを狙っている。あくまでヴィータ以外は、それが分かれば充分だった。

芝居がかっている口調であるもの、アリスアは着飾った様子もなく両手を広げ、見下すような仰々しきで靴音をなのはに近づかせる。

「しかしまあ、思わぬ誤算だ。まさか魔法の発展していないこの世界で、これだけ魔導師がいるのもそうあるまいて」

「お前がなんなのかは知らないが、気に入らないな」

「……奇遇だな。吾も貴様を殺すと決めたところだ。直ぐにその口に臓物を積めて黙らせてやろう。貴様の身体はいらん」

「吼えるなっ! カードリツジツ!」

がごおんとハンマーが駆動音を響かせながら、ヴィータは大きく振りかぶる。

一方でクロノ執務官はある疑問を抱いていた。この赤い少女が持っているデバイスは、自分達が持っているものとは系統が違う。デバイスから飛び出した空葉蕨の存在が、殊更に異質を醸していた。あれは、自分たちのデバイスの術式とは違う。

思索を巡らせるが、彼はそこで止めた。今は戦闘中だ。それに得体の知れない相手が現れたのだ。そんな余裕は無いと。

「今つすよ、赤い人！」

「ちっ、余計なことを……！」

「ほう。これは凍結魔法か」

アリシアは、菜摘の魔法によって足元から凍結されていた。本能で危ないと察した菜摘の判断は攻撃よりもアシストに回るという考えにより、導いた結論からヴィータとの即席連携を行う形になった。動きを封じたところで一撃、ヴィータとしては敵である連中と連携をすることに不快感はあるもの、事実この魔力の主の奇妙さも無視出来ない。

「ぶっ潰れるー！」

「加えてベルカ式か。難儀を相手にするとは」

特にフェイトは、その光景に眼を見張った。アリシアが停滞させたスフィアの魔力光が、まるでアリシアじゃない。かといって一色ではない。紫やら黒やら、仄暗い万華鏡の中身を散華させたような、見ているも落ち着かない斑模様のスフィアが浮遊している。言葉とは裏腹に、アリシアは鼻で笑っていた。

それだけでも充分に驚くことだが、更にアリシアはもう一つ見せた。粘土を捏ねたように一つのスフィアを変形さえ、大剣の形として編んだのだ。

「なに!?!」

「だが、吾を相手取るには演者が不足だな」

凍らせたはずの足場は、浮遊させた魔力弾によって溶かされていた。魔力光を纏った球体が炎を纏い、足場の付近を貫いた拍子で溶けたのだ。

ヴィータとクロノ執務官は、ここである疑問を持った。推測でしか

ないが、この時点で相手は、二つのレアスキルを使ったことになる。近いもので言えば、魔力の物体練成と火の属性付加。ヴィータにしても、二つのレアスキルを持った魔導師と対峙するというのは、初めての経験だった。

そして、ヴィータ以外がほとんど同じタイミングで一つの結論に辿り着いた。この薄気味の悪い魔力の反応に覚えがあったが、

アリシアから感じるこの反応や魔力光は、紛れもなく虚数空間のものと同じだった。

軽々と振られた大剣がヴィータを襲うが、反射とも呼べる反応速度でその小さな手で防御魔法を展開させる。……それが、少しの拮抗を見せたのちに、ごくあっさりとして防御魔法を透過してヴィータを斬り払った。

「ぐっ、があああー！」

「ふん、脆い。だが今の反応は認めよう。貴様は実に、場慣れをしているようだ」

「ふ、ぎけるなよ……あたしはまだ……」

「貴様への評価の為にひとつ警告しよう。動くかぬ方がいいぞ？」

「調子に乗るな……」

……瞬間、ヴィータ自身に動揺を隠せなかった。自分が練ろうとしたはずの魔力球より小さなものが生まれていた。なぜかは分からない。けど、魔力が上手く練れないことにまた疑問が湧いてしまう。その場から手を翳し、アリシアは魔力球を放とうとチャージを始める。

「案ずるな。死は等しく、形あるもの全てに対して実に中正だ。早いか遅いかの差に過ぎない。命の行き付く先は死だ。だから、先に貴様が死ぬ」

「冗談じゃないっすよー！」

菜摘のエリアエクスプロードによって、アリシアは爆発の中に包まれる。……空間指定しての爆発魔法だが、それを察知したアリシアは避けようともせず、シールドで全身を防がせていた。……しか

し、見下していた存在から妨害されたことで、玩具を取り上げられた子どものように不機嫌を示していた。

「嫌いつす！ そんな中身の無い屁理屈で人が殺されるところを見るなんて、ジブンは大嫌いつす！」

「菜摘！ そいつは危険だ！ 戦闘は控えろ！」

「危ないから逃げるんすか!? 逃げたらあの子も危なくなるっすよ！ ジブンが時間を稼ぐから、その人連れて逃げるっすよ！」

「……君一人置いて逃げるほど、人でなしのつもりはないよ。フェイト、なのはとその子連れて逃げろ！」

「でも、アリシアが……生きて」

「彼女はアリシアじゃないっ！ 彼女は、君の知るアリシアなのか!?」

「……………っ！」

「ふぎけるなっ！ なんであたしが管理局と……………！」

「……………言ってる場合じゃ、ないよ……まずここを離れなきゃ。なのは、立てる……っ！」

「うん、なんとか」

「逃がすと言ったか！ 吾の許可も得ずによくも勝手を！」

「させるか！」

「ジブンたちが通せんぼするっすよ！」

「邪魔だ蟲風情が！」

二つの魔力を練り、二つの斑刀を握りこみながらアリシアは、なのはに駆け寄ろうとするが、菜摘とクロノ執務官によって阻まれる。

内心、フェイトは複雑だった。アリシアに一度も攻撃してこなかったのは、やはり見た目がそのまま、自分のオリジナルであり、自分の姉であり、かあさんの娘でもある彼女を攻撃出来る訳が無かった。心のどこかで、アリシアはなにかに操られている。そう信じていたけど、それは他の人を躊躇い無く斬る姿が、人を罵倒する口調が、彼女ではないことを如実に示していた。

フェイトは溢れそうな目尻を拭い、なのはと暴れるヴィータを連れて逃げようとする。

「逃がすか！」

「ステインガレー！」

「スカーレットバレット！」

クロノ執務官と菜摘は同時に魔力弾を放つ。二人とて気にしていないはずが無い。彼女をアリシアと呼んだフエイトの言葉に困惑はある。だから、光弾の威力も全力とは言えない。

だが、それが仇となった。クロノ執務官が先に言った通り「彼女はアリシアじゃない」。加減された魔力弾を撃ち込まれた程度で、足を止めることは無かった。

「そんな気安い一撃で、吾を阻めると思ったか!？」

「菜摘！ 彼女の攻撃は防ぐな！ 絶対避けろっ！」

「どうしてっすか!？」

「話している時間は無い！ とにかく避ける！」

アリシアから感じる魔力反応から、クロノ執務官はある予感を感じていた。指示通り菜摘は剣を回避しているが、クロノ執務官は避けることはあまり考えていなかった。

手の中のS2Uを強く握りながら、左手でラウンドシールドを展開出来るよう構える。自分の仮説が正しければ……的中を逃れたい直感が、クロノ執務官を動かす。

「クロノ先輩!!? なにを!？」

アリシアはクロノ執務官の考えの真意を知らずにしても、受け流そうとしているという意図を読んでいた。吾の攻撃をいなす、だど……? 低く見られたと感じたアリシアは、左手の斑剣を一振りする。

……振られた一振りを、まず受け止めようとする。わずか時間にして三秒弱、展開していたシールドは容易く砕かれようとしていた。危険を判断したクロノ執務官は、翳していた手を即座に横に振り払い、剣をいなした。

……デバイスに剣の勢いを滑らせる形になり、剣の一撃は触れていない。にも関わらず、デバイスの状態が悪化した。だが充分に判断出来た。間違いない。

『菜摘。彼奴の魔力を解析したが、あれは虚数空間のものと同様さ



ね』

「虚数空間って確か……魔法を無効にするっていうあれっすよね……なんで魔導師の攻撃でそれがあるんすか!？」

『妾にも知らぬ。ともあれ、あれは規格外に違いない。あれの魔法攻撃を受けるでない』

「蟲め、吾を苛突かせるか。……ならば望み通り」

刹那。瞬きで見逃した訳じゃない。光が走ったほどの一瞬の間に、クロノ執務官は、その斑剣の一振りを受けていた。

「二人ずつ、羽根を筆るように翳ってやろう。まずは貴様からだ」

「が、っは……!」

「く、クロノ先輩!」

「ふん、少し機能させただけでこの程度か……仕方あるまい。少し傷物になるが、後でどうとでもなろう」

倒れたクロノ執務官に興味を無くしたように、アリシアは視線をゆっくり移す。斑の魔力光が捏ねられ、翳した手の平の先は、二人を抱えたフェイト。

チャージした時間は短かったはずなのに、放たれたのは強力な砲撃魔法。向こうのフェイトもこの時間の短さを想定していなかったで、回避するという余裕が生まれなかった。

結果、フェイトが選んだのは、

「……なのはをお願い」

二人を自分から離すことだった。あの砲撃は普通じゃない。二人を抱えたまま回避することが難しいフェイトにとっては、二つの身体を離すしかなかった。万が一でも自分にはラウンドシールドが使える。確立は低いけど、ヴィータになのはを託した。それでどうにか……となるはずだった。

「フェイトちゃん!」

「馬鹿野郎! 行くんじゃない!」

フェイトを助けようと迎えに手を伸ばすなのは、危険な状況に飛び込むのはとフェイトを制止しようとするヴィータ。この半端な状況が、三人を悪い結末へ導いた……

「さて、向こうの前に貴様も始末してやろう。一人として逃がさ——」  
今まさに、菜摘は感じたことのない恐怖によって菜摘は凍り付いてしまっていた。今眼の前の敵が向けたのは、他意を含んでいない、一念の殺意。菜摘の足取りが重く後ろに摩らせたと同時に、アリシアも一歩踏み出したと同時にがくつと耐性を崩してしまふ。

「ちい……：思いの外使えぬ仮宿め……：！ 少し一意を見せたただけでこの程度か！」

菜摘の眼から見たアリシアのその様子は、まるで筋肉痛で動けない人……：身近な例えをするなら、リンカー・イグナイトで本気で無理した後の八高輪の反応を想起させた。しかし、痛みで挙動が異常を見せたものとは違う、むしろ久しく身体を動かした後のぎこちない動きに近いものを感じた。……：そうだ、油を塗っていないブリキ人形だ。菜摘はそう結論づいた。

あまりに状況が悪すぎる。眼の前では自分よりも強いクロノ執務官が倒れている。菜摘は、アリシアが動けない今を好機と捉え、まったくの本能で執務官を抱えたまま撤退していた。

「あなたは八高輪さんですね？」

「そういう君は高敷このは」

「あの、その返しはゼロ以下の人があるので、止めた方がいいかと」  
「だってそう言われたそう返すしか無いじゃん！ ていうか女の子がゼロとか言っちゃいけません！」

なのはを探していたら、まさかのこのはと……：もう一人と合流した。ユーノから聞いた限りだと、この場に結構な戦力を投入したと聞いているけど、アースラは大丈夫なのか？

「で、君はええつと……：シルバ、で合ってるよね？」

「シル・ヴァアです！ 下唇をちよつと噛んで、シルヴァ、ですつ！」  
「うわ、言いくつ。じゃあシルで」

「八高さんそれ、セクハラですよ?」

「流石にその発想は無かったなあ! 俺どうした方がいいんだい!？」

『貴台は小生をなんて呼んでいるのじや?』

「……ああなるほど。シルヴァ……これでよしつと」

考えてみたら、ア「ヴァ」ロン・ブルーだからな。なんか自然に呼んでいたから、最早気にもしていなかったよ。シルヴァも納得したように、うんうんと首を上下させている。だよねー、名前って大事だよねー。

「……それより、どうしてザフィーラさんの背に乗っているんですか?」

「深い理由は無い。一時の協定だ。む、我が名を知っているのか?」

「今はそこは良いから、早く二人を迎えに——」

ぞくつと、悪寒が横切ったと同時に、寒気のした方角へ即座に顔を向けた。

どうなってるんだ……なのはとフェイトとヴィータが、斑色の奔流から零れたように、力なく落下している。が、直撃を免れたヴィータは二人を抱えている。……なんか不服というか機嫌の悪い顔をしている。なんでだ?

俺としてもなのはを迎えに来たんだ。意味も無く幼女と戦おうなんて有り得ない。引き取るために近寄る。うおっ、ビックリした! たったいま到着したシグナムが俺の横を通り、ヴィータと向かい合う。

こう見てみると、かなりの怪我を負っていた。さっきの砲撃を直撃していないにしても、バルディツシユは無惨に碎かれ、レイジングハートにもビビが入っている。辛うじてヴィータは避けたと言ったところか。なんにしても、砲撃とは違う傷を負っているのは気になるが、その疑問はシグナムが尋ねていた。

「ヴィータ、一体なにと対峙したんだ?」

「つつう、こつちが聞きたいところだ……」

「無事ならそれで良い。危険だ、撤退しよう」

「……ザフィーラ？ なぜ八高と？」

「互いに仲間の救護の為の協定だ。こちらとの戦闘の意思は無いそうだ」

「ザフィーラはともかく、シグナムもそいつ知ってるのか？」

「先に戦闘をしてな。未熟だが、面白い男だ」

「二方向的にボコボコにして言う言葉じゃあないぞ。とりあえず、二人を」

「……それは悪いことをしたな」

「どういうことだ？ と返そうとした瞬間だった。なのはとフェイトの胸元が嫌な光り方をした。」

「——あ、つか、うあああああああああああああ！」

「く、あ、いやあああああああああああ！」

眼の前で幼女が喘いでいるというボーナスシーンにいるはずなのに、少しも高揚しなかった。理由の大部分が、開かれた大部分がまるで、手術中の切開音やら中身をまさぐる音に近い音をすぐ眼前で聞いているからかもしれない。見ていて気分の悪くなる光景だ。

「おい、これはなんだ!？」

「もしかしてこれは……リンカーコアの抽出……」

「リンカーコアの、抽出？」

「間違いない、やっぱりこの時期って……」

こののが意味深に呟いているが、誰一人、俺の問いに答えようとしなかった。少しばかり怒りが湧いた直後だった。……あくまで、まだ戦闘の後だった。気を緩めるには、まだ早かった。

「みんなッ、第二波来るっすッ！」

普段暢気の菜摘が、腹の底から警告を伝えた。そう、わざわざ口に出して全員に伝えたということは……やはりそういうことだ。

言った直後、クロノ執務官を抱えた菜摘は回避運動による急降下で砲撃を回避する。俺たちも俺たちで散り散りに避けるが、

『なっ、八高輪っ!』

俺だっって驚いているよ。ていうか一番ビツクリしているは俺だろって自慢すら出来る。



無事なら遊び通してないで連絡もしておくれ

「ああ、おかえりこのは。三人はどうだい？」

「ひとまず三人とも、容態は戻っていますね。みんなご飯も食べていましたけど、安静が必要ですね。……でもクロノさんが状態は良くないかと」

「クロノが…!? どうなっているのですか!？」

「いえ、意識事態に問題は無いんです。ですけど、直接攻撃を受けた影響からか、体内の魔力循環が乱れているみたいなんです。今の状態では魔法を使っても正直、一般局員と同等レベルの魔力量しか扱えないかと……」

アースラ内は慌しく動いていた。帰艦した魔導師の傷はこれまでに見たことのない状態の異常を抱えて戻ってきていることに、誰もが動揺を隠せなかった。特に深い傷を負ったクロノ執務官は、気を失っているままでされている。単純な怪我の治療は済んでいるもの、このはの回復魔法とて虚数空間の浴びた三人の状態を中和させることも敵わなかった。

——時間にしてなのはたちが襲われる二時間前に、このはとシルヴァはこれからここで起こることをリンデイに話していた。高町なのはが急襲されることを。出来るだけ理解しやすいように砕きながら説明し終えた後、リンデイは対応に備えて魔導師を配置していた。にも関わらず、このはたちにも知りえなかった想定外によって、事態はさらに混乱となった。

特にこのはとシルヴァは、自分たちが責められていると思っていた。聞かれていない状況が起こったことで、局員に被害が出てしまったことに加えて、ヴォルケンリッターの捕縛は失敗し、八高輪も戦闘中行方不明という扱いで捜索中。結果で言えば、対応の遅延を引き起こしたのは自分たちだと言及されるのではと唇を噛んでいたけど、誰も責めることは無かった。むしろ、「そうですか、ありがとうございます」

す」と、あらゆる含みを込めてリンデイが口にした謝意に、心が軽くすることが出来た。

現在地球の時間にして午前8時を過ぎた頃。執務室には、無事帰艦した魔導師による報告を受けていた。フォローとは違う純粋な気遣いから、ユーノは穏やかに発した。

「そんな顔しないでよこのは。最悪の事態は免れたんだ。それでよしでしょう」

「ユーノさん……」

「……このはさんたちが知らなかったということは、完全なイレギュラーということになりますね。菜摘さん、なにを見たのですか？」

「ジブンもあれ以上のことを説明出来ないっすけど……あれはアリシアっすね」

「アリシアって……フェイトさんのオリジナルの……ですよ？」

「そうっすね……でも、絶対違うっす。なにかが乗り移ったとか、そうとしか言えない感じだったんすよ……男の声だったし、躊躇い無くなのはやクロノ先輩にまで攻撃を……」

「……余りに謎の残る状況です」

リンデイは悩ましげに頭を抱える。少なからず、闇の書が絡んでいることを知ったことで多少の冷静を欠いているのに、更に状況を混乱させる要因が現れた。イレギュラーが放った砲撃によって結界は破れたもの、相手側の結界魔導師も強力で、補足を完了し終える頃に逃げられてしまっている。事前に情報を得て備えたにも関わらず、結果は最悪。どれをとっても、イレギュラーの参入が直接しているものだった。

「……状況を整理しましょう。イレギュラーは我々及び闇の書側も攻撃したことから、第三勢力と断定して良いでしょう。ですが、虚数空間の要素が含まれた攻撃魔法を使用することから、防御魔法の効力を当てにするのは難しいでしょう。現に、クロノの体内の魔力循環に影響しているようですから」

最後の一文で初めて、リンデイは弱々しく言葉を吐いた。無意識に

しても、執務官と呼ばなかったことに、誰もが彼女の状態を気にかけて他無かった。……攻撃魔法を受けて魔力が弱体化した。最悪、直撃したクロノが、魔法を使えなくなるのでは……と、集う魔導師たちは無意識に考えてしまった。虚数空間を纏った魔力を放つ魔導師、誰にとっても想定していなかった。誰となく、冷や汗が流れていく。

……状況は嫌に悪化していく。元から静かだった空気が、鉛をかき混ぜていったような圧迫感を寄せていく。

「……しよげてる場合じゃないだろ」

「正治、さん……」

「逆に考えろよ。クロノもまだ生きているし、あの自称紳士クソったれも、死んだって聞いてない。出来ることしないであいつらが戻ってきた時に、なんて言うつもりだ？ 心配で手付かずだったとか言ってキレられるのはごめんだ」

半ば面倒くさいと言いた気に、正治は頭を搔く。

「状況が悪くなった程度で諦めるのか？ あの馬鹿やクロノが、簡単に投げするような奴だと思うのか？ オレはこれ以上あの馬鹿に舐められたくないから、まだ諦める気は無い。桃屋の桃まんでも食いなから、オレは動かせてもらおう。生きてたらあいつに風穴でも開けたいし」

「あんちゃん、それなんて緋弾のヒロインすか」

「菜摘、それは言うな」

「……そうですね。我々は、今出来る最善をするしかありません」

リンディは眼が覚めたようにふうつと息を吐いた。尖った発言ではあるが、この場の誰しもが言われていることを受け取った。少なくとも、まだ諦めるほどの状況じゃない。かといって、なにもしないことには変化も有り得ない。

「では、ユーノ・スクライアと森正治には無限書庫を使用許可を与えます。些細なことでも構いません。闇の書に関する情報と、虚数空間の魔力を扱う魔導師について調べてください。後でプレシア・テストアロツサも向かわせます」

「「はー」」



「シルヴァ・アーデとアルフと森菜摘は待機です。いつ状況が動くかわかりませんので、いつでも動けるようにデバイスの整備等をして下さい」

「はいー!」 「了解っす!」

「高敷このはさんも無限書庫での調査……と言いたいところですが、局員の回復に専務していたのでしばらく休息として待機してください」

「いいえ、私は大丈夫です。回復を頑張っていたのはワールドリーフなので、私も頑張ります! いえ、頑張らせてください!」

「……大丈夫、なのですね?」

「はい」

「……分かりました。それでは……」

「リンディ艦長、宜しいですか?」

「エイミイですか。入ってください」

しゅつとスライドした扉は、笑顔を浮かべたエイミイが入ってくる。ということは、エイミイの報告の内容は自然と理解出来た。

「例の虚数空間の含まれた魔力について、報告があります」

「おお、来た来た!」

およそ解明出来るかも怪しかった事柄が、一つ判明したという報告から場の魔導師はようやくよくに表情を綻ばせる。特に事務的な口調で指示を送っていたリンディ、強張った頬元や硬く結んだ口元を緩ませた。

つといけない。リンディは口元を拭う仕草をしてから、また硬く表情を戻す。

「そうですか。なにか光明が見えたのですか?」

「そうですね。まずは改まった報告が、なのはちゃんとフェイトちゃんの容態も安定しました。リンカーコアの回復も見られていますので、今は安静というところですね」

「クロノさんは?」

「大丈夫ですよシルヴァちゃん。なのはちゃんもそうだけど、体内の魔力循環が不安定という点を除いては問題は無いよ。まあただ、三

人に言えることだけど、今は魔法の使用というのは控えないとですね。下手に使用したら、身体を崩しかねないからね」

「ありがとうございます。それでエイミイ、例の件の報告を」

「は、はい、失礼しましたっ！ 例の虚数空間成分を含んだ魔力ですが、治療は可能のようです！ また、自然回復も見込みがあると推測されています」

「え、治せるんすか!?!」

「なんでもね、魔力を無効にするとと言ってもあくまで成分の一つという要素なので、少し時間をかければ完全に消すことは出来るの。言うなれば、イレギュラーは毒属性の魔力を保持している、と言って伝わる?」

「おお、なるほど」

「とは言っても、現状のクロノ君みたいに、深手を負いすぎると本当に治療困難と予想されているから、最悪の場合、リンカーコア消失が一概に無い話でも無いのが現状なのがねえ……」

「そ、それじゃあクロノは……」

「アルフさんって本当仲間思いですね。でも大丈夫ですよ。クロノ君も回復傾向が見られているので、今は経過観察と安静なんですけどね。なにがあるか分からないから、基本的にイレギュラーの攻撃を受けたら必ず診せるようにね」

「はいっすー!」

「時間をかけようと自然治癒が許容されているのは大きいですね。」

エイミイ、報告ありがとうございます。引き続き警戒態勢を」

「了解です!」

かっど敬礼を返してから、エイミイは執務室を後にする。

虚数空間の性質を知る魔導師にとっては、イレギュラーの放つ魔法は致命的なものと思われていたが、それに至らないことを知って全員から安堵が零れる。

しかし、対策があるかと聞かれたら、現状は存在しない。強力な毒属性と比喻したもの、やはり虚数空間の性質を持った魔力というもののは厄介極まり無い。あらゆる魔法を封じるということは、防御魔法

への干渉も強いし、攻撃を受けた魔導師への影響もこの通りである。治療出来るとは言っても時間をかけないといけない。

「長くなつてしまいました。では各員、行動を！」

「はい！」

「……失礼。少し話の続きになりますが、高敷このはさん及びシルヴァ・アーデの二名はもうしばらくこちらに残つてよろしいですか？

二人には是非伺いたいことがありますので」

「は、はい……」

菜摘とユーノは少し心配そうに二人を流し見ながら、室内を出て行く。

……リンデイとこのはとシルヴァ。静かな空間に閉じられると、多量なり来慣れた場所にしても緊張してしまう。状況も重なつて、残された二人は無機質な味の唾を飲み込む。

「……あまり悠長を言っている場合でもありませんね。どうにもこの事態、二人にとつても想定外のようなですからね」

「はい……」

「ああごめんなさい。硬く構えないでほしいの。ただ話を聞きたいだけなんです」

「話、ですか？」

「はい。……これまででしたら、タイムパドックス論に準じて聞くことはしませんでした。互いにイレギュラーと遭遇しているのでは、そうも言っていられませんね。二人が知らない過去ということ、現状は既に知らない未来へと向かっているようですからね」

流星はリンデイさんと、このはとシルヴァは唸つた。言つてしまえば、既に過去のあり方が変わつていることを認知している。途方も無い材料でこれだけ理解出来れば、相当なはずなのに、疑うこともなく現状を正しく認識している。

「このは、本当に話しても大丈夫なの？ これで未来が変わつちやつたら……」

「大丈夫だよシルヴァちゃん。ここもう知らない過去だから、なにが起こつても不思議じゃないよ」

「…………クロノ執務官がいない手前なので言いますが、現状に置いて二人が切り札になります。敢えて酷な言い方をしますが、情報源として二人の存在は不可欠なので、可能な限り助力をするつもりです。ですので、この事件に起こることの全てを、話してくれませんか…………？」

ああ、この風景をよく覚えている。一生忘れるものか。

美味しいご飯のにおいに誘われて部屋を出ると、既に俺以外の三人が朝食を食べている。しかし、俺の分は用意されていない。まあ茶飯事だ。こんなうちでは普通だ。

…………一秒にも満たない時間だけ眼を合わせるが、三人はすぐに家族の会話に戻る。うん、これもいつも通りだ。

「……………」

自分で朝食の準備を済ませる。…………どうやら会話は、妹の学校での話で盛り上がっているらしい。友達とのこと、授業で上手くいったこと。まあ、有り触れた会話。少しだけ混ざろうかと考えたけど、その考えはすぐに止めた。俺が声をかけただけで水を打ったような静けさが来るし、そもそも両親と妹からの嫌われ方が異常だから、入ろうという気にもならない。出来るだけ楽しい空気をぶち壊したくないからな。俺が黙っているだけでその空気が保てるなら、それでいい。簡単なことだ。

「……………」

…………家族と普通に話をしたい。どうでもいい天気の話、大分苦手な世間の話、他愛の無い好き嫌いの話、しりとり。なんだっていいんだ。家族と言葉を交わして、普通に過ごすことって我が俣に入るのかな…………？」

まあ、俺にはもう無理だろうな。自分の性癖が家族にバレてしまえば、こうなるだろうな。そりゃあ、この変態野郎が家族とは認めたくないだろうな。

——転生前の話だが、俺には四つ年下の妹がいた。その当時は俺

の妹は小学二年生だったが、その友達とよく話すことが多かった。はつきり言つて、俺の友達の話をするれば、同級生よりも妹の同学年辺りの方がずっと多かった。そりやもう理由は簡単——当時からロリコンだったからさ。とにかく、同級生と駄弁る時よりも妹の女友達と話をする方がずっと楽しかったし、正直下心もあつたのであわよくば……なんて卑俗なことも考えていた。当時は意識が低かつたんだ、察してくれ。

で、ある日のことだった。ずっと妹の友達と仲良くなりすぎて、両親からも懐疑的な視線を送られるが、俺は気付くことなく楽しんでいった。

それから一年後、事件は起きた。俺が中学一年になり、妹も三年生。友達の家に行くと言つて——妹の友達の家につつそり泊まりに行つて少し過ぎたことをしようとしたのがバレて、我が家と向こうからの目線も大きく変わった。公務員である両親が必死で土下座で謝罪したことと妹の必死の弁解、そして妹の友達がことにおよばなかつたも鑑みてという結論により警察沙汰は取り下げられたもの、それが原因でロリコン認定された俺は、その翌日から食事の風景は酷く冷たいものになった。両親とも公務員をしていたことから真面目な性格だった分、俺への失望も相当のものだった。日に日に会話の数も激減し、向けられる視線も青虫を齧つたような苦い表情になった。

「なんでうちの息子は、こんな変態に……」

母さん、陰口は本人のいないところであるもんだぞ………まあ、泣くほど嫌な事実なのは分かるけどさ………

とにかく、俺は出かけなきゃいけないんだ。……どこにだっけ？

まいつか。でも大事な用事があったのは覚えている。俺は、一言も発さずに朝食を食べ終えてから、いつの間に着替えを済まされていた服を纏つてから外に出て行つた。

「……………んん」

いい匂いするなあ。これは……………クリームシチューか。

……………うわあ、転生前の夢見るとかマジかよ……………ここで過ごしてから初めてだぞ。一応吹っ切れたと思っただけ、それでも無いのかもしれない。なんか窓の外が明るい。朝か？　と思っただら、壁にかかった可愛い時計が7時22分と指していた。あ、ちようど今23分に変わった。

……………全身痛い、手足がまだ着いている。イグナイトからの超速移動をしたことが功を奏した、と思いたいが……………今思い返すと、元から射軸がずれていたことも大きいけど。

「アヴァロン、ここは？」

「……………」

「なんだ寝ているのか？　起きないとくすぐるぞ？」

「……………」

まったく返事が無い。まさかとは思うが、あの砲撃の影響か？　見た感じアヴァロンの傷も浅いようだが……………最悪の事態を考えるのは止めよう。一応は神様の造ったデバイスだ。易々と壊れるかつの。……………そう信じることにしよう。

「……………仕方無い。もうしばらく休んどきなよ」

さて、素朴な疑問なんだが、ここはどこだ？　意識もはつきりした頃に見渡してみるが、なんか女子の部屋っぽい感じだが……………高町家じゃない。それにもう一つ気になるんだが、なんかちよくちよく大声が聞こえる。……………なんか聞き覚えのある声だな。身体の痛みも引いてきたが、歩くくらいならなんとかなるだろ。普通に気になるし。

「いっちいち、一体なんなんだ……………」

部屋を出てすぐにダイニングが広がっていたが、その光景にはなんか言葉が失った。

料理は確かにクリームシチューだ。この時期にあっている温かいものだから、ある種の匂ものと言っても正解だろう。まあそこは別にいい。そこ以外が軽くおかしいんだ。

えつとだ。まず、はやてがいる。クリームシチューが人数分テーブルに置かれている。そこまででも、はやてがつくったものなのかと驚

くところだが、問題はマジでそこじゃない。ここまなら初心者卒業辺りの衝撃レベル。

次が間違いなく上級者向けかもしれない。見たままを説明しよう。はやてがなにか不機嫌そうに怒っているが、なにが問題って——怒っている相手が、さつきまで俺と戦っていたシグナムとザフィーラとヴィータ、おまけにシヤマルさんの四人。おまけにその四人は、はやてに膝を付く形で叱責を受けている。なにこれ？俺どんな顔するべき？俺をボコボコにしていた相手が、なんで一般人に説教されてるの？わけがわからないよ。

「せやから、八高さんがどうして魔法の攻撃を受けてたかってことなんよー！」

「主ははやて、それは私にも知り得ぬことで」

「はやてちゃん落ち着いて……あ、八高さん起きてますよ」

「あ、おいつす」

「や、八高さんっ！身体大丈夫なん!？」

「目が覚めたら……体が縮んでしまっていたっ！」

「そ、そんなに大変なことに……！」

「いや、冗談だからっ！ほんとごめんよお！」

とりあえず軽いノリで名探偵な返しをしたが、はやてにとつては真面目なことだったのがまずったようで。なんか状況が掴みにくいが、とにかくはやてに心配されていたようだから、軽く手を振り返す。

ええっと、聞きたいことが多すぎてなにかから聞けばいいのかわからん。とりあえず、手近なものを一つずつ聞いていこう。

「……ああー、はやて。ここって？」

「ああ、ここわたしの家」

「俺はなんではやての家に？」

「ああ、やつぱり覚えてないんやね。眠れなくて星を見ていたら、空から八高さんが降ってきたんよ。どしやあつて家の前に」

「……俺が？」

「うん。それももう、八高さんが傷だらけで倒れていて……シヤマルが見てくれなかったら危なかったんよ」

「いえいえ、わたしたちも偶然帰ってきたところでしたので」

「それで、どうして四人は外にいたん？」

なるほど。とりあえず一つは理解出来た。運良く(?)はやての家まで吹き飛ばされたらしい。だが、避けて通れない質問をせざるを得ない。それに、なんかシャマルさんたちもなんか困ってるし、助け舟があつた方がいいのかもしれない。

「そうだはやて。その人たちは？」

「あ、ああ、シャマルはもう逢っているよね？ こっちはシグナムで、こつちがヴィータ、こつちがザフィーラや」

「なんか聞きたいこととは違うけど……ど、どうも？」

「……………」

順番に紹介されたのに、なんだかヴィータから睨まれてるのがすごい気になる。俺なにもしてないはずだよな？ ……当然だが、顔見知りのシャマルさんが警戒しているくらいだから、シグナムとザフィーラも睨んでくる。シャマルさんに限っては困惑しているのが救いだ。軽くはぐらかしたことではやての怒りも幾分無くなり、変わりに「そうそう」というように両手を叩いた。

「ああ待って。八高さんって魔法使いの人、よね？ 空も飛んでい

たみたいやから」

「だ、だねえ……」

「それじゃあ、シグナムたちのこと話してもええよね」

「な、主……それは」

「シグナムたちはな、ヴォルケンリッター言うんよ」

「……………り○ビタン？」

「わざとでは無いな？」

「ごめん、半分わざと。ええつと、ボルケ……ヴォルケンリッターつて急に言われてもわけわかめだが……」

シグナムが冷静にツツコミを入れるが、いきなり出た単語に対応出来るほど魔導師としての順応性が高いつもりないぞ。そもそもの話、土足でアウエーに乗り込んでるが、辛うじてはやてという一般人がブレーキになっているから、俺はこうして生きている訳だけど。



俺の質問はマズイようだ。そりやそうか。やっぱりだが、この四人は俺が管理局の関係者ということは知っているようだ。言いあぐねるというより、話すべきでないとそれぞれに算段しているのが分かる。四人が一度ずつ眼を配せる動作をしたことで、なんとなくそう感じた。

「ああ要するにな、闇の書の守護者なんよ」

「え」

あつさりど、窓を開けるような気軽さではやてがそう入り込んだ。ああうん。シグナムが見開くのも分かるよ。俺にとつても不意打ちだったから、当事者側からしたら奇襲ものだろうよ。

闇の書………ってあれだよな。このはからちよつとしか聞いてないけど、なにか大事件を起こすとかなんとかの。聞く暇無かったから分からなかったけど……その守護者って……

「はやてちゃん、それは少し話しすぎでは……」

「ええんよ。みんなはもう誰も傷付けていない……と信じるし、八高さんも善え人やから、信じている」

ちらつと、四人を見てから俺に眼を向ける。未だに俺を撃ち落したのが誰かであることに疑念は無くもないと言ったところらしい。まあ、身近に魔導師がわんさかしてるなんて思わないのも仕方無いけど。俺もなるだけ、普通に返すよう努めてみる。

「………闇の書ってまた、ファンタジーだねー」

「いやいや、八高さんが魔導師というのもファンタジーやから」

「………ということはだが、さつきからはやてが主と呼ばれているのって」

でも、まさかだよな………小耳に挟んだ程度の情報を信用するなら、大事件を引き起こすのがはやてだって……？ そんなまさかだろ

……？ 信じたくないが、

「なんやわたし、闇の書の主やて」

「………お、おう」

………あんまり軽く言うせいで、全然驚きも出来なかった。

なんか知らないうちに、とんでもないことに巻き込まれたような気

がするが、どうにもはやての笑顔の緩さのおかげで、なんか重く聞こえない。プリン奢ろう。

……とにかくだ。俺自身は別に戦う気はさらさら無いし、事情を聞こうにもはやての前じゃなんとなくしづらい。今はとりあえず、

「なあ、はやて」

「ん？」

「シチュー、冷めてない？」

「あっ！」

場の空気を緩くしたい。いつまでも四つの針のむしろを味わえるほどのMじゃないので。だがヴィータに睨まれるのはそれはそれで……おっとここまでにしよう。まるで変態じゃないかと人格疑われるのは困るし。

物は言いようというけど、聞き手にも求められる部分  
はあつたりするものなの

さて仕切り直し。温め直したシチューをもう一度並べてから、テーブルに五人座る。まさかの俺も食べて良いという許可が出たので、ヴィータが食べ終えてからの入れ替わりで俺もテーブルにつくことになった。……冷静に考えたら、落ち着くのがまずいはずだよな、この状況は。妙に冷静になれているのは、俺がアホだからか、魔法関連で心臓鍛えられたからか……後者だと強く信じたい。

「いただきます」

そういえばだが、さつきはやてはなにに怒っていたんだろうか。一般人を攻撃したということなら理解出来るが、俺も魔導師ということを知った。……さつきシグナムたちはもう傷付けないということを言っていたから、人を襲わないような約束をしていたんだろう。で、それを破ったと思っていた。そう考えると随分しつくる。現に今ははやてもそう言及してこないにしても、時々シグナムや俺を見てくる辺り腑に落ちていないところがあると見た。食事の後にでもなにか弁解するか。

まあともあれ、食事だろうと礼儀を欠けば人として三流。手を合わせて、眼の前の匂いを発するところとしたシチューに眼を向ける。伊達に喫茶店で過ごしてただけあるからすぐに分かる……これ絶対美味しい。毒見の必要も無いね。銀匙で軽く掬い、くいつと一口を運ぶ。

「味、どうかな?」

「トレッ、ビアアアアアアアアアアアアアアアアアンツツ!!」

美食家な叫び声が出てしまつて申し訳ない。すみません、味付けや具の柔らかさ加減、熱さ、全部が俺のどツボだった。翠屋のは勿論、桃子さんの料理が美味しいのは当然として、好みの話をすれば完全にこっちゃだった。これ本当に9歳の幼女が作ったのか!? なのはといいフェ

イトと言い、この世界の少女のスペックは本当ぶっ飛んでるわ。機動戦士で言えば、最初から乗り換え機体のような性能をしているようなもんだぞ。まだ上があるのかよげんなりする展開だろうが、相手は幼女なので俺は一向に構わないぞ。もつとやれ。さて、俺はこの味をもつとみんなに伝えるために実況を続けよう。

「なんだこの味はツ!? 舌の上で深く絡み合う——ハアアアアモニイイイイイイツツ!!」

「そ、そんな大袈裟な……」

「確かにはやての食事はギガ美味いが……」

「食事中は静かにしてもらいたい」

「す、済まない……だが、予想以上に最高だ……っ!」

少しばかり大袈裟になってしまったが、結構マジで美味い。やばいなこれ、この味になれたら外食する気失くすわ。翠屋や高町家の料理は別として、大抵の食事では満足が難しい。

これやばいなあ……うん。半端無いつたらない。……駄目だ、俺はグルメリポーターにはなれないようだ。だがとにかく美味い。思わず変態美食家なコメントが湧き出るほどだ。味の保証は確約しよう。

しかし、仮の話なのだが、はやてに彼氏とか出来たとしよう。はやての性格を予想すると、弁当を渡すだろうから……毎日これを食べることになるのか。いいなあ。くそう、真の勝ち組になるなら、こういう女性を彼女にしたいよなあ。料理も出来て面倒も見れて……完璧じゃあないか。極論だが、はやてと友達になった男の末路というのは、間違いなく一つに行き着くべきだろう。

「これははやてのお婿さんになるしかないな!」

「——え」

「あ?」

「ぬ」

「……むむ」

「あら」

「おお、ミートボールうまうま。やはりこれも……なんだ、皆して

固まって。ご飯冷めるぞ?」

なんて言えはいいのか、なんかシヤマルさん以外から妙な表情を向けられている。無表情ながらなにか聞き耳を立てているようなザフィーラ、興味深いと言わんばかりに眼を向けるシグナム、明らかに殺気だったヴィータ、なんか紅潮しているシヤマルさん——で、なんか時を止められたように動きを止めたはやて。なにをどうしたらこれらの反応を一度に見れるのか気になるが、視線を追うに、俺が原因なのは分かった。正直テンション上がり過ぎて、なに言ったのかそんなに覚えてないって軽く言いづらい……

「えっと、どうした……の?」

よく分からん恐怖感に駆られて、半端に遠慮した口調で尋ねていた。いやだつて、ヴィータが怖いもん。握った拳から、ぎちぎちぎちという音が微かに聞こえたんだぞ? うわようし、よ乙わい。誰を見ていいのか分からない中、シグナムが静かに問う。

「八高……今なんて言った?」

「今……? ああ、ミートボールうまうま、だったな」

「ううん。八高君、シチューを食べた感想の方」

「ああそこですか。はやてのお婿になり……た、い……」

シヤマルさんの一言で思い出した。……待てよ。冷静に考えたらこの一言、とんでもない爆弾発言だぞ!?

ええつとだな、俺が婿発言したのは、はやてと付き合った人間はそこに行き着くべきという答えという意味合いであって、俺が婿になりたいという意味合いは、まるで全然、全く、これっぽっちも、ありません。はつきり言おう、その気はまるで無い。

ああ、うん……でも普通に聞けばそう聞こえるのも無理ないとは思うが……これは マズい。見ろ、はやてもこつちを見ようとしな。あの、冗談として笑い飛ばしてくれば、俺もそういうノリで笑い飛ばせたのに……逃げ場が無くなっていました。

「ちや、ちやうねん」

「慣れない語調だぞ、輪」

「い、いいか……落ち着いて聞いてくれ。お前たち、特にヴィータは

酷い勘違いをしている……」

「ほうそうか……その飯を死出の土産に噛み締めろ……!」

「冗談じゃない! こんなオメガ美味しい飯食って死ねるかあ!」

「……こういう話を聞いたことがありますねえ。女性が男声の心を掴むには、胃袋を掴むことが重要ですよ。やりましたね、はやてちゃん。八高君なら、殿方としては良いのではないですか?」

「シヤマルさああああああん!」

一概に否定しようにも、綿雲のような柔らかな笑顔を向けるシヤマルさんに圧倒される。ちよつと待った、なにこの流れ!? 修学旅行かよつ!

「ザファイラ、わたしは彼ならばはやてちゃんを任せられると思うけど、どう思います?」

「主が幸福とするなら、異論は無い。義理の硬い男と認識しているから、信用もしていいだろう」

「あの一……」

「シグナムは?」

「そうだな……概ねザファイラと同意だが、惜しむらくは未熟な腕だな。そうだな、私を倒せたなら……あ、主との結びも考えよう」

「ちよつと一……」

「ヴィータは反対として、わたしは大賛成ですね。わたしたちの素性を知ってもたじろがない精神力に、性格も善いですから。いやあ、はやてちゃんに男友達が少なかったのですが、彼ならお婿さんでも良いでしょう」

「ちよつと待ったあああああ!」

ツツコミどころ多すぎ! シヤマルが振った話題のおかげで俺への敵意めいた黒いものは薄れたもの、俺とはやてに対しての流れ弾が酷すぎる。結局俺へのダメージが悪化しているし……! どうでも……よくないが、どうやらシグナムは色恋の話題に不慣れらしく、軽く恥ずかしがっている。フッフ、怖いか? (言ってる意味分からん) 「どこから言えば良いのか分からんがとりあえず一つ……:話飛び過ぎじゃないすか!」

「いえいえ、婿になりたいって言ったの、八高君じゃないですか」

「それは事実ですけど、意味合いが違いましたねえ！」

「じゃあどういう意味だ……！」

「ヴィータ、武器仕舞って話聞こう!? 対話しようぜ対話! なあはやてっ!?!」

「い、いやー、今日は晴れそうやなあー………」

「オーマイガッツ!」

俺のメンタルが穴だらけにあってる間に、はやては既に朝食を食べ終え、震える手で新聞を広げている。なんか必要以上に広げているせいで表情が分からないが……声音から察するに、しどろもどろなのが気になるが……うん、絶対困惑している。普通困るわな。仲良いつて言つたて、お互い趣味とかそんなに知らんような薄い面識の仲ですしおすし。ていうかはやて、絶対新聞読みなれてないだろ。いくらなんでも手元が動かなさすぎだぞ。

「輪、って言ったよな? 今あたしは機嫌が良いんだ……はやてに免じて最後の言葉を聞いていつてやるぞ?」

「免じてないし準じてすらいないし!」

もう訳分からんわ! ブレーキ役のはやてが新聞から目を離さないし(それでも状況見えているだろうけど)……なんか全員して楽しんで様子見てるし……

「よせヴィータ」

「なんだザフィーラ! お前はこの男が……」

「主、今日は通院日でしょう」

「あっ!?! そうや!」

シグナムの言葉をきっかけに、水面から跳ねた魚のようにがばっと新聞をたたむ。あ、顔がトマトみたいに赤い。やはり誤魔化していたようだが、なんか反応が初々しいというかこうも分かりやすいから、こっちまで恥ずかしいわ。

「せやせや、早く準備しないと……」

「通院……そっか、脚見てもらうのか」

「それじゃわたし、お着替え手伝ってきますね。八高君、覗いたら駄

目ですよ?」

「覗きませんよー」

電動車椅子を操作させながら、はやては明らかに俺を避けながら部屋へと向かう。……俺なんもしてないのに空気悪くなったんですけど。……シヤマルさんとしては冗談のつもりだったと思うけど、一層にヴィータからの殺気が凄くなったんですがそれは……見ろよあの顔、まるで怒れる神のような形相しているぞ。一歩間違えたら「アంతあって人はあああああツ!」とか言いながら対艦刀の切っ先向けて突っ込んで来そうな顔をしている。ファミリーネームを付けるなら、ヴィータ・アスカとかになりそうだ。

……まずい。俺今一人だ。はやてどころかシヤマルさんもない、完全にブレーキの存在しない空間の中、空気が変わる。このままでは(主にヴィータに)殺されてしまう……! なにかされる前に牽制はしておこう。

「……ええつとだが、言うまでもないと思うが、はやてを一人にさせない方が良くと思うぞ」

「なに?」

「さっきテレビで映っていたんだが、昨日の晩俺たちが襲われたあのビルの崩落がニュースになっている。もしかしたら、襲ったやつはまだ海鳴の中にいると思う」

「……そうか。魔導師に関わる人間が襲われるって考えるなら、はやても可能性があるのか」

「恐らく、だけどな。もう一つ推測だけど、闇の書の持ち主とあらば、尚更に危険だと思う。相手の目的は知らんが、ヴィータどころか執務官まで襲われたから、無差別と決めていいはずだ」

「……そう考えれば、殊更に主が狙われないとも断定出来ないな」

「護衛がてらに誰か付いて行った方が良く俺は思う。なに、ニュースのことをを言い訳にすれば、はやても無碍にはしないだろう」

牽制とは言ったが、はやてが心配なものも本当だ。

……自分で言っていて思い出してきたけど、あの魔導師を見ているの



は、この中ではヴィータだけなんだよな。ならば丁度良いというか……追い出す気は無くもないが、ヴィータは付けた方が良いのかもしれない。

「顔は知っているなヴィータ」

「ああ」

「動けるのか？ お前斬られたんだろ？」

「掠めたとは言え、砲撃を受けたお前が言うか。そんなことより、ザフィーラも良いか？」

「私は構わんぞ」

「すまん、一人は残っていいか？ 大事な話をしたい」

「ならば私が残ろう」

「はいお待ちせー」

「ほな行こうかー。せや八高さん、帰ったら怪我のこと、問い詰めるからね？」

「お、おう」

狙ったのかと疑いたくなるタイミングで二人が部屋から出てくる。すっかり調子を取り戻し……てないはやては、シヤマルさんに車椅子を押されながら、気まずそうに俺を横切る。……笑顔で手を振りますがシヤマルさん、原因はあなたですよ？

心配もしているだろうけど、シグナムたちが言わないからはやては俺に聞こうとしているが、それも意味は無いことまでは気付いていないようだ。俺だって黙っているに決まっているじゃないか。今から悪く収める言い訳考えておくか。しかし、びしっと指を向けるはやてほんと可愛い。車椅子なんて不便だろう、俺がおんぶしてあげよry 煩惱退散☆煩惱退散☆

「シヤマル、私とヴィータも同行しよう」

「珍しいなあ。なにかあったん？」

「さっきテレビで見たけど、この町のビルが崩落事故があつて、不安だから……」

「あはは、ヴィータは心配性やなあ。心配せんでもええよ、つて言つても付いて行きたいって顔してるなあ。まあええよ。ああ、ザフィー

ラも変身しなくてええから。そのままそのまま」

「……失礼を」

「シグナム、八高さん、ほならな」

「はい」

「おう」

ヴィータの言い方からは、俺に対するものとはまるで違う感情が見えた。本当に心底大事なのだろう、まるで家族を心配するような表情と仕草のせいで、なんか見た目相応に幼く映った。凶悪な小熊のような印象があつたが、案外そうでもないらしい。温和な保護者なシヤマルさん、寡黙な従者気質のザフィーラ、尖った妹のヴィータ、頼れるお姉さん気質なシグナム、中心人物たるはやて。家族構成という風に考えると、意外にバランス取れてるのかもしれない。

ばたん。扉の音が閉じる。 ……さて、ここには俺とシグナムの二人。聞きたいことはあるが、その前に、少し気になっていたことを聞いてみる。

「………気になったんだが、はやての両親は？」

「いや、いない」

「どこかに出張とか？」

「いや、もつと遠くだ。声も願いも届かない、雲すら低い彼方だ」

「………聞いて悪かった」

「気に病まなくていい。知らないのなら仕方ないことだ」

僅かに上を向きながら口にしたシグナムは、まるではやての心境の内を示したように、少し寂しく歪んだ。

9歳の少女がこれだけの人数の養い、この家で過ごす。両親もいなくてだ。普通に考えなくても、事情は深いものだろう。 ……真面目に考えると、あんなに笑って過ごせるはやては、俺が思うよりも大変な状況を生きているのかもしれない。

「……お前は本当に優しいな」

「えっ？」

「それに聡いようだな。もしやと思うが、今のやり取りだけで、主の境遇まで理解したのか？」

「まさか。知らない俺には想像することしか出来んよ。俺が思うより苦労が多そうだ、そんなくらいさ」

「充分思慮深いよ。……確かに、これなら主を任せても良いと思う」

「ちよい待ち。その話は——」

「真面目な話をするのだ。主は、誰にも優しいし、慈しむ性分だ」

「それは見て分かる」

「だが考えてほしい。我々はそんな主を頼りにしているが……主は大人びているとはいえ、齡9つの少女だ。そんな主は誰を頼れば良い？」

「言いたいことが分かってきた。ようするに、さっきの婿云々（真偽や是非は置いといて）は、はやての傍にいる人間としていてほしいという意味合いでもあつたらしい。いや、言っていることは分かっているよ。なのはやフェイトという前例を見ているからよく理解出来るが、凄かろうと幼女だ。シグナムが言っているのは、そういうことだ。」「言いたいことは分かるが、俺だつて先月13を迎えた子どもだぞ。流石に気の早い話題は遠慮するぞ」

「分かっている。だからせめて、主が頼る友人として傍にいてほしい」

「そういうことならいくらでも」

頼まれなくてもするわい。生憎、恋人だとか婿とかハードル高いのは無理だが、気の合う友達とかなら俺にも出来る。……断れると思っていたのか、シグナムは小さく息を吐く。

「意外だな。シグナムもヴィータに賛成すると思っていたが」

「管理局の魔導師と知る前に、八高個人と話したせいだな。あくまでお前個人として、主の友達でいてほしいと頼んでいるだけだ」

「融通が利いて助かるよ」

「そうでもないと思っている……さて、ここからは管理局の魔導師たるお前への警告だ。ここでのことは全て忘れろ。管理局に話すとなれば、斬る」

……本気だ。戦闘中に着込むあの甲冑姿じゃないが、眼の鋭さ恐ろ

しく増した。射殺すつてこういうのを指すのかと一瞬だけ関心したが、対象が俺であることを思い出して、振り払うように首を振るう。念のため、少しくらいは余裕を見せたくてはシグナムに手のひらを向ける。

「まあ待て。そんな眼を向けられた落ち着いて話も出来ない。俺だつて話がしたいと言つただろ？」

「なにを話すつもりだ？」

「まあなに。個人的に大した話じゃないつもりだ」

手元のコップに入った水を一気に飲み干す。

さて、相手はシグナムだ。駆け引きやら交渉で誤魔化せるような相手じゃないにしても、中途半端に狡猾なやりとりをする気はない。俺は真面目な話し合いをしたいだけだ。

「お前らの事情を聞かせてくれ。なんなら俺は、協力するつもりだ」

「……なんだと？」

「……えつとまあ、事実をそのまま言えば、俺は管理局員でもないし、民間の協力者という扱いだ。軽い言い方をすればただのボランティアだ。ま、フットワークの軽い立ち位置な人間だが、お前から良ければ管理局に協力を頼んでも……」

「断るっ！」

多少驚きはしたが、素直に言えばそこまでのことは無かった。管理局への嫌悪反応は、とつくにヴィータから見取れていた。俺相手だと判定が怪しくなるシャマルさんよりは、中立に話が出来そうなシグナムならと思っていたが、眉間の揺らぎ方がヴィータと同じだった。結論、ヴォルケンリッターは管理局と相当不仲と見た。

「八高、お前は厚意で言っているのだろうが、少し我々の存在を軽んじているようだ。……過去に無関係の人間まで巻き込んだ。そう言えば、我らの生業の本質が見えてくるだろう？」

「悪いが、俺は闇の書がなんなのかまでは知らない」

「事実だけを言えば、転生を再生を繰り返す度に、破滅だけを与えてきたものだ」

「……………」

「ヴィータから聞いたが、魔導師二人のリンカーコアが摘出されたのを見ているそうだな。あれが、本の蒐集方法だ」

「……………っ!!」

なるほど、それで闇の書、ね。こりや管理局が警戒するのも理解出来るわ。

……よく考えたら、闇の書の守護騎士、だっけか。仮に疑いもなく連れて来れたとしても、向こうからしたら罠としか感じないだろう。少なくとも、今の話を聞いたらそう管理局が眼の敵にするのも頷いてしまう。このはたちも眼の前で見たのだから、近付くだけで警戒は凄まじいだろうな。こりや管理局の手を借りにくいと来たもんだ。

……個人的にだが、なのはとフェイトを襲ったこともあって、反射的にシグナムを睨みつけてしまった。いかん、冷静になれるかは怪しいが、このままじゃ話にならない。大袈裟に一度、深呼吸をしてからまた向かい合う。今度は敵意は向けていないつもりだ。

一方で話も幾分繋がってきた。魔力の蒐集という行為、はやての知らない独断決行、ヴォルケンリッターのはやてに対する慕い方……「……………今のことに関して絶対に許せないが、今は話を進めよう。

話を大まか纏める限り、本の蒐集がはやての脚の関知に繋がるのか」

「少し違う。主の命にだ」

「いの……………?! ちよつと待て、そんなに状態悪いのか?!」

「この世界の医学では脚の病気が全身に転移しているとされているが、その実は、闇の書の侵食が進んでいるのだ」

「……………独断。そうか、はやては蒐集を嫌がっていたのか」

「慧眼だな。そうだ、だから知られないように魔導師以外の蒐集をしてきたが……………」

「確かに、悠長もしてられなくなってるな。闇の書を復活させれば、はやての病気も治るのか?」

「あくまで推測だがな……………真に王としての覚醒をすれば、少なからず進行は止まる。そう見解されている」

大部分が繋がった。つまり、ヴォルケンが闇の書を復活させようとするのは、はやての為。四人がはやてに忠義を尽くす大きな理由は、

まあ想像になるが自分たちを『魔導師』としてではなく『家族』として接しているからかもしれない。蒐集という行為を嫌っていたことから、他人を傷付けることを良しとしていなかっただろうな。……さて、どうしたものか。事情を知るほど、闇の書、というよりはヴォルケンリッターが敵だと一概に言えなくなってくる。正義の反対は別の正義って言葉を聞くが、善悪なんてのは立場や視点でいくらでも変えられるからな。言ってしまうえば、両方とも正しいしどちらも間違っている。極端だが、結局は勝利した側や意見が大多数な方が正しい。参ったねえ……あちらを立てればこちらが立たず、だな。

「闇の書の復活か……俺が関与すれば、さぞアイツらはがっかりするだろうな」

「? どういう意味だ?」

「シグナム! おまえの巧妙な話術がこれを狙っていたのなら、予想以上の効果をあげたぞッ!」

「余計に分らないぞ」

「よし、決心が鈍らない内に言おう——俺はヴォルケン側に付くぞ、シグナムーッ!!」

「な、なんだと!」

おい、本気でビビられたぞ。確かに、普通こんな気軽に管理局を抜けるなんて有り得んのは分かる。だが、理由だつてあるつもりだ。下らないとは言わせたくない。

「話が過ぎたな。はやての友達というフィルターがかかって、気でも緩んでいたのか?」

「……管理局に伝えるつもりか?」

「待て、今言ったばかりだろ。俺ははやてたちの味方になる」

「我らに付く、だと!? 分かっているのか!? そんなことをすればお前は——」

「俺だつてはやてに死んでほしくないんだ。面識はそんなに無いが、はやてとはそれなりに仲良くなったつもりだからな。それに、お前らとももう他人の関係と言うつもりは無いぞ。俺は管理局としてお前らに関わらん。はやての友達として、はやての家族の味方にな

る。勿論、お前らの足を引っ張るようなことはしたくないつもりだ」

「八高……」

「文句はもう聞きたくないぞ。俺だって馬鹿な判断してるって自覚してる」

「……馬鹿者め」

「俺もそう思う。それとだが、俺は管理局に付かないが、敵に回すつもりもない。悪い言い方だが、こっちに介入してくるっていうなら、ある程度は相手になるつもりだ。けど、基本は戦わない。目的は蒐集だし、はやてとの約束。俺はなるだけ全部を丸く治めたいんだ」

「……それは敵に回すよりも、ずっと悲惨で難儀なことになるぞ。本気で言っているのか？」

「本気だ。俺はみんなに笑ってほしただけだからな。まあ、今回はそれが結果だけにまわるって考えると気が滅入るけど、俺ははやてとの距離は絶対に取りらんからな。……さて、俺は言いたいことは言ったから、それでも信用出来ないなら、いつでも斬ってくれ。なんなら、今でも構わない」

言いながらも、シグナムは小さく笑みを浮かべている。普通に考える、幼女が正に眼の前で余命宣告を受けたんだぞ？ 無視出来ると思うか？ 俺には無理だ。それに、シグナムの解釈とは少し違うが、その状態ではやてがシグナムたちに笑顔向けるというのは、無理をしているということだ。シグナムが笑顔を受け止めて、俺がはやての愚痴なりでも聞く。そういう風に立ち回らんと、はやても精神的にしんどいだろう。一家の大黒柱として佇むのも仕方無いが、一人で全部はさせないぞ。俺だってはやての支えになってやらあ。

——『任務は遂行する』『幼女も守る』。「両方」やらなくちやあならないってのが「紳士」のつらいところだな。覚悟はいいか？ 俺はできてる。シグナムはふつと薄く笑ってから、冷蔵庫に向かう。

「我らとて主の存命が最優先だ。それに、先にも言ったが、お前の意気そのものは評価している。お前は冗談は口にするが嘘が嫌いな性分のようなから、私は信用しよう」

「そうかい。ありがとうな。でも俺だって、場が穏便になるなら嘘

は普通に吐くぞ?」

「それはただの方便だ。それに、私と斬り合ったことを口にしていないからな。お前は気が回るといふか、やはり優しいようだな」

「基本的に空気がこじれるのが嫌なんだよ。しかし方便か……嘘よりはマシな響きだな」

「なんだそれは……まるで意識していなかったみたいだな」

まったくその通り。しかし偏見極まりないぞ。どことなくシグナムの買い被りを感じてしまうが、俺より嘘を言わないようなシグナムにそう評価されると、素直に嬉しくはなるな。普通に恥ずかしい。

「……しかし、まさか私たち以上に綺麗事を望む人間がいるとはな」  
「俺だって現実は見ているさ。でも実際、綺麗事を貫く人間というのはそういないからな。そういう分かりやすい馬鹿がいても良いと思わんか?」

「……お前を見ると、それも悪くないと思うよ。飲むか?」

「お、ありがとう」

シグナムは冷蔵庫から取り出したミネラルウォーターを、ひよいといつ俺に放り投げる。かりつと蓋が開いたところを見ると、毒なんてものは無いだろう。一つの信頼のしるしとして受け取った。

シグナムに今言った言葉——綺麗事を言う馬鹿でいたいという俺のモットーは夏ごろになのにも言ったんだけど、俺はそれを悪いことだとは思わない。極論だが、誰もが笑う世界なんて下手したら作れるわけが無い。誰かが笑う一方で泣いているのが現実だ。みんながみんな幸せになれるのもまた無理な話だと思う。

けどだ。そうだからという理由でそれで諦めるというのも面白くないし、嫌だ。なるだけ、せめて自分が届く範囲の世界くらい、面白可笑しいものにしてもいいじゃないか。現実と向き合うだけが生き方じゃないはずだ。夢に生きるのも間違いないはずだ。勿論、夢に生きるといつても、それが自分だけ楽しむようなものなら、俺はそれは違うと口酸っぱく言うけど……あの当時のプレシアがその例かもしれない。

「……さて、なのはには悪いが、俺もここで寝泊りするか。物騒な



のが増えたから、警備は増やさんとだ。 ああーやっべ、俺の着替え完全に向こうだな……どうするか。あ、翠屋のことも考えないといかんし……」

「……しかし八高、途中で気になっていたんだが」

「どうした？」

「学校には行っていないのか？」

「……………」

今から行っても間に合わないな。時計を見なくても分かる。今日は休もう。一回ズル休みしてもバチは当たらんだろう。

さて、異様な共同生活をするに公約した以上、これから俺はここで過ごすとするか。一度約束した以上、俺も管理局との接触は極力避けんとか……厄介と言えはそうなるが、俺はシグナムの言葉を信じる。さて、今から俺もこつち側の人間だ、ここを知られるような動きだけは避けないとだな……

## 君の為に歌いたい

「ああ、プレシアさん。お久しぶりですね。さっきの綺麗な金髪の子がフェイトちゃん?」

「ええそうよ」

「ああやっぱり。目元が似ているですよー。娘さんも一緒だなんて珍しいですね」

「近くに越して来たから、挨拶回りのついでに遊ばせただけよ」

「……いいですね。すっかりお母さんしていて。でも驚きですね、職場の人も一緒だったなんて」

「初めまして、リンディ・ハラオウンと言います」

この日の桃子は、少し無理を言って店の出勤を休みを貰っている。この時間の高町家はいつもとは少し違った空気が溢れていた。桃子にとつて以前に逢ったことのある顔や話に聞いていた人と会話をするのは勿論新鮮だが、もう一人、見た限り自分と同じくらいだろう女性にも紅茶を振る舞っていた。

「よろしくお願いしますね。まあ固いこと言わずに、掛けて下さい」

「しかし、前にプレシアさんと話をした時はこんなに皴を寄せていたのに、本当すっかり丸くなりましたね」

「余計な力が抜けたというのなら、その通りね」

「今では職場での会話も棘が無いですからね。プレシアはもう少し肩の力抜いてもいいのに……」

「……リンディ、余計なことは言わないでくれる?」

「確かに軽率でしたね」

「でもさっきのフェイトさんの顔、幸せそうでしたね。ちよつと落ち着いた感じだったけど、なのはさんと顔を合わせた時なんてね」

「本当そうですねー。おまけに、八高君経由での知り合いまで来るなんてね。人の縁って不思議ですね」

実際フェイトとなのはと話をしに来た訳だけど、慣れない場所ということもあって困惑していたもの、なのはと顔を合わせたことで緊

張も随分ほどけ、今ではなのはの部屋で寛いでいるかもしれない。

桃子が口にした八高經由の知り合い——森兄妹とアルフもここにいる訳だが、八高君の知り合いならとあっさり通されてしまっている。菜摘はともかくアルフが部屋を通されたのは人の姿をしていたのは勿論、フェイトの家族さんという認識からほとんど黙認とされていた。

ちなみに、八高經由の知り合いと言われて特に正治は、不快に舌を打ったもの、気付いたのはアルフだけだった。

「でも、やっぱり同じくらいの年の友達というのは違いますよね」

「正直、少し妬けるんですよ。……半年ほど前なんですよね、なのはの大事な友達がなくなっただけで聞いて暗い時期があったんですけど、その時期を支えてくれたのが、主に八高君とフェイトちゃんのビデオレターだったから」

「……私に感謝しようとするのなら筋違いよ。行動したのはあの男とフェイトよ」

「そうなんですけどね……それでも、ありがとうございます」

「桃子さん、暗い顔してはいけませんよ」

「そうですね。でも、最近少し不安なんですよね」

「不安、ですか？」

震えこそ無いが、桃子が持ち上げたカップから異様な重み加わったように、少し頼りなさげな振れ方をした。……同様に、桃子も不安げに表情が翳りを覆う。

「……最近、八高君が帰ってこないんですよね」

その一言に、リンデイとプレシアはぴくつと眉を動かした。

——そう、既に八高輪が行方を暗ませてから二日も経っている。管理局に連絡が無いことに先行きを曇らせていたことで不安があったことから、反射的に反応せざるを得なかった。

「あ、でも連絡はあったんですよ」

「連絡……!?!」

「なにを言っていたのですか!?!」

「え、ええつと……理由は言えないけど、しばらくそっちに戻れな

い、て」

「なのは、新しいデバイスだ」

「ありがとうございます」

「なのは、そこは『元気百倍！ 高町なのはっ！』すよ？」

「菜摘、そのネタは色々状況が悪くなるから止めとけ」

「？ はいっす」

「はいフェイト、新しいデバイス」

「ありがとうアルフ」

しばらくは緊張をほぐすという意味合いで近況を話しつつ、中身の無い駄弁りをしていたけど、部屋に来て一段落したところで、菜摘はなのはに、アルフはフェイトにデバイスを手渡す。

フェイトに渡されたのは、機能性を重視しレイジングハートの待機時と同様のネックレス状の金の宝石。見様によつては済んだ満月が首元から下がっていると思えるほどの、濁りの無い金色。神々しいというより、その光からは気品を漂わせるような、清白さが溢れていた。

「バルデイツシュ、フェイトを覚えているかい？」

『Of course』

「え、今のはバルデイツシュの……声？」

「アタシも驚いたよ。なんでも、バルデイツシュに蓄積された戦闘データだけじゃなく、バルデイツシュの回路や記憶まで丸々移植していたんだ。性格もそのまま、以前のバルデイツシュと一緒だって」

「そうだったんだ。バルデイツシュ、おかえり……」

まるで大事な宝物が帰ってきたことを認識するように、フェイトは金の宝石を握り締める。なのはも同様に、姿こそ変わっているもの手の中の待機されたデバイスを眺める。

……以前なら憎々しい相手だったが、今の正治はその笑顔に対して湧いてくる負の感情は無かった。

「時間もあつた説明するぞ。少なくとも技術部ではバルデイツ

シユ・フォースフェイズという名前が認定している。菜摘のデバイスの構成要素を二つ転用させている試験機だ」

「試験機？」

「統合型アームドデバイス、と言われてもオレにはよく分からんが、とにかく、ただのアームドデバイスじゃないのは確かだな。まあ今はそれは置いて、汎用性を重視しつつもあらゆる戦況に対応出来るよう四つの特化機能を搭載している。そして、それぞれの機能の底上げと闇の書の守護騎士——ヴォルケンリッターへの対抗手段としてベルカ式を採用している。試験機と呼ぶのは、未知の要素を加えた部分が大きいからだ」

「それって、ベルカ式と菜摘ちゃんのデバイスから、という……？」

「そうなんすよねー。おまけにジブンのデバイスからの技術を移すのが一度しか許可出来ないという構造みたいすから。まあでも、『解析』の搭載は勿論すけど、機能変形にかかる時間はマトリヨシカの『変換』が元になっているから、一秒くらいですぐに形が変わるんすよ」

「正確には1.6秒だけどな。けど楽観はしない方がいい。あくまで稼働実験に対しては結果は出せているが、彼女たちとの実践となるとなにがあるか分からない。問題があれば即見せてほしいそうだ」

「はい」

「それと、分かっていると思うが、それぞれが特化した機能にしても」

「機能特化したものだから、冷静な状況分析が求められる、だよな。私も性能実験をしたことあるから、分かっているよ」

「そうだったな。じゃあ、あくまでの変更点の確認ってことで」

「はい」

「いやあ、やっぱり正治連れてきて良かったねえ。アタシや菜摘じゃ長い話苦手だし」

「仕事が増えるよ、やったねあんちゃん」

「おいやめ……いや、うん……やっぱやめろ」

不定的に菜摘が無意識なボケを挟んでくることで、場も適度に重く

ならずには済んでいる。……なのは口にしないが、八高による適度なボケを挟んでは極力真面目で思くならない空気づくりに慣れているせいで、今の室内を漂う空気に対して、八高と似たニュアンスで重い空気が苦手意識を持っていた。かといって、なのはには八高ほどの遊ぶ才能というのは足りていないことも自覚しているから、真剣に話を聞くにはいいかもと割り切って首肯をしていた。

「さて、なのはののだが……完全にリクエスト通りだ。本当にそれで良かったのか？」

「いいんです……」

「でもそのデバイス……元々はクロノの」

「大丈夫。わたしも踏み出したって思ったから」

なのはの手の中には小さな赤い球体——は無く、小さな名刺状のカードのような白い薄型があり、その中に赤いレイジングハートが組み込まれている。待機時のその姿は色は違えど、まるでクロノのS2Uと同一だった。

「……ベルカ式は搭載せず、クロノのS2Uにレイジングハートを移植してからの性能向上を施した程度の性能。本当にこれでいいんだな？」

「いいんです。正治さん、ありがとうございます」

「オレは別に大したことはしてない」

「あんちゃん、ガム噛むすか？」

「なんでこのタイミングでガム!？」

実際、クロノがいなくなっただけからなのはは強く言ったことがある。フェイトちゃんにしたように、わたしは極力戦うことはしたくない。最悪の場合そうなったとしても、まずきちんと、お互いのことを分かり合った上でそうありたいと。森兄妹の視点から言えば、なんというクアータムシステムだと感動も一際だった。勿論、相手を傷付けるためにもいかないから、魔法を撃つとしても相殺させるという自衛程度しかする気は無いという。

「でもさ、なのはが選んだのは普通に戦うことよりずっと難しいことだよ？ 分かってるかい？」

「アルフさんの言うことも分かっています。でもわたし、そうしたいって決めたので」

「そうかい……なら、なのはのしたいようにすればいいさね。後悔の無いようにさ」

「アルフさんも八高さんと同じこと言うんですね」

「なんだろう、そこはかたない残念感が……」

「え、どうしてです!?!」

ともあれ、場は一向に重くもならず真面目すぎにもならず。ある意味で森兄妹のやり取りとフットワークの軽いアルフがいての絶妙な空気が保たれていた。

……うん、これなら大丈夫だよ。なのはは広い意味で内心でそう呟いてから、カード状のデバイスにもう一度眼を向けた。陽光を反射させた白い薄型は、持ち主の言葉を待つように、静かに手のひらに納まっている。

「姿が変わったけど、レイジングハート、かな?」

『Yes』

「ごめんね、これからは新しい名前と呼ぶけど、許してくれる?」

「新しい名前?」

「意外だな」

「勿論、レイジングハートのことはずっと忘れないよ。でも、みんなから得た勇気や心、想いの全部はここにあるから。だから、我が俣だけど、これからはわたしの想いを君に託したいの。いい?」

『If it is a wish of the master  
I do not mind』

「ありがとうレイジングハート……」

なのはは左胸に手を置いたまま、一度、大きく深呼吸をする。

込めるその名前はこれからの自分に対するいろんな決意の全てを込めた名前。きつとわたしは、彼を忘れることは出来ないかもしれない。だから、これからは痛みを風化させる為じゃなく、本当の意味で忘れない為に、その名前を呼んだ。

「ううん、これから宜しくね——S4U」

『All right』

この名前うたは、かつて好きだったあの人の為に詠ぶ。それが、なのは一つの決意だった。その意味が分かったからこそ、この場の誰もが、口を挟むことは無かった。

「……そう言えば思い出したんですけど、正治さんって確か無限書庫で調査じゃないんですか？」

少なくとも、フェイトとなのは側からすれば話と少し違うことに今更気付いた。しかし、知っている三人からすれば、苦笑いながら両手を広げるだけだった。

「いや、やる気があるのが一人、オレとの交代を名乗り出てな。かと言って緊急事態に動けるほど回復してないから、とりあえずリハビリがてらで動きたいからだそうだ」

「クロノ、もう動いて良いのかい？」

「ぼくだけ休む訳にもいかなからな」

「しかし、私とシルヴァちゃんと一緒にさせるって案外融通効くんですね」

「私も意外。きっちり分断させると思っていたから」

「随分穏やかになったんじゃないかい？」

「……否定出来ない自分に悲しくなるよ。けど、君が効率良くなるなら、ぼくもなるだけ善処しよう」

「なんというか、この頃のクロノさんは結構義理堅いんですね」

「……シルヴァ、それってぼくがああ無鉄砲と似ているという意味じゃないよね？」

「良いんじゃないかな？ 冷血な人って呼ばれるよりは」

「ユーノまで言うか……そもそもぼくは冷血でも無い」

このはにしてみれば当然の感想だが、クロノ執務官は溜め息を吐いた。青臭いというのは正に行方知らずのあの男の為の言葉であって、



自分は彼と違う。綺麗ごとを愚直に貫こうとする彼とは違う。自分  
は実直にことを果たすだけだ。　　…と思っていたのにとクロノ執務  
官は頭を抱える。

それとはまた別で、クロノ執務官はその光景に眼を向ける度に驚か  
ざるを得なかった。執務官自身速読には自信はある方だったし、シル  
ヴァがそれなりであるものも分かっているし、こうして見るとユーノ  
の能力も頭一つ抜けている。だが、明らかに高敷このはは群を抜き、  
頭一つ出ているなんて表現すら追いついていなかった。ようやく  
ユーノとで比較になるという能力を見せているが、そのユーノとの差  
ですらまるで違う。ペースで言えば15分ほどで一冊を詠み終えて  
いる。恐ろしいことに、彼女は恐らく投げ寄りに読んでいるようにも  
見えない。中身を理解をした上での速読だった。

読んだ本が既にこののはの隣に並んでいるが、よく見てみると、どれ  
も一定の単語が並んでいる。簡単に見ただけでも『記録』と『日誌』と  
『手記』という文字が映る。執務官からすれば一貫性がまだ見えてい  
ない。

「このは、声をかけていい?」

「気が散るのでユーノさんはそのまま静かに頑張っていて下さい」

「なんか冷たくない!?!」

「ぼくなら良いかい?」

「すぐに済むならいいですよ」

「なんでクロノは……うん分かった。静かにしておくよ……」

「あれは流石に哀れだな……さて、このはが今まで読んだものの共  
通点は?」

「手記の類ですね」

「そこから得られる根拠はあるのか?」

「……イレギュラーの報告を聞いて、おかしいとは思いませんでし  
たか?」

「おかしい、というと?」

「例えばねシルヴァちゃん、敵対する魔導師の特徴を連絡する時に、  
どんなことを話す?」

「ええつと、まず見た目や性別で、戦闘方法や所持するデバイスに……魔力量の大まかな計算、かな？」

「大体そうだよね。でも、イレギュラーから一つ聞いていない情報があるの」

「——あ」

言いながらもこの手は止まらない。眼と口を一頻り動かしながら、またページをめくる。

このはの言いたいことに感付いたクロノ執務官とシルヴァ。しかし、そうだという確証があまりに無さ過ぎる。仮にそうだったとしても、根拠なんて微塵もないし、その存在すら聞いたことが無い。

「でもこのは、いくらなんでもその可能性は」

「あまりに突飛だと言いたくなるのは分かります。私もまさかかって思っていたけど、可能性に賭けたらちようど今当たりが見つかりました」

このはは、読みかけのはずの、ところどころ擦り切れた手の中の本を閉じる。本の表紙には『クシヤナ・マトウの手記』と擦れた文字で手書きされている。シルヴァも執務官も、このはの次の言葉を待つ。

内心で自分でもこじつけな部分はまだ残っている。だけど、大部分だけを言えばほとんどそうだという確証もあった。

「このは、それってやっぱり……」

「これまでのこの世界での状況と重ねるに——今のアリシアさんの正体は、十中八九、寄生したデバイスだね」

寝不足の時は元気有り余ってもまず寝てください  
お願いします

「イレギュラーの情報が掴めた、というのは本当ですか？」

「はい。その線で考えても問題無い自身があります」

局長が揃うブリッジの中、寝不足半分で眼を細めるこのはは、煤けた手記を片手に佇んでいる。全員の眼が集まる中緊張を示すことなく、むしろ「視姦されてるやだー！」という余裕綽綽な心境で一度ずつ全員に眼を配った。

「重要なところは付箋していますので。艦長、見てみてください」

「分かりました」

「それで、ジブンたちが襲われたのってなんすか？」

「結論から言いますが、アレはアリシアさんに寄生したデバイスです」

「デバイス!？」

「それって、ユニゾンデバイスとは違うのかい？」

「正確に言えば、インテリジェントデバイスを雛形にしたユニゾンデバイス。それがイレギュラーの正体です。ちなみに、本来の形状は製造時に発想の元になった闇の書に倣って、薄型の真っ黒なカードだそうです」

「なるほど。完全に人工物な闇の書、ということか」

「……ぼくの耳が痛いよ」

アルフの素っ頓狂な声に冷静に返す傍で、リンディはページを付箋のところまでめくる。クロノ執務官は自分の所持していた待機時のデバイスの姿を想像して、悩ましく息を吐く。少なからず、そのイレギュラーの名前に親近感のあるこのはにとっては、気を緩めば噴き出しそうな名前だったことで、一度息を整えてから続ける。

「デバイスの名称エンヴィキヤットウォーク。 …ボカロ乙」

「？」

「いえなんでも。デバイスの能力は——魔導師のレアスキルの複写です」

「？ ええつと、それってどういう用途なんだ？」

「……デバイスの所持者に関係なく、コピーされたレアスキルを使用出来るということですよ」

「当初は、マスター登録とは違った方法で魔導師と融合し、レアスキルだけを複写するというコンセプトだったみたいですけどね」

正治の質問に対して、隣から割って入られたリンデイの声が、なるだけ伝わりやすく発した。

レアスキルの使用……例えば、レアスキルを持たない魔導師がそのデバイスを持てば、その性能次第では上位の魔導師を名乗ることも容易いかもしれない。聞かれた事実の重みに気付き、更に一同は沈黙を発することしか出来なかった。事実上、戦闘にのみ使用させ、その結果が示すものは、間違い無く喉を通す唾を硬くさせるだろう。

「なにが凄いつて、元局員の技術者が民間の施設で数年かけて造ったデバイス、というのものが酷いのなんですよ」

「……顛末も中々に悪いものですね」

「なにが書かれているんだい？」

「中身事態はエンヴィキャットウォーク……いえエンヴィの製造の経過観察が主なんですけど、途中からとんでもないことになっているんですよ」

「とんでもないこと……」

「細かい過程は省きますですけど、元管理局の技術者トーマス・キットを筆頭に助手のクシャナ・マトウを含めた有志僅か四人で年月をかけて造ったデバイスです。元から強い魔導師へのサポート色が強いデバイスを強化しようとした新たなタイプのデバイス製造を画策してたみたいですけど、ある日クシャナが口にした『魔導師のあらゆるレアスキルを取り込み、所持者と共有させて発動させるもの』をきっかけに、年月をかけてまで製造を行ったそうですね」

「そして先ほどこのはさんが言ったように、トーマス・キットはふと

思い出した闇の書をモチーフに長い時間をかけて製造し、レアスキルを持った魔導師の知り合いを集めて実験を重ねながら改良されたようですね」

「レアスキルの総数は？」

「書いてある限りでは23のようですけど、充分に脅威ですよ。極論すれば、一つの魔法にそれだけの要素全てを組み込めますからね。炎属性と氷属性の同時付加も出来ると思っただけかもしれないですね」

既に手記の詳細をそらんじれるほどに記憶したこのはは、頭の中でまとまっている情報を開示していく。聞けば聞くほど、相手にしているイレギュラーが『脅威』という表現を踏み越えている。まるで絶望だなど正治は思ったが、口にすれば場の士気に影響が出ることを鑑みて、奥歯を噛み締めることで耐えた。

「話を続けますね。改良を重ねた改良によってデバイスとしての性能を超え始めた頃に、エンヴィの性能の限界に挑もうとあらゆる技術を投入したそうです」

「どうにも嫌な予感がするな……」

「クロノさんの言う通りです。デバイスに与えた学習機能によって彼らの言葉を理解し、その言語を操るようになった。それだけじゃなく、さらに学習機能が時間をかけることで、『融合』から『寄生』による変化までしたんです。極めつけに知恵を得たエンヴィはある日、こう言い出したそうです——『デバイスを解さなければ碌に魔法も扱えぬ魔導師風情より、自分の方が遥かに優れている、と』

「まさか……デバイスが反旗を……?？」

「まるでSF映画だな」

「……それがきっかけで、クシヤナは製造の中止や破壊を強行しようとしたもの、トーマスはエンヴィの成長に心を躍らされ狂気に走った末に、親友の言葉を無視して製造を改良を続けています。そして、無理にでも破棄しようとしたクシヤナは……」

「クシヤナはどうしたんだ？」

「……施設に訪れたクシヤナは、親友がエンヴィを取り込んだ瞬間の現場に立ち会ったみたいです。集まっていた有志を皆殺しにし

て」

誰からとなく「うわあ……」と小さく漏れた声が響いた。実際想像すると、その光景は悲惨なものかもしれない。見慣れた親友が人を殺しているんだ。眼を疑うどころか、理解が追いつけないのかもしれない。

「すぐにエンヴィに乗っ取られた気付いたことが幸いして、すぐに対応出来たことも大きいんですけど、なにより、未完成な状態だったことが一番の奇跡でしたね」

「え、あれで未完成なんすか!?!」

「記されていた限りの完成形というのが、闇の書のような融合型のデバイスで、魔導師の血だけでの登録でレアスキルを魔導師の身体を取り込むというものだったんですけど、破棄を恐れたことで完成前に自分が所持させたようですけど……まさか乗っ取られるとは思っていなかったみたいですね。ここでのエンヴィは名前と血での登録のようです」

「充分タチ悪いよ」

「そうでなくても、虚数空間の魔力によってマイナスが差し引かれていますけどね」

「どうにもクシヤナ・マトウは、破壊しようにもあの能力のせいで命を落としかけたようですが、起動直後もあつてか機能不全に陥れる装置も作動され、動けない隙に破棄……出来なかったようです」

「マジすか!?!」

「……親友の顔をしていたから、つてかい?」

「そうです。アルフさんの言う通り、親友の姿をしたデバイスを諸共破壊することが出来ずに、そのまま虚数空間に破棄したのです」

「その後、結果変わらない親友殺しの負い目から施設や資料に至るもの全て焼却し、クシヤナも自殺」

「まったく、後味の悪い……」

クロノ執務官は胃の中の埃を吐き切るような、重い溜め息を深く溢す。

しかしなるほどなど、局員は理解した。完全な自我や意志を手にし

た危険なデバイスが正体ということなら、やはり「破壊」が最優先されるだろう。

その中、腑に落ちないというようにユーノが繋げる。

「待ってこのは。それだと話が終われないよ」

「地球にあのデバイスが存在する理由が無いこと、ですよね」

「それは半年前の次元断裂と断定して良いでしょう」

このはが続けようとした隣で、リンディが割って入る。「ごめんなさいね」と断られては、このはも言及しようが無くなり、残りを艦長に任せる。恐らくと予想するまでもなく、頭の回る艦長ならば自分と同じ考えだろうということは、先の回答で理解出来ていた。

「断裂ってあの時の…?」

「断裂の瞬間、魔力の噴出も確認されているでしょう。その衝撃によつて吹き飛び、アリシアさんと地球に辿り着いた。そう考えれば辻褄も合います」

「……確かにそうですね」

「魔力に虚数空間の要素があるのも、恐らく虚数空間に漂流したことによる変異と考えて良いでしょう。謎も含んでいる空間なので、当然らずも遠からずとして考えることが妥当ですね」

「まるで深海魚だな」

「言い得て妙ですね。深海魚と表現するなら、虚数空間にいたことでマイナスになっている部分もあるはずですよ。極めて特殊な性質をしていますが、海面から上げられれば異常変化で死に至ることもありません。なにか欠陥も抱えていると想定しても間違いでは無いはずです」

「あながち、勝てない敵という訳でも無いようだな」

「ですが、エンヴィにとつて虚数空間の魔力と20のレアスキル所持というのは、大きな利点です。差し引かれても対等とは思わないで下さい」

「……ですね」

「分かりました。このはさん、大変助かりました。寝不足が見られますので、このはちゃん、シルヴァちゃん、ユーノ君にクロノは自室での待機を命じます。反論を聞きません。いざ動く時に動けないの

で元も子もありませんから、特にこのはちゃんは、しつかり休んでください」

「う」

「シルヴァさん、このはさんが無理をするようなら止めて下さいね」

「はい」

途中から気付いていたとは、名指しで自分が釘を刺されたことにこのははびくつと肩を上げてしまう。このはに関して言えば、怪我をしたなのはやフェイト、クロノ執務官への治療からの繋ぎで資料探しまですしているのだから、既にある程度の無茶をする性格だなということに感付かれていた。

四人は自室に戻りながら、ある一つのことを頭から離れなかった。ひよつとしたらこれから話すだろうか……なんにしても、先送りの出来ない問題というのがある。

「では、イレギュラーの情報を確認します。名称はエンヴェイキャットウォーク、これよりエンヴィと呼称します。能力の方も——虚数魔力と詳細不明の23のレアスキルを所持。目的は魔導師と人間の殲滅と見なし、破壊します。ですが、名前と血によって魔導師への寄生も可能としているので、対峙した際は絶対に名前を呼び合わないで下さい。また、手記の中ではデバイスの適合推奨ランクがA+以上となっているのです、該当する魔導師は特に注意して対応して下さい。現状なのはさんが狙われているので、なのはさんの警護も怠らず対応も出来るよう一人での行動は禁止します。宜しいですね？」

「はいっ！」

「……………」

「……リンディ艦長、一つ確認しても？」

「どうかしましたか？」

リンディ自身、なにを言われるのかは既に知っていた。というより、この場の全員が気付いていたことだが、口にすることを躊躇っていた。だけど、誰かが聞かなければいけない。今更泥を被るくらいなんだと腹を括った正治が、一番の疑問を問う。

「デバイスの破壊命令は分かりました。しかし、アリシアはどう助



けるのですか？」

「……………」

この場にプレシアがいないことが幸いだったと言わんばかりの沈黙が、艦内にうるさく響いた。

「頭痛がする。は…吐き気もだ…くっ…ぐう。な…なんてことだ…この紳士が…気分が悪いだど？ この紳士がああ悪い夢に苛まれて…寝ることが…寝ることができないだど!?!」

勘違いしてはいけないが、決してテンションが高い訳でも、時間を止められる前に殴られた訳でもない。っーか今夜中の一時だぞ。流石に小声だから安心していいからな。ローテンションを誤魔化しただけ。

…：…どうにもあの夢を見てしまったせいか、寝るたびにあの光景が夢に出てくる。おかげで、八神家に（半ば勝手に）居候してから安眠は一度も無い。当然だけど、この家の住人が悪いとかそんなのはちつとも無い。

あ、そつか。俺今八神気に住んでいるんだよな。家に誰もいない時間を狙って必要な荷物だけを持っていったから、部屋を開けられたら空き巣との仕業と思われるかもしれない。まあ連絡もいれたし、いない部屋を覗く用事なんてあんまり無いだろうけど。ちなみに、今の俺の寢床はリビングのソファ。空いている部屋もないし、ザフィーラと同じ部屋なものなにか落ち着かないので、ひとまずはということ。…：…まさかとは思うが、寝不足の原因はソファで寝慣れてないせいもあるのか？

『軽口のせいで余裕に聞こえるぞ?』

「余裕が欲しいから言ってみただけだよ」

『違うない。しかし、貴台も難儀な選択をしたものじゃな』

「まったくだ」

ちなみに、アヴァロンの機能はこの通り回復している。直撃を免れ

たことと、元から機能回復に特化している能力にもよって昨日の朝方には普通に喋れるようになってる。今では普通に扱っても支障は無いとか。流石神様手製のデバイス。

それともう一つ、今の俺は魔法は使えない。断じて少年という年齢を越えたから魔法を使えないとかそんなメルヘンな理由ではない。はやてへの協力として、俺のリンカーコアを抽出した影響だ。まあ、その後しばらくはやばい気分悪かったけど。なのはとフェイトがこれをされたのかと考えると、また胃の中がかき混ぜられたようなあの不快感を思い出してしまう。はやてにバレると心配されるどころか、ヴォルケンたちが剣幕を張られることになるから、暗黙としている。この状況のせいか、ヴィータが俺の命を狙ってくるのが無いのは本当に小運かもしれない。

……いかんいかん。違うことに意識を向けよう。ちらつとも思いう出すと吐きそうだ。軽く上着を羽織ってから、ベランダの手すりに腕を乗せながら、少し青白い月を眺める。ほとんど明かりは落ちていると思っただけ、まだ残っているところもある。

「いやあ、月が綺麗だな」

『ほう、小生を口説くか?』

「なんでや! 今のは漱石先生関係ないだろっ!」

『存外知っているようじゃのう』

「なんかネットで見た覚えがあるだけだよ」

『知った顛末など些細なことじゃ。知識として得ることが重要じゃ』

「良い事言う」

うろ覚えで申し訳ないが、かの偉人夏目漱石が先生をしていた頃に、生徒から「I love youの和訳は?」と聞かれた時に「月が綺麗ですねとか言つとけばいいんだよ」的なことを言ったのが理由だとか。乱暴な説明になったがまあ大体合ってたと思う。軽い暗喩みたいなもんだと思ってくれていいかもしれない。

『……ここにきてそう日も経っていないというのに、随分馴染んだものじゃな』

「約一名にからは敵意バリバリだけどな……確かに特訓まで付き合ってくれるまでは嬉しいんだが……ねえ？」

『成果が上がらずに士気に障るか？』

「それもあるが、どっちかというところと楽しい」

『楽しい？』

「なんていうか、特にシグナムは剣の師匠って感覚で戦えるから、どうにもお前を振れるんだよな」

『よもやと思うが、斬る気か？』

「それだけは死んでもありえん。あくまで寸止め前提だよ。一本とつてぎゃふんと言わせたいだけさ」

『……貴台が勝てぬ理由が理解出来たかもしれないな。……む』

「言いたいこと言って、なに思い出したんだ？」

『迂闊じゃった。一番話すべき要項が抜けておった』

「え、なにに。今度はどんな情報が？」

『端だけを述べれば、小生にはデバイスとしての進化機能を有しておる』

「………もちよつと説明を」

『本来のデバイスなら技術者の手を借りての改良じゃが、小生は戦闘による経験を重ねることで進化を可能としている』

なんとファンタジーな……流石は神様手製のデバイス、なんでもありって言葉も大概許される気がする。ていうか、

「おおい！　なんでそんな大事なことを忘れてたんだ!？」

『………貴台の動向は眼を離せば危ういから、語る隙も無かった』

「なんだ今の間は!?!　さては本当に忘れていたな!?!　まさかのドジ属性持ちだったとは驚きだぞ!?!　なんかお前に可愛げを感じたぞ!！」

『五月蠅いぞ!』

「なんや元気な声が聞こえるなあ」

「お、はやてか」

知らないうちに声がかくなってしまったせいか、それともはやても寝付けなかったのか、気付いたら俺の隣まで車椅子を漕いでいた。こんな時間だというのにさっぱりしている表情を見ると、偶然眼が覚

めたのかもしれない。

「眠らなくていいのか？」

「八高さんこそ。こんな時間まで夜更かし？」

「俺は大人だからいいの」

「なんやそれ。そんな年違うのに」

「気にしない気にしない。それに俺は、星に見に起きたただけだぞ」

「じゃあわたしと一緒やな」

オーノー。別に気まずくはないが、なんとなく一人になりたかったからこれはちよつと予想外な運びだぞ。特にお構いなしにとはやは隣から見上げている。

月が綺麗だなあとと言ったけど、晴れていたおかげで転々と光る星空もよく見える。いやあ、こうしてのんびりと星を見るのは久しぶりかも。寒くなくたって聞こうとしたけど、既に服装も充分に整っていたから、今はよしておく。くしゃみの一つでもしたら、即座に上着でも渡すかね。

「……折角二人なんやし、八高さんのこと聞いても？」

「俺のこと？」

「よく考えたらわたし、八高さんのことほとんど知らないから、色々知りたいなあって」

「俺のことねえ……話してって言われても、なにをどう話したのか……」

「それじゃあ、どうしてそんなに楽しいことを思いつくのか、知りたかな」

「ああ、そつちかあ……出来れば避けたいところではあるけど……」

「なにか嫌な思い出があったん？」

「うーん……嫌な思い出が今の俺があるって感じだからなあ……」

「あ、ええんよ。無理に話さなくても……」

「……いや、話すよ。俺としてもきっかけにはなったし、話してちよつと気楽になりたいからね。色々ぼかすけど良いか？」

申し訳ないと思ったのか、はやては控え目な表情でこくつと頷

く。う、そんな顔しないでくれって。本当に俺が話したいだけなんだからさ。

……それに、最近はその頃のことにも悩まされている。話して気楽になりたいのもまったくの本当だ。うーん、俺って意外に女々しいというか、吹っ切れてなかったんだな。

「……………そうだなあ。詳しくは言えないけど、俺が原因で家庭崩壊しちゃってさ」

「え、家庭崩壊…?」

「崩壊というか冷めさせてしまったというか……………まあここは俺が全面的に悪いからなにも言わない。とにかく、俺が家族の空気を台無しにさせてさ、家についても誰とも会話しないって日というのは普通のことだったんだ」

「……………」

「で、ある日さ。友達にすっげえ心配されたんだよ。今にも死にそうな顔して大丈夫かって。おまけに少しも喋らないから、放って置いたら本当に死ぬんじゃないかってくらい周りから言われてさ。俺自身相当参っていたから、弱音がたらに友達の家に住まわせて欲しいって頼んだら、了解してくれたよ」

……言うつもりは無いが、あのままいけば自殺は本当に有り得たかもしれない。しかし、あの環境で暮らしていたら、否応に会話事態が減り同時に笑うことすらもなくなってきたのだから、恐らく俺が思う以上に、周囲からは危うく見えたのかもしれない。

「不思議なことさ、それから毎日が楽しくなってきたんだ。学校生活もなんか微妙だなんて思ってたけど、これがまた友達とバカするようになってさ。家でのゲーム、ボーリング、しりとり、新聞紙でのチャンバラ……………なんでもしたな。おまけに、友達の家でも良くして貰ったりとそれはもうお世話になりまくり」

「……………苦労、してるんやね」

「中々にな。でさ、散々友達に助けられてから俺も思うようにしたんだ。俺も自分がされたように、人を楽しませたいって。笑うと楽しいとか笑うから楽しいとかそういう哲学は抜きにして、楽しいのが一

番良いんだって思えてさ。だから俺は、人の嫌な顔とか寂しい顔って嫌いなんだよな。誰だって幸せにしている、楽しく笑ってるのが一番だ。俺は本気でそう信じてる」

「……………」

「ちなみにだが、その時期の俺ってかなり自重した性格でさ。友達から言われたんだよ。お前には主人公成分が足りないって。だからアニメや映画やら、とにかく色んなものを見ろって言われて見た影響だ。そうして俺は、先人たちから意識を受け継いで、紳士を目指すという経緯があった、という訳さ」

作品の主人公というものの大まかな共通点は——個人的な意見だが、みんなそれぞれ、誰かを守る為に戦っている。割と見えないものの為に戦う人物というのものもあるが、その根幹を辿れば、意外と人に繋がっていることだってある。難しいこと言っちゃって、人って意外な単純だったり。けど、そういうのでいいんじゃないかって個人的に思ったりしている。偉そうに言えば、人が人以上になるのは普通有り得ないし。

余談だが、俺が目指すゴールはジョナサン・ジョースターですがなにか？ 問題がまるで見当たりませんねえ。

「……八高さんは凄いね」

「きっかけがあつて変わったただけだよ。俺は運が良かったただけだ」

「そうかもしれないけど……でも八高さん、それでええの？」

「え、なにが？」

「他の人を楽しませるのもええんけど、自分はその輪に加わらないのは、寂しくない？」

「え、ちよい待ち。俺そんな寂しそうな印象？」

「なんとというか、一歩引いて楽しい様子を見ているような……そない雰囲気……」

俺ってそういう印象なの!? てつきり一緒に楽しんでももの思っていたが、まさか一歩引いていると言われるとは……いや、自分では気付かなかったから、余計にビツクリなんだが。今度誰かに聞いてみようかな。

とはいえ、俺なりに場の状況を楽しんでいるのも本当だ。それを言わないとなにか誤解されたままになってしまう。

「それは違うぞはやて。俺なりで場の空気を満喫しているぞ。そうだな、はやてが笑っていれば俺はそれで充分だ」

「ま、また八高さんはキザなこと言う……!」

「本音だからしゃーないって……」

「ああもうそないこと言って……他の人にそんなこと言って、彼女さん困らせてない?」

「彼女?! どっからその発想が!」

「え、だって八高さんって彼女がいそうな……」

「はやてに本当のことを話そう……俺に付いて来る彼女は誰もいなあいつ!」

「え、そうなん!」

「勿論☆」

いかにも余裕ぶって返したが、内心1ー1ラウンド突入のボクサーぐらいボロボロだった。ていうか泣き喚いている。俺はロリコンではあるが、それとは別で彼女が欲しいのという男としての願望もありましてねえ……俺だって人並みな部分はあるわい。はやてからは眼を丸くされるが、なにがそんなに意外なのかがまるで分からない。

「はあ……それで八高さん、わたしにプロポー」

「ちよい待った! 自分で傷口を広げるんじゃない!」

自分で言ってる赤面してるよこの子! しかし可愛いなあ! どれおれ、ここは一つ俺がファミレスで美味しいご飯奢ろうか? とはいっても、はやてのご飯の味以上は保証しづらいが。この場にシヤマルさんがいたら、なんともネタにされそうなり取りをってしまったが、これは危なかったぜ。

「でもわたし、八高さんなら良えかなあつて……」

「おおうふ、そろそろ冷えてきたな。ああすまん、なにか言ったか?」

「あ、ううん、なんでも! 八高さんおやすみな!」

「おおく、おやすみ」

半ば欠伸も出たし、そろそろ頃合だな。これ以上駄弁ると明日の朝に差し支えてしまう。特に朝食に影響が出たらヴィータに八つ裂きにされてしまうから、俺もこの辺にしておこう。

足早に車椅子を走らせるはやての姿が見えなくなるまで、軽く手を振りながら見送る。一度も振り返らないのは、きつと小声で溢したあの一言だろうか。

「い、いやあ……まさかな」

俺なら良いってなにがですかい？ あの感想を真に受けたとしたらそれは由々しき事態ですぞ。俺の生存率が上がるか死亡率が上がるかの極論しかないぞ。ていうかはやてよ、結婚なんて本当の先の長い話だからあれはもうスルーして良いと思う。そうじゃないとしたら、普通に交際してもいいってか？ ……いやいやいや、願っても無い話だけど、はやてほどのスペックならもつと良い人いるからな。

「……もういいや。寝よ」

なんか一つ冷静になった。なるほど、つまり今のはやては、周りが作った変な空気に流されていると見た。それは恋じゃなくてただの気のせいだから。吊り橋効果みたいなもんに上手く嵌っている気がする。今度はやてからそういう発言があったら一言言おう。

……そろそろ欠伸も止まらなくなってきたし、もう寝るか。さあ、まだ知り合いになれないソファの居心地とレッツ対話としよう。

さて、明日はこれから向けてあれこれと手を回すし。さて、本格的に管理局に足の裏向けることになるが、そこは許してくれるだろうか……ぶっちゃけ難しいな。人助けて名目があるうと闇の書の持ち主ってだけであまり良い印象は持ちにくいし……だからここは、俺がやってやろうじゃないか。

なんにしても、決行は明日だ。明日を以って俺は、しばらくは向こうとやり方を違えてしまう。だが敵になるつもりは無い。まあ、明日の楽しみ……になれないがとにかく動くのは夜が明けてからだ。

……うわあ、高町家もそうだが特になのはを裏切るようなことはしたくないが、はやての為だ。正直ごめんと内心で呟いてから、また寝心地の不慣れだろうソファに身体を横にさせる。



そりやあガちな面倒事に友達を巻き込みたくないで  
しようよ

「……うーん」

「大丈夫なのはちゃん？」

「もしかして、アホ先輩のこと？」

「……電話で無事とは言っていたけど、やっぱり帰ってこないのが心配で……」

「大丈夫だよなのは。八高さんなら上手く過ごせているはずだから」

学校が終わったその帰り道、薄暗いオレンジの夕空と似た、どうしてもなにか楽しみに欠けてしまう気分になってしまおう。おかーさんから聞いた限り、八高さんはしばらくは戻れないという。どんな用事があるかは分からないけど、とにかくしばらくは高町家にはいない。

……どのくらいしばらくかも分からないから、不安にも覚えてしまおう。シルヴァちゃんからも一つ気になることを言われたし、尚更にぎわざわしてしまう。

確かに家には八高さんはいないけど、それと入れ替わるように学校にはフェイトちゃんが編入している。皮肉というか、事件の日には既には編入手続きもし、今ではクラスにも馴染めている。そして今、放課後にアリサちゃんとすずかちゃんを加えて、フェイトちゃんも一緒に歩いている。アリサちゃんとすずかちゃんも、特に邪険にすることもなく普通に接しているからフェイトちゃんもあんまり戸惑い無く、落ち着いて会話している。

「なのはちゃん、おにいさんとの一緒の空気に慣れたちゃったみたいだね」

「先輩はアホだけど、確かに人を楽しませることを大事にするからね」  
「……うん」

「八高さんのこと好きなんだね」

「ふえ、フエイトちゃん！」

「ちよ、ちよつとなのは！ あれ！」

「確かに八高さんのことは好きだけど、気の良いお兄さんとしてであって！」と思っていることを返そうとした時だった。

学校の正門の前でのんびりとたこ焼きを頬張るその姿に見覚えがあった。……やや目深に被った帽子をしているけど、聖祥大附属中学の制服を纏いながら、猫舌ならではの入念に息を吹きかけるその姿は紛れも無く八高さんだった。

「お、なのは。それにアリサとすずか……んん!? フエイトここの学生だったのか!？」

気付いた八高さんは、まだたこ焼きに息を吹いている。流石にもういいのでは……でも、相変わらずな姿が見れたことに、内心で強く安心してしまう。どうやら、フエイトちゃんが編入する話はまったく聞いていなかったみたい。一応管理局内では話に出たと思うけど……もしかして聞いてなかったのかも。フエイトちゃんと同じタイミングで、少し噴き出してしまった。

なんだか呑気なことを考えていたら、アリサちゃんががごと勢いよく八高さんに詰め寄る。

「アホ先輩！ なにしてたのよ！ 急にいなくなったのに、心配かけさせないでよ！」

「ま、待ってってアリサ！ 今からそれを話す。……とは言っても、細かいところは言えんけどな」

「なによそれ!？」

「アリサちゃん落ち着こう。まずはおにいさんの話を聞かないと」

言いながら、八高さんはたこ焼きを爪楊枝で刺したままわたしたちに顔を向ける。申し訳ないと考えているのか、困ったように頭まで掻いている姿に、わたしまで困ってしまう。

でも八高さんになにか事情があるのかもしれない。まずは聞いてみないことになにも始まらない。

「まあその、なんだ………なのは、俺がしばらくはそっちには戻れないってのは聞いているか？」

「……はい」

「やつぱらこういう大事なことは面と向かって言っておきたくてさ」

「しばらくつて、どれくらいですか？」

「………ああ、多分年末か、最悪来月末か……目処もよく分からない」

「フェイトちゃんの質問にも、曖昧に返している。」

「多分、言わないというよりは言えない、のかもしれない。シルヴァちゃんからもあることを言ってみるよう聞いている。細かく言えばシルヴァちゃんもこのはちゃんからの伝言という形だけど。わたしは、伝言形式で預かった疑問を、八高さんに尋ねてみる。」

「もしかして、はやてちゃん、という子の？」

「——っ」

「歯切れ悪いわねっ！ いつもみたいにはつきり言いなさいよ！」

「すまんアリサ。俺もどう説明していいのか、よく分からないんだ」

「………なによ、そんな顔しないでよ。怒りづらいじゃない」

「ほんとすまん。しばらくは迷惑かけるから。そうだ、なのはとフェイトはこの後用事あるか？」

「いえ、特には。フェイトちゃんは？」

「私も大丈夫」

「そっか、と言いながら八高さんはじつくりたこ焼きを見ながら、息も吹かずに頬張る。あ、食べられる温度になったみたい。……でも、たこ焼きを見つめていたその眼は、なんだかバツが悪いと言う様に揺れていた。」

「今日は途中まで一緒に帰らないか？」

「エンヴィ、ねえ」

「歩きながら、いきなり現れた第三勢力についてのことをなのはとフェイトから全部聞いた。エンヴィの製造過程から性質、今に至るところまでの全部、そして管理局での対応まで、なのはは全て話してく

れた。その中で第一印象は、ボカロ乙としか。エンヴィキヤットウオークとはまた中々良いセンスしているじゃないか。しかし、多くのレアスキルと虚数空間の魔力——管理局では虚数魔力と呼んでいるようだが、性質がまたタチ悪いな。

あの後、無理を言ってアリサとすずかには先に帰って貰っている。なのはとフェイトとはこの最近の問題を話したかったし、管理局なら間違いなくあの虚数魔力を使う魔導師の情報を得られると踏んではいたが、まさか正体まで掴めるとは予想外だった。魔導師じゃなくてデバイスって……しかも、アリシアを乗っ取ったとまで来ている。うわ、俺じゃどうしようも無いな。せめて乗り移るなら、男にしてくれよ。

しかし、考えるほど思うんだが、これらを調べきったこのはって実は無茶苦茶凄いいんじゃない？ 流石この世界の幼女だ、例に漏れず超性能だぜ！

「とりあえず俺ではどうしようもないのは分かった」

「そうなんですか？」

「敵って言われても、小さい少女の姿されたらとても無理だなあ……鬼畜外道な男相手なら迷わずレッドファイト！と申し込みたいところだけだな」

「なにを言っているかはよく分らないですけど、やっぱり難しいですよね……」

「こればかりはな。っていつけね！ これ渡し損ねてた！」

学生鞆から取り出した、包装された小さな袋を二つ取り出し、なのはとフェイトに手渡す。時期が時期がなものだから、包装紙も赤い色合いが強く、いかにもなクリスマス仕様なのが見えていて気分が良い。フェイトにはソリに載ったサンタが滑走している包装紙、なのはには星がたくさんプリントされた包装紙と、ネコのプリントされた包装紙に犬の包装紙。

「これは？」

「ちよつと早いけど、クリスマスプレゼント。俺年内に戻れるか分からんから、今の内につてね。あ、なのははこの星のやつで、犬がア

リサ、ネコがすすずかのな」

「ありがとうございます」

「おっと、出来ればクリスマスマスに開けてくれ。でないクリスマスプレゼントにならない」

「なんですかそれ……」

「でも、分かりました」

はつきり言つて、全員が喜ぶかどうかもよく分からなかったし、眼の前で幼女からの不評を受け止める自信が足りなかったから、そこは勘弁つてことで。おまけに、種類は違えど品は全部一緒だし。確かにプレゼントの中身に悩んだものだけど、なのはにあげるものと考えるところ知らない内に軽いものになったんだよなあ……手を抜いたとは違うんよ？ いっけね、はやての口調がうつつた。

「ちわつすなのはー」

なんてやり取りしている傍で、新たな幼女を確認！ パターンN！  
パタパタと手を振りながら菜摘が駆け寄ってくる！ 親方っ！

正面から幼女が！ これはもう抱き止めるしか無い！ と言つたな、あれは嘘だ。

「り、輪にいい!? 殺されたんじゃ!?」

「残念だったなあ、トリックだよ」

「やっぱり本物つすね。うん、無事でなによりっす」

流石にその判別方法には軽く疑問が湧かざるを得ないが、まあ俺の無事を確認出来たならそれでいいか。状況としてはこの上ないやり取りだが、実際されるとはちよつと思わなかったな。コマンドーは人を繋ぐようだ。流石だメイトリクス大佐。

「そうだ菜摘、いきなりだが、ちよつと相談いいか?」

「なんすか?」

「今さっきなのはとフェイトからエンヴィのことを聞いたんだが、菜摘のデバイスでエンヴィをどうにか出来ないか?」

「どうすかねえ……また直接逢つてみないと、というのはあるっすねえ」

「リンデイさんも言っていたけど、虚数魔力を纏っていたから、外から

の力を拒否する可能性が大きいかもしれないって」

「参ったな……このままだと益々俺の方が手詰まりになるなあ」

アリシアの身体を借りたデバイスだから、引っぺがしてから破壊するのが理想だが、それもちよつと怪しいのか。幼女相手に俺が刃を振れるかつての。ぬ、菜摘が申し訳無きように俯いてしまう。いかんかん、俺の言い方が悪かったな。

「ああ良いんだ。菜摘は菜摘で頑張ってる。それでいいじゃん」

「あ、ありがとうつす。あ、このたこ焼きどうすか？」

「それさつき食べたやつだわすんませんしたー！」

まさかのさつき食べたのと同じ店の、まったく同じたこ焼きが来るとは……世間は狭い、で合ってるのか？ しかし、菜摘もこのたこ焼きを買ったということは、やはり美味しいものらしい。出来たてを味わいたい、俺猫舌だし……そうだ、菜摘にふうふうしてもらまずは俺の頭から冷やそう。

「ああそうなんすね。じゃあ、フェイトとなのははどうすか？」

「わたしたちも八高さんから分けて貰って」

「ごめんね菜摘」

「まあまあ、たこ焼きなんてご飯のうちに入らないつすよ。小腹を埋めるくらいどつてこと無いつすよ」

うん、このエネルギー良いなあ。こつちまで元気貰ったぞ。おかけに無邪気全開でたこ焼きを勧めるもんだから、なのはとフェイトは断れず、おずおずと爪楊枝に刺さったたこ焼きを口に運ぶ。いやあ、あの兄貴を亜空間にばら撒いて妹さんと遊園地巡りに勤しみたいものだが、まずシスコンになにかあると菜摘も寂しい顔するのは眼に見えるし……今度あったら挨拶代わりに一発殴っておこう。

「……さて、頃合いかな。丁度菜摘もいるし、俺のこれからについて話しておくよ」

ちょうど空気も柔らかくなったし、俺はそう切り出した。聞く人によるが、俺はこれからそれなりに衝撃の発言するつもりです。特に俺を注視するのはとフェイトはある程度勘付いているけど、俺が細かく話せば眼を丸くさせるだろうな。

「順を追って言うが、まず——俺は学校を休学することにした。ていうか、もうしてる」

「え?」

「本当、ですか?」

「嘘で休学するなんて俺は言いたくないぞ。口実は嘘だが、世間では俺は休学扱いだ」

「休学って……どうしてっすか?」

「ああ……それはなのはとフェイトが勘付いている通りだ」

「やつぱり、はやてちゃんの為ですか?」

大正解なので、こくつと頷いて返す。

どの程度知っているか分からないが、なのはの言う通りだ。しかし、これで一つ確証した。はやて辺りのことを知っているけど、この最近で管理局の人間が家に来ることは無かった。ということは、ざっくり言えばこうだ。管理局が知っているはやての情報は、文字通り人から聞いた程度の大まかなところだけかもしれない。妙な例えだが、管理局とははやての仲は学校で見かけたことのある程度という認識で正解かもしれない。つまり、尾行されない限りはやての家を知られることはまず無い。情報の元はおそらくこのは辺りだろう。だが、家まで知らないというのはかなり有り難い。

……このはからははやての情報が出て来たということは、

「ということは、ヴォルケンリッター、という人たちと一緒になんですか?」

「……ああ」

当然その単語も出てくるよな。……うわあ、なのはの顔曇ってるよ。言おうとした言葉を超飲み込みたいが、俺がすっかりしなきゃいけないんだ。はやての為に休学までしたんだ。言え、俺。たこ焼き風味のにおいが体内に入ったのに、深呼吸した空気の味からは、全然旨みを感じなかった。

「——俺は管理局には付けない。しばらくはヴォルケンたちと一緒に、はやてを助けるつもりだ」

「な——」

「言いたいことはあるだろうが、もう少しだけ話を聞いてくれ。俺はヴォルケンと組んで魔力の蒐集をするつもりだが、管理局の人間や関係の無い人間には絶対手を出さない。そう話は通しているし、向こうも了承している」

「でも闇の書は……」

「心配するな、なんて言われても信用出来ないと思うが……はやての命に関わることなんだ。出来ればいい、俺たちに関わらないで欲しいんだ」

「輪にい……あまり聞きたくないんですけど、蒐集集めの邪魔をしたらどうするつもりですか？」

「……対応の対応を取る、で話は決まっている」

「そんな……」

言いたいことはほとんどは言った……のにだ、この嫌悪感だ。覚悟していたにしても、やっぱりこの場の全員が表情を落とす。ただ、このままだとあまりに後味が悪い。そういえば言っていなかったことを付け足すことにしよう。

「なんか悪い話ばっかになったから、ここらで違う話題にするな。言っていなかったことだが……エンヴィに関しては迷わず敵として戦うつもりだ。まあ、俺は自衛として以外では動かないけど」

「そうなんですか」

「あくまで無差別に襲う魔導師という認識だからな。ともあれ、俺は事情を話して対策を打つけどな。闇の書の主である以上、はやても危ういだろうけどな」

「そうなんすね」

「それともう一つだが、俺の身体の痛みはもうさっぱり、完治している」

「え、そうなんですか!?!」

「おう。頼もしい回復補佐のおかげだな。まさか全快するとは思わなかったよ」

流石シャマルさんだ！ なんともないぜ！ なんてジオン軍な発言したくなるほど、見事なものだった。スキップしても全然痛みが無



いなんて久しぶりだぜ、キャツホー！ 愛犬の名前はアーノルドだぜっ！ ……なに言ってるんだ俺。

「まあそういう訳だ。俺はこれからはやての家に行く訳だが…三人に頼みがある」

「……………なんですか？」

「間違っても俺を尾行しようなんて考えないでくれ。俺たちの基本的な考えは、こっちから手を出さない、だからな。詮索してこっちの都合が悪くなると判断されたら、手が出てくるぞ」

「そんな……………」

「随分遅いぞ輪」

既に聞きなれた凜然な女声が耳に入る。よくここが分かったなっ  
て言いたいけど、一応ここで待ち合わせ予定だったからな。近くの家  
電店の店内に張られている置時計で時間を見るが、約束した時間より  
早く来ているぜ。すげえな。流石ヴォルケンリッターが将・シグナム  
さんだぜ！ いや、皮肉とかじゃくて素直な賛辞ね。待て、遅いつて  
言われたが、まさか早く来ていたのか!? 真面目すぎい！

「もしかしてその人がすか？」

「おう、今の俺の仲間だ」

「また随分話していたな。 ……まさか、その三人は管理局の魔導師か？」

「そうだな。予定より人は増えたけど、なにもしてないさ。ただ話を聞いていただけ。俺も釘を打っただけだから、問題はどこにも無いだろ？」

「……………なるほど、それなら問題無いな。ちなみにだが、フェイト・テスタロッサというの？」

「金の髪の子」

「そうか。輪からは話は聞いている。近接の戦闘においては輪より強いと聞いている」

「い、いえそんなことは……………八高さん、加減してますから」

「だろうな。私相手だろうと存分に振るわないからな。ふむ、見た所  
気概も高く、腕も有ると見た。暇があれば手合わせしたいものだな」

「俺は戦闘になるのはごめんだけどな……シグナム、行こうか。はやてが待っている」

将とは言うけど、これじゃまるで剣道の先生だよな。素質のある子を見ると育てなくなるみたいなのが。まあ、先生なんて柔らかいものじゃなくて、鬼教官と呼ぶのがしつくり来るけど。でも一度で良いから「くつ、殺せ……！」とか言うシグナムさん見てみたいかも。……これ以上邪なこと考えたら気付かれた挙句に、俺がその台詞を言わされそうだから、止しておこう。

「輪から聞いた通りだろうが、こちらから他者に危害を加える気は無い。ただし、我らを目的を阻害するというのなら、遠慮なく相手をしてよう」

やはりシグナムを呼んで正解だったな。一見して強いことが伝わり、魔導師なら尚更にシグナムの持つ能力の高さも感じるはずと踏んじたが、予想はドンピシャ。もしこの場にシグナムがいなかったら誰かが追跡していただろうが、シグナム存在感に加えた勧告によって、なのはたちからは、わずかばかりに感じていたゆとりは無くなった。追えば俺がなにもしなくてもシグナムが動く……そういう牽制のつもりだが、なんと胃の中の気持ち悪さよ。

「……止せてシグナム。少なくとも、今はする気は無いんだ。俺の用も済んだし、家に戻ろうぜ」

「そうだな。だが警告はしたぞ、管理局の魔導師」  
「……………」

シグナムの一睨みによって、なのはと菜摘は一步たじろぐ中、フェイトはどこか訝しそうにシグナムを見ている。

「シグナムさん」

「シグナムで良い。で、私がどうかしたか？」

「……闇の書を完成させて、なにをするつもりですか？」

「それは——」

「聞かれたのは私だ。私が答えよう」

面を見ないで答えることを無礼と感じたシグナムは、振り返り、微笑みながらさも当然のように答えた。

「主の身体を侵す闇の書を起動させ、病を治したいだけだ。心配はいらん。我が主は破壊を望んでいないから、我らも望みはしまい」

「……それだけ、なんですか?」

「闇の書に携わる魔導師らしくないと笑うか? だがそれが今の我らの総意だ。騎士として、言葉に偽りが無い事を誓おう」

相変わらずシグナムは揺るがない。まあ、だからこそ俺も安心出来るんだけどね。まあ、フェイトの質問も分からなくもない。普通なら、碌でもない人間が世界征服だのなんだのを叶える為のものらしいからな。ザフィーラから聞いた話だと、その時期があつたのも事実だがそれももう昔の話だし、今の持ち主ははやてだ。白い淫獣と契約するタイプの魔法少女にでもならん限り、はやてはずっと純粹だろうよ。シグナムが口にした通り、はやての望まないことをしない俺たちにとつては、破壊行為なんてナンセンスだ。

「そうですか……分かりました」

「いや構わない。済まなかったな輪。行こう」

「だな。まあこの通り、悪いやつでも無いからな。そんじやあまた」  
「……………」

返事は無かった。代わりに、まるで駅からの見送りのような寂しい顔を向けながら、弱々しく手を振る。特になのはとフェイトの表情が曇天みたいに重い。待てい、雰囲気だけ感じると俺が戦地に行くみたいじゃねーか。今にも俺が死にそうな空気出すのやめたげてよお!

「なのは、フェイト、俺がいないからって、寂しい顔するのは止めてくれよな! 俺は必ず戻ってくるぞ! いいか、お前らは笑っててくれ!」

本当なら一人一人に言いたかったけど、ちよつと時間も押しているし。ちやちやつと言ったけど、こんな言葉ではあるが二人はなんとか表情を明るくさせた。

「菜摘は、二人が寂しくならないようにしててくれよ。管理局の連中ってのは、なんだかんだで真面目な集まりだからな」

「はいっすー!」

「それじゃあな!! しみつたれた高町家の末っ子! 長生きしろよ!

そしてその大事な友達よ！ おれのこと忘れるなよ！」

「え、あ、はい」

「だが断る」

「ちよ菜摘いいいい!？」

「冗談すよ冗談」

まあ、全然ガチトーンでも無かったからな。さて、適度にのんびりしたところで、八神家に戻るかね。たこ焼き食べちゃったけど、はやのご飯なら余裕で入るな。伊達に腹を空かせてないんでね。

まったくなのは寂しがり屋だな。仕方無い、なんかこそばゆいが、俺の決意表明も兼ねて強く言っておこう。

「なのは、今度お前の顔を見る時は「ただいま」って言わせてくれな。この先に俺となどはたちの間で絶対にケンカなんて起きない。オーケー？」

八高さんはそう口にしてから、明日また学校で見かけそうな弾けた笑顔で手を振った後、その人の賑わう通りの中に姿を消した。

俺とお前は争わない——話の流れで聞けば、どうしてもこっちの邪魔をしないで欲しいと思えるけど、八高さんはきつと別の意味も含まれているのかもしれない。単純に考えれば、さつき口に出していたことだけど戦う意志自体はまるで無いということを言いたいかもしれない。そして、仮に顔を合わせても俺は誰とも闘わないし、わたしたちとも当然ケンカすら起きない——そう言っているようにも聞こえる。なんにしても、八高さんらしいと思える言葉に違い無かった。でも、つい頬が緩んでしまう。ただいま——こういう風に絶対戻ってくるって約束されると、嬉しくなるなあ。なにを言っても、八高さんにとっては高町家というのは思い入れが強いんだって思うと、やっぱり笑ってしまうわけで。

「良かったっすね。輪にいいにとって、なのはは特別みたいっすね」

「な、菜摘さん！ 恥ずかしいから止めて下さいよ！」

「……………」

「どうしたんすかフェイト」

「……………シルヴァから聞いたから確かめてみたけど、本当にそうなのかが分からなくて」

「なにを？」

「私も昼に聞いたからこれから逢ってしつかり聞いてみるけど…………この時間ならもう管理局員の人は知っていると思うけど…………菜摘は聞いてない？」

「ううん、ジブンはずっと街にいた…………あ、思い出したつす！」

「え、なにになに…………？ 一体どうしたの？」

フェイトちゃんは、うーんと唸りながら考え込むように拳に顎を乗せる仕草をする。それから多分と一秒と少しして、小さく、内緒話をするよりも深刻な声色でわたしに言った。

「今の闇の書は改悪され、重大な欠陥<sup>バグ</sup>を抱えた魔導書らしい」

「え、それって…………」

「闇の書を復活させれば、世界が滅ぶほどのことが起こるんすよ！」

……………あまりに突然な流れのせいで、言葉が詰まってしまった。

え、世界が滅ぶ？ でもそうだとしたらおかしい。さっきのシグナムさんの言葉にはまるで嘘を感じなかったし、嘘が無いからこそ八高さんも協力している。そう考えるとなにも不自然は無い。

なのに、復活させる理由と結果が噛み合っていない。一体どういうこと…………？

「フェイトちゃん、菜摘さん…………」

「合点。アースラに、すよね」

「私も全て知りたい。これからなにが起ころうとしているのか、知らなくちゃいけないと思うの」

……………わたしの思う嫌な予感というのは、当たり易い。ざわつきが納まらない鼓動をなんとか抑えながら、人のいない場所へ向かい、アースラへの転送を行う。

## 男のロマンは剣と魔法とドラゴンとロボット

大まかな動きとしてはこうだ。基本的に闇の書の蒐集に行くのは二人だけ。本当ならもつと大人数で動きたかったが、蒐集を嫌うはやてに勘付かれるのも大変だし、エンヴィという厄介ごととも潜んでいる。はやての警護も含めて、向こうには大勢を残すようにしている。

……口にするも嫌になるが、蒐集したとしてもはやてが狙われたらなんの意味もない。あれこれと話し合った末、優先させるべきははやてだろうということ、この形で落ち着くことになった。人数が出せないという都合は、時間目いっぱい使うという単純なやり方で補うことで現状は落ち着いている。もしもの話だが、緊急の事態が起こればシヤマルさんから連絡するようにも言っているし、ある程度の対策は出来ているつもりだ。管理危局が来たら？ ……しまった、それは考えてなかった。帰ったら煮詰めよう。

でだが、その蒐集方法なのだが。これがまた妙案というか、考えてみればそれもそうだとどうか。

「確かに、これなら人は傷付かないな」

いやでも、俺たちは傷付くが……余計なツツコミは止そう。

さて説明するにはまあ難しくないが、結構途方も無いことしてるから、まだちよつと宙に浮いている感が否めない。シグナムたちは以前にもこうした蒐集方法をしていたというから特に動揺は無いのは普通かもしれないが、魔法は使っても基本一般人の俺にはやっぱり落ち着く訳無いじゃないか。戦争を展開したガンダムを見慣れた奴にGガン見せて理解を得られるかっていう話だ。

まあ色々言いはしたが、案外一言で言い表せることは出来る。それは——別の世界を渡って、化け物退治をしながら魔力の蒐集をしている。冗談抜きのリアルモンハン。目に優しい高原が地平まで広がり、どうみても俺の見知ったものとは違う景色で新鮮味が凄いのだろう。ええーお客様、眼の前にはなんかり〇レウス似のドラゴ

ンです。普通に強<sup>ヤス</sup>そうです。ただの印象で言うけど、動きは遅<sup>オソ</sup>そうだが、防御力は高いというタイプっぽい。実際のつそりしてるけど、その眼光はどう見ても闇墜ちしたてのシン・ア○カみたいな顔をしていた。……茶化して言っているけど、こうして向き合おうと本気で怖いからな？　だが、そういう容赦の無い相手にだから丁度いい。

「アヴァロン。進化というのは？」

『もう済んでおる』

「そりやあいい。開け、アヴァロン・ブルー！」

慣れた詠唱を口にし、いつものようにアヴァロンを呼び出す。

——つておい！　予想したより形変化してるじゃん！　随分小さかったはずのガンブレイドは大剣となっている。どう見ても俺の背丈よりでかい。横面から見ればしゃもじやヒラメと呼べるほどの外観を誇っている。軽く見渡してみるが、以前のようにブレイドが外せるような箇所が無い。これガチで武器じゃねーか！　俺がいつ対話を選ばない選択肢を選んだんだよ！

『心配は無用じゃ。貴台の希望に添えて、非殺傷設定を基本設定にしておる。まあ、この相手じゃとிரらないと見受けるが』

「待てい！　そういう問題じゃおぼどどどどおおう!!」

あつつぶな！　意外と早かったぞあのレウスめ！　ああもう知らん狩りの時間じゃあああああ！　ガチ武装によるガチ狩猟じゃあああああ！　ちなみにお供ハンターの赤い彗星もとい鉄槌の小さな騎士<sup>きゆうし</sup>さんは、別の化け物を狙っているのでタイマン。腕を信頼していると言われたが、なんか面倒だから放って置かれたとも見えるが……それはまた後で尋ねよう。

『大丈夫、なようじゃな』

「そこそこ危なかつたけどな。さて、この初陣だ。解説よろだぞ」

『了承した。まずこの大剣の形態じゃが、この形態がこのデバイスとしての本来の姿じゃ』

「え、マジ……？　そんな凝った仕組みなの？」

『そうじゃな、では小生が見本を示そう。こういうことじゃ』

余計に分からず説明を求めようとした瞬間だった。鱗をめくった

ように剣部分が剥がれたのだ。四枚の刃が剥がれてその下からはやけに細身のブレイドが現れたことで、やっぱりガンブレイドだと理解した矢先、四つに離れた突起がドラゴンへと飛来する。さつきまで刃の形としてガンブレイドと接合していたからか、放られたガラス片のように散る。

「あ、アヴァロン。あれは一体なんだ？」

『言ってしまうえば、小生の追加機能じゃな。加えて、貴台の脳波による遠隔操作が可能な武装でもある』

「なるほど、つまりあれはビットか」

『今は小生が操作しているがの。じゃが、小生が操作する場合はデバイス内の魔力を消費させているから、あまり頼りにしない方が宜い』なるほど把握。確かによく見ればレウスを目掛けているのはぶつちやけソードビットということか。……さつきは自然にツツコミをしたが、確かにこの外見や武装は思つきしGNソードVとソードビットだ。差し詰めさつきの合体剣はバスターソード状態か。いや、確かに俺ダブルオークアンタ好きだけどき。

「よおーし、あのビットの名前はナユタ・グライドだ！ 行ってこおい！」

『唐突に張り切ったのう』

ビットとは言っても中々に攻撃力があるようだ。悲しいことに、アストラルよりも速度があるから牽制以外にも使えるという利点が生まれてしまった。前向きに考えるなら、物理的なビットとスフィアとで使いどころを考える場面が増えたということにしよう。

大きな巨獣が、小さな飛来物に翻弄されながら、銃口から放たれた蒼い魔力弾の的として狼狽する。す、すげえ、シリウスの威力が上がつている。となると、これは全ての魔法の能力が上がっていると見ていいだろう。まず銃声が重くなっている時点でねえ……

例えば、蝶が舞うような——いや、そんなに綺麗なもんじゃないな。猛禽類だな。しゃっと走るビットの鋭い軌道は、無機質に飛び交う。見た感じ30センチほど四枚の刃は、レウスの四肢を襲う。

この四枚の刃をアヴァロンが操作しているからか、俺のすることも



簡単だ。足止めされたドラゴンを打ち抜き、斬るだけ。

「アヴァロン！」

『了承した』

「これで——とどめだぁーっ！」

誰とは言わないが、まるで青い魔法少女と同じように、宙を高速で飛空しながらガンブレイドを振り被る。最初に見たあの形と同じ、ナユタ・グライドをアヴァロンに接合させた合体剣にしてレウスを両断する。

《目的を達成しました》

というテロップと勇壮なファンファーレが響くようなフィニッシュを飾れて、気持ちよかった（小並感）。流石に気分が高揚します。倒した証拠として、どしんと低い音を鳴らしたつきりレウスは動き出すことは無かった。見たとおり、このアヴァロンは攻撃力が増しているようだ。

……だからこそだ。口にしていいことなのか分からないが、俺はきつと聞かなきゃいけない。

「なあアヴァロン、一体お前は、誰を想定してこんな進化をしたんだ？」

『小生に聞かれても困る。貴台のイメージを具現させたものじゃからな』

「うっそマジ!？」

『冗談じゃ。どうじゃ、貴台の真似じゃが、それらしいか？』

「……………なんかフランクになったな」

『どうやら貴台に感化されたらしい。ちなみに、進化の形状は貴台の願いを遵守してものじゃから、イメージの具現は冗談ではないぞ？』  
「俺なに願ったんだよ……………」

『さての。じゃが覚えはあるな。元からじゃが、誰かの為の力を欲していたからじゃろうな。特に近頃は顕著じゃったからな』

なるほど、そう言われると納得もするが…………でもこれオーバーだよ

ね？ 過剰な暴力を詰め込んでないこれ？ クアンタに乗り込んだフルセイバー刹那さんだよこれ？ 俺殲滅思考してないし！ この世界にヴェイガンがいる訳でもないし。俺が言いたいこと一つ、命はオモチャじゃないんだぞ！ 以上。

「流石にシグナムが認めた腕だけはあるな」

「お、ヴィータ。そっちも終わったのか？」

「まあな。お前より早く終わったぞ」

「泣けるぜ……」

こうしている分には、ヴィータとは普通に話せるんだよな。悲しいことに、「はやて」というワードを挟まなければ、の話だが。普段が飯友な感覚なだけに意外と普通だったりする。だから俺は、なるだけ命を狙われたくないから意識してその話題に乗っかることにする。

「なあ、今ページはどれくらい溜まつてる？」

「400ページほどだな。ま、ほとんどがああ管理局の魔道師からだからな。……そこはお前にも感謝してる」

「ヴィータが俺を褒めた!? 明日はなんの日だ!? ネノヒダヨー」

「落ち着けて。アタシだって評価はするさ」

「俺にとつては心に染みる言葉だでえ……」

そう、基本的に不当な評価はしない。それはよおしく分かっている。だからこそ、言葉を慎重に選ばないと俺が不当に評されてしまう。あのな、はやてが絡んだ時の容赦の無さを知れば、慎重にもなるってもんよ。まるで鬼の姑だよ。……ん、姑？ なんだその表現は。まるではやてが俺の嫁みたいじゃないか。ま、可愛いけどね。俺までそう考えちゃまずいでしようよ。クールに行こうかクールに。

「今日一日は蒐集だからな。なにが来ても手は止めるなよ、輪」

「シヤマルさんから連絡来たら止めるよ」

「ほう、はやてからなにを言われても動じないってか？」

「くそう！ そっちから地雷をつくるか！ 人が折角避けていたのにっー」

「なんだと!? お前まさか、はやてを避けているのか!？」

「面白い！ それにその言い方だと、俺とはやての交際を」



「ふふ、すずかちゃんや八高さんから聞いた通りやね。なのはちゃんもフェイトちゃんも話し易いって」

「ん？ はやてつてアホ先輩のこと知っているの？」

「うん、お世話になりっぱなしや。いつも楽しませてもらってな。最近はシグナムも表情柔らかくなつてな、本当あの人と話すのって楽しいんよ」

「はやてちゃんつて、おにいさんのこと好きなんだねー」

「え、あ、でも、確かに八高さんつてどこか抜けてるし目が離せないし、ご飯もよく食べるし、笑顔も良えから見ているだけでも楽しいんやけど……べ、別にそういう訳じゃ!!」

……そこで、妙に紅潮したはやてが醸した感情の正体に気付いたのは、席についていたほとんどだった。気付いていないのは菜摘くらいのもので、首を傾げながらパフェの甘みを満喫していた。裏腹にそんな意図を含んでいなかったすずかたちは、両目をぱちぱちとさせている。遠目にいた客も微笑ましく一瞥するほど、はやての反応はしどろもどろにしていた。機微に変化があったことは気付いていたもの、その変化の正体を知ったシグナムとザフィーラは表情に出さず、手元の飲み物を一口に含む。こと恋愛ごとには慣れないシグナムも注意深く見なければ気付く程度の紅潮を浮かべているが、誰もがはやてを見ている以上、気取られることは無かった。

つつくだけ無粋と判断し沈黙を守るヴォルケンリッターに対し、はやての一般の友達としてのなのはたちは、わなわなと身体震わせながら驚きを隠せていない。かといって、流星に予想外の反応されたことで、なのはたちはすずかとアリスとで互いに顔を見合わせることにしか出来なかった。

しかし、無粋とは思わなかったものが一人いた。桃子は幼い笑みを浮かべながら、はやてにいじらしく尋ねる。

「……へえ、そうなんだ。はやてちゃん、苦労するわね〜」

「え、なにがです!？」

「頑張つてね。八高君、勘は良いのに鈍いところあるから苦労すると思うけど、わたし応援しているからね?」

「っ、で、ですから、なんの話です!？」

「ううん、なんでも。ただのおばさんのお節介、てね」

「はやてちゃんは気にしなくていいと思いますよ?。」

「……………なあシヤマル。もしかしてやけど、みんな気付いている?。」

「いやあ、そんなまさか。ねえすずかちゃん」

「は、はい。あたしも応援しますので」

「嘘や絶対気付いてるっ!!」

「それより主はやて、手元のパフエが形を崩しますよ」

「せ、せやな! ありがとうなあシグナム!」

「変なはやてっすね」

間違いなく気付かれていることに動揺しながら、震える手で少し形の傾いたパフエに銀の匙を伸ばす。さつきまでその甘味を堪能していたが、まさかその手の話題を触れられて味も良くわからないはやては、口に広がる冷たさ以外がよくわからないまま、バニラ味のアイスを喉に通す。幸いとも言いつらいが、菜摘に気付かれないことに内心で安堵の息を零すはやてだった

あくまで魔法というものの存在に疎いはやてと、魔法という存在すら知らない桃子とアリサとすずか。二つの日常的な空気のおかげで、いわゆる管理局側と闇の書側に二極されていた状態は、ある程度には緩和されていた。少なくとも、顔を合わせた当初よりは互いを見る眼の鋭さは緩んでいる。

からんからん——利用の客を等しく迎えるドアベルが、涼やかに響く。

「いらっしやいま——あれ、フェイトちゃん……………じゃない?。」

「あれ、フェイトちゃん、双子やったんやね。こんには」

「あれ、フェイトに姉妹っていたの?。」

「……………まさか、どうしてここに……………」

「フェイトちゃん?。」

店内の客は勿論、はやてや桃子、アリサたちが知る由も無かった。賑やかな喫茶店を訪れたのが、フェイトのオリジナルであり、立場上姉であり、今は人の敵として存在していることを。

アリシア——エンヴィは、ネズミを見つけた猫のように、くくつと口の端を歪ませながら、視線をはやてに向ける。フェイトと同じ顔のはずなのに、言い様の無い恐怖感に襲われ、気付けた銀匙を落としていたことさ気付かないほど、エンヴィの視線に圧迫されていた。

さて彼女はさも嬉しそうに、手の平にまどろんだ色の魔力を球体状に捏ねる。そして、

「これは面白い。折角だ、貴様への選定ついでに喧しい場を大人しくさせようか」

躊躇を見せることなく、凝縮させた魔力弾を集う少女たちへと向ける——

「——っ！ 輪っ！」

「分かっている、聞こえたさ」

一日を使っただけあつて、ページの方も510と結構集まつて来ている。いいじゃん、すげーじゃん！ 死ぬほど頑張っただけあるぜ。今日は良い風呂に入れそうだな。

と思つたのも束の間、シヤマルさんから念話が来た。はやてに襲撃、らしい。らしいと言つても、変に嘘を吐く人でもないから、事実なのは確定だけど。しかし、不幸中の幸いか、幸い中の不幸か、襲撃した主はエンヴィだという。厄介のが相手だから戻るのは当然だが、俺が戦えるとは思えない。だってアリシアだろ？ 幼女だろ？ 無理でしょうよ。

それに、今の俺とヴィータじゃ戦闘そのものも怪しい。ついさつきまで戦っていたことで、お互いに肩で息を整えることで精一杯だった。しかし、念話が途切れたのも気になる。なんにしても急ぐしかないようだな。

「ちっ、こんなタイミングで来るのか……動けるか？」

「ヴィータこそ無理してないか？」

「アタシを舐めるなよ。お前よりは戦えるさ」

「じゃあ俺も大丈夫。俺男だから問題無いし」

「ったく、シグナムに負けない馬鹿だよ、お前は。さて、最初に転送された地点に」

「残念だけど行かせないよ」

その気になればここからでも転送は出来るが、時間はかかるし、送ったシャマルさんにその余裕が無いかもしれない。ならば、少し遠いけど転送された場所まで戻って合図を送り次第、再転送する方が早い。元より、最悪の場合はそうすると決めていたから、後は行動に移すだけ、のはずだった。

その久しぶりに聞いた声は、相変わらず冷静な声調を保っている。

「お前は……あの時の魔道師か……！」

「……八高輪。どうして君はこう、事態をややくしくさせるんだ……」

「待て執務官。原因はどっちかというところとエンヴィの方だろう」

「その情報まで渡っているとは……となると、全て知っていると思っ  
て良さそうだな」

「それにしても、執務官がどうしてここに？ 怪我してるって聞いた

んだが、その身体のまま来たのか？」

「ああ。だけど、ぼく一人だけじゃない」

クロノ執務官がやれやれというように息を吐いたと同時に、執務官を横切る緑の光が多く通過した。え、狙い俺なのか!? 見たところシリウスのような直線系の光弾だな、と甘く見積もった俺の姿はお笑いだったぜ。それが数発とからどうにかある程度余裕もあつたが、その数にそのスフィアの多さ。まるで機関銃だった。咄嗟に展開させたラウンドシールドで防ぐも、どう考えても威力が妙に強い。こいつ強いぞ……！」

「ちいつ、なんだこいつは……！ 俺ばっかり狙いやがる……！」

「輪！」

アヴァロンに装着されているナユタ・グライドを展開させ、その刃を操作させる。なに、誰も攻撃はしないさ。ただ雨霰と来る緑の弾幕を切り裂かせる。不真面目に相手するとはやばい、相殺出来る部分は

シリウスで本気打ち落とす。連射の性能は遙かに劣るこっちでは、防ぐことで手一杯にならざるを得ない。

手数に押され始めたところで、ヴィータが放ったシュワルベフリーゲンの援護により、どうにか弾幕をやり過せた。しかし、状況で言えばこれは第一波のはず。次が来ないとは思えない。

「無事か輪？」

「しよ、正直大分疲れた……」

「……やりすぎとは思わないか？」

「そんなまさか。ここは文化財レベルの遺跡は無いから、大丈夫ですよ。それに、あての手の人って、確実に言ってる間かないと思うんですよ」

すうつと軽やかにクロノ執務官の隣に並んだのは、緑のツインテールを整えた幼い少女。ええつとちよち待ち、まさかとは思うが、今の魔法ってこの子がか？ ていうかこの少女、言葉はそう交わしてないけど思いつきり知人なだけで……他人の空似であることを祈るが、「そうではあるが……まあいい。とにかく、彼の相手をしてほしい。頼めるかい——このは」

「勿論ですよ。クロノさんこそ、大丈夫なんですか？」

「お互い、相手は疲れているんだ。下手なことでドジを踏むつもりはない」

「流石執務官。負けないで下さいよ？」

「誰も負けるつもりで戦いを挑まないさ。そもそも、ぼくらの目的は」  
「あの蒼い変態をやつつければ、シルヴァちゃんとの夜のあれやこれやが許されるんでしょう!? やりますよ！」

「いや、二人の保護が目的だからな!? 分かっているなこのは!? あとその約束は知らないぞ!？」

なんか言葉にし難い勢いでクロノ執務官となにか言い合っているが、間違いない、あの緑の光を放ったのは——高敷このはだ。おいおいおい、基本スペックが尋常じゃないだろうなと思っていただけ、魔法方面でもぶっ飛んでるんかい！ もう駄目だ、お終いだあ……なんてな！ なにを今更なこと悩むんだか。



が、二人は既に粗方のことが決まっていたのか、クロノはヴィータに向かい、このはは俺にまっしぐらに飛空する。

「輪、逃げるぞ!」

「させるか! このは、後は任せる!」

「な、待て執務官!」

「行かせませんよ!」

離脱しようにも、疲れから失敗。対して向こうは万全でないもの動けるクロノ執務官とどう見てもやる気に満ち溢れているのは。絶体絶命って単語がふさわしい、なんか重い状況を感じる。そんな好調な二人が、互いに決めていただろう相手の前に立つ。……寄りによって、俺の相手はこのはと来た。振り切って逃げ切れるかも分らんが、馬鹿正直にイグナイト使って逃げてても、後ろから撃つかもされない。ていうかさっきの状況考えたら絶対撃つ。

「やっつけてやるぜ、ダービー」

「八高輪だ! 俺の名は八高輪というんだ! カービーでもダービーでもない!」

さっきから気になってたんだけど、なんかこののはキャラってこんな感じだっけ!? なんか遠慮がある程度無くなっているのは別に良いとして、ガチで水を得た魚みたいな元気が見えまくりなんだけど!? しかもジョジョネタまでしたぞ!? うっかりナチユラルに返してしまっただけど、マジでなにものなんだ!?

くそっ、疑問が大いに湧いてしまったが、今は気にしない方が良くないな。今はとにかく、ヴィータと逃げる為に隙を見せる方法を考えるしかないな。問題なのは、このはが予想以上に強いという点だが、やるしかない! 待ってるはやて、なるだけ早くそっちに向かうからな――

喫茶店翠屋。駅前には並ぶ喫茶店だが、近頃は年齢や性別を問わずして、人気も上ってきている。美味しい食べ物と人の良い店員の存在により口コミでの評判も良い、あるどこにでもある店の一つとして在している。

その店内、悪意を孕んだ少女は手の平に集めた魔力を放射しようとしていた。当然配慮は皆無。周囲の影響や被害がどうなろうと知ったことではないと言わんばかりに、くくつと笑うエンヴィ。桃子を含めた、魔法の存在を認知していない人から見れば、なんだか手の平が光りだした変な手品。次はなにをするのだろうかと好奇心から、誰もがその危うい光から眼を離せずにいた。

対して魔道師たちは、刹那の中で葛藤していた。人を守るのは当然としても、この場で魔法を使えば、どんな反応を向けられるか？使った時にどんな影響を与えてしまうのかと。特に友達がいるのはとフェイトは、不意にアリスとすずかを見やる仕草までしたりと、隙を見せてしまうほどに動揺を隠せなかった。

遠慮と無配慮が向かい合う中、意を決したのは二人。

「させないっすよー！」

「やらせはせんっ！」

二人は即座魔道師としての衣服を纏い、噴射されたロケットの勢いを思わせる加速で、菜摘とザフィーラが飛び出す。互いにシールドを展開させながら、手にしたデバイスと拳を構える。下手にスフィア系の魔法を使えば、店内に被る被害は計り知れない。菜摘なりに考えたのが、傘状のデバイスで外に叩き出すという答えだった。

その考え自体は、ザフィーラもまったく同じだった。敵同士で並んではいるが、少なからず主はこの場所を好んでいる。この場所の空気を楽しんでいる。それを乱そうとしている敵を放置する訳にはいかない。念話やそれぞれに合図も送っていない。だけど、菜摘とザ

ファイーラは走った。

「……蟲めー」

予想以上の俊敏さで詰め寄る二人に舌を打ちながら、エンヴィは放射しようとした魔力を捏ね直して剣の形へと変貌させる。傘の一振りも容易く受け止めたもの、守護者の振るった拳打は重みが違う。空いている片手でシールドで受け止めるも、その衝撃によってエンヴィは店内から弾かれていった。

しかし、二人は追撃を止めない。元より加減していた菜摘とあくまで跳ね除けることを重視したザファイーラからすれば、ダメージを与えたなんて考えは無かった。二つの姿は人の眼を憚ることなく、店の扉を飛空しながら出て行った。

その一連に、誰もが言葉を失くした。眼の前で起こったことが、どうにも手品の類とも思えず、ただ口に運ぼうとしたグラスを運んだ手が止まる客が散見していた。その静寂の中、状況を選べないと判断したシグナムがシャマルに向ける。

「シャマル、輪とヴィータに連絡を。私とザファイーラでエンヴィを引き受ける」

「分かりました。はやてちゃん、ここは危険なので逃げましょう」

「よう分からんけど、危険ならここにいるみんなも一緒に助けて……！」

「……分かりました」

言ってから、シグナムも扉を出て戦線に加わっていく。当初とは随分予定は違ってきたが、主の願いを優先させて、アリサやずかを加えた店内の人間の護衛を回る。そうしたことも気付かず、なにか不穏を悟った客は、そそくさに入り口を出て行く。その後見られる客の反応は、外の夜空に響く花火のような音の方向を眺めてからの、逆の方へ走り出すというものだった。……なにが起こっているかは、魔道師なら見なくても分かる事態が既に起こっている。

「び、びっくりしたねー、なのは。大丈夫?」

「う、うん……」

すつと、手を差し出す桃子。普段と同じような温和な笑顔だが、手

が微かに震えている。外で響く爆発音の度に、びくつと上ずらせている。魔法を知らない人間がこの状況で普通でいられるはずがない。

……そうだ、自分に出来ることをしよう。ここには大切な人がいる。自分の親、代えの効かない友達、大切な場所。順番や優劣なんて無い。どれもなのはにとつて、一番大事なもののだから。

「……お願いS4U」

『All right. Stand by ready』

「!?なのは!?!」

だから、後で全部話そう。大事なものを守ることに比べれば、自分の内緒話は二番目でも構わない。状況に圧されたことも重なって、なのは少しの躊躇の後で、ポケットから薄いカード型のデバイスを取り出し、バリアジャケットを纏う。

その姿に驚いたのは、あの姿に見慣れていたフェイトだった。なのはバリアジャケットが、聖祥大附属小学校の制服をベースにしたあの姿から変化している。名残こそ残っているが、法衣を纏ったような印象が前に出るものへと変貌しているのだ。両に結んだ髪、手にしたステッキ状のデバイスとバリアジャケットが白を基調としていることを除けば、クロノ・ハーヴェイと同じものだった。デバイスの形に眼が向いてしまうが、その先端には見慣れた赤い球体が佇んでいる。いわばこの姿とデバイスは、なのはとクロノ・ハーヴェイを複合させたような印象が一際強く出ていた。

「……ごめんなさい、おかーさん。落ち着いた時に全部話すから……しばらく待つてもらって大丈夫?」

「……ええ、ええ」

「アリスちゃんとすずかちゃんも……その、理由はちゃんと話すから……今は……」

「……………」

「フェイトちゃん、わたしたちも行く」

「……………」

既に人の気配がほぼ無い店内。困惑する桃子とアリスたちと、なのはを交互に見るが、なのはの意思を尊重したことでフェイトは静かに

首肯を示した。

「あの、シャマルさん。アリサちゃんたちをお願いします」

「分かっています。わたしとしても、不要な戦闘は避けたいのです」

「ありがとうございます」

金の閃光に覆われバリアジャケットを纏ってから、フェイトはのはとと一緒に空へと上がる。

少なからず、ここにいる人間には魔法を見られてしまった。後はどうなるか分かったものじゃない。だけど、流石にフェレットから人に戻るのも問題だろうと判断し、アルフと外に出てから、擬態を解いて飛行を開始した。

「テスタロッサ、一時の協定を結びたい」

「協定、ですか？」

「我々にしても、あれは強大な敵だ。放置すれば我々どころか、主まだが危険だ。互いの利得の為だ、構わんな？」

海鳴の上空は既に戦地。管理局にしてみれば、追うべき側と共闘するとは思わなかったのかもしれない。しかし、個人の感情で言えば、この場にいる管理局側すれば、厳密に敵と断言出来ないもどかしさもあつた。

それに加えて複雑な事情もあつた。仮に協定をして戦つても、ヴォルケンリッターがどれだけエンヴィの情報を知っているか分からない。輪がある程度語っているようだが、それを信用するにもヴォルケンへの信頼も少し薄い。それに、まだ解決出来ない問題もある。欠陥を抱えた機能、それが今のヴォルケンリッターの状態だった。これは確定されている。なのに、まるで自立し、会話をしても感情が見られたり、拳句には嘘を吐いているようにも思えない。闇の書の守護騎士プログラムであることに違いけど、あまりに悪意が無さ過ぎる。「……一つ、約束して下さい。ここにいる友達に手を出さないで下さい」

「心得た。だが、エンヴィ相手には加減は出来ない。……もしもの時は、私を恨んでくれて構わない」

フエイトは、彼女たちの善意を信じることで協定は可決した。倫理を排された相手では騎士の矜持が届かないと諦観したシグナム、個人での斬り合いをさけ、ただデバイス破壊へ姿勢を変えた。……はやてとの約束がある以上、殺生に気は進まないが深く瞳を閉じた後、シグナムは鋭い視線を危惧する敵へと向けた。

一方、その眼の前ではザファイラが振り被っていた拳を叩き込んでいた。しかし、虚数魔力の纏うシールドによって、容易く受け止められる。

今のやり取りで、フエイトは理解した。やはりヴォルケンリッターは、エンヴィのことをよく知っていることを。

「答える蟲。あの座していた娘はなんだ？ 貴様やあの女騎士が困っていたのだ、よもやなにかしらの器で有るまい？」

「貴様に関係無い……！」

「関係ならあるとも、あれからは我が器となる資質を感じたのだ。いつぞやの白い娘で構わないと思ったが、あれこそが吾を収めるべき肉の器。邪魔をするというなら良いだろう、不届きな駄犬には死をくれてやるとしよう」

ぐにと弓形に折ったエンヴィは、押し込まれていく拳を綽々と弾く。跳ね飛ばされたザファイラと入れ替わるようにシグナムが滑空する。風を横切り、躊躇を払った剣をエンヴィへと薙ぎに斬る。

防御に落ち度は無かった。しかし、純粋な剣圧によってエンヴィの小さな肢体が弾かれる。壁も無い宙で無理な制動をするも、やはり体勢が追い付かずバランスが崩れてしまう。「ちいっ！」と舌を打ちながら、猛追する剣士は剣を蛇腹状に分離させ、離れた距離から薙ぐ。

「なっ……！」

「ははは！ 良いぞ貴様！ 賢しいのが実に精良だ！ だが愚陋を曝したな！」

薙ぎに流れた銀の列を、エンヴィは素手で受け止める。

「距離を取れば…….と思っていたか？ その手が通じるのは、凡庸な魔道師だけだ！ 吾に不得手な距離があると思うとは、蟲がよくも不敬を晒す……！」

から、瞬時に溜め込んだ斑の魔力光を掌に翳し、照射としては放つ。振るった剣を手放すことなく、シグナムはシールドを展開させる。照射程度の形成をしているもの、その密度は紛れも無く砲撃と同じ。それも異質な能力を持っているものだから、強固に展開させても防げるか怪しいものだった。

『Thunder Smasher, Cannon』

ガコンと排出音を鳴らしてから、放たれた砲撃。目標は斑の魔力光の奔流。フェイトはカードリッジを一つ消費させてから、横から砲撃同士を衝突させる。

無骨な黒塗りの擲弾銃型デバイスから放たれた砲撃は、カードリッジシステムにより増幅させたことを抜きにしても、魔法の威力自体は以前を上回っている。特に射撃や砲撃に特化した『ブレイズフェーズ』なら殊更に性能は強力だ。虚数空間の要素が加わった魔力としても、つまりは要因。放たれたものは魔力。衝突させて相殺させる前提で放った強めの砲撃は、目論見の通りにぶつかり、異様な色合いを爆散させた。

……轟音をきっかけに、街中を揺らせた地響きは静まる。

「バルディツシュ・ブレイズフェーズ……やっぱ強い」

「済まなかったテストタロツサ」

「いえ……だけど、これからですね」

「貴様も気に入っただけ、もう用は無い。あの座した娘以外は消えて貰おうか」

「お願い、アリシアから離れて……！ 私はアリシアを傷付けたくない……！」

「奇を言ってくれるな、吾だって離れたい。だが邪魔をしているの貴様だ。あの娘を差し出せば、この身体は返すとも」

「……信用出来るか？」

「この器への興味は既に失せている。黙って見逃せば済む話だ。違うか？」

「だからってはやてを！」

「そうか、あの娘ははやてというのか」

「っ！」

「もういいぞ。はやて、か。必要なものは名の全てだが、それは後で奴自身に聞くとしよう。貴様たちを始末してからな。死なないように  
捌れるかは知らないが、なに、尽力はすると言おう<sup>ちか</sup>」

エンヴィは舌なめずりをしながら、自身の周囲に斑のスフィアを停滞させる。その数は、敵対している数の二倍強。三十近くの球体はまるで行き場の無い蝶。指揮棒の合図を待つように、ただ浮遊を保っている。

この場の誰もが息を飲む。この人数を相手することを楽しみとしているのか、エンヴィはむしろにやりとしている。——この間とは違う。元よりそうかもしれないが、この広々とした場でならなお更に遠慮する相手とは思えない。

「さあ蟲共、踊れよ踊れ。醜い羽音を断末魔として、吾の耳を心地良くさせてみる」

——ひらりと振った手は、指揮者の合図を皮切りに散り散りに舞う。

いかん。このはを相手にしてみてもはつきり分かった。これは絶対勝てない。仮に俺が絶対調だったとしても、勝てる気がしない。

相手が9歳の少女だからとか、俺がその点で加減しているからというを除いても無理ゲー感が酷い。推定戦力比は、40対1！……大袈裟に言ったけど、そんなに遠くは無い表現だと思う。特に今の状況だとマジでこんな感じだと思う。まあ、拷問受ける貴族主義者にされる展開になるとは思わないけど……

「その前にだ。このは、なぜ俺は過剰に攻撃されているんだ？」

少し攻撃が落ち着いたところで、尋ねてみた。足が地面に付いていたらふらふらして立つことすらもままならなかったかもしれない。なんにしても、このはは言動の割に判断が冷静だ。生き残る前提で相手しているからこそ、俺もこうして（一応）無事であるのかもしれない。



い。

「さて、お互い昇っていた血もそれなりに、落ち着いて頃だと思えますので、そろそろお話ししましょうか」

「こ、これからが本当の地獄だ、……」

我ながら驚いた。微笑んだ幼女に恐怖する日が来るなんて……いや待て、拳で対話が出来るのがモバイルファイターだし。戦いながら対話を説くのも不自然のはずだ。……あれ、結局なに言ってるんだ俺は。ともあれ、デバイスを下ろしたんだからその気は無いらしい。良かった、命を落とす心配は無くなったようだ。

「八高さん、あなたは今、はやてさんの為に闇の書を完成させようとしているんですよね？」

「おう。それが？」

「闇の書が今どんな状態か分かっててやってるんですか？」

「は？ 状態？ なにかおかしいのか？」

「やっぱり……」

結構な深刻な表情で、このはは頭を抱えている。え、なに？ どういうこと？

「事態を分かって貰う為に結論から言います。闇の書を完成させれば、最悪世界は滅びます」

「……………はっ？」

「持ち主の意思を食い尽くし、ただ破壊だけをするんですよ」

いやいやいやいや、待て待て待て、このははなにを言っているんだ？ 闇の書が破壊行動をする？ 持ち主の意思を食らって？ なんだけそれ。一つも聞いてないぞ。いや、そもそも、そんなことをするようには見えんぞ。はやての約束で基本的に殺生はしないあいつらが、それを許す訳がない。

「……………よくないなあ……………こういうのは。俺は冗談は笑える方が好きなんだけどな」

「そういう物言いだから、器量が小さいのさ」

「キボンヌウウウウウウウウウウウツ！」

「ぬるぽ」

「アッー！」

「真面目に会話して下さい怒りますよ？」

「そっちも乗ってたじゃん！」

「で、私が嘘を言っていたように聞こえたんですか？」

凄く遠回りに会話しているように見えて、やっぱりただのドツチボールだったんだなあ……しかしこの幼女ノリが良い。ていうか、さうらつと無視した挙句に話戻してるし……

そう言われると結論は簡単。正直全然聞こえないから困ってる。まず嘘ですらないのも伝わってる。

それならだ。なんであいつらは黙っていたんだ？ ただ完成させるにしても、根本的な動機は「はやての為」なんだ。だとしたら、完成させて世界滅亡させるのは話がおかしい。はやてを救う為の破壊？ 案外人並みの意識したヴォルケンリッターがそんな意味不明なことするかっての。だとしても、なぜ……？

「……話、詳しく聞いてもいいか？」

「ええ。……闇の書の内容は、シグナムさんから聞いていますよね？ あの本は再生と転生機能を備えたものです」

「あんまり便利だから、アホな主人たちに付き合わされ続けたデバイスだろ？」

「そうです。そのアホな主人の一人が、本を改悪させたのです」

「……改悪？」

「自己進化式の自動防衛プログラムを組み込んだことで欠陥が生まれたのです。その弊害でワープ機能と自己修復機能は無限に再生し、デバイス自身も転生し続ける機能へと改悪されたんですよ。その挙句、自動防衛プログラムに至ってはマスターの意思を問わず取り込み、過剰な防衛で破壊行動をするようになった」

「……それが今の闇の書、だつて言うのか」

「……このはは、ただ俺を見据えている。是非は無い、そういうことだと言うように、ただ見ている。」

「ということは、シグナムたちは隠しているんじゃないかって」

「転生の度に忘れてるんですよ。マスターとの悲しい記憶だけを持

ち越したまま……例えるなら、闇の書というものは終わらないワルツのようなものです。再生、破壊、転生の三拍子がいつまでも続く」「絶対今思い付いたエンドレスワルツだろ? ……じゃなくて、だもしたら、はやてはどうすれば助かる?」

「なに言っているんですか。改悪されたら改善すれば良い話じゃないですか。機能を元通りに戻せば良いんですよ」

なるほど。シンプルイズベストだな。それに、こっちは解析やら改竄の得意な魔道師師だっているから、複雑な構造していようが問題は無いかもしれない。……ヴォルケンに説明して納得を得るまでが相当な茨の道だけど。

だけど、一つ分かった。悲しい記憶だけを持ち越したまま転生をするということ、闇の書の基本の状態しか知らないということは、闇の書の完成がマスターの最後という認識すら無いと思っていだろう。知っていたなら完成させることにも否定を覚えるはずだ。

「それじゃ、はやてさんのところまで案内してくれますか? はやてさんと闇の書については、管理局の方で責任を持って保護します」

「まだ正当な理由を聞いていなかったな。なんで俺は必要以上にボコられたの?」

「あ、気付きました? だって、ノンケがハーレムを築いてるっただけでちよつとこう、イラツと」

「それマジ? 俺の被ダメに比べて理由が……」

通りでなにか謂れの無い怒りを感じた訳か。いや、この返事は良そう。下手に突けば俺がやばい。

「……まいつか。そういうことなら、俺も」

「輪、そいつの話を聞くなっ!!」

言葉を遮ったのは、がなるように声を上げたヴィータだった。すげえ、クロノ執務官を相手にしていたにも関わらず、俺よりダメージが少ない。しかし、バリアジャケットの崩れ具合や出血が生々しい。思わず眼を逸らしそうになったが、ヴィータの鋭い眼が強く訴えた。

「ぼせつとするな! 逃げるぞ!」

「待てヴィータ! 少し話を……」

「はやてが意識を失くしたって言ってたんだぞ!? 話は後だ!! いいから来い!」

——はやての、意識が……? 待て、ヴィータの焦った声調を聞くに、死に掛けているというニュアンスで正解だよな……?

マジかくそ! 細かいことを言っている場合じゃない! ヴィータに握られた手首を成すがままに引つ張られるが、するべきことを理解してくると、変に頭がクリアになってきた。とはいっても、俺も魔力は少ないから、ヴィータに引つ張られる形でいよう。

こののは性格を考えるに、これからすることは……よし、読めたぞ。今の俺じゃ魔力は少ないから、アヴァロン内の魔力も利用して今のうちにチャージを行う。

「すまないこのは! 逃がした!」

「病み上がりが無茶するから……! 了解、一度二人を撃墜させます!」

思った以上に物騒な台詞が聞こえたが、これで確定した。こののはが腰を低く構え、デバイスの先端をこっちに向ける。やはり砲撃を撃つか。よし、それならこっちの動きも全て決まった。

「しかしヴィータ、執務官相手にどうやって逃げ切れたんだ?」

「デバイスは良かったが、動きが鈍くて助かったよ」

「なるほど把握。ヴィータ、後10秒そこで合流地点に着くのを連絡してくれ」

「なに言ってるんだ、そんなに早く着く訳」

「正確には着かせて貰うけどな。イグナイト!」

「エメラルド——ブラスター!」

身体中を発光させたと同時に、向こうからの砲撃の光が放たれた。おう、正治のと違って綺麗な緑だが、絶対受けたくないほどの密度と大きさが込められている。一応加減してるようだが、十分強いのは見なくても分かるという恐ろしさ……

だが、丁度いい。強ければこっちも助かるってもんだ。

「しつかり捕まれよ、ヴィーター！」

「な、おま……！」

「オーロラストライク！」

ひぎやああああああああ、この後を状態を考えれば仕方ないかもしれないが、引つ張っていたヴィーターを抱き寄せながら、こつちも砲撃魔法を放っている。幼女クンカクンカしたくても、全然余裕の無い状況なので紳士諸君、是非とも睨まないでほしい。

幼女相手に砲撃魔法を放ったではあるが、傷付ける気なんて毛頭無い。それ以上に強い理由があつたから、傷付けないという確信もあつた。強力な砲撃魔法と言つても、魔力の度合いをなのは基準で凶れば調節して相殺出来るんでね。ちなみに今放っているのはイグナイトである程度強化されているが、出力で言えば76パーセントほど。ほとんど本気じゃねーか！

でもう一つ。こつちが目的の本命だが——強い砲撃を放つことで、ロケット発射による噴射よろしく、反動によって俺たちは加速をしているのだ。勢いがあるほどよく飛ぶ、常識だろう？ おかげでヴィーターも楽しんでいるんだ。中々冴えた方法かもしれない。

衝突した巨大な魔力同士が爆発も既に向こう側、目印にと立てていた木の棒がすぐ近くにあった。これならすぐにでも帰れる。……内心、調節ミスつてたらこつちがやばかつたギリギリの作戦だったが、文句なしの大成功で良かったぜ……

向こうがどんな顔をしているのかは分からないが、特に執務官は歯噛みをしていることだろう。……このはと次に逢う時は覚悟しよう。

しかし、それとは別で、高笑いを抑えられない。相手に関わらず、こうして綺麗に一杯食わせたことは、気持ちいいものでしてねえ。

「かかったなこのはっ！ これが我が『逃走経路』だ！ このはこの八高との知恵比べに負けたのだッ！」

『まるで悪役の台詞じゃのう』

「実際悪役の台詞だから困るんだけど……」

「なに言ってるか分からないが、さっさと行くぞ」

「だな」

「それとだが輪」

「どうした？」

「……助かった」

「ん、お、おお」

正直ななに対しての感謝はよく分からなかったが、予定より早く到着したことから、普段殴られる立場なだけに、ヴェイターから素直に感謝されるとは嬉しい！

さて、既にシヤマルさんに伝えたのだろう。足元に転送用の魔方陣が敷かれる。遠くで二つ影が見えたが、もう遅い。ひとまずは俺たちの勝ちだな。

「おい撃ってきやがったぞー！」

「容赦無いな！」

例の緑の機関銃が放たれてくるが、寸でのところで転送されたようだ。広がっていた空色と広大に広がる緑の風景が消えた。やっ、やったぞッ！ 発現したぞッ！ なるほど、平穩を求める殺人鬼もといスタンド使いは、こんな気分で逃げていたのか。これは心労がマツハだな。

だが困らないことに、現状俺にとつてのストレスはどうしてもはやての状態悪化になるからなあ。いやあ、俺もすっかり保護者の一人になったようだ。……家族として受け入れてもらってる高町家に凄く申し訳ないが、俺にも意地というものがあるので、心に従うことにする。

「ふん、手間を取らせる」

面倒に鼻を鳴らすも、エンヴィイは自分を阻害する魔道師を全員相手にした疲労の影響を誤魔化すように、小首を捻って音を鳴らす。

特に果敢に攻め手に回っていたヴォルケンリッターや、引け目のためにあぐねていたのはたちも同様に、多くの傷を負っていた。どう動こうと、エンヴィイが持つ多数のレアスキルと虚数魔力が、魔道師に

とって強大な壁となっていて、それが要因となっている。それは、夜天を舞っていた色彩たち地に落ちていて、強く証明されていた。が、それらに眼を向けることなくエンヴィは、アリサとすずかの前に立って庇うシャマルの前に、足を交差させていく。

戦闘の流れ弾によって車椅子を破壊された上に、自身の想像を上回る危険に遭遇したはやては、その緊張した状況によって元より弱っている心臓への負荷が大きくなかった影響と、目の前の魔力に反応する闇の書の意識に耐えきれず、意識を失った状態になっている。エンヴィはこれから奪おうとする肉体の状態に眼を配ることなく、ただ嬉々として頬肉を歪めるばかりだった。

「はやて、と言ったか。その娘を寄せ」

「なによ、フェイトと同じ顔してなにしているのよ!？」

「アリサちゃん!」

「口五月蠅いぞ蟲め。そんなに死にたいか?」

「アレグロシューター!」

4つのさくら色の球体は加速を命じられ、エンヴィへと走る。加速された魔法をかわす事が出来ず、直撃する。近くにいたシャマルはバリアを張っていたことで、傷も余波も受けることは無かった。

受けた攻撃の影響で息を切らし、額の切り傷から赤い雫を流すも、その眼には未だ光は宿っていた。

「——友達に、手を出さないで!」

「なの、は……」

「その友達と同じ顔の人間を撃つか。明確な手心が見えるが、躊躇わない姿は面白いぞ」

「わたしだって、出来れば人を傷付けたくない。だけど、友達を傷付けるような人なら、わたしは戦う!」

「そうか、だが残念だったな。吼えたところで貴様は満足に戦うことも出来まい。皮肉だな、如何な力があるかと心のせいで持ち腐れて死んでいく有様はな。吾が手を出さずとも、貴様はその半可な覚悟のせいで守れないとは思わないのか?」

「それは……!」

「間違いじゃない！」

「迷う必要などない！」

響かせた声の主は二つ。長髪を揺らす騎士と、漆黒を纏った少女。その漆黒を纏った金の少女はデバイスを擲弾銃から鍵の形へと変換させていた。近接特化させた形態よりも、汎用性に優れた『エターナルフェーズ』で近接へと挑んだ。

鍵に雷光を纏わせ、薄い刃へと変化させる。——フェイトが近接特化を選択しなかったのは、攻撃力は確かにあるもの、大きな武器である為どうしても振りが多きなってしまうことと……文字通り近接に特化しているから、迂闊をすればダメージが通ってしまうこと。つまり、あくまでアリシアへの懸念が拭いきれていなかった。

それでも、気持ちはなのはと同じ気持ちだった。厳密には違うが、根本は同じ。フェイトとシグナムは低い姿勢で滑空しながら、互いに別方向から、レヴァンティンと以前のバルディッシュと比べてやや短い距離のデバイスを振るう。勢いを乗せた一撃は両手で翳したバリアによって阻まれ、斑の向こうでエンヴィイは笑う。

「なのはは間違っていない！　なのは半端な気持ちで覚悟しないことは知っているつもり！　迷う必要は無いよ！」

「例え敵だろうと、覚悟を持った人間を笑うことを私は許さん！」

「フェイトちゃん……！　シグナムさん……！」

「ははっ、貴様たちも世迷言か！　それで吾を殺せると!？」

「それで諦める私か！　例えなにがあっても、主に仇成すというなら——」

「私は戦う！　なのはの言葉が届かないなら、私がなのはの代わりに戦う！　なのはが倒す必要は無い！」

「大口か面白い！　どうやって吾を倒す!？」

『Blizzard force freeze』

エンヴィイがその変化に遅れた要因は二つだった。二つの強い魔力を防いでいたことと、元より傲慢な性格ゆえの見落しだった。

「ぬっ……これは……！」

くくつと歪んでいた笑みが、その変化によって消えた。



その足元が気付かぬ内に、凍結されていた。ただの氷なら容易いものだけど、魔力により形成された氷が足元を覆い包む。シグナムは知らないが、フェイトやなのはたち管理局の人間は知っていた。その能力を持った魔道師の存在を。

「すぐに倒す、とは言っていないよ」

「シルヴァちゃん！」

「遅くなってすみません。ですが、エンヴィキヤットウオークの弱点がはつきりしたので、そろそろ大丈夫のはずです！」

「吾の弱点だど？ 笑えぬ冗談とは愚かし——」

瞬間、機能を失ったようにエンヴィは肩膝をつき、展開していたバリアも著しく効果が弱まっていた。

——バリアを透過させる目的が強かった為に、シグナムの一振りと強化したフェイトの剣は、バリアを破壊しエンヴィを斬った。自分でも予想外の変化に反応が遅れ、直撃した。

「が、なあ……！ なにが、起きたのだ……!?!」

「エンヴィにダメージが通った、だど……?」

「このはの予想と、プレシアさんたちと一緒に映像解析しながら、デバイスの欠陥を探っていたのですが、二つ解明しました。どれも、虚数空間を纏っているからこそその機能障害という皮肉ですけどね」

「弱点つて?」

「一つは稼働限界時間があること。予測ですが最大時間は8分でしたが……ラグナロク」

「Five minute, 28 seconds」

「5分28秒……やっぱり、魔力の消費量に稼働時間に影響するようですね」

「もう一つとはなんだ?」

「シグナムさんも見たと思いますが、足元が凍りついたじゃないですか。デバイスによるオート機能が作用していないんですよ。それが二つ目」

「付け入る隙はある、ということか……ぬ、私を知っているのか?」

「え、ええ、管理局の情報で少し……」

「なるほどな」

「吾で戯れるか蟲共おおおおお!!」

勿論凍結だけでは万一に逃げられるかもしれない。念の為にとユーノとアルフがそれぞれに、四肢へとバインドで捕らえる。機能が落ちたことで虚数魔力を上手く展開出来ず、エンヴィは暴れ馬のように喚きながら身を振じらせる。

これ一体どういう状況だ……? 戻ってきたと思ったら、海鳴市内の建て物が怪獣にでも襲われたように崩れ、道路を象るコンクリートまで酷い有様だ。なんだよこれ、絶対エンヴィの仕業だろ……魔力反応を辿って飛ぶが、どうやら八神家どころか、翠屋や高町家からも離れているようだ。まずは一安心だが……問題ははやての状態だ。もうイグナイト使えるほど余裕も無いから、ヴィータに引っ張つてもらってる。相手は違うが、以前にもあった状況を思い出して、ちよつとだけ落ち込んだ。

「シヤマルさん! アリサ、すずか! 無事か!」

「おにいさん……」

「あ、アホ先輩なにしてしてるのよ!? これは一体どういうことよ!? 怖かったのよ!」

「ご、ごめん」

とりあえず姿見えて降り立つと、俺は真っ先にシヤマルさんが背負ったはやてのところへ向かう。一応で言えば、四人に怪我は無いようだが、はやてのリアクションだけが帰ってこない。

「シヤマル、後はアタシが引き受ける。ザフィーラとシグナムは?」

「二人は無事よ。ただザフィーラは」

「済まないヴィータ、輪。善処はしたが、この有様だ」

「いや、ザフィーラはよく頑張ったよ。ありがとうな」

「それより、その傷は」

「俺は後で構いませんから、ヴィータを治してください。ザフィーラ、俺がはやてを病院に連れて行くから、アリサとすずかを頼む!」

「心得た」

ひとまずヴォルケンは無事なようだ。ここから見た限りだが……全員無事といえば無事だが、なのはやフェイトの頭から流れる血を見ると、やり場の無い怒りが込み上げて来るが、初めて顔を見たが相手は本当にフェイトと同じ顔。どう足掻いても手を上げられないことが分かった。もう自分の魔力量と相談しても、ここに残っても俺は役立たず確定なので、大人しくはやてを背負って、病院に行くことに決めた。うわあ柔らかい…… まずい、呼吸してない……！ これは暢気してられんぞ……

……本当なら闇の書のことについて聞きたかったけど、こんな状況で聞ける訳が無い。帰って混乱を招くだけだ。どうやら管理局側と共闘しているようだから、余計なことを言っただけ水を差したくも無い。なにやらエンヴィも捕獲出来ているし、基本はデバイスの破壊だから後は向こうに任せても……

【み、みんな、そのまま聞いてほしいっす】

背を向けようとしたと同時に、菜摘が声が入ってくる。ヴィー々やザフィーラまで反応したということは、本当にこの場の全員に伝える気だ。というか、管理局側したら良いのか、敵にも情報漏らすよなものだが……

しかし、菜摘の声色がなんだか浮かない。なにを見つけたんだ？

【たった今エンヴィの解析構造が終わったんすけど——アリシアを助けてのデバイス取り外しはほぼ不可能っす】

——え？ 不可能？ 極めて難しいとか、可能とかじゃなくて、不可能？ ……冗談だろと構えたかったが、一向に顔の上がらない菜摘の声調は、分かりやすく事実だと伝えていた。その細くとするように、マトリョシカの声が続いて響く。

【端だけ言えば、あのデバイスの持つ虚数魔力の影響さのう。状態そのままを言えば、アリシア・テスタロッサの体内を循環する魔力と、エンヴィの虚数魔力によって接合されたような状態になっておる】

【単純な魔力による寄生ならどうにかならんすけど、虚数魔力のせいで外からじゃ手が出せないんす！】

【つまり、アリシア・テスタロッサを無事に救う方法は一つだけ。虚数

魔力を調節出来るエンヴィ自身の分離を待つしかない」

「待って、他に方法は無いの!?!」

なのはは、今にも泣きそうな声を菜摘に向ける。しかし、遠くにいる菜摘は痛々しい顔を変えないまま、

「……………後残っているのはエンヴィの破壊方法っす……………その、エンヴィごとするか、アリシアの後にデバイスを……………この二つだけっす……………」

「……………」

……………菜摘は相当言葉を選んだと思う。俺だってはつきり言いたくない。アリシアが助けられて、無事なままエンヴィを壊す方法のような冴えた方法があれば良かったのに、それが見えてこない。

俺を含めた管理局側の人間には、最悪の話だった。——それが更に、悪い事態を引き寄せてしまった。

「蟲如きが……………吾に不敬を呈するか……………」

それが、俺たちの油断だった。片手は菜摘とアルフとユーノがいる方向に、もう左手は地面に向けていることに気付いたのは、その両手が斑の光を込め始めた時だった。俺が少しだけ早く気付いたのは、日頃のあの修行のおかげかもしれない。

しかし、なのははから聞いた話だと、チャージ時間を短縮させるレアスキルまで持っていると聞く。ならば、魔力光が見せた時点で危ないんだ。

「ザフィーラー！ 二人を安全なところに!」

「分かった!」

「クソツタレ！ 頼むぞ俺の身体……………！ イグナイト!」

「みんな備えてっ!!」

この場のやつ等なら対応は出来るだろうが、一般人抱えた俺とザフィーラーじゃ巻き込まれたら洒落にならん! シルヴァの声に従い、全員がバリアを展開させる。俺とザフィーラーは一般人優先なので、出来るだけ急いで離脱。どれだけの規模とか予想は付かんが、魔力の密度がやばい。一瞬でも早くここから離れて……………

「覚えておれい蟲共め! この屈辱は兆倍にしてくれるぞ!」

エンヴィの怨嗟を込めた叫びの直後、手の平に貯めた魔力を放たず――点火させた爆弾のような衝撃を広げた。斑色の異彩は街の隅で爆炎となり、見た人々に不吉と不安を与えるような光を上げていた。轟音がコンクリートを捲り上げ、閃光が建造物を瓦解させる。人が非難していることが最大の幸運であることを示すように、近隣30メートル以内の建造物は、呆気なく崩れて落ちた。

――そうしてクリスマス時期の海鳴市に襲ったこの説明不可能な事件は、街から笑顔と幸せを10分以内で奪っていった。

元氣すぎるアイツがクラスにいないと空気が落ち着くけど、それはそれで物足りないなと思う自分がいたりする

「報告は以上です」

「ありがとうございます。クロノ執務官、個人の勝手な行動が組織に影響するということを理解して下さい」

「はい」

それだけを言ってから、クロノ執務官は提督執務室を出て行った。

このはを連れて八高輪たちの保護行為は——執務官自身の独断だった。隣で報告しながらも、このは自身、明確な目的を聞かされていなかったから少し不審に思っていたが、まさか独断とも思えず驚きを隠せないことだった。このはにしても、執務官の性根が熱い人間であることは知っていたが、こうも勝手にするとまでは予想はしていなかった。

「まさか、クロノがあんな無茶をするなんて……」

その衝撃は、肉親たるリンデイも同じだった。規律を重んじるあの子が、まさか場当たりに動くなんて……

受けた被害報告は惨事極まり無かった。街の崩落、魔法という存在の認識の恐れ。対処すべき問題が多いことで頭を悩ませるが、唯一救い上げるなら、死亡者が確認されていない点だろう。事実、局員とヴォルケンリッターによる共闘が時間稼ぎになった部分が大きい。

しかし、結局はそれだけ。先の通り被害は甚大を被り、ヴォルケンリッターへの説得また保護、闇の書の保持すらも失敗。加えて、アリアの救う方法も手詰まりという結果。管理局が得たメリットは、ほぼ皆無だった。

「リンデイ、少し頭を冷やさない」

成果があがらず、はあつと疲れた吐息をした隣で、プレシアがこと

んとテーブルに茶の入った碗を置く。冷やしなさいという言葉の通り、いつもリンデイが淹れているものとは違って、いつもほどの湯気は見えなかった。

今まで気にはなっていたが、敢えて聞くことはしなかった。けど、このところは顕著に表情が険しくなっている。これ以上は彼女自身にも良くないと判断したプレシアは、ふうつと息を吐いてから尋ねる。

「闇の書が出てから、ずっとそんな顔しているわよ」

「……………」

「私には、ただ危険物回収に急いでいるようには見えない。なにか因縁でもあるの？」

「……参りましたね。やはりあなたに隠し事は難しいものですね」

気疲れとはまた別の、リンデイは少しやつれた顔で笑顔を向ける。

……無理矢理に張られた笑顔にプレシアは苛立ちを覚えるが、その舌を打ちかねない険しい表情に気圧され、リンデイは笑顔を少し薄めた。

「……過去に、この事件によって夫を亡くしているんです」

「……………」

「封印していた闇の書を護送中に、その艦が沈んだの」

「……………そう」

気付くと、リンデイの笑顔は消えていた。かつてのことを思いだしたのか、茶の入った碗を持ち上げようとして、止めた。

不思議と、そこからのプレシアには怒りは湧かなかつた。かといって同情も無い。ただ納得した。半年前に、嫌に自分に親身なっていた理由や、失ったものが帰らないという真理をよく心得ている理由を、理解したからだった。

……なるほど、彼女は確かに失っている。だけど、死者に対する妄執はない。そこは自分と違う。——だけど、ここからがかつての自分に近い。死んだ人間に対する妄執は無くても、きっかけに対するしがらみが強い。それはリンデイの指揮に影響を与えるほどだ。形は違えど、彼女も過去に囚われた人間に違いない。とはいえ、自分と比

肩するのおおかしな話だが、彼女の事情というのも無理の無い話には  
変わりない。

「要するに、この闇の書の事件に対して決着を付けたい。そういうこ  
とね」

「そうですね。でないときつと、わたしもクロノも前に進めませんか  
ら」

「……リンディ。この事件が貴方たち親子だけのものじゃないのは分  
かっているわね?」

「分かっているつもりです」

「なら良いわ。既にここにいる全員が関わっていることよ。個人の思  
考が組織を乱すということを理解しなさい」

「……プレシアは手厳しいですね」

「事実を言ったままでよ。良い? その一杯を飲み干す内に切り替えな  
さい」

プレシアはそう口にして、執務室を出て行った。

受け取ったリンディは、不器用というか、相変わらず口調が尖って  
いるが、プレシアの気遣いにまた笑ってしまう。このお茶と言ひ叱咤  
と言ひ、リンディは助けられたなど茶を含む。

単純に、上司と部下という立場で語れば、提督たるリンディを部下  
が呼び捨てにするのは有り得ない。しかし、当のリンディは気にしな  
いどころか変に物怖じしないプレシアに、返って良い印象を覚えてい  
た。局内で物事を対等に言い合える人間ならいなくもないが、こうし  
てはつきりと叱咤する人間が久しいリンディは、少し嬉しくもあつ  
た。

「……やっぱり、熱さと甘みはもう少しほしいところですね」

お茶を含んだ感想は、甘みが薄く——少しぬるめの温かさが揺ら  
ぐ喉越しだった。

状況の後である以上、局員を動かすことも出来ない。特にまだ身体  
も万全じゃないクロノ執務官は待機を命じられ、自室へと向かう。こ  
のほも一緒に歩くが、特に話題が無いことも重なって、無言のままフ



ロアをかつかつと歩いている。

……否、話題はある。無かったのはタイミングだけ。

「クロノさんでもあんな無鉄砲するんですね」

「自分でも分かっている。笑えばいいさ」

「では喜んで。ぷふつ、フワーハハハ！」

「思ったより遠慮無いな君は?!」

「笑えって言われたからですよ。いやでも失礼しました。しかしクロノさん、どうして独断で行動をしたんですか？」

このはなりに空気を柔らかくしてから、疑問を投げた。

クロノのことは分かっていたつもりだけど、先の報告で知ったこともある。このはは、突発的とも言えるクロノの行動を掘り下げようと尋ねた。

とはいえ、「身勝手をしたと反省しています」の一点張りで深い理由を話そうとしなかったから期待は薄かったが、

「……別に大した理由じゃない」

更に意外、クロノ執務官は少し歩幅を緩め、このはの横に並びながら顔を。

「彼に万が一があれば困るからだ」

「正直に言うんですね。クロノさんが嫌いな性格してそうだから、てつきり……」

「勘違いしないでくれ。困る人間が多い、ということだ」

「なのはさんやフェイトさん、ですか？」

「彼女たちだけじゃない。アルフやユーノどころか、エイミイも彼を慕っている。あの性格だ、当人に意図が無かろうと人が集まる性格をしているだろう?」

それは付き合いの浅いこのはにもよく分かる。どこで顔を合わせても、彼は場所を選ばず余所余所しさが無い。基本嘘を言う人間でも無い以上、必然と嫌な部分は鳴りを潜め、彼が放つ明朗な存在感が殊更に際立つ。かといって、人の意見は尊重するし、悪い空気も嫌いときた。否応に敵をつくりにくい性格をしている。事実、シルヴァも「話していて落ち着く人」という感想を聞いた時のこのはは、正直怨嗟

で腹が煮えくり返った分の強さを笑顔で誤魔化したが、反面納得もした。要するに、根っからのお人好しの類。フェイトさんに出会う前なのはや、なのはを経由して彼と知り合ったフェイトが互いに相思相愛にならないのも仕方ないのかもと考察している。

……仮の話、これでシルヴァが八高輪に好意を向けようものなら、このはは高い確率で彼を抹消しに動くだろう。違う意味での脅威として認識していた。軽い天然でもあるから、なにかしらの言動が原因でそうなるかも分かったものじゃない。高敷このはが輪をそこはかとなく好きになれないのは、その部分とも大きく起因していた。

——ということはこのはが考えていることも知らず、クロノ執務官はとつとつと語っていた。

「……彼は、自分の存在というのを軽んじている。自分が思っている以上に慕われていることに気付いちやいない。極論だが、八高輪は死んだらいけない類の人間だ。彼の身になにかあれば、それこそアースラの全体の士気に関わる」

「……分かっていきます」

言われずとも、それについてはこのは自身も気付いていた。どうしてもアースラ内から高い確率で出る「八高輪」という名前と、彼の人柄。このはの個人的心情や周囲の信頼の大小を比較を無視すれば、誰からも一目を置かれていた稀有なタイプの人間だ。だからこそこのはは、彼と対峙した時に撃墜してもアースラに連れ戻すという気持ちがあった。手段は乱暴だろうと、八高輪という存在の是非だけで流れる空気が違うのも事実だった。事実、彼が離れてからのアースラの空気というのは、エンヴィの出現と重なって緊張が長く続いているような状態だった。辛うじて菜摘やアルフたちが緩和しているからこそ、管理局は落ち着きもあった。……尤も、今の菜摘はエンヴィの砲撃を受けたことで治療中だが。もつと言え、これからこのはが向かう先が菜摘のいる治療室になる。

「そういうクロノさんも、八高さんのこと理解しているんですね」

「……笑えない冗談だ。顔を合わせてたら嫌でも覚えるんだ。……それとだがこのは、君は一つ間違っている」

ここでクロノ執務官は足を止める。よっぽど重要なことなのか、一言一句、意味を込めて彼は言った。

「ぼくは彼が嫌いなんじゃない。好きじゃないだけだ」

「……………」

「……………」

沈黙がづらい。

わたしとフェイトちゃんて話し合っただけの結論として、自分たちが魔導師であることを話した。ユーノ君も人の姿になって、自分があのフェレットと同一であることを、アリサちゃんやすずかちゃん——そして、家族の前で全部話した。話す程度もいまいち分からないけど、今は管理局のことだけ伏せている。最悪、リンディさんと掛け合っただうにかしてみるとはフェイトちゃんは言っていたけど……

「……………もしかしてだけど、八高君もその魔導師なの？」

「うん……………」

「通りで揃っていないなくなる時期が多かったのね」

「ごめんなさい……………」

「ああもうムカつく！」

静かに足を揺らしていたアリサちゃんが、コップの飲み物を一口含んでから吐き出すように、勢いよく言った。その表情は言葉の通り、憤りがそのまま形になって眼を細めている。だけど、その理由は、わたしやフェイトちゃんの思っていたものとは違っていた。

「前々からなにか隠しているのは知っていた。話さえ聞ければなにか力になれるかもって思っていたのに……………結局力になれない自分が、ムカつく……………」

ぐつと奥歯を噛む。わたしたちに対する怒りではなく、手が出せない自分をもどかしく思っていたことで、またアリサちゃんは悩ましく頭を搔く。

一通り話したにしては、特にアリサちゃんとすずかちゃんの理解が

早すぎる。おかーさんたちがまだ少し渋い顔をしているのに、二人にはそれが無い。疑問を聞こうとしたところで、フェイトちゃんが入れ替わるように口を開いた。

「アリサ……私たちが嘘を言っているとは思わないの？」

「いろんな有り得ないものを見たのに、疑う余地は無いでしょ？」

「た、確かにそうだけど……」

「それに、なのはちゃんやフェイトちゃん、おにいさんたちが隠し事はしても、嘘を言えるとは思えないから」

「……そうだな。大方、話しても信じてくれないとか、友達を巻き込みたくない、って思っていたからだろう？」

「すずかちゃんの一言で、おにいちゃんの表情も少し朗らかに崩れた。そう、おにいちゃんの一言が全てだった。魔法という言葉を出して説明するにしても到底信じられないと思うし、証拠を見せてもいいものだろうか……それで悩んだ末での内緒だった。それに、わたしたちのすることは街の人たちを助けること——乱暴な言い方だけど、それは友達を守ることに繋がる。だから、最悪言わなくていいことだと思っていた。」

「だけど、今は違う。ここには理解してくれている人たちがいる。状況のせいで話さざるを得なくなったではあるけど、それをしつかり受け止めて、理解してくれている。わたしたちはとつても幸運だと思う。」

「……み、みんな、ありがとう……っ、う……」

「もう、なのはは泣き虫だね」

「美由希、今まで我慢していたんだから仕方無いよ。ほら、今くらいは甘えなさい。フェイトちゃんも」

「あ、いえ、私は大丈夫なので」

「今はプレシアさんも忙しいみたいだから、休憩時間と思つて」

泣きじゃくるのを我慢するわたしと、借りてきた猫のように大人しくなったフェイトちゃんをそっと抱き寄せてから、おかーさんはよしよしと頭を撫でる。「やっぱり敵わないな」と苦笑するおとーさんの隣で、いつもと変わらない笑顔のすずかちゃんとまだ怒りの晴れない

すずかちゃんが視線を向けている。泣くのを我慢しようにも、それを嫌がるように、ボロボロと流れ続ける。

「大変な時期なのに力になれなくてごめんね。だけど、わたしたちはなのはたちの帰りを待ってるから」

「ちゃんと帰ってきて、今までのことちゃんと聞かせないよねっ」

「うんっ……！ 全部終わったなら、ちゃんとみんなに話すね……！」

——気付くと泣きじゃくっている自分に対して気恥ずかしさを感じながらも、少し誇らしくもあった。自分が守りたいと思ったことは間違いじゃないことを、この反応で証明されたみたいで素直に嬉しかった。

そうだよね。わたしたちでみんな帰らなくちゃだよね。だから、ここにいるべき人も一緒に、連れてこなくちゃいけないと思う。はやてちゃんやヴォルケンリッターと言われてる人たちとも仲良くなって、一時間、ううん、三十分だけでも良いから、翠屋の小さなテーブルを友達みんなですべて埋めてから、いろんなことを話したい。今までの大変だったこと、悩んだこと、忘れたくないこと、その中でも楽しかったこと、その全部を包み隠さず話そう。

だから、もうこれ以上悲しいことは起こさせたくない。みんなで揃って、笑いながら過ごすことが大事だから。そうですね、八高さん——

「お前本当頑丈だよな」

「毎朝コーンフレークを山盛り二杯食べてるおかげさ」

「なんにしても、主はやての身を案じてくれて感謝する」

「今更硬いことは言わんでくれよ。当然のことだろう？」

はつきり言って、あの夜のこととは一部だけ覚えていない。ぶっちゃけ、はやてを庇った影響で、余波とは言え攻撃魔法を直に受けたんだ。確かに生きているのが不思議だった。俺も俺であんな瀕死な状態から病院に運べたもんだよ。そこからはつきりと覚えていないが、シャルさんから聞いた話だと、(特徴を聞いた限り)フィリス先生に凄い剣幕だったではやての治療を促していたとか。余裕が無かったにし

ても、剣幕張ったのは宜しくない。後で謝りたくて俺が喋った内容を聞こうとしたが、なんかシヤマルさんが異様にニヤニヤしてきたから、先生が本人に聞くことに決めた。まあともあれ、街はあんな状態だったのに、電気が働いていたこととまだ人が残っていたことは、幸運だったな。

……しかしまあ、いくらはやてがヤバかったとは言えだ、声を荒げるほど冷静じゃなくなるという状況は久々かも。半年前にシスコンを殴った時と並ぶレベルだったな。そりゃ仕方ないでしょ、死に掛けの幼女眼の前にして冷静を保つてられるかっての。俺意識無かったっぽいけど。

「もう、無理しないで下さいよ。仮に八高君が死んだら、誰がはやてちやんと添い遂げるんですか?」

「大丈夫ですって。はやてならむしろ、男を選ぶ立場のスペックしてますから」

「素っ気無いな。まさか主に飽きたのか?」

「もしそうなら、アタシは容赦しないからな?」

「ヴィータが俺に容赦した覚えが無いぞ?! それとだが、俺がはやてに飽きるとか天地がひっくり返っても有り得んわ!」

シグナムとヴィータの眼光が鋭く据わるから、全力で否定する。実際飽きたとか微塵も無いし。あの美味しいご飯もって食べたいし。

……ヒモの意見みたいになつとるがな。

いやな、これには理由があるんだ。この手のやり取りに慣れてしまったせいなのか、今でははやての媚云々の話題になんか動じることは無くなっただけ。いつかシグナムと話をしたように、はやてとは「親友でいよう」と割り切った部分が大きいからなんだけど。

……まあね、確かにははやての境遇を考えれば、現状俺に白羽が立つのも分かる。けど、それは俺がこの件に首どころか全身突っ込んだからであって、それ以上は無い。冷静に考えれば、出逢って一ヶ月もしていない男をお婿さんと呼ぶのはあまりに気が早い。……そうか、やっぱり冗談半分の発言か! 改めて考えると、やっぱりおかしな話題だったなこれ。そもそも、本人たちの意思を無視されている節があ

るからな、こうしてのらりくらりと対応すれば良かったな反省なう。

それとは別で真面目な話、俺じゃなくてはやての素性を知れば誰だって力になりたいに決まっているじゃないか。ちよつと悲しいことに、俺が魔導師だから、という理由でここに居座れる理由は完璧に出来上がってしまう。俺やヴォルケンが良かろうと、決めるのははやてだ。尤も、なのはやフェイト同様に気のいいお兄さんで止まるのがオチだろうけど。クソツ、イケメンになりたいっ！

「まあ要するにだ。周りがどう言っても、大事なのは当人同士の気持ちちつてこと」

「それって、はやてのことが嫌いってことか？」

「なんだその質問は。嫌いになる方が難しいだろ」

「それじゃあ問題は無いですね」

ぱあつと花が咲いたような笑顔を見せるシヤマルさんと、ちつと舌を打つヴィータ。その隅で微かに顔を綻ばせるシグナム……うん。俺が言ったことの意味がいまいち伝わってませんねありがとうございます。います。はやてを尊重してるんだかしてないんだか……これじゃあ親戚からの愛のある冷やかしだぞ。

……今気付いたが、今の発言はそういう意味じゃないからな！まどろっこしく聞こえたら申し訳無いが、つまりあんな善い子が嫌いなものかと言いたいただけだからな！ ああもう日本語って面倒臭い！

「なんかもう意味分からないんですけど……あ、そうだザフィーラ、なんとなく気になってたことがあるんだが、聞いて良いか？」

「また藪から棒だな。どうした？」

「破壊と転生と再生を繰り返すのが闇の書のサイクルなんだよな？」

「ああ。それがどうかしたか？」

「あまり聞きたくないことなんだが……その時、所持者はどんな状態なんだ？」

——なるだけ角の立たないように言ってみたが、感付かれてないよな？ いや、そんな訳が無い。この場の全員が首を傾げているし、俺だって妙なことを聞いていうと思っっている。

「……なにを聞きたいんだ？」

「待って。俺はただ、万一にでもはやてにそうなってほしくないから聞きたいだけだ。……聞いて不愉快に思うかもしれないが、闇の書自身が所持者を……って気になってさ」

こつちも真面目に聞いている以上、退く訳にいかない。ヴィータが一瞥するが、反応はしない。だがヴィータが俺を怪訝にするのも分かる。実際俺の言い分はほとんど本当だが、真意を暈しただけだ。

——このはは言っていた。意思を問わずに所持者を取り込み、過剰な防衛で破壊行動をするようになったと。所持者との悲しい記憶だけを持ち越して転生していると。それ……それを覚えてないなら、所持者の最後を覚えていない、ということになる。最低でも前の所持者の最後を知らないと言えば、このはが正しいことになる。まあ、俺に向ける感情はともかく、あのいたいけな少女が嘘を言うとも思えないが、念の為だ。俺が納得したいが為の、ただの確認だ。

「輪、それは杞憂にしている。主に不服があらうと、我らは付き従うのが本懐だ」

「……やっぱそうなるか」

代わりにザフィーラはそう答える。なるほど、その答えでも掴めたが、確証が欲しい。かといって、無理に問い詰めればこつちに風向きが悪くなる。これ以上は止しておこう。

「しかし主の最後か……私は覚えが無いな」

「——え」

「わたしもですね。ヴィータは見ている？」

「いいや。ザフィーラは？」

「私もだ」

……そこで言葉を無くした。誰一人として、前の所持者の最後を見たとすら言わない。……覚えが無い。このはの言う通りだ。闇の書の状態は普通で無いらしい。

「……今と比べれば、良い思い出とも言えないからな。私たち自身、忘れたかったのかもしれないな」

シグナム自身、無理があることを自覚しながらもそう結論付ける。だが、これではつきりした。このはが正しい。実際の俺の行動は、は



やての救出じゃなく、世界滅亡に化けてたつてわけだ。 ジャン  
ジャジャ〜ン!! 今明かされる衝撃の真実ウ! ……………と茶化  
さないと、正直吐きそうな気分だった。茶化して許されることじゃな  
いにしても、真面目に受け止めたら頭がどうかしそうだったから勘弁  
してほしい。

そして、こいつらははやてを殺すとも知らずに蒐集を行う。それは  
もう動くことのない事項だ。決して変わることは無い。そして俺も  
変えようのない渦の中にいる。

気付いた時には手遅れだった。どうやら俺は、自分が知らない内に  
自分が思っている以上の事態に踏み込んでいたようだ。

「どうした輪?」

「いや別に……別件で嫌なことを思い出してな……個人的なことだか  
ら気にしないでくれ」

「しかし顔色が」

「いや本当に、大丈夫、だから……」

ザフィーラとシグナムが心配してくれるのは有難いが、どんな顔し  
ていいのか分からなかった。これじゃあ誰も救われない。はやても、  
ヴォルケンも、俺も、無意味な徒労になる。それを伝えて信じるとは  
到底思えない。管理局から得た情報だと言った所で尚更。

確か、今蒐集出来ているのは510ページだったな。完成まであと  
156ページ……嫌なタイミングだな。管理局に渡して本の改変を  
するより、俺たちが揃って蒐集した方が早いかもしれない。改悪され  
たと言っても、どの程度歪められているかも分からない以上、時間もか  
かるかもしれないし、下手に機能を弄れば、それこそはやての身にな  
にがあるか起こることか……そもそもその話、管理局側とは相容れられ  
ない。酷い手詰まりな状態だ。

「……よし、こんな時ははやてのお見舞いだな。元気でやれてるつて  
ところを見せないと、無理にでも病院から戻りかねないからな」

「ふふ、そうですね。でも今日はみんなゆっくりしましょうか。疲れ  
も残っていますし、無理に顔を見せてもはやてちゃんが余計に心配す  
るからね」

「……ですね」

駄目だ。ちよつと受け止められる気がしない。少しくらいは気分を変えたい。すずかの家からココアとボスを拝借したいが、病院じゃ当然動物を連れるのは禁止だから諦める。それを抜きにしてもシャルさんの言う通りだ、変に心配わけない方がいいな。見舞いは明日ということだ。

さて、エンヴィは機能してから数日は稼動を休めるとも言われている。全員が回復して蒐集に本腰入れたとして、その完成日を予想するなら——そうだな、明後日のクリスマススイブかもな。

「あ、そうだ輪八高君。明日お見舞いに行きますよね？」

「ええ。それがなにか？」

「はやてちゃんのお見舞いの時に一つお願いしたいのですが」

「局員に集まっていたいたのは、他でもありません」

執務室に揃った魔導師を一瞥しながら、凜然と構えながらリンディは提督然と振舞う。そこからは、いつものような親近感は敢えて退けられ、上に立つものとして眼を向ける。

「このはさんたちの情報とこれまでの情報を頼りに、局員に最終的な事項を伝達するからです。エイミー」

「はい。まず情報を整理した限りですが、エンヴィは機能しても、およそ5日ほどの期間を空けてから出現しています。恐らく、強大な出力の影響による冷却や充填期間と思つて良いでしょう」

「つまり、少なく見積もっても残り4日はかかる計算です」

「その間でエンヴィの確保というのは？」

「可能であつたなら、どうに行っています。ですが、見つかるどころか、調査に向かい、発見した局員に実害があるのが現状です」

「……では、アリシアの保護という目的は？」

正治からの二つの疑問に対し、特に二つ目には反応は無かつた。しかし、それは策が皆無だからということとは違つていた。

「……それについては保留にしています。今はそれより、私が考えていることは、闇の書の改善です」

「改善？」

「このはさんからは、闇の書は改善されたデバイスということは何っていると思います。なので、あちらとの交渉が必要です。少なくとも、エンヴィイという共通の相手がいる以上、一概に断ることは無いでしょう。それに、幸い向こうには八高さんもいるので、勝算は無きにしても非ずととつていいはずですよ」

「……相手は管理局を受け入れていない連中ですよ？　もし頑なに拒否されたら」

「そうなれば必然的に、戦闘は免れませんね。だからこそ、ここにいるみんなに伝えているのです」

「……シルヴァにしてみれば、これまでもリンデイの毅然とした態度は見慣れたものであるが、今見ている彼女から微かな迷いを感じていた。恐らくアリシアのことで悩んでいるかもしれないが、それ以外については迷っていない。ここにいる全員。なのは、フェイト、ユーノ、アルフ、クロノ執務官、正治、菜摘、このは、シルヴァは、それぞれに彼女の態度に釣られて改めて表情を強く構<sup>かた</sup>える。

他の局員にも後で伝えるだろう。しかし、今この場で現状を変える魔導師として信頼されていると感じた9人は、内心で深呼吸しながら調子を整える。

「あのそれで、その日にちというのは……？」

「そうですね。みなさんの休養と験を担ぐ意味で、このはさんから聞いた闇の書の事件の解決した日を予定しています」

「解決した日、ですか？」

「でも、それじゃあ闇の書の方が」

「それは心配しなくても大丈夫でしょう。あちらとて、エンヴィイの被害を被っています。すぐには行動することはありません。不本意ですが、それはクロノが証明している通りです」

「なるほどっすね」と頷きながら、菜摘が腕を組んでいる横で、重たい頭を支えるクロノ執務官は、嘆息を溢す。

特に反対意見が出ることもなく、伝達は終了。——の間際、リン  
デイは最後に一つ告げる。

「では、ヴォルケンリッターとの会合については——地球時間の二  
日後、12月24日のクリスマスイブに決行します。詳しい時間はま  
た追って通達します」

星の飾りが揺れる夜空の下、冴えない王子とお姫様は踊るのでした

「良いですか、意識が戻ったばかりなんですから無理はしないで下さいよ」

「分かっていますって。フィリス先生は心配症やから」

「心配もしますよ。はやてさんになにかあったら、八高さんに怒られますから」

「どうしてそこで八高さんの名前が!? ていうか、そないことで八高さんが」

「いえ、それが本当に怒鳴られましたね」

「え、どういうこと?」

「それがですね、自分も大怪我してるのに、「いいからはやてを助ける!」なんて言ってる。あんなに余裕の無い彼初めて見たからビックリしちゃった」

「そうなんや……」

「愛ですねえ」

「ふい、フィリス先生!」

「あはは。それじゃあ、後はお友達と仲良くね」

どう見ても含みのある優しい笑みを向けてから、フィリスはふふつと零して病室を後にする。フィリスは口にしなかったが、その当時の八高の意識は半分無く、怪我自体もはやてより遥かに酷かった。にも関わらず、彼は「あてが有るので大丈夫」と治療を強く拒否してまではやてを優先させていた。意識も半分ない状態ではやてを強く優先させたのは間違いなく八高の本音であり本性に違いない。……愛と冗談半分で言ったにしても、大事にされているな、と微笑ましく笑うフィリスだった。

——外は夜。クリスマスイブを明日に控えているだけあって、街は賑やかさを保っている。海鳴市であれだけのことがあったにも関わ

らず、外が元気なものも不思議だが、そこで活気を無くせばそれこそと思つてかもしれない。警邏の巡回や見回りもあることで、いつもと違う状況を迎えている。

病室の窓からは見える夜景は、今のはやてにとつては絶景だった。例年より少し足りない光の粒に少し不満を感じながらも、人の賑やかさを示す証明と考えると、改めて嬉しくもなる。ここに大勢の友達がいることで、寂しさも感じることは無かった。——と言えば嘘になる。はやては心臓の影響で入院も確定したことで、この後来るだろう寂しさを付け入れられたくないと言わんばかりに、この一時をいっぱい楽しんでる。

なのはとフェイト、アリサやすずかに加えて——このはとシルヴァも交えての談笑。これだけの人数で他愛の無い話をするのは初めてで、はやては少し緊張をしていた。輪の友達であることと年が同じことに安心するはやてにしても、避けたかった話題が原因でしどろもどろと視線を泳がさせる他なかった。

「で、あのノンケ紳士さんとはどこまで行つたんですか？」

「このはちゃん直球やね!？」

「みなさんは気にならないですか？」

幸い今この病室内は、本人もいない女子会ガールズトークの場。女子同士ならではの話題も気兼ねなく振るえるが、この話題において的的ははやて一人。ある程度の事情しか知らないアリサとすずかも、このはの問いに對して即座に首肯を返す。

「確かに。おにいさんと暮らしているんですよね?」

「すずかちゃん、その言い方なんとかならんへん!？」

「でも他に言い方が思いつかなくて」

「……違うとも言いにくいのがやりきれないわね」

辛うじて味方にはついてくれているアリサのおかげで、最低限の余裕をもてたはやては、安堵から息を溢す。

「なるほど。紳士とは同棲する程度の仲と……シルヴァちゃん、メモを」

「このはちゃんほんとやめて!？」

「許して下さいってかア!? 許してやりますよお!」

「このはが活き活きしてる……」

「フェイトさん、それは仕方ないじゃないですか。なんだかんだでノケの恋路は応援するより、アームロックかけたくなるものだと思うんですよ」

「このは、それ以上いけない」

はやての状態が悪くなければ、実行も視野に入っていたが、少なくともこのはとシルヴァにとっては先輩であり仲間である以上、からかいはしても手を出す気は然程無かった。それとは別で、これほど乙女な反応をされると、こうする方が楽しいのも仕方ないと結論し、このはは続行しようとするかも、たった今シルヴァから制止されたので自重にうつる。

「アホ先輩が御人好しなのは分かるけど、惚れるほど?」

「アリサちゃんまでサラツと……でもなんやろ。シグナムたちと違った安心感があるんよ。それに見てるだけでも楽しいし」

「確かにそうね。遊ぶ時でも楽しそうな顔してるもんね」

「やろ? あの無邪気な顔が好きでなあ。おまけに優しいから、一緒にいるだけでも」

「あのはやてさん、それ自爆……」

「……………」

はやて、語るに落ちる。シルヴァの一言が無ければ、はやてはもつと喋っていたいたかもしれない。「うゝ」と唸りながら、手に取った枕に顔を埋める。はやての味方を勤めようとしたシルヴァとアリサにしても、その光景に思わず小さなイタズラ心が芽生えざるを得なかった。アリサはこのはと、すずかはシルヴァとでアイコンタクトを交わす。

「まあ、アホ先輩もまんざらじゃないみたいだしね」

「ふえっ!?!」

「そうそう、開口一番で呼ぶ名前が「はやて」なんですすよね」

「すずかちゃんまでなに言うの!?!」

「そうかな? 私も八高さんと会話しても、大体の話題がはやてが関

わっているから」

「そぞ、それは最近わたしといるからやと思うよ!？」

思わぬところでフェイトからの援護射撃。静かに話を聴いていたから味方だろうと思っていたはやての希望はあっさり崩落した。

下世話な言い回しをすれば、フェイトの心情としては輪とはやては結構似合っていると純粹に思っていた。確かに無邪気だけど気さくで思いやりがある八高と、利他的な性格のはやて。違いはあれど、二人は過ごした境遇によって視野もある人間。互いが相当と言えるほど優しい人間だというのは、この場の誰もが黙認していた。

だからこそ、気持ちはみんなと同じなのも援護に加わる。

「それがねはやてちゃん、それ本当みたいで。ここに家で過ごしてるのに、「今度はやての家に来るといいぞ。美味しい飯が待ってるから」つてなにか妙な自慢をされて……」

「成程、遠回しに嫁の自慢ですね分かります」

「よ、よっ、よよよよまらうえええええああ!？」

「は、はやてが壊れたテレビみたいに!」

こののは咀嚼をきっかけに、要領を超えた機器よろしくはやての頭から煙から噴き出る、という光景を幻視しかねないほどはやては激しく動揺した。更には、手にしていた枕に何度も顔を埋めたり、バタバタと叩いたり、最終的にはさすがからの見舞いの品であるリンゴを枕で磨きだすという奇行をする始末である。これにはなのはやシルヴァも苦く笑う。

「いやいやいやいや、お嫁さんだなんてそんなまさか。お嬢さん発言だって八高さんはそういう意味は無いと言うてるし、誰にでも優しいのは分かるけど………家庭言う前にまず彼氏彼女って順序踏まないと失礼やし……なにに失礼か分からんけど、とにかく順序は大事やから……でも八高さんって彼女さん出来たら大事にしてくれそうやから、それもそれで良えのかも………でもいっぱい食べる人やから弁当の準備大変そうやけど………」

【どうしようこのは、はやてさんが可愛い】

【う……うろたえるんじゃないツ！ 管理局員はうろたえないツ!】



「しかし、はやてちゃんがこうなのに、おにいさん気付いていないの？」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

「……そうだね」

しないから止めておこう。ちょっと涙眼になっている(…可愛い)し、  
本人も突かれたくないようだから、これくらいにしておこう。否定も  
補足もしない以上、恐らく正解みたいだし。

「まあなんであれ、俺は応援するからな」

「へっ?」

「相談しづらいと思うが、なにかあれば力になるつもりだ」

……待て。なんで俺全員から凄い呆れた眼を向けられてるんだ?

ここのみんなの眼……養豚場のブタをみるかのように冷たい眼だ。  
残酷な眼だ:「なんかこいつ有り得ない臭いするんですけど」ってか  
んじの! アリサとこののはに至ってはあからさまに溜め息を吐いて  
いる。どういう……ことだ……? はやてに至っては乾いた笑いが  
出てくるし。今俺ふざけてないからね?

「た、ただいま……なのは」

「お、おかえりです」

「えっと、このやり取りのことだけど」

「……解決してからもう一度しましょう」

「空気読んでくれてありがとう」

今度顔を合わせたらただいまという約束だったが——完全に事  
の後で言うと思っていただけに、相当間抜けな状況だった。と、とり  
あえず面を合わせた訳だし、なのはの方も覚えていたのは幸いだ。ま  
あ、やり取りの意味に関しては、フェイト以外には分かってないみた  
いだけだ。そこは仕方ない。これはまた改めてということだ。

……さて、こつからちよつとやりづらいな。話し声が多くてなんか  
賑やかだったから人もいっぱいと思っただが、まさか管理局絡みが多い  
とは。これからのことを考えると不穏にならないでほしいな。

「おい、早く奥に入れよ」

「つと、悪い」

言われるままに、扉から離れて病室内へと詰める。押し退けられな  
がら、外で待っているもう一人に念話で対策を頼んでから、ずずいと  
身体を押し込ませる。同じ驚きの表情にしても、アリサとすずかとは  
やて以外とでは、その意味合いは違うことだろう。なにせ、俺を押し

たヴィータとお見舞いの品の入ったバスケットを手にしたシヤマルさんが入ってきたんだ。

予想通り、悪い空気が流れ始めた。特に管理局を毛嫌いしているヴィータにしてみれば、この状況はある種格好の状況だ。だが、俺たちは戦いに来たんじゃない。ヴォルケンと管理局。その向かい合う空気が淀み始めたところで、少し強引にシヤマルさんからバスケットをひよいと取る。

「ああこれ、はやてへのお見舞いなんだけど……やっぱ果物は間に合ってるっぽいな」

「あははは、お約束やね。しかし、お見舞いで林檎ってどうしてやろうね？」

「そういえばなんでだろうな」

「大意になりますけど、一日一個の林檎で医者いらず、という言葉があるんですよ。栄養価が高いから、病気を遠ざけるといいう意味から来ているんですよ」

「へえ、よく知ってるな」

ていうかそこまでの意味があるとは思わなかったよ。てつきりテレビとかの影響とかと思ってたけど、そうでも無いようだ。ともあれ、このはも乗ってきたことで空気の淀みも無くなり、ヴィータが向けようとした敵意も上手く削がれている。……まあ、ヴィータとこのは不服というか、なにか言いたげにこっちを見ているけど。

ちなみにだが、なのはたちが管理局にここでのことを伝ええないよう、シヤマルさんにさつき頼んで、通信妨害をしてもらっている。多分このはとシルヴァとフェイトがこっちを見ているんだ、気付いてると思っただけ。

……だ、駄目だ。さつきからどうしても気になって仕方ない。これだけ確認したら、この話題は切り上げよう。

「で、話を戻すのは申し訳ないけど、さつきのコイバナって俺関係あるのか？」

「どうしてですか？」

「いや、はやてが一向に俺と眼を合わそうとしないんだが……」

「輪、お前なにをした？」

「落ち着けヴィータ！ 俺はまだなにもしてないぞ！」

「まだって、なにするつもりだったんだ!？」

「俺は犯行予告を言ったつもりは無い！ シヤマルさんヘルプ！」

「ヴィータ、変なこと言わないで下さいよ」

「うんうん、まったくその通りだ」

「前から言ってるじゃないですか。二人はお付き合いするつもりですって」

「Oh, my cat！」

なんかよく分からん叫び声を挙げてしまった。猫好きなら一度はいうんじゃないか？

ってちよい待てえ！ 受け流すことは覚えたんだが、こう人前で宣言されると冗談じゃないっての！ それこそ、はやてが好きな人というのに失礼だろうがよお！ この大っぴらで冷やかしはやめたげてよお！ 流石に恥ずいかな！ って待てヴィータの敵意が俺に向けられている！ ヴィータよ、この場に敵はいないし、戦う必要なんて……俺たちは、戦ってはいけない(戒め)。思い出したから言ってみただけ。

んん？ なんでこのはとヴィータ以外から暖かい眼差しを向けられているんだ……？ さては冗談を真に受けたな。この場で弁明しようかと思っただけど、無闇に強く否定しても嫌味に聞こえそうだし、深入りしない方向に行こう。

「……ああ、ごほん。それは今はおいといて、体調はどうだ？」

「い、今は大丈夫やで」

「本当だな？」

「本当本当」

「………じい〜」

「そんなに見んといてや……」

眼を逸らされてしまったが、こうして見ている分には大丈夫そうだな。

……だが、心臓に負担がかかっていたんだ。おまけに、闇の書の進

行も進んでいる。ネガティブに考えるなら、次同じことがあれば、もう助からないかもしれない。正直、生きてることだって奇跡のようなものだ。そりゃ、よく分からない事態に巻き込まれている上に命まで狙われるようなことが起きたんだ。そりゃあ酷い重圧だろうな。

……それに、ヴィータも言っていたことだが、はやてはどうにも痛いのを我慢する節がある。気を配ることは別に悪くないことなんだが、我慢は良くない。辛いことってのは一人で抱えると疲れるんだ。間違いなく、この状況で苦しんでいるのは、はやてだ。辛いことを感じさせるくらいなら、俺が楽しませてやる。俺が面白いものを用意してやる。

「笑っちゃ駄目よ、あつぷつぷ」

「ぷぷっ！」

「あつははははははー！」

自慢したくないが、俺の変顔は面白いらしい。クラスではコップに顔突っ込んだ猫みたいな顔と評されているが、ぶっちゃけ素直に喜びにくい特技なんだが……まあこれ一つ幼女たちが笑顔になるなら悪くない。はやては勿論、近くにいたアリサやなのは、まさかのフェイトやシルヴァまでがそっぽを向いて肩を震わせている。手応え完璧い！

「……八高さん、最後になにか言っておきたいことはありますか？」

……盛大にシルヴァを笑わせてしまったからだろう、こののはの目付きがずっと細くなっている。おい、これガチじゃんか！

と冷や汗をかき始めたところで、「アタシも加えろ」とヴィータまで加わってくる。なにがどうなっぺこうなつたし。このはは分かるがなんでヴィータが……ああ、こつちははやてが笑ったからか。いやこれ良いことしてるだろ!? なにが不服なんだ!?

と、ともあれだ。このアホみたいな状況を使わない手は無い。冗談半分で俺は、

「どうだ、俺の顔面に一撃だけでもくらわせられたら、遊園地につれてってやるぞ」

「待て輪ー！」

「それでもサイヤ人の王子か!？」

「紳士主義だ。あばよおお! 救いを求める女の子にアークを与えよう! いざ楽園への前奏曲へ全速前進DA!」

「意外! それはサンホラ社長ツ!」

「響きシユールだなおい!」

後半よく分からないテンションを保ったまま、二人にそう捨て台詞を吐きながら、窓から飛び出す。ていうかこのはってやっぱノリ良いな。思わずツツコミを入れてしまうほどだ。即座にバリアジャケットを纏いながら、夜空へと逃走。げっ、二人して追って来やがったぞ!?! しかも向こうもバリアジャケットだし! 冗談で命狙われてたまるか!

「イグナイトオオオオオオオオオオ!」

「あ、逃げた!」

夜の景色に溶けた三つの姿の一つが、蒼く発光し、急速に空へと昇った。病室内から様子を見ていたはやてを除いた全員が、その正体を知っていることもあって、ぷつと噴き出していた。本当に追いかけたことで内心肝を冷やしたものの、まさか全力で逃走するとも思わず、笑う一同。

「だけど、光の正体を知らない人間だっている。その代表として、すずかが尋ねる。」

「ねえなのはちゃん、あの光は?」

「あれが八高さんの魔法。普段より強くなった時に身体が光るの。使うところは間違っているけど……」

「ある意味合っていると言えば合っているけどね」

薄い苦笑を浮かべながらフェイトが補足する。事実、不利な状況で使った効力があるが、こと輪においては格上の相手が多く、不利を強いられる為にリンカー・イグナイトをやむなく使うことになっている。尤も、管理局員との模擬戦の際には総計して三回も使っていない。負担をかけたくないのもあるが、地力の低さも自覚していたことで頼らない方針で訓練していたが……結果はいまひとつ。より格上

の存在と対峙したことで、成果は上がっていない。だが本人としては、多用こそしているが未だに切り札として扱ってるから、好意的に「いつ切っても使えるカード」として認識している。輪が話した訳じゃないが、なにか割り切って使っているということは近くで見ても人間には伝わっていた。

「へえ、あれが八高さんの光かあ……綺麗な蒼やね。まるで流れ星みたい」

「……確かに」

遠目で見てみると、確かにその通りだった。時折荒々しいが、軸線を滑らかに走る軌跡は、流星のようだった。近くで見えてきたゆえに発想が出てこなかったのはとフェイトにとっては、思わぬ感動で小さく息を吐くほどだった。

みんながその不恰好な奇跡を描いている閃光を眺める中、フェイトはお見舞いのカードをはやてに手渡すシヤマルの傍による。自分としてもこの暢気な空間にいたいけど、すべきことがある以上、試みてみる。

「シヤマルさん、こちらには敵意はありません。管理局もはやてを助ける為の算段を立てていますので、闇の書を預けてくれますか？」

折角の前に対象がいるというのに、話をしない他は無い。フェイトは管理局の総意を簡潔に伝えてから、シヤマルの眼を見る。あくまで念話も遮られ、魔法の事情に疎いはやてに聞かれないよう、小さく問う。

「優しいんですね。ですが、その申し出を受ける訳にいきません」

「管理局だから、ですか？」

「……そうですね。信用が出来ないから、ですね。ここにいるみんなを個人としてなら信用はしたいのですが、管理局という組織としては難しいところですね」

「……そう、ですか」

フェイトにしてみれば最も望んでいなかった答えが返り、嘆息が溢れる。聞こえなかったはやてにしてみれば、こそつとやり取りする二人に首を傾げるだけだった。

答えはもう聞いたようなもの。揺るがない意志を眼光から見たことで、フェイトは寂しく笑顔を薄める。

「一体なにをするんやろうか」

時間はもうすぐ、24時。クリスマスイブに時間を跨ぐ三分前。シヤマルから受け取ったカードをもう一度広げてその一行を読んで見みる。

——イブを迎える12時の夜に、穏やかな夢をはやてちゃんにプレゼントします——

どう読み返しても、シヤマルが書いたことは断定出来る。しかし、どんな意図があるのか、何度読み返しても分からない。なにかサプライズを用意しているのかと思っただけ、ここに来てしたことは普通のお見舞いで、なにかの準備をするような動きなんて無かった。はやはいくら考えを巡らせても、「なにかのサプライズ」としか予想出来なかった。つまり全くの謎。

コンコン——はやてが肩をビクツと上げるのも無理は無い。この病室は三階。外の窓から控え目なノックの音が聞こえたのだ。この時間にされれば、性差や年齢に関わらず恐怖するに決まっている。

しかし、反射で音の方に振り返ったはやては、違った意味で驚いていた。外にはバリアジャケットを纏った輪が、白い息を吐きながら手を振っていた。容態も安定しているし、軽く歩く分には問題無いはずでは、少し困惑しながらも窓の鍵を開けて迎え入れる。

「いや悪いね。こんな時間に起こすようなことして」

「ええんよ。でも、なにをするんや?」

「あ、ああ、それなんだが……これにちよつと包まってくれる?」

「? どうして?」

「ほ、ほら、外は寒いからさ。あとこれも」

はやてにはもう一つ気になっていることがある。輪の腕の中に納まる大きめの白い毛布。見間違いでもなく、うちで使っているものを



持つてきている。……それを抜きにしても、いつもと違って歯切れが悪く喋る姿がどうしても気になる。らしくない。曖昧に濁されているが、彼自身に悪意が無いことが分かると、その言う通りに毛布に包まれる。加えてもう一つ、自分に巻いていた白いマフラーをはやてに丁寧巻く。

「よしオーライ！ はやてよ！」

「は、はい！」

「5分間外出じゃ！ レッツジャスタフライアウエー！」

意味を理解しきる前に、はやての逡巡は止められた。輪が抱えた体勢——お姫様抱っこをされたことで、二秒ほど世界が硬直したような感覚に陥った。

当の輪はというと、幼女を抱えた気恥ずかしさと、はやてを抱えたことによる羞恥心と別ベクトルからの恐怖やらの影響で、安定しない語調のまま窓の外へと飛翔した。

「——わぁ」

その光景に言葉が出てこなかった。確かにはやては、輪にお姫様抱っこされていることを認識したことで、心臓が早鐘を打っている。けど、向けられてた眼下にはクリスマススイブを彩る光と音が散り散りに感じる。時間が時間だからそれらは少ないが、時折道に見える赤い衣装と緑の木。……あの破壊の残骸が見えるもの、それに負けまいとする笑顔も見える。それでも、賑やかさがあることに、はやては笑む。

そして視点を上に移すと、満点の星たち。はつきりと点在しているその星々は、無窮に広がる世界で佇んでいる。どこを眺めても宝石箱。まるで海を泳いでいるみたいな感覚になり、はやては思わず息を止めていた。まるで上と下で異なる世界をこっそり覗いているような、こそばゆい高揚がはやてを満たしていった。星に詳しい訳じやないが、はやてはなんとなく天体関連の本が読みたいと思うほどの感動だった。

「いやぁ、こうして景色見て回るのって良いな」

「あれ、八高さん毎日見るとは違うん？」

「んー、なんというか……どっちかと言うと、シグナムたちと同じような世界歩いてきた感じだからな。よく考えたら、こうして散歩がてらで飛ぶのって初めてだな」

「おーすげえ」と口にしながら、輪は顔をせわしく上下に動かして、景色を眺めている。外は寒く横切る風も冷たいが、それを気にも留めることなく、はやては飛行機から眺めるよう以上に立体的に景色を通り抜けていく。少しだけ、遠くの外国に行ってみたいかもなんて思いもしたが、口にすれば輪は本当に連れて行くかもしれない。そう考えたはやてはその要望を言わず、もう一つの些細な疑問を口にする。

「八高さん。さつきからこっち見ないけど、どうかしたん？」

「い、いやいや、お姫様抱っこなんて慣れてないから、相当緊張してて……」

「慣れるほどするのもどうかと思うけど……そない緊張するなら普通に背負ったりでも良えのに」

「え、はやてがお姫様抱っこされたって聞いたから、俺が頼まれたんだが？」

「……んん？」

はやては首を傾げた。抱っこされたい？ 頼まれた？ ほぼ直後に羞恥で高潮させている輪も首を傾げてから続ける。

「……シヤマルさんが「はやてちゃんはお姫様抱っこされるのが夢なんですよ」なんて言っててな。俺は断ったんだが、シグナムたちだといつも通りだからって言われるし……うん、これは間違いない謀られたな」

「………ほんとシヤマルは」

「いやあすまんな」

「なにが？」

「俺が来る前の女子会で察してしまったが、はやてってほら、好きな男子いるっばいま、待って暴れないでちよっとおおお!!」

まさか眼の前の意中の人間から言われると思わず、眼をグルグルさせながらも、腕の中でわたわたと軽く慌てふためいてしまう。おかげで景色を眺める余裕は無くなり、誤魔化すことで精一杯になるばかり

だった。

「……か、堪忍な。急な話題でビックリして」

「俺も不用意だった。でも、気の無い男子にお姫様抱っこされても気分良くないと思うけど……」

はやては内心で嘆息する。陥れられたにしてもしつかり約束を守ったり、厚めの毛布を用意してまで自分にここまでしてくれる。少なくとも、これだけでも嫌いになる要因にはならなかった。

——元々はやてには、決定的に男友達というものがいなかったが、初めて仲良く男子が彼だ。なんだか無邪気で楽しいことを求める一方、考える時はしつかり考えるしシグナムやシャマルとも話が通じていたりと大人の面があったりする。かといって、輪からは悪意や害意を感じない。

いつから好きになったのかと聞かれたら、本人はこう答えるだろう。——きつと一目惚れかもしれない、と。

「ううん。わたしは良えよ。空飛んで街を眺めるなんて、凄く珍しいし」

「それもそうだ。……はやて、大丈夫か？」

口にごそ出していないが、輪の表情には「正直恥ずかしいから早く終わらないかな」という感想が露骨に出ていた。普段と違った意味合いの余裕の無い顔を間近で見れたことを新鮮に感じながら、少し悪戯に笑う。

「ダメ。あと5分だけ」

「風邪引くから却下」

「恥ずかしいから帰りたいなんて、紳士の言い分とは思えへんなあ」

「なに!? なぜバレた!? いやそれはいい! ……よし分かった。淑女のご用命通り、あと5分したら必ず病院に戻るからな」

「……うん」

「あの、恥ずいからこっち見んといてや」

「八高さん、口調うつつてる」

「子どもの純真な目は誰よりも正確なものを見抜く！」

「なに言われているのか分からないんやけど……」

言質を取ったことでこれ以上続けなれないと言いたいだろうけど、はやてには関係の無いことだった。好きな人と好きな時間を過ごすことに楽しみと喜びを見出していることから、時間なんて些細なことだった。強いて言えば、病室でぼんやり本を読むよりも、この賑やかな人と話をする方が楽しいし、気も楽になれるというものだった。

「そうや八高さん。帰ったらなに食べる？」

「また唐突だな。そうだな……」

そろそろはやてを抱えていることに慣れてきたせいか、輪は「ふむ」と少し唸るが、割と短い時間でその迷いは無くなった。理由は二つある。はやてのつくる膳を全面的に信用していることと、なんとなしにふと思いつ出したからだだった。それでも、彼にとっては思い入れのあるメニューだ。

「あつたかいクリームシチューで」

なにせ家に来て初めて食べたはやての料理。本格的に仲良くなってきたきっかけになった料理という意味で、彼個人の中では記憶に残るご飯になっていた。……そのあとにあつたいざごぎについて眼を瞑りながら、輪はリクエストする。

「了解されました」

雑な敬礼を返そうにも、毛布が全身に包まれていることから、はやてはにっこりと笑うことで返事を示すことにした。当然、かなりの至近距離にいる顔に微笑みを向けられた輪は、ぶり返した羞恥心によりまた顔を逸らした。

今宵の流星は、黒に深い青を混ぜたようなキャンパスの上をなぞる。例えるなら、プラネタリウムを背景にして飛ぶ鳥。その間抱きかえられたお姫様からは、笑顔が消えることなく、ただ穏やかな寒空を泳いで滑空する。

## クリスマス・イヴ

「これより、ヴォルケンリッターとの会合についての委細を伝えます」  
執務室ではなく、広々とした艦内のブリッジに集まる局員たち。その中心ではリンデイが、高らかに歌うような声を響かせる。聞きほれるような響きとは異なり、孕んだ意図は間逆で、誰もの脳裏に刻むように、静かに強く言い放つ。

「今夜19時にて、彼女たちとの会合を執り行います。あくまで話し合いによる交渉を旨とする為、戦闘を望まない局員にお任せします」  
「戦闘を望まない、ですか……」

「ですが、最悪の場合戦闘も起こり得ます。ですが、敢えて率直に聞きます。自分たちは戦うことなく、話し合いで解決出来ると心から信じているものはいますか？　そう願う人は拳手をして下さい」

彼女自身、無謀を口にしていないことは承知している。相手は管理局を快く思っていないし、むしろ思わない方が不自然だろう。むしろリンデイは経験則から考えた結果は——どうしても戦闘に至る確率が高い。だけど、個人的な希望を言えばリンデイとて戦闘は不本意だ。

だからこそ、自分のような確率や分析による打算的な人間ではなく、愚直だろうと信じる人間の拳手を託した。人を真に動かすのは熱のある言葉——言ってしまうえば、誠意に他ならない。信じる人間の言葉にこそ宿るものもあり、そこから汲めるものだってある。だからこそ、打算計算も脳に留めてしまうリンデイは自身では不適任だと自覚する。仮に自分が出たところで、単純な気持ちすら深読みされてしまう結果が見えている。……ゆえに、リンデイは拳手を待つ。

「……わたしが行きます」

すつと、震わせなが挙げられた小さな手。なのはは自分の抱える曖昧な自信と異なり、瞳の光には鈍さは無かった。放たれる光に期待しながらも、抑えた声調でリンデイは返す。

「良いのですか？　恐らく」

「それでも、わたしは行きたいんです。話し合うことに意味があると思いますので」

「……そうですか」

リンディにしてみれば、求めていた反応そのものだった。言おうとした可能性を遮りながらも、なのはは自分の想像する可能性を、暗に示している。理屈ではなく感情で挙げられた手。場を治めるには、自分のような賢しい人間よりも誤魔化しの無い素直な人間の方がずっと適任だと、思わず口角を緩めてしまう。

その言葉がきつかけか、フェイトとユーノも挙手をする。

「私も行きます」

「僕にも行かせて下さい」

「フェイトが行くっていうのに、従者のアタシが行かない訳にはいかないね。それじゃアタシも」

続いてアルフまでもが手を挙げる。——リンディは不思議と、

縁を感じていた。挙手をした人間は揃って、八高輪と関わりの深い者たちばかりだった。彼の口にする綺麗事や理想論が影響しているかもしれないし、考え方に感化されたのかもしれない。いずれにしても、彼の言葉はどれもが前向きなものだから、近くにいるほど不思議な信憑性も生まれるかもしれない。

喜んでいいのか、少し悲しんでいいのか……挙手したメンバーはリンディの予想内だった。それからしばらく待っても、手の挙がる気配は出てこなかった。

と思われた時だった。

「……………オレも行きます」

「意外ですね。正治さんも信じているんですか?」

「三人に比べれば信じてはいませんがね。けど、オレだって丸く治めたいんです。戦わない道を選べるなら、それに越したことはありませんから」

隠すこともなく、政治はさらっと言ってのける。だけど、言葉の通り彼は戦う気は無いらしい。……リンディにしてみれば、いざ戦闘になった時の頭数として志願した、というように映ったが、政治の思

惑を考えれば寸分違わずに的中していた。勿論嘘偽りは無いにしろ、本音は別で隠している。互いに腹の内を見せないタイプとして、視線を合わせただけで二人はお互いの思案に乗る。

「……分かりました。では、くれぐれも手は出さないように」

「あんちゃん、なんならジブンが」

「菜摘は時間ギリギリまで休んどけ」

「……はいっす」

「このはさんとシルヴァさんに酷なことをお願いするのですが、聞いてくれますか?」

「なんですか?」

唐突に話を振られたにしても、森兄妹のやり取りの最中にちらつと二人を見たことで話があることを気取ったこのはは、少し肩を上擦らせながら返す。

「二人には申し訳無いのですが、二人にはどんな理由があろうと許可を与えるまで出撃は許しません」

「はい!?!」

「どうしてですか?」

「大きな理由がこのはさんに当たるのですが、そのレアスキルと回復能力の高さです。仮に戦闘になった場合に即出撃させたとしても、エンヴィの横合いが無いとは限りません。切り札を見せてこそ、奥の手を活かせるのです。言うなれば、管理局に置ける最後の砦があなたたちということですよ」

「つまり、二人には戦況を変える力があると見込まれたことだ。我慢してくれるな?」

「……はい」

ハラオウン親子から揃って言われるのでは仕方ないと、このはは少し渋く納得する。しかし、切り札としてのクロノ執務官を出し惜しみはしないという意図が垣間見え、その豪胆ぶりにこのはは感心しつつ納得も示す。心なしか、遠慮せず扱われることに関して、クロノ執務官も特に気にした様子も無く、むしろ窮屈とも取れる普段の堅い表情が幾分和らいでるように映るほどリラックスしていた。

ふうつと息を吐いたところで、一つの疑問に当たる。まだ答えられてないことがある。それを聞こうとするが、先に尋ねたのはシルヴァだった。

「あの、どうして私もですか？」

「ああそれか。それは」

「二人で行った方が、テンションも違うでしょう？」

リンディはわざと、崩した調子でそう返した。直前にクロノが言おうとした「二人の士気を鑑みてのことだ」と意味はそう変わらないが、言い方一つでも士気は違ってくる。張り詰めていた空気はこの一言でをきっかけに、やんわりと変化していった。リンディはふふつと笑いながら続ける。

「仕事と言ってしまうと堅いのですが、なるだけ友達と一緒に動く方が気の持ち方も違いますからね」

「そうですね！ シルヴァちゃんが青いハトを見たいというなら、私は世界中のハトを青くしますとも！ 私にはやると言ったらやる……『スゴ味』があるッ！」

「ありがとうこのは……」

「トンプソン機関銃使いそうな台詞っすね。」

「それジョセフやろ。ブチャラテイちやうやんか。……っか、自分にそれ言うのな」

「あーん！ ジョセフ様とブチャ様がセツクスry」

「ダメダドンドコドーン！」

「ま、まあとにかく、二人には待機を命じますが、当然出撃以外のことは認めていますので、それまでは自由に過ごしてください」

平常通り弾けたこのはに突っ込む正治と思わぬ愛の大きさにたじろいでしまったリンディだが、笑顔で誤魔化しながらも二人に対して前向きな言葉を投げる。

だが、根本的な穴がある。このは自身を含め、艦内の誰もが気付いている。それをまだ聞いていない。恐らく提督なら考えていると思っていたが、一向に口にしないところで、不安も募っていった。その不安に駆られて、なのははもう一度挙手する。



「どうしましたか?」

「あの、夜の7時に話をするというのは分かりましたけど……どうやって相手と呼ぶんですか?」

「ああそうですね。それを伝え損ねるところでした」

必要以上に気を軽くしていたせいか、提督としての事項を空けていた。気を取り直すように、こほんと咳を払ってから、リンディは少し申し訳無さそうにお願いするように、なのはに手を合わせる。

「ごめんなさい。八高さんに電話で連絡してくれますか? 19時に話し合いを設けたい、と。言い方はなのはさんに任せますが、八高さんを経由すれば話し易いでしょう?」

「シグナム、ページはどうだ?」

「済まない、思いの外手間取った」

「553ページだ」

「でも集まつてるじゃん。みんなが無事なら俺はそれでいいさ」

「なにを呑気なことを。優先すべきは主は」

「それは分かっている。だが、一人でも欠ける方がはやてにとって一番の問題だ。そうだろ?」

「……そうだな」

朝になって帰ってきたシグナムとザファイラの身体中は傷だらけだった。余程の化け物と戦ったか、多勢に襲われたか。なんにしても、一日中を蒐集に費やしたにしては予想より少し少ない。まあエンヴィとの戦闘の影響が残っているのもあるし、誤差というほど少ないでも無いから、俺にとっては気になることもない。

……しかし、蒐集が遅れるほどはやての命も危ないと来た。二人だって頑張ったんだ。文句を言う理由がまるで分からん。むしろ、はやてとただイチャイチャしていただけの俺が非難されるべきだろうよ。横目でみた壁時計は、11時半を指そうとしている。さつきまで二人は疲れて寝ていたし、シヤマルさんもはやての見舞いに言ってい

たし、時間と手の空いていた俺が作っていた料理もちょうど今完成したところだ。ことんつと音を鳴らしながら、料理の載った皿を全員の前前に並べる。転生前の一人暮らし込みで今までもつくっていたおかげで、味とレパートリーに眼を瞑ればそれなりを用意出来るのは幸いだったな。ちなみに今日のご飯は食材を見てたらつくりたくなつたので、普通のお好み焼き。なんとなく手で食べてほしく無かつたら、フォークとナイフもセットで準備している。

さて、はやてという超絶敏腕主婦がいる手前、味の不満が挙がることも覚悟していたもの、奇跡的に味の文句もなく匙を進めている。それどころか、こういった簡易的な料理が珍しいのだろう、ザフィーラに至っては、「ほう」と関心を示すほどだった。まるで勝利したような愉悦感に浸る中、少し顔色の冴えないシグナムから声がかかる。まだ疲れは完全に抜けていないと見たが、それを言うだけ野暮であることは、表情を見て分かる。

「で、昨晚の主はどうだ？」

「見た限りだが、一応は元気していた。けど、本当に俺がそっちに行かなくて良かったのか？」

「良いんだ。主にとって見たい顔は、輪だからな」

「んなアホな」

「年も近いんだ。そこは察してくれなくては困るな」

「ああそういう意味ね」

シグナムの補足が無かつたから勘違いしそうになつたぞ。ザフィーラは変なところで言葉が足りないから時々困る。……しかし、シグナムの物言いからなにか微妙な含みを感じたが、気のせいだろうか？ いや、俺がはやてとの媚騒動でちよつと神経質になり過ぎているだけかも。もちつと余裕持つて構えんな。これじゃあいつまで経つても、八神家のオモチャから卒業出来ん。既に手遅れな感が否めないけど。アレだ、状況自体は全然違うが「お前は知りすぎた」みたいな感じだと思う。いやこれももう手遅れじゃね!? フラグ建築どころかノルマ達成の領域だこれ！

「でだシヤマル、輪は本当にやったのか？」

「さつき病院に行った時に聞こうとしたら、物凄いはぐらかされましたよ。あの反応は間違いないですね」

「シヤマルさん、その話はそこまで」

「……心配するな。はやての家じや暴れない」

「眼光がやべえよやべえよ……こんな心臓の悪いところにいられるか！ 俺ははやての病室で寝る！」

「あ、その本で読んだことがありますね。でもこの状況だと」

「ほう、はやてと寝ると……？」

「スタンドも月までブツ飛ぶ衝撃解釈やめーや！」

「それじゃあわたし、ちよつとお見舞いに」

「ある意味はやての心臓に良くないので止めてください」

「ていうかさつき戻ってきたばつかでしょうが。ていうか「はやての病室で寝る」発言でそこに繋がられるシヤマルさん面白スペックすぎ。親戚かよお！」

「……さて、いい加減提案するか。今は指輪として収まるデバイスに眼を向けてから、極めて真面目に尋ねる。」

「……と、一つ質問なんだが、蒐集の対象というのは魔力を持った生物、なんだよな？」

「ああそうだな。正確に言えば、魔力の持ち主となるが、そう差はあるまい」

「それがどうかしたか？」

「ならば、魔力を保有した、独立した意思を持つデバイスというのは？」

「――」

バリアジャケットを纏い、手の中のガンブレイドの持ち手をヴィーダに向ける。いくらなんでも、空気読まずに俺を斬……らないよな？

不安はありつつも、簡潔に説明を続ける。

「要するに裏技だ。このデバイスは特別製だから、デバイス内にも魔力を随分保有している。そこから蒐集するというのはどうだ？」

「魔力を保有しているデバイス……成程、それなら蒐集に問題無いですね」

「しかし、もう少し早く言ってくれないか？」

「俺も最近思いついたんだ。そこは勘弁で」

『しかし、随分肩入れするな。そんなにあの娘が気がりか？』

「ええ、お前まで言うのかよ。瀬戸際だよ……少女放置とかしてしろ。俺はその先の生涯、安心して熟睡出来ないと言出来るぞ」

流星に勘弁してくれよ。割り切ってきたというのに、揺さ振られては困るんだぞ。

それにだ、ヴォルケンリッターだって俺を信用している。約一名に毛嫌いはされているが、それは一応限定的な場面の時だけであって、基本的には味方だからな？ 何度も言っておかないと俺も忘れそうだから、心の中で確認しておく。

少なからず、やり方は違えど思うことは同じはずだ。管理局も俺たちも、はやてを救いたい。ヴォルケンにその意思は薄いけど、俺はアリシアも救いたいと思っている。

『ならば仕方ない。そういうことじゃ。小生もその蒐集、協力しよう』  
「しかし」

『謝辞も文句も小生に言うことではあるまい。のう、八高輪？』

「どう考えてもお前だろ？」

『……時折面倒じゃな貴台は』

「なんで俺呆れられるの!？」

『はあ……そういう訳じゃ、蒐集すると宜い』

「……分かりました。では失礼します」

さて、俺はこれからもつと悪いことをするぞ。だが、俺だつてはやては助けたい。もつと冴えたやり方があるつて言うなら、俺たちを止めてくれ。それが一番出来そうなのがこのはというのも妙な話かもしれないが、いざつて時は彼女を信用することにしよう。あわよくば、俺一人は撃墜してもらいたいもんだ。

—— 仄かな光を溢れさせて数秒ほど。蒐集をしているとは思えないほど静かに事は終わった。気付くと、予想した以上にページが書き加えられていた。

「凄い。一気に606ページまで……」

「凄いだろ。褒めても良いんだぞ？」

「助かった輪」

「俺じゃなくてアヴァロンにつて意味だったんだけど……」

『発案したのは貴台じゃろうて』

「お前が許さなければ頓挫してたんだぞ。だからMVPはお前」

『……やれやれ』

これで手足があつたら、頭を書いて溜め息でも吐いていたのかもしれない。アヴァロンの呆れたような声調は、その仕草が似合いだった。……のじゃロリ様で脳内変換したら悪くない光景になったが、俺ニヤニヤしてないよな？

「なに笑ってるんだお前」

ヴィータに指摘されたので顔の出た模様。これ以上変な想像するのは止めておこう。

「ああいやなんでも。……そうだ、お前らに言っておきたいことがある」

忘れてもらっては困るが、俺は特に年中不真面目では無いぞ。冗談抜いた話だつて出来る。崩していた表情を止めて、至つて真剣に顔を強張らせたこともあつてか、ヴォルケンたちの表情も硬くなる。

「エンヴィの攻略法を思い付いた」

「——なに？」

さて、どんな意見が出るんだか。個人的には最終手段みたいなのだから俺は断固反対派だけど。絶対やりたくないんだが、最悪の場合しなくちやいけないことを考えると、凄いいげんなりする。一応他の意見も聞いておきたいから、念の為話しておく。

「……………ということ、なんだが」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

で、結論から言うと、話すんじゃないかった。普段中立を保つが

フイーラどころか、温厚なシャマルさんまでもが睨んでいる。不評どころか、大反対だと眼で言われている。やばい、こう本格的に味方がいない状況になると相当怖いな。元を辿れば俺も敵と言われる立ち位置だったから、その眼を向けるのもある意味自然と言えば自然なんだよな。すつかり打ち解けた今として見ると、やっぱり怖いけど。

「……今の、本気で言っているんですか？」

ようやく嫌な沈黙が解けたと思ったら、批難気味な声調でシャマルさんがうつすらと睨みつける。うん、今になって話したことを後悔する。「なあくんちやって☆」ともつと面白いものを見せそうな顔芸をしながら冗談と言えれば良かったが、この状況だと絶対信じないな。無駄に真面目に話したのが完全に裏目に出たのが良くない。既に引き返せない状況なのは分かっているから、俺もふざけずに返す。

「……本気だ。他にどうしろって言うんだよ？」

「輪、自分がなにを言っているのか分かっているのか？」

「シグナム、まず話を整理してくれ。あくまでこれは最悪な手段であって、俺だつてする気は無い」

「だとしてもだ！」

代わりに、ヴィータが胸倉を握りかかる。普段俺を狙っていることとは全く別の怒りが、顔全体に表れてぶつけられる。……本気で困ったことに、はやて関連の怒りよりもずっと色が濃い。数秒にしても見境が無かったのか、横眼でシャマルさんが射止めなかったらグラーフで殴られていたのかもしれない。もっと言えば、冗談抜きで血眼になっているヴィータ相手に、冗談を返せる気がしなかった。ここで冗談言おうものなら、絶対殴ってくるぞ。

「二度とそんなこと口にするなっ！ それではやてが悲しんだら、お前を本気でぶつ潰すからな！」

「そ、そんなに怒るなよ。元に戻るって考えたら」

「戻すだど!? 関係を变えておいて、勝手に戻すって言うのか!? 関係戻せばはやてが——」

「止せヴィータ」

拳を振り上げて殴ろうとした刹那、ヴィータの右拳をザフィーラが

抑える。止めたくれたことに感謝するが、沈黙を保つザフィーラの視線からもやはり批難の色は含まれていた。

「……あくまで最後の手段、それは信用して良いんだな？」

「それは確約する」

「そうか。お前にとつてあの娘は敵じゃないんだな」

「当たり前だ」

「心得た。だが私もヴィータと同じ考えだ。極力そのことは口にしてほしくないな」

「分かってる。だがそうなったら、みんなを信用するからな」

「……………」

かなり複雑そうな顔をされた。俺だって嫌だからな、気持ちは分かると言いたいところだが、恐らく四人が思っていることと俺が思うこととの差は大分違うようだ。リアクションが大きいことが予想外だったくらいだ、好意的に考えれば、俺は自分が思っている以上に、ヴォルケンリッターから仲間として認識されているときた。

……最終手段とは言ったが、なにもしないとヴォルケンがアリシアごと破壊しかねない。それが手段として効率が良いかもしれないし、最適とも言えるかもしれないが、俺は絶対に認めない。俺は俺のやり方でアリシアも助ける。

ピリリリリリ——

うおびつくりした！ 重い重圧のせいで本気でビクツとしたが、ポケットの中の携帯電話の着信音か。普段よりでかい音に感じたぜ。嫌な空気だから助けられたぜ。誰か知らんが声の主に感謝せぬば。

……む、なのはからか。この状況になってからは電話してなかったな。こつちからは電話したくなかったし、きつとなのはも同じ心境だったのだろう。正直逃げerような心境で電話に出る。

『もしもし八高さん？』

「おつすなのは。どうした？ なにかあったのか？」

『あの、そこにヴィータちゃんたちっています？』

「ああ。代わるか？」

『ああいえ、そうじゃなくて……みなさんに伝言をお願いしたいんです』

「伝言……？」

伝言がなんであれ、今のあの四人に話しかけるには勇気がいる。殺気立ってるまではいかないにしても、少し険悪になったし。でもまあ、恐らく考えも有りに俺に電話してきたし、「みなさん」と言ったところを考えるにヴォルケンにメッセージまでしてきたんだ。無下にも出来ん。「話してくれ」と催促をする。

『今日の夕方7時に、八高さんとヴィーたちちゃんたちも一緒に来てくれますか？ 大事な話をしたいのです』

「……場所は？」

『最初にエンヴィが出たあの廃ビルは？』

「あつちか。分かった、伝える」

『ありがとう八高さん』

「なのは」

『なんですか？』

「また後でな」

「はい」と少し元気よく返してから、電話は切られる。よし、明るい少女の声も聞けて気も晴れたし、批難覚悟で四人に伝えるか。俺だけじゃなくヴォルケンにも話すことと言うと大分限定されるが……まあなんであれ、こうして架け橋として俺に連絡した以上当てにされているのはあるかもしれない。これはもう期待に込めるしかあるまいて。

さて、夕方7時か。時間までにヴォルケンたちとの仲を修復しないとな。

電話を切ったのはは、緊張が解けたようにほうつと息を吐く。元から輪との行動が多かったことで必然電話の回数も少なかったこと



と、敵対されている相手への伝言という意味合いの内容ということもあって、気楽になれなかった。しかし、やっぱり輪と実際に掛け合うとやっぱり落ち着いてきたし、向こうも元気にやっていることもあって、携帯電話を閉じた頃にはすっかり落ち着いていた。

「どう？ アホ先輩は？」

「うん、普通そうだったかも。でも」

「でも？」

「なんだか、ちよつと怖かった」

アリスからの問いに上手く答えることが出来なかった。なのは自身、違和感のようなものを輪の声から感じていたが、その正体が分からないまま、でも元氣そうにやっているということ自分で完結したものの、思い返すとやっぱり気になってしまふ。なのはが不安に歪む表情がうつたすずかも、オウム返しに反応する。

「怖かった？」

「なんだか分からないけど……なにかあったんだと思う。八高さん、空気悪くなっている時って、大体真面目だから」

「え、笑って誤魔化すのとは違うの？」

「一緒にいた限りだけど、悪くなる時に楽しませようとして、悪くなっている時だと大体真面目なの」

「意外と違うのね」

「電話した限りだけど、それも悪くなったばかりの空気みたい。冗談の一つも無かったから心配で……」

「きつと大丈夫だよなのはちゃん」

ぽんと肩を叩くすずかちゃんの笑顔はひどく純粹で、それこそ太陽の光のような自然さと暖かさがあった。輪とはまた違った、優しい笑み。事実だけを言えば、なのはにとっては輪以上に見慣れた笑顔向けられて、内心でざわつき始めた気持ちの波が引いていった。

「おにいさんなら、みんなが幸せになる道を見つけてられるはずだよ。みんなで信じよう」

「……そうだね」

「ま、あのアホ先輩のことだから、自分だけ楽しむなんてことはしない

でしようけど」

「そうだよ。ほら、アリサちゃんも分かっている」

「あ、あの先輩が分かりやすいだけよ！ ふんっ！」

三人は気付くと笑っていた。三人にとって気の良いお兄さんである輪は、形はどうあれ信頼されていることを如実に表している。彼が培ったものは紛れもなく確かな信頼。なのはやすずかが直接的に親愛を抱いている中、アリサが憎まれ口を叩いているにしても、そこに不快な感情なんて無い。感覚的な表現だが、なんだか危なっかしくて眼が離せないことと、ちよつと頼りない一方でなんだか信用してしまう部分があったりで、いまいち整理がつかない感情を持っている。どちらにしても、アリサにとっては変わった印象を持った人間には違いない。

「で、なのはちゃんは今はこうして大丈夫なの？」

「うん。時間の二時間前までは自由に過ごして良いって」

「……なのは」

アリサとて、この空間をのんびり過ごしたかった。今まで変わら無い、なのはの友達として接するすずかと違い、アリサが見るなのはは「魔法使い」という印象まで加わっている。なのはから小出しに聞いている内容は、どれも危ないことはすずかも知っている。だからこそ、アリサは口にした。

「絶対、帰ってきなさいよね……アホ先輩を連れて、またみんなと一緒にすずかの家で猫たちと遊ぶんだから……」

「アリサちゃん……」

「あの賑やかな空気に慣れたせいで、余計に湿った空気が嫌いになったのよ！ 先輩が帰ってきたら、たっぷり無茶振りするんだからっ！」

「にやははは……」

「それに、なのはにだって募る話もあるだろうから、友達として、全部聞いてあげる」

ふんつと息巻いてから、手元のデザートにまた手を伸ばす。

アリサに言われるまでもなく、なのははそうするつもりだった。だ

けど、改めて言葉にされるとまた少し気持ちも変わってくる。

約束があることで生きることが出来る。約束があるから諦めない。約束の為に頑張れる。動く動機としては単純で浅いかもしれないが、なのははその単純な動機を強く大事に胸に秘めながら、「ありがとう」と強く頷く。またみんなで笑える日を想いながら、力強く頷く――

「まさかバリアジャケットも纏わずに来るとはな」

「けどな、ベルカのことわざにこういうのがあるんだよ、和平の使者なら槍は持たない」

「槍を持たない、ね。そこは武装解除しているという部分で眼は瞑れないか？」

「……成るほど。確かに戦闘の意思が無い。話を聞こう」

「一応言うがヴィータ、それは小哘の落ちだ」

「良いじゃねーか、伝わってるんだからよ。ザフィーラは細かいことを気にしすぎだ」

「いかにも輪が言いそうな台詞だな」

「うっせえ！」

時間通り、夕刻を迎えた寒空の下。賑やかな灯火が高潮を送る高層群の影。音と色が交錯している中、孤独のように外れた廃れたビルの屋上で、魔導師たちが出揃う。

向かい合う、と穏やかなものではなく、油の敷かれた面の上を裸足で佇むような危うい空気が漂っていた。

一触即発。摩擦の程度次第では発火しかねない緊張感。武器を手にしていないと言えど、彼女たちが対峙している相手は管理局の魔導師。その側の思想を持っていたにしても、自分たちに本気で尽力した輪と違うことで、ヴォルケンリッターからは八神家で見せるような笑顔は絶対に見せなかった。それでも、シグナムがちよつと変哲な空気になり始める前に、「済まない」と挟む。

「話が逸れてしまったな。話を続けてくれ」

「あ、それでは失礼して……きつと話は分かっていると思いますが、わたしたちと協力して欲しいんです」

「……なにかは知らんが管理局と協力する気は無い」

「シグナム、話が分かりそうだからお前に聞く。闇の書の本名前は知っているか？」

「本当の——名前——……？」

「あの馬鹿紳士め、喋ってないのか……面倒増やしやがって」

「待て。今のはどういう意味だ？」

「……話すと長くなるのですが、今の闇の書は普通の状態じゃないんです。それを直す為に、話し合いに来ました」

シグナムの疑問に対して、エンヴィの破壊を一切口に出さずに、フェイトは少し暈して返した。なにが引き金で決裂するか分からないが、今は互いに協定を結ぶ為の口実が必要だと、すべき話題を選んでいく。

「嘘だっ！ そんな訳があるか！ 闇の書のこと、アタシたちが……っ！」

「どうしたのヴィータ!？」

「……シヤマル、アタシたちはなにか忘れてないか？」

「忘れてるって、なにを？」

「分からないけど、なにかをだよ……！」

ヴィータの自らの否定を阻んだのは、理由の知れない脳内を巡った鈍い痛みだった。言われた意味も分からないはずなのに、不快だった言葉に引っかけかりさえも覚えていった。

「落ち着けヴィータ、相手の口車に乗るな」

「分かっている……分かってるけど……！」

「どうして信用してくれないんですか？」

「簡単なことだ。闇の書を利用する輩というのは存在する。管理局という組織が、その力を利用しない理由が見当たらない。それだけだ」

「違うの！ わたしたちは……！」

「普通の状態じゃない、と言ったな。どう言おうと勝手だが、お前たちの言葉に耳を預ける気は無い」

ヴォルケンリッターの総意であると言う様に、シグナムは烈火を纏いながら、その剣を構える。それに続いて、シヤマルやヴィータもバリアジャケットを纏い、静かに壁に持たれていたザフィーラもすつと姿勢を取る。

「ならあの八高さんから聞いてください！ あの人の言葉なら！」

「あいつは今どこにいる？」

「答える必要は無い」

不思議と、正治だけはその言葉で感付いた。味方の所在を教えないということは、知られるとマズイ場所ということに繋がる。少し遅れから、なのはとフェイトもふと気が付く。

そして一つの異変に気付く。誰からの通信が届かないどころか、念話すらも出来ない。シヤマルの指元の光を見たことで、恐らく彼女の仕業だと気付く。

「……もう少しなんだ。もう少しで、はやてを助けられるんだ。あとちよつとで、助かるんだ……」

「済まない輪……お前との約束は守れそうにない。……これ以上邪魔をするなら——斬り捨てるまでだ！」

言葉は繋がることなく、赤い騎士の槌と烈火の剣と、盾の拳が振り被られる。

鉄槌はさくら色の防壁によって阻まれ、剣は黒の双刃剣で受け止め、拳は両の腕により遮られる。

ヴィータとなのはが、シグナムとフェイトが、ザフィーラとアルフがそれぞれに向かい合う。残りの人選を考えた結果、正治は一つの指示を出した。

「ユーノ、あの女を妨害してくれ！ あの女が通信妨害している！」

「分かりました！ 正治さんは!?!」

「悪いが、オレはあの馬鹿を殴らなきゃ気が治まらん」

この面子と戦うことにほとんど抵抗は無かったが、それでは意味が無い。戦闘としてこれ以上悪化させれば、それこそ後戻りが出来ない。仮に正治に誰かが攻撃をして来ていたら、彼は躊躇わず反撃していたほど、意思が固まっていた。

だから少なくとも、ヴォルケンリッターとは違う彼——八高輪を  
大っぴらに殴りに、海鳴大病院に向かった。事態を混乱させた一因と  
個人的な怨嗟を理由に、彼は夜天を駆ける。

こんなに哀しいのは、本当に幸せだったから

「いやあ、最近はやての考えることがよく分からん」

……あまり触れていい話題じゃないにしても、どうしても考えてしまふな。人並みに気になってしまふんだよなあ、人の色恋沙汰って。

はやてって身体の状態が理由で学校を休学している訳なんだが、その状態で好きな男子がいるって言うんだぞ。かといって、俺は俺でさつきまで見舞いしていたし。……はやてから自分を抱えて空を飛んでほしいとリクエストされた時は驚いたが、それは却下している。とりあえず明日に約束したが、俺としては正直心臓に宜しくない。幼女が近いというのもあるが、なにが原因で体調を崩すか分からんし、はやてには意中の男子がいる。流星にその男子の邪魔になることはしたくない。誰かは知らないがはやての意中の男子さんすいません。寝取る気なんて微塵もありません信じてください。

ていうかだ、俺何回シャマルさんに嵌められるんだよ。ちよつと甘えた俺にも問題はあがあるが、とつくに夕方の7時超えている。ヴォルケンとの和解の場に俺がいけないのもおかしいだろうて。……なるだけ話を聞いてくれて頼みはしたけど、果たして本当にしているかも怪しいし、さつきと戻ろう。

「うわっ、シスコンキンモー☆」

「ぶつつ殺すぞお前！」

人が折角いい気分だった言うのに、ゲロ以下のおいの顔と出くわしてしまった。目薬差したいレベルだ、スルーしてヴォルケンのところに戻らなくちゃ。

「おい！ ガチでスルーすんな！」

「やかましいッ！ うっおとしいぜッ!! おまえッ！」

「わざわざ誤植の方で喋りやがって！ ……よく聞け自称紳士、戦闘は始まっているぞ」

「……………はあ？」

待て。なんで戦闘が始まっているんだ？ 俺は7時から果し合いすると伝えた覚えは無いぞ。ふざけるな変態めと返そうとしたが、冗談言っている顔じゃない。

「……………シスコン、先に喚けたのはどっちだ？」

「こつちは話し合いに来た。だがヴォルケンリッターにその気が無かったどころか、剣まで抜いてきやがったぞ」

「マジかあいつらは……………」

「こうなったのはお前が原因という自覚はしているよな？」

「……………俺？」

「ちっ」とリアルな舌打ちをしてから、睨み付ける。…………おう、管理局に身を置いて正義の味方になってはいたが、やっぱり俺を見るその眼は、あの時から変わっていない。いかにも不快なものを見るような眼。お互い相性の悪い同士なのも分かっているからか、悪い意味で少しの遠慮も無い。

「お前が中途半端にどっちの味方もした挙句に、なにも伝えてないからこうなったんだよ。管理局に菜摘やこのは、アルフがいなかったらもつと状況悪くなってただろうな」

「……………そんなこと知ってるさ」

「簡単に言うな。お前の想像以上のことが起きていたんだぞ？ 今だってそうだ。散々状況を振り回したんだ。お前が責任取るなり帳尻合わせしないと、引き合わないんだよ」

「二度も言わせるなよ。そんなこと知ってる」

ムカつくがシスコンの言いたいことは分かる。要するに、俺のことを蝙蝠野郎と批判してるってこった。否定出来ないのがなんか悲しいが、俺は俺で悩んでるんだぞ？ 確実にそっち側に戻れない可能性が高い状況をつくってるんだ。少なくとも、シスコンとこのはに眼の敵にされるのは予想していたが、こうまで露骨だと返って清々しいな。

だが、引き返せないなりに意地もある。馬鹿馬鹿しいと思われるかもしれないが、俺は賭けるしかないんだ。こうなりや通すしか無いん



だ。それこそ、ここで手を切ればはやてやあの四人に合わせる顔が無い。

「……真面目な話をしているとこ悪いが、そこをどけシスコン。俺は」  
「簡単に通れると思うなよ、自称紳士」

そこで、シスコンは自分のデバイスの先を向ける。ただステッキの先で指されただけに見えるが、余程俺のしたことが気に入らないようだ、一切の笑顔も無くにらみ付ける。いいねその顔、お前はそれで良いんだよ。ノリは良いが、それとは別で俺もお前が別に好きじゃないからな。

「正当な理由で、大っぴらにお前を潰せる理由が出来たんでな。少しオレの八つ当たりにつき合え、クサレ偽善者」

「突き合いたくないでござる！ 絶対突き合いたくないでござる！俺のそばに近寄るなああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「よくもオレとボスをホモ扱いしやがって！ お前は戦いを生み出す権化だ！ 絶対許さねえ！」

「シスコン、次にお前は「野朗☆オブ☆クラツシャー！」と言う！」  
「お前ラブライブではことり派だろ？」

「俺は根っからの海末ちゃん推しですよ破廉恥な！ そんなお前は凜ちゃん推しだろ？！」

「馬鹿野朗！ 雪穂推しに決まってるだろうが！」

「やっぱシスコンじゃあねーか！」

「喚いてろ！ 同じ穴の貉があつ！」

「テメエと一緒にすんじゃないやねえツ！」

気付くと、元ネタの台詞の状況と同じように、デバイス同士で鏝の競り合いをしていた。こいつもなんだかんだノリが良いから困る。……同じ穴の貉発言について聞きたいことはたくさんあるが、恐らく原作ノリで叫んでるだけだと信じて俺も乗っかることにしよう。これに関しては今は追及しない方が良いかもしれない。ただのノリだと信じたいし……

つーか人のキメ台詞（俺のじゃないけど）を妨害しやがって……そんな俺の邪魔をしたって言うなら、付き合ってやるぞバカ野朗コ

ノ野朗。変態シスコンに負けるほど落ちぶれちゃいないんでね。

……あまり言いたくないが、俺も周りの眼を気にしないでこいつ殴りたかったし、俺も相手にしてやろう。もつとも、戦ったとしても俺は変態に負けんがね。

そうだ、一つ確認しておくことがあった。念には念をだ。

「おいシスコン」

「なんだ？」

「否定しろよ。……今アースラはどこで停泊している？」

「……………は？」

……待つてろよ。戦闘が始まっていると聞くが、それ以上変な気は起こさんでくれよな。

空では既に、小さな爆ぜる光が点滅している。しかし、誰もその異様な光に気付くどころか感知することすらも出来なかった。幸い、ユーノによる時間進行をずらす魔法のおかげで街中を疾駆しようとも誰も気付くことはない。

遠くの空でなのはとヴィータが互いにぶつかる中、高層群の間を抜けながらフェイトとシグナムは、互いの剣をぶつけ合う。シグナムの一振りからは既に躊躇いは無い。聞く耳も投げられ、代わりに剣に否定を乗せる。

汎用性の高いエターナルフェーズと言えど、重い一撃を受けたり攻撃に特化しているでも無い。ゆえに、純粋な力の押し合いとなると不足な面もある。増してや本気のシグナム。悠長に会話することも出来ない以上、フェイトもそれなりに対応せざるを得なかった。

「バルディッシュー！」

『Shift, Brave phase』

鍵状の小剣は閃光を放つてから、バルディッシュブレイブフェーズは双刃剣へと姿を変える。悲しいことに、武装然とした形状と相まって、フェイトは

抗戦の構えを取る。

衝突する刃を競り合わせながら、フェイトとシグナムは互いを見合わせる。

「どうして……どうして話を聞いてくれないんですか!？」

「我らの都合は話した。語ることはもう無い」

「話すだけ話して聞くつもりは無いなんて……身勝手過ぎると思わないんですか!？」

「どうとでも言えればいい、我らは既に退くことが許されていないのだ。

——テストアロツサ、こんな形で無ければ、私たちは良き友となれたかもしれないな」

「……………」

ぎりつと奥歯を噛みながら、フェイトはシグナムの横薙ぎを防ぐ。衝撃を和らげることと体勢を直すために一度距離を取る。

高速で空を駆けながら、また剣戟は交わされる。一撃を与えては距離を取る一撃離脱。互いの戦闘方がそう選択されたことで、一撃に置ける思考は将棋の棋士のように張り巡らせていた。互いの思索を読み合いながら、どう近づき、どう欺き、どう動き、どう振るうかを深く逡巡させる。

技巧や力で勝っているのは、紛れも無くシグナム。しかし、こと速度という一点にて、バリアジャケットという装甲を外したフェイトが上だった。バリアジャケットをパージすることは、防御が脆いという面を弱点を晒すことになるが、それを枷にすれば自分が危ういと判断してのことだった。

それにもう一つ、フェイトには自信があった。相当遠慮していたにせよ、八高輪とも訓練をしたことがある。凶らずともシグナムと輪は、一撃離脱を主としていない戦闘スタイルという点では似通っていたが、シグナムの方が器用にこなせていた。

一見して付け入る弱味が無いように映るが、シグナムと輪では決定的に一つ違うことがある。

「な……!？」

輪は基本的に非力だからこそ、策を弄する。それこそ、本命を囿に

することすらも厭わない部分がある。そして、策に関する選択肢も無自覚ながらも多い。下手をすれば一時でも逃げることすら実行に移せるかもしれない。どちらかで問えば「勝利」より「生存」することを優先している彼ならではかもしれない。尤も、彼にしてみれば自身の生存すればそれが勝利だと信条にしている部分もあるから、どちらにしても一種の才能とも言えるだろう。

対してシグナムは実力や地力が高いからこそ、奥の手を取ってしまいうタイプに位置づき、勝利の為に剣を振るう。——言ってしまうば、シグナムは輪ほど姑息に向いていないゆえの欠点だった。

走った銀の蛇腹。それを回避しながらフェイトは音となって近付く。もちろん、自分が避けた背後から操作して蛇腹を襲わせるだろう。輪との訓練や戦闘のデータから培ったフェイトにしてみればこの程度のことは想定内だった。それどころか、彼ならこれすら罠にするだろうという予感すらある。或いは彼なら、剣を捨ててまで殴りに行くかもしれない。相手が女性全般ならば有り得ないにしても、正治やクロノ執務官との訓練に置いて斬撃やスフィア以外の攻撃も平然としてくるくらいだ。流石に相手の顔に唾を吐くようなことはしたくないしても、彼の意表の付き方は参考になるものが多かった。

——フェイトは蛇腹に背に追われながらもシグナムに接近し、身を翻しながら急停止した直後に奔る蛇腹を剣の面で受け止め、滑らしながら後ろにいなした。蛇腹の向かう先は、持ち主たるシグナム。

当然、幾度の剣による衝突をしたのだから、また斬りかかると踏んでいたシグナムにとっては意識の外からの一連だった。高速で飛空するフェイトを追うほどの速度を保っていた剣の軌跡は——レヴァンティンによるオート機能によってあらぬ方向へと転換する。

「危なっ！」

「これは、レヴァンティンか!?!」

転換先は、また別の空の先へと衝突するアルフとザフィーラの間へと伸びる。

この一瞬が、流れを変えた。容赦の無いザフィーラの猛攻を保っていたが、この思わぬ横合いが勢いを削いだ。事情を知らない上に、念

話も出来ない状況下のザフィーラからすれば、沈着なシグナムがどんな狙いでと考えたが、それも一瞬。これはミスだと判断に至る。経緯を無視したのは仲間への信頼からのことだった。

しかし、アルフにとつては一瞬で充分だった。その動揺によって生まれた隙を、見逃すはずも無い。

「この、大馬鹿っ！」

「ぐぬああー！」その一瞬の隙に身体を翻し、回し蹴りを放つ。辛うじて防御に間に合ったが、アルフからも遠慮が無くなったことと張られたばかりの薄いシールドの影響で、ザフィーラは引つ張られるように吹き飛ばされる。

その肢体が横切ったのは、なのはとヴィータ。スフィアを放つヴィータに対して、なのは一向に反撃することも無く、ただシールドを展開させてから真上へといなす。輪も同じことをしていたが、彼の場合は殴って相手に返すものである。なのははその応用としてさつきから試してみるが、ようやく要領を覚えたことで、ヴィータの近接魔法にも、たつた今慣れて来たところだった。

「おい、高町なんたら」

「な、なのはだよ!? 高町なのはー！」

「高町なのは、お前なんで戦おうとしないんだ？ さつきからそうだ、一度の反撃もしない。どうしたいんだ？」

ヴィータの言葉には誇張も脚色も無い。なのはは一度もスフィアを出すことすらしていないし、それ以前に、唯一戦意が微塵も感じない。口に出さないが、以前のエンヴィとの戦闘の時から気になっていたことだが、デバイスやバリアジャケットが変化しているのに、自分たちやフェイトのようにベルカ式を搭載していない。ベルカ式を搭載していたフェイトに対して内心で怒りもあつたが、ベルカ式を搭載せずに性能を少し上げた程度のデバイスを持たれて向き合うと、小馬鹿にされたようにも感じてフェイトに対する怒り以上の感情が止まらなかつた。

……ヴィータの表情は牙を向いた狼そのもの。その顔にたじろぎながらも、なのはは一呼吸置いて落ち着いてから、真っ直ぐ鉄槌の少

女の双眸を見る。

「わたしは戦いに来た訳じゃないから」

「言葉をすりかえるな！ わたしたちと言えない辺り、本気でその気は無かつたんじゃないのか!？」

「違う！ わたしは信じたいの！ だから戦いたくないし、攻撃なんてしたくない！ だからお願い、わたしたちの話最後まで聞いて！

わたしたちも、はやてちゃんを助けたいの!」

「……………」

なのはは気付いていないが、グラーフアイゼンを握るヴィータの力が緩む。

……ヴィータにしてみれば、彼女は異質だった。反撃をしないと云ったが、バリアジャケットを纏った程度でデバイスの先を向けるという行為すら見せていない。腹立たしいと唇を噛んでいた一方で、ヴィータはなのはの一貫した想いに嘘も偽りも無いことに気付いてしまった。その証拠に、自分を曲げたくないと言いつつ主張しながら、なのはの目尻が少し滲ませている。——自分たちと戦いたくない、その上ではやてを助けない。自分たちより大馬鹿な考えだが、はやてを助けないという気持ちは顔に書かれていると言われても言い返せないほど、はつきり表情に出ていた。

「……ふんっ」ヴィータはその顔から、輪を想起していた。彼と同じ綺麗な事を言う馬鹿がいると思わず、交戦を諦める。

「……高町なのは、信用して良いんだな?」

「……………」

「勘違いするなよ。管理局は信用していない。だが馬鹿正直なお前ならと思っただけだ。念の為だ、悪用しないようアタシたちが見張つてやるからな。妙ことしたらぶっ潰すからな」

「うん、良いよ!」

「なんだその反応は……まったく、お前と喋つてるところがちが間違つてるみた」

やれやれと言わんばかりに、頭を書きながら零すヴィータと、穏やかに笑うなのはの表情が凍った。

「え……う？」

「闇の書……う？」

なんの音も気配も、前触れすらもなく、最初からそこにあつたような自然さで、その分厚い本は不自然な存在感を浮遊させていた。

虚数空間の色合いと違った、見ていて不安定になる紫色の気配を纏った直後——その血色が黒い気配は文字通り無数の蛇となり、本に纏いつく。生物的な蠢きの音を放つ本は、瞬時にして悪意の塊のように収縮と膨張を繰り返し、臓物の鼓動のような気味悪さを醸していた。

「——ナハトヴァール!？」

「どうして……!？」

「……そうだ、あれだ」

「え？」

「こいつがいたからっ！」

ヴィータの言葉の意図をなのはは知らない。だが、ヴィータについての違和感は晴れた。自分たちにとっての不都合な部分を思い出してしまった。

『Das Anwendungssystem für automatische Verteidigung? Nachtwal  
" l · s s t a n 』

「自己防衛、システム……う？」

「待て！ 我らはまだ戦える！」

この場の魔導師全てが、理解が及ばないものと対峙したことで、果然とするしか出来なかつた。

だが、その魔導師全て——否、もう四人の自分だけを見るように、冷たく、無感情な音声が響いた。

『Erhaltung des Schrittersystems  
vernichten. Vollendung der  
Schrift der Dunkelheit hat die  
oberste Priorität. — Das Schu

無情な死刑宣告が、ヴォルケンリッターにのみ向けられる。

酷い悪寒に襲われて、シスコンとの戦闘は離脱。気味が悪いなんてもんじやない、初めてエンヴィを感じた時のとは違う、はつきりとした嫌な予感だった。あいつに関わるくらいなら、悪化しただろう現場に向かうことにした。念話も通じないことで嫌でも不安は募るつてもんだ。聞くだけ聞いてからある程度シスコンをボコツたし、もしもで間に合わなくなるのはごめんだから、イグナイトですつ飛んできた。で、現場に着くとだ。

「……なんだよ、これ」

……それ以外言い様が無かった。よく見ると闇の書に纏い付く生き物の群れはぐりゆぐりゆと蠢き、なのはたち管理局魔導師たちとヴォルケンリッターが、バインドによって捕縛されている。

一際眼を引いてしまうのが、ヴォルケンの全身を植物の蔦が捕縛している光景だった。対してなのはたちにはバインドだけ。どんな状況なんだこれは？ それにしてもえつちい光景だ

——もうひとつ、ここで見るには有り得ない光景があった。余裕を持ちたいという意味を強く含めて、わざとふざけてみる。

「はやて！ なぜはやてがここに!?! 逃げたのか？ 自力で脱出を!?!」

「う、ううん……気付いたらここに……」

「待ってる！ 今俺が行く！ ナユター！ アストラル！」

引き金を引きながら、ガンブレイドに装着された刃状のビットを放つ。

忘れてもらっちゃ困るが、イグナイト中は魔力の出力以外にも、俺の身体も性能が上がるんだぞ。つまり、なにが言いたいかと言うと、こんな風にブレイド状のビットと誘導性のあるアストラルで蔦を攻



撃しながら、剣を振るうことも出来るようになる。まああれだ、身体能力どころか思考能力・情報処理能力まで上がると来たとものだ。今まで活かせていなかったが、アヴァロンがこの物騒な形になってから正しく扱えるようになったのは大きいな。

とにかく、なのはたちには手出しはしてない。強いて言うなら、悪意の矛先は完全にヴォルケンに向けられていた。まずはヴォルケンやはやてが危ない。もしもの時はアストラルでどうにかするしかないがな。

「クソつ、一体なにがどうなってるんだ!？」

襲い来る蛇を切りながら、情報を整理するほど、考えたくない結果に行き着いてしまう。

あの蛇が蠢くあの本はどう見ても闇の書。でヴォルケンリッターが襲われている。はやてがここにいる。——欠陥を抱えていると言っていたんだ、なにかしらの暴走をしたと考えるのが妥当かもしれない。

よく見ると、捕らえられたシグナムたちの反応が無さ過ぎる。気絶かもしれない……いや考えるな。

「……………闇の書が、完成したって」

……………はやての顔を見て、俺は自分のしてきたことを後悔した。声が震え、表情までも翳っている。その顔は、俺たちが見たかったものはまるで間逆の——今から絶望に染まりかねないような、濁り始めの空だった。

『Es ist die Zeit der Erweckung, mein Herr』

「覚醒なんて、そんなんええねん! みんなを離して!」

『Einverstande. Das Schutzritter  
system ist v•llig ausgestrich  
t. und wird mit dem Kernmodus  
•r meinen Herrn wiederhergeste  
llt』  
「な……………」



を凌ぐか？ 3択、ひとつだけ選びなさい。3分間待つてやる、40秒で支度しな（暴論）

答え①・ハンサム紳士こと八高輪は突如逆転のアイデアがひらめく。

答え②・仲間がきて助けてくれる。

答え③・かわせない。現実是非情である。

」

答え③。

腹部を貫かれたヴォルケンリッターに対して、ご丁寧なことに俺は手足を含めたほぼ全身を貫かれた。……ああこの全身の痛み、あれだ。トラックに撥ねられたあれと似てるな。全身つてところが……

結局ヴォルケンも助けられず、それぞれに一度の光を放つてから、蠟燭の灯を消したようにあっさり姿は消えた。

……用は済んだと言うように、俺を貫いた意志たちはぶんと俺を放り投げる。乱暴に投げ捨てた割りには、はやての傍で身体を打ちつけたんだが、偶然か……？ いや、それはもうどうでもいい。

今分かっているのは、バリアジャケットを保てないほどの傷を負っていることと、はやてが声にならない嗚咽を上げながら俺とヴォルケンがいたところを交互に見ていること。……違うんだ、俺たちが見たい顔はそれじゃないんだ。

「や、やや、八高さん………」

「ご、ごめん………はやて………」

『しっかりしろ八高輪！』

なんとというか、自分の頼り無さというか馬鹿さというか、とにかくいろんな意味を込めて誤ったが、それ以上のことを身体が拒否させ



ヴォルケンリッターを取り込んだことで得た記憶から、彼女は既に輪のことは知っていた。だから分かる。彼は自分の主勿論、守護騎士の四人からも信頼されていること。ことヴィータは分かりにくいにしても、基本的には仲間としても認識していた。

「……不思議な男だ。主にしてもそうだが、このような人間は初めてだ」

『じゃろう？ いつ見ても飽きぬ男じゃから、退屈せんよ』

「……そうだな。私もそう思う」

闇の書というものを知りながら、彼は私利私欲による悪意がなく、その上主を助ける為にと協力までしてきた。彼女にしてみれば、他人の為に闇の書に関わる人間というのも、輪が初めてだった。

それに、守護騎士たちの表情が豊かなのも、はやて一人が起因じゃない。喜怒哀楽を生むきっかけをはやてとするなら、良くも悪くもそれを増長させたのが輪だ。それこそ、守護騎士を人間らしくさせたのは、紛れもなくはやてと輪の成果なのだ。

そして、アヴァロン・ブルーとのやり取りも自然にしたが、彼女にすれば驚くことは無かった。デバイスが所持者を守るのは至極当然で、こうしてプロテクションを展開させることもまた自然だった。

「——お婿さん、か。どう思う？」

『奥手と鈍感という噛み合わせに眼を瞑れば、善い二人じゃと思っ  
ている』

「お前もそう思うか」

ふと思ひ出して、彼女は薄く笑う。様子を見るに失言なのは分かっているが、それでも彼女は儚い願いを持っていた。

仮に、もしも本当にこの二人が結ばれたらなど。はやては守護騎士を家族としてまとめる一方、友達や見知った顔を前にすると年齢相応の表情を見せ、更に、一人の男子が加わるだけで「女の子」としての色合いが一層強まる。そしてその男子こと八高輪は、はやてを主ではなく一人の女の子として談話したりと、常に楽しみを与えたりしている。守護騎士相手だろうとその姿勢は崩さず、義理堅く付き合ってきた。そんな彼は、紛れもなく稀有な存在だと、平穏な日常に疎い彼女

だからこそ気付いていた。

……だけど、それは叶うことは無いのだと、微かな挙動すら見せず沈黙を保つ輪を見て、彼女は頷いた。はやての様な主と出逢うことから低い確率だと言うのに、闇の書の所持者に対する理解者との巡り合いととなると、尚更に見込みの無い話だった。彼はこの瞬間まで、闇の書に対して希望を持って向き合っていた。だが、それを裏切ってしまった。

——だから彼女は断言出来ていた。この奇跡のような組み合わせは、金輪際有り得ないと。やはり、この世界も滅び道から外れること出来ないのだと。つっと彼女の頬を撫ぜる一雫は、まだ止むことは無い。

「……安心して下さい我が主。悪い夢は全て私が見ましよう。だから、せめて夢の中では、彼や彼女たちと幸せに過ごして頂ければ、私はそれが本望です」

輪に向けた手の平の周囲がぐにやつと歪んだ瞬間、魔法を打ち込む体勢を取る。一向に流れの止まない一滴を払うこともなく、その跡を追わせ続けている。慈悲とは違う感情が原因にしても、頬を拭う仕草を見せることなく、輪を排しようとする姿は、遠目で見るとはたちにしてみれば、無慈悲な一撃にしか映らなかつた。

『本気か？ 貴台がこの男を撃てば、それこそ夢が夢のまま終わるぞ？』

「夢はいつか覚めるものだ。私の輪廻は永劫変わることの無い、転生と破壊の繰り返し。……幸せな夢は充分見れた。我が主や守護騎士にとっても、言葉で尽くせぬ程の幸福を感じている」

『だから、八神はやての気付かぬ内に世界を壊すと？』

「そうだ。そうして、我が役割を果たすだけだ」

『——馬鹿者め！』

正に撃とうとしたその瞬間、彼女へと機関銃のように弾丸が撃ちだされた。下手な牽制や寸止めをしたところで、彼女は反応すらしないだろうと踏んで当てる意識を持っていたが、その信頼通り、彼女は後

ろを飛び退いて回避する。

その空いた空間に、影が四つ降り立つ。二つは、彼女と向き合いながらじつと眼を見ている。

「待って下さい。その人は私が先に吹っ飛ばす約束がありますので」

「お前たちはなんだ？」

「当てる下さいよ。ハワイに招待しますよ？」

「管理局の魔導師です」

「おっと、マイワイフを手前に失礼をしてはいかんね。私も管理局員です。戦OHANASHI争が好きで好きでたまらない、人間のプリミティブな衝動に殉じて生きる、最高最善の純潔乙女です」

「おう、ろくでもない戦争屋の台詞引用は止めようぜ」

このはとシルヴァが彼女と向き合う背中中、正治はツツコミを入れながら菜摘と一緒にたつた今現れたエンヴィと対峙している。

予定より早いと思われるが、こののは推理通りという意味ではまったくの予定内だった。むしろ、想像した通りだった。対してエンヴィは、予想したより魔導師の数に怪訝を示すが、すぐに「まあいい」と放置した。

「面倒な輩が多いが、たかが蟲の群れに変わり無いようだ」

「…あまり強い言葉を使うなよ。弱く見えるぞ」

「あんちゃん、悪い顔してるっすよ」

「それはね菜摘さん、この人がシスコンだからですよ」

「……あちゃー」

「どいつもこいつも、オレをシスコン呼ばわりしやがってクソツタレめ！ オレのどこがシスコンなんだよ!？」

「どうあれ、吾の邪魔をするとなれば、手心はいらん。見苦しい散り際を以って吾を楽しませてみる」

「上等だ！ 最初に言っけ置くが、俺は自称紳士と違って男女平等拳を使えるからな。女の姿してるからって手を抜くと思ったら大間違いだぞ?」

「堂々と宣言されると酷いものですね」

「フェミニストと言いたかったんだが……まあいい」

シルヴァの一言に頭を搔くが、相手が明らかになに自分より強いからこそ、正治の選択だった。とはいえ、彼の過去を考えると、ナイフでプレシアを刺突したり、フェイトを操っていたりと非情にも徹せる分輪よりは戦闘に躊躇いは無かった。

それぞれに戦う相手は決まっている。向かい会う相手に対して悪い印象をほとんど持っていないこともあって、このはと正治のその一言は重く響いた。

「——覚悟しろ」



## BELIEVE IN NEXUS

「全く、なのはさんとフェイトさんと言い、子どもだからと侮れないものね」

「本当そうですね」

「特に高敷このは。あの子は相当のものね。あれは間違いなく逸材よ」

「そうですね……」

海鳴市がとうに戦場が変わっている中、艦内のモニタールームから市内の状況を逐一確認しながら、リンディとプレシアはふと言葉を交わしていた。二人の言葉の通り、アースラの形成が過度に悪くなっていない大部分こそが、異世界から来訪者たる高敷このはなのだから、それこそ思わぬ拾い物をした心境だった。

そして、このはまた一つ大きな貢献を与えてからシルヴァと一緒に艦から出撃している。このはは思索能力や知識量の膨大さは知っていたが、ある種小さな子どもならではの柔軟な考え方もあって、ある事態も奇遇する必要性に気付いてしまった。

「プレシアは……エンヴィがデバイスに寄生するという可能性をどう見ます?」

「このはから聞いた通りでしょう? デバイスのデータさえ把握していれば簡単でしょうね。それこそ、魔導師に寄生するよりも簡単に、ね。レアスキルの複写が出来なくても、あの製作者ならその能力も加えそうね」

「寄生型のデバイスという部分に気が逸れていましたが、やはり在り得る可能性なのですね」

「それだけじゃないわ」

そこからプレシアは、少しだけ声の調子を落とした。聞かれたくない話をするというように、リンディに三歩寄る。

「——恐らくだけど、管理局に属するデバイスのデータをコピーして

持ち出ししている、と考えた方が良さそうね」

「……やはり、そうなりますか」

「トーマスは元々この局員だったと記されていたでしょう？ 闇の書をモチーフにしたデバイスしつつ寄生させるなら、予めデバイス関連のデータを気付かれないように持ち出した。そう考えると不自然とも言えないわね」

「……やはりトーマスが持ち出した、とすればそれこそ辻褄が合いますね。言ってしまうえば、管理局の秘密を持ち出してただで済むわけがありません。大方、辞職前からデータだけをコピーして持ち出した、と考えるのが妥当ですね」

「こののは気付いていて言わなかったけどね。とはいえ、製作者自身もこうなるとは思わなかったのだから、誰にとつても想定外のことよ」

言ってしまうえば、こういうことだった。こののは、管理局の裏を知ってしまった。それが悪しきことと当然気付いていたが、その悪しきことが今になって表に現れ、生み出した大元である管理局へと矛先が返って来ている。言わばこれは——生み出されたものからの八つ当たりと一種の因果応報を孕んだ争いだった。尤も、エンヴィキヤットウオークの考え方を含めてしまえば、そのどちらも関係のないものとなっているが。

「どう見るリンディ」

「なにがですか？」

「この戦いの結果よ」

「まるで予想は付きませんが、一つはつきりしています」

……はあっと、リンディは重い溜め息を吐く。口にしようかとも躊躇ったが、どうしてもそうとしか考えることが出来ず、静かに響かせた。

「……無事に終われるとは思えませんが」

「さて、気に入らないがこの自称紳士にも起きて貰わんとな。馬鹿だろうと、人手が欲しい」

【そうですね。このは、お願いしていい？】

【両方女の人だから当てにしづらいけど……シルヴァちゃんが言うなら】

「させるか！」

向かい合ったまま動かさず念話だけで動きを決めていたが、先に動いたのは黒衣の女性だった。

回復しようとするのが動いた瞬間、それより早く彼女は風のように疾走する。その俊敏な動きにも眼を見張ったが、魔導師たちの逡巡を奪ったのは、他の一つだけの要因だった。

「あれって……！」

「八高さんのデバイス!?!」

黒衣の女性が右手に握ったものは——紛れもなくアヴァロン・ブルー。それも、最近輪が進化させたものと同型の、ブレイドビットを装着させたあの姿だった。

なぜ彼女があのだバイスをと巡らせたことに硬直を狙われるが、このはその一振りをデバイスで受け止める。本来なら斬られていたタイミングであったが、彼女の結論に至る速度が上回ったことで飛び退くことによる衝撃緩和に加えて、ワールドツリーによるオート機能がプロテクションを展開させたことで、無傷を保つことが出来ていた。

「このはっ！」

「シスコン妹さん！ そちらで回復お願いします！」

「合点っす！」

「誰がシスコンだド畜生め！」

「あと、例のことも忘れないで下さいよ！」

「分かってる！」

否応に黒衣の女性との戦闘になったこのはとシルヴァは、残された森兄妹に伝言を頼む。特に二言目に零したものこそ、今後を左右することであることは兄妹も分かっている以上、くつと表情を険しくさせ

る。

二人が黒衣の彼女と戦闘を始めたことを見送ってから、正治はエンヴィに魔力を圧縮させたショートバスターを放つ。一見して細い照射の光だが、密度を込めている分威力も増している。その威力を単純に説明すれば、遠慮したなのはのデイバインバスターとも並ぶものだった。

なぜそこまでの魔力を込めたのか。——エンヴィがプロテクションを展開することを前提にしているからだ。正治の感覚で言えば、この手の傲慢な性格というのは、まず避けられないだろうと踏んでの照射だが、その勘は的中した。

「ぐう……!!」

「菜摘！ さっさとその馬鹿を起こせ！」

「はいっす！」

「つてなにしてんだ菜摘いいいいいいいいいい!!」

「焼いて塞いだっすっ!!」

「それ錬金術師の応急処置いいいい!!」

兄の想像を上回るミスを天然でしかしたことで、好機が訪れることは無かった。当の輪本人は、確かに傷口は塞がったものそれだけであり、「回復」という役割を果たすにはまるで致命的なものだった。加えて、余程の重症を負ったことで意識も覚めることは無かった。

無論、意識が逸れたことで隙も生まれる。正治の放った照射を受けながらも、エンヴィは横に弾き兄妹に急速する。

「吾相手に余所見とは、低く見られたものだな！」

「やべっ！ 急げ菜摘！」

「早すぎて間に合わな——」

菜摘の言う様に、既に斑の流れる剣を持って接近するエンヴィ相手に、回復という作業を行うことは、困難——否、不可能だった。その表情からも分かるように、彼女には迷いや躊躇いの一切が無く、一重の邪気を剣に込めている。

そして剣の形状は大剣。単純な回避なら二人には容易だが、特に正治にはそれが出来なかった。倒れている輪の近くには妹がいる。無

傷での回避も可能だったが、正治は横たわった輪を蹴り飛ばし、菜摘の前に立ちながらプロテクションを展開させる。

それで防ぎ切れないことは勿論熟知している。正治が下した判断は、

「菜摘、こいつを引き付けるぞ！ 絶対闇の書の意味に近付けさせるな！」

「了解っす！」

「合図するから、オレに付いて来い！」

「ぬうっ！」

その瞬間、エンヴィにしてみれば予想外のこと起きた。プロテクションで防がれていたにせよ、力押しで突破出来ることは知っていたことで、破ろうと力を込めたと同時に——プロテクションが解除された。

そして、正治は低い姿勢を取ることで横薙ぎの一線を回避していた。のれんに腕押しをされるとは夢想もしなかった彼女は、夢遊したように身体をふらつかせる。

「食らってろ馬鹿が！」

「ぐっ、がああああああ！」

そして、その低い姿勢から勢い良く地面を蹴り、その推進力を加えて飛行による突撃を行う。魔法による小細工なしの物理攻撃、完全な不意打ち、どれも傲岸に構えていたエンヴィには予想の外からの一撃だった。

「来い菜摘っ！」肩からのタックルをエンヴィの腹部に食い込ませたまま、その小さな肢体をこのはたちは別方向の空へと連れて行く。菜摘も言われた通りに、一度だけ心配そうになのはたちに眼を向けてから、正治の後ろを追う。

——このはたちが降り立ってから、ここまでが10秒程。巡らせたものが幾許にしても、短しに過ぎ去る。到着したなのはたちが現場に到着した頃には、判断に参る状況だった。

片や闇の書と対峙したこのはとシルヴァ。片やエンヴィと対峙した正治と菜摘。厄介なことに、意味合いは異なれど撃破を控えなければ

ばいけない相手と来ている。未来を聞いたなのはたちにすれば、闇の書の意思の破壊は難しく、エンヴィイが乗っ取ったアリシアの問題も解決していないという状況だった。

しかし、今はじっくり思案している場合じゃない。今は戦闘中だ。決断も早い方が良い。だから、なのはたちは互いに顔を見合わせる。

「わたし、このはちゃんのところに行きます！」

「分かった、じゃあ私はアリシアのところ！」

「アタシはフェイトと一緒にアリシアのところに行くよ！」

「僕はなのはと行くよ！」

なのはとユーノとでこのはたちと、フェイトとユーノとで森兄妹との合流を図ることを決めた。四人はそれぞれの決定に随って、四つの光は散り散りに分かれていく。

【菜摘、先に言っておくが、絶対無理だけはするなよ。オレのパラレルハーツじゃ、お前は呼べない】

【そうなんすか？】

【呼び出しが出来るのは、あくまでリリカルなのはのキャラクターだけだ。関係の無い人間——転生した人間や作品外の人間は呼べないからな。万一に死んだらどうしようも無い】

【……了解したつす】

正治は念の為、以前に説明したことをもう一度菜摘に話す。

そう。正治のデバイスで呼べる人間は、リリカルなのはという作品の人物だけ。百の平行世界を巡ろうと、リリカルなのはという作品内に、森正治や森菜摘、増してや八高輪という人間が存在していない以上、それらと呼べることは無い。特別な立ち位置にいる高敷このはとシルヴァもその点に当て嵌まっていることにも気付いている彼は、一際その重要性を頭に叩き込んでいる。

菜摘や輪とは方向性は違えど、出鱈目なデバイスを使える以上自分も死ねないし、死にたくないとも思っている。しかし彼はの考えの根本というのは、輪とは逆だった。生き残る為に相手を倒すという思想

である為、ステツキ状のデバイスの先をエンヴィに向ける。

「エンヴィキャットウォーク、二つ確認するぞ」

「なんだ？」

「お前はデバイスにも寄生が出来るのか？」

「ほう、知っていたのか。成るほど、マトウの日誌はそこで見られたものらしいな」

「……となると、闇の書のデータも積まれてる、と？」

「存外賢しいな。だが、吾とてさつき思い出したところだがな。虚数空間にいたことでデータ障害はあつたが、なに、然程気に病むことでもあるまい」

「人と違って、構造が近いから入り込めば後は力づくってか？」

「……だから吾と闇の書を引き離したということか。よもや頭の回る蟲とは恐れ入った。低く見ていたことを素直に詫びよう」

「ああそうかよ」

基本的に自分以外を人間扱いしていないエンヴィの性格を鑑みれば、その一言に込められた評価の大きさは測りきれないものだが、正治は素直に喜ばなかつた。正治の確認した質問こそ、このはがここに来た理由とも直結していたのだから。

元々はこののはの推測でしか無かつたが、その危うい可能性を割り出したことで、このはとシルヴァは管理局からの出撃許可が下りた。正治と菜摘とで合流した時にも同じことを言ったが、実のところ、その時点では正治は半信半疑だつた。しかし、実際に確認を取ってみれば、この答えだ。紛れもなく、こののはの推測は事実だつた。

——つまり、エンヴィは闇の書に近付けるだけで危険なのだ。『異種』である人間ではなく、『同族』たるデバイス相手の方が寄生も難しくないと、という話だ。特にデバイスへの寄生を可能とさせるのが、やはり虚数魔力だろうと正治もこのはと同じ結論に至つた。

ならばと、正治のすべきことは固まつた。彼個人の意見で言えば——優先させるべきは、アリシアごとの破壊だつた。この結果の部分だけで言えばリンディとも同じだが、根本的な理由だけが違つてい

た。

正治は割り切っていた。正しい二期以降の話がどうなるかは知らないが、少なくとも、一期でのあの終わり方を考えれば、アリシアは恐らく本来死んでいた可能性が高かったはずと。プレシアが生きていることが既にイレギュラーだが、もうこれ以上の奇跡を願うのはあまりに条件が悪い。半端に助けようとすれば、返ってこっちが危険になるどころか、既に状況が悪いのだ。元々いなかったものが、いなくなるんだ。彼はそう考えることで躊躇を無くした。

「……話はそれだけだ。消えろ」

「な、あんちゃ——」

それだけを言ってから、正治はショットバスターを照射させる。

だが、正治にとつて予想外のこと起きた。詫びようという言葉を軽視していたが、エンヴィの動きには戯れるような緩慢さが無くなり、肉食動物の狩りのような俊敏な動きを見せた。その小さな身を翻しながら照射を返し、接近して来る。このはの伝言を尋ねただけの身にしても、まさかそれほど注視されるとも思っていなかった正治には、意識していなかった挙動に違いなかった。

「そうか、言いたいことはそれだけだったか。ならば蟲よ、吾に踏まれて死ね」

「ちっ、早い！」

振り被られた剣の一振りは、菜摘の赤いスフィアの魔法、スカレットバレットと、もう一色の金の矢の雨によって阻まれた。

「今のはサンダーレイジ……フェイトが来たのか」

「助かったっす！」

「……正治、今の照射はなんのつもりだい？」

エンヴィとの距離もとつた所で、フェイトとアルフが隣に並ぶが、その表情は険しく刻まれていた。先に放つたあのバスターの威力は、明らかに相当量の魔力が込められていた。……擁護に回ろうにも、兄の意図も知りたい菜摘には視線で促すしか出来なかった。

……どう言ったところで、快く思われないな。そう覚悟した正治は、なるだけ嫌味に聞こえる調子で説明した。



「なにつて、エンヴィを壊すんだよ」

「壊すつて、アリシアはどうなるんすか!？」

「人一人の為に世界滅亡とかオレは嫌だね……アリシアの墓はお前ら  
で建てればいい」

自分を好意的に思っていない局員もいるという事実は知っているにしても、意識して嫌われ者を演じることは正治にしても億劫な気分だった。だが、彼は意見を変える気は無かった。

「……他に方法があるつて言うなら、それをすればいい。検索座標、N  
MV2—12。停留時間——」

「させると思うか!」

「くそつ、うざつたい!」

やはり自分が思つた以上に反感買ったようだと強く認識した。エンヴィは一切の笑みを浮かべることなく、自分を殺しに来ているなど正治は自覚した。斑剣の振り下ろしを防御しながら、エンヴィが襲来した勢いを乗せたまま正治は後方へと引きずられていく。

実のところ、彼はシャマルを呼んで輪の回復に宛てようとしたが、その間すらも与えられない。女性に手を出せない使えない自称紳士にしても、弾除けや身代わりにもなれるし、人がいるだけで少しは状況の悪化も緩和出来る。——彼自身死んでも口にしたくないことだが、あの男が口にする希望的観測があるだけで、場の空気も違ってくるのも事実だった。だが、今彼は無責任にも眠つたまま。さつさと起こして責任を取つて欲しいというのもまた、正治の本音だった。

「躊躇するな! 躊躇えば、こつちが死ぬぞ!」

「——つ」

正治の言葉には嘘は無い。相手は遠慮を持たない凶悪な魔導師とも言える存在。時間制限があるにしても、動ける間はその暴虐を存分に振るえる。それこそ、なにかの気紛れが働いて、矛先が自分たちから町に向かないとも言切れない。

「……アルフ、戦うしか、ないの?」

フェイトは来るんじゃないかと今更に後悔した。未だに説得してなんとかなる、なんて考えで来てしまったけど、既に事態は進んで

いた。アリシアを助けるか助けられないかではなく、アリシアを倒すか倒されるかで話が決まっている。

鍵状の剣を握る力が、弱まっていく。生憎、今のフェイトは以前と違って表情も感情も豊かに過ごしている。家族の温かみを覚えた今の彼女がアリシアに手を出せることは……極めて難しかった。

「ジブンは諦めないっすよ！ まだ、終わらせられないっす！」

その中、一際力強く言い放ったのは菜摘だった。

「だけど菜摘、でもどうやってアリシアを」

「助ける方法はまだ思い付かないっすけど……もう打つ手が無いなんて思いたくないっす！」

『妾の主は実に樂觀的よのう。だが、そうあれかしにこそ相応しい。』

その諦めぬ姿勢、見事よ」

「折角プレシアが生きているのに、アリシアがここで死ぬのは嫌すからね。みんな揃って、ハッピーエンドを迎えるのが一番すよ」

「菜摘……」

「二人は先にアリシアに向かってくれるすか？ ジブンは輪にいを回復してから向かうっす。心配しなくて良いっすよ、マトリョシカでどうにかするっすから」

「……分かった」

「じゃあ、先に行ってるからね」

それぞれの表情から剣幕が緩み、揺らいでいたフェイトも持ち直せた。

互いに見合わせた顔を頷かせながら、二人と一人でまた別れる。

……内心、菜摘にも不安はあったけど、ここで大袈裟に自分に言っておかないと出来なくなりそうな気もあって、彼女自身は自分の決意に励まされていた。

——彼女が輪を回復役を買って出たのも理由はある。さつき自分が犯したミスを帳消しにしたいのも人手が欲しいのも勿論だが、大きな理由は別にあった。闇の書を完成させて事態を悪くさせてしまったにしても、その思いの根本は、はやての為と善意であることには変わりない。ならば、そんな彼がアリシアの死を望む訳が無い。

短絡と言われても、菜摘は賭けていた。兄と方向は違えど、彼も人を助ける為に動く性格。自分の願いの最たる部分を担っているだろう彼に助けを求める為に、菜摘は飛空の速度を上げる。

一方、このはたちは苦戦を強いられていた。

あの街中で戦われては周囲に気を配らざるを得ないことから、場所は海鳴の市街からその遙か、海上へと場所を変えていた。

二人はそれぞれに強力な魔導師相手にも戦ってきたし、前にいた場所ので凶悪な兵器とも相手になった。しかし、そのどれとも比較にならない存在が正に眼前にいた。

こののはの見立てでは、推定ランクはオーバース。並の魔導師でなくとも、彼女を倒すという行為は、極めて難しいだろう。それがレアスキルを所持したこののはとシルヴァにしても、困難を窮めていた。

端だけを言えば、二人は劣勢だった。近接戦闘で挑んでも彼女の手にはアヴァロン・ブルーが握られている。近距離に特化したシルヴァが振るっても、哀しい顔色を変えない黒衣の女性はその大剣で存分に振るい返し、あろうことか装着したナユタ・グライドも難なく扱えている。

その剣を持った相手と以前に立ち会ったこののはの印象は——やはり凶悪な武装だなと認識していた。知る限りの情報だと、アヴァロン・ブルーは発声と気持ちの大きさによって威力が変わるといいう、デバイスにしては異様な部分もあるなど思っていたけど、この姿になってからの情報というものは、決定的に不足していた。だから、シルヴァがブレイドビットへの対処に馴染んできた頃には、魔力もそれなりに消費させられていた。

近接が危ういなら遠距離はどうか。こちらもまた、打破するには厄介なことが多かった。彼女が扱う魔法は言わば、蒐集してきた魔導師の魔法。現に、雷光を纏ったデバインシューターや、こののはのマシンガンシードを上回るほどのサンダーレイジの弾幕とシリウスの高速連射。

後に名前を得るその女性の強さというものを正確に測ったこのはの判断は——最悪負けるかもしれない、という結論だった。その要因こそ、皮肉にもアヴァロン・ブルーの存在だった。

あれは間違いなく、全てが八高輪に合わせたような特注品のようだと感じていた。魔力の素養の匙加減、彼の性格が合わさなければ、あのデバイスは凶器以外のなにものでも無い。隠さずに事実を言えば——彼以外が握れば彼以上に真価を発揮出来るし、誰が持っても強くなれる。そんな性能をしている。

では仮に、その誰もが所持者以上に強くなれるデバイスを、オーバーSランクを推定された魔導師が手にしたとしたら？ その魔導師が、破壊行為に躊躇いが無かったとしたら？ ……発声による魔力強化に頼らずとも、彼女ほどの魔力量ならば、無言でシリウスを放つてもダンシンググリーンフ貫通させることは容易かった。

「存外に強いな。 ……仕方ない、気は引けるが使わせて貰おうか」

「なにをする気なの？」

「……全く、あの紳士は厄介をしてくれる」

「鋭いな。見るに最初から気付いてたか。——リンカー・イグナイ

ト！」

「なっ……！」

「やれやれだぜ……」

——つまり、二人の土俵のどっちに立とうとも、状況は一転することが無かった。そもそも、デバイス使えるということは、デバイスに魔力が込められているのかと仮定した一方、このははアヴァロン・ブルーを扱う彼女の姿を見ながら、嫌な予感に駆られていた。それが今正に現実として起こってしまった。余裕に笑うこののはの内心は、表情に出ている半分も笑えていなかった。二人がかりで挑んで劣勢に大きく傾かないだけでもその資質や強さを語っているのに、突き放すように彼女は更に魔力量を上げる。彼女ほどの魔力量を持った魔導師が三倍近く能力を上昇させる能力を使ったらどれほどになるのか………考えるだけ胃が悪くなるだけだから、二人は考えることを止めた。

「来るよこのは！」

「もう来ているぞ」

「な」

早すぎる。二人の眼から離れたとほとんど同時に、すぐ後ろから声が響いた。

察知した気配に対して、このはは振り返ることなくシルヴァの腕を掴み、ブレイズブースターを発動させ、急速で離脱で凶る。靴から噴射された砲撃によって一振りの行方を誤魔化し、ことなきを得た。ように見えたが、

「大丈夫シルヴァちゃん!？」

「背中を斬られたけど……まだ大丈夫……!？」

「まさか、バリアブレイクまであるなんて……!？」

その一撃は、これまでの戦闘の中で、このはの肝を一番冷やした。振り返って見た光景は、ビットを連結させた大剣状態のアヴァロン・ブルーを握った彼女。一振り確かにオート機能でプロテクションされていたはずなのに、展開していた防御魔法が斬られたのだ。一瞬の入った亀裂を見逃していれば確実に両断されていた。彼女の心情を考えれば、後悔はすれどこの瞬間に対しての躊躇はしていない。

あの見栄えの通り、あの大剣は近接でこそ発揮される武装だ。はつきりと理解したこのはは、彼女と距離を取る。

「逃がすと思うか？」

「シルヴァちゃん!？」

「シリウス……!？」

彼女が展開させた鎖の魔法はシルヴァにを鎖し、雁字搦めに巻き付いてから海面へと叩き付けられる。その片手で、無表情に落涙する彼女は右手の銃剣から魔力の弾丸を放つ。その指先から放たれる蒼い弾丸を纏う雷光の影響で速度は更に強まり、少しうすいさくら色を含んでいることもあってゆらりと踊りを見せ、ダンシンググリーンフと同等以上の火力すらも誇っている。

……幸い、先にこのはが攻撃魔法をぶつけたことで、弾丸の威力も落とされ、全ての攻撃はシールドによって防がれている。それでも、

威力そのものが元から増長されたものである以上、無傷は無理な話だった。

純粋な力量、技巧、速度。覚悟していたにしても、そのどれもが彼女の方が上手だった。特にイグナイトをしている以上、これらで上回るなんて考えるだけ無駄だった。残る部分は、策の一点だけど、それで突破できるのか問われるとそれも怪しかった。シルヴァやこのは以上に、彼女は経験値を有している。どれほどの虚を突いたところで、この状態の彼女相手にダメージを通せるのも至難だった。現実、一向に好転しないから策も通っていないという状況に陥っている。

シルヴァの表情が翳っている中、このはは諦めていなかった。我ながら不思議なことに、明らかな逆境と知りながらも、なにくそと表情はほくそ笑んでいた。細かな話を聞いていない以上、どうやってこんな人に勝利したのかと気にもなったが、この人に勝てたらと思うと、という考えによってこのはは静かに高揚していた。

そんなこのはの心理状態を捉え違った彼女は、無機質に付け加えるように発する。

「驚くことでも無い。リンカー・イグナイトを使わずとも、この状態で魔力と精神状態を高揚させれば彼でもバリアは斬れる」

「なのになに負け続けるあの人はなんなんですかね」

「そう言わないでやるな。彼にすれば、意地を折る方が敗北なのだ」

「紳士ぶった馬鹿の言いそうな台詞ですね」

「全く馬鹿だ。そんな彼だからこそ、似合いのデバイスなのかもしれない。守る為の刃……ふふっ、実に彼らしい。騎士シグナムと違った刃の在り方、彼を誇らしく思うよ」

彼女は、自嘲を含めながらアヴァロン・ブルーに一度眼を向ける。

細かな仕草から気付いた。容赦が無い一方、どこか遠慮をしている節がある。もしくは見縊っているのか……どちらにしても、本気で殺そうとしているのなら、決して会話には応じるはずが無い。そして、当人が気付いているのかは定かでは無いが、その大剣は向けられるどころか疲れたように腕まで下ろされている。

ならば、余地はある。夜天を奔<sup>かき</sup>っていた彩りの弾幕と轟音は、この

はも手を止めることで星空が戻ってきた。

「……さてどうする？ もう終わりにするか？」

「終わりに、したいですね。でも、私達も貴女も死なせやしない」「なぜそう言い切れる？」

「私は明日も明後日も、未来永劫シルヴァちゃんとイチヤイチャしたいですし、あなたも八神家で過ごす予定があるんですから。こんなことしてる場合ですか？」

このは自身、「あつたんでしよう？」などの疑問形や過去形を使わなかったのは、意味があつた。ここが違った過去であることは既に知っている。だからこそ、自分たちが送るこれからを変えることが可能かもしれない、いいや可能にしてみせるとの意地からだった。例え、今は破壊行為に対して躊躇を見せない彼女だとしても、ここでなら救える可能性を持つイレギュラーが多い。不治の病を治したあのデバイスがある以上、闇の書自身の欠陥も治せるかもしれない。

——薄情な部分を上げたが、主な部分を言えばこうだ。リインフォースを助けて、まつさらに翳りの無い彼女も見たい、それだけのことだった。

元いた場所では彼女を見たことも無かつた。並行する二種類の分歧を辿るなんて最高の経験だろう。そう無理矢理に士気を上げ、このはは相手の顔を見直す。

「こんなこと……か。確かにな。だが、私にはこんなことしか出来ないんだ」

「出来ない、だ？ 貴女が一番散々な思いを繰り返しているのに、変えようという気は無いですか!? これ以上の主人に出逢うことが難しいのは、分かっているでしょう!？」

「有るさ！ 有ったとも！ 私だって以前から自分の運命というものに抗ってきたさ！ だが、なにも変わることは無かつた！ お前に分かるのか!? 幾度と望まぬ輪廻を繰り返し、変えたくも変えがたい現実だけが眼の前に広がる景色が！ いくら望んでも無意味と徒勞で終え、破壊だけを続ける！ そんな結果だけが！」

その問い掛けは、当然重いものだった。しかし彼女自身が破壊に身

を寄せるのは本能では無く、惰性と変わらない諦めから来るものと気付いた時、内心でこのはは彼女に対して同情していた——が、それ以上に怒りが上回っていた。仕方ないという理由で奪う彼女は罪悪感で動いていたにせよ、正当化されていい理由にはならない。

彼女が繰り返した悪夢がどれほどのものなのか、当事者以外が測れるはずも無い。凄絶な過去を過ごした人間で無いと返せないだろう。

何よりも、そんな後ろめたい姿勢が気に食わない。

だからこそ、その問い掛けに対しこのはは自分の意思を孕ませ、少し低く返した。

「……分かりませんよ。私はあなたじゃないんですから。だけど、これだけは言えますよ！」

もう一度、デバイスを握るこのははの手に力が戻る。決意していたにしても、改めて彼女の言動に対しての怒りから、更に先、ワールドリーフの先を向ける。

「あなただって分かっているんでしょ!?! はやてさんの様な人と会えるなんて、この先あるかも怪しいって! 本当に一緒にいたいなら、どんなことでもしようとするはずです! 私ならそうする! 絶対そうする! それよりも、小さな少女の未来を『諦観』で奪うなんて自分が赦さない、そんなの死んでも死にきれない!」

「分かり切ったことをまたしろと言うのか!?! 主はやてがいくら優しくにしても、主としての例外を辿れる程特殊じゃない! 手立てなんて」

『もう無理』だとか『出来っこ無い』とか、全部やってから言ってください! やって駄目なら何度でも諦めないで挑戦してください!

子供の頃の夢を捨てたら、人は二度と夢を持ってなくなる! 『それでも』と叫び続ける! あなたは自分自身でもあるヴォルケンリッターに、優しい主の存在を哀しい思い出で済ませろって言うんですか、ずっと哀しみを背負わせるつもりなんですか!?! 嫌な記憶の中に宝石を紛れ込ませても、それはくすんで石ころになるだけです……自分の心に従え! それが出来ないなら死ね!!」

「——」



「一番大切な主だけじゃない、その人の為にとって加担した人間まで殺そうとして……!」 あなたたちを助けようとする人間が、たくさんここにいる! 貴女のためを想って、手を伸ばす人間がいてくれる! こんな機会が、次にあると思うんですか!? 主だとかそんなこともうどうでもいい、信じてくれた相手を裏切るつもりなんですか!?!」

はつきり言ってしまうば、これで首を振るようならこのはは砲撃するつもりだった。

蓄積した魔力量で言えば、最大火力を誇るレゾリューションブラスタ―も放てたが、その魔力量の用途は全く別へと回していた。彼女の魂胆は、その手前の砲撃……エメラルドブラスタ―を分けて放つという策が既に練られていた。強力な砲撃を放ったところで、直撃を期待出来ないほど彼女は素早く、砲撃後の硬直を狙わないほどの馬鹿でも無い。言ってしまうば、下手な博打より案牌を選んでの思案だった。更に言えば、レアスキルの影響で魔力の回復も早いことから、余程の無駄撃ちすら控えているこのはは魔力の残量というのは、まだ余裕の範囲内だった。だからこそ、根本的に砲撃という選択肢すらも頭に入っていた。

一方で、我慢出来ずにシルヴァも手を差し伸べる。シルヴァから見た彼女は、かつての自分に近いものを感じていた。見えないものに手繰られた人形、手探りで助けを求める迷子。鏡を見る感覚とは違い、水面の向こう側を見ているような儚さが、シルヴァを揺らした。

「自分が信じられないと言うなら、はやてさんが信じている友達を信じて下さいっ!」

「主が信じた、友を……?」

「ここには友達も仲間もいます! 全部を過去にする前に、その全部を信じて良いんです! 独りで震える必要なんて無いんです!」

「ヴォルケンリッターの記憶があるのなら、彼女たちが繋いだものがあるのも知っているでしょう? あなたが消そうとしているものは、自分がつくったものもあるんです。無くなることなんて無い、過去も未来も今に繋がってるんです」

「そんなことはどうに知っている! ならばどうすればいいんだ!」

解決方法なんて」

「簡単ですよ」

二人は意図せずとも、彼女に手を伸ばす。兵器として機能しきれず、ただ苦悩と葛藤に溺れる眼前の彼女はなにか——人間以外に見えるだろうか？ そう問われれば、二人は否定出来る。既に戦意が薄まっている彼女の気配を察して、このははデバイスの先を逸らしている

「手を取って下さい。私たちが助けます」

「助ける、だと？ 私がこれまでして来たことを分かっているのか？」  
「分かっています。けど、あなたが死ぬと悲しむ人だっている」

シルヴァの一言が全てだった。管理局側からすれば煙たがられるかもしれないが、実際の彼女と向き合えば彼女が苦難に侵された一人の人間である以上、殺すことは違うようにも思える。

それに、さつきこのはが言ったように、この世界には助かる要素というのも存在する。上手く駆使すれば、彼女どころかヴォルケンリッターやはやてだつて助かるかもしれない。少なくとも、ここにいる魔導師というのは、このはが知っているものとは違うベクトルの馬鹿とお人好しがいるのだ。なんとかなるといふ予感も止まらなかった。

その大きな証拠として、彼女を覆っていた蒼い魔力光がふつと消えた。

「全く……この世界は……お前たちは優しすぎる……そんなことを言われたら、消せなくなるじゃないか……」

「私は自分が困るとすぐ泣きぬかす甘ちゃんはだいつきらいだがよオ！ この人はちがう、自分のしたことを後悔して猛省する最高の人間だぜー！」

「あ、こののはの元気が戻った。でも良いじゃないですか。それがあなたの願いというなら。一度管理局に行きましょう、そうすればリン」

「待ってシルヴァちゃん、その名前を最初に呼んでいいのは、あのからだから」

「……そうだね」

「名前……そうか、そこまで……」

「このはちゃん!」

にこやかな場が訪れたにも関わらず、その空気を変えたのは、なのはのだった。

振り返ったシルヴァが見たのは、なのはとクロノ執務官、ユーノの肩に捕まった怪我の多いフェイトだった。状況が掴めず三人の言葉を待つと、意外な返答がフェイトから聞かされた。

「その人を連れて逃げて! エンヴィがここに来る!」

「え、でも気配なんて」

「違う! 闇の書に取り付く気なんだ! 今すぐに」

ユーノが加えたと同時に、鈍い傷を思い出したように、彼女が呻き声を上げる。左胸を抑え悶えるその仕草は、まるで動悸に反応しているようにすら思えるほどだった。今にも吐瀉しかねないほどの反応、彼女自身以外が、その意図をしることなく、ただ見てしまう。

「な、なにかが……なにかが私の、中に……っ!」

「ま、まさか……!」

「エンヴィが入り込んだ!」

「このは、すぐに闇の書ごと破壊するんだ!」

「こんな隙だらけな時によく言いますよ!」

「私が……消える……消えて……いなく、なる……?」

「ごめんなさい騎士たち、主よ、私は……」

解決したことで既にチャージしていた魔力は、自身とシルヴァの回復にあてがっていた以上、満足に使える魔法はダンシンググリーフだけ。エンヴィごとの破壊となると、この魔法ではあまりに不足だった。シルヴァの方も残った魔力量から強い魔法も使うことは出来ない。

「な、ぐあああああああああああああああああつっ!!」

苦虫を噛んだフェイトは、双刃剣のバルディッシュの先を向けるが、痛苦に苛まれているようなその姿と金切り声によって、躊躇いが出てしまう。

それに、彼女ははやてでもある。細かな理屈や原理は知らないけ

ど、恐らくまだはやては生きているとも感じていた。根拠なんて無い、本当に当てずっぽうな勘だった。

「……なのは、フェイト、このは。ぼくを恨んでくれて構わない」

それだけを言ってから、クロノ執務官は新しいデバイスであるデュランダルを構え、その槍の形状の先端を彼女の左胸へと走らせる。クロノ執務官自身、怒りも闇の書に対して家族を奪われた怒りも少なからずあったし、世界を救うためという正義感もあった。しかし、それ以上に、言葉にした通りの謝意が大きかった。

ある程度このはから聞いた話と違っていても、これは間違いない。最悪の状況だろう。本来生きるはずの人間がいなくなるのだ。そういう意味を含めなくても、なのはたちの友達を殺すのだ、少しも良い気分にはなれなかった。

「ま、待ってクロ——」

「——全く、事を急ぐ連中というのは、こども喧しい」

彼女を知らずとも、その声の変化には誰もが見開いた。

特にこのはとシルヴァにしてみれば、彼女の聞きなれた女声が消え、代わりに流れたのは、最早不快にすら思えるほどの男の声。そして、デュランダルの刺突を片手で掴み、ぐにと笑ったその顔は——  
—紛れもなく、エンヴィキャットウオークそのものだった。

握ったデュランダルごと、クロノ執務官を海面へ投げ捨てる。実際になら剣で串刺しという選択もあったが、エンヴィは望んだ身体を手に入れたという強く誇示したいという欲求が勝り、彼なりに極めて優しく接した。

「見よ！ 下らぬ器を捨てた、この吾の新しい誕生祝いつ！ くはははははははははは！」

「うわっ、ここでまさかの究極生物発言ってひくわー。元から太陽に強い癖にひくわー」

「器を捨てた……ということはアリシアは」

「捨ててきた、と言ったはずだが？ だが気に病む必要は無い。貴様たちはここで死ぬのだからな。あの生意気な蟲たちと同じようにな」「まさか……アルフと正治たちは」

「ああ、あの口煩い男と駄犬なら撃滅してやったとも。なんだ、顔も見ずにここに来たのか？ それなら、どうしてここに？」

「ぼくが教えた。アリシアは局員に頼んで収容して貰っている」

「無駄なことを……と、蟲の始末の前におきたいことがあってな」

蒼い光を帯びたその一瞬で、なのはとシルヴァに詰め寄るエンヴィ。その両手で、バスケットボールを無理に握るように、二人に顔面が手の中に納められている。

「シルヴァちゃん！」

「なのはにないを!？」

「この二人はどうにも面白いと思っただけ。眼を見るに、一度不遇に身を置いていた人間と感じてな」

「二人から離れろっ！」

「どうした？ 足を止めた今が絶好の機会だぞ？ 蟲ごと撃てばそれ

なりは変わるぞ？ 出来ないよなあ？ 蟲には蟲には下らない考えがあるおかげで、動くこともままならない」

「二人にないをするつもり？」

「なに、大それたことじゃない」

捕えられていた二つの身体が、足元から砂粒のように流されて、消えていく。その粒の一つ一つが、飛び去る蛍のように淡さを滲ませ、夜天に溶けることも出来ずに散っていく。

「そ、そんな……消えて……!？」

「このはっ！ このは、助けてっ！」

「そらどうする!?! 邪魔はしなくていいのか!?!」

「た、助けてフェイトちゃん！ ユーノ君！ クロノ君！」

分かりきった問答だった。どう介入しようと、エンヴィは二人を盾として使うことは、誰にも明らかだった。それで手が出せないことも気付いているエンヴィは高笑いしながら——二人を消した。

勿論危害は加える気は無い。このはとフェイトとクロノ執務官が動こうとしたその瞬間、斑の混じったさくら色のバインドによって捕えられる。

「そんなっ！ みんな！」

「今生の別れだぞ！ まだ呼び足りないならもっと叫べ！」

「フェイトちゃん！ ユーノ君！」

「離して！ 一体なにをするの!？」

「蟲の言葉など知らんなあ。おっと」

「あ、あああ………」

「もう時間だ」

二人は光の粒となって、雲散した。涙と悲鳴交じりだった声は消え、気味の悪い静けさが場を支配していた。

「よい趣向だった」満足げにバインドを解いたエンヴィに対し、殺意を込めてこのはは問う。

「……シルヴァちゃんたちをどうしたの？」

「別に。蟲とて過ぎた過去があるだろう？ そこに送ってやっただけだ。ただし、最も望まぬ場だがな」

「どうということだ？」

「なに、もう戻りたくない、戻れない過去を現実とさせて、手を加えただけのことだ。どんな気分だろうなあ、そこで過ぎすほど、元の世界の記憶が薄れていくというのは。この眼で見れないのが惜しまれるものだ」

「プランクトンごときが！ 私に向かって得意顔に解説を入れるんじゃないッ！」

「こ、このは……？」

「煩い蟲め。だがこの機会だ。吾も以前に一杯食わされたのだ。貴様ら、揃ってただで済むと思うな」

「上等！ 祝いになんかくれるつつーなら、てめーの命をもらってやるぜ！」

こののは物騒な台詞を皮切りに、それぞれがデバイスを強く握る。

戦闘中においても程度の碎けた態度を取るこのはにしても、シルヴァを消されたことで怒りしか無かった。おまけに、相手は超性能を誇る相手。油断すれば全滅は免れない。あくまで心を燃やしても頭は冷静に、このはは射殺するようにエンヴィを睨む。

「クロノ、もしかして残った魔導師って」

「来ないところを見ると、ぼくたちだけらしいな」

「一応菜摘さんもいたけど……無事かな」

「さあ、存分に踊れ蟲共。お前たちに来ることは、ただ抗い、奇跡を祈るだけだ。蟲相応の策を弄せ。吾はその一つ一つを、花を摘むようににじり寄ってやろう。そして最後に貴様たちの首を撥ねてから——この世界を消す」

精悍で整った女性の顔は、醜く歪んだ。

この場における管理局魔導師は、このは、フェイト、クロノ執務官、ユーノの四人だけ。有り体に言えば、世界はこの四人に託されてしまった。更に言ってしまうえば、保有したレアスキルや魔力を鑑みると、高敷このはが撃墜されれば、事実上敗北が確定されるとも言える水際だった。

それを自覚したこのはとフェイトたちは、冷静を保つために一度深呼吸し、眼前で緩慢に笑う敵を睨み付けた。

「……………」

そうだ。私はさつきまでこのはたちと一緒に、エンヴィと戦おうとして……

思い出そうと考えを巡らせる中、ばやけた視界が晴れていく。――

――クリアになったもの、映ったものに対して冷たい汗が流れたのが自分でも気付いた。

「シルヴァ、そこでなにをしている？」

「……………え？」

まさか、そんな、有り得ない。その声が聞こえるなんて、あるはずが……………それでも、私はこの声を知っている。

振り返ることも躊躇ってしまう。が、私はそれでも振り返らざるを得なかった。まるで、油の注し忘れたブリキ人形のように、ゆっくり、本当にゆっくりと振り返る。

「……どうやって抜け出したかは知らんが、自分が罰を受けていると自覚しているのか？」

「え、罰……？ なんの話を」

「……自覚どころか反省も無いらしいな。お前はもうしばらく牢に居る必要があるな！ 来いッ！」

「かつ、痛いっ……！ 引つ張らないで！」

「口答えをするな！」

一際不機嫌を漏らしたその人は、まるで野良犬でも持ち上げるように、私の髪を掴み上げては無理矢理引き摺るように歩かせる。

間違いない。この声と自分に利をなさないものに冷酷なこの人は、寸分違わずにアレハンドロという男であり、私を育てた人間だった。

「くうん」

「にやつ！」

ぴちやつと、生温いなが頬に触れる。さつきまで戦闘していたということもあってか、反射的に飛び起きてしまったけど、最初に目の前に映ったものに、驚きを隠せなかった。

「……………アルフさん、じゃない」

「くうん？」

ぱたぱたと尻尾を振っていた……狐。 ……え、狐？ 家に狐って

いなかったよね？ どうして家に狐が？ 個人的に、狐を預かる程の

仲の友達もいないし、もしかしておにーちゃんかおねーちゃんのとっちなのだらうか？ なんにしても、ここでのんびりしてる場合じゃ

……

「おはよーなのは。あれ、どうしたの？ 久遠とケンカ？」

「久遠……？ この狐さんのこと？」

「あぁー……うん、まだ寝惚けてるみたいだね」

おかーさんは至って本気言っているけど、本当に身に覚えが無い。もしかして、うちのペット？ もう一度見てみるけど、やっぱり知ら



ない。……顔に出てしまったせいか、久遠という狐さんはしょんぼりと項垂れてしまった。

「え、なのちゃんが誰とケンカって!？」

「あーもううるさいっ！ おさるは朝からやかましい!」

色々考えているいると、廊下がバタバタと音が響く。大勢が来たのかと思ってしまうほどの足音だけど、多分声を聞くに二人、かもしれない。なんにしても、元気な人がいるのは間違いない。

「って、なーんだ、誰ともケンカしてないじゃん」

「ううん、ケンカはしてないよ。ただ、この子のこと久遠って呼んだりしてるから、気になって」

「なのちゃん、起きたばかりやからやろ。悪い夢でも見てたんちゃう?」

「……………はやてちゃん……………じゃない」

「ぶっ、間違えられてやんの」

「や、やかましいっ！ となると、自己紹介したら眼も覚めるんかな?」

「オレは城島晶じょうしまあきら。晶ちゃんって呼ばれてる方な。で、こっちのカメラが」

「やかましいわおさる! ……こほん。うちは鳳蓮飛ほうれんてい。いつもレンチちゃん言われてる方や。よろしゅーな」

「は、はあ……………」

「って、なにがカメラや! 「誰?」と聞かれるのが怖くて先に自己紹介なんて、卑怯って思わへんか!？」

「う、うるさいなあ。茶目っ気だよ茶目っ気」

「ああもう二人ともお」

本当にこの二人は、どうして仲良くなれないんだろう……折角の休日なのに、朝からケンカしても気分は良くないし、二人の間に入っつかつと離す。

そっか、今日は休日なんだ。折角だし……………いや違う。こうしてる場合じゃない。わたし、行かなくちゃ。のんびりしている暇は無い。

「なのちゃん、大丈夫?」

「顔色悪いで？」

「多分、大丈夫、なのかも……」

おかしい。わたしはなにか忘れようとしている気がする。大事な、すべきことがあるはずなのに、なにかが抜け落ちているという、強い感覚がする。

なのに、心の底で叫んでいるのが、分かる。みんなのところに行かなくちやつて。だけど、『みんな』がなにを指しているのか良く分からないまま、わたしはそのまま頭を抱える。

「しかし、このままでは気に入らん。……そうだな、ユニットとしての姿を変えよう」と

戦闘を始めて五分を過ぎた。しかし、エンヴィの挙動に時折の不安定があったもの、時間が経過するほど身体が馴染んできているのが現状だった。

このはは推理する。稼動限界時間は本当にあるし、魔力の消費加減次第では時間も早まる。しかし、それらが出てくるのはデバイスと寄生した本体との性能の乖離から生まれた——言わば、身体が追いつかないという状態から生まれた不全状態なのかもしれない。軽薄な言い方をすれば、寄生した相手の魔導師ランクが低い人ほど、稼動限界時間が大きいのもかもしれない。

あの日記だけで察することは難しいが、クシヤナの魔導師ランクもそれなりだったのかもしれない。では、その差が高い魔導師ランクというもので埋められたのだとしたら……このはは結論した。今の状態で稼動限界時間を見込まない方が良く。

僅か五分の時間だが、四人のダメージは幾分に抑えられていた。だが、少なくともクロノ執務官が想定していた以上のダメージは負うことになっていった。この中で純粋な戦闘力が低いユーノがまだ離脱していないだけでも幸運だが、それでも満足に動けるのも怪しまれる状態には違いなかった。

その状況の中、このはと並んで傷の小さいエンヴィは、ふむと唸る。瞬間、女性然とした体格が——細身の男性相応に変形していく。その憂いの面が出ていた女性の顔もぎちちと歪み、色香を漂わせる男性の顔へと変貌する。

少なからず、リインフォースⅡという存在を知るこのはが彼女と見比べると、その姿はそのまま彼女のままだが、その体格と顔はまるで男のもの。俗に言えば、闇の書の意味をそのまま男性として顕現させたものと言ってもそう変わらない。

「……マスターユニットの変換は成功か。手間はまだ残っているが、なに、貴様たちを消してからでも問題はあるまい」

「……悉く想定外だな。このは、これは読めたか？」

「本当にやるとは思ってなかったくらいですよ。しかし、あの馬鹿紳士と違って、普通にイケメンですね」

このはの感性で言えば、彼の外見を近しい人物で言えばロックオン・ストラトスに似つかわしい顔だった。なまじ顔の構造が上出来なだけに、甘い言葉の一つをかければだろうが、既に彼の素性が割れている以上エンヴィを敵視している四人にすれば、もう関係の無いことだった。

「さて、二幕としよう。中で蠢く死に損ないを片付けて、手早くこの身体を頂きたいのでな」

「このは！ ユーノを！」

「フェイト、一人で行くな！」

双刃剣のバルディッシュを構えて疾走するフェイトを追従するクロノ執務官。相手は取り込まれたとは言え闇の書。一つ間違えれば危ういのは明白。

だが、このはには二つの確信があった。一つはたった今エンヴィの失言から得たことで確定したが、はやとレインの意思は残っている。アリスアの時と違って意志が強く残っているせいか、戦闘中における挙動も一際おかしいものもあった。だが、それがいつまで保てるかも怪しい。今ではそれほど錆びたような挙動はほとんど見せないのだからあまり望みは薄い。

もう一つは、レインと違って多彩に魔法を使つてこない、ということだった。理由こそいま一つはつきりしないが、どこか嫌がっているようにさえ映ってしまう。魔法を使うことで自身の状況するなにかがある。そこまでは行き着いたもの、ひとつの仮定によって答えは持っている。

どっちにしても、内容問わずの書物から得た膨大な知識や、自身の経験に寄る想像力から手繰ったこのはの推理は、どれも正解だった。事実、エンヴィは必要以上に多くの魔法を使おうともせず、まるで手

持ちのもので凌いでいるような急場の焦燥すらある。

「邪魔だ蟲め」

「くっ、いないのにまたぼくらを振り回すか、あの男は!」

多彩の魔法を使わないにしても、あくまでリインと比較しての話。エンヴィが多くを使わなざるとも、今さっきまで使っていたアヴァロン・ブルーがまた出てくる。振るわれた双刃剣に劣りを見せることなく剣戟を交わし会うどころか、エンヴィの力押しによってフェイトに分が傾くことは無かった。

このははクロノ執務官のぼやきに全面同意しながらも、ユーノの回復にあたる。

——さっきまでのリインには、一摘みほどではあるが躊躇いがあった。ここに残った大事なものがあつたからこそ、自身の有り方を変えたいと少なからず願っていたからこそ、彼女は戦いを奥底で拒否していた。

だが、目の前の男は違う。彼は破壊行為そのものに悦楽を見出している。躊躇いが無い。だからこそ、一番凶器を手にはいけない類の人間が刃物を手にしているものと変わらない。さっきのリインといい、元の持ち主が自分のデバイスが無差別な凶器として振るわれている様を見せたらどんな顔をするのだろうか、なんてことを考えながら、このはは自分の嫁を消してから未だに笑うエンヴィを睨む。

「た、助かったよこのは」

「勘違いしないで下さいよ。私の変わりに面倒背負ってくれる人がいないと大変なので」

「笑顔が怖いよ!?! 冗談だよね!?!」

「ユーノさん。あなたは自分の人生が、貴いと思う? 家族や友達を大切にしてる?」

「誤魔化せてないからね!?!」

「ユーノさん、ふざけてないで二人に援護に行きますよ」

「確かにそうだけど……ああもう、よし行こう!」

言及しようにも場が場だけに、即座に切り上げる他無く、このはとユーノも戦線に入る。

近接でのフェイトに中距離からの援護に回るクロノ執務官に加え、ユーノの支援に中・遠距離のこのはが揃う。しかし、エンヴィには余裕があった。その理由はこのはにとっても予想していたが、実際口に出されると気分の悪い話だった。

「貴様たちはどうやら、一つ失念しているようだな」

「失念、だと？」

「その女は気付いてるようだが、吾の中にはまだあの娘もまだいるぞ？　つまり、吾を吾を殺せば中の女二人も死ぬことになる。死んでも構わんというなら、躊躇いなく来るが良い」

このはが予想した通り、エンヴィは自分の中にいるはやてたちすらも盾にして、戦闘に挑もうとしている。賢い手段とも取れるが、こうもあからさまな外道をしてくれると、清々しさすら感じず、一重に不快なだけだった。

「……外道め」

「憎いか？　嫌にくいか？　忌にくいか？　ならば討ってみるがいい。自分たちの愚かさを棚に上げることしか出来ない性根の甘い蟲風情には、そうやって吼えることしか出来まい」

「ふうん、闇の書を取り込みきれていないのを、笑って誤魔化すしか出来ない自分はどう？　笑っちゃうよねえ、それ慎重じゃなくて臆病なの知ってる？」

「このは、あんまり煽ったら……」

「……苛突く女め、まず貴様から殺してやろう」

「ならば、怒りの臨界点を超えた私とワールドリーフが応えてやる！

行こう！」

『All right』

再びの開戦。海鳴の海上にて二度目の狼煙が上がる。

「——んん」

胸騒ぎのような、乱暴に揺すられたような感覚に襲われた拍子に、はやては眼が覚めた。

はやて自身にとつても不思議な状態だった。意識を覚ました場所は車椅子の上で、簡単に辺りを見渡しても、まるで異世界か怪物の胃袋の中のような、淀々とした景色だけだった。戸惑っていたせいで気付くことに遅れたが、少し眼を伏せただけで、黒を纏った女性が崇めるように膝をつけている。不思議と、彼女に気付いたはやては、そう驚くことは無かったが、対した女性にすれば深刻な状況に急かされていることから、どこか翳りを含んだ声調で問う。

「……我が主よ。今暫く眠り下さい」

懇願——眼の前の彼女は心からの懇願しているのだ。その理由は分からないけど、彼女が向ける視線が裾を握る迷子を想起したことか、はやてはその懇願を聞き入れられることが出来なかった。今眠つてしまえば、彼女はいなくなる。並べるほどの根拠は無いけど、そんな予感を覚えた。

眠りから覚めたから、とも異なる、栓をしていたものが開かれたような感覚に覆われて、はやては経緯を思い出した。そして、不思議と彼女の正体すらも瞬時に気付くなり、迷子の眼の理由にも思い当たった。だからまずは、彼女の願いに対して、首を左右に振った。

「お願いです。どうか再びお休みを、我が主。今の私ではアレは抑えられません」

「アレ？ アレってなに？」

「正体は分かりませんが、デバイスが私を取り込んでいます。ですが、私にそれを退かせることは出来ません。管理者権限も使えない私は無力、我々はただ、消えることを待つしか出来ないのです」

「出来ないって、どうして!？」

「相手が虚数空間の魔力を流し込んでいます。——言ってしまうえば、私の意志を強制的に乗っ取ることが出来るのです」

「そんな……」

「幸いというべきか、ナハトヴァールの消滅を優先させていることで手間を取っているようですが。自我を保つ為に必要以上にページに記された魔法を使わないところを見ると、中々に知恵の回る相手です。だから私たちはもう、どこにも行けず、ここで果てるしか無いの

です」

「……………」

彼女の発した言葉の意味を理解した途端、その心が澱で濁ったのが自分でも分かった。

そして、察しの良いはやてには、彼女が暗にしていた部分すらも読み取ったことで、一層に絶望を濃くさせる。彼女を通して外への通信を行うも、念話は行えない。可能性としては低いが、通信が出来るなら恐らく彼女が既にしていたのかもしれない。

——黒の覆われた視界の奥が、微かに斑色に揺れる姿を二人は気付くことなく、空ろに滲み始めた瞳で無空を見上げた。

「お嬢、大丈夫でゴンスか？」

「お、落ち着くでヤンス！ 息はしてるでヤンス！」

「こ、ここは…………ぐっ！」

「きゅ、急に動くと危ないゴンス！」

……次に眼を覚ますと、私は固いベッドの上だった。

なにか分からず起き上がろうとした直後に、全身に鋭い痛みが走る。視界に入った腕に入ったのは、細い青痣。 ……ああ、これはひよつとしなくても、お父さんに罰を受けた痕だ。でも、どうして鞭を打たれるほどの罰を受けたんだろう？ そこだけが思い出せない。

「流石に今日のダンナは機嫌が悪くて敵わないでゴンス」

「正直今日だけは関わりたくないでヤンス。でも本当に大丈夫でヤンスか？」

「…………うん、もう大丈夫」

「…………お嬢が言うなら信じるでゴンス」

心配ですつと介抱していたのだろう、ゴンスと語尾する大柄で不精な男と、ヤンスと語尾する細い男は、私以上にうろたえている。名前の無い二人は、その語尾からゴンスとヤンスと名乗っているけど、悪い人じゃない。



ヤンスさんは辺りをちらつと見渡ししてから、私に小さく尋ねる。よっぽど聞かれたくない話をするかもしれない。私も少し身乗り出して聞いてみる。

「シルヴァお嬢、本当に覚えなくてヤンスか？」

「なにを？」

「罰を受けた理由でゴンスよ。ずっと身に覚えが無いということと言っていたでゴンスから」

「……うん。覚えてないの」

「まあ、厳密には覚えが無いことでヤンスからねえ」

「なにがあつたの？」

「それが、アレハンドロの旦那の調べていたデバイスの資料を燃やす羽目になったみたいでヤンス」

「元々盗んだデータでゴンスから秘密裏にしていたでゴンスが、管理局魔導師に感付かれて。それで、証拠を消す為に已む無く破棄した、ということだでゴンス……」

「どうしてそれが私への罰に？」

「まず足が付いた原因でお嬢だったらしく。資料を守れなかったのはお前のせいだ、ってことゴンスよ……」

「いくらなんでも理不尽でヤンスよ。お嬢だけがそうなるのも嫌なので、ゴンスも一緒にヤンス」

「デバイスの資料……言われても思い出せないけど、お父さんがあんなに怒っていたから、よっぽど大事なものには違いない。」

—— 思えば、私がこうして線を越えずに踏み止まっていたら、お父さんの部下たちがこうして接してくれるおかげだなんて思う。ほとんど構われることなく、向けられる言葉も表情も全てがただ怖い。だけど、私は言うことを聞かなくちゃいけない。だって、お父さんなんだから。つらいことの方が多いにしても、こうしてお父さん以外のみんなが普通に話をしたり聞いてくれたりしてくれるから、歪まずに済んでいるかもしれない。

「ま、まあ過ぎた話をして仕方ないでヤンス。気分転換でもするヤンス！」

「気分転換つてなにするでゴンス。お嬢は謹慎だつて」

「じゃあ、チエスでもするでヤンス」

「お嬢が強いから却下ゴンス。それよりもカードでも」

「それはゴンスが弱いでヤンス」

「……………」

これで八方塞がりなのか、二人して本気で頭を抱えながら唸っている。二人には悪いにしても、ふふつと笑ってしまったおかげで、心が少し軽くなった。ゴンスさんが私はチエスが強いと言っただけ、正確には私が強いというより、ヤンスさんたちが強くないことが事実だったりする。反応にちよつと困ることに、それが冗談じゃなくて本気で言っていることがまた二人らしいと言えづらいけど。

「シルヴァお嬢はどうしたいでヤンスか？」

「え」

話を振られるとは思っていなかった分、つい肩も必要以上に跳ねさせてしまう。そうは言われても、咄嗟に思い浮かばない。そもそも、謹慎を言い渡されたしまったのだから、外に出たくても出られないし……

でも、妙な感覚を覚えた。どうしてか、窓の向こうで揺れる木に呼ばれたような気がした。そこに人の気配なんて無いのに、なんだか気になって仕方ない。

「あの木まで散歩……は駄目だよね……」

「ふっふっふ、聞いたでヤンスね、ゴンス」

「聞いたでゴンスよ、ヤンス」

「？」

「実はそこで、食べられる野草がたくさんあったでヤンスが、背高な木の果物をシルヴァお嬢にお願ひしたいでヤンス」

「地面はゴンスたちに任せるゴンス」

「で、でも勝手にそんなことしたら……」

「ふっふっふ、このヤンス、言い訳を考えることに関しては随一でヤンスから」

「自分で言うとは最低でゴンスな」

「じ、時間が勿体無いでヤンス！ 十分くらいなら旦那もそこまで気にしないでヤンス！」

なんという出鱈目な言い分……この表現だと、自分たちが連れ出したと言うに違い無い。今までにもあったことにしても、やっぱりこう大事にされると、嬉しくもなる。

時々受けるこの優しさに甘えながら、私は二人の背中を目印に後ろを追う。

「でも、やっぱり今日の旦那は特に怖いでゴンスな」

「今くらいはその話は止めるでヤンス。思い出すと胃が痛くなるでヤンス」

ゴンスさんが言うに、止めに入らなかつたら殺していた勢いがあったらしい。それでも、シルヴァ・アーデという魔導師の必要性を説いたことで、どうにか最悪の事態は避けられたらしい。

それにしても、ここの空気はいい。さつきまでいた寂びた室内の空気が嘘みたいになくなり、スキップしただけで飛べそうなほど、心は軽やかになっていた。空色も穏やかな青で敷き詰められ、足元を見れば、自然な緑色の葉が海のように広がっている。

二人はやはり野草集めに関心が無く、本当に私の気分転換に付き合っている。お父さんへの忠義とは別で、少なからず不満がある部分があるのは時折聞こえる愚痴から伺えた。

「お嬢、どこに行くでヤンスか？」

「散歩なんだから目的地はいらないでゴンスよ」

「確かに」

普通の散歩ならそれで良いと思う。だけど、私はどうしても行く場所があった。

なんだか心に焼きついて離れない、あの木へと歩いていった。近くに来てみると、意外に大きな木でもなく、印象に感じたほどの力強さのようなものはそう無かった。だけど、不思議と一つ通った芯が強そうだなという新しい印象が変わった。

「おお、中々良い木でゴンスね」

「日向ぼっこには打って付けでヤンス」

「……………」

「どうしたでゴンス？」

なんだろう、この緑色に覚えがある。どうして私は、この木から安心感を感じているんだろう。

そんな中、私はその木を見上げながら。そして、震える唇を動かして確かにこう言っていた。

「助けて…」

——ひらり。一枚の葉が、揺れながら頭を掠める。なんだか撫でられたようでこそばゆさもあつたけど、少しも悪い気分はしなかった。頭に乘ったまま離れない葉を手取る。——濁りも汚れも無い、綺麗な緑の木の葉。

——親友になりたいなら、手をつないで、名前をよんで——

「——っ」

「うーん、綺麗でゴンスけどこれは食用じゃ……シルヴァお嬢、どうしたでゴンスか」

ああ、姿は無いのに、こうしてまた私に手を伸ばしてくるんだね。恐らく今の声は幻聴かもしれない。だけど、その声に対して私は、以前と同じように柔らかく、手の平の中の葉を静かに握る。

「木の葉、でヤンスね」

「うん、このは、だよ」

「え？」

そう、私には戻る場所がある。待っている人がいる。だから、ここから離れなくちゃいけない。ここがかつての過去というなら、私は過去に生きていたくない。あの日から動き出した時間の、あの現在みらいを生きていたい。

「二人ともありがとう！」

「は、はあ」

きっかけになってくれた二人には感謝が止まらない。私はもう行かなくちゃ。

だけどその前に、一つだけ、もう一度はつきりと決着を着けたいこ

とがある。きつとそうしないと、私は本当の意味で、過去との折り合いを着けたと言えない気がして——アレハンドロのいる場所まで走る。

折角思い出したこの記憶と気持ちを忘れてたくない。その一心で、手の平のこのはを胸に抱く。大丈夫、今は震えていない。前と違って、憎しみだけであの人と向き合うつもりは無い。

前にも超えることが出来たんだ。二度目が出来ないなんてしたくない。そうすればこのはは私を軽蔑するに決まってる。だから、怖いを感じる前に私はただ、一心不乱に、なにも考えずに、駆ける。

今日は日差しが強い。おかーさんが制帽を渡してくれたおかげでなんとかなっているけど、帽子の鏝から見える先の光景に、どうしても眼を渗ませてしまう。拭うのはこれで二度目。だけど、どうしても視界はぼやけてしまう。

「……………」

これで確かになっちゃった。おとーさんは死んでいた。わたしの記憶が確かなら、おとーさんとおかーさんとお店を繁盛させていたけど、そうじゃなかったみたい。眼の前のお墓が、なによりもはっきりと教えていた。

ここにいるのは、レンちゃんと晶ちゃんだけ。おかーさんたちは店の手伝いがあったって動けないし、おにーちゃんたちもお出かけ。だから、事情を知っている二人の後ろを追ってここまで来たけど……

「その、なのちゃん……大丈夫？」

「大丈夫な訳あらへんよ。自分の親の墓やで？」

「割り切ったとは思ったけど、その、ごめんな」

「ううん、良いの。……レンちゃん、晶ちゃん、わたし長い間夢を見ていたような気がするの」

「夢？」

「うん。なんというか、この町で今以上にいろんな人と友達になれたり、遊んだり、悲しいこともあったけど、それでもみんなでなんとか

した夢」

「素敵な夢やね」

ということとは、ここにいるわたしが現実で、今まで感じていたものが夢になるんだ。でも、どんな夢を見ていたっけ……今ではよく思い出せない。

あくまでただの感覚でしかない。だけど、「もう一人の自分」がいたような感覚がいた覚えはなんとなく残っている。なんだか凄い冒險して、珍しい体験をした。そんな程度の記憶。でも、夢ってそういうものだと思うの。

……なんだろう。そのほとんど覚えていない記憶を、思い出したいな思っている自分がいる。どうしてかなと首を傾げると、なにか慌てたように晶ちゃんはあたふたと手を振る。

「つとと、あんまりここにいと陽に焼けるし、家に帰ってご飯にしよう」

「せやな。おさる、今晚のおつかい任せるで。スーパーみくにや、堺町支店！ 特売の新米と牛乳パックと徳用お味噌、それからミネラルウォーター。うちは先に家で調理するから」

「ちよつと待て！……ここから遠い上になんて量持たせるんだ!? 『力

自慢怪力ロボ』じゃねーんだからよ」

「白玉杏仁、さくらんぼ付きでどうや?」

「仕方ない、それでよしとしよう……」

「うち非力やから、頼りにしてるでー♡」

晶ちゃんとレンチちゃんはちらつとわたしを見ながら、ぐつと親指を立ててみせる。気を使わせちゃったなあ。後でコロッケ買っても良いかも。でも、本当に遠いけど大丈夫なのかな?」

「ああ、なのちゃんは家でゆっくりしていいから。……あああ、こんな時に男手つて欲しくなるなあ」

「無いものねだりはいかに。でも、確かに気軽な男友達というのは欲しいなあ。年上でも良いから、年の近い人が良えかな。師匠とは違った感じな」

「どつちがねだってるんだか……」

「師匠も出かけ言うから、連絡するのも気が引けるし」

「まあいいや。ロードワークと思えば気も楽になる」

おにーちゃん、今日は忍さんとお出かけなのは知っているからか、悩ましく唸る晶ちゃん。うん、わたしでも呼びにくい。

……でもなんだろう。二人の会話該当する気軽な男友達に、心当たりを感じたのは。これもきつと、わたしが見た夢の影響なのかも。きつとわたしが思っている以上の経験をしたのかもしれない。

「つと、こうしちやいられない！ カメ、買い出しはしてやるから、昼食準備しとけよ！ おいしいやつ！」

「言われなくてもするわ。そうそう、スーパーの前に着いたら、一度電話してや」

「え、なんで？」

「買い出しの内容もう一回言うから。おさるの頭じゃ、水しか覚えてないやろうからね」

「……ふん」

「ぎゃー！」

流石に我慢が限界を迎えたからか、晶ちゃんはレンちゃんの足を踏む。思い切りじゃないにしても、暴力は良くない。これは一つ言っておかないと。

「ケンカしないんだよー」

「は、はーい……ほら、電話はするから！ じゃあまた後で！」

これじゃ話が進まないの、レンちゃんが一步進ませる直前にわたしが間に入る。本当になんでこの二人は……

でも、二人はわたしの為に動いてくれている。いつもならもう少し延びるケンカも、わたしを見るなりですぐに止める。二人はやっぱり、優しい友達に他ならない。

口早にしてから晶ちゃんは軽く手を振って、背を向ける。笑顔だったのはきつと、ケンカしてわたしを心配させたくないって思ったからかもしれない。やっぱり、ちらつとわたしを見るものだから、どうしてもそんな風に考えてしまう。

「ごめんねレンちゃん、先に行ってくれても良い？ ……もう少しだ

け、ここにいたいのに」

「……ええよ。そこに友達もいるからね」

「久遠も良いかな？」

「くうん……」

二人に少しだけ無理を言っつて、家に向かつてもらおう。折角ここに来たんだから、面を向かわせたい友達に声をかけない訳にはいかない。明るく振る舞った晶ちゃんとは反対に、レンちゃんと久遠は心配そうに眼を向けてくる。どうにも元気が薄くなったせいで、自分でも分かるほど変な笑顔を浮かべたと思う、一層に心配に表情を曇らせてしまう。けど、それも数秒だけ。「また後でなー」と手を振るレンちゃんは、笑顔だった。久遠も勢いよく尻尾を振ってきたから、わたしもレンちゃんと同じ仕草で返す。だつてわたし、尻尾無いから。

……レンちゃんも久遠も行ってしまった。ここはもう静かになっている。時々強い風が吹くくらいで、生き物の声は聞こえない。

「わたしは笑顔でいるよ。元気にしているからね、アリサちゃん……」  
精一杯の強がりです笑いながら、涙を拭う。

……ひとりぼっち。誰もいない、ひとりぼっち。この外れにあるお墓の下に眠っているおとーさんと友達。だけど、向かい合いからから声をかけることは無い。こんな天気の良い日なのに、なぜか寒く感じるほど、ひとりが怖くなる。どうしてだろう、晶ちゃんもレンちゃんもいて、おかーさんたちもいてみんながいて……悲しいこともあるけど、同じ数だけ明るいこともある。そんな、一つの普通の毎日。

なのに、どうしてこんなに寂しく感じるんだろう……？　こんな時、必ず誰かが隣にいたはず。笑わせようとしてくれた誰かがいたよ  
うな……でも誰だろう……？

ひとりつてこんなに怖いものだったなんて、忘れていたようにさえ思ってしまう……

「にゃー」

ひゅおっと、突然の強い風が巻き上がる。そのせいで被っていた制帽は飛ばされ、タンポポの綿みたいにふわふわ揺れながら、流されていった。



どうしよう、結構な距離を飛んでしまった……見失ったせいでちゃんとした場所が分からないけど、この日差しだしあの帽子は中々のお値段もするから、勿体無く思っ、わたしはひとまず流された方向へと走る。

「わあ……」

探してから十分ほど、ようやく制帽が見つかった。

山道を登りきった先の『立ち入り禁止』の看板がかかったフェンスの先に、ちよんと白い制帽が置かれている。歩きにくい道を通ったから服を汚してしまったけど、見つかって良かった……帰ったら洗濯しなくちゃ。

思わず声をあげたのは、制帽が見つかった喜びもあるけど、少し違う。フェンスの裂け目を潜った先に広がっていた、一面平らな高原。辺りを見渡すと草木のおいもするし、花も咲いている。同じ一人の世界なのに、ここは凄く落ち着く。

「……は、いけない！ 帽子帽子！」

寝転んでみようかという考えが浮かんでしまったけど、それは泣く泣く我慢してから帽子のあった方に眼を向けてみる。

「………はい」

親切な人が差し出した制帽。だけど、ありがとうの言葉出て来なかった。ありがとうを言うという意識すら浮かばなかったほど、眼にしたものに驚きを隠すことが出来なかった。

「……く、クロノ……君……？」

その落ち着いたように見えて儂く揺れる瞳、さらさらな髪、穏やかな表情——元の場所に帰ったと思っていたクロノ君が、そこにいた。

クロノ君もわたしに会えると思っていなかったのか、わたしを見て眼を見開いている。どうしよう、急に顔を合わせるとなにを言おうかつい考えてしまう……「え、ええつと」と唸っていると、先にクロノ君が尋ねた。

「なのは。そのリボン……」

「え？」

なにかおかしかったのかな。気になって髪を括っていたリボンを一度解いてみるけど、なんの変哲も無い、普通の黒いリボンだった。……あれ、いつものじゃないし、そもそもわたしのでもない。これ誰のだろう。指先にぶら下がったリボンを眺めるほど、なにか引っかけりを覚えてしまう。不思議、どこかで見た覚えが……

「ねえ、なのは。僕はこれからひとりごとを言うよ。なんにも無かったら、無視して良いから」

「え、う、うん」

「時空管理局、魔導師、次元断裂、アースラ、森正治さん、森菜摘さん、プレシア・テストロッサ」

——初めて聞いたその単語や人の名前は、なんだか懐かしく思えた。……違う、懐かしくもない。間違いなく知っている。もう少しだけ、喉に引つかかった感覚に覆われながら、クロノ君の言葉をじっくりと待つ。

「月村すずかさん、アリサ・バニングスさん、ユーノ・スクライア、フェイト・テストロッサ——八高輪さん」

「——」

——全部、思い出した。そうだ、ここはわたしのいた世界じゃない。確かわたしはエンヴィに連れて来られて……

……考えようとして、また新しい疑問が浮かんだ。仮にクロノ君がここの世界の人としても、わたしの世界のことを知っているはずがな

い。なのに、こうもはつきりとわたしの世界の単語を並べていく。  
「く、クロノ君は、もしかして……」

「……うん。なのはの思っている通りだよ」

クロノ君は、わたしのよく知っている少し儂い笑顔を浮かべる。

「僕は以前に、なのはたちの世界に来た、あのクロノだよ」

# I N N O C E N C E

「……ジリ貧ね」

「この状態が続けば、このはと言えど危険よ」

「レアスキルを鑑みて、本来なら長期戦はこのはさんの独壇場のはずですが。しかし……このままだと消耗戦ですね」

アースラ艦内のモニターで戦況を見るしか出来ないリンディとプレシアは、苦々しくそう零した。

このはの魔力回復というレアスキルと頭の回転が相まって、魔力の残量は枯渇は愚か半分量すらも減っていない。戦闘に極めて重要な能力を有している彼女の撃墜は可能性として限りなく低いがある問題も浮き彫りになってきていた。

戦闘継続に置ける集中力——このはにそれが欠けている訳では無い。しかし、エンヴィとこのはでは戦闘の際に回す気というものの度合いが違っていた。

端的に、直接的に言えばこうだ。エンヴィは四人を倒せばいい。対してこのはは、自分を含めた四人を守りながら一人を倒さなくてはならない。無機質な結論をしまえば、効率の悪さが原因でこのはは優位に立てずにいた。

「或いは、このは以外の三人が足を引つ張っているとも取れるわね」  
「その言い方は感心しないですね。プレシア、確かに苦しい戦況ですが、悦楽だけで戦いに挑む相手に、我々は負けてはいけませんので、絶対に」

「……そうね。軽率だったわ」

「それに、彼からの妙案に乗るのも良いでしょう」

あくまで自分たちが魔導師であり、生きている人間の代表として抵抗している以上、退く訳にはいかない。プレシアの言ったことが事実だろうと、一つの目的の為に集まった仲間には違いない。こちらは覚悟を背負って戦っている。それを持たない相手に負けることは許され

ないし、認める訳にはいかない。ことこの戦闘における敗北とは、在り方の全否定という意味合いが濃く込められていることを、二人は意識していた。

一方、ある案を思いついていた。厳密には正治からの伝言だが、リンデイの口にした彼は、紛れもなく八高輪をさしていた。その輪のさした妙案とは……正直分かっていない。あくまで、アースラの停留地点を確認された正治から報告を受けたことがきっかけで、既にヒントは得ている。提督を務めるだけの頭の回転も速い彼女は、それだけの情報である行為に移行していた。

だが、その前にすべきことがある。それを現地魔導師に伝えなくてはいけない。無論勝手にいなくなられるのも迷惑になるため、リンデイはエイミイに視線で訴える。

「現地の全魔導師に通達します、これよりアースラの停留地点を、地球外から地球外世界の虚数空間へと変更します！　そこへエンヴィを転送出来れば、虚数魔力を無効化しつつ再生も防いで完全破壊が可能となります！　なんとしても動きを止めてから、転送を試みて下さい。新たな座標を各デバイスへと送信します！」

言われずとも、エイミイは正確に伝える。現地にいない自分たちが「頑張り」とも「武運長久を」と口にすれば軽くなる気がして、一瞬だけ詰まらせてからそれらの言葉を飲み込んだ。

「さて」リンデイは拳の上に顎を乗せて思案する。彼の考えは分かった、だからこれから手立てを揃える為に実行する。だからこそ、ある疑問が離れずにいた。

「あとは転送するだけ……通用すると良いのですが」「リンデイ、問題はそこじゃないわ。どうやって来るかが問題なのよ」「ですから転送魔法が通じるか」

「そうじゃないのよ。……そうね、言い方が悪かったわ」  
微かにプレシアの表情が歪む。怒りの色は一切無い代わりに、一握りほどの苦悶を浮かべながら、小さな声を向けた。

「あれ間違いない諦めの悪い性分よ。足掻かないとは思えない。仮に転送出来たとして、別の姿で来ることも想定するべきよ」

「……………」

「ッ！ ユーノ君が撃墜されました！」

「なんですって!？」

「展開していた結界魔法も解除されます！」

秒ごとに切り替わる戦地の空気。天秤の傾きは、芳しくない。

――  
仮に僕が墜とされた時は、回復せずに放置してほしい。回復に回す魔力や時間を他にあてるべきだ。かといって、ギリギリまで力になるから。

――それは、戦闘中にユーノ自身から発せられたものだった。後衛向きであることは自他の共有した認識であるにしても、虚数魔力の影響でバインドの効力も薄く、まず根本的に捕えることも困難だった。仮に捕縛したところで時間が短く、更には精神内に取り込んでいくというはやと闇の書の意志まで盾にして臨戦している。つまり、否応に手心を加えざるを得ない状況を作り出されているせいで、攻勢に出づらいつという現状を維持されていた。その奮戦も空しく、ユーノはこの戦況より退場させられる結果を押し付けられてしまった。

その中、一人だけ覚悟を決めた魔導師がいる。彼はその槍状のデバイスを突き立てようと先を伸ばすが、エンヴィは綽々と身を翻して回避する。

「クロノ、なにを!？」

「これ以上彼女たちを庇ってられない！ こんなやり方を続けければ、先にこっちの身が保たなくなるぞ！」

「だけど……………」

「だけどじゃない！ 奇跡が起こらない限り、彼女は絶対助からないんだ！」

クロノ執務管自身、奥歯を噛むほど嫌な言葉だった。任務優先にしても、救えるものは全て救いたいと願う一人。しかし、救うには自分たちの手や力が必要になってくる。それを失えば元も子も無い。ゆ

えに、八高輪とは異なるが自分の生存を優先させるとこも厭わない彼は、鼓舞させるつもりで叫んだ。

フェイトもこのはも、その意図は充分に汲めていた。このまま状況を引きずれば持久戦はただの消耗戦になり、最悪逃げるタイミングすら失って全滅する。そういうことだった。

「喧しい蟲共め。吾の気分が害せぬ内に死んで貰いたいものだがな。尤も、その女はただでは死なさんがな」

「バイセクシャルデバイスに負ける私か！」

——このはとフェイトは知らずして、覚悟を決めた。既にアースラからの転移先も把握している。だからフェイトは、このはより先に自分の思惑に身体を動かした。

「聞こえるエンヴィイ!? 私の名前はフェイト・テスタロッサ! この身体が欲しいなら、抵抗はしない!」

「な、フェイト!」

「……ほう」

念話はせずとも、視線だけで分かった。フェイトははやてを助ける為の道ずれを買って出たのだ。動揺したクロノ執務管を裏拳で吹き飛ばしてから、エンヴィイはその端正な顔を蛇のように歪ませながら、フェイトに視線を向ける。

「殊勝な意気だな。どうやら他意は無いと見えるが?」

「私はどうなろうと構わない! だから、はやてを解放して!」

「ふむ成程。貴様の資質がこの眼に適っているのは事実だ。だから採点を下そう——失せろ」

「フェイト!」

ほとんど無挙動。ノーモーション 大した時間をかけることなく、エンヴィイの手の平から蒼い雷光を纏った斑色のデイバインバスターが放射される。同じ直撃にしても、クロノ執務官は庇うためにフェイトを突き飛ばし、その光の中に閉じ込められる。直撃を免れたにしても、余波を受けたフェイトは元より受けたダメージの蓄積も重なったことで、意識を絶たれるには充分な一撃だった。

図らずもこのはは、今も続く戦闘の時間からエンヴィイの所持してい

るレアスキルも概ね把握してきているが、やはりチャージ時間短縮だけでは無いことも理解出来た。が、それらを知りえたのは、フェイトとクロノ執務官が黒いカーテンのように広がる海面に落ちていつてからだった。

「思惑が外れたな女。生憎だが、この身体では貴様は比肩にもならないのでな。だが、スピアとして吾の足元に継ることを許そう。おっと、まだ息があればだがな」

「なんで結局私だけになってしまふのよ……ああもうムカつく！」

「なんだ、使えぬ蟲に憤りか？」

「使えない？ 馬鹿言うな馬鹿。みんなして他人の為に動いてしまつて、それで墜とされるのが頭に来るんです！ 頭に來ますよ！」

「二度言うほどか。だが、貴様は賢いぞ。利他的に動けば返つて失うものだ。あの蟲たちのようにな」

「あの蟲のように……？ クリリンのことか……クリリンのことかあーっ!!」

「どの蟲のことかは知らんが、喧しいほど舌の回る女だ。舌を引き抜いて臓物の底まで租借してやる」

「ふん、私の舌は恋人に絡めるためだけのものなんだ！」

ここでこののはは、嫌な予感というものを遠くから聞こえた足音のように気づつてしまった。なにせ相手は、自分と同じレアスキルまで所持していることまで分かつてしまったのだ。魔力が一向に減る気配が無い理由を、魔力使用量が軽減されているか回復しているかで迷っていたが、躊躇なく砲撃や力押しまでしてきた以上、後者であることが確定されていた。更に言えば、両方を兼ね備えていることまで把握出来たことで、うっすらに頬の冷や汗が一筋流れる。

——基本脳筋だが、自分にあらゆる能力を付加させた魔導師。それが、こののがエンヴィに下した評だった。

粗方ではあるが、自分と同じ能力持ちと戦うことは夢にも思っていなかったこののはにとっては、完全に未知の領域だった。加えて、味方や増援もいない。ここで自分が倒れれば全てが終わる。練度の高い魔導師だろうと、これほどの重圧を受ければ、動くこともままならな



いのは明白だろう。

が、このは違った。自分が受けている圧も理解しつつも、ある一つの理由によって支えられていた。もう一度、自分の愛する人に会うという、単純で明快な理由。その為に目の前で歪めた笑みを浮かべる腐った美男子を吹き飛ばす算段を巡らせる。数分前に彼女に諦めるなど言った手前、殊更に鼓舞させる。

「下らんな。まるで低俗、まるで下品な思想だな。汚れた身体など吾には不要だ」

「お前は必ずぶつ殺す。絶対ぶつ殺す」

少し特殊であろうと、このはは自分の一途な純情を踏み躪られたことをきっかけに、年端相応の少女がしてはいけない顔を浮かべる。少なくとも輪がその顔を見れば、幼子に持つ無垢な印象は瞬時に瓦解するか、心的外傷を受けるほどの愛想を浮かべている。

——暴言をしたにしても、まだ辛うじて、一握りの希望は握られている。脳内はフル回転、目的は二人の救出と勝利。本当に危険な意気の二歩手前まで粘ってやると、このはは決起する。

「シルヴァか、もう戻ったのか」

「アレハンドロ。私はもう、あなたの人形に戻らない」

再び向かい合ったその人の印象は、あの時と少し変わっていない。関心の薄い視線と表情は、改めて見ると気分の悪いものだった。人と向き合っているというより、まるで水槽の外から覗かれているような無機質なもの。自分がどう見られてるのか考えるだけで寒さを覚えるほどに、無表情な瞳だった。

……その瞳が数秒だけ、意外そうに見開かれた。私の言葉のなにに反応したのか分からないけど、アレハンドロは鼻を鳴らしながら椅子にかける。

「……そうか。思い出したのか」

「思い出した……？ まさか知っていたの!？」

「ああ、全部知っていたさ。ここが有り得ない空間なのも知っているし、俺の最期もはつきり覚えている。尤も、俺以外は認知していないようだがな」

「……どうして私を外に出したの？ 助けようとしたの？」

「お前を助ける？ 自惚れるなよ」

自惚れるな。知りえる口調と照らし合わせると、それは誤魔化しではなく、本音の響き方をしていた。呆れたようにまた鼻を鳴らしながら、アレハンドロは腕を組む。

「むしろどんな奇跡が起きたのかと思ったくらいだ。なにをした？」

「私はなにもしてないよ。このはが思い出させてくれただけ」

「このは……お前を助けようとしたあのガキか。まさかそいつまでここにいるのか？」

「ううん。だけど、ここにいます」

広げた手の平の中で木の葉は、揺れることもなく、静かに佇んでいる。背中を押すような動きは無い。だけど、らしいなって感じてしまった。後は私自身の問題だからと言いたげに、静かに見守っている。

……そうだね。背中はとつくに押された。ここからは私が歩かなくちゃ。この男に対する感情が忌むべきものにしても、ただの憎しみだけで終わらせたくない。私は変わりたい。

「……つくづく目障りなガキだ。お前が思い出さなければ、あの時と同じように使ってやったが……もういい。俺に従えない人形に用は無い。俺がいらないうちにさっさと」

「……ありがとうございます」

「……なんだと？」背を向けて去ろうとするその間際、私は頭を下げてそう言った。彼自身、今の私が快く思っていないことを知っているからこそその行為だっただけに、よっぽど意外だったのかもしれない。だけど、この一言は本心であり、心からの言葉だった。

「……あなたのこと許す気は無いし、あなたに好かれたいとも思いません。……だけど、私が強くなれたのは私だけの力じゃない。あなたと、ここにいるみんなのおかげでもあります。みんなのおかげ

で私は強くなれたし、誰かの力になれています。それには感謝しています」

「……………」

そうして過去を受けられなくちゃいけない。そうしないと、私はきつと本当の意味で前に進めない気がする。自分の出生や育ちの経緯を知れば、この男を到底許すことは出来ない。だけど、こうして強くなれたおかげでこのはと出会えたとし、誰かの為に戦うことも出来る。

私は、純粋な意味でこのはと向き合い、横に並び、背中を預けられる人間でありたい。だから、後ろめたいものはここで注ぎ落として、シルヴァ・アーデの人生の一部というものを受け入れたい。悪い偶然が重なったにしても、力を強さをくれた原点は、紛れも無くこの人なのだから……

「…………アレハンドロ。私はあなたから貰った力で人を守る。あなたの意思でじゃない、私の意志で。一人のシルヴァ・アーデとして考えて、決めて、走るから」

綺麗なことを言っても、これが私にとっての相互理解。許容と拒絶をはつきりさせること。なにも良いことだけを分かち合うだけが「分かち合うこと」じゃない。あくまで本音を分かち合うことに意味があるとと思っている。だから私は、今の自分の心情を包み隠さず伝えた。

残りのはアレハンドロの返答だけ。互いに本音を言い合えなければ相互にならない。私は、凍ったような空気の中息を吞んで待つ。そんな私の小さな期待を裏切るように、アレハンドロはまた振り返って奥へと歩いていく。

「……………まさか、人形だったやつにこうまで言われるとはな。」

……………そこまで言うならやればいい。好きに生きて、勝手に死ぬ。どう言ったところで聞く耳もたんだらうからな」

「……………ありがとう」

「黙って消えろ。…………顔を合わせるのはいこれつきりだ、もう顔を見せるな」

「…………うん」

「…………シルヴァ、一つだけ約束を守れ」

足取りを進める中、背中を向けたままアレハンドロは、その一言の為に足を止めた。

「……負けるなよ。俺の沽券とお前の目的に関わるからな。いいな？」

「…うん！」

「こつちの話は済んだ。さっさと失せろ」

また進めた足は次第に、身体ごと暗闇の奥へと溶けていった。大袈裟に打った舌の音を最後に、アレハンドロは影も形も名残も表さなくなつた。本当に顔を見ないつまりのようだ。

だけど、私たちならそれでいいと納得してしまった。互いに本音は言い合つた。アレハンドロの約束の真意は分からないけど、湾曲的に背中を押されたように聞こえたのは、私の願望めいたものがあつたからかもしれない。自分でも分かっていないけど、きつと、あの人から一度くらいは「頑張れ」「よくやった」って言われたかつたことがあるから……

だけど、もういい。これでもう蟠りは無い。言いたいことは言い合えた。別れもさよならも、これで済ませた。そして、私は過去を背にして歩き始めくちやいけな。ここは今の私がいるべき世界じゃないから。

「——行こう。私たちの本当のこれからを始めなくちや、だよな？」

このは「

私が生きるべき世界で待つてる彼女を待たせちやいけな。だから私は、氷結を纏つた刃で文字通りに空間を……未来へ繋がる虚空の宙を裂いて、向こう側へと潜つて行つた。

「でも、どうやってここに……？ いや、この聞き方は違うね。なぜ僕がここに？」

「そう言われても、なのはも分からない……」

「ここを知らないのがどうして……なのは、記憶以外に僕に関わ

るものはなにかある……?」

記憶以外のもの聞かれても、わたしにはそれらしい道具や持ち物なんて持ってない。さすがに戦いになることも考えられていたから、道具らしい道具も当然持っていないし、身に覚えが……

「……もしかして」

「心当たりがあるの?」

「うん。……これ」

「それは……S2U? いや、少し違う」

「S4Uって言うの。クロノ君のデバイスに私のデバイスを移植させたの」

「SONG FOR YOU、か。いい名前だね。……けど納得し

た。S2Uをベースにしていたから僕との記憶も共有し、それまでも拾ってこの世界に来たんだ。……元は正治さんが一から造ったデ

バイスだったにしても、相当精巧に出来たものだね。この世界どころか、僕らの想い出まで知っていないと出来ないことだ」

「……ねえクロノ君、この世界つてもしかして」

「僕が本来いた世界だよ」

本当に今更だけど、クロノが違う世界の人なんだと理解してしまった。つまり、わたしが知らなかったレンちゃんと晶ちゃんも、この世界の人ということになってしまふ。そして、わたしはその二人を知っている。似ているようで違う世界だと深く知ってしまうと、悲しい気分になってしまった。

——だって、ここはわたしの世界じゃないから。元の世界では、あの二人はいない。そしておとーさんもない。どちらが正しい世界なのかなんて分からないけど、なのは少なくとも、なのは世界で生きてきた。フェイトちゃんもおとーさんもいて、八高さんもいる。そして、はやてちゃんという新しい友達もいる。……晶ちゃんとレンちゃんの二人と別れることはつらいけど、わたしは帰らないといけない。

「自分の世界のことまで知ってるようだから、もう大丈夫だね。なのは、君はもう戻るんだ。これ以上ここにはいけない」

「……ねえ、クロノ君はどうなるの?」

「……元々この世界は、なのはとS2Uの記憶から抽出された世界だ。言うなれば夢の中と同じ。……だから、僕もいなくなる」

「そんな……! また出逢えたのに……!」

「そんな顔しないで。僕はまた逢えたことが、嬉しかったから……こうして話せただけでも充分な奇跡だからね。それに、君を知ってる僕がいるということは、なのはは僕のことを忘れなかったって証だから……それだけでも、僕は嬉しいから」

「うつ、つうう……」

夢の中と同じ……はつきり言えば、確かにこの世界はそうなってしまう。だけど、こうしてわたしと同じ記憶を共有出来ているクロノ君は、紛れもなく夢じゃない。夢にしたくない。だけど、どうしようも無い。

……クロノ君は、わたしを暖めるようにそつと手を握る。別に寒くは無かったはずなのに、視界を滲ませながら身体が震えていたからかもしれない。……握られた手から感じる温度は、夢とは言いづらいほどの人肌の温度があった。クロノ君は生きている。だけど、同じ道を歩くことは出来ない。やっぱりその現実が、頭の中でぐるぐる回るばかりだった。

「……泣かないでなのは。僕がいるからという理由で、ここに残っちゃいけない。なのはの大事な思い出、ちゃんと持っていなきや……」

「そうだけど……そうだけど……!」

「僕がいなくても大丈夫だよ。向こうのみんなが助けてくれるし、なのはの力になる人だっている。僕一人の為に、友達や家族を悲しませるのはいけない……」

「つ……! でもわたし、クロノ君と」

「僕だって、なのはと一緒にいたいよ!」

途端に、物静かに、穏やかな声調を保っていたクロノ君の声が、珍しくしゃがれた。その顔付きも同じくらいに、きつとわたしと同じくらい困ったみたいに、頭を抱えている。

……その一声をあげて、わたしの顔を一度見てからクロノ君はまた落ち着いた。怖がらせないようにふうつと息を吐いてから、もう一度優しい瞳を向ける。

「……だけど、僕となのは一緒にいられない。言葉通り、住む世界が違うんだ。……それでも、なのはが戻らないって言うなら」

言いながら、クロノ君はバリアジャケットを纏う。手にされているもう一つのS2Uが、強く握られているのが分かる。表情だけを見れば、ぐつと握っていることにも気づかないほど、痛々しい表情から告げられた。

「僕は、無理にでもなのはを元の世界に戻すから。幸い、向こうの世界のことは覚えているからね」

「駄目だよ！ クロノ君も魔法が使えるなら、一緒に戻ることを望んでよ!? ここが夢の中だっていうなら、クロノ君が生きている現実に戻ろうよ!?!」

「向こうの世界を渡れる可能性は、無いことは無いんだ」

「！ それなら」

「だけど、危険の方が遥かに多いんだ……！ 僕の記憶を魔力に変換しても僕はきつとなのはを覚えていないし、最悪の場合、死んでしまう。仮に奇跡が起きて僕が無事に渡れたとしても、また以前のように次元への影響を与えるかもしれない。無理な話だったんだ」

「だ、大丈夫だよ。わたし、魔力凄いつて言われたこともあるから、二人ですれば」

「なのは一人だけなら問題は無いんだ！ だけど、僕を巻き込めばあの世界の人も、連れて行くこうとするのはが一番危ないんだ！ 願うことの大きさ次第では、術者が死ぬことだってあるのに……!! なのは一人で戻るべきだっていうのが、どうして分かってくれないんだ!?!」

「じゃあ——クロノ君と一緒に戻りたいって言うわたしの気持ちを、なんで分かってくれないの!?!」

「……………」

自分でもある程度分かっている部分だけど、わたしはあんまり我が

仮を言わない性格をしていると思う。だけど、気付いたら声をあげて、力の限りそう言っていた。

こうしている間にも、フェイトちゃんたちやこのはちゃんたちが危ないのは分かっている。だけど、次が無いこの時間の中で、気持ちを言わないと後悔しそうで嫌だった。

大声を出したせいとか、なんだか変に落ち着いていた。うん、今なら言いたいことはちゃんとと言える。手の中の歌を閉じ込めながら、静かにクロノくんへ声を向ける。

「……大丈夫、信じよう？ ここにはわたしとS4UとS2Uもいる。みんなが願えば、叶わない願いなんて無いと思うから」

「……普通はそう言えないよ」

「きつと、近くににいるあの人の影響、かも」

「なるほど」

本当に叶うかも分からない。だけど、八高さんは自分の理想論を貫こうと頑張っている。無茶をすることにはどうしても反対はするけど、思いを曲げたくないとしているあの姿勢は、本当に凄いつて思える。

だから、わたしもまだ諦めない。———この世界での記憶も共有したことで思い出したことがある。

「……クロノ君、可能性はあるかもしれない。上手くいくかは分からないけど、きつと出来る気がする。だけど、一つだけお願いして良い？」

「なに？」

「わたしとS4Uに、力を貸して」

「……勿論」

———経緯は違うけど、元の世界で手にしたレイジングハートは、この世界のものと同じものかもしれない。不思議とその可能性があった。わたしの思うように形を変えてきたそのデバイス、能力、みんながいうところのレアスキル。どれも、私がそうだったら良いなという願いから生まれたもの……ただの偶然と言えばそれまでかもしれないけど、信じられる要因には間違いない。



この世界でのリンディさんが言っていた。レイジングハートはわたしの願いを叶える力があるって。そして、クロノ君のデバイスにその力も移植させているこのS4U。クロノ君の魔法で力を増幅させて、二人で戻ることを願えばひよつとしたら……

わたしの考えていることに気付いたのかもしれない。クロノ君は、ふつと柔らかく笑んでから、優しく抱き寄せてS2Uを掲げる。

「……僕は、戻りたい。みんながいたあの場所に、戻りたい……」

「……なのも、クロノ君と一緒に戻りたい」

「……うん」

わたしが願うことは二つだけ。とつてもシンプルな願い。――

――クロノ君と一緒に、なにも起きずにあの世界に戻ることに。そんな子どもじみた願いを、心から強く願う。

自分になにが起きるか分からない。だけど、わたし一人の力で願いを叶えるんじゃない。S42の力を借りて、S2Uに助けられながら、クロノ君に支えてもらう。そうしてわたしたちで奇跡を起こそうしているから大丈夫のはず。

――なのはが強く願ったから出来たことだ。なのはだから出来たことだ。なのはには出来る力がある――半年前、わたしが魔法少女を続けようと思えた八高さんの言葉がよぎったことで、不思議と不安が無くなった。これで間違えてしまっても、わたしは後悔しない。自分を信じきったなら結果ならなにがあっても受け止めよう。頭の中で響いた言葉に後押しされて、S2Uと並ぶように掲げながら呪文を唱える。

「……リリカル、マジカル……おねがい、叶ってっ!」

みんなの輪の中にクロノ君を交えた映像――そんな何気ない日常の風景を想像しながら、私は少しの疑いを持たずに奇跡を願う――

「ちい、しつこい蟲め。いい加減に消えろ！」

このはとエンヴィの戦闘の状況が少しだけ変わっていた。純粹な一対一から、正治が加わったことで傾きは不利になることは無くなった。だが、個人的なこのはの心情で言えば、ある種厄介な状態になったとも言えるものだった。

正治には躊躇いが無い。世界を救う為に、はやてたちを犠牲にしても倒すという心構えは、間違いじゃない。だが、少なからず顔見知りの相手がいることも分かっている、正治は破壊行動に乗り出していた。はやてたちとの交友関係が浅いことも重なって、彼女の重要性に眼が届いていない。それが彼を付き動かしている大きな要因だった。「クソ！ そつちこそいい加減にバラバラになれ！」

「無駄だ！ 既に防衛プログラムもほぼ手中に収め、既に馴染み始めているぞ！ 後は中の女二人を取り込むだけだ！」

だからなんだと返答するように、正治は緑の照射を放つ。並の砲撃魔法と比類すれば細身の照射撃魔法だが、魔力を凝縮させた一撃は、シールドを貫通させるには充分なほどのものが込められている。ラウンドシールドでも展開させない限り、結果的に突破されるほど内包された一撃。

無論、その程度の攻撃というものを、エンヴィは幾度となく受けている。正治が強めに魔力を込めて撃った魔法は、エンヴィにとっては強弱に関わらず破られることは無いと自負している部分があった。やはり虚数魔力の存在こそが彼の自身の根幹となり、強さを明示していることから、回避という選択肢を除外しシールドを展開させるために、手の平を向ける。

そこで、ある大きな異変が起きた。この突如起きた異変は、このはにしても想定を超えた現象に他ならず、見開くほどの光景だった。その前触れなく起こったものの眼の当たりにしたこと、一瞬にしても思考が停止させられることになる。

「なんだと!？」

展開したシールドには、斑色の淀みが消えてなくなっていたのだ。立ち会った三人が呆然と竦むにしても、想定外を叫んだエンヴィこそが、最も驚愕に表情を歪めているほどだった。

受け止めた照射の威力の強さは知っている。だからこそ、エンヴィは本能的にいなすことで難を逃れる。海面に逸らされた照射砲撃の爆ぜ、一面一帯に飛沫をあげさせる。場の魔導師は水滴を浴びるも、疑問が晴れていないせいで拭う仕草すらも遅れて行うほどだった。特にエンヴィは、拭う仕草すらすることなく、怪訝と怒髪の混ざった表情をこのはに向ける。

「なにをした貴様ら!？」

事態は誰にも把握できていない。正治は反射的に彼女に眼を向けるも、当の彼女すらも彼を見ていたほどに、理解を超えた現象が起きていた。

とにかく、起こったことをそのまま鵜呑みにするならば、こうとしか説明出来なかった。

虚数魔力の反応が、なぜか消えてなくなった。

「……………わたしな、ずっと言いたかったがあったんよ」

はやては、自分にしがみついたまま離れない女性に対して、優しく頭を撫でながら、小さく声を向けた。はやて自身、恐怖が無い訳じゃない。だけど、恐怖に襲われることは病気の影響によって幾度と遭遇していることで不思議な慣れはあった。もうひとつ理由を重ねれば、自分が不安にすれば眼前の女性は自分以上に肩を震わせるかもしれないという、理由のない根拠がそう動かしていた。

「あなたもシグナムたちと同じなら、きつと、本当は争い事は望んでいないんよね?」

「……………」

「前から気についてはいたんや。確かに悪いことをたくさんしてきたかもしれない。だけど、わたしがお願いしただけで悪いこともしなくなったし、八高さんとも楽しく過ごしていた。なのに闇の書と呼ばれていることがおかしいなって思っていた。だからね、少なくともわたしは、闇の書とか呪われた書物だとか、そんな名前で呼びたくない。結果的な話やけど、おかげであの人にも出会えたし、楽しい思いもたくさんしたと思う」

「あ、主……」

既に斑色の侵食は多分に進んでいた。四分と経たないうちに二人を飲み込めるほどの距離まで、斑は溶けた泥流のように近付いてきていた。はやても彼女も、出来る限りのことはしたが、虚数魔力によつて全て阻まれてしまう。管理者権限へのアクセスから強制停止も行ったが、結果は変わらない。

互いに終わりが近いことは、分かっている。だから敢えて、極力明るい話や楽しい話題をしたりして、場と自分の心情を誤魔化していた。

……執り行われているのは最後の話題。これが終われば二人は、痛みや恐怖を感じたくない為に、意識を沈ませようと示し合わせている。既にたくさん話し合つたし、二人は分かり合っている。だからはやては、彼女の濡れ始めた目尻を拭いながら、努めて明朗を演じていた。

「まったく反対の意味を付けようと思ったんや。祝福のエール、幸運の追い風——リインフォース。そう呼びたかつたんや」

「リイン、フォース……それが、私の名前……なのですか？」

「うん。……最後に言えて良かった。もつとあなたを理解する人が多かつたけど、わたしだけでごめんな？」

「そんな……！ 私たちはまだ——」

……そこで、二人は形のある違和感に襲われた。それこそ、蝕むように流れていた斑の泥が、漠然と消えたのだ。魔導師でないはやてにしても、眼にはつきり映っていた泥がまばたきの間に消えたことには疑問を覚えざるをえない。なにかの幻かと疑って辺りを見渡すも、本

当になにも無い。

「……一体、なにがどうなったんや……？」

「これは……防衛プログラムから分離されただけではなく、管理者権限が主に譲渡されている……？」

「わ、わたしに!?! どうして!?!」

「理由は分かりませんが、外部からの影響のようです」

「誰かは知らないけど、感謝せなね……!?! けど、その前に一つやっておかんと」

経緯を考えても、閉じ込められていた自分たちには理解出来様もないと割り切って、二人は甘んじて抜き出ることを選択した。

「ただ、それだけじゃいけない。今のうちにおきたいことがある。それをしないでみんなと会うのは少し違うかもと考えながら、なんとか冷静さを取り戻し、本を読み上げるように、淀みなく権限を行使した。」

はやての周囲には、四つの色彩の球体がふわりと揺れる。次の言葉を待つように、ただ揺れて待つ。

はやての声からは恐怖は薄まっている。少しばかりの不安はあっても、一人じゃないことで大きな影響を与えている。唱える言葉にも乱れは無く紡がれる。

「——管理者権限発動、守護騎士システム修復。——行こう、わたしの騎士たち」

——はやては無意識に笑んでいた。ごく一瞬だけ、四人の家族に加えてリインフォース、そして彼を招いた食事の風景という、今の場に相応しくない画を想像する。リインフォースとの会話で外された話題だが、今のはやてには家に帰ったらすることが出来てしまった。その為に、はやてたちは開けた光へ向かう。

「菜摘め、とんでもないことを思い付いたもんだな」

「残念……が、主でこ、案は思……ぬよ。状況は分か……が、虚数魔力、消滅したとなれ……ば、この手が最、善……」

合流した菜摘によって、闇の書とエンヴィを切り離したマトリヨシカによって、事態は更に好転へと向かっていった。切れ切れの音声繋がるマトリヨシカの状態は、既に虚数魔力の一撃を受けていたことで、損害の大きさを如実に表していた。同じく、菜摘の傷も塞がりきつてないにしても、戦闘出来ないほどのものでもない。眼光は鈍さを見せることなく、エンヴィに向けられる。

「菜摘、自称紳士はどうした？」

「ジブンに先に行けって。魔力を節約しろってことで、なにもせずに来たっす」

「流石、あの馬鹿紳士なら言いそう——」

こののがふんと鼻息を鳴らしたと同時に、エンヴィの身体が雷に打たれた……否、爆ぜたように内から光を溢れさせる。前兆も無く光が爆ぜたことで、誰もが眼を覆ってしまう。誰かの奇襲の可能性というもの、エンヴィ自身から発せられた叫び声によって、無いものとなる。だとしたらなにが起きたのか？ 度重なる変化にこのはすらも置いて行かれ、逡巡すらもままならないほどだった。

「こ、今度はなんだ!？」

もしたら朝が来たのか。そう錯覚する方が自然なほどの光が消える。晴れた視界に映ったものに、場の魔導師は目を開くことになった。

まず、エンヴィのバリアジャケットが先程までに彼女が纏っていたものの名残すら消え、下劣な心根を表すような紫の法衣で佇んでいる。狼狽を見せているその一方——八神はやてがその衣服を纏い、彼女を中心として四人の騎士たちが集っている。シグナム、ヴィータ、シヤマル、ザフィーラの四人は修復の影響によって身体の傷が無くなっていくどころか、魔力も万全な状態で主を囲う。

雰囲気の違いすぎたことで、このは以外ははやてのその姿に目を奪われた。理解は容易だった。はやては紛れも無く、正しい意味で魔導師となり闇の書の主として覚醒していた。全身に纏った甲冑の想起させるバリアジャケットと彼女——リインフォースに似た銀髪。加えて手の中の杖と書物の存在感と異彩感から、並以上の魔導師である

ことは誰の眼からも明らかだろう。

「まさか、はやてさんが……?」

「この——屑共がああああああああッ!」

余裕を失ったエンヴィは、自身の所持能力によって砲撃魔法を放とうとはやてたちに手の平を向けるが、悉くにして彼の行為は阻害されてしまう。五つの氷結の槍と薄紫のスフィアが降り注いだことで、エンヴィは否応に回避に専念せざるを得なくなり、不安定な挙動ながらも全ての直撃を防ぎきる。

「ただいま、このは」

「シルヴァちゃん!」

「良かった! 間に合ったみたい!」

「なのはすか!?!」

「まさか本当に無事に戻ってこれるなんて……なのはには驚かされっばなしだ。相手の魔力の質を消し去ることまで実現出来るなんて」

「……執務官、じゃない?! まさかクロノか?! なんでクロノがここに!?!」

「話すと難しいのですが、なのはのおかげ、といったところですね」

祝福の追い風が運んだのは、幸運と奇跡を載せた運命。本来いはずの人間、助かる見込みの薄かった人間がここにいる。

そのタイミングに逃えたように、傷を抱えたものフェイトとクロノ執務官とユーノも場にいわせせる。向き合う多数は手負いにも関わらず、あらゆる奇跡が一同に介したことに、エンヴィは苛立ちに奥歯を噛む。

「目障りな羽音をそろそろと……! 一人残らず」

「おう、喋らんでいいぞエセロックオン野郎」

まったく、どこにいても声で分かるゲス野郎っていうのも有難いもんだな。

よっぽど余裕が無かったのか、俺への反応が遅れたところか、振り返った拍子に殴られたんだ。どんだけ追い込まれてるんだよ、H A H A H A H A H A、ざまあないぜ!

ちっ、不意打ちで思いつき殴って思いつき吹き飛んだのに、海面間で止まりやがって。そのまま叩き付けられれば良かったのに。でもいいや、これでちよつとストレス解消したし。

「……八高さん！」

「無事で良かった……！」

「怪我は大丈夫なん!？」

「傷はそんなに塞がってないけど、一応無事戻ってきたぞ。それより、なのはとフェイトも無事で良かった……ってはやて!?! どうしたその姿!?! それにシグナムたちも!?! 俺の記憶が確かなら」

「いや、間違いじゃないぞ」

「話すと長くなるが、元通りになった。それで構わんか?」

「……オーケー、よく分からんが俺の知ってるみんなのようだからいいや。で、もう一つだが……クロノ、なんだよな?」

「お久しぶりです八高さん。お互い募る話がありますが……」

「そうだな……えつとこのは、今起こっていることを簡潔に教えてくれるか?」

「相手は美少女じゃなくてあのイケメンです。遠慮なく殴って構いませんよ」

「虚数魔力も無力化されています」

「——ほほう、叩くなら今つてやつか」

いかん、自分でも分かるレベルでも邪悪な笑みを浮かべてしまった。これは未来を担う幼女への影響に宜しくないから、すぐさま自重。既になのが若干引いてる本当にすいませんでした。

しかしなるほど把握。つまり、厄介な要素が外された上に誰にも寄生してない状態、ただの裸の王様ってことね。あんなハンサムだと殴ることにも躊躇はいらん。ということとは、相対的に遠慮もいらんよな? 合法でクリスマスイブにリア充殴れるって最高のイベントじゃんか。生きてて良かったぜ。メリークルシメテヤル。リア充かどうかは知らんけど、あの顔ならなれる素質あるし、中身腐ってるから審議拒否で処すけど。

「ふん、蟲が揃ったところで吾に勝てると思ってるのか?」



「息巻いてんじやあねーぞステハゲ野朗があ。こちとらお前のせいで、空気悪くなるわ話がややこしくなるわで散々だったんだよ。そろそろ切りのいい所でお前ぶっ倒さんと、みんなスッキリしないんだよ。その辺は分かってるんだろうな?」

【相当イラついてるようじやのう】

「当然。だが、勝てるぞ」

「根拠はあるんですか?」

「いいや無い。だが勝てる」

呆れて溜め息を吐いたこのには悪いけど、本当に根拠は無い。だけど、なんだか負ける気がしない。なんだろうねこの不思議な感じ。俺がアホだからか、それとも男としての血が騒いだせいか、それとも別の理由か。とにかく、変にワクワクして仕方なかった。これだけの人数揃っていることの心強さと頼れる感はやばい。

傷はそんなに治して貰っていないから、アヴァロンを握る力は幾分弱い。だが、俺はあいつと違って一人で戦う訳じゃない。人を踏み台にして戦おうなんて気も無い。俺はあいつのやり方の全てを否定する為に、剣先を向けて、わざとらしく煽るように笑う。

「来いよド三流! 俺たちとお前との格の違いってやつを見せてやる!!!」

## S a c r e d F o r c e

「シャマルさん、このは、とりあえず俺以外に回復を！」

「待って八高くん！ 流石にそんな怪我じゃ」

「チャージングGOは見せ物でもないし、そんなむやみに使うことは許されないんDA！」

「そんな美少年な頼み事してないし！ じゃあ、このはも頼んだ！」

「あいつは俺が引き付ける！」

我ながらかなり雑だなと思えるほどの指示を頼んでから、あの銀河美少年とか言い出しそうなムカツクハンサムに近づく。このはどのやり取りのせいで変に力が抜けたのは感謝すべきだろうが、なぜにチャー研なんだ？ 考えたところで分かる訳でも無いし、それについては気にしない方が良さそうだな。

「貴様一人で挑むつもりか？」

「だな。来いよ、ぶっ壊す前にお前の鼻っ柱へし折ってやる」

「ほう。そんな状態で勝てるとほざくか？」

「予想が正しけりや、今のお前ならなのはやフェイト、いやこのはどころか、俺とすら互角になりそうなんだな」

「言ってくれるな」

「まあな。そうそう言い忘れていた。俺の名前は八高輪、お前を倒す人間の名前だ。脳が震える程に覚えとけ」

「くくく、そうか——吠えるな蟲が！」

さあ始まった。眼の前のハンサムは、黒い魔力光を剣の形に変えて、俺と切り結ぶことを選択したようだ。……これだけでまず一つが確定した。フェイトやシルヴァの速さに比べれば、遅い。それにシグナムたちのような洗練された動きを間近で見ってきたせいとか、こいつの拳動はどれも汚あいし、真似ようという気も起きない。まあ、型なんてものを持たない俺もこんな感じだろうけど、それを抜きにしてもある部分が抜き出てるのが分かる。

思い返せば、長らく虚数空間を漂っていたんだ。そして、目覚めたのは少し前にしても、戦闘そのものの経験が浅い。虚数魔力に頼った

ゴリ押しが通っていた戦法も、要となるものが無くなった今、模擬線のスペシャリストみたいなものだ。いくら資質があつたところでスペシャルで！ 2000回で！ 模擬戦なんだよオ！ その意味じゃ、模擬戦と実践も積んでる俺の方が有利だ。ただの蹂躪で相手を殲滅していたこいつと違って、俺は格上としか相手になったことが無い（しかも基本勝ち知らず）なんでね。負ける理由があるかよ！

ただし、今回は絶対的に条件が違うけどな。

「舐めるなよ！ 腐れハンサムが！」

「なっ!?」

「充てが外れたらしいな」

今の俺は、本気の本気だからな？ 手加減も遠慮も無い。俺は戦いに来たんじゃない、勝ちに来たんだ。普段と違って試すことはしない。倒す為に動き、剣を振るう。

テンションも凄いこともあるが、俺のそんな気分と比例するように、合体剣として振るったアヴァロンの一振りには、エンヴィの魔力剣を破壊した。少しの競り合いすらなく、まさかの粉々。俺の精神テンションは今！ 貧民街時代にもどっているツ！ 卑劣！ 姑息！ その俺が貴様を倒すぜ！

「お前の能力は素晴らしかった！ レアスキルも！ 戦略も！ だが！ しかし！ まるで全然！ この俺を倒すには程遠いんだよねえー！」

「この蟲風情があああああああああああッ!!」

「まだ行くぜー！」

「ちいっ！」

これはラウンドシールドか……だが、俺は自分のデバイスのことはよく把握しているつもりだ。

がんと展開されたシールドによって、当然防がれる。さっきの剣と違って競り合いになっているし、刃も通る気配が無い。だが、いける。この程度予想内だ。

「いけよおおおおおおおおおッ!!」

シールドの次はバリアまでもが斬られた。本気で、ぐっと力を押し

た一振りは、それどころか、自分にまで刃のダメージが通つたんだ。これほど直接的なダメージというのは初めてなんじゃないか？　そもそも、こいつ関連の話って能力とかしか分からんし。だが、自分のご自慢が悉く破られてるんだ。そりゃあ悪い気分しか無いだろうよ。にしても、本当にバリアを破れるとは思わなかったな。

……つぶねえ。元から斬る気があつたのは気付いてたが、いかんせんだダメージが残っているせいで反応は遅れたが、刃の一振りはどうにか頬を掠める程度に済んだぜ。こりゃ魔力反応に鋭いのが救われたな。余程気に入らないのか、俺の頬を斬られた拍子に浴びた返り血を舐めても、微塵も嬉しそうじゃない。むしろ不快そうだ。まあ理解出来るぞ、蟲と呼んでいる相手に苦戦強いられているからな。それに、俺としちゃ都合の良い展開に流れているんだ。否応ににやつとせざるを得ない。

「こんな！　なぜこんな蟲如きに！　息も切らせているような蟲に、なぜ吾が押される!?　満足に動くこともままならず、なんの力も残っていないようなこんな下劣な存在にいつ！」

「生憎様！　まだ不屈の精神が残ってるんでな！」

「ほざくなッ！」

「人間舐めんなよバカ野郎が！」

「ぬあああああああああつ！」

「……そう言えばさつき、一人で挑むって約束したな。——あれは嘘だ」

俺の方をチラチラ見ていただけあつてタイミングを掴つてたようだけど、若干食い気味に言葉を返しながら、シルヴァは高速を以つてエンヴィに詰め寄る。念話とかで声かけて良かったのに。

いくらシルヴァが早いにしてもだ。既に反応されている。手の中には再び黒く揺れる剣が納まっている。今無傷のシルヴァにしても、この状況だ。タイムンとして一撃入れるよりは、即席でもコンピでした方が良いだろう。なに、陽動なら慣れている。

「八高さん、私はこれから一撃離脱を行います。その時に、エンヴィを凍らせます」

「分かった。俺が陽動する、合図したら来てくれ」

「分かりました」

「なにか算段を立てたようだが……どうする?」

「こうするんだよ!」

「ふん、ただの一つ覚え——」

半分正解。だから違う。

確かに俺がしたのは、ただの振り下ろし。だが、ビット装着された大剣の状態を解除されたガンブレイドでの一振りは、簡単に止められる。これじゃバリアブレイクは見込めないが、それでいい。

狙いはあくまで俺とアヴァロンでの陽動。放たれた四枚刃を飛来させる。四方より急速するビットを正面以外から奔らせる。デバイスとしてオート機能が付いていないのは痛手だったな。全て自分でどうにかするしかない。俺の一振りと二枚のビットを防いだところで、もう二枚を防ぐことは出来ん。なすがままに切られていく。

「なっ、ぐああああああ!」

「離れて下さい!」

シルヴァの指示通り、速攻で後ろに飛び退く。ダメージを与えた拍子にバリアを外すとは、やはり経験が浅いな。

そしてシルヴァは、横切る刹那に一閃を払う。本当に容赦を無くしたのか、シルヴァの氷は全身に広がりながらも、斬られた傷口に侵入するように重点的に氷結を始める。うわ、見ている気分悪くなるな。味方で良かったよほんと。

「ロリコオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

一瞬本気で心臓が止まるほど、とんでもない一言を空に響かせながらこののが黒い空の中を泳ぐ。優雅に、と思いきや割と弾丸みたいな直線軌道でエンヴィに急速接近してくる。まずなんでロリコンって叫んだんだよ。俺を社会的に殺す気か? 不当なことでキレイなのはの性格を考えるなら、シルヴァと俺が連携したことに大きな不満があった、の線が強いかもしれない。嫁(二次元)がいる俺としてはその気持ちは分かるが、それほどの愛は向けられんぞ。

……このはへ印象だが、なのはに近い感じの中距離以上が強いと

思っていたんだが、このはがエンヴィに取った行動というのが、俺よりとんでもない。超至近距離で殴ってるんだぞ。しかも素手。「オラオラオラオラオラ！」とまで言ってるし。え、ちよつと待って。幼女のようにいい顔じゃないぞ。遊戯王の顔芸に近いものを感じたくらいだ。俺泣いて良いよね？

「ぼんやりしないで下さいー！」

なにやら催促されてしまったが、一緒に殴っていい許可が降りたようだ。ようし、じゃあ俺もつと。ただし、アヴァロンで殴ってこのはにまで振るつても気分悪いから、こつちも素手で。

「やりますよ八高さん！ この光は私たちだけが生み出しているものじゃないー！」

「分かつてる！ みんながこの中に……！」

「ぐつ、ごはああつ！」

「合わせて下さい！ 虹の彼方にです！」

「え、なに!? どういうこと!?!」

「そそつかしいんだよお前は！ 八高さん！」

「……それでもっ！ 俺はもう迷わない！」

すつげえ意外だ。このはってフルブ勢だったのか。しかもフルコーン好きと見える。俺も好きだけどね。特に第三形態でビスト神拳したりN格闘ぶつぱのチンパンしたり特射からサブキャンセルで無駄にアニメ再現したりするのが俺の生き甲斐で……なんの話だよ。

とにかく、このはが殴りあげたことをきっかけに、俺は切り抜ける。そこでこのはも殴り抜けて、同時に撃つだけで全て再現される。最高に気持ちいなあ！

「迷いはしなうおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

俺はエンヴィを撃ち抜こうと身を翻した訳だが、なにが見えたと思う？ 緑の砲撃だ。しかもその色合いや方向は、どう考えてもこのはだ。つてちよつと待て！ この状況でなに味方の背中撃ってるの!!? そんなに俺とシルヴァが仲良くしたのが気に入らないのか!? ガチ過ぎるわ！

とにかくだ。あんなのに当たるとか冗談じゃない！ かといって

誤射を回避する為にイグナイト使うのも超勿体ない。全速で回避だオラアアアアアア!

……これはとんでも魔力を込めたのが分かる。本当にギリギリのところまで回避は成功したが、だからこそ足元を通った熱から実感し、ぶつちやけ恐怖すらした。……真意は知らないが、避けられる速度で撃った可能性も……いや知らんけど。

「……す。絶対に殺す! 障る音を散らすだけに足りず、吾を低く見るか! なら良いだろう! この力を以って貴様らを一片になるまで踏み砕いてやろうっ!」

一方のエンヴィは砲撃を受けたことで大損傷。虚数魔力も持たなくなつたことで、防ぎきることも出来ず、俺と同じくらいに怪我が目立っている。逆になんであの砲撃であの傷で済んでるんだよ。そつちもそつちでおかしい能力しやがって。頭に来ますよ!

なんて内心で文句を垂らしていたら、ある変化が現れた。生物的な印象を感じない触手がエンヴィに巻きついたと思つたら、その全身すらもぐにと変形を始めている。……待て待て待て待て。なにがどうなつてるんだ? 説明が難しいほどにエンヴィが変形し始めている!? 中身超きめえ!

「あれは、取り込んだ闇の書の防衛プログラムを起動させているのです。周囲の物質を浸食し、一部としていくことで融合しています」

「防衛プログラムっていうか、最早迎撃兵器だな」

「いえ、私の手を離れシステムと扱っているのです、最早「防衛」範疇に無いと考えていいでしょう。今のあれの能力を以つてすれば、この星を飲み込むことも出来ます」

「そいつは厄介だな。……とこですいません。誰でしょうか?」

自然に会話になつてしまったが、俺この人知らないぞ。なんか異人感の漂う銀髪と黒を基調としたバリアジャケットを纏った女性の魔導師。うん、知らない。ただひとつ分かるのは、尋常じゃない魔力を持っていてとだけ。例に漏れず俺より絶対強い。……おかしい。初対面のはずだが、なんか知っているような……

「面と向かつて話すのは初めてでしたね。私は……かつて闇の書と呼

ばれた存在です」

「違う違う、リインフォースや。わたしの付けた名前、いまいちやったかな?」

「まさかそんな」と困惑しながら彼女ははやてにそう返す。ああなるほど、バリアジャケットのデザインというか、柄やモチーフが闇の書になっているからか。リインフォースか。良い名前だな。

「オツケーなるほど。つまり、八神家の新しい家族って訳か」

「そういうことやね」

「輪……いや婿殿。私もこの協力しよう。今防衛システムと切り離されているので、どう破壊されようと、私になんら影響はありません」  
「婿殿って、こんな時に冗談は止めてよ!」

「失礼を我が主」

「は、はは……ごほん。とにかく、今は正に追い風だな。こりやいけるぞ」

「希望まっしぐらっすね!」

隣に降り立つ菜摘に、その兄。なのはとクロノ、ヴォルケンリッターからこのはとシルヴァが場に揃い踏み。少し遅れてからクロノ執務官とフェイトもユーノも合流する。…そうだよな。よく考えたら全員を回復し終えたからこそ、エンヴィを殴りに来てたってことだよな。手際良すぎるわ。

「ここに来たらまずくね? 今防衛プログラムを取り込んでるって聞いたが」

「さつき妨害しようとしたけど、周囲のバリアを張られている」

「執務官でも難しいって……分かった。となると、ここに集まったのは」

「対処策を考える為にです」

なるほどね。この空いた時間に倒す算段を立てると。それは良いな。この人数だ、出来ることは相当あるぞ。

「艦長が君から聞いた発言を元に、作戦プランを預かっている。聞いてくれるか?」

「え、俺から聞いた?」



「正確には正治が君から聞いた話で得た結果だけ、になるけどね。そのままの意味だが、虚数空間内に待機しているアースラで、あの防衛プログラムを破壊する。停止ではない、破壊だ。その為に、システムの構造をよく知る君の知識を借りたい」

執務官は静かにはやてに向ける。確かに、対処法が分かっていたら、手順も組みやすいし、することも明白にするだけでも違う。つまり、はやてとリインフォースが仲間であることのアドバンテージが大きく働いている。

こくつと頷いてから、はやては迷いのない光を俺たちに向ける。

「簡潔に説明するね。今多重防御魔法を展開しているから、それを見んなで破壊」

「本体に直接攻撃を与えて敵を疲弊させて」

「——ユーノくんたちの転移魔法で、アースラの前に運ぶ！」

「そして、アースラの主砲による一撃で完全破碎。今アルカンシエルをチャージしているから、あとはこつち次第になる」

はやてからフェイト、なのはが口々に、非常に簡潔な形で説明する。そしてクロノ執務官で結ぶ。なるほどなるほど。聞けば聞くほどシンプルで分かりやすい作戦だ。

つまりこうだろ？ 部位破壊（全身）して徹底的に倒すというモンハン脳で良いよな？ 大打撃を与えることを目的とするなら、高火力に不揃いは無い。むしろオーバーキル不可避にしなければならない。……同じことを考えたのか、このはもにっつと笑みを浮かべている。

「リインフォース、って名前だったな」

「ああ」

「人手ならオレが呼んでやる。だが、自分の説得は自分でしてくれ」  
「？」

「あんちゃんまさか」

「検索座標、NMV2—12。停留時間は三分。対象名：リインフォース！」

シスコンが唱えたその詠唱をきっかけに、ごうつと篝火があがる。半年ほど前に見た光と違って黒ずんだものだが、発せられた名前のせ

いで恐怖はほとんど無かった。

リリカルなのは世界のキャラを呼び出す魔法——管理局の記録では「魔導師を呼び出す魔法」とされているその強大な魔法で呼び出されたリインフォースは、やはり見ていた景色と違うものを見せられた影響で、困惑に辺りを眺めまわしていた。

「ここは…？ それに、私や我が主がなぜ？ ……アレは、ナハト・ヴァーレ!? なにがどうなってる」

「お願いがあるんだ」

演出としては悪くないぞシスコン。けどな、説明もなくいきなり呼び出されたら誰だってビックリするっつーの。一番驚いてるのはリイン本人だからな？ 開いた口が塞がらない守護騎士や本人たちに代わって俺が頭を下げる。

「リイン、ここにははやての愛するものがたくさんあるんだ。はやての好きな世界を、一緒に守ってほしい」  
「わたしからもお願いや」

時間も無いから碌な説明出来ない。だから簡潔にそう言うしかない。少なくとも、今眼の前に現れたリインの眼の光ははやての隣並ぶものと同じ、信じている光だ。それを抜きにしても、闇の書とはやての絆というのは本物のはずだ。状況を把握しきれていないはやてだって頭を下げているんだ。だからきつとリインなら

「…………頭を下げないでください我が主。状況は知りませんが、暴走したナハトが世界を飲み込もうとしている、そう理解しても？」

「うん」

「これから私は主と融合する。その後に、これから敵の多重防御魔法の破壊を行うつもりだ」

「心得た。私は私で事を成そう」

「然と。さあ、我が主よ」

「うん。——夜天の光に祝福を！ リインフォース、ユニゾン・イン！」

黒色の覆う夜空の下に瞬いた光。閃光から姿を見せたはやては、リインのような銀髪をを流しながら、纏う雰囲気精神なものへと変え

る。一瞬別人かと思ったが、瞳を開けながらふつと自然笑った様が紛れもなくはやてそのものだった。大変かわいい。

「行こうシルヴァちゃん」

「うん！ この世界を……みんなを守ろう！」

「さて俺も行くかね」

全員が戦闘の配置に向かっている、俺も行こう。そう決めて飛翔しようとした矢先に、はやてが俺のバリアジャケットの裾をちよんと掴む。素でちよつとビックリしたが、なんだかそわそわしてるはやての姿が眼に入ると、落ち着かずにはいられなかった。不安は人にうつるもんだ。だから俺は普通にしていないと。

「…どうしたはやて？」

「怪我が酷い、いまシヤマルを」

「…いや、いい。このままで行く。今凄いいいテンションだから、むしろ回復したくない」

「でも…！」

「大丈夫だつて。俺はそう簡単にやられない」

「……………分かった。信じる。無事に終わらせなね」

「そうだな。新しい家族も増えたり楽しみが多いもんな」

「そうじゃなくて……その……わたしな、帰ったら八高さんに伝えたいことがあるんや」

んん？ 伝えたいこと？ 告白か？ いやまさかねー。出会って一カ月も経ってないんだぞ。そんな訳絶対無い無い。大方、守護騎士が生きていることやラインという新しい家族を得たことを感謝したいのだろう。あれか。言葉にしようとしたらたくさん出てくるやつ。前のフェイトみたいなものだ。それなら確かに家帰って落ち着いてからの方が良いな。

「じゃ、無事に終わらせんとな」

「うん！」

「じゃあ行ってくる」

この状況ならプランBを使うことも無いな。だが相手はゲス野郎だ、最後まで油断はしない。あれに対してなら、俺は容赦する気は無

い。

はやてのシチュー、なのはやアリサたちとの日常、翠屋での生活。終わらせてからの楽しみは俺にだってあるんだ。その為に、俺は重みの減った空を滑る。

『消エろ蟲共オ！ 踏ミ潰シた後デ、この世界モろとも消シ飛バしてやる！』

佇む岩を取り込みながら、防衛プログラムを起動させたエンヴィ。傍目から見れば無機物な機械仕掛けである外観に反して、獣のような低い唸りを轟かせている。破壊を旨とことを主張するように、禍々しい色合いと揺らしながら、機械状の蛇を蠢かせている。融合した影響からか、発する言葉の節々に雑音が入ってくる。元より人で無かったにせよ、異形の風体は一層強く示されていた。

「無理をするなユーノ！ あくまで君たちの目的は破壊じゃない！」

「分かっている！ ケーシングサークル！」

「チエーンバインド！」

「困えッ！ 鋼の軛ッ！」

ユーノとアルフによってその全身を捕えられ、不自由を与えられたところに、ザファイラによって白の軛が降り注ぎ、貫く。どれも相手を拘束する魔法、後手後手に回した揚句に無力させることが最重要だ。その補助として三人が動く。

しかし、相手は強大な力を振るえる。痛苦を感じながらも雄叫びをあげながら全身するだけで拘束が千切らせていく。蠢く触手は乱雑に動くものを標的にし黒い照射を放つ。乱れた枝葉のように伸びる蛇はそれぞれが唸り、光の軸を無数に放つ中、魔導師は怯みを見せず、巨軀に向かいながら飛行をする。

——先陣が突破されたとして、それで攻撃が止む筈も無い。第二波を担うのはなのはとクロノとヴィータ。むしろ、攻勢はこれから。

「……合わせろよ、高町なのは」

「……うん！」

「良い友達を持ったね、なのは」

二人の経緯は知らない。だけど、クロノが感じたものは、やっぱりなのはという人間が得た信用と理解していた。元より敵意を向けない彼女であり、善意を信じる彼女だ。嫌いな人間を探す方が難しいというものだ。ふっと笑った一方、前を疾空していたヴィータはがこんつとカードリッジを機能させる。

「クロノくん、お願いね！」

「分かった、合わせる……！ 壊させるものか……ここがもう、僕の生きる世界だから……！ なのはのいるこの世界で、僕はなのはと生きる……！ だから……！」

「わたしたちの思い出を、とっちゃだめっ！ アレグロシユーター・バニシングシフト！」

「……シユート！」

二人合わせてでロックした蛇の数は――眼に映る全て。全ての迎撃兵器に対して、なのはとクロノは光弾を放つ。それぞれに緩やかな軸線を描き、照射を避けながら的確に蛇へと直撃させる。

「轟天爆破ッ！」黒い軸線の雨は止んだその隙に、装填されたカードリッジの全てを使って、ヴィータは身の丈の数倍以上の大槌を振り被る。エンヴィの発した怒号以上の意志を込め、

「ギガント……シユラアアアアアアアクッ！」

振り下ろされる。ぐぐつと緩慢に下ろされながらも、重きが最も先行される一振りが、展開されたバリアを粉碎し、且つ本体にまでダメージを通す。

「最初の借りは返したからな」エンヴィと遭遇した当初こそ遅れを取ったもの、今はまるで違う。与えられた強い痛みから、それは咆哮をあげる。

『おのれ……おのれえええええええええええええええええええええええ！』

――第三波。フェイトとシグナム。再生した蛇の襲撃を斬り払いながら空を横切る。飛び交う魔力と緊張感によって風の冷たさなど気にも留めなくなったが、恐怖だけは無かった。

「行くぞテストタロツサ」

「はい、シグナム」

互いが互いを認めている同士である為に、自ずとこみ上げる信頼感に勝ることは無かった。蛇の斬り払いによつて攻撃を緩ませていたが、気配が幾分薄まった。二人は視線のみで語り合い、左右に分かれる。これから放たれるのは、鋭利な一撃。万一を想定して、完全な挟み撃ちの陣形を取らずに、敢えて歪に前と後ろを取る。

『Bogenform』鞘と剣の持ち手部分を連結させたレヴァンティンは、誰もが見慣れた剣の形から弓の形へと姿を変える。これより放たれる一射は極めて強力なもの。

時間にして僅か二秒ほど。向かい合ったシグナムとフェイトは同時に眼を開いていた。シグナムの剣とフェイトの両刃剣が奇しくも弓の形状をしたとなれば驚くだろう。当然示し合わせは無く、用途もほぼ同じ。フェイトは結界突破用のフェニックス・フェーズを放つ為に、カードリッジを二つ使用する。極めつけは、弓状態に使用するカードリッジの数も同じ。この状況にも関わらず、二人はふっと笑った。

二人の奇縁の為の微笑は消える。今は戦時、敵として弓を引くのが道理だ。静かに、心に波立たせずに、狙う一点のみに視線を刺す。信頼している味方が敵を引きつけ、陽動までしてくれている。そして味方は撃墜されることは無い。言葉にしがたい根拠を頼りに、一射を放つ。

「――駆けよ、隼！」

「……羽撃け、不死鳥！」

紅を纏う一羽と雷鳴を奔らせる一羽が、飛空する。双方向より放たれた二羽は、駆動音を鳴らす機械仕掛けへ翼を広げる。どちらも一点を破壊する為の魔法、展開されたバリアを貫通することも容易い。

『……んな、馬鹿、ナ………』  
啞アああああアツッ！』

「まだだ！ まだ終わらんよ！ そうだよね、シルヴァちゃん！」  
「うん！」

——第四波、このはとシルヴァ。陽動も兼ねて動いていたフェイトとシグナムによつて、充分以上の魔力による攻撃の準備は出来てい

る。展開されたバリアの効力も薄く、後は放つだけで直接ダメージが入る。

そこで思わぬ加勢が加わったことで、特にシルヴァは眼を丸くした。

「私も加わろう。数は多いに越したことは無い」

「アインスさん!？」

「助かりました。お願いします!」

「なに、主と主の生きる世界を救う為だ。当然のこと」

二人が魔力をチャージしている傍で、呼び出しを受けたリインは自身の周囲に禍々しい魔力光を無数に停滞させる。これが敵から来るものだとしたら極めて慄く光景だが、味方として並び立つとなると、心強いこと請け合いだった。

「我らで防衛システムの破壊も兼ねて多く放つ。砲撃はその後で頼む」

「分かりました」

「行くぞ!」

シルヴァはフリーズランサーを展開させ、リインフォースは蒐集した魔導師の魔法をアレンジしての広域拡散射撃魔法を展開させる。

『Photon Lancer, Genocide Shift』と響かせた声音から、元の魔法がフェイトのものだと二人は瞬時に理解出来たが、この脅威が自分たちに向かないことに安心感を覚えてしまう。じっくり聞いていなかろうと、世界を滅ぼしかけた存在となのはたちに苦戦を与えたという情報だけあれば、彼女が如何に敵として強大だったかは明白だろう。

凍結を象った魔力と、雷撃を纏った魔力光。合わせて無数が周囲に停滞する。三人が瞬時に考えた戦略は単純にして明快。リインフォースとシルヴァでバリアを突破し、このはの砲撃で直接攻撃。装甲の堅い相手に行うには、この戦力は充分過ぎる。魔力を余分に残すことも考えて、シルヴァは凍結を一際多く展開させる。

「フリーズランサー!」

「放て!」

二つの浮遊物が同時に放たれる。撃ち出された氷結の突起と雷撃の球体が不揃いな戦列を成して、直線軸を滑る。展開されたシールドが強固ながらも、特にリインフォースの展開する魔法によって弾幕は薄まることなく、絶えることなく降り注がれている。

反撃に放たれた照射も空しく回避され、あまつさえリインフォースは動きながら陽動まで勤める。目的は砲撃を構えるこののはの支援。なるだけ攻撃が来ない方が都合が良いというもの、即座に理解したシルヴァは氷結を放ちながら陽動に回る。

「お願いこのは！」

「ターゲット、ロックオン……排除開始……！」

低く呟いた言葉に込めたものは多々あるが、今は眼の前の巨軀に全てをぶつけることで解消させる。だが、一回だけでは気も晴れない。数度に分けて小出し（少なくともするとは言っていない）にしていく方が効率も良い。

ワールドリーフの先を中破されているエンヴィイに向ける。一度の砲撃で大打撃を与えるのも構わないけど、陽動が多すぎる。確かに防御を続ける蛇は増え続けている。かといって、生半可な広域魔法では足止めにはかならない。ならばすることは決まった。半可に収まらない横合いをしてやればいい。優位性を持つ最も単純は方法……：相手に不都合を与えれば良いだけ。

「お願いワールドリーフ！」

『All right』

「エメラルド……ブラスターアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

『Variation: Rainy』

頭ではなく、手足を徹底して攻める。それがこののはの判断だった。本来砲撃である魔法を打ち上げ、名の通りの雨として分散させ、降り注がせる。緑色を散らせた先は、正確に伸びた蛇へと落下し破碎していく。

威力そのものも分散されたにしても、狙いは重点的に同じ個所。痛んだ部分を重ねて攻め続ければ、自ずと機能性は万全を發揮しない。生憎と放出されたのは多量の魔力。バケツから矢を返したように未



だ緑の雨は注がれる。

「まだシールドを展開してくるか…！」

「気にするな執務官。手で傷口を塞いでるようなもんだ。それなら抉じ開けるのが一番だろう？」

「まったく、簡単に言ってくれるよ」

「ふっ、違くない。いくぞ！」

「おう！ 行くぞアヴァロン！ これが俺の…俺たちの本領発揮だ！」

『了承した。ならば貴台よ、唱えるが良い』

「——リンカー・イグナイト！」

挙動は既に鈍く、纏っていた装甲は崩れ落ちている。エンヴィへのダメージは通っている。だが、そのどれもが決定打と言いつ切るのは難しいのは、やはり幾重のバリアの存在によつて削がれている部分もあった。だが、その存在に関係なく最接近する影が二つ。

——第五波、ザファイラとクロノ執務官と輪。彼らが接近する理由はただ一つ。直接攻撃、ではなくバリア破壊を優先した攻撃だった。少なくとも、闇の書の機能の一部も取り込んでいることから再生も可能としている。エンヴィはその時間を稼ぐ為に再びバリアを展開する。

「ぬおおおおおおおおおッ！」

「行けよおおおおおッ！」

どちらもバリアブレイクを果たせる能力を有している。…特に、リンカー・イグナイトによつて強化され、精神状態が最も高揚している輪にかかれば、幹を斬るような手際でバリアを斬り裂く。輪はバリアを引き裂き斬る為に周囲を疾空しながら、バリアに通した刃を押し通らせる。

ザファアラとて劣りは無い。脅威と判断された輪が陽動も兼ねている一方でバリアを破壊し、本体に打撃まで叩き込んでいる。元より切り口をつくったことで軟になったバリアがより容易に破壊を可能とする。

「陽動のお陰で、こつちも遠慮なくやれる…！」

多くの陽動と攻撃の影響によって、クロノ執務官は迎撃の首が回らないエンヴィを掻い潜り、接触するほどの距離へと詰めた。最も手薄な部分へとデバイスの先を破損した箇所に触れさせ、内部の固有振動数を計算する。

その能力から元来生物への使用は極めて難しい魔法だが、相手がデバイスという機械であり、その存在が人や世界に仇成すものとなれば躊躇の必要もない。

振動数の計算には少なからず時間を要するが、その隙すらも相手は突くことも出来ない。周囲の仲間が自分に時間を与える為に動いてくれている。優勢と言ったとて一瞬で撃墜されることも在り得る点では、危険を引き受けたのだ。ならば、その仲間に報いる為に最良を果たす。

「エンヴィ、闇の書……僕らの因縁をここで終わらせる！」

『Break Impals』

振動数を凶った直後、エンヴィの内部に見合った振動数を対送り込むことで内部から砕いた。内部からの破壊を目的にしているだけに、外殻の硬度は意味を成さずして致命的な損害を受けた。今までに響かせた痛烈な怒号とは異なり、生々しい痛みに苛まれたような、耳の奥に刺すような鋭い叫びを轟かせる。

「さつすが執務官！」

「無駄口はしないで貰おうか」

「了解さん！」

「輪、シールドの展開が弱まっているぞ。攻め入るなら今だぞ」  
「だな。けど、後は任せよう」

ザファイラの言うように、展開したシールドは先のような強固な強さは感じなかった。これなら砲撃魔法でも破壊出来るほどだ。少しのやり取りの後で、輪たちは後方から来る二影と交代する。

「輪にいい、みんな交代っす！」

「おお助かった！ 少し頼む！ あと」

「オレに指図するな！」

——第六波、森正治と森菜摘の兄妹。普段なら激昂するもの、この

場でも変わらぬ憎まれ口に、輪がニツ笑って返す。……ごく一瞬の視線の交差、笑顔でないもの正治からは眉間の皺は完全に離れていた。

かつて敵対していたこの男のことは今でも嫌いだ。……だけど、出会う方が違えば少しはマシな関係になれたのかもしれない。正治はふとそう考えたが、改めて輪の顔を見てその考えを改めることにした。やっぱりいけない。お互い憎まれ口を叩き合う関係がしつくり来る。それでこそオレたちだからと信じて。彼はデバイスの先をエンヴィに向ける。

——自分の理想とは違えていた世界。だけど、それが違っていた。ふと視線を移した先のなのは、周囲の仲間を視線で追いながら迎撃を止めない兵器への攻撃を続ける。その攻撃で助けるたびに、嬉しそうに笑う彼女。表層こそ随分変わったもの、

「……形は変わっても、オレが愛した世界に変わりなかったんだな」  
ふとそう零す程に彼女は彼女のままだった。大切な人がいるこの街を守る為に戦う。なんのことはない、根本は変わっていないかった。そして、守る為の戦いをするのはのはやあロノだけじゃない。この場にいるみんなが傷付きながらも、一縷の希望を抱いて戦う。

「菜摘！ オレに合わせずに砲撃しろ！ バリアがあるんだ、気にすることは無い！」

「了解っす！ ジブンオリジナルの砲撃！ 必殺、スマツシュ……」

「バスター……」

「ストリーム！」

重なった砲撃。緑と赤の色を混ぜ合わせての一撃が螺旋を描きながら「ゴオオオアアアアア！」と悲痛を上げ、迎撃兵器の揺らぎも大きくなる。機能が停止したように蛇の頭も項垂れたまま動かない。

「八高さん！ みんな！ 離れて！」

第七波、八神はやて。孤にて軍の力を有する彼女は、高々にデバイスを掲げる。

——僅かな一瞬だけ、ふと視線を移した先の彼と合わさった笑顔から、はやては言葉に詰まる安堵を覚えていた。これで悪い時間が終わ

る。そして、これからは本当に穏やかな時間が来るのだと。大した根拠は無いもの、騎士たちと分かち合った安らぎ、リインから得た強さ、八高輪から貰った安心が彼女を後押しする。

「彼方より来たれ、宿り木の枝」

—銀月の槍となりて撃ち貫け—

「石化の槍——」

「—ミストルティン!—」

夜天に浮かべた八の銀月より放たれた光の柱が巨軀を貫く。万全だったならあるいはいくらか回避や対処も出来たもの、度重なる攻撃と重い損傷の状態からそのどちらも叶わない。結果、八つ全てが身体を通る。

今までにない怒号……否、悲鳴。受けた物にしか分からないだろう恐怖と共に、より無機な石へと身体は蝕まれていく。もがけど叫べど意味は成さない。十数秒足らずと巨軀は石となり果てる。……されど、完全硬直とも言えず、胎動のような蠢きが内部からずると聞こえる。その一押しのために

「凍てつけ!」

『E t e r n a l C o f f i n』

放たれた青い閃光がエンヴィを捕える。石化によって止められたところに重ねての凍結となれば、完全な硬直も生まれる。多重に展開されていた防御魔法も迎撃を機能していた蛇の群れも動かない。

—だが、ここで終わらない。

「後は頼む!」

「任された!」

輪の返事を皮切りに、エンヴィは魔導師に包囲される。

なのはとクロノ、フェイト、はやて、リインフォース、このはとシルヴァ、輪の六隅が巨軀を中心にして構えを取る。

「行くよ、なのは!」

「行くこう、クロノくん!」

「待ってて。アリシア、かあさん……! 終わらせて帰るからね……!」  
「帰ったら大忙しやね」

「我が主の生きられる世界の為に……！」

「こんな暗い事件終わらせないとね。シルヴァちゃん！」

「アレだね……分かった！ ラグナロク！」

『All right』

「さて、帰ったら翠屋で祝杯だな……！」

「なのはに合わせる！ 思い切りして……！」

「分かった！ 全力全開！ スターライト・デュエット……！」

「雷光一閃……プラズマザンバー……！」

「響け終焉の笛……ラグナロク……！」

「借りものの魔法だが……スターライト……！」

「……我ら、生命いのちを守るものなり」

「確たる意思でそれを成し、その力を解き放つ」

「神を下し、星を護る、全ての決意はこの胸に」

「二人の絆で……！」

「リーフオブワールドツリー！」

「ラグナロク！」

『All right』

「神をも降せ……！」

「行くぜ、やるなら長距離ビームソードが良い。良いよな？」

『好きにすれば良いじゃろう。貴台の魔法じゃ』

「じゃあやるか！ ——空より蒼あおげ、刃の射光……！」

「二——ブレイカアア——」

「神降し・デウスクラッシュャー！」

「レイ・オブ・シンシアアアアア！」

なのはとクロノを筆頭にしたフェイトとはやてにとリインによる全力の、互いのデバイスを連結させて放たれたこのはとシルヴァの渾身の、砲撃と紛う蒼あさい柱を振り下ろした輪の本気の一撃が、エンヴィへと向けられる。海鳴から随分遠く離れた沖であるにしても、互いが互いに全力となればなにかしらの影響が出るのは明確である為に、無論加減はしている。だが、それでも充分以上の成果を受け取れる。

幾重に色が一つに向かい、轟音と飛沫を散らせる。どれほど高ランクの魔導師だろうと、この一撃に耐えうる魔法は存在しないだろう。如何に加減しようと、放たれたのは紛れもなく自身の持つ最高の魔法。建造物程の巨軀を飲み込む光なのだから、人が受けるには危険という言葉でもまだ安全な範囲と言えるだろう。率直に言うなら、相手が兵器の類だからこそ出来た行為だ。

結果、エンヴィの迎撃手段として機能していた蛇は全壊し、バリアの完全破壊はおろか本体へのダメージも極めて大きい。少しの挙動を見ただけでががと軋む音が絶え間なく耳に入る。姿形の8割が瓦解したにしても、この一撃を以つても形が残っているのは、エンヴィ自身の強度と闇の書の再生に寄るところが大きい。損傷が大きい今ではその再生機能すらも万全に機能しない。

「ユーノ！ アルフ！」

「……長距離転送！」

「…目標、軌道上！」

挙動も迎撃もままならぬ巨体を転送するなら容易い。クロノ執務官の合図を皮切りに、ユーノとアルフとで無機な表皮の剥がれたエンヴィを転送する。相手にはもう虚数魔力は無い。拒否も否定も飲み込まれ、虚数空間内で待機していたアースラの前方に送られる。虚数空間なら魔法に関する一切が使用出来ない——つまり、バリアも展開出来ず、無防備に艦の主砲を受けることとなる。

「目標転送中！ 生体部分の修復が早い！」

「構わないわ！ 主砲の用意を！ バレルオープン！」

怯むことなく、リンディは指示する。艦をまとめる長として怯む姿を見せる訳にはいかないにしても、彼女にはそんな不安は無かった。全てが順調だと、むしろこの上ない良い流れだと確信していた。先の魔導師たちの一撃で受けた損傷が想定していた以上の成果を見せたことで、一層に迷いは無くなっていった。この戦いは勝てる。

——ふっとした光の隙間から、蠢く巨体が姿を現す。損傷が激しかったはずなのに、既に必要な部分が回復している。しかし、ここは虚数空間。どうすることも出来ない。

「アルカンシエル」

形は変わったにしても、リンデイの眼前に蠢くものは確かに闇の書に違い無い。因縁はここで終わる。終わらせる。少なからず私情を挟むにしても眼前の脅威を払うことで救われるものが多い。街の人々も、闇の書と関わった誰かの因縁も、全てが終わる。

「――発射ッ！」

言葉に乗せた意味合いを全て語れば冗長になる。だが及ぶ必要もない。

放たれた光は燦爛と奔り、潜り込むように巨体へと溶け……………消滅した。見るものが見れば、火花が散ったような絢爛な光とも見れるが、明らかな破碎の瞬間であると魔導師たちは自ずと理解出来るだろう。尤も、目視できる場所にいない以上、その確認が出来たものは一人としないが。

常に事態を想定しておく必要がある。万一に備えてで生体反応を確認してみるが……

「……………生体反応無し。目標、完全消滅です！」

瞬間、艦内は歓喜に揺れた。この最近を悩ませた元凶が倒されたことで、クラツカーを開いたように坩堝の渦へと変わった。アースラは特に空気が張り詰めていたこともあって、大袈裟に抱き合う局員も中にいるが、誰も気にとどめることなく、ただ嬉々とする。

……………なにも問題は無い。変化が無いことを確認してから、リンデイはクロノ執務官に告げる。

『クロノ執務官、聞こえますか？』

「はい」

『アルカンシエルを使用し、標的は完全消滅しました。と現場の魔導師に伝えて下さい』

## 世界のほんの片隅から

「報告だ。エンヴィの完全消滅を確認した。」

「本当か執務官!？」

「虚数空間内とはいえ、生体反応が無いとなれば确实だ」

アースラ内に続いて、海鳴の沖でも興奮の坩堝と化される。長い、本当に長い間の苦渋から解放された魔導師たちは、それぞれに安堵を示す。ふうつと息を吐く者、手を叩く者、友達と笑う物、歓喜が夜空の下で広がっていた。表情の堅いクロノ執務官がこの結果にふつと表情を和らげたことが、状況の終了を明示される。

「あんちゃん、さつき呼んだ人は？」

「戻ったよ。…菜摘、デバイスは無事か？」

「マトリヨシカなら無事つすよ！ すよね、マトリヨシカ！」

『……………』

「マトリヨシカ…？」

『……………』

「……………もともと虚数魔力の影響で損傷していたんだ。修復も出来ずに使い続けていたから、機能が停止したんだろう」

クロノ執務官は、菜摘が傷付かないように出来るだけ優しく伝えた。性能の上限以上を使用した影響で大部分に損害が起こり修復不可能だったパラレルハーツと違って、マトリヨシカは虚数魔力を被弾したデバイス。治療も修復も出来なかった結果、人で言うところの毒に侵されきった状態で動かされ力尽きた。それがマトリヨシカだった。

菜摘に落ち度は無い。だけど、自分のせいで愛用のデバイスは動かなくなった。「……………ごめんなさい」と請うように続ける菜摘の涙は、ぱたつとマトリヨシカに落ちるだけで返事が戻ることは無かった。

…否、愛用と呼ぶには二人の関係は対等だった。それこそ、この世界を共に過ごした大親友そのものだ。失った事実を痛感して、菜摘は涙を抑えきれずにいた。



「……こうなると君のその姿ももう保てないだろう。すぐに戻った方が良い」

「オレが連れていく。菜摘」

「あんちゃん……」

「ごめんな。傷の手当てはアースラで良いか？」

「うん、大丈夫です」

「分かった……捕まっておけよ」

万一に備えて正治は菜摘を背負うように抱えながら、場に背を向ける。……一度だけ眼があつた輪に対して初めて怒りは湧かなかつたが、別に謝意も感謝も無い。本当にただ視線があつただけ。

ただやっぱり、どうしてもこう思わざるを得なかつた。気に入らないやつだ、と。

「ふう終わった終わった」

しかし派手にやったもんだ。ライザーソードよろしくな長距離砲撃剣（良いなこの呼び方）を試してみたけど、やっぱ予想した通り疲れるわ。イグナイトと合体剣の状態じゃないと出来ない魔法だけだ。

……警戒態勢も無いからかバリジャケットを解除している子もいる。なのはやフェイトは勿論だが、このはやクロノまでも変身を解いている。良いね、こういう和気藹々な光景見てたら、翠屋に帰りたいくなるってもんだ。

「ほ、本当ですか!?! ……はい! 今戻ります!」

誰かから念話があつたのだろう。フェイトは頷いているが、その表情は誰が見ても嬉しそうなものだ。なにか良い報告が貰えたらしい。なんとなしに聞こうとした傍で、近くにいたなのはが代わりに尋ねていた。

「どうしたのフェイトちゃん?」

「アリシアが……アリシアが眼を覚ましたって!」

「マジか!?!」

「アリシアさんか……どんな人だろう」

「これから会ってみれば分かるよ」

このはの言うとおりの、これから会いに行けば人が分かるつてもんだ。

おつ、翠屋は救われるわアリシアが救われるわで完璧じゃんか。なにこれすげえ。ゲームオーバーすらも超越する……俺こそが神だあああつ！ おつと、落ち着こうか俺。それを言うには条件が多すぎる。まずゲーム会社の社長になってることが前提だし。……うん、本当に落ち着こう。

「八高さん」

「おおはやて。……大丈夫なのか、顔が疲れてるぞ」

「さすがに疲れてなあ……と」

「はやて！」

「そう焦らなくていい」

バリアジャケットが解除されて落下する、そうイメージした即座に動いたのだが、融合の解けたリインによってなんとか抱きかかえられる。……どうでも良いけど融合解除って言うと、某カードゲームが出てくるんだよな。あつぶね、なんか噴きそうになったぜ。

「助かった、ありがとう……えと、ミラーフォース？」

「リインフォース、な？」

「なんで俺ド忘れしたんだ!？」

「私に聞かれても……」

フォースしか当たってないし！ スター〇オーズかよ！ いくら強かろうと女性を聖なるバリア扱いとか紳士のすることじゃねーよ！ ……もういい、とにかく次から間違えなければ良いんだ。リインフォース、リインフォースつと。

「ふむ、リインフォースか。闇の書とかよりはよっぽど良い名前だ」

「私もそう思う。良かったですね、我が主」

「なんでそこでわたしに？」

「名付けたのはあなたじゃないですか」

「ほうほう、はやて付けた名前か。良いな、この人に似合って綺麗な名前してる」

「……嬉しいんだけど、そこはかたなく嬉しくなれない」

「なんで!？」

褒めたのにどういうこと!?! いや実際似合ってるよな!?! 待って待って、落ち度が分からない! 綺麗な人に綺麗な名前という組み合わせが良いということ言ってるはずなんだが!?! ……肝心のリインも頭抱えてるし。あのちよつと、説明くれます?!

「……リインの方が綺麗やからね。八高さんが綺麗言うのも仕方ないね」

「……なんの話しているのか分からないけど、リインが綺麗にしても、はやてが可愛いのは変わらんだろうって」

「……はい?！」

「いやー! いやなんでも無かった! それはそれ、これはこれだからはやてが気にすることないってことだ! うわはははははははははは!」

素面で言うのと恥ずかしいなおい! 女性に可愛い言うって、ねえ?

なんかこう、ねえ? ……ばっちり聞かれたな、はやての顔が赤くなってる。夜なのに顔赤いのが分かるって凄いいことだぞ? そう言われることに耐性が無いと見た。つーか俺も言い慣れてないっつーの。そもそも言う機会が無いんだっつーの。

「——っ」

この感じ………そうか、まだいたか。だが、そうすると思ってたよ。自分が魔力の反応に鋭くて良かったぜ。 ……気付いたのはリイン………とこのはか。中々厄介な二人に気付かれてしまったが、俺がやるしかない。プランBは俺だから出来ることだからな。

「輪」

「…どうした?！」

「実のところ、私は闇の書としていた時の記憶も残っていてな」

「それが?！」

「お前がしようとしていることも分かる、ということだ」

——そういうことか。つまり、本の姿をしていても会話は聞き取れていた、ということね。完全に油断していた。

「? 八高さん? 今のはどういう」

「はやて。新しい家族が増えて良かったな」

「う、うん……」

「——リイン、はやてのこれからを頼む」

これ以上話せば未練が生まれそうだ。言うや否や、残り少ない魔力でイグナイトを発動させて飛び立つ。全身傷だらけだろうと、疲れが溜まっていようが、まだ動かなくちやいけないんだ。あとはアヴァロンのなんとかするからな。リインなら俺より速く動けるだろうが、はやてを抱えたまま動けるはずもない。誰かに手渡したところでもう手遅れだ。

「待って下さい！ なにをするつもりですか!？」

同じく気取ったこののが追おうとするも、先に動いた俺に追い付くことも出来ず、後ろから追うことで精一杯だった。止せ、追うな。これ以上はエンヴィは完全に倒せない。このはに悪いが、

「止せシルヴァア!!」

気を逸らさせて貰う。なんでも無いことは分かってても、その名前でそう言われれば反射的に反応せざるを得ないだろう。目論見通り、このはは一瞬だけ足を止め、視線をぼかんとしているシルヴァに向けてしまう。……一瞬あれば良い。

『……本当に良いのじゃな』

「ああ構わない」

『なれば小生が代わって言おう。……馬鹿者め』

……まったくだ。だが、エンヴィを最大限油断させられる上に確実に破壊することが出来る方法だと思ってる。それが冴えたやり方かと聞かれたら、我ながら冴えない部類だけだな……

……俺がなぜ危険を承知でエンヴィと一对一の戦闘をしたのか。わざと名前を教えたのか。魔力も枯渇に近い状況まで追いこみ、怪我也も治していないのか。そして、無駄に血と名前も教えたのか。——全てこの為だ。だが、エンヴィに悟られる訳にはいかない。だから俺は、

「いるのは分かってるぜ！ 大人しく壊されろよお！」

エンヴィに乗っ取られることを前提に、俺は刃を振るう。

「そんなの、嫌や……」

ライン自身は沈黙していた。確かに輪の案なら確実にエンヴィは破壊出来る。しかし、彼自身からはやてに言うなという発言に困惑を隠せずにいた。単純な効率の話をすると、作戦の内容を相手に悟られればエンヴィは輪の身体から離れるだろう。それでは都合が悪い。完遂させるには知れないのが一番なのだが、視線で言及を望んでいるのが心を許した主。当然、ラインは悩ませていた。だがある結論辿り着いた。真実を知ったとて、はやての心情を考えれば手は出せない。そう考えたからこそ、ラインは末に話した。

「嫌や……なんで、八高さんがそんな……」

「我が主……あのデバイスが破壊しなければ、あなたの生きる世界も、彼の守りたい世界も守れません。彼自身したくないとも言ってるからって！」

「どうしたのはやてちゃん？」

「八高さんが……八高さんが……」

「あつがああッ!!」

先の談話から一変、なのはたちの顔から笑顔が消えた。聞こえてきたのは間違いない輪の悲鳴。なにかあったのかという気楽な考えは消え、即座に彼の元へ向かう。

「八高さん!?!」

「どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたも……あの馬鹿はエンヴィに乗っ取られたんですよー!」

言葉を失った。こののはの言葉もそうだが、駆け付けたのはとフェイトを困惑させたのは、輪の顔が普段見慣れている気の抜けた穏やか

な顔付きが、極めて下卑た笑みを浮かべている。

「……つぐう、よくもこんな不足に塗れた身体で……貴様の身体を寄こして貰うぞ！ フェイト・テスタロッサー！」

その声も、完全に聞きなれた耳に障る声。構えたガンブレイドからもはつきり分かる殺意。一番条件に近いのはフェイトであることが明言された以上、なのはとこのは再びバリアジャケットを纏うが、『その名前を知っていると、少し予定が早める必要があるようじゃな』

場の誰もが、その光景に脳内の思索を奪われていた。少なくともヴォルケン以外にとつては、その巨大な剣が分離するという仕組みを知らなかったのだから。刃状のビットなのかとこのはが頭の中で理解出来た直後には、

『約束は確かに果たしたぞ、八高輪』

ビットは既に、輪の左胸と深く刺さっていた。

「エンヴィの攻略法を思い付いた」

「——なに？」

それは、はやての見舞いから翌日……もつと言えば、ヴォルケンリッターと管理局とで会合する7時間程前の時間のことだった。彼がそう言った時は誰もが半信半疑だったが、余程のことか輪は顔を緩ませていない。シグナムたちは応えるように表情を構えさせる。

「と言ったけど、方法は二つある。まずプランA。こっちは管理局と協力する」

「どういうことだ？」

「ヴィータ」

「ちっ……」

「すまんなザファイラ。といつても、口にすれば簡単な話だが、今アースラ地球の外に待機している訳だが、それを虚数空間内に待機するようになる。で、待機したアースラの前にエンヴィを転送させて、主砲なりを撃って壊す」

「なるほど」と口にするもの、シャマルは怪訝そうに拳手をする。なに

言われるのかもある程度分かっている輪にしてみれば、当然の反応の範疇だった。

「破壊する、と言いましたけど、あの姿のまままで？ それを望んでいるようにも思えないですね」

「そう、だからこそ俺は目立つ必要があるんです。魔力に強さに拘っていたみたいだから俺に眼を向けることは無いでしょうから、「放っておいたら脅威になる」程度に記憶させなきゃいけないんです」

この時点でわざと言わなかったことだが、輪はこの案でも最悪名前と血を与えて機会を与えるつもりだったが、二つ目の案に比べて比較的安全にしたいことから、極力口にはしなかった。

「しかし、出来るかどうかも怪しい案だな」

「そこは煮詰める必要があるな。ただし、管理局との協力となると我らは手が出せないぞ」

「…………あまり言いたくないけど、今のエンヴィ自身に俺はなににも出来ないからな。その辺りは俺に任せてくれ。…………でB案だが、これに関して意見は聞いた後にしてくれ」

…………どの程度かは分からないけど、反対はされるだろう。そう思いながらも輪は一度全員の眼を見るが、誰もが信じて頷くばかり。

…………いざとなればヴィータも乗るだろう。そんな安い気概で彼は口を開いた。

「あくまで最後の手段であって、俺だって乗り気じゃないということ念頭に置いて聞いてくれ…………まず俺がエンヴィに乗っ取られる」

「なっ…………」

「最後まで聞いてくれシグナム。でだがヴィータ、俺のアヴァロン・ブルーが分離出来る仕組みなのは知ってるよな？」

「分離、と言いますと？」

「刃を遠隔操作が出来るんだよ」

「そういうことです。で、これはアヴァロンから聞いた話なんだが、このビットはデバイスからの操作も可能なようだ」

「…………つまり、なにが言いたい？」

『エンヴィが寄生した部分に小生が操作した刃を突き立てる、という

ことじやな』

「正解」

……輪にとって意外だったことが起こった。話を聞いて一番不快そうにしているのが、自分を良しとしていないヴィータだったのだ。しかし、律義に輪の話が終えることを待っているが、既に核を話し終えている以上希望的な話は出てこない。それを考えると、ここからはこの顔だなと輪は半ば諦めたように溜め息を吐く。

「…続ける。直接エンヴィの戦闘を見た訳じゃないが、話を聞いていてある特徴が分かったんだ」

「特徴？」

「エンヴィが使っているのは基本的に自分の能力だけ。で、把握出来るのも乗っ取った魔導師の情報くらいらしい」

「……デバイスまでは把握出来ない、と？」

「多分だけだな。人間を乗っ取るんだ、デバイスの認識許可は降りるだろうけど、デバイスの性能までは把握出来ないはずだ。そこを突く」

「だから、その刃のビットで乗っ取られた自分に向けるって言うのか？」

「……そうだ」

このプランだけ具体性があるのは輪にとってはこっちの方が最初に思い付いた破壊方法だったからだ。この作戦はあまりに危険が多い。最たる部分を上げるなら、寄生した時にどこにエンヴィがあるのか。ここが悩ませるポイントになってくる。それこそ、心臓や脳となれば死も覚悟せざるを得ない。だからこそ、最後に輪は僅かに声を震わせた。

「そこでヴィータに頼みたい」

「……なんだ」

「刃を立てた時に、確実なダメ押しとしてグラーフアイゼンで刃を叩いてくれ。杭を打つようにな」

「……………」

眼を細めたまま、ヴィータは沈黙を返す。だが、ヴィータはやると



輪は信じていた。管理局にとつてもヴォルケンにとつてもエンヴィというデバイスは脅威に違いない。はやてにも実害をもたらす相手である以上、否定は出来ないだろう。否定が無ければ良い。そう無理に前を向かせて輪は話し終える。

「どうして…八高さんがそこまでしなくちゃいけないんですか？」

話自体は終わった。もう問題は無い。だが最初に聞かれたのは自分への心配だった。本当はシャマルは声をあげて自分に詰め寄りたのかも知れない。だけど、そうせずに凜とした声調を保っていた。

……その陰った表情を隠せずにしながら。

「他に誰が出来るんですか？」

それが、彼の返答だった。厭味や皮肉も諦観でも無く、震えながらも強い語調。事実これらが出来る要因が揃っているのは輪だけだった。特に案の実現を成しているデバイスの意志で操作出来る遠隔兵器。おまけに刃のような汎用性がそれなりにあるもの。あまりに出来過ぎた状況だ。

もうひとつを言えば、彼の込めた思いはまだある。こんな危険なことを誰にもさせたくない、というシンプルな考え。なのはたちに寄生されるのは嫌だし、アリシアも無事取り返したい。どちらが強いでもなく、両方があっての一言だった。

「……………ということ、なんだが」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ  
!!」

そして、作戦の締めとして、ブレイドビットへと大槌を打とうと振り被る。急速に近づく光に対処しようにも、エンヴィはあまりに不利な状態だった。ひとつは自分の理解を超えた事態が起きたこと、もう一つは、デバイスそのものが損傷したこと。否応に動きを鈍くせざるを得ない。

「な、っ、か、こんな……………」

「止めてヴィーター！」

「このッ……………」

バカやろおおおおおおおおおおおおおおおッ  
!!

——その一振りは、がきいいんという音を鳴らしながら刃を押し込んだ。断末魔を響かせることなく、彼は力なく暗い海へと落下していく。この闇夜だ。一度飲み込まれれば救出は困難を窮めるのは明白であり、バリアジャケットも解いている身である以上、激突すれば怪我では済む筈が無い。

「八高さん！」

「まったく……………」

放っておけば地面より堅い海面への激突。それを阻んだのは、両手が空いていたら頭を抱えていただろうクロノ執務官だった。自分よりやや背高の男を、バランスを崩さずに掴み切れたのは幸いだだったが、声調にはヴィータ同様に怒りが込められていた。

「この馬鹿は……………どうしてこう…！ アースラに戻る！」

「アリシア！」

「お母さん！」

その光景は、特にこのはたちにすれば奇跡とも言えるものだろう。死んだと聞かされた母親とフェイトの原型——否、姉に当たるその娘とフェイト自身が並び立っている。アリシア自身目覚めたばかりということもあり、覚束ない足取りで杖を頼りにして歩く程だった。エンヴィに寄生されて以降にしか知らない顔であるもの、やはり力が抜けた顔はフェイトに近しい顔付きだった。同じではなく近い理由は、明確に表情から見て取れていた。元からそういう人柄だっただろうという明るいアリシアに、経験を経たことで大人びているフェイト。同じ顔にしても細かいところで表情が異なることから、やはり違うんだなと実感していた。

「話は聞いているよ。お母さん、私のお願い聞いてくれてありがとう」

「……っ、く、っう……」

「アリシア、お母さんを泣かせない」

「私もお母さんに会いたかったんだもん。あのね、私があの中で聞いている時はほとんどフェイトの愚痴だったから」

「アリシア、その話は」

「そうだね。うん、変な話になっちゃうしね。……会いたかったよ、フェイト」

「……うん、ずっと話したかったよ、アリシア」

実感していたのはこのはたちだけじゃない。話で聞いているのはやクロノ執務官、既に物語として知っている正治にしても、これが本来あり得ない光景なのは知っている。それでも、眼前に広がる奇跡を喜ばない訳が無い。

しかし、それも長くは続かない。水入らずとしたいところであるが、「失礼」とリンデイは横から入る。

「ごめんなさいねプレシア。今から重要な話をしたいの」

「そうね……悪かったわ」

「気にしないで良いですよ。談話室があるのでアリシアちゃんとゆっくりして行って下さいね。……フェイトさんは残っても大丈夫です?」

「はい、大丈夫です」

「重ねてごめんなさいね。……八高くんの状態について話すわ。あとはエイミーから聞いてみてね」

プレシアとアリシアが離れたタイミングを図って、リンデイはそれだけを言ってから場をエイミーに託す。彼女なりに事後処理や報告書を纏めてることもあって多忙を来しているだけに、この交代も己む無しと納得されている。

ごほん、静かに報告を待つ魔導師たちに対して、心持ち穏やかとは言えない顔でエイミーが手元の白い束に眼を向けながら語る。

「……まず結果から、この刃状のビットの影響でエンヴェイは完全に破壊されてるよ」

「そうか……」

「で、八高さんの状態だけど」

「どうなん!?! 八高さんは死んでないん!?!」

アースラに案内された全員が報告を待ったが、全員が気にかけてのは輪の容体そのものだった。ダメージ回復しないせいで心臓付近を刃が通らせたのだ。非常に危うい状態なのは素人目で見ても確かだった。

「落ち着いて…えっと、はやてちゃん、でいいよね?」

「はい」

「順番に話すから聞いてね。 ……身体の方が問題無いわ」

「良かった……」

「だとすると、心の方が問題ですか?」

どうしても引つかかる一言がこののはの耳を掠めた。身体は無事だと言うなら、相対的に心の方に眼を配らせざるを得ない。なにかが無事じゃない、暗にそう言われたのがはつきり伝わったが、誰にしても彼の状態を把握したい。このはは明白にそう返した。

その意図は分かっている。エイミイは静かに頷く。

「厳密に言えば意識、の問題だね」

「意識……?」

「アリシアちゃんの身体を調べて分かったけど、エンヴィイは寄生する際に宿主の意識を奪うでしょ? その時に脳に毒を送るみたいなの」

「毒を?」

「難しい話だから簡単な説明になるけど、脳を刺激して思考を奪ってから身体を奪うって工程があったみたいね」

「本当に恐ろしいものを作ったものだ」

「じゃあ、アリシアちゃんはどうして眼が覚めたんですか?」

「皮肉にも虚数魔力の影響だね。虚数魔力の影響で機能出来ずに、適量の毒が送れなかった、その結果で時折彼にそぐわぬ動きがあったのかも。実際アリシアちゃんも、中から見て抵抗していたって言うからね」

「……虚数魔力が影響して毒が送れなかった。ということは、虚数魔力が解除されてから寄生された八高さんは」

「本来の性能を発揮したエンヴィによって適量の毒を送られた、ってことになるわね」

「それで、八高さんはどうなるんですか!？」

誰もが不安はあった。最近まで一緒だったはやても、今まで過ごしていたなのも、家族を救われながら後も時折ながら世話になったフェイトも、彼になにかしらの影響を受けた人間だ。況してやまだ年端も熟していない少女だ、冷静を保てる訳が無い。

「……酷な言い方になるけど、彼は半分植物状態みたいなものなの。意識が戻ったアリシアちゃんにも言えることだけど、身体の毒を抜いて、時間をかけて回復に専念させるのが最善なの」

「脳に毒……ということは記憶に影響があると考えても?」

「このはちゃんは鋭いね……それどころか脳に損傷を受けているから、このまま起きないことも」

「もう止めて!」

……はやての悲痛が、アースラに沈黙を与えた。誰だってつらいし、言いたいこともある。けど、彼女は彼に感化されてしまっている。勢いからの遮りであっても、大声で荒げたことに罪悪感を覚えている。

口を開こうにも、言葉が浮かばない。アリシアの容体が戻ったにしても未だ話せない状態、実に深刻だった。

「…私はここまでみたいですね」

「リイン? なにを?」

「我が主が見初めた男だ。協力したい」

「協力? なにをするんだ?」

「輪の身体の毒を除去すれば良いのだろうか? 私ならば或いはとね」

リイン浮かべた薄い笑みが、どこかを遠くを見るような、儂いものを感じた。はやてとなのはは、嫌な予感というものの本能的に気取った。一方で、クロノ執務官は怪訝に首を傾げる。

「どうやって?」

「私は元闇の書だ。ウイルスとして中に侵入して、毒を除去する」

「そうなると我らも」

「心配に及ばんよ騎士たちよ。お前たちは私から独立した存在だ。好きに生きると良い」

「シグナム、どういうことなん？」

「……彼を救う代わりに消える、ということですよ」

「そんな……！ リイン、折角仲良くなれたのに……！ 死ぬなんて嫌……！」

「……我が主、聞いてください」

涙を流すはやてに対して、リインはそつと頬の雫を拭い払う。くしゃつと歪んだ顔の主に向けて小さな願いを込めて、祝福の風はふつと笑む。

「私は消えるでも死ぬでもありません。二人の為に生きたのです。人の未来を奪ってきた私が誰かの明日になれる……それも、我が主が心許した男性の明日を守れるとなれば、この上なく光栄なことなのです。それに、今私はとても幸福なのです」

「つ……つく、うう……！」

「永い時を生きてきた私ですが、最期に綺麗な名前と心を頂けました。騎士たちも残せて、私自身も誰かにとつて思い出になれた……ただひとつの未練はありますが、もう充分です。……どうしていなくなる私が笑って、ここに残るあなたが泣いているんですか」

「リインが泣かないからやろ！ わたしは……つく、ううう……！ リインとも、幸せに……っ！」

「……大丈夫です。あなたはもう幸せです。これからは私じゃなくて彼に甘えてください。とはいえ、少々頼りないですけどね。それでも彼は、人の為に笑い人の為に悲しめる人間です。それは信じて良いです」

「………っ、ふ、、………っ！」

「こんなに引き留められるなんて……私は世界で一番幸福な魔導書です……騎士よ、彼を頼む」

「……心得た」

「そしてそのデバイスよ。彼を正しく導いて欲しい」

『言われずとも』

「……そうか」

誰に向けたでもなく、リインはそう呟いた。

——出来ることなら、二人と騎士たちが家族として過ごしているだろう未来まで生きていたかった。ただひとつの未練を口にしようとするが、そのせいでしがらみを建てては元も子も無い。だから、代わりにもうひとつを告げた。

「我が主、一つお願いがあります。私は無力な欠片になります。出来ることなら、リインフォースという名前をその欠片には無く、新たな魔導の器に送ってほしいのです。祝福の風の名は、その子に継がれるはずですから」

「……ん、……うん……うん！」

「では、私を輪のいるところに」

『待て。小生も助力させて欲しい』

はやての手の中に握られたアヴァロンが、少し厳かな声調で申し出る。少し意外な人物による制止で困惑はあったもの、エイミイは落ちて着いて首肯を返す。

『小生には魔力回復があつての。貴台が毒を除去する毒となれば、小生が治療に当たろう』

「出来るんですか？」

『そも魔力の循環も狂わされているのじゃ。良い機会じゃ、リンカーコア内の魔力も消耗が激しいようじゃから。魔力を変換させてエンヴィがしたことと逆のことをするだけじゃ』

「そっか、それなら」

『じゃが、意識が戻るかは当人の気力次第じゃ。余程の生きる理由があれば問題無からう』

「生きる、理由……」

『ともあれ、それに関しては有り余つてるようじゃがな——私的に言うなれば、この男の愚行を近くで見ることを楽しみを覚えている。早く眼が覚めて貰わないと退屈なのじゃ』

物言いこそどこか自己的だが、その真意は非常にシンプルで、ただの催促であることは聞かずとも理解出来ていた。リインも気付いた

一人、ふつと笑いながら、全員の背を向ける。

「医務室に案内してくれ」ラインの言いたいことは言えた。さよならの代わりにありがとうも残した。それだけあれば充分だ。陰りの無い笑顔を全員に向けて、黒衣の魔導書は振り返ることなく医務室へと足を静かに交差させていく。

「なんですか、呼び出して」

「大事な話ですか？」

「それなりにな」

「人のいない食堂……幼女二人を連れて……ああやだやだ怖い」

「うるさいぞアホめ！」

話も終わって、人のいない食堂内。このはとシルヴァを呼び出して、正治は自費で出した食事を二人に促す。事実確認だけすればこのはの言う通りだが、そんな目論見など微塵も無かった正治にしてみれば極めて不本意な言いがかりだった。勿論真面目に受け取ってはいない。定食を載せたトレイを下ろす音を二つ確認してから、正治は「…はつきり聞く」と切り出した。

「二人は元の世界に戻りたいか？」

以前の正治なら口にしないだろう提案。

実のところ、二人をこの世界に呼び出してから二人の家族というものを探したもの、高敷このはの家族も、シルヴァの家族に該当する家族も存在しないことは既に分かっている。となると、二人はある種「リリカルなのは」の存在から遠い存在なのかもしれない、と正治は踏んでいた。それこそ、その存在は自分たちに近いとさえ考えていた。……しかし尋ねたところでメタな話になるし、そう言ってしまうと眼の前の少女が「ただの創作キャラの立体化」という風にしか受け取れなくなる気がする。そう考えることに嫌気が刺している彼は、その疑問に一切触れることなく、ただそう尋ねていた。

「…別にどちらでも良いですよ」

「なに？」

「確かに、未練が無いと言えば嘘になりますけど。楽しい経験という



のはここでも元の世界でも出来ずからね。むしろ二つの世界を見聞き出来て幸運つてくらいですよ」

「おいふざけるな。オレは本気で」

「なんですけどね、やっぱりここはちよつと合わないんですよ。なのはさんもクロノさんにべつたりだし、フェイトさんも家族が戻って幸せ。それはそれで思うんですけど、やっぱり慣れるかと聞かれると怪しいんです。シスコンさん」

「オレはシスコンじゃねえ！」

「仮に自分が世界を飛ばされたとして、なのはさんとフェイトさんがイチャイチャしていたら、その状況の世界に慣れることが出来ますか？」

「待てなんだその状況は!?!」

「良いから答えて下さい」

「……………予想がつかんからなんとも言えないが、自分の印象と違うからな。違和感が残るだろうな」

「そういうことです」

自分に重ねると確かに妙なしこりは残るなど首肯する。今まで呼び出す側だっただけに、呼ばれる側の心情の理解が足りていなかったなど、正治は頭を掻きながら反省を示す。

……………時間にして僅か三秒ほど。沈黙のあとで、ぽつりとこのはは「……………見知った人がいないと調子狂うんですよ」

そう零した。果たしてその一言にどれほどの意味を込めたのか。……………少なくとも正治には、違和感の無いのはたちと家族のいる世界に戻りたいというところまで充分に把握出来たが、口にすればこのはになにされるものか。凶星を突いて痛い目に合うことは避けたい為に、「…そうだな」とだけ返す。気付かぬ振りをされたことも気付きながら、このはは正治の思惑に乗り、それ以上を言わなかった。

「でも」

「待ってこのは…」

算段は既に決まった。席から立とうと置いた手を止めて、正治は制止を求めるシルヴァに眼を向ける。少なくとも彼にとっては、フェイ

トように落ち着いた印象があつたもの、張られた声から眼を一瞬見開かせるほどの唐突だった。シルヴァ自身、自分が思っていた以上の声が出たせいかな「ごめんなさい」と置いてから、元の調子でこのはに尋ねる。

「……出来れば、もう少しだけここに残りたいの」

「どうしてだ？ 戻るのがお前らの為だろ？」

「せめてあの人が眼を覚ますまでは、戻るわけにはいかないの。誰も嬉しそうにしていないうせいで、戻るに戻りにくいの」

……今は切迫しているというのに、自分たちだけがこのうのも戻りたくない。シルヴァの言いたいことも分かる。しかし、それには一つの問題がある。

「……あの馬鹿がいつ眼が覚めるか分からんぞ。間違えれば悪い結果を聞くことも有り得る。それで良いのか？」

「どうなるかをしっかり見届けたいの。それで納得した上で戻りたいから」

「……全部言われちゃったね」

「このは？」

「私も同じこと言おうとしたの。戻るにしても、ここだから出来ることももあるし」

「……………そうか」

正治は言えなかったが、二つ隠したことがある。一つは、二人が元の世界に戻ったにしても、ここでの記憶は恐らく残らないということ。元はリリカルなのはキャラクターを呼び出すという規格外の能力を有しているのだ。並行世界の人間と言えど、ここでの記憶が残れば不都合極まりない。

もう一つは憶測になるが———この人間の記憶にも残らない、という事実だった。本来のパラレルハーツの性能を語れば、好きに呼び出し好きに戻すことが可能で、対象となった魔導師の記憶や記憶は所持者以外に残らない、という仕様がある。クロノが消失した間に彼の記憶が残っていたのは、デバイスが関与した戻された方をされていないからであり、更に遡れば、半年前に時間制限で消されたからこそ八

高はシグナムの記憶も保たれていた。つまるところ、所持者の意志に関わっていないからこそその一つの奇跡だった。

「分かった。もうしばらくは付き合ってください」

「え、あなたと付き合えと？」

「その意味じゃねえよ！」

「しかし、無駄に中性的な顔して口調が荒いってなんですか」

「ほっといてくれ」

果たしてこのはとシルヴァは是非を知っているかは定かではない。どこか喉を詰まらせる表情を浮かべた二人に心を揺らされながら、正治は定食の食事に箸を伸ばす。

そして、闇の書とアリシアを巻き込んだ騒動は終わりを告げた。さ  
れど、幕はまだ降りない。

## 微笑みのプルマージュ

あの事件から二年弱。それはもう変化というのは非常に多い。二年だぞ。当然ちや当然だが、実際眼で見ると凄いもんだなって実感してしまう。

俺が寝たきりから目覚めてから、まず普通の話をしよう。みんなの背が伸びていた。つまらん話だな申し訳ないすみません。なんていうか、意識が無い間にこうなっていたせいで夢じやないかと疑ったが、それでも無かったので問題なし。なぜかアルフにデコピンされたことで立証済みだ。

「輪さんこんにちは！」

「どうも八高さん」

「ああアリシアにフェイト。相変わらず元気いっぱいなのな、アリシアは」

「……凄いよね。たまに間違える人いるのに、なんで一目で分かるの？」

「なんでって言われても……強いて言うなら、フェイトと顔付きが違うからとしか」

「すごい！……うん、これは惚れる人もいるね」

で、元気になったアリシア。なるほど、この通り話慣れてみるとアリシアは快活で明るい子だ。おまけに素直。……立場としてはフェイトの姉に当たるのは分かるが、実はそれにも割と納得したりしている。言いたいことを引っ込めるフェイトに対して促したりするところを見ると、やっぱり姉かってつい思うもん。仕方ない。

そもそもの話だが、フェイトとはリボンの色も違うし、そもそも俺への呼び方も違う。時々間違えられるって言っていたが、間違えるやつはそんなに顔見てないぞ。まったくなくなってるいな。ていうか最後の一言は完全に冗談だな。聞こえてるし。

「八高さん、身体の調子は？」

「まだ魔導師として動く分にはまだ不調だけど、こうして翠屋で働く

分には大丈夫だよ。ていうか、これがリハビリみたいなものだから」  
二年弱寝たきりだったという状況を想像して欲しい。動くことから  
久々だから全てがぎこちなかったが、ようやくになって勘を取り戻  
してきたところだ。更にメタな話をするが、運動もしない身体を解し  
たりマツサージもされたとか。みんなが見舞いに来てた中で、時間が  
ある時ははやてがやっていたそう。俺のせいでリインがいなくな  
ったていうのに、俺への感謝は尽きないらしい。これは大きな貸し  
になったな。……そうそう、二つ見落とせない事態だが  
「なあアヴァロン。そろそろ落ち着いてきたから教えて欲しいんだ  
が」

『なにをじゃ?』

「なんでお前の性能が初期化されたんだ?」

俺が眼を覚ました時にいろいろ検査をしたが、個人的に驚いたの  
が、アヴァロンの形状が元の戻っていたことだ。つまり進化前、俺が  
魔導師になった当初のあの姿に戻っているのだ。はつきり言って俺  
以外が事情を知ってるようだが、その話題になると機嫌を損ねるとい  
うことだけは分かっている。こつちとしても事情は知りたいし。

『…そうじゃな、ほとぼりも治まったし話そう。貴台が小生を利用し  
て余計な選択肢を作らない為じゃ』

「余計な選択肢……あの時のか。言っちゃあれだが、お前から拒否が  
無かったからってつきり」

『率直に言えばあの策は大いに嫌いだな。この姿なら殊更どうにかし  
ようと思うまい?』

「まあ、そうなるな」

『そういうことじゃ。自身が助かりつつ他人も助けるくらいが貴台の  
性分じゃろうて。理想論と笑うも勝手じゃが、貴台としてはどうじゃ  
?』

「……俺にびったりだな」

▪ 何度も言うが、あれは最悪の手段だし俺だって乗り気じゃない。俺  
だって極力アヴァロンの言ったことを実行してるからね?

で、もうひとつ。

「おつとと」

「なのは、無理するなよ?」

「それを言うとお高さんの方が」

「そういうことじゃなくてだな」

なんでも、俺が起きる二か月前に大怪我をしたらしい。どの程度か分からんが、多少なりの後遺症が残るほどの物だとか。エイミーから聞いた話を端的に言えば、俺やはやての様な人間を増やさない為に無理をした結果とか。……そこは俺を反面教師にして良いだろうに、焦っていたのかもしれないな。とにかく、周りの厳しい意見を出せばなのは不注意で終われる話だが、俺個人としてはそれでは嫌だからなんの言及もしていない。

「とにかく、怪我の影響が残ってるんだろ? きついと思つたことはクロノか俺にでも任せれば良い」

「そうだよなのは。今こっちは片付いたから」

丁度良いタイミングでカウンターの奥からクロノまで出てくる。なんというか、執務官と違うベクトルのハンサム面なんだよな。あつちは男らしさが出てきたことに対して、こっちは純粹な美形寄りの顔。なんだ、俺も黒野つて名字にすればモテるのかな? まあしかし、どっちのクロノにしても芯があるし頼れるからそれも分かるけど。

クロノが出てきたら関係のある朗報を一つ。クロノは高町家で過ごすことになっている。ま、なのはと一つ屋根の下だ、交際どころか結婚も視野に入れて良いだろうな。執務官は執務官でフェイトと良い関係というし。エイミーいわく「師弟にも兄妹にも恋人にも見える」とか。結局分らないが、執務官にとってフェイトは一目置いてるとか信頼が厚いということとで理解して良さそうだな。

もうじき仕事も落ち着く。そろそろ休憩時間だな。首をこきつと鳴らしてからなのはに声をかけようとしたその瞬間だった。

「おい自称紳士」

「誰だお前は!」

「どうしても呼びたければトロワだ。トロワ・バートンとでも呼んでくれ」

「問おう。お前が俺の敵か？」

「どこのサーヴァントだ！ つーか会話しろテメェ！」

「嫌だよ。でもさ、俺をサーヴァントにするとしたら、ガンブレイドだし……最優を位置するセイバーじゃね？」

「ほぎけモブ」

「ほぎけボケ。かくいうお前はキャスターだろうな」

「分かってるじゃねーか」

「なんで納得してるんだ!？」

こいつ冗談半分を真に受けやがったぞ！ 強いて言うなら、呼び出し魔法の異質さがキャスターだなって思ったんだが……まさか同じところで納得したんだろうな。うわ、意見被っちゃったよ。こいつ殴りたい。

「まあ、オレのサーヴァントを配役はいいとして、お前今から休憩時間なんだよな？ 少し顔貸せ」

「え、やだよ……」

「ケツを抑えるんじゃあねえ!」

だつてこいつが俺を呼ぶんだぞ？ なんの用事で毛嫌いしてる奴呼ぶんだよ。……と茶化してみるが、どうにも真面目な顔をしている。逆に考えれば、俺と話をするくらいだ、余程の用件と見て良さそうだ。顎で扱われるのはやはり気に入らないが、ひとまずで乗ることにしよう。

「なあ自称紳士」

「なんだトロワ」

「さっきの真に受けるんじゃねえ！ ……ひとつ聞いたら帰るだけだ」

「あっそ。手早く頼む」

「緑の魔力光の魔導師で誰を思い浮かべる？」

暗にこのはを覚えているかどうかの探りでしかない疑問。既に覚

えているのは正治と輪だけだったが、四日前の時点で輪の口からこのはの名前が出てこなかったくらいだ。忘却の進行は進んでいるかもしれない。確認のようなこの行為に対し、

「……………お前以外を思い浮かべたいよ」

苦くそう返されただけだった。無理を承知でも、このはという名前だけ出して片付けてほしいという正治の願いは呆気なく崩れた。事情を覚えていない輪にとっては、あまりに抽象的な質問によって首を傾げざるを得なかった。

「なあ、今のはどういう質問だ？」

「魔導師の間で流行ってる魔力光占ってやつらしい。といっても、血液型占いみたいなレベルの信憑性みたいだがな」

「ほう。で、緑はなんだ？」

「控えめで想いやり深い、だとよ」

「お前のどこに当て填まつてるのかが疑問なんだが」

「だから信憑性は無いって言うてるだろステハゲが」

「やかましいわシスコン！ でもちよつと興味あるな。青色は？」

真面目な話よりはまだ建設的で明るい駄話。変に意識されるよりはこの手の話題で盛り上がる方がマシだなと正治は即答で返す。

「真面目で素直」

「……………執務官にはびったりだな」

「つーかお前はどっちかという水色寄りだろうか。」

「じゃあ両方合わせよう。水色は？」

「前向きで楽道家」

「……………真面目で素直、前向きな楽道家？」

「もうそれで良いよ」

「ぶん投げるな！」

「ちなみに、なのはの桃色は純真一途、フェイトの金色は血筋や経験に誇りを持つ、だとか。黄色の要素もあるから優しくて礼儀正しい」

「こっちはびったりだな。で、はやては？」

「はやては……………白だから」

「て、テメエ！ まさかはやての……………ぱ、パン……………」



「殺されるテメエ！　いつその話をした!?　白い魔力光は天才肌でリーダー気質だよ！」

「な、なんだよビックリさせるなって……」

「こつちが驚いたよ。ちなみに、たまに天然が入るらしい」

「……なんか分かる」

「……さて、オレは行くよ」

「おい、こんなに盛り上げといて帰るのか?」

「魔導師間で流行ってるって言っただろうが。他の誰かに聞け。

……それに、オレはお前と仲良ししたくはない」

「……このタイミングで言うなし」

確認したいことは聞けた。この世界において、高敷このはを覚えて  
いる人間は正治一人になった。このはを忘れたとあれば、一緒にいる  
シルヴァも同様なのは明確である以上、尋ねる余地はない。すつと、  
振り返ることなく正治は歩く。

「……そうだ、言いそびれるところだった」

「なんだ?」

「今度あんな解決方法取ったらオレがお前を殺す」

「……俺だって二度とやりたくねーよ」

「分かってるなら良い。お前は……」

関わった人間が多すぎる。そう言おうとして止めた。

正治は知っている。輪が眠っている間に周囲がどれだけ心配して  
いたのか。どれ程期待していたのか。彼が目覚めることを大いに望  
まれていたことを眼にしてきた正治にとっては、彼がどれだけ影響を  
与えたのかを計り知れないほどだった。きつかけとして支えられた  
なのは、家族を救われたフェイト、受け入れられたはやて……そして  
みんなとの繋がり。彼は魔導師としてでなく、ただ一人して受け入れ  
られている。ひよつとしなくても、管理局内においての輪の存在は奇  
異であり特殊なものだろう。…それはクロノ執務官の表情からも  
伺える。

「馬鹿なままで良い」

「うるさいシスコン」

「まあそういうことだ。あばよ」

お互い慰めも談笑も似合わない。憎まれ口と軽口を交わすくらいが丁度いい。背を向けた正治は微かな笑みを見せることもせず、淡々と歩を進ませる。

「で、散々無茶して……生きてる実感を噛み締めなさいよね」

「アリサさんの仰る通りですねほんとサーセンでした」

「アリサちゃん、おにいさんも反省してるから」

「すずかはおつと怒って良いのよ。全く、魔導師だからって万能になつた訳でも無いのに……」

「うん、アリサの言う通りだ。これからは本当に気を付ける」

全員から言われるほど輪の行動は特に眼を光らせられていた。元から無茶をする性分にしても、一層釘を打たれることになつたのは輪にとつては良くも悪くも自戒のきっかけともなつた。……或いは一生活のタネにされるかもしれないと不安はあるが。

「しかし、はやても友達が増えて良かったじゃん」

「うん。これも八高さんのおかげやで」

「なに言ってるんだ、そこは俺じゃなくて受け入れたアリサたちに言うことだぞ」

なにを言うのかねこの小さな王様は。むしろ紹介したなのとはとか、即友達認定した二人に向けるのが正しいんだゾ。……今では見慣れたものだが、はやての立つて歩く姿を見るだけってなんか嬉しいんだよな。リインが認めた王様は、あの経験から強くなっている。けど、たまに思い出しては泣いていたこともあつたらしいが、その時期を支えたの騎士たちであり、なのはたちだ。俺は本当になにもしていない。今のはやてがいるのは、リインを筆頭にしたみんなに他ならぬ。だから、俺に感謝をするというのはお門違いだ。

「でも、八高さんにもお世話になつたから……」言いながらも、はやてはぼりぼりと頬をかく。それはそれ、これはこれだろう、事件の最中でのことを言ってるかもしれない。それも騎士たちのおかげなのとは言うまでもないが、あまりに解説すると返って機嫌を損ねるかもしれ

ないから、「そっか」とだけ言うことにする。

「あ、そう言えばはやて。なんとなく思い出したんだが」「なに?」

「好きな男子がいたよな? その男はどうしてる?」「えええ!」

聞いちやまずい質問だったか? とはいえ二年ほど経ってるし、人並みに気にもなる。……とはいえ、はやてがいつも通り過ぎるのを考えると、結果はあまり望ましく無さそうだが。

「そうやね……元気にしてるよ」

「そうか……いや、聞いて悪かった。正直後のこと分からなかったから聞いたが……考えが足りてなかった」

「…… なにか勘違いしてへん?」「ん?」

「そもそもわたし、告白もしてないんよ」

「アイエエエエエエ!? ナンデ!」

ちよつと待て! それは予想してなかったぞ! え、なに!? つま  
り俺が寝てる間に告白すらしてないってことか!?

「ああえつとね……ほら、わたしって管理局魔導師やん? だかそこ  
までの時間取れないかなって」

「それを言うとなのはも同じじゃんか」

「クロノくんは魔法に理解もあるし同じ管理局やからね。わたしの場  
合はいろんな都合があるから、特別難しいかなって」

「そんなこと言うなよ。ここには理解を示す奴はいる。せめて想いは  
告げないと後悔するぞ?」

「ありがとうな。でも八高さん、根本的に一つ誤解してない?」「誤解?」

「諦めたから言っていない訳じゃないんよ。ただ、その人に胸を張って  
言えるようになるまで、自分を磨きたいってことだから」

「……二年もかかっているが、良いのか?」

「良いの。彼も元気にしてるし、彼ともまだ仲良えから」

「それなら良いんだが……あんまり友達の時期が長いと良くないって聞くから、気を付けろよ」

「うん」

果たして納得していいのかどうか……まあ俺がなにを言うよりも、実際に言葉を交わしてやるだろうはやての方がその男子のことを知っているし、深入りしてもはやてたちの邪魔になる。はやての恋路に年上の俺がしゃしゃり出るのは宜しく無いし、詮索は程ほどにするか。

「鈍ちん」

「んん？」

「ちよつとアリサちゃん。ごめんなさいおにーさん」

「ああいいよ別に。気にしてない」

なぜアリサが俺を鈍ちんと言ったのかは知らないが、話の流れで汲むならばやてが関与していると見た。棘はあつても正直なアリサだ、俺になにか見落としがあるかもしれないが、どうにもはやての思惑というか真意は分からないのも事実だ。そこに踏み込むほど俺は馬鹿じゃないから踏み込まない、というつもりだったのだが……あれ、結局なんで俺文句言われたの？ 訳が分からないよ。

聞こうか聞かないか迷った挙句——止めた。やっぱりはやての迷惑になるだろうし、鈍いと言われたほどだ。恐らく力になれなさそうだし、ここは思い切つてなのはやアリサたちに任せることにしよう。なに、いぎつて時は騎士もいる。問題はあるまいて。

「ふふ、貴方という人がこうも落ち着くとは意外ですよね」

「そうね。私自身驚いているわ」

「ここは良いお家ですねえ。プレシアさん、魔導師の仕事って大変じゃないですか？」

「とは言っても科学者紛いのことよ」

「ご謙遜を。プレシアの意見があつて助かっているんですよ？」

「買い被りね」

地球に構えたテストタロッサ宅、と呼ぶにはマンションの一室は違いかもしれない。それでも、アリシアの要望で選んだ一室は高い場所か

ら街を一望でき、絶妙に距離感の近さが詰められ、なにより色調の明るさが全体に行き渡っていた。部屋の位置も光が入り易いこともあつてこの一室への印象というものは、テストロッサ家になんの不満は無かつた。

今ではプレシアとフェイトとアリシアとアルフの家。勿論管理局魔導師としての仕事もあるが、この世界にはフェイトやアリシアは勿論、プレシアも受け入れるほどの優しい街だ。こうして桃子とリンデイとプレシアが談笑している光景こそその証拠だろう。

「こうして親同士で話すというのも良いですね」

「桃子、店の方は良いの？」

「五分だけならね。夫もいるし、八高くんもいるからね」

「またてきとうな……」

「それに関してはプレシアに同意ですね」

「あはは。でも、あれから海鳴も平和になつてるし、魔導師つて存在も認知されて」

「まさか受け入れられるとは思いませんでしたね」

「……そうね。この街は優しすぎるわ」

「でしょう？ だから好きなんですよ。この街で暮らして良かったつて、本気でも思えるくらい、この海鳴市が大好きなんです」

「……そう」

言いながらプレシアは、以前と比べて力の抜けた笑みを、光を差し込ませる青空に向けた。

かつて魔導師たちが守つたものは、今もこの街に息づいている。人が笑うことで街が祝福されている、なんて可笑しい想像をしてしまうほど、以前より増した活気が海鳴市内を包んでいた。

「そうだリンデイさん。クロノくんはどうしています？」

「相も変わらずよ。真面目なのは良いけどそれが仕事となると……あの年端ならもっと碎けても良いのにね」

「そうですねえ。八高くんを参考に、とまでは言えませんが、なにか思うところがあれば良いんですけど」

「むしろ彼が特殊なのよ。自由すぎる」

「……というより、二人とも根は同じなのよ。誰かをどうにかして助きたい、っていう気持ちでは一緒。だけど、クロノは真面目が過ぎたし、大人の世界にすぎたのかもしれない。だからなりきれないのかもね」

「……それはそれで良いことじゃない。冷静に物事を対処出来る誰かがいて助かっているんだから、彼の功績も大きいわよ」

「…そうね」

「でもこの年の子なら、浮いた話の一つは欲しいですよー」

話が少し陰りを帯びたところで、桃子は一切の意図を含んでいない会話を差し込ませる。彼女の周囲にとっては、なのはと八高の関係に気になっているところもあって、実際当事者以外の大人の意見も聞きたいという気持ちで尋ねていた。

「冗談じゃない。フェイトとアリシアに相応しい魔導師なんて」

「でもクロノとフェイトちゃんで結構模擬戦闘してるみたいだからね。もしかしたら」

「そうね、そうならまずは最低限考えてあげる。ねえリンディ？」

「プレシア、抑えて。ね？」

「あのプレシアさん、笑顔が怖いです……」

既にフェイトとアリシアを溺愛している今のプレシアにとっては、極めて難題であることが理解された。歴戦を超えたリンディとて笑顔を引き攣らせるほど、プレシアは底の見えない笑顔を浮かべている。魔法関連に疎い桃子にもそれは伝わっている。

「たまには良いですね。こうして親同士で色々話をするのも」

「…そうね」

本来交わるのことの無い人間同士がこぞつての談笑のもたらすものは、普通の人と変わらない、なんでもない普通の平穏だった。

#### ——数週間後

「で、アホ先輩の調子はどうなの？」

『良好じゃな。眼を光らせておったが、もう心配はあるまい』

「このしばらく一日四回も「無理するなよ」と言われたら矯正にもなるわ」

ようやくにアヴァロンからの信頼も回復したようだし一安心だ。目覚ましとかアラーム代わりに定時に言われ続けた一言もようやく解けそうだ。アリサの家から送って貰っているところだが、なんだか一人で歩かせるのは俺が許せなかったことで、途中までの見送りということで帰路を目指す。で、現在なのはと二人、お互い友達との駄弁りも済んだし、後の予定も決まっている。取りかかる前にまずはお互いに食べている棒アイスを口に運ぶことで小腹と幸せを満たしている。アイス食べてる少女セクシー！ エロい！ とはいえ、並んで食べるとあれこれ勘違いもされそうなので、間をやや空けながらベンチで座って食べている。別に喧嘩したとか仲悪いとか、そんなこと無いからね？

「——っいつきしー！」

『なんじゃ、噂でもされておるらしいのう、八高輪』

「俺の噂か……知り合いが大概幼女だからな。そういうことかもしれないな」

『……少女愛好家というのは、存外前向きな病かもしれない』

「病じゃねえよ！ 紳士たる心の指針であり、黄金の精神だ。つまり

俺はただのロリコンじゃない、紳士道だ」

『貴台は一体なにを言っているんじや？』

「いずれ分かるさ、いずれな」

本気で訝しむな。人の姿だったら完全に首傾げてるやつだぞこれ。要するにイエスロリータ・ノータッチだつてことだ。国家公務員の手を煩わせないように限度を守らないとただの変態だからね。もしやアヴァロンにはまだ早い話だったか？ ……人の姿だったら。思い返すと、この声の元はのじやロリ様なんだよな。だとしたら……不意に湧いた疑問を直接訊ねてみる。

「……時にアヴァロン・ブルーよ。デバイスのお前が擬人化して、幼女になるという機能は無いのか？」

『無い』

「世界の悪意が見えるようだよ…」

無慈悲にも程があるだろうよ。折角神が監修したデバイスなのに……単純に効率の話をすれば、デバイスを擬人化したら案外強そう……なのかな？ 良く分からなくなってきたが、実装されてたら俺は盛大に喜ぶ。でも画期的とは思うんだよな、デバイスの範疇を超えているという点を除けばだけど。こうなればこれからの技術発展に期待するしかなさそうだ。だからよお……止まるんじゃねえぞ……(儂い願い)

「…おお！ なのは来てくれ！」

「？ 八高さん、どうしたんですか？」

「ヒューッ！ 見ろよこのアイスの当たり棒を…まるで聖剣みてえだ!! こいつはやるかもしれねえ…」

不覚にも大喜びしちゃったよ！ おかげで周り微笑まじさと一歩引いたような笑みの二つずつを浴びることになるはめに。ちなみに当のなのははというと

「…凄く喜んでますね」

おめでとうと祝っているのも本当だが、若干困惑して笑みを浮かべている。オーケー分かった、なのはが変な人の知り合いと思われるのも困るから、一度息を吸ってから調子を整える。よし、これで無問題。「いやあ久しぶりに当てたからつい……でも、良いことが起こるかもしれないな」

『凶兆じゃなければ良いがの』

「そんな馬鹿な」

なにをどうしたらその流れになるんだ。当てた分運を使つたってか？ ふふ、甘い甘い、穂むらの饅頭より甘いぞリトルデーモン。なんだこの例え、それを言うなら翠屋のスイーツより甘いぜ。むしろ逆。これきつかけになにか良いことが起こるのさ。

例えばだ——親方！ 空から美少女か！ という展開から、その女の子が俺の上に押し掛かる。で、倒された拍子に事故で少女の胸をむにむに。だがしかし、彼女はそれを気にすることなく、無表情で「おにいちゃん、もう我慢出来ない。私を女にして」と宣言したところで、



二人は幸せなキスをして終了——

バカか俺は！？ ツツコミどころ多すぎるわ！ 天空の城なのか昔のディスプレイボードなのか分かんねーよ！

……ごほん。落ち着こう。妙な妄想に走ってしまったが、とりあえず自分が嫁とか彼女欲しいというのは良く分かった。とは言え、世間一般じゃロリコンっつーのは良い眼は向けられないからな。……そこは俺次第か。変に冷静になった頃合いでもあるし、普通になのには声かけられるな。

「さてと、そろそろ翠屋に行くかな。なのほも来る？」

「はい。今日は限定メニューの写真の撮影もありますので」

「そっか、それ今日か。じゃ、荷物持つよ。俺手ぶらだし」

「あ、ありがとうございます」

二年経って成長したにしても、やっぱり俺の知ってるなのはの面影が随分残っている。分かりやすく十年とか経たれると別人になりそうだけど、今のなのははまだ知ってる顔付きをしているから安心してしまふなあ。まあ、フェイトやはやてにも言えたことだけど。ていうかヴォルケンとリンディさんとプレシアさんが変わらなすぎる。

「ふむう、なのははちんまりして可愛いなあ。猫より可愛いぞ、この」

「にやつ！ 八高さん、あんまり撫でないで下さい……」

「ファツ!? ごめん、先に警察行くから翠屋に通報しないで！ それじゃあ荷物持っていくからお先に失礼くあwせdrftgyふじこ  
1 p」

「ま、待ってください八高さん！ 色々落ち着いて下さーい！」

『……既に前途多難じゃな』

なのはが手にしていた小さな買い物袋を大きく揺らしながら、慣れたもう一つの家へと向かう。

なんとなくだけど、俺は「リリカルなのは」の物語を知らなくて良かったって思っている。あれだ。普通の人生と一緒に。先がどうなるかとか知らないのが普通だろ？ こっからどうするか、どうなるか、俺にもこの神のデバイスにも分からない。ま、なにがあらうが俺たちで越えて行けば良い。

俺はまだ未熟だ。だから自分が死ぬということも選択肢に入れた。転生のきつかけとなつた死から考えるとまだまだだ。まだ俺は、自分が正しい答えを出せる程立派な人間じゃない。

「な、なあアヴァロン」

『なんじゃ』

「これからも宜しくな！」

『なにを今更』

友達も相棒もいる。これだけ揃えば恐ろしいものというものもそうあるまい。

ミッドとここでの生活。俺にとっては何となく大事な場所だ。帰る場所だってある。生きるには充分な理由だ。これからも俺は生きてやるさ。魔導師として、ただの八高輪として。：休憩も兼ねてなのはを振り切らないように一度足を止めよう。一緒に行かんとだしね。

俺たちは、まだこれからのだから。

……………ここまでがこの世界における俺の話だ。俺が高敷このはという少女と再会し、共闘するのはもう少し先の話であり、また別の話だ。

自由にして良いって言われたからって、なにやっても許されると思うことなかれ

「ん、クオクオア…」

「起きましたか？」

……なんだか眩しい。あそっか、朝だもんな。そりゃ仕方な……  
待て。今の声ユーノだよな？　なんで声が若干低くなってるの？  
太った？　いや知らないけどさ。とにかく、ユーノにしてはトーンが違う。

おいもつと待て。なんで寝起きで隣にユーノがいる…？　無性に嫌な予感に駆られて、電流が走ったが如くに両目を開ける。余程のことだからか、頭まで無茶苦茶冴え出したくらいだ。絶対普通の事態じゃ

「やらないか」

「ばあああああああああああああああああああ！」

ななな、なんだこいつは!!　いやまずは落ち着…：けるかおいしいいいい！　見たまんまを説明すれば誰だって困惑か動揺するわ！　首から下がガチムチなユーノとか見たくなかったよ！　なんで顔面が美形の少年のままなのにそこから下がケンシロウなんだよ！　ツツコミどころ多くて逆にツツコミにくいわ！

なにが一番恐ろしいって、その外見に加えてホモくさい発言をしたところだろう。別につなぎを着ちやいないが、なんかこう、視線が野獣くさい。俺の判定で言えば黒よりのグレー判定だが、一応確かめてみよう。

「ゆ、ユーノ…：だよな…？」

「ええそうです」

「なにその格好…：なんの影響…？」

「なんのって、ホモって言ったらガチムチでしよう？」

「全宇宙のボディビルダーに膝ついて謝れ!!」

距離感が分からねえよ！ マジでなにがどうなってそうだったよ！?

どうにか整理しようにも頭が回らない。それに、なにか違和感があつて気になる。なんだろう、ユーノの顔付きから感じるが首から下のクオリティのせいでよく分からん。俺の動揺を余所にユーノは唸々と語り始めた。

「……ぼくはね、正義の味方になりたかつたんだ」

「余命僅かな言い回し止めろおお！ ……ていうか待て、さつきと言い、なんでユーノが俺たちの世界のネタを……まさか」

「ここが夢の世界だからね。だからこの話も夢で終わるんですよ」

「メタいなおい！」

言つていいことなのかそれ!? ていうか夢で終わるつてなに?

こいつ読者と話せる力でもあるのか? 首から下ケンシロウなのに? 魔導師どころか奇跡を具現化するような肉感じゃないだろ。物理で殴るのが本職みたいな見た目なのになんて能力持つてるんだよ。

「そもそもぼく、作中でそんな目立ってないでしょ? どの作品でもそうだけど、人が増えるほど僕の存在は追いやられて、気付いたら名前すら出ることも無くなる……ぼくユーノ・スクライアは、回を重ねることで出番を減らされるユーノ・スクナイヤに変わるんです…」

「ごめん、不覚にも面白いと思つちまつた……つーか思つたよりメタい。結構首突つ込んでるけど大丈夫なのか?」

「ま、まあユーノ。お前が頑張っていることも頑張っていたこともみんな分かつてるさ」

「なのにリリロリ最終話に出番が無かつたですよね!」

「すまん知らねー!」

メタ発言が出来ない俺にはマジで知らないことだが、どうやら出番は無かつたらしい。もし本当なら、それは作者の技量のせいとしか言い様が無いな。まずその姿で身を振らないくれ、マジで笑いそうになる。

「……けどね、八高さんは違う」

「ん?」

「八高さんは鈍いけど、人に気を回せるし、こうして僕にフォローまでしてくれる」

「友達だからな、当然だろ」

「そういうところが好き」

「え」

……………今ナチュラルに言ったが、そういう意味合いじゃないよな？ 黒寄りのグレーだが、まだ確定していないならセーフのはず。ああ、きつとあれだ。友達として好きってことだな。ライクだライク。アイ・ライク・アイスクリームみたいなもんだろう。確実になんか違うが、ニユアンスとしては

「だから君を押し倒す！ 世界などどうでも良い、ぼくの意志で！

この気持ち、正しく愛DA！」

ダウトオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!! しかもガンダムラブな上級大尉みたいな告白までしてやがる。決定打は……頬が桃色に染まっている。あ、ガチ勢だこれ。これ逃げるしかないよね。

ふと辺りを見渡すが、どうやらここは……え!? なのはの部屋!? 俺なのはの部屋で寝てたのか!? ……そう言えばここって夢の中だったな。まあ一応はセーフ、かな? ともあれ逃げる算段はした方が良いな。見慣れた場所だ、出口は分かっている。

「ああ……君のマスター譜面ノーツをオールジャスティスしたい……」

「俺の側に近寄るなあああああああ!!」

特定の音ゲーに対する被害広げんなし! 俺結構好きなんだよお

!

と内心でツツコンでる場合じゃない。脳内でなにかしてるのか、妙に心ここにあらずなユーノをすり抜けてから部屋を飛び出した。

しかしなんだ……? 夢の中ということは理解したが、まだ先に感じた違和感は晴れない。

「はあ、はあ………」

はたしてあのユーノ相手にどの程度逃げられるのか……そもそもだが見えようにも隠れたくないんだよな。心理的に袋小路に行くとマ

ジで逃げ場が無くなりそうで不安が大きすぎる。あの肉体だと魔法使えなくても強そうだし、こつちが使えないと引き合わないんだよ……

「……そうだ、俺にはアヴァロンがいる！　なあアヴァロン、ちよつと手助けを」

『あ、ごめんなさいあなた。呼ばれちゃったわ』

【放っておけよ。俺はもう少しお前といたい】

『だけど主が……あん』

【いいから。俺といなよ】

『……はい』

「誰だお前ら!？」

なんだ今の!?　一のデバイス内で二つの音声とか聞いたことねーよ！　片方がのじやロリ様のものにしても普通の女声だったんだが！　しかもなに!?　なんか夫婦で同棲しているような空気醸し出してるんだけど!?　なんなんだよ、知り合いの家にいったら知らない男が父親を名乗ってたくらい気まずいんだよ！　声かけにくいわ畜生！

「くそっ、流石夢の中。デタラメも良いところだぜ……!　ん……?」

逃げ場を探しているところに、ちよつど前から見知った影が一つ。しかも魔導師！　これは運が良い！　うちのデバイスが今謎の一軒家と化してるし、助けを求められない！　正に渡りに船、地獄に仏！　恥も外聞も知ったことか！　実際俺より強いし、問題は無いさ！　……極めて自然に近づいてしまったが、話せる距離までに来てある決定的な違いに気が付いた。同時に、自分に対して感じていたある違和感の正体に辿り着く。

「八高さん？　どうしたんですか、そんな汗だくになって」

「……つかぬことを聞くが、今フェイトって年いくつだっけ?」

「19、ですよ?」

フェイトは絶対怪訝にしてるだろうな。今俺頭の中こんがらがってるし。

どう見ても大人びている。ガチムチに眼が行きがちだが、ユーノも

顔付きがそうだったからな。……待て、年相応に背丈を伸ばした  
フェイトを見降ろす俺は……

「…俺っていくつだっけ」

「22ですよね？」

「22!? マジかよ！ よっしや！」

どおりで手足も長いなと思ったよ！ ああーすつきりした！ 違和感の正体はこれか！ 妙に嬉しい訳だが、なぜって生前の年齢を超えているんだよな。やばっ、単純に嬉しい。

……割と本当に小躍りしかけたが、そろそろファイトにどん引きさ  
れそうな視線を向けられている。とりあえずそういう年齢の設定の  
ようだということは理解したし、話を進めなくては！ いつユーノが  
来てもおかしくないし。

「と、すまんフェイト！ ちょっと助けて欲しい！」

「ご、ごめんなさい。私これから用事で…」

「用事？」

「家族とこれからピクニックなの」

「家族とピクニック……」

それってあれか。プレシアさんとアルフとアリシアを加えての四  
人か。これは引き留める訳にはいかんなおい。

「……フェイト、道草してないで行くぞ」

「あ、クロノ！ クロノを待っていたんだよ！」

「ファッ!？」

え!? なんでフェイトがクロノ執務官に抱き付いてるんだ!? な  
に!? ここまで来て年齢が引きあがっていることはもう突っ込む気  
にならんが、二人ってそういう関係だったっけ!?

「ま、待て。執務官、なにしてはるの？」

「あまり自分から言うのも癪だが……見ての通りだ」

「いや見ての通りと言われても」

「フェイトと交際しているんだ！ 知っているくせに言わせないでく  
れ！」

「ウツソだろ!? ……家族でピクニック、てことは」

「テストタロツサ家とハラオウン家での懇親会ということだが……フェイト」

「ごめんね、舞い上がっていた」

「……話したなら仕方ないさ」

なに次元でこれ!? 変なパラレルワールドに迷い込んだみたいで変な感じなんだけど! 心の隅で楽しいと思っているのは本当だが、それ以上の事態がなだれ込みすぎて整理が追い付かん!

無理矢理落ち着こう。つまり、フェイトと執務官は付き合っている。そういうことだ。しかも家族ぐるみ。リア充じゃねーか!

「なにか急いでいるみたいだが、どうかしたのか?」

「い、いや別に。か、家族ぐるみでなら仕方ないさ。じゃあ行ってくる」と良い」

「大丈夫なんですか? 助けを求めていますよね?」

「人手が欲しかったところだが一応一人でもいけるし……まあ気にするな。言ってらっしゃい」

「はい♪ 行こうクロノ」

「ああ」

いかんよこれ、絶対巻き込めないじゃん。幸せにおなり!

深くを言うことも出来ず、手を振ってフェイトたちを見送る。そもそも、あのユーノをフェイトが見たらなにを思うのかも考えたくないし、やっぱり巻き込めないという結論に。家族でピクニックとなると、アリシアもアルフもプレシアさんも無理だな。維持張った手前フェイトに頼るわけにはいかない。こうなるとなのはか……

「……し、仕方ない! こうなったらなのはに! よし、電話もあるし、これで」

「ふっ」

「耳に息を吹きかけるなああああああああああ!」

やばい! 気付いたら既にマッスルユーノの射程圏内だ! この距離で爆肉抱擁パウンドを食らったらマジで一たまりも無い。……ん、なぜ魔法を使わない……? まさか……



「ユーノ！ 美形のイケメンがそこにいたぞ！」

「え、どこ?!」

「男なら誰でも良いんかよ!」

余所見している隙を突いて、だつとそこに民家に飛び込む。これをきつかけにいろんな場所を通りながら撒くのが一番だな。それ以上の案を思い付くことも出来ずに、ただ一心不乱に疾走を続ける。

「よし、ここまで来れば……頼む……!」

路地裏を通り過ぎて俺もどこを通っているか分からなくなったが、その甲斐もあってユーノを振り切ることが出来た。今では見慣れた公園のトイレの個室で隠れている。

……呼び出し音の回数を数えるのも億劫だ。ひたすら焦りに焦っていることもあって、一回一回が長く感じる。魔法は使えないにしてもあの肉体のユーノだぞ。捕まったら洒落にならん。今は体力の回復に専念しながら助けを呼ばなくては……!

ん、外から聞こえる? まさか超近くだったのか!? これはラツキーだ! なのはならんとか。

『八高さん? どうしたんですか?』

「な、なのは! 今大丈夫か!?!」

「ああ八高さん、こんにちは」

「……………」

二人と顔を合わせたことを確認してから電話を切るが、ある光景によつて俺は言葉を無くした。……うん、フェイト動揺に年齢を重ねたなのはとクロノがいる。それは予想内だ。俺が一番を眼を引いたのは、クロノと砂遊びをしている金髪の幼女だった。一見してクロノと笑顔を向けあっていることから仲が良いのは分かるが……誰の子? なるだけ冷静に、静かにクロノに尋ねる。

「……クロノ、その子は?」

「あれ、話は聞いていませんか?」

「…:多分」

「あああー……説明は難しいけど」

「なのはママとクロノパパの娘の、高町ヴィヴィオです。どう輪さん、思い出しました？」

「フアツ!？」

今明かされた衝撃の真実ウウウウ！ 待て待て待て！ 顎が外れたと思ったぞ！ しかし、二人の娘にしてはこのヴィヴィオという娘、両の瞳がやけに綺麗だ。なんて言うんだっけ……そうそう、オツドアイだ。緑と赤の宝石みたいな綺麗な瞳が第一印象で、あと笑顔が可愛い。うんうん、やつぱはこの年齢の娘はこれくらい快活じゃないとね。なんだったらキャンディーでも人攫いかよお！ 落ち着こうか俺え！

「は、はははは……そうだったな。二人とももうそういう年齢だったな……」

「けど輪さん、凄い動揺してる……」

「い、いやー、ついテンパっちゃったよお！ うははははは！」

「聞いてないようでしたら話しましょうか？」

「い、今は止しておくよ！ 俺も俺で用事あるし！」

「そういうえば電話してきたときになにか切羽詰まってきましたね。どうしたんですか？」

「いや良いんだ！ よくよく考えたら問題無かった！ 三人ともお幸せにー！」

なのはたちはフェイトとは別ベクトルで家庭を築いていた模様。時既に遅しだが、お邪魔虫になる前に退散せねば。それにユーノがいつ来てもおかしくないですし。

……よくよく思い返すとヴィヴィオという娘、年齢は知らないが普通に話せるほどだったな。なのはたちの今の年齢を考えると……考えたくない。ここは夢なんだろう？ それなら、謎のご都合が起こつてると思えば不思議ない。ユーノがああなった時点でお察しとはいえない続けたら頭おかしくなりそうだぞ。

「どうにかして起きるしか助かる道は無いようだが……一体どうすれば……」

「や・た・かさああああああああん！ どこですかあああああ!?!」  
やべえ！ 筋肉モリモリモリマッチョマンの声が！ ここに来られる  
前にまったく違う方向に逃げなくては！

「お！ このはにシルヴァー！」

「八高さんこんにちは」

「ええ…」

「露骨に嫌な顔しないでこのは！ …例によってこれから用事だった  
りする？」

「なんのこと分かりませんが、用事ですな」

みななして用事か！ 次から次へと俺が不利になる状況になって  
てやばいぞ！ 二人して並んでるとなれば確実にだろうが、万一にも可  
能性と言うものが

「今からシルヴァーちゃんと【自主規制音】で【自主規制音】しなくちゃ  
いけないんです。神聖な【自主規制音】に男は不要ですし」

「真顔でなに言ってるの!?!」

「分かりませんか。めしべと」

「丁寧に説明しなくて良いから！」

なんでやねん！ 方向性は違えどみんな家庭絡みなこととして！

このはに至っては…：…なにも言うまい。とにかく、どこまでも俺には  
アウエーな空間と来た。まさかと思うがユーノが操ってるとかそん  
なこと無いよな？

「でも大丈夫？ まるで追われてるみたいですけど」

「聞いてくれて助かったよシルヴァー。は、話して信じてくれるか分か  
らんが…：…なんかガチムチなユーノに追われてるんだ。追いつかれ  
たら俺が危ない」

「良かったじゃないですか」

「良くないの!」

「冗談はさておき。筋肉モリモリなユーノさんってなんなんですか」

「まったく逆の人ですよね？」

「俺がなに言ってるのか分からないと思うが、まったくの事実なんだ」

「……………」

「だよーね！ 絶対呆れるよーね！ 実物見れば絶対信じてくれると思うが、いかんせん一番肝心な本人が出てこない。序盤のモンスターパニック映画みたいだ。うん、この例えは分かりにくいな。」

「ふふつ、八高さん、必死な顔で冗談を言うものじゃないですよ」

「冗談じゃないんだこれが！」

「手を頭に乗せな。乗せないと乗せる頭が無くなりますよ」

「その孤独なSilhouetteが似合う元ネタのキャラはまさか……………」

「格闘技世界チャンピオン、スパ」

「コブラじゃねーのか！」

「おふぎけは置いて…………折角のシルヴァちゃんの休日なのに、なんであなたのアホな冗談に付き合わないといけないんですか。おまけにシルヴァちゃんは笑うし…………シルヴァちゃんを笑わせるのは私だあああ！」

「え、ちよ」

「なんでこのははバリアジャケットを纏ってるんだ!? ピュアなのは良いことだがこれは純粹すぎい！ 下手に刺激したらマジで攻撃されかねん！ こうなるとすることは一つだ。」

「お二人とも幸せにいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！」

「祝いながら逃げる。これに限る。なのはやフェイトたちもそうだが、年齢を重ねても仲睦まじいようだし、喜ばしいのは本当なんだよな。ここが夢の中という点を除けばだが。」

「…………さて、助け舟は無し。逃亡劇はまだ続く…………」

「さて、ここまで来れば」

「と思った？」

「な、ユーノ…………っ！」

「隠れ蓑に打ってつけと人気のいない場所に逃げ込んだのが間違いだっただぜ…………普通に考えれば、こうして組み伏されると助けられる可能性が低い。それが雑木林の類なら尚更。」

しかし、近くでこのガチムチ具合を見ると、状況と相まってなんか恐怖するな。絵面を想像するとだが、昭和世代の漫画に出てくるマツチヨに押し倒される一般人男性……なんとなくだが、こんな風に文面にされると、現場に立ち会っても逃げたくなくなるような響きしてるな。目撃者が女性なら怯むだろうし、男なら余計に逃げるに決まってるわ。貴腐人なら激写ポイント？

「ねえ八高さん。この場所覚えてる？」

「……記憶が確かなら、俺となのはがユーノが会った場所、だよな」

「やっぱり覚えてるんだ。……やっぱりぼくたちにとって、特別な場所だったんだね」

「待て。今のユーノが言う感慨湧きづらいいんだが」

「けどそこがいい」

「良くねえ！」

くそ、予想は出来ていたが、やはり腕力がとんでもねえ！ 本気でビクともしないどころか、ユーノは余裕の表情を少しも崩さない。魔法全否定されてるみたいでシニールな光景だが、これされてる側としては結構恐ろしいぞ。

「さあ八高さん。ぼくと魔導師の契約をしてお嬢さんになってよ！」

「キユウベえさんより怖ええええええええええええええええええ！　だ、誰かあああ！」

結局魔導師にしたいのかお婿にしたいのか分からん契約結ぶなし！　ていうか同意してないのに顔近づけるなって！　顔赤い怖いよおおおおおおお！

「ぬおおおおおおお！」

「このダンディな声は……！」

「輪！　今助けに来たぞ！」

なんで俺がここにいてのが分かったのか、この状況に疑問はないのか。ツツコミどころはあるだろうに、一切意に介すことなく、ザフィーラが急速で援護に現れた。

「ぬんっ！」肉の厚みで言えば今のユーノに見劣りするも、ザフィーラとて詰められた筋力を誇る。その飛来した肢体を弾丸のように身

体をたたみ、タツクルにしてユーノに激突する。元から加速されていたんだ、その爆肉をもつてしても吹き飛ばされるだろうな。

「た、助かった!」

【輪! 今すぐ主の家に! お前を待っている!】

「え、なんで?」

【良いから向かえ! ここは抑える!】

ユーノに場所を悟らせない為か、ザフィーラは念話でそれだけを伝える。主……はてが俺を待っている? 理由を聞こうにも、ザフィーラにはもうその余裕は無さそうだ。どれくらい足止め出来るか……或いは倒せそうでもあるが、なんか今のユーノって底が見えないからなあ……だが、ザフィーラの意思をを無駄にしたくない。俺は振り返って八神家へと走る。

「ふふっ、まずは君が相手になるんだね?」

「輪逃げろおおおおアツ!」

絶対聞きたくなかった叫び声を背に、俺は涙を拭いながら全力で足を交差させていく。

……ところで、ユーノ×ザフィーラって需要はあるのだろうか?

……なに考えてんだ俺は。

「は、はやてー。いるかー?」

ザフィーラに言う通りはやての家に来た訳だが、誰もいない。まあ、はやてに限らず四人の騎士も管理局勤めだからな。……その割には人の気配がない。本当にはやての家かと疑うほどに静かだ。ヴィータが物理的に襲い掛かるかははやてがにこやかに待っているかで色々覚悟をしていたのにこれじゃ肩透かしだ。いや、平和なことは良いことだけどね。

「や、八高さん……こっち……」

「あ、いるじゃん。いるなら返事しても」

「……ちよつと出たくなかったから」

「――」

リビングからの声に引つ張られた先に見たものに、息を呑んだ。いや、息をすることも瞬きをすること忘れていたのかもしれない。ただ素直に、その写真のような光景に心を奪われてしまっていた。

多分に漏れず年齢を進めたはやては、ウエディングドレス——風のワンピースを着たまま、俺を待つていたと言わんばかりに立っている。俺がウエディングドレスを連想したのはそのデザインもあるが、よく見ると顔を薄く覆ったメイク……決定打はその顔付きだろう。俺の知ってるいつもの温和な表情とはなにか違う、別の感情を込めた眼が気になる。

と、とにかく。意図は分からないが薄い生地ワンピースだ。流石に肌寒いに決まってる。散々走り回ったし、着ているジャケットが鬱陶しいので、はやてを覆うように肩からかけさせる。

「い、良い服だな。けど、もう少し重ねて着た方がお洒落だと」  
「動揺して。もしかして、なにか勘付いた？」

……どこか、本当に夢でも見ているような潤んだ眼で、はやては俺を捉える。はやての言う通り、俺は動揺してる訳だが、はやてが動揺を誘うような服してるからだぞ。

「なにを勘付いてるのかとは知らないが、見る男が見れば勘違いしかねないから止めた方が良いぞ」

「八高さんは勘違いしないの？」

「は、はやて……近い……」

どんな魔法を使ったんだ……訳ないことは知ってる。だが分からない。なぜ俺は動けない？ はやてと眼を合わさったから？ これは緊張か？ 少なくとも恐怖じゃないのは確かだが……敢えて言えば、友情とはまったく別の感覚だ。覚えはある、だから名前を付けるのは簡単だ。だが、俺はロリコンだぞ？ 人並みに彼女欲しいなあって思っても……ねえ？

俺はそう思ってる一方だが、肝心のはやてからは否定や不満は無い。いや、まさかだよな？ はやてが俺に？ なんで？ 大分訳が分からない。

「……わたしね、八高さんのこと——」

多分俺は変な夢を見たと思う、内容は覚えてないが、一週間俺の现实生活中に影響を与えるほどだ、余程濃いものを見たのかもしれない。

大きなもので言えば二つ。一つは

「あの八高さん……」

「な、なんだユーノ」

「この距離から話って出来ないかと」

「君はユーノになんの恨みがあるんだ？」

「無いって断言出来るんだが……自分でも分からないんだ」

なぜかは分からんが、ユーノに近寄れなかった。執務官の言うようなやましいことは無いが、なぜか躊躇いのようなものが生まれてしまう。ぶっちゃけ当初こそ走って逃げていたレベルだから、充分に落ちていたレベルだ。もうしばらくもすれば完治するだろう。

で、もうひとつだが、

「あ、八高さんおはよう」

「お、おう」

……こつちも落ち着いて来たが、はやての顔を見ては、なにかドキツとすることがよくあった。なんでだろうな。ただなんというか、本当に落ち着かないとしか言い様が無かったくらいだ。勿論嫌いになったとかそんなことは無いのは確約している。

「今日も模擬戦するん？」

「だな。そろそろ動かないとみんなに追い付かないし」

「追い付かないってそんな」

「俺は止まんねえからよ、はやてたちが止まんねえ限り、その後ろに俺はいるぞー！」

「いや、わたしは背中見て来たんけど……」

「ぶえっくしー！」むずっとした拍子にくしゃみを発してしまう。

つーか後ろにいたら間違えたらストーリーカーとか変態じゃねーか！

俺違うから！ 変態じゃなくて紳士だから！



とまあ、本当にそろそろ戦闘形式に身体動かして慣れておかないと、本当に誰にも勝てなくなっちゃう。出来ることならみんなの邪魔にはなりたくないし。指輪のアヴァロンに軽く眼を向けてから、

「だからよ……止まるんじゃないぞ……」

「は、はい……」

セリフを言いきらないといかん気がしたから全部言う。はやての若干困惑した視線を向けられながら、俺は訓練場所へと移動する。